

# 白江梯川遺跡 I

1988

石川県立埋蔵文化財センター



# 白江梯川遺跡 I

石川県立埋蔵文化財センター

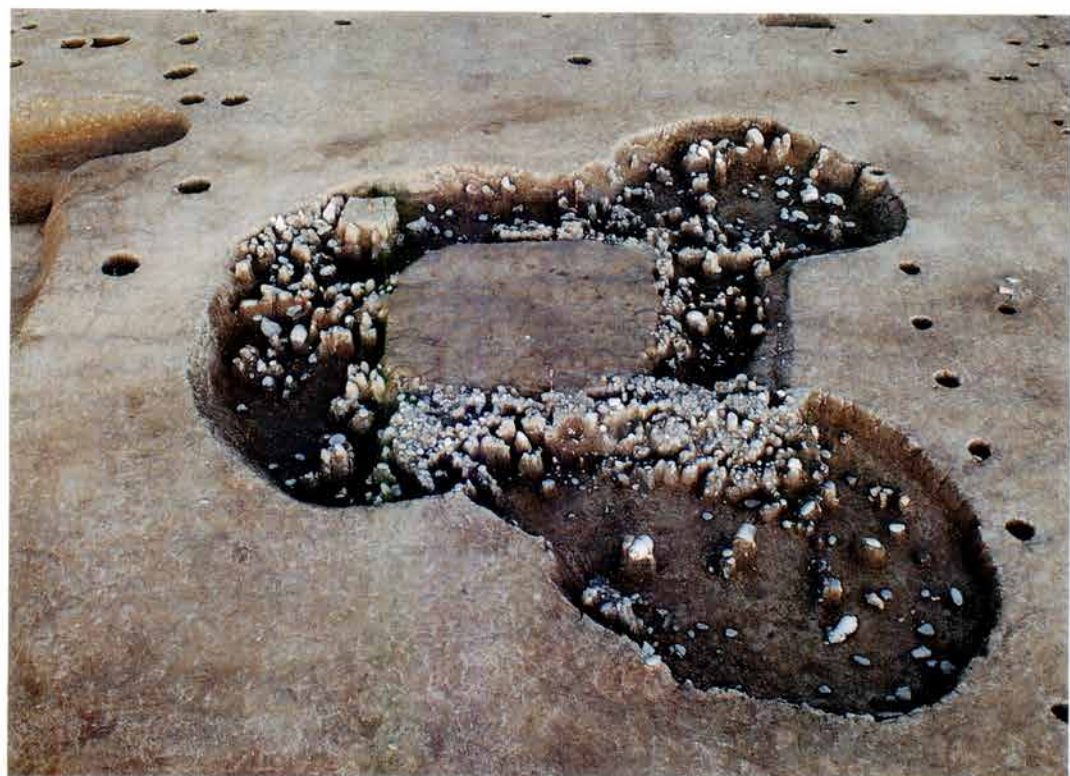




白江梯川遺跡俯瞰



第2次調査区俯瞰



祠跡推定遺構全景



祠跡推定遺構出土懸仏

## 序

小松市の東郊を貫流する梯川の流域には、石器時代から中・近世にいたる幾多の遺跡が折り重なるように分布する。加賀地域の中でも格段に歴史的背景が重厚で、加賀国府が一時的にせよこの流域に置かれた事情が納得できる。手取川のような大河川は、しばしば人びとに絶望的な災害をもたらし、時には村を放棄させる事態を惹起する。それに対して、梯川のような中規模河川は、ひとたび氾濫しても、人びとに再起の心を失わせるほどのダメージを与えなかった。むしろ、灌漑や河川交通による利点がこの地に人びとを結び付け、地域の中での政治・経済的な優位性を確立している。

白江梯川遺跡は、弥生時代後葉から中世にわたる集落遺跡であったが、とくに14・15世紀代（南北朝・室町時代）の遺構・遺物に見るべきものが多かった。いうまでもなく、中・近世の歴史は文献的史料で構築され、古文書類がその多くを語ってくれる。しかし、村の様子や人びとの暮らし振りまでは、文字で書き綴ってはいない。地中から掘り出された遺構や遺物は、時には住まいの構造や食器の種類まで生きいきと伝えてくれる。最近の中世考古学は、民衆の歴史を掘り起こし、中世人をして、我々により身近な存在として復元してくれている。当遺跡で発見した懸仏を伴う祠跡などは、当時の村人たちの信仰活動を生々しく語ってくれるもので、他にあまり類例がないだけに、学術的にも貴重な事例となろう。また、かなりの量に及んだ陶磁器類も、輸入品や国内各地の製品を含み、このような資料の累積は、流通の経路や仕組みを考える手段となろう。

発掘調査には、遺構の検出から詳細な記録の作製まで、実に多くの過程を経ねばならない。深い井戸跡の発掘など危険を感じさせる場面も少なくない。それだけに、作業に参加された方がたのご苦労は、言葉でいい尽くせぬほどのものがあつた。ここに発刊できた一冊の報告書も、多くの方がたのご協力の結晶であり、紙面を借りて厚くお礼を申しあげたい。報告書の内容は学術的で、その用語なども難解であつて、一般の読者には理解し難い部分が多い。しかし、こうした難解な報告書の蓄積が、いずれは、正しくかつ平易で新しい中世史に生れ変わり、中世人の暮らしと心を後世に伝えるものとなろう。中世に限らず、過去を顧みることで、明るい未来を展望し、建設できるものと信じている。

所長 橋本澄夫

## 例 言

1. 本書は、石川県小松市白江町<sup>しろえ</sup>地内に所在する白江梯川<sup>しろえかけはがわ</sup>遺跡の発掘調査報告書第1分冊である。第1分冊では、第1次から第3次の調査結果をとりまとめている。昭和62年度に実施した第4次調査の成果については、第2分冊として明年度刊行の予定である。
2. 発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施行の県営公害防除特別土地改良事業梯川流域地区白江西部工区に係るもので、同課の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査および報告書刊行に係る費用は、第1次調査について文化庁の補助を受けたほかは、全て県耕地整備課が負担した。
3. 調査期間および調査担当者は下記のとおりである。
  - 第1次調査 期間 昭和57年5月10日～5月31日 面積160㎡  
東 泰三（当時埋蔵文化財センター主事、現在加賀市立山代中学校教諭）
  - 第2次調査 期間 昭和58年4月25日～10月18日 面積3,500㎡  
中島俊一（埋蔵文化財センター主査）
  - 第3次調査 期間 昭和59年6月18日～10月27日 面積2,900㎡  
湯尻修平（埋蔵文化財センター専門員）
4. 各次の発掘調査の実施にあたっては、下記の調査員の援助を受けた他、県耕地整備課、県小松土地改良事務所の協力を得た。
  - 北野博司（第1次調査）、中村英洋、杉野洋一郎、田中孝典、山本直人、小坂清俊（第2次調査）、安宅 務、石田和彦、栃木英道、田中孝典、本田秀生（第3次調査）
5. 出土遺物の整理作業は、昭和61年度に社団法人石川県埋蔵文化財整理協会に委託して実施した。本書の作成にあたっては、鳥越 浩（埋蔵文化財センター主事）、木立雅朗（同嘱託）の協力を受けた他、図版作成等の作業に安宅 務、本田秀生（以上同調査員）らの協力を得た。
6. 本書の編集は中島と湯尻が担当し、執筆は下記のように分担した。
  - 鳥越 浩……第1章
  - 中島俊一……第2章第4節、第4章
  - 湯尻修平……第2章第1～3・5節、第3章、第5～7章
7. 本書における挿図等の扱いは次のとおりである。
  - (1) 挿図中の方位は磁北を示しており、水平基準の数値は海拔高（単位m）である。
  - (2) 分担執筆としたため、用語の統一は行っていない。例えば第2次調査の竪穴とした遺構と同様の構造をもつ遺構を第3次調査では土壇として扱っており、いわゆる穴も第2次調査では土坑とし、第3次調査では土壇として記述するなどである。また、遺構の番号は各年次調査区単位で独立して付しており、通し番号ではない。
  - (3) 本文中の註は一括して章末毎に掲げた。
8. 発掘調査で得られた白江梯川遺跡の遺構・遺物の実測図・写真、出土遺物等の資料は石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。



# 目 次

卷頭図版	
序	
例 言	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 分布調査	9
第3節 第1次調査	12
第4節 第2次調査	12
第5節 第3次調査	14
第3章 第1次調査の遺構	16
第1節 層序	16
第2節 遺構	16
第4章 第2次調査区の遺構と遺物	19
第1節 調査区内の概要	19
第2節 弥生・古墳時代の遺構と遺物	19
第3節 平安時代～中世の遺構と遺物	42
第4節 包含層中の出土遺物	57
第5章 第3次調査の遺構	117
第1節 層序	117
第2節 掘立柱建物	118
第3節 祠跡推定遺構	121
第4節 井戸	125
第5節 土壇	146
第6節 溝	151
第6章 第3次調査の遺物	155
第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物	155
第2節 中世の遺物	168
第3節 包含層出土の遺物	213
第7章 ま と め	223
第1節 遺跡の概要	223
第2節 下層の土器群	223
第3節 祠跡推定遺構	227
第4節 井戸	228
第5節 中世の遺物	228
写真図版	1～69
付図 白江梯川遺跡第2・3次調査遺構配置図	巻末



# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

白江梯川遺跡は、県西南部に位置する石川県第2の都市、人口10万余を数える小松市東方の白江町地内に所在する。白江町は国道8号線に近く、近年では、小松市街地北郊の農村から住宅区域へと変貌しつつある。白江梯川遺跡はその白江町の北西、白江町チー81番地ほかに所在する弥生時代後期から中世に至る集落遺跡であり、特に古墳時代前期と中世の多数の遺構・遺物が発掘されている。

さて本遺跡は、梯川が蛇行する中流から下流域にさしかかる左岸に位置し、海拔3mほどの沖積地に立置している。梯川は白山山系大日山連峰に源を発し、上流の丘陵部では小規模な河岸段丘を形成しながら北流する。やがて中流域の軽海町付近で緩やかな流れに姿を変えて西流し、蛇行と共に沖積平野を形成しながら日本海に注いでいる。その平野一帯の旧地形は、梯川による土砂堆積、浸食、自然堤防の形成などの繰り返しの繰り返しによって、かなり複雑な様相を呈していたものと思われる。

梯川中流域の沖積平野は、多くの遺跡が集中する地域であり、農耕適地として古くから広く利用されてきた。また、梯川は、水系の集落間や日本海を連結する水運路として利用され、特に中・近世以降においては、経済・商品流通などに大きな役割を果たしてきた。その反面、石川県災害異誌では「寛永元年（1748）、白江方面ノ堤防決潰デ小松町六百軒浸水ス」という記録なども多く見え、明治2年には、一針村と白江村にまたがる曲流地点が改修されて直線化したという。過去においては何度も氾濫などの水害を受けやすい生活区域でもあったわけである。このように本遺跡周辺は、豊かな農用適地と梯川を利用した水運の便のある地として、弥生時代から中世に至る大規模な集落跡が多く成立してきた。各期の遺跡の盛衰と分布は、梯川の氾濫などに伴う地形の変遷の歴史という自然環境と不可分ではないであろう。

人々に恵みと美しい自然を見せ続けた梯川も、安永元年（1772）に始まる尾小屋鉾山の鉾石採掘によって、今までとは違った関連を持つようになる。大正6年の氾濫時では、堆積した鉾山からの土砂で水田が白く変色したという。昭和45年頃からは、流出したカドミウムによる土壤汚染問題が、公害世論と相まって深刻化してきた。その後、同52年から本遺跡の調査原因ともなった県主体の公害防除特別土地改良事業などが実施されるに至っている。

## 第2節 歴史的環境

第1次から第3次発掘調査の結果、白江梯川遺跡は、弥生時代後期末～古墳時代後期・平安時代中頃～中世の各時代にわたって、断続的に営まれた複合集落跡と考えられる。以下、縄文時代から順に本遺跡周辺を時代ごとに概観する。

白江梯川遺跡周辺で、縄文時代に属するものとしては、一針遺跡、横地遺跡が挙げられる。そ

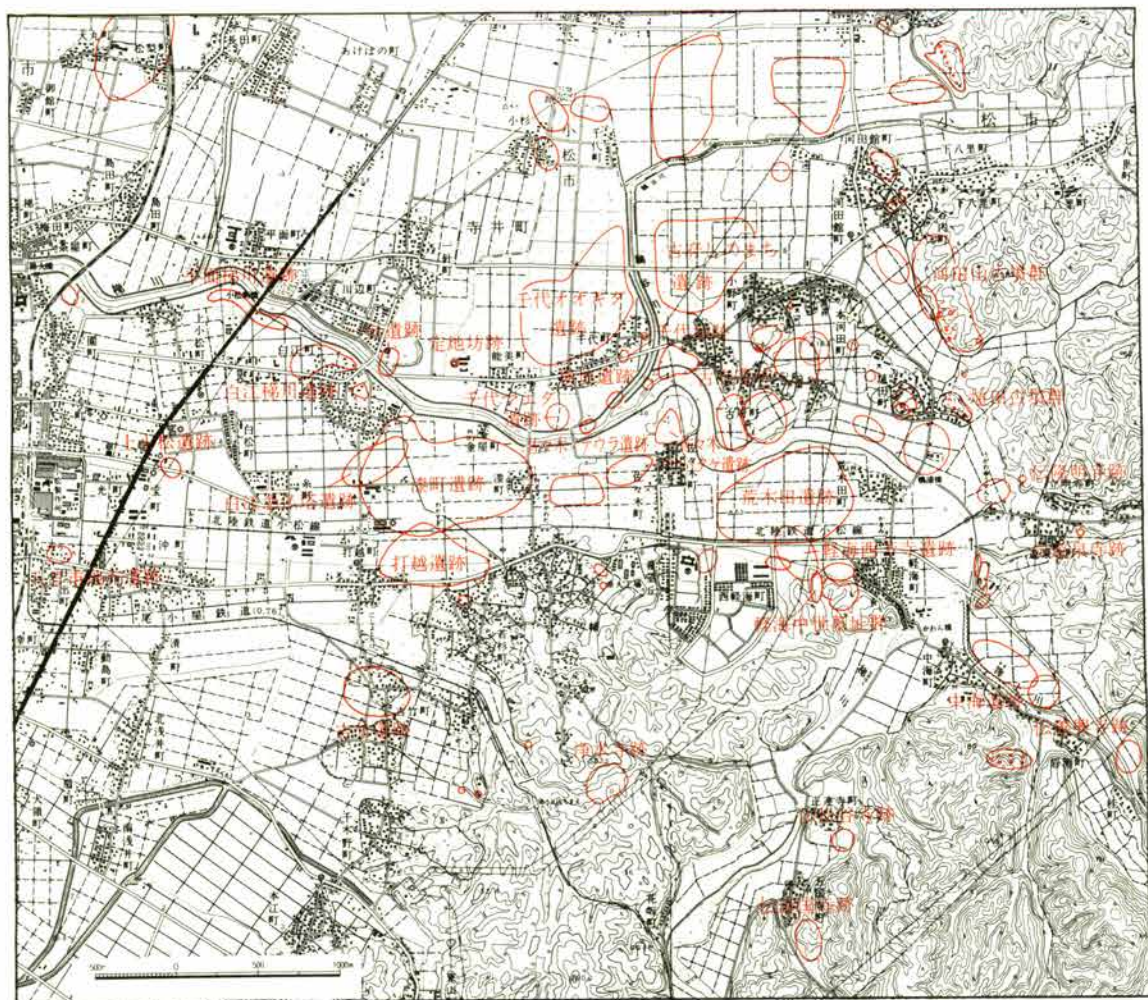
れぞれ磨製石斧や後期に比定される土器片が出土しているが、詳細は不明である。また、縄文時代の主な遺跡として、中期後半に属する中海遺跡、軽海西芳寺遺跡がある。前者は梯川支流の滓上川右岸の河岸段丘上に、後者は小松東部丘陵から北西に緩く傾斜する台地上に立地する。白江梯川遺跡では、第4次調査の際に摩耗の少ない石槍<sup>(1)</sup>や打製石斧が出土しており、注意すべきところである。

弥生時代に入ると、梯川左岸の沖積平野に広く遺跡が分布し始める。中流域では、漆町遺跡、白江念仏塔遺跡、吉竹遺跡などが挙げられる。時期的には後期後半に属する遺構・遺物が多く、中流域における農耕の進展と集落の拡大が窺われる。これらの遺跡のほとんどは、弥生時代～中世（・近世）に至る複合集落跡である。このほか、下流域では、弥生時代中期小松式の標式遺跡となった、八日市地方遺跡が存在している。

古墳時代になると、梯川周辺では、古墳時代前期（3～4世紀）の遺跡の密度がとりわけ高く、白江梯川遺跡、白江念仏堂遺跡、漆町遺跡、千代遺跡など大規模な集落遺跡が形成される。梯川流域遺跡群の盛期であり、公害防除土地改良事業に関係して実施された漆町遺跡の調査成果は、「ムラ」の構造や生活形態を知る上で、多くの資料を提供している。しかし、古墳時代後期（6世紀後半）以降になると、遺跡群は規模を縮小し、僅かに白江梯川遺跡、漆町遺跡の金屋サンバンワリ・ヤシキダ地区、佐々木ノテウラ遺跡、古府遺跡で確認される程度に減少してくる。その理由として、洪水などによる長期の湛水化が挙げられるが、歴史的な背景も踏まえて、今後更に究明すべきであろう。一方、古墳時代の中期以降には小松東部丘陵を中心に多くの古墳群が造営されている。なかでも、7世紀中頃の整美な切石積横穴式石室をもった河田山古墳群などは、南加賀一円は無論のこと、北陸の古墳時代を解明する重要な手掛りとなるであろう。

奈良時代には、基本的には古墳時代後期からの集落遺跡が継続して分布するが、その調査例は少ない。地籍図の解析から佐々木町周辺及び対岸の古府台地一帯、さらに鍋谷川を挟んで北方に至る範囲で、条里制の施行が確認されている。条里制は中世に再施行されたと考えられており、佐々木ノテウラ遺跡で確認された12～13世紀の建物群の区画溝もこれと関係するかも知れない。なお、この時代にみられる初期荘園としては、東大寺領江沼郡（のち能美郡）幡生荘、西大寺領江沼群（のち能美郡）本堀荘の名が文献より散見するのみで、周辺は公領（国衛領）の圧倒的に多い地域であったと推察される。

平安時代前期の弘仁14年（823）には、越前国から分離して加賀国が立国し、それまで越前国江沼郡に属していた梯川周辺は、加賀国能美郡に属することとなる。古代の能美郡は、『和名類聚抄』によれば、軽海・野身・山上・山下・免橋の5郷より構成されていた。当該地に関係するのは野身郷とみられるが、その郷域に諸説があるため確定できない。ただ、江戸時代末期に書かれた『越登賀三州志』によれば、近世は軽海郷に属する地であったとされている。また、加賀国府や加賀国分寺（続日本後紀）の所在地についても諸説があるが、現在のところ、本遺跡東方の古府台地周辺説が最も有力である。付近は「能美千軒、国府千軒」と口承され、台地上に所在する十九堂山遺跡からは布目瓦片が出土し、国分寺としての可能性が推察されている。しかし、いずれも確認するに足る遺跡は検出されておらず、また、周辺地での8～9世紀の遺構・遺物が金



第1図 周辺の遺跡

沢平野における同期のあり方と比べて大変少なく、立国による律令体制の再編の状況は明らかではない。

平安時代中期以降になると、古府しのまち遺跡、浄水寺跡などが存在するようになる。漆町遺跡などの継続的な集落跡においても、遺構・遺物は増加に転じ、梯川中流域周辺が再び活況を取りもどしてくる。なかでも、浄水寺跡では、従来の認識を変える大規模な遺構や多彩な遺物が検出され、平安時代中期から後期にかけての地方寺院のあり方を示す重要な手掛りを与えてくれた。また、漆町遺跡の若杉ヤシキワリ地区でも、10世紀中頃に比定される「庄」の墨書の残る須恵器が出土し、国府の膝元で荘園開発が行われていたことを示す資料として注目される。いずれも文献には登場して来ないが、平安時代中期から後期にかけて、この地域における在地有力者の台頭により、律令体制が大きく揺れ動いたことを推察させるものである。このことは、藤原道長の日記『御堂関白記』に書かれている、寛弘9年(1012)の加賀の愁訴事件、加賀源市政職が加賀の百姓等から悪政があるとして訴えられた事件にも象徴される。

平安時代後期に至って、梯川周辺の再開発を主導したものとして、次のような勢力が知られて

いる。一つは、国衙を構成し、長恒名・益延名・得南名などの在庁名を領有した在庁層である。いま一つの勢力として、藤原利仁の末流と称する加賀斎藤氏（林系・富樫系）が南加賀にも広く勢力を伸ばしている。14世紀に成立した系図集『尊卑分脈』によれば、林系の庶流に属する板津氏・白江氏の存在が知られている。両氏はそれぞれ、国衙北方に位置する能美郡板津荘と、国衙に西接する能美郡白江保に開発本領を求めて、比較的長く在国司職としての介の地位を継承し、在庁的性格を有している。梯川中流域左岸の本遺跡や漆町遺跡は、そうした在庁層もしくは白江氏の開発拠点の一端を示すものであると考えられる。また、『菊大路文書』に書かれている、嘉応3年（1163）2月に、郡家東郊の重友村の再開発の権利を板津成景に譲渡した在庁の中原頼貞讓状案は、このような再開発の主導的勢力の姿を示す著名な文献史料となっている。そのほか、注目される勢力には、白山中宮の末寺群である「中宮八院」の存在が知られている。『白山之記』によれば、「中宮八院ハ、護国寺 昌隆寺 松谷寺 蓮花寺 善興寺 長寛寺 涌泉寺 隆明寺 隆明寺以外七院ハ軽海郷内也」とあり、国府近くの軽海郷内に八院のうち七院が存在したことがわかり、梯川の水源を押さえ、国衙を取り囲むような形で配置されていた。今日現存するものはないが、護国寺（五国寺）・昌隆寺（青蓮寺）・涌泉寺（遊泉寺）・隆明寺（立明寺）は、いずれも地名によっておおよその位置を推定し得る。この中宮八院の勢力伸張は、国衙や在地領主との対立を強め、やがて寺地免税を求めていた涌泉寺で起きた安元事件へと発展する。安元2年（1176）の事件は、加賀守近藤師高の目代である弟の近藤師経が、白山宮の圧力を排除する目的で、涌泉寺に強制的に立ち入って寺僧とトラブルを起こし、焼き打ちにしている。白山宮と本寺である延暦寺の強訴により、近藤兄弟の解任、配流という決着をみたが、鹿ヶ谷事件を誘発して、治承・寿永の内乱の導火線の役割を果たすことになった。なお、「白江」については、『源平盛衰記』寿永2年（1183）5月の条に、戦場地として初見する。本遺跡との関わりのなかでも注意を要する白江氏については、板津氏より分出する白江新介景平から白江介景盛、その嫡子白江介弥二郎景範などがみえ（尊卑分脈）、実在性の高いものと考えられている。白江氏のその後であるが、『室町日記』によれば、戦国期の永禄4年（1561）に、奉公衆西郡氏の家臣とみられる白江帯刀の名がみえるが、この人物を白江氏の子孫と言えるか不明である。白江氏はこの他にも史料に姿をみせないためわからないが、少なくとも承久の乱（1221）前後までは存在したものと思われる。

中世においては、現在までのところ、考古資料・文献史料ともに稀少であって、調査研究の遅れている分野の一つと言える。考古資料では、本遺跡の他、漆町遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などの集落遺跡や軽海中世墳墓群などが調査されている。しかし、その研究はまだ緒についたばかりの状態であり今後に期待される。その中で、小松市南西部の丘陵に所在する南加賀窯跡群での加賀焼の生産と流通の解明は重要なテーマとなつてこよう。文献史料では、中世的な土地制度である荘園公領制を表す記事がみられるようになるが、鎌倉時代前期に初見する梯川周辺の荘園は、平安時代末期までには成立していたと考えられている。白江梯川遺跡周辺で、鎌倉時代からみえる荘園・公領としては、白江町付近に比定される北白江荘・南白江荘のほか、能美荘、軽海郷、得橋郷などが知られている。

南北白江荘について紹介すると、その立券の時期及び成立の由来については全く不明であるが、『鎌倉遺文』3274にみえる貞応3年(1224)の宣陽門院勤子内親王所領目録に、「被充御祈願所領(中略)加賀国北白江庄」とあり、鎌倉時代前期には皇室領荘園であったことがわかる。また、『天台座主記』によれば、尊助親王の文永5年(1268)11月8日条に、「今日以十ヶ庄園、宛三塔興隆、被注下其所領寺家、東塔分、越前国織田庄(中略)加賀国北白江庄(下略)」とあり、文永5年、当庄が延暦寺東塔の興隆のために寄進されたことがわかる。もっとも本家職は、越前国織田庄の例からみて、その後も妙法院門跡が掌握していたと考えられる。この間の事情は、康永3年(1344)7月日付の無品親王庁解(妙法院文書)に、「加賀国南北白江庄(中略)仍二品尊性親王中興門跡以来、至于性守僧正、相統管領訖(中略)去正中二年二月十日讓與尊澄(宗良)親王之刻、以次第附屬之儀(中略)所殘之文券悉以逢災火訖(下略)」とある。これによれば、天台宗の京都妙法院門跡の尊性親王が座主であった、健保3年(1218)～延応元年(1239)の間に、当庄が妙法院門跡領となったことが知られる。そして、当庄の管領の証しとなる文券を紛失したため、康永3年7月に高性親王庁解によって管符を下して証明されることを願っている。ここで初めて南白江庄が登場し、その点について注目しなければならないが、とにかく、鎌倉時代のほぼ全期を通じて白江庄が妙法院領であったことが確認できる。本遺跡周辺の荘園・公領についてみると、まず、得橋郷は、律令制下の免橋郷が中世に入り訓みを得橋と変え、公領として存続したものである。鎌倉後期には、幕府の六波羅探題の料所となっていたが、乾元元年(1302)に南禅寺領となる。徳治3年(1308)には、長恒・益延・得南の名も得橋郷の加納田として南禅寺に寄進されている。永仁5年(1297)2月22日の関東下知状によれば、長恒名内の荒木田(小松市荒木田町付近)・佐々木窪田(小松市佐々木町付近)の屋敷・田畠が、得橋郷の加納分としてみえ、白江荘に東接した地にあったことがわかる。また、能美荘は、東北部は手取川左岸、南部は梯川右岸にかけての長大な地域に散在した荘園である。建久2年(1193)10月の長講堂所領注文に、後白河院の長講堂領として初見し、白江荘と同様、宣陽門院に継承されており、本家職は持明院統によって相続されている。一方、領家職は、健保2年(1214)2月17日の平親範置文に、尊重寺(のち延暦寺派門跡寺院の毘沙門堂)領となっており、鎌倉期以来、一貫して毘沙門堂跡が領有したと思われる。ただし、応永14年(1407)3月の宣陽門院領目録には、「加賀国能美荘、惣荘、毘沙門堂殿、山上・石内、三条宰相中将家領」とみえ、領家職は分割されている。他方、石清水八幡宮領の能美荘は、鎌倉中期までに成立していたとされ、宣陽門院領能美荘の一部の領家職が分割されたと考えられている。応永18年(1411)閏10月14日の室町將軍足利義持御教書に、石清水八幡宮が莊務を知行する能美荘を、「乃美・長野・一針三ヶ庄」と表現している。この能美荘の乃美村は、梯川中流左岸の国府南東部の八幡村(小松市八幡町付近)に相当し、永仁5年(1297)2月22日の関東下知状案に、鎌倉幕府が橘成政に能美八幡社領などを安堵した記事があり、当時在庁官人の橘(八幡)氏が本遺跡東方に勢力を持っていたことが窺われる。その他、平安末期に中宮八院の勢力下にあった軽海郷は、鎌倉新政権の誕生により、勢力拡大が著しく阻害され、その領主経営の危機を迎えている。承久の乱の終結後、軽海郷の庄官職が没収され、新補地頭が補任されたことにもみることができる。その後、嘉暦4年(1329)に、一

時武蔵国金沢称名地領となっている。この時期に関する史料は多くみられ、得橋郷とともに、鎌倉時代末期の荘園村落の様相を比較的鮮明に知ることができる。軽海郷の荘田構成は、荘園領主が年貢・公事を賦課する「名田」と、公事負担の免除された荘園領主の直属地ともいべき「一色田」からなっており、一色田耕作人を置く抱えた称名寺の荘園支配が、充分貫徹しがたい状況にあったことを意味している。それと同時に、軽海郷では早い段階に年貢米・公事の銭納化がなされ、絹の原料である糸・綿が公事物の中心を占めている。嘉暦4年の軽海郷代官注進状（金沢文庫古文書）には、すでに「軽海郷市」が見え、さきの銭納化の現象とともに、鎌倉末期・南北朝期における流通経済の発展の一端を窺うことができる。

室町時代になると、新たに若杉庄（若杉町一帯）、野代荘（本折・浅井・吉竹など近世の野代郷に比定）などの成立がみられ、荘園制が拡大するに伴って、さらに領有関係は複雑に変動するようになる。続いて称名寺領であった軽海郷をみると、南北朝の内乱の中で遠所の荘園経営は困難をきわめ、康暦2年（1380）に、問注所刑部少輔長康の領地と交換されている。その後、正親町三条家領となったが、『実隆公記』の大永3年（1523）7月25日条によれば、幕府は当郷を皇室に献上し、以来禁裏御料所となっている。一方、「加州所々知行被申趣又申付分記」の天文5年閏10月14日条によれば（真宗教団開展史）、「武家御料所軽海郷（中略）折紙御所望候」とみえ、郷内に幕府御料所がなお存在していることが知られる。この幕府御料所については、当地域においても、20ヶ所以上もあった加賀の幕府御料所のうち、軽海郷をはじめ、白江荘、野代荘、本折村の4ヶ所が所在しており、戦国期に至っても存続していたことが確認できる。

戦国期では、長享2年（1488）の一向一揆や享禄4年（1531）の大小一揆を経て本願寺が実質的な加賀国の支配者となり、本願寺門徒による年貢未納・荘園押領がみられ、領主は年貢完納などの口添えを本願寺に求めるようになった。白江荘も例外ではなく、『天文日記』の天文5年（1536）9月28日条に、「西部縫殿頭知行、加州北白江庄之事可申付之由、自三淵（弥二郎）此方へ被申候云々、奉書四通出候、一通此方へ（本願寺）、一通ハ能美郡へ、一通徳田方へ、一通超勝寺へ出也」とみえる。また、天文5年10月14日条に、「妙法院殿就御領、南白江（中略）以上五ヶ所の本役由付候へと（の）事候云々、（中略）又當門跡への論旨到来」とみえ、幕府奉行衆の西郡氏や京都の妙法院が当荘について本願寺へ口添えを求めている。この間、文明18年（1486）の四講の成立以降、地域的なまとまりをもって「組」に発展し、当地の門徒集団は一揆体制のもとで板津組・南組・山上組・西谷組に組織されている。これらの史料の中で、山上組の旗本徳田氏との関係がみられ、白江荘ないしその一部が山上組に組していたとも推察される。なお、西郡氏に関しては、「康正二年（1456）造内裏段銭并国役引付」に、「西部筑前入道 賀州北畠荘」とあるが（群書類従）、西部筑前入道は西郡氏の誤記と考えられており、『室町日記』の永禄4年（1526）においても、「西のこほりの事、十一二代このかた、いささかさうるなく候で」と書かれ、室町時代の戦国期以前から西郡氏が白江荘の経営に携わっていたことが推察されよう。その後、永禄5年（1563）に、西郡氏の知行分が幕府御料所となるが、すでに妙法院や幕府の支配は解体していたと思われる。



白江梯川遺跡の発掘調査によって得られた中世の遺構や遺物は次章以降において解説されるが、出土遺物からの考古学的検討からすれば、14～16世紀の土器が多く、特に14・15世紀の遺物が目立つという。遺跡の盛期も15世紀代であるということであるから、先述の妙法院領であった南北白江庄の域内に含まれる集落の一角であったことは十分に予測できる。また、延徳3年（1491）に北陸道を下向した冷泉為広の『越後下向日記』にみる「梯橋、シライ（白江）道端ニ桜アリ、山高シヒトヘニ春ノ色ナラテ雪ニ花サク遠近ノ里」の記事から白江集落の近くに梯川を渡る橋が存在したことが明白である。これに梯川を上下する水運の利を考慮すると、白江の集落は交通の十字路口にあたる要所となっていた場所なのである。



第2図 梯川流域の遺跡群(県営公害防除特別土地改良事業に伴う調査区域)

## 参考・引用文献

- 石川県教育委員会 1982 『石川県遺跡地図』
- 橋本澄夫 1968 「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」『石川県考古学研究会々誌』第11号 石川考古学研究会
- 田嶋明人 1980 「白江念仏寺塔遺跡」『拓影』（『石川県立埋蔵文化財センター所報』第3号）
- 田嶋明人・越坂一也ほか 1986 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 北野博司ほか 1986 『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 石川県立埋蔵文化財センター 1985 『昭和59年度県営は場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』
- 関戸信次 1965 「第一篇 自然篇」『小松市史』(4)風土・民俗篇
- 上野與一 1965 「第二篇 考古学」『小松市史』(4)風土・民俗篇
- 吉岡康暢 1959 「加賀における条里制をめぐる問題」『北陸史学』第8号 北陸史学会
- 浅香年木 1981 『治承・寿永の内乱論序説』 法政大学出版局
- 府和正一郎 1972 『梯川の意義の変遷』 小松市立女子高等学校社会科研究室
- 『角川日本地名大辞典17 石川県』 1981 「軽海郷」「能美郡」「得橋郷」「白江荘」等

## 註)

- 1) 脱稿後、第4次調査出土遺物の整理が進み、この「石槍」は矢木ジワリ遺跡併行の条痕文土器を出土する溝に伴うことがわかった。当初は縄文時代草創期のものと考えたが、伴出土器だけでなく形態的にもむしろ弥生時代のものと考えたほうが妥当である。詳細は第4次調査の報告書に譲りたい。なお、櫻田誠・西井龍儀・平口哲夫・本田秀生の各氏に御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

石川県農林水産部は、昭和52年度から県営公害防除特別土地改良事業を実施している。県耕地整備課と県小松土地改良事務所が主管となって、梯川流域地区の鉱業汚染土を除去するのが目的である。事業概要によれば、「旧尾小屋鉱山活動の折の排水に含有された特定物質（カドミウム、銅）により農用地土壌が汚染され、人の健康を損う恐れがある農作物が生産されると認められる農用地に対し客土を行い、カドミウム汚染米の生産を阻止し、農家の生産に対する不安解消及び農業生産性の維持を図る。この為汚染米を排除し、客土工事を施工、併せて区画整理工事を実施する。」とある。梯川流域地区の459.7haを対象として年次的に工事が進められ、昭和63年度をもって事業完了の見込みである。

埋蔵文化財センターでは、当該事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を継続して実施してきている。昭和53年度以降、小松市教育委員会の協力も得て9遺跡の調査を実施した。那谷桃の木山窯跡群、白江念仏堂遺跡、漆町遺跡、白江梯川遺跡、那谷金比羅山窯跡群、吉竹遺跡、佐々木アサバタケ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、軽海遺跡の合計78,600㎡について昭和62年度までに完了している。特別土地改良事業は、明年度まで実施の予定であるが、発掘調査の他、遺物整理と調査報告書の刊行作業も継続されて完了の見込みである。

### 第2節 分布調査

県営公害防除特別土地改良事業に伴う白江西部工区の施工計画について、協議が行われたのは昭和57年1月上旬のことであった。事業予定地10.5haに周知の埋蔵文化財包蔵地である白江梯川遺跡が所在したため、埋蔵文化財センターは遺跡の分布と状態を把握する分布調査の実施について協議した。耕地整備課の依頼を受けて1月24・25・27日に小試掘孔（約1m角）による分布調査を実施した結果、古墳時代と中世の良好な遺跡の分布を確認した。遺物包含層の確認高と工事の基盤削平高を比較検討したところ、発掘調査必要区域4,700㎡、再分布調査必要区域約8,370㎡となり、基盤削平高を上げるよう工法変更についても協議を継続することになった。3月3日の協議では、①排水路部分の発掘調査は昭和57年度に実施する。②遺跡の西側と北側の一部5,000㎡については工法を変更して工事を実施する。③再分布調査の結果をみて更に検討することとし、それは4月に実施することで合意した。再分布調査は先の調査結果では詳細なデータが得ることができなかった約3,700㎡（第3次発掘調査対象地）について幅1mのトレンチ調査を実施することになった。調査は4月4日～7日に実施し、約2,900㎡の発掘調査が必要であるとの結論となった。

以上の分布調査の結果から、57年度は160㎡、58年度は3,500㎡、59年度は2,900㎡の発掘調査を実施する計画が立てられた。この協議にもとずき第1次から第3次に至る発掘調査を実施した

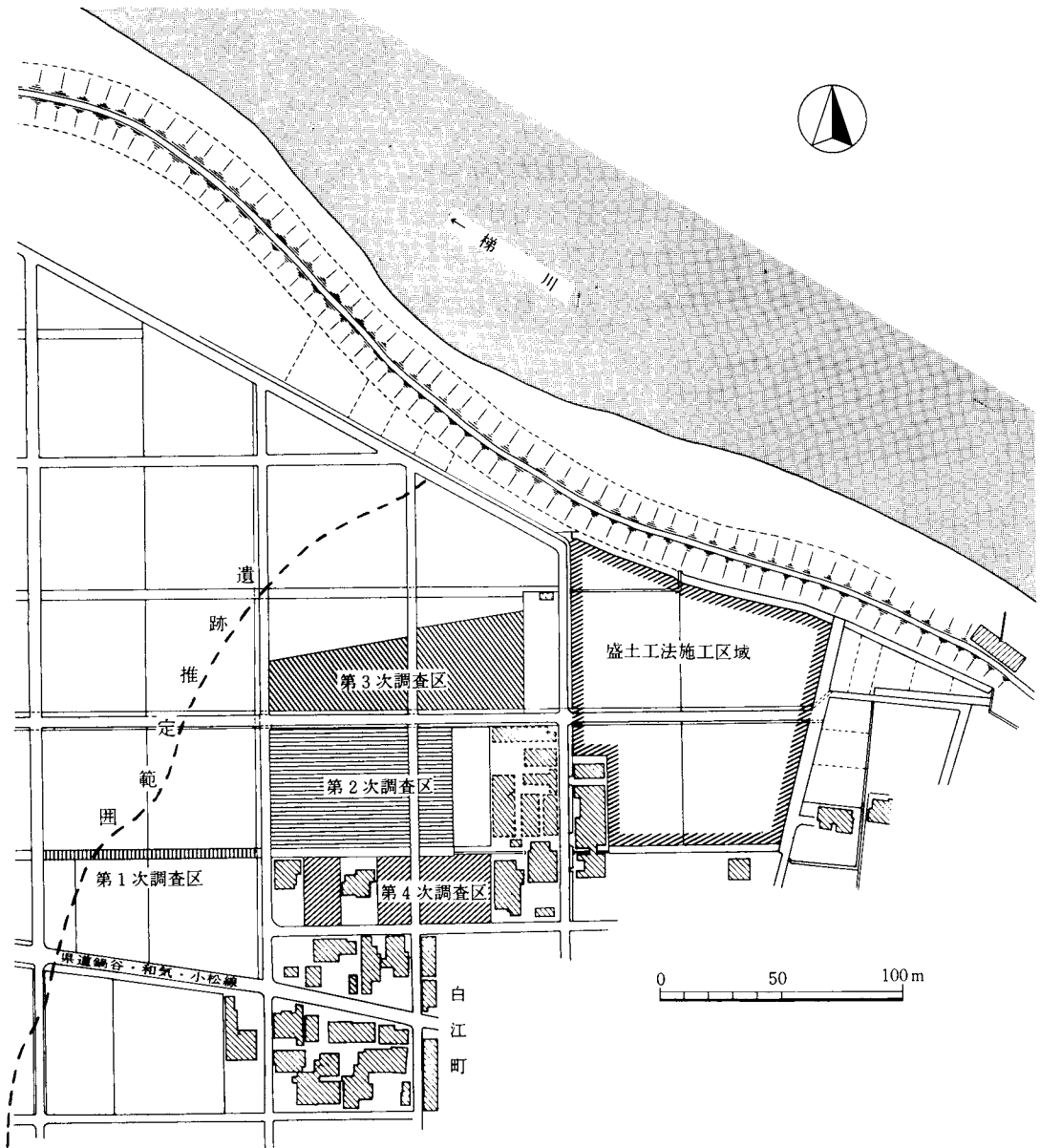
第1表 県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査一覧

調査年次	遺跡名及び調査区	所在地	調査面積	調査主体	文献
昭和53年度	桃の木山1号窯跡	小松市那谷町	500㎡	小松市教育委員会 石川県教育委員会	1
昭和54年度	漆町遺跡白江ネンブツドウ東地区	小松市白江町	700	埋蔵文化財センター	2
	漆町遺跡白江チョウジャワリ地区	小松市漆町・白江町	300	"	2
	西芳寺遺跡	小松市軽海町	500	"	⑦
昭和55年度	漆町遺跡金屋ヤシキダ地区	小松市金屋町	2,900	"	2
	漆町遺跡漆ゴタンダ・ドブ地区	小松市漆町	700	"	2
	漆町遺跡漆フルミヤ地区	"	6,000	"	2、⑧
	漆町遺跡漆ヘゴジマ地区	"	3,300	"	2 ⑧
	その他の漆町地内調査区	"	1,000	"	2
	漆町遺跡白江チョウジャワリ地区	小松市白江町	7,300	小松市教育委員会	2
	桃の木山2号窯跡	小松市那谷町	500	"	
昭和56年度	漆町遺跡白江ネンブツドウ南地区	小松市白江町	2,200	"	2
	漆町遺跡漆C地区	小松市漆町・若杉町	3,000	"	2、⑧
	漆町遺跡漆チュウデン地区	小松市漆町	1,000	埋蔵文化財センター	2
	漆町遺跡金屋サンバンワリ地区	小松市金屋町	9,000	"	2、⑩
昭和57年度	白江梯川遺跡(1次)	小松市白江町	160	"	本書
	那谷金比羅山窯跡群(1次)	小松市那谷町	2,500	"	5
昭和58年度	白江梯川遺跡(2次)	小松市白江町	3,400	"	5、本書
	那谷金比羅山窯跡群(2次)	小松市那谷町	2,000	"	3、5
	吉竹遺跡(1次)	小松市吉竹町	100	"	⑨
昭和59年度	漆町遺跡若杉ヤシキワリ地区	小松市若杉町	600	"	5
	那谷金比羅山窯跡群	小松市那谷町	4,500	"	4、5
	白江梯川遺跡(3次)	小松市白江町	2,900	"	5、本書
	佐々木A(アサバタケ)遺跡	小松市佐々木町	3,000	"	5、⑪
	佐々木B(ノテウラ)遺跡	"	3,100	"	⑥
	吉竹遺跡(2次)	小松市吉竹町	100	"	5、⑨
昭和60年度	軽海遺跡	小松市軽海町	1,500	"	⑦
	佐々木A(アサバタケ)遺跡	小松市佐々木町	4,200	"	⑫
	漆町遺跡白江ヤシキワリ地区	小松市白江町	100	"	
昭和61年度	漆町遺跡白江地区	"	7,200	"	
昭和62年度	白江梯川遺跡(4次)	"	1,600	"	

文献の数字のうち○印で囲んだものは、調査報告書の既刊行を示す。

### 文献一覧

- (1) 宮下幸夫 『小松市那谷町桃の木山一号窯』 石川県教育委員会 1979年
- (2) 田嶋明人・越坂一也・小村 茂・他 『漆町遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1982年
- (3) 浜野伸雄 『那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見』『拓影』 第13号 石川県立埋蔵文化財センター 1983年
- (4) 福島正実 『那谷金比羅山窯跡群第3次調査と銘文須恵器』『拓影』 第16号 石川県立埋蔵文化財センター 1984年
- (5) 米沢義光・福島正実・北野博司・山本直人・中島俊一・谷内尾晋司・湯尻修平 『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』 石川県立埋蔵文化財センター 1984年
- (6) 新城えり子・北野博司・本田秀生 『佐々木ノテウラ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- (7) 藤田邦雄・戸潤幹夫・横山貴広 『軽海遺跡 県営公害防除特別土地改良事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- (8) 田嶋明人・越坂一也・山本直人・新城えり子・田中孝典・横山そのみ 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- (9) 栃木英道・湯尻修平・浜野伸雄・田畑 弘 『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987年
- (10) 田嶋明人・岡本恭一・山本直人 『漆町遺跡Ⅱ』 石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- (11) 垣内光次郎・米沢義光・栃木英道 『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1988年



第3図 白江梯川遺跡調査区域図

訳であるが、60年度以降に工区の追加がなされ、調査区の東側と南側でも工事計画の策定がなされた。第3図に盛土工法施工区域とした1.1haの区域は、小型の排水機を設置することで現況田面に盛土を行う措置をとって遺跡を保存することになったが、第2次調査区の南側の水田は既存の水路等の関係からやむなく田面を削平した上で客土工事を実施せねばならず、第4次調査として1,600㎡を対象に昭和62年4月15日から9月14日に発掘調査を実施した。第1次から第3次調査の概要は次節以降にまとめられているが、調査の実施とそれに至る協議段階では種々な問題も解決の方向で努力が重ねられたことを記し、県小松土地改良事務所並びに梯川流域公害防除特別土地改良事業実行委員会に対して謝意を表したい。

### 第3節 第1次調査

第1次調査は排水路部分を対象に幅2m、長さ80mのトレンチを設定して調査を実施した。期間は昭和57年5月10日から31日までである。分布調査の結果から予測されていたが、調査区域が遺跡の西南隅にあっており、遺物包含層は存在するものの、西に行くに従って薄くなり消滅していた。包含層に含まれる遺物量も少ない。検出した遺構は溝8、ピット5であった。

5月10日 プレハブ設置、機材等搬入。	5月24日 雨天の後の排水を行い、遺構の発掘を継続。
5月11～17日 調査区設定。東から順次掘り下げる。	5月25～28日 実測図の作成と各遺構の写真撮影。
5月18～20日 遺構検出作業と併行して、遺構の発掘を進める。断面図等も作成。適宜写真撮影を行う。	5月29・31日 諸記録や機材を整理し、現場撤収。

調査参加者 東 泰三（当時埋蔵文化財センター主事、現加賀市立山代中学校教諭）、北野博司（当時埋蔵文化財センター調査員、現同センター主事）、滝上秀明（当時埋蔵文化財センター長期研修生、現辰口町教育委員会主事）、吉岡竹雄、村田喜作、加藤久太郎、村崎鉄太郎、佐藤ナナヲ、小村正枝、前田勝治、竹内弘幸、西木戸久男、岩倉与一、広島清子、田中清次郎、広多清一

### 第4節 第2次調査

第1次調査区の東側に設定された約3,500㎡の調査区は、過年度の範囲確認等々の試掘調査を経て着手されることとなったが、第1次調査区では削平深度との兼ねあいにより用排水路部分が主たる発掘対象となったことは先述のとおりであるが、この過年度の各調査から類推される第2次調査区は、弥生～古墳時代前期の集落跡に若干の中世遺跡がのるものとの予想から出発していたが、発掘調査が進行するなかで主客が入れ替わる遺跡との認識に至った。

当該調査は、カドミ汚染土の除去入れ換えを主目的とした事業という性格により、表層部の約25cmのすき取り（＝標高約2.00mまで）とするため、これより下部の生活面が仮に発見されても必要最少限に留めるといふ旨で相方了解し、発掘土は調査区内で集積して一定量に蓄積された段階で、所定埋め立て地へ搬送するという段取りが組まれていよいよ開始することになった。

表土～床上の約15cmについて重機（バックホー）を投入した。ただし、途中より黄褐色の床土直下で遺物が出土し始めたために、耕土の約10cmのみをこれに委ねることとした。土層々序としては、①耕土、床土（約15cm）・②暗黄褐色土（弥生～中世にかけての遺物含有層となるが、中世の遺構では一部にこの面で検出したものもある。約10cm）・③黄褐色（地山＝沖積層でほぼ標高2m）となっている。なお、別章で報告する二次調査区溝1を仮に例とすれば、第②層中で列状となって土器群が認められており、中世遺構では③層面に至って漸く確認できたものが大多数を占めるが、本来、この②層面ないしもっと上位よりの構築に係ると考えられるが、確認できた面と層序は以上のとおりである。次に、日誌を抄録して経過をたどっておきたい。

4月25日 小松土地改良事務所に出向き、調査手続きにつき調整・打合せを行う。また現地で地元代表者を交じえ、調査日程の説明。協力方快諾を得る。

5月9日 重機(ユンボ)による表土除去作業を開始。

5月12日 仮設現場小屋の設置と調査機器類の搬入を行う。

5月13日 調査区区割の杭打ち作業を行う。

5月14日 調査作業員による発掘開始。

5月18日 調査区東側より進めてきており、中世陶片が出土しはじめた。

5月20日 C・D-7・8区で大型土坑か井戸とみられるもの検出され始める。

5月21日 D・E-7・8区で東西方向に走る溝が認められる。

5月24日 当初より着手の東側地区の精査により、多数の遺構を発見した。溝跡・大型土坑?各1に、井戸か土坑と想われる円形のもの大小を含めて10基確認できた。埋土は暗茶褐色をなして似通うものが多いが、黄色～黄褐色粘性土のブロックが多量に含まれたもの他、切り合い関係をもつものも存在し、少範囲にしてはかなりの密集度である。また、この密集遺構の一部を切る柱列状ピットがあるが、建物跡とすれば最新段階頃のものに想定されてきそうである。

5月25日 当該地区遺構について、切り合い関係も含めて不明瞭なものは後日を期すこととして発掘を開始す。

5月30日 不明瞭なものを残してほぼ完掘しえたので、未確認遺構の発見がないか再度精査を行う。建物跡については、2間×3間の小型の東西棟に確定できそうである。

6月1日 本日より農道を狭んで西側の新発掘区に入る。雨天ともなれば水の出口がないため周囲に排水を兼ねる溝を設け、併せて床面深度の確認を行った。

6月4日 発掘作業の継続と、本日より先の調査区に戻って平面図・土層断面図の作成にとりかかる。杉野洋一郎氏の参加によって。

6月8日 A～C-4～6区の精査に入る。東西方向の溝2条・土坑状のもの15基認める。

6月9日 前日確認の遺構発掘にとりかかる。

6月15日 土坑状のものは井戸跡4基が含まれている。その内の1基に曲物製井筒・もう一基には縦板組であることが判った。本日より杉野氏別遺跡へ。

6月16日 遺構の発掘と併行して、本日より遺跡の調査研修として小坂清俊氏(寺井町教委)の参加を得たのでこれらの実測にとりかかる。

6月21日 近日来より雨天日が多く、終日排水作業を行う。土層図作成用畦の崩落著しい。

6月24日 崩落土の除去による回復作業と、C・D・E-3～6区の発掘にとりかかる。

6月28日 当初に着手した東側調査区より続く1号溝が検出できたので排水用に発掘を行う。

6月30日 C～E-5・6区遺構の発掘にかかる。ここでも井戸・土坑が主たる遺構となっている。本日、集積排土の積み出し。

7月2日 A～E-4～6区の補足確認のため再精査(主に建物跡検出に意をおく)を行う。

7月6日 A～E-7・8区に戻って、未発掘遺構の発掘にとりかかる。当初より中世遺構と考えていたものに平安中期と考えてよい井戸跡が出現した。床土直下で検出される最上面の遺構については、概して暗灰色土が幾分内包されたので一つの目安となるが、これより下位で検出できたものは判断に苦しい。

7月9日 同区遺構の発掘。小松市軽海遺跡の調査を終えた米沢義光主事と中村英洋氏が約1週間の予定で調査に参加。

7月12日 継続して遺構の発掘を行うとともに実測図の作成を行う。

7月15日 途中より雨となり、調査区内既崩壁部分を土のうによる補修作業を行う。

7月28日 本日までほとんど雨天が続き、排水作業と現場保全に費やされる。

7月29日 A～C-3区の発掘を行う。E-5・6区平面図作成作業をす。

8月5日 C～E-2・3区の発掘を行う。2・3区に入ると遺構が少なくなるようである。

8月10日 2・3区の精査に入る。溝と井戸とみられるもの緩慢に認められる。第2回目の集積排土の積み出しを行う。

8月11日 C～E-2・3区遺構の発掘を行う。

8月15日 本日より3日間を盆休みとする。

8月20日 C～E-1・2区の発掘を行う。

8月24日 A～E-1～2区(A・B-1・2区=排土集上げ場を除く)遺構の発掘を行う。井戸4基に大型堅穴状遺構などがあるが、堅穴状のものは不整形で遺物もあまり伴っていない。

8月27日 A～C-4～6区中、染み状部分の検索発掘を行う。

9月1日 D・E-5・6区においても検索し発掘を行う。これらに平安中期頃以来の整地か単なる窪地とみられるもの他、中世遺構となったものあるいは弥生-古墳時代前半の遺構と判明したものまで含まれる結果となった。

9月5日 検索発掘の継続を行う。

9月8日 C～E-4区中の一部に中世段階での整地層を想わせる黒褐色土ブロックの交じる薄い層があり、この取り外し作業を行う。

9月10日 続いて精査を行うがこの下での遺構の築成はないようである。

9月14日 調査区の全体的には井戸跡が数多くあるにもかかわらず建物跡が乏しいので、柱穴状ピットのある地点を集中的に精査・検索作業をとり行う。

9月16日 調査区区割り畦の取り外し作業を行う。

9月20日 近日雨天日が多く、調査区に接する農業用と生活用排水路壁の崩れが目立ってきたため補修を行う。

9月30日 ここ1週間程雨天続きで、調査区はプール状となった。終日大型ポンプの投入で排水作業を行う。

10月3日 遺構内の排水および清掃作業を行う。

10月4日 A・B-1・2区の仮排土置場の積み出しと、トレンチによる発掘を行う。

10月7日 9号・10号井戸の土層観察用畦の崩落が雨水・湧水によってヘドロ化しており、これの発掘作業を行う。

10月11日 ベルトコンベアーの取り外し、調査区外への搬出作業を行う。

10月12日 本日航空写真撮影を行う。

10月13日 11号・15号井戸部材の取り上げ作業を行う。

10月15日 発掘用具、機器類の洗浄、荷造りを行う。

10月17日 用器類・出土遺物の搬送と埋文センターへの収納を行う。また、調査区内外のゴミの集積と焼却を行う。

10月18日 プレハブの撤去。

これにて現地調査作業を終了としたが、この間地元において種々の便宜を与えて下さった生産組合長田村一彦氏をはじめ、心よく調査に参加・御協力下された方々を列記し、感謝の意に代えたい。(敬称略・順不同)

〔白江町〕吉岡竹雄・吉田安影・米谷二郎・村田喜作・山崎一雄・加藤久太郎・坂下義雄・前田勝治・久田政喜・佐藤ナナヲ・畠山たま・戸田 樹・米津博文・田中幸子〔漆町〕森内一雄・河南敏子・村中初枝・村中修子・田中清次郎・村中敏昭〔打越町〕村崎鉄太郎・南 俊子・山竹藤喜雄・重田栄一〔荒木田町〕西木戸久男・山田 茂〔軽海〕高橋定吉〔千代〕広島キヨ子・岩倉与一〔千木野〕長瀬愛子・土坂新男〔埴田〕木戸和子・元雄夏子〔園町〕中田正二〔川辺町〕西沢文子〔梅田町〕磯野外志雄〔小寺町〕山崎雅裕〔泉町〕正木篤志〔寺井町佐野〕平野利久

## 第5節 第3次調査

第3次調査は2,900㎡の田面部分を調査の対象とした。調査区の北側は分布調査の結果から中世以降の旧梯川の河道跡であったことが判明していたため、発掘調査の対象区外として調査の排土置場とした。調査期間は昭和59年6月18日から10月27日までである。遺跡は厚さ15～20cmの耕作土直下で確認され、下層に存在する弥生時代後期から古墳時代前期の良好な遺物包含層を切って中世の遺構が営まれていた。工事の基盤高が標高1.98mに設定されており、遺物を多量に含む下層包含層は一部を除いて現状保存することが可能であった。このため発掘調査では中世の遺構の調査に重点を置くことにした。本遺跡に中世の井戸や土壇(坑)が多数存在することは、隣接した第2次調査からも予測していたことではあるが、調査の結果38基もの井戸を検出するにおよび、作業は困難なものとなっていった。発掘時や完掘後に土壁の崩落が起きることが多く、危険防止の意味から調査を断念した井戸も存在する。発掘調査の作業は10月27日をもって終了したが、調査後の標高の確認を県小松土地改良事務所職員と現地で行い、また、深くなった井戸等の埋め戻し作業は砂を用いて行う措置をとった。作付に支障をきたさないよう配慮したものである。工事は埋蔵文化財センター職員立ち合いのもとで着手され、下層の遺跡はそのままでの状態で埋め戻したことを付け加えておく。なお、多数検出された井戸に使用されていた材は、自然乾燥の状態に耐え得ると判断した一基分を除いてその殆どは取り上げることなく砂で埋め戻してある。

6月18日～22日 バックホーを用いて慎重に耕作土を除去する。

6月23日～26日 現場小屋の設置、機材の搬入等準備作業。

6月27日～7月16日 発掘調査に着手。排土作業を進め、遺構の確認に努める。溝から順に発掘にとりかかる。

7月17日～7月24日 西から東へ遺構の検出と発掘作業を進める。溝、土壇等の調査を順次行う。6号溝で漆器椀1点出土。

7月25日～7月30日 井戸の発掘を開始するが、一気に掘り下げると崩壊するため、二ないし三回に分けて発掘。この



間に実測、写真撮影等の作業を併行する。30日に吉竹地内を巡ったところ、工事により大量の土器が散乱しているのを確認。小松土地改良事務所と協議を行い、31日より栃木調査員を中心として応急調査を実施。

7月31日～8月10日 吉竹遺跡の調査と併行して進めるため、田中調査員の応援を求めて作業を続ける。井戸等の発掘と実測図の作成に追われる。

8月11日～13日 吉竹遺跡の調査完了。埋め戻しの立ち合いを行う。

8月17日～25日 盆休みも終わり作業再開。8-H区の土坑と方形の周溝が1つの遺構となることが判明。溝には多くの小礫（河原石）が入っている。礫の間から懸仏出土。実測と併行して作業を進める。

8月28日～31日 夏休みの学生達の応援もあり作業はかどる。8-H区の遺構はその平面形からミッキーマウスと愛称する。小松土地改良事務所とは適宜打合せを行い、調査の進行状況を報告する。

9月2日 福井考古学会員ら現場視察。

9月3日～7日 このころより井戸の発掘を始める。8-H区からの2点目の懸仏が出土。

9月10日～12日 排土の量がなくなったため、バックホー、ブルドーザで移動。8-H区の実測を進めながら掘り下げ。

3点目の懸仏出土。橋本次長来跡。

9月17日～21日 遺構の検出と発掘作業を進める。井戸は総数で28基となる。10-I・J区で掘立柱建物群を検出。

9月22日～25日 井戸の発掘作業を進めるが、粘土が強く作業は進まない。

9月26日～28日 井戸の発掘と平行して部分的に下層の遺構を探るためたちわり。遺構・遺物の量は極めて多い。

10月8日～10月15日 井戸の発掘作業を重点的に行う。湧水が激しくポンプ等を増やして作業を行う。漆器椀や箸、下駄など次々と出土する。5号井戸は切石組井戸と判明。

10月16日～20日 井戸の発掘と併行して実測、写真撮影を行う。航空写真測量実施の作業を進める。安宅調査員に加えて石田調査員の応援を求める。

10月22日 20・21日の降雨により湛水。明日の航測実施のため復旧作業を行う。

10月23日 早朝より復旧作業を行い、航測なんとか成功。

10月24日 井戸枠のとり上げ、木製遺物の洗浄、写真撮影等多忙。調査後の埋め戻しについて土地改良事務所、施工業者と打合せ。

10月25日～26日 調査区の東側分布調査。中世の遺跡が耕土直下に存在することを確認。（後の盛土工法施工区域）

10月27日 機材整理の後、センターへ徹収。現地調査完了。

調査参加者 谷内尾晋司（当時埋蔵文化財センター専門員、現県教委文化課専門員）、湯尻修平（埋蔵文化財センター専門員）、安宅 務（埋蔵文化財センター調査員）、本田秀生（当時埋蔵文化財センター調査員、現同センター嘱託）、栃木英道（当時埋蔵文化財センター調査員、現同センター主事）、田中孝典（当時埋蔵文化財センター調査員）、石田和彦（当時埋蔵文化財センター調査員、現小松市教育委員会主事）、村田喜作、吉岡竹雄、山崎一雄、福島清光、佐藤ナナヲ、畠山たま、米谷二郎、加藤久太郎、前田勝二、河南敏子、森内一雄、村崎鉄太郎、細川つるえ、村中初枝、河南外次、牧野みよ、田中清次郎、西木戸久男、山田 茂、岩倉与一、広島きよ子、中田正二、高橋貞吉、重田栄一、坂下義男、長瀬愛子、浅井正二、元雄夏子、小島玲子、米津博文、東出典子、戸田 樹、磯野外志行、串 彰文、村井 貢、南 隆志、新城えり子、東 敬子、北 直仁、浜崎悟司、本 由美子

## 第3章 第1次調査の遺構

### 第1節 層 序

遺構は地表下60～70cmで検出された。遺構面は西側が高く標高約1.9m、東側へゆるく傾斜して標高約1.6mとなる。I. 20cm前後の耕土の下にII. 10～20cmばかりの灰褐色粘土があり、更にIII. 20cm前後の明るい灰褐色粘土があってIV. 暗茶褐色粘土の包含層に達する。包含層は5～10cmと薄く、含まれる遺物の量は少ない。II・III層では若干の須恵器・土師器・中世陶磁器片が含まれており、包含層としたIV層では古式土師器片が出土した。II・III層は古墳時代後期以降の堆積層、IV層は弥生時代後期から古墳時代前期の堆積層とみられる。検出された遺構は、平行する8条の溝と5個のピットのみであり、遺跡の縁辺部とはいえ、遺構の密度は高くない。勿論、調査の対象区が幅2m、延長80mの小範囲であるから断定はできないが。

### 第2節 遺 構

調査は東からA～F区とした。A・B・F区では遺構は確認されず、C・D・E区で検出された。8条の溝は北西から南東方向に平行して存在する。

第1号溝（第4図、図版2） 幅1.5m、深さ35cm～50cmで北西方向へ深くなっている。覆土は淡い暗茶褐色粘土層で、溝底より約40cmの部分に薄い白色粘土層が存在したため、上下二層に分けることができた。覆土中には古式土師器の小片が含まれていた。古墳時代前期の遺構である。

第2号溝（第4図） 1号溝の西に約1.6m離れて検出された幅90～100cm、深さ約30cmの溝で、覆土は1号溝と似る暗茶褐色粘土である。覆土中には古式土師器の小片を若干と小粒の炭化物を含む。

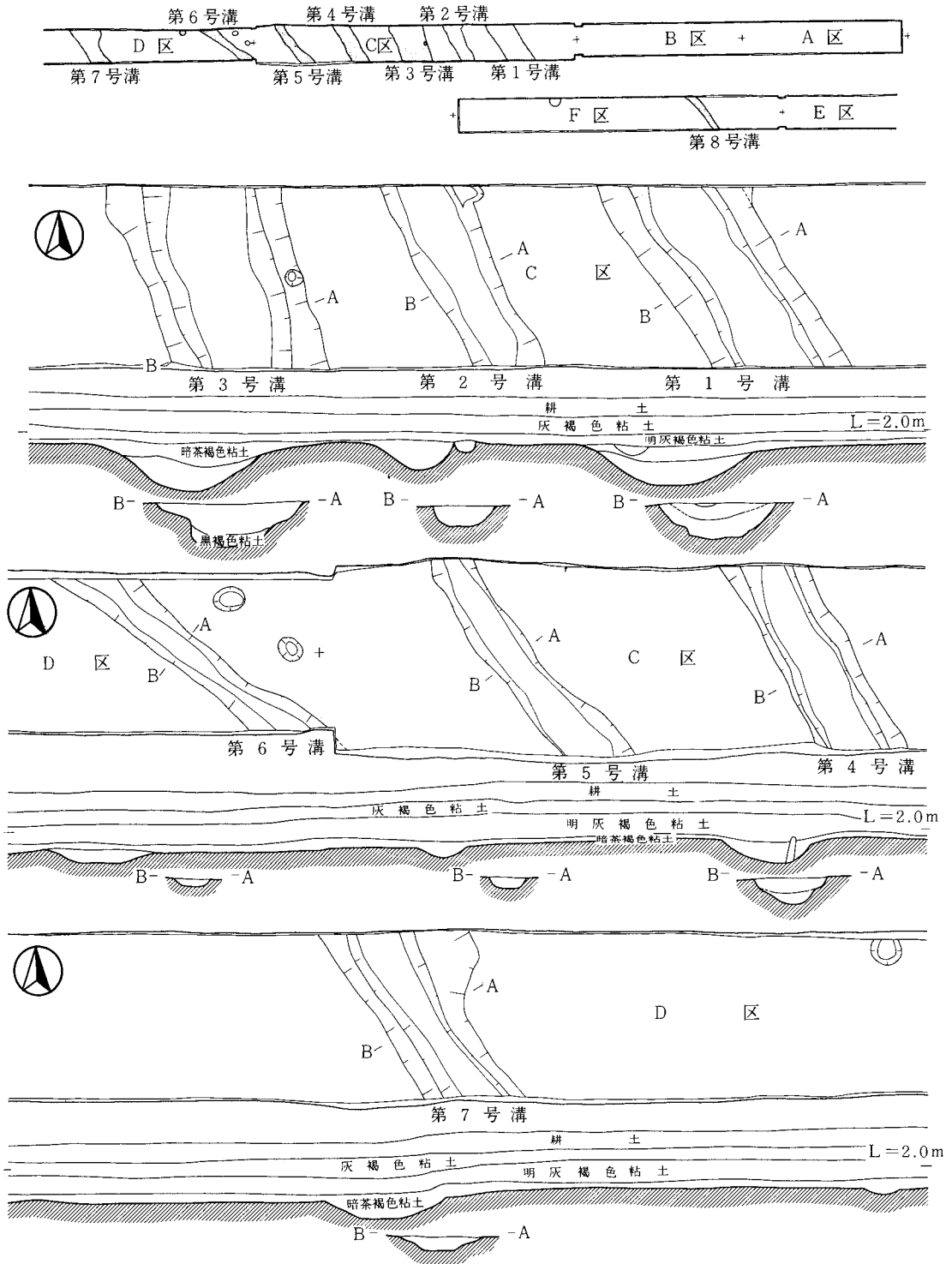
第3号溝（第4図、図版1） 2号溝と約1.5m離れて平行する溝。主軸をやや西にふり、南北方向にのびる。二段掘りの形状をとり、上端で約1.8mを測って、深さ20～30cmで幅1.0mとなる。溝底は幅80cm前後の平底となり、地山は強い粘土となる。溝覆土の上層は炭化物を若干含む淡茶褐色粘土で、下層は炭化物を含む黒褐色粘土となっている。地山までの深さは約1.0mを測る。

第4号溝（第4図、図版1） 3号溝の西、約2.0m離れて平行する溝。1・2号溝と主軸方向を揃え西北から東南方向へ伸びる。幅90cm、深さ約70cmを測る。溝の覆土の状態は1号溝と類似し、淡茶褐色粘土の中位レベルに薄い白色粘土の間層を含む。

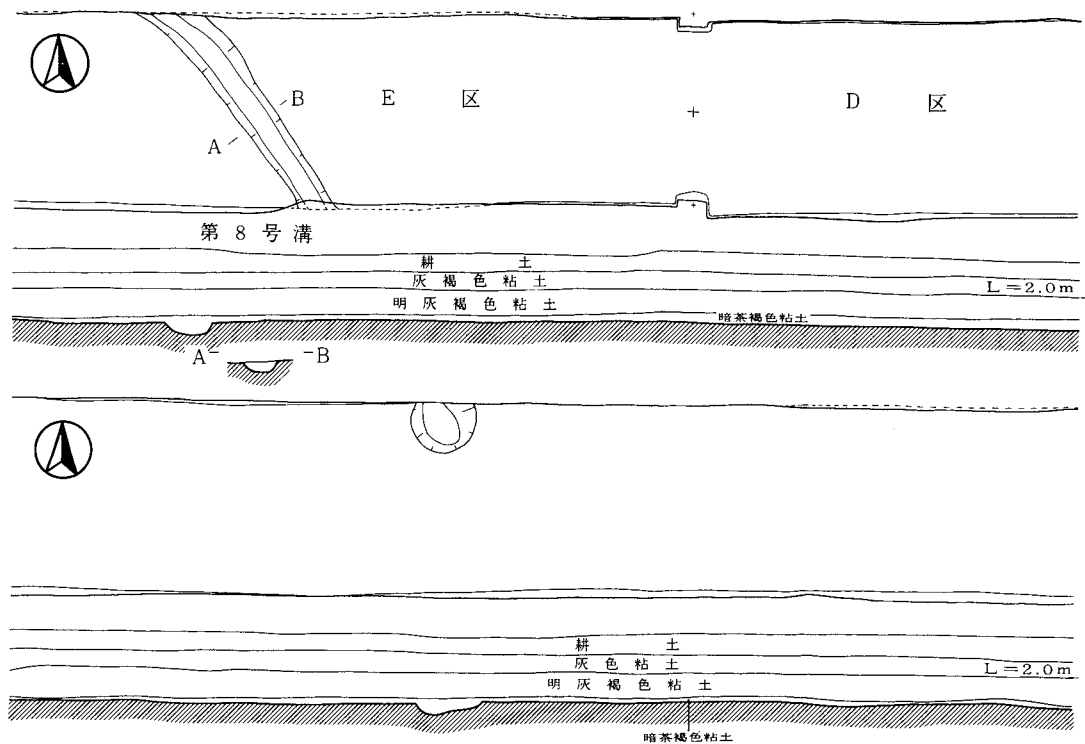
第5号溝（第4図、図版1） 4号溝の西、約2.5mの離れて平行する溝。幅60cm、深さ15cmの細く浅い溝である。覆土の暗茶褐色粘土中には大粒の炭化物を含む。

第6号溝（第4図、図版2） 5号溝の西に約3.5m離れて平行する溝。幅60cm、深さ8cmの細く浅い溝である。覆土は暗茶褐色粘土で、溝の方向とともに5号溝と似ている。

第7号溝（第4図、図版1） 6号溝の西、約6～8m離れて平行する溝。上端で約1mを測る二段掘り状の浅い溝で、深さも14～20cmを測る。淡茶褐色粘土の覆土中には炭化物粒と土器の



第5図 白江梯川遺跡第1次遺構実測図(1) (S = 1/60)



第5図 白江梯川遺跡遺構実測図(2)

小片若干が含まれていた。

第8号溝（第4図） 7号溝の西、約12.5m離れて平行する溝。幅30~40cm、深さ約14cmの浅い溝で、主軸方向は5号溝や6号溝と類似する。淡茶褐色粘土の覆土中に若干の炭化物粒を含む。

## 第4章 第2次調査区の遺構と遺物

### 第1節 調査区内の概要

換土工事計画での掘削到達面は標高1.98mの予定となっており、調査区内では約2.1～2mで大略の遺構の所在が判明し、下部層検出と仮称した弥生～古墳時代遺構と一部に平安～中世古段階の遺構までがほとんどレベル差を伴わないで出現するという状況であった。また中世の遺物包含層とした層中からも中世陶磁器に交じって弥生・古墳時代の土器片も出土し、地点によっては中世遺構の輪郭追求の精査作業が、古い遺物群を浮き上がらせるという状況も現出し、検出面より観察する遺構内覆土では中世溝・井戸などの大型のものでは概して灰色系をなしたことから分別が可能であったが、小形の遺構や染み状となった溝状跡においては発掘の結果において時期相を探り得ることができたと考えている。基本的には遺物伴出状況に依る部分が大きく、これ以外の主に小形ものは所属を明確にできないものを含んでいる。発見した遺構・遺物の時期は大把握で弥生後期頃～古墳時代後期・平安時代中期頃～中世末との2時期区分でそれぞれ継続性が存在しているようなので、以下2区分して報告していきたい。なお包含層中として取り上げた遺物については第4節で一括した取り扱いとしたい。

### 第2節 弥生・古墳時代の遺構と遺物

当該期の遺構では明瞭に検出できたものと、中世期の窪状地かとも推測していた不定形の染み状となっていた部分からなり、この不鮮明なものは主にA～C-4～6区内に在るもので、発掘の結果遺構かと想われるものと、依然として不明であるものがある。これらについては一応、溝として遺構番号を付している。なお、当該期の遺構と判断したものには、平安時代以降のものとの区別のため、性格的名称を先に冠して番号が順ずるもの（例えば溝1…・坑1…）とし、後者の場合はこの逆（例えば第1号溝…・第1号土坑…）として、それぞれに一連番号となるように努めた。ただし、既に標識的遺物出土遺構として遺構名称が別報告書に掲げられているものもあり、これとの混乱を防ぐよう欠番等を絡ませて最小限の改組整理を行っている。以下、弥生～古墳時代遺構の説明は、後出遺構に寸断されてかつ完結性をもつものかどうかとも判らない状況にある溝ないし溝状遺構がほとんどであるので、個別の大縮尺図を掲げず全体図（第6図）を参照願うこととして、遺物の出土したものを主として、概略を記していきたい。

**竪穴状遺構1** 竪穴住居跡の可能性もあるこの遺構はF-7区に在って、一部分が調査区内にかかっている。規模は不明となるが隅円方形か長方形をなすと考えられる。検出面よりの深さは約0.1mで平坦な底面となっており、柱穴痕は未発見で土器片1点の出土がある。内充土は暗茶褐色土であった。第9図1が遺構内出土遺物で、底径約6.4cmの平底をなし、外面ヘラ状具によるタテ方向のナデがある。

**坑 2** A-6区で農道際にある長方形の土坑で長さ約1.5m・幅約0.8m・深さ約0.2mで



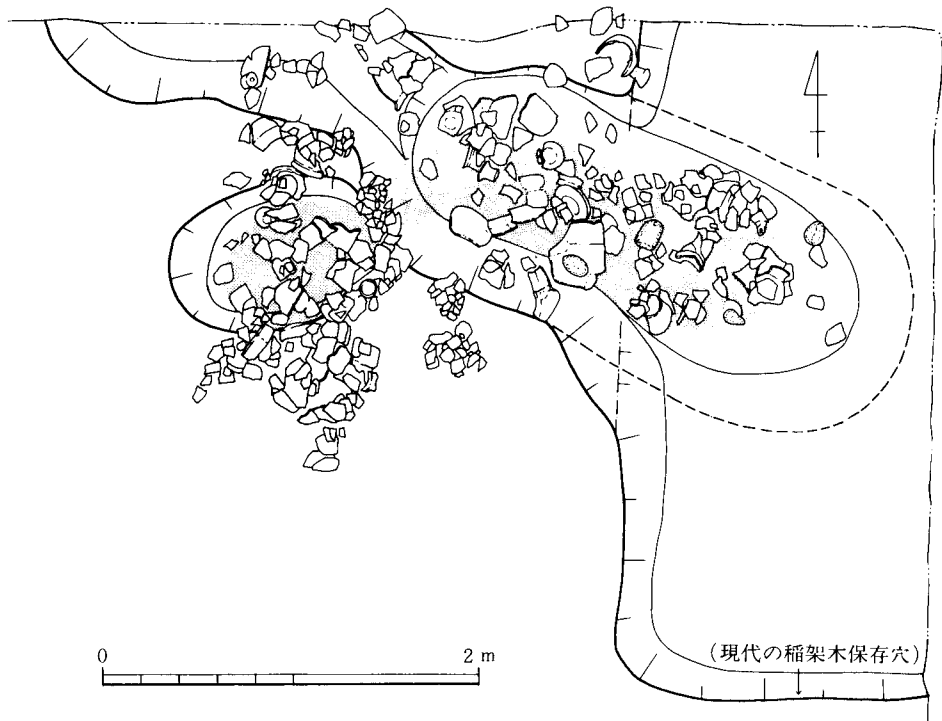
第6図 第2次調査区 遺構全体図(下部遺構=白ぬき)

ある。内充土は暗茶褐色で、坑中より2片の土器が出土した。第9図2・3がこれで、口唇端部の面取により肥厚化させた2と、幅広にとって有段口縁状とした3は、いずれも口縁外面に擬凹線がある。2の外面にはハケ状目調整痕・3の内面は削りが伺える。

坑 3 A・B-6区にあり。中世第2号溝に北側部分が切られている。長方形をなす不整形なもので、溝7の延長部分にあたるかもしれない。内充土では茶褐色～下半部で暗褐色をなす溝と同様の埋土状況に観察しているが、底部が一段深くなっているため土坑の可能性もあると考えて別遺構としたのみである。坑底に相当する部分では4点の土器が出土した。第9図4～6・9がそれで、その他はこの上部で取り上げている。同図4～10は甕形土器と想われるが、7を除いてはそれぞれに長短があるが、口唇部を断面三角形状となす外面部肥厚帯を造作するもので、7では器肉を一定的に保つ幅広い口縁部（帯）となして外面に擬凹線文を施している。体部の調整では表面風化等により明瞭に観察されないが、内面では全て削り調整とみられる。その他、脚部・底部片がある。

坑 8 C-3区中にある円形で小型の土坑である。径約1m・深さ約0.1mで、内充土は淡褐色をなしていた。坑底は平坦であり、内より2点の土器が出土した。第9図14・15である。有段状口縁をした鉢形土器の14は、幅広い口縁帯は無文のナデ調整として底部は小さく凹底となっている。15の蓋は頂部が欠損して形態は不明で、直線的にのびる裾部径は約10cmである。

坑 21 E・F-6区の調査区隅にあった遺構で、東側部分が現代の稲架木保存坑により切削されていて坑底部が微かに遺されていた。西側部分では付帯的な一段浅い堀り込みがあり、溝状の遺構であるかもしれない。これらの窪み中と一部肩部にかけて投棄的破碎状態となった土器片群が多量の重なりをもって出土した。あるいは肩部となった土器群も、遺構プラン検出時の削り



第7図 第2次調査区 坑21号平面実測図（スクリントン部分は、細片多数）

下げに従って構外状となったと思われる。主坑部分の規模は、底面での長軸方約2.6m・短軸方約1mの長楕円形状をなし、深さ約0.4mである。内充土は上面部が茶褐色をなして、下部に従い漸移的に暗褐色土となっていた。第10図～第15図がここより出土した土器群である。第10図1～第11図8にかけての19点のくの字状口縁甕形土器の内、第10図7～9の3点を除いてはいずれも口縁部を内湾気味として口唇端部を外傾した面ないし円みをもたせたものになっている。ほぼ水平になるかと想われるものも含むが内傾したものはない。口唇端部の肥厚では極めて小さいが認められるものが少量ある他は、認められないものが主体をなしている。体部調整・全体器形が観察できるものに乏しく不明な部分が多いが、外面の肩部～体部中にはヨコハケが認められ、内面では肩部に指頭状圧痕と削り調整も肩部までに留めているものが多いようで、庄内式甕にみられるような頸部で鋭く屈曲しての削りを伴うものはいない。体部の形態ではナデ肩となった倒卵形状をなすものが多いように想われる。色調は乳褐色のもので占められている。有段口縁形態の甕形土器では第11図・第12図他18点がある。第13図1・2では、同図3の器形に口縁上部を継ぎ足し伸張されたと考えてよい剥離痕が認められる。この種の甕には概して口縁外面下端が突出状となる鋭い稜が残されている。口唇端部の形状は、先細りとなるもの・円みをもっておわるもの・外唇部へ小さく肥厚気味となるものがある。体部の調整が判るものは多くはないが、外面では部分に斜方向のハケ状具痕も認められるが横方向のものが主のようで、肩部に波状としたもの4点がある。内面では頸基部より一段降りてヘラ削りしたものが観察でき、これが一般的と思われる。第13図5・6はこれらとは別系統の有段口縁甕かと想われるが、5では口縁外面下端に2状の擬凹線文があり、口唇部が円みのある面取り様に治められている。6では内傾気味の口唇面取りがある。8・第14図1は口径が不明といえるが、約40cm前後となる大型甕になると想われるもので、くの字状にゆるく屈曲した口縁基部に「タガ」状の突帯が付されてある。第13図9・10は球胴形の体部をもつ甕形土器であるが口縁部の造作で異なりがある。11は口縁基部が突出状となる甕形土器の造作に同じい壺形土器で、内面の調整でも同様の指頭状圧痕と以下にケズリが施されている。第14図2は比較的長いくの字状口縁部をもつ壺形土器で、直線ないしやや内湾気味に伸びる。体部は肩部より円みをもって、胴部中位に最大径をとる球形状にちかいものと想われる。調整では体部外面と口縁部内にハケ状具痕があり、体部内面では体最上部～頸部下でのナデ上げがあって、以下ではヨコナデ調整のように想われる。

第14図3～第15図12にかけては甕・壺形土器以外のものを取り集めた。第14図3は小型丸底壺と想われるもので、頸部の締りが弱く浅めの体部となっている。調整では内面がナデ調整である。4は蓋形土器のつまみ部分であるが、小型の鉢形土器脚台部となるか不明である。図中で頂部とした上面の調整はヨコナデが施されている。器台形土器としたものは5～9のそれぞれに特徴的な5種類のものがある。5は、小皿状の器受部から山高の八の字状に開く脚部となりそうである。6では受部と脚部の稜角が不鮮明となるもので、小さく深みのある受部のものとなる。7はやや内湾気味となって細長く延びる杯状ないし小鉢状の器受部に、大きく裾広がりとなる脚部からなっている。外面の調整ではミガキ痕が認められる。8では器受部内面側は円みをもって内湾気味にのびると想われるが、外面側の基部外端には明瞭な稜線が入ってくびれる皿状の受部から、

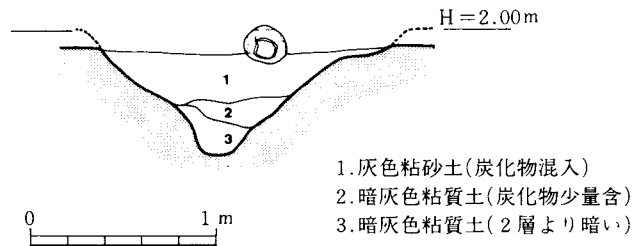


山高の八の字に開く脚部が付く。受部内外面と脚部外面にはミガキ調整を伺える。9・第15図1・2は鼓形の器台で、口径20cmのもの・脚端約16cmのものがあり、大小に分かれるのかもしれない。調整痕はほとんど確認できないが、第9図2では外面にミガキ・内面にケズリが伺える。3～12を高環形土器とした。3では相対的に小型の角ばった坏部をもち、外面での口縁部と底部の稜角をはっきりともつものとなる。4では3にやや円みをもたせた形態をもつ。5は中型となって形態的には3に似るが、口縁部に外傾度をとって長く延ばし、坏口縁基部にくびれをもつもので、8・9を含めたタイプのものであろう。6・7では底部より丸みをもつ椀状の杯部の口縁上端部を外反させた特徴的なもので、脚部は山高の八の字状となっている。12は大型のものとなるが、内湾の浅い体部から大きく外反する口縁部が備わり、外面側では体部と口縁部境が突出状となって明瞭な稜角をもち、伴出複合口縁甕・壺の造作に似たものがある。調整面では3の脚部内面にハケ状具、6・8・10の外面にミガキ痕がある。その他、4の外面と6の内面に赤彩りの痕跡も伺え、図示中の脚部には全て透かし孔があり、2～4孔である。なお、この土器群は「漆町遺跡編年案」（『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター・1986・田嶋明人）の7群土器に対応されているもので、ここでは「白江・梯川遺跡21号土坑」名が用いられていることを付け加えておきたい。

**溝 1** E-7区にある。幅約1m・深さ約0.2m、内充土は暗褐色土である。北方に延びる可能性がある溝で、第16図の1の土器片が出土した。

**溝 2** E-7区にあり、中世第1号溝に切られている。幅約0.6mの弧状になっており、深さは約0.15mである。内充土は暗茶褐色土で第16図2～8の土器片7点の出土があった。くの字状口縁の甕2種・広口の壺2種に平底の底部3点である。2・4・5の内面ではハケ状具調整痕が残されているが、3・6・7でナデ調整である。

**溝 3** 調査区の東端部のB-8区～E-8区間にまたがった大型溝で、くの字状となって巡っている。この内角度は約123°であり、環濠状をなしたものと想われるが一辺の長さも知ることができず、平面規模は全く不明である。検出面での溝幅は約1.5mで、底面は平坦となるが幅狭く約0.2m前後・深さは約0.5～0.6mとなるV字状の溝である。内充土は、第1層淡灰色粘質土で炭化物粒が若干含まれ、第2層暗灰色粘質土で炭化物粒を微量含んでいる。第3層は暗灰色粘質土で、壁体土と同じ砂粒が含まれている。遺物は、この第3層で小片となって単発的に少量



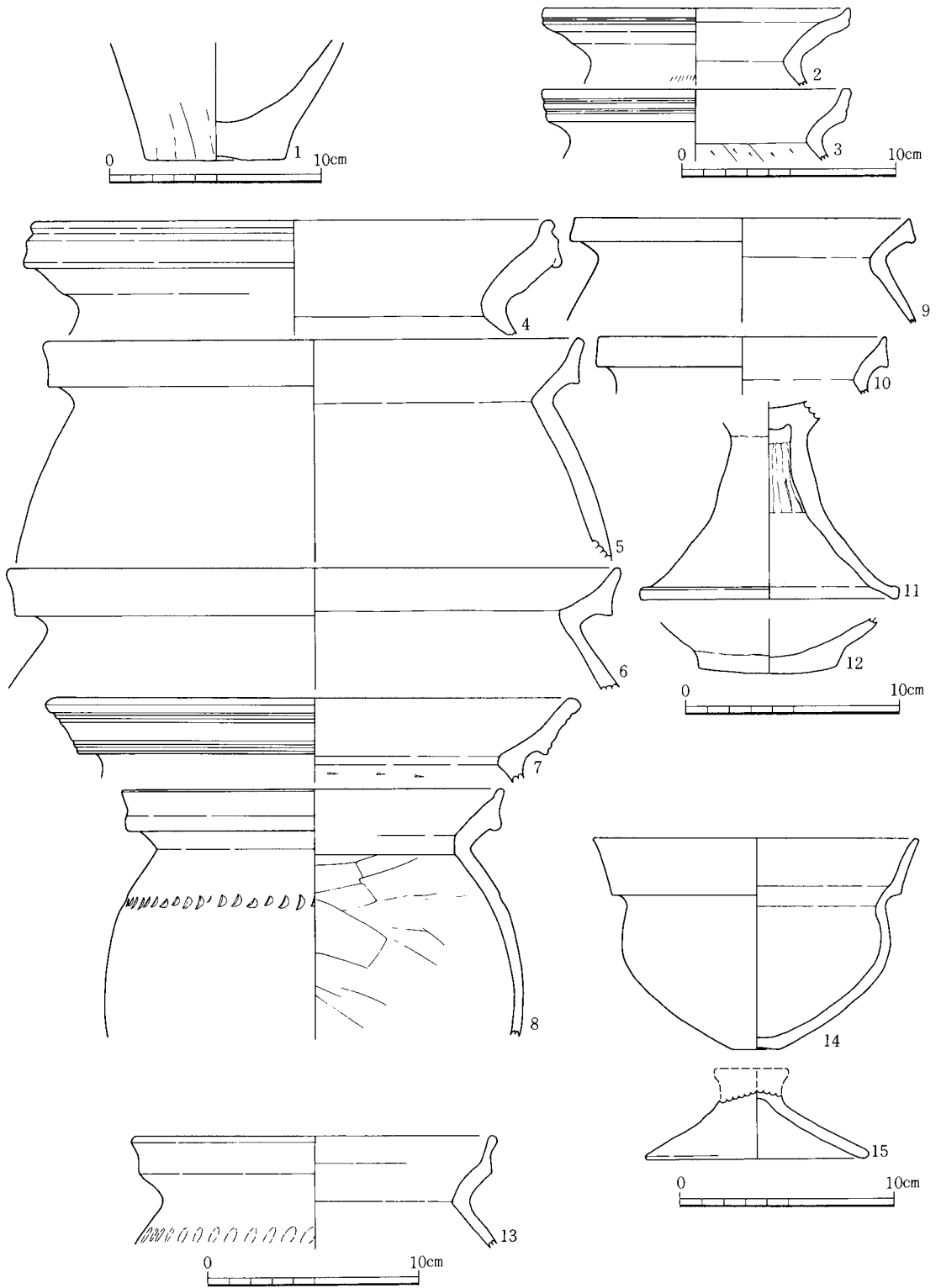
第8図 第2次調査区 溝3標準断面土層図

出土した他に、主に第1層上面部で列状をなして出土した局部的な一群とがある。第16図9～第19図までがこれらの土器である。有段状ないし有段口縁とした中型の甕形土器では7点の出土があり、内6点に口縁帯に擬凹線文が施されている。くの字状口縁の甕は13点あり、口縁部の面取りとするものが多数を占めるが直線的となるものも含まれている。口唇端部は概して内傾の面取

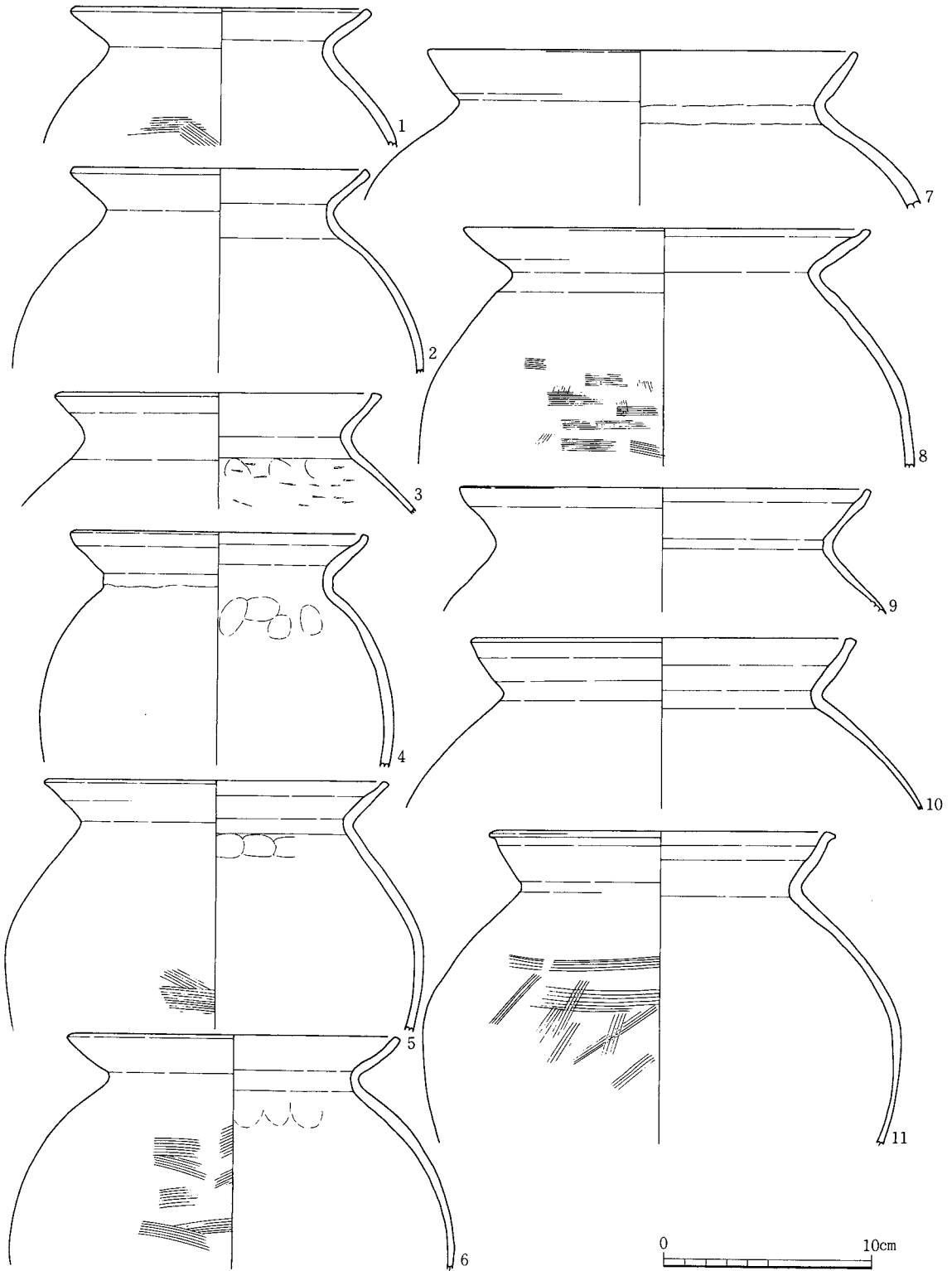
りとするものが多いが、肥厚状態では顕著に突出するものは数少ない。体部は長胴の形態となるものが多いように想われる。大型甕では口縁基部が突出する複合口縁の3点があり、口唇端部はいずれもしっかりとした面取りがしてある。壺形土器の大型品では強く湾曲した頸部から外反させた長めの口縁部もの第18図4のタイプと、ゆるやかな弧をなす頸部から外傾して直線的な口縁部をもつ同図6のタイプがあるようで、4のタイプでは口縁基部を突出状になす11・12がある。5・13はどちらのタイプとなるか定かでないが、5は折衷的なもの・13は口唇端の形状からみて4の形骸化したものと想われる。その他、くの字状に外反させた口縁をもつものもあり、この体部調整では外面をハケ状具調整とし、肩部内面には指頭状圧痕が残されている。小型の甕形土器では、口縁部を直立的とした有段式の8と、漏斗状の受口の口縁とする10、くの字状口縁の直線的に長く伸張させた第19図2などがある。高坏形土器では、坏部内底面の湾曲が少なく平坦状となる体部から直線的に外傾する口縁部とし、脚部はやや下膨れの円筒状をなして端部で強く屈折させて開くものがほとんどとなるが、その他の1点はほぼ平坦な底面から外傾して立ち上る体部とこれを更に屈曲外反させる口縁部からなるものがあり、この土器には八の字状の脚が付くかもしれない。器台の可能性もある。小型の鉢形土器では、底部より体部にかけて円みのある椀状体から口縁部を強く外反屈曲させたものと、ほぼ平坦な底面から外傾内湾気味の口縁とするものの2種類がある。第19図14の鉢形土器では内外面ともミガキが観察される。同図15は底部が円底をなすと想われる小壺で、内面には指頭状のナデ上げ、押さえ痕が伺える。16は頂部面を平坦にとる柱状のつまみとした蓋形土器であろう。外面はハケ状具調整である。17・18は手づくね土器で、底部にやや丸みをもたせた壺形状のものと、コップ形状のものがある。19は土製品で何であるか判らない。図中の最下段は七角形になると思われる面取りがあり、第2段～4段は円形となる。3段～4段は部分遺存で、これを含めて上部はよく判らない。底面とした面中央に窪みをとって中心部に穿孔がある。20は石包丁で安山岩製かと想われ、穿孔は両面より行われている。

**溝 4** 4・4 B B・C-7・8区で東西方向で弧状にある溝で、溝3によって切られている。幅約0.3m・深さ約0.15mで内充土はいずれも暗茶褐色土で、同一の溝と想われるがややずれも感じられたため、4・4 Bとした。ここよりの出土遺物は、第20図1～5が溝4、6が溝4 B中からである。1の口縁帯外面には幅太の擬凹線文がある。5は鉢形土器の把手であろう。6はくの字状にとった口縁部上半の外面に擬凹線文を施して口縁帯を象っている。内面側はゆるやかに内湾させ、頸基部で稜線をとって強く屈曲する。脚部は山高でタテ長の八の字状となっている。外面頸部以下はミガキ調整と思われ、赤彩痕が一部に認められる。

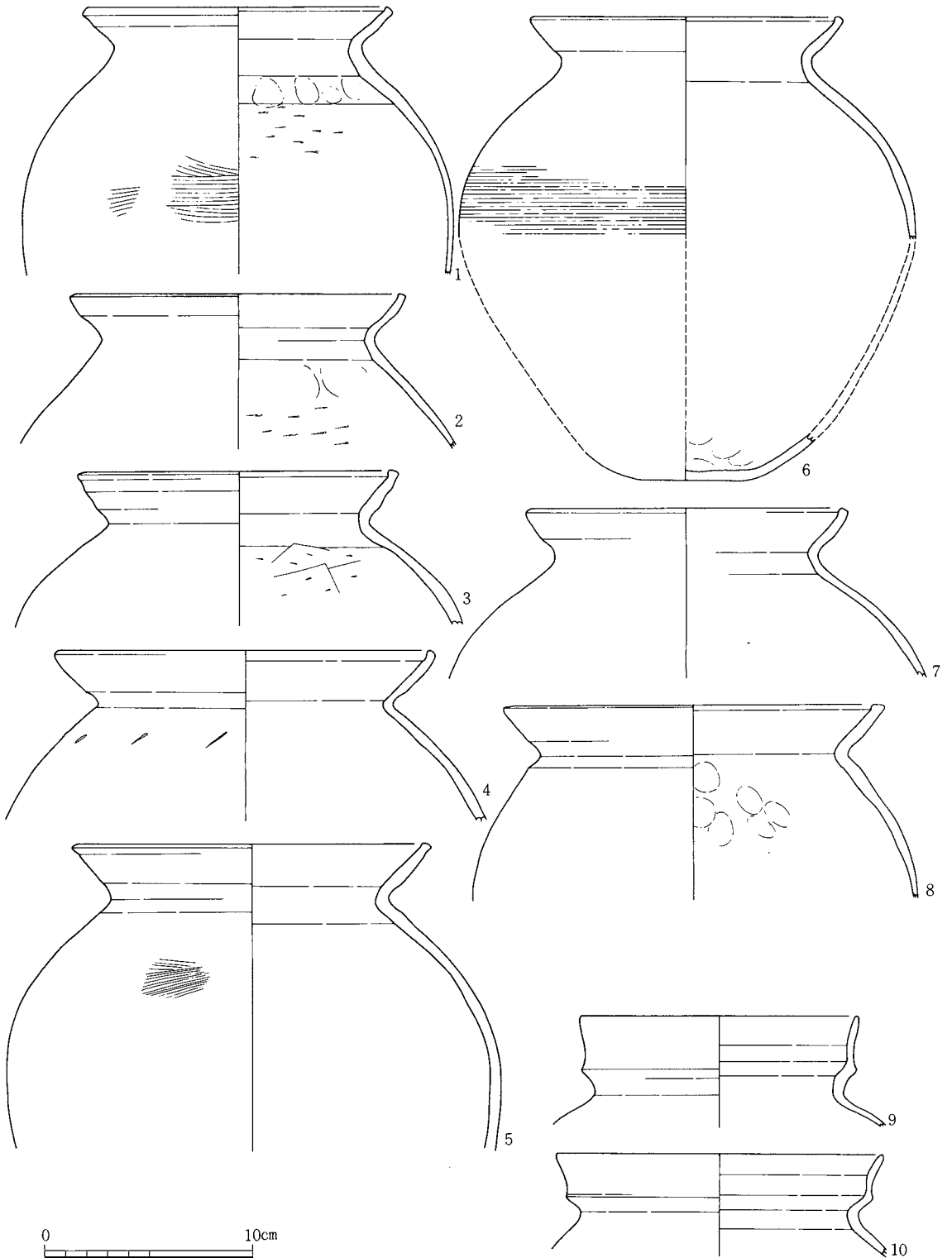
**溝 5** D-7区にある弧状の溝で、溝3に切られている。弧をたどれば溝4方向にあるが、これとは連結しないようである。内充土は淡褐色の砂質土で、壁体との区別は不鮮明で底面部よりの立上りによって求めたもので、幅約0.6m・深さ約0.3mとなろう。比較的大振りの甕ないし壺形土器ではくの字状に外反させた口縁部に、端部を肥厚帯として擬凹線文を巡らす形態のものと、くの字状部からさらに上半部を上方向へ屈曲引き伸ばして口縁帯を象るものがある。内面側では頸部と体部の稜角を明瞭にとるものがほとんどで、頸部に幅をとる第20図8は壺であるかもしれない。内面の削り調整では、頸基部即下よりの9、基部よりや下げる7・8がある。小型



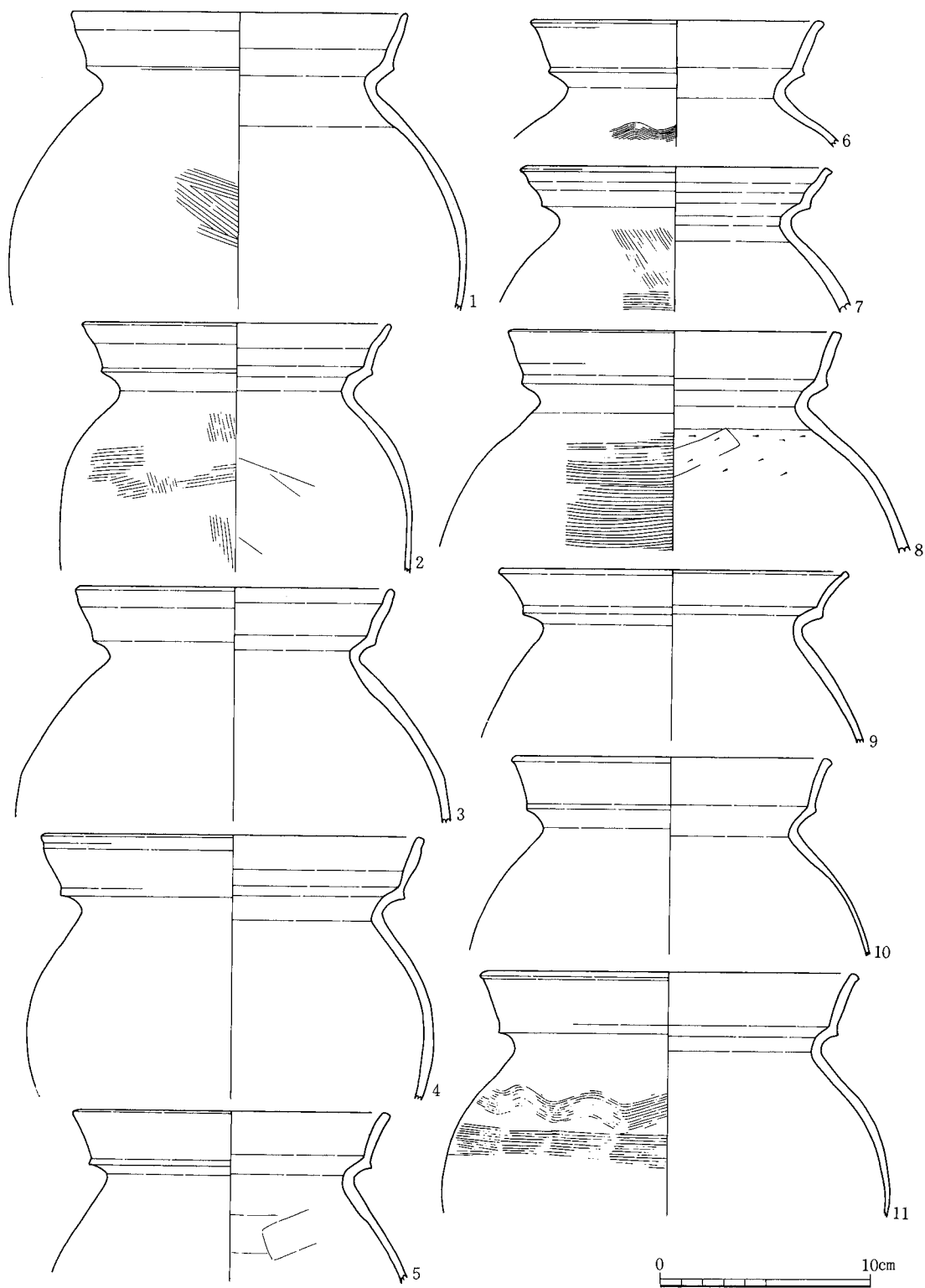
第9図 第2次調査区 竪穴状遺構(1)・坑2(2・3)・坑3(4~12)・坑4(13)・坑8(14・15)内出土遺物



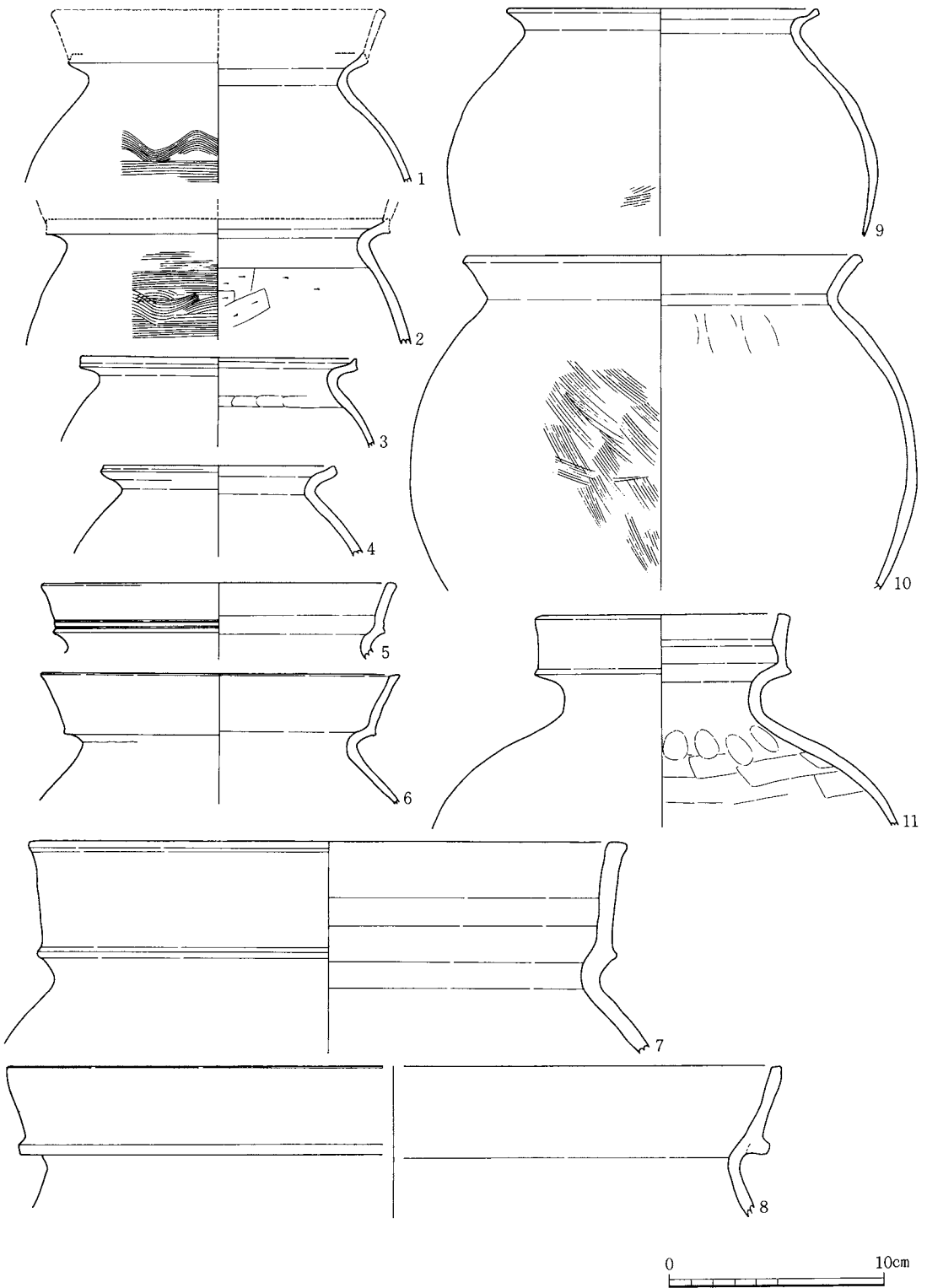
第10図 第2次調査区 坑21内出土遺物



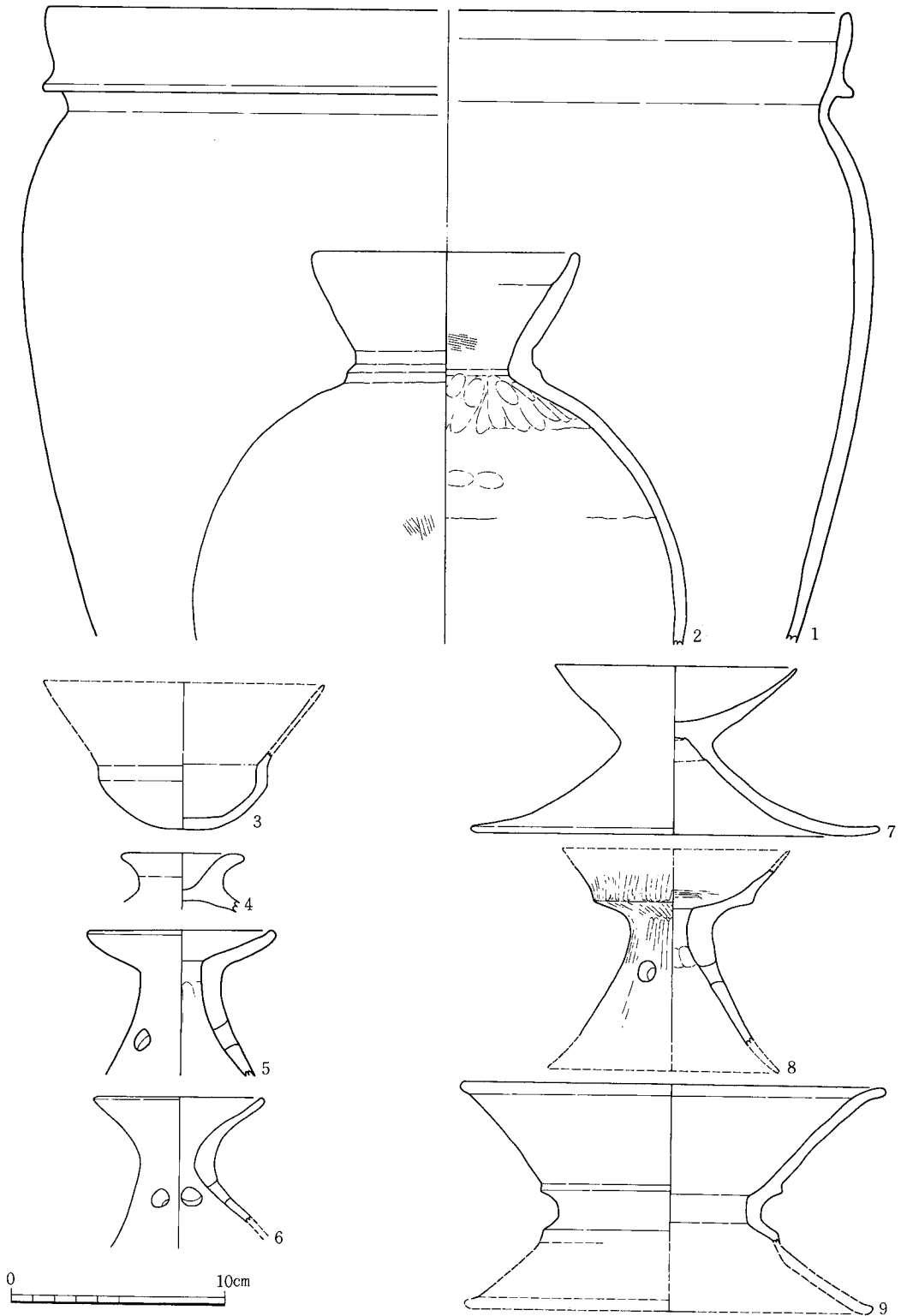
第11図 第2次調査区 坑21内出土遺物



第12図 第2次調査区 坑21内出土遺物

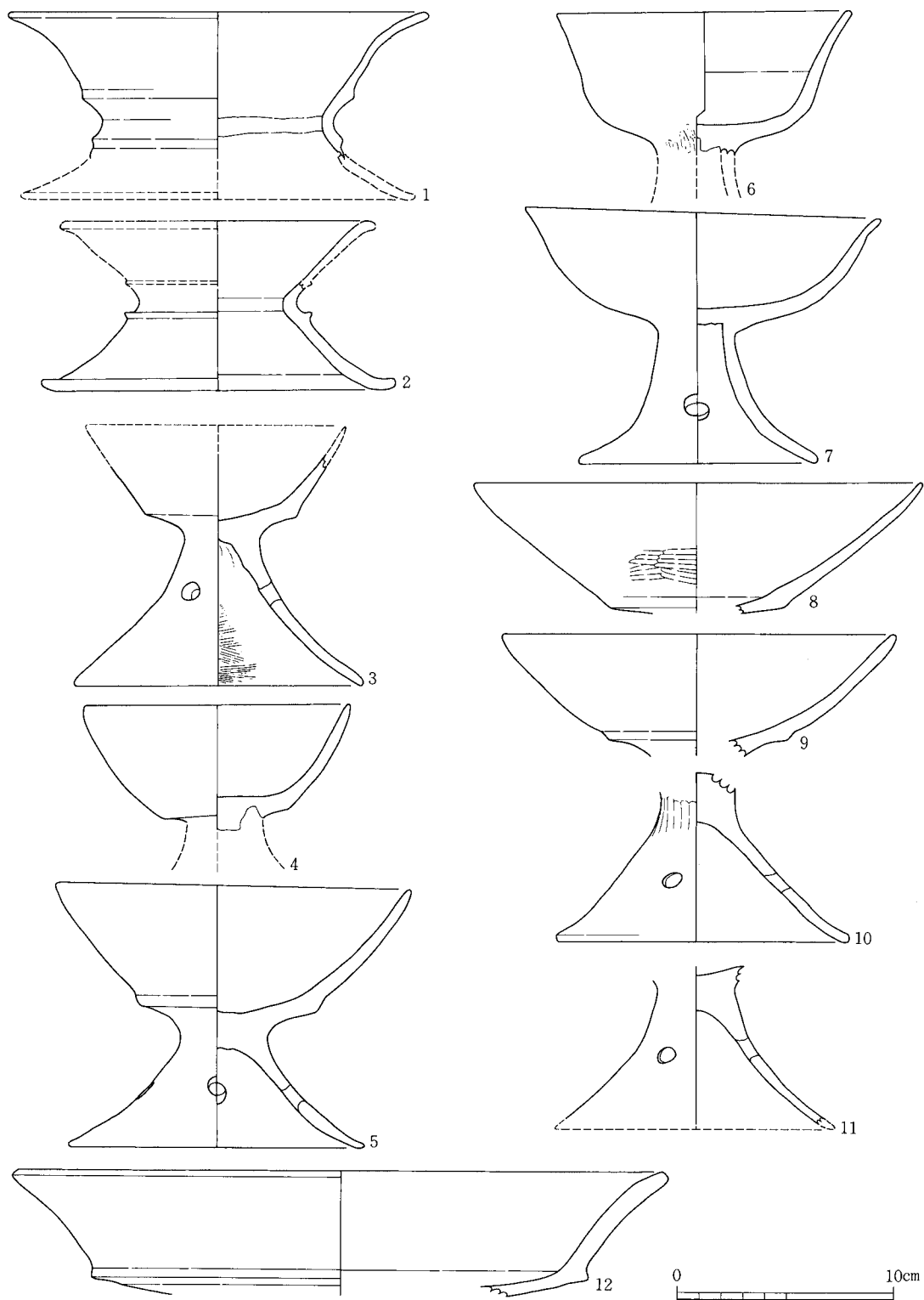


第13図 第2次調査区 坑21内出土遺物

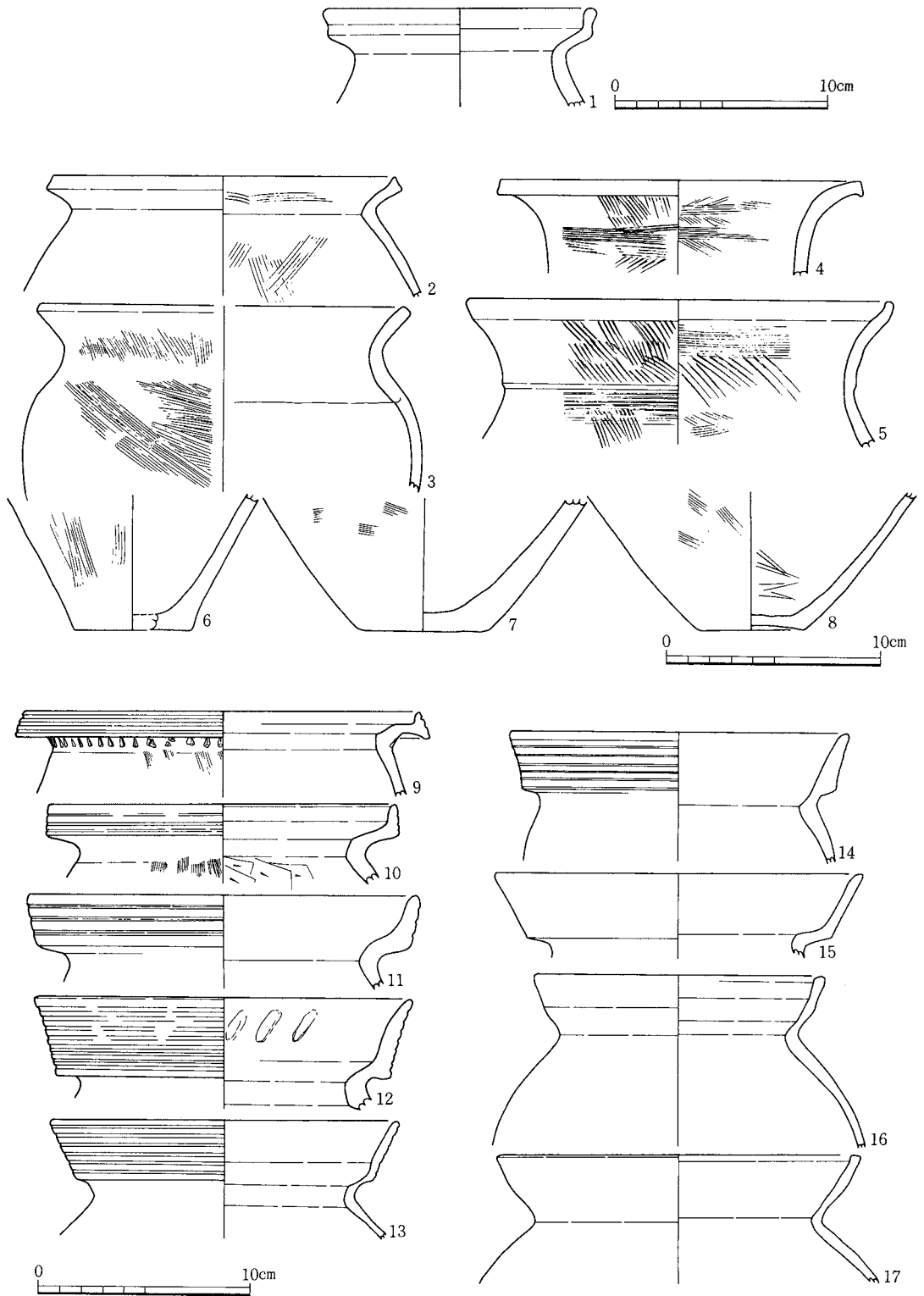


第14図 第2次調査区 坑21内出土遺物

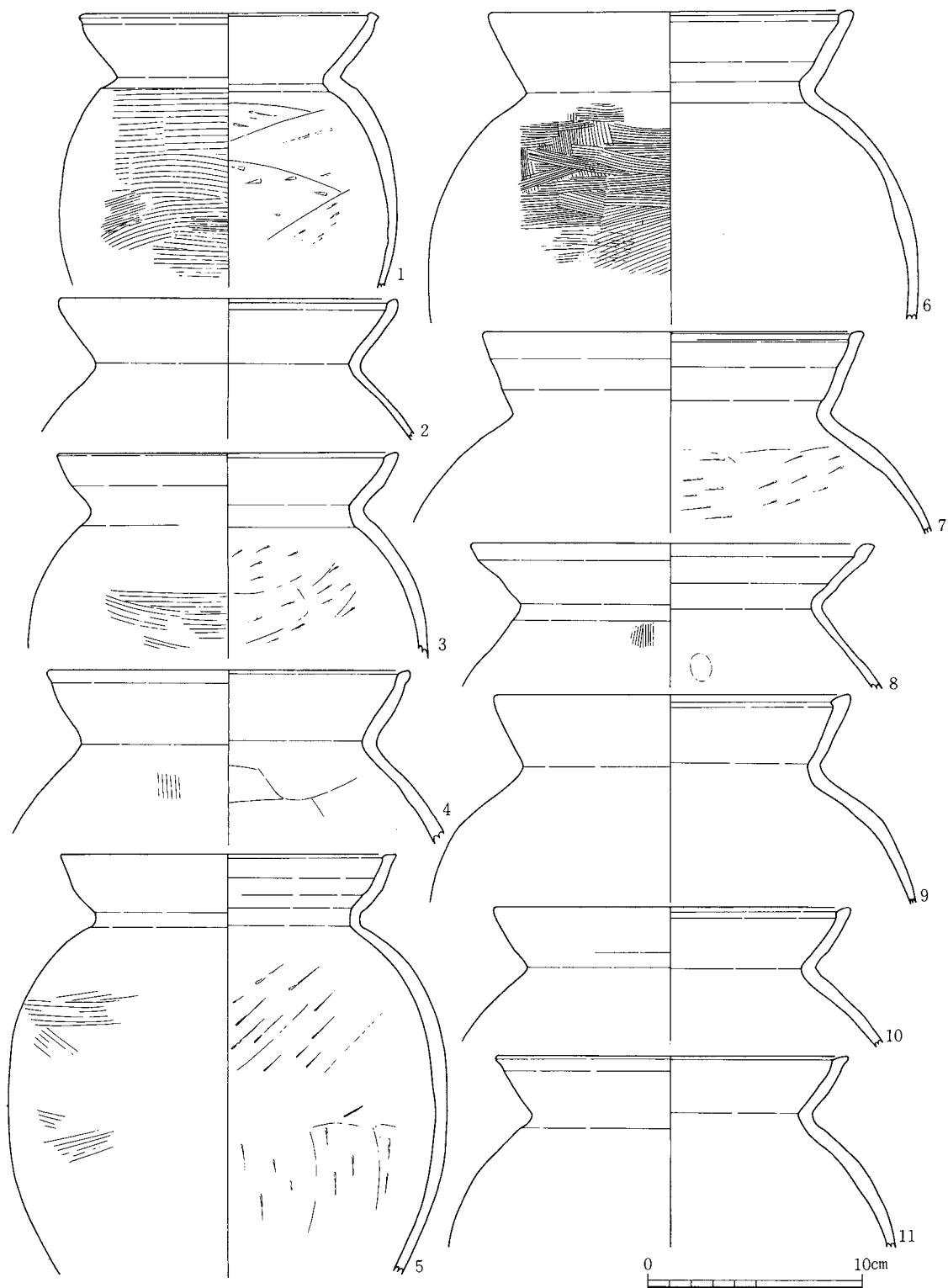




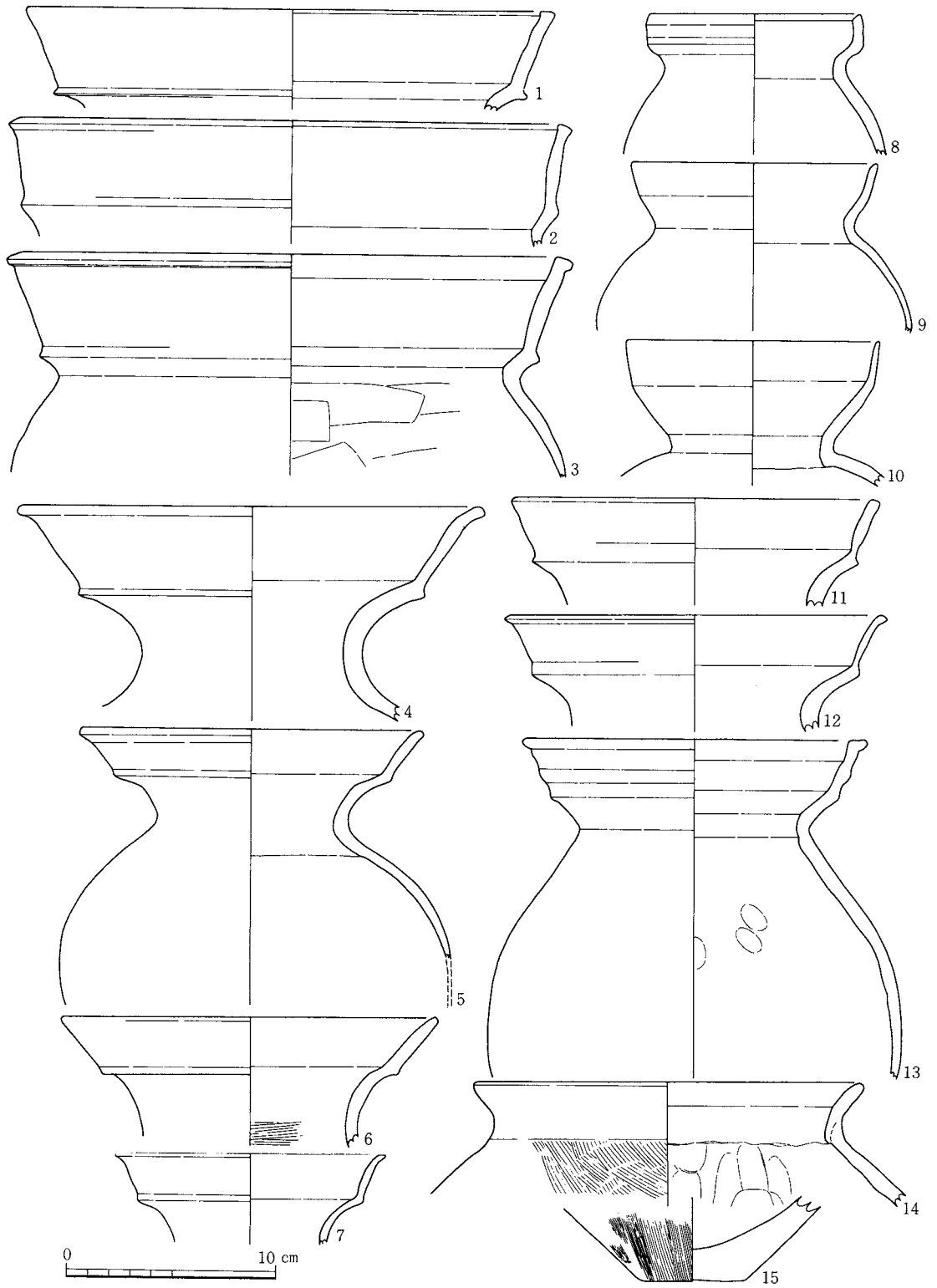
第15図 第2次調査区 坑21内出土遺物



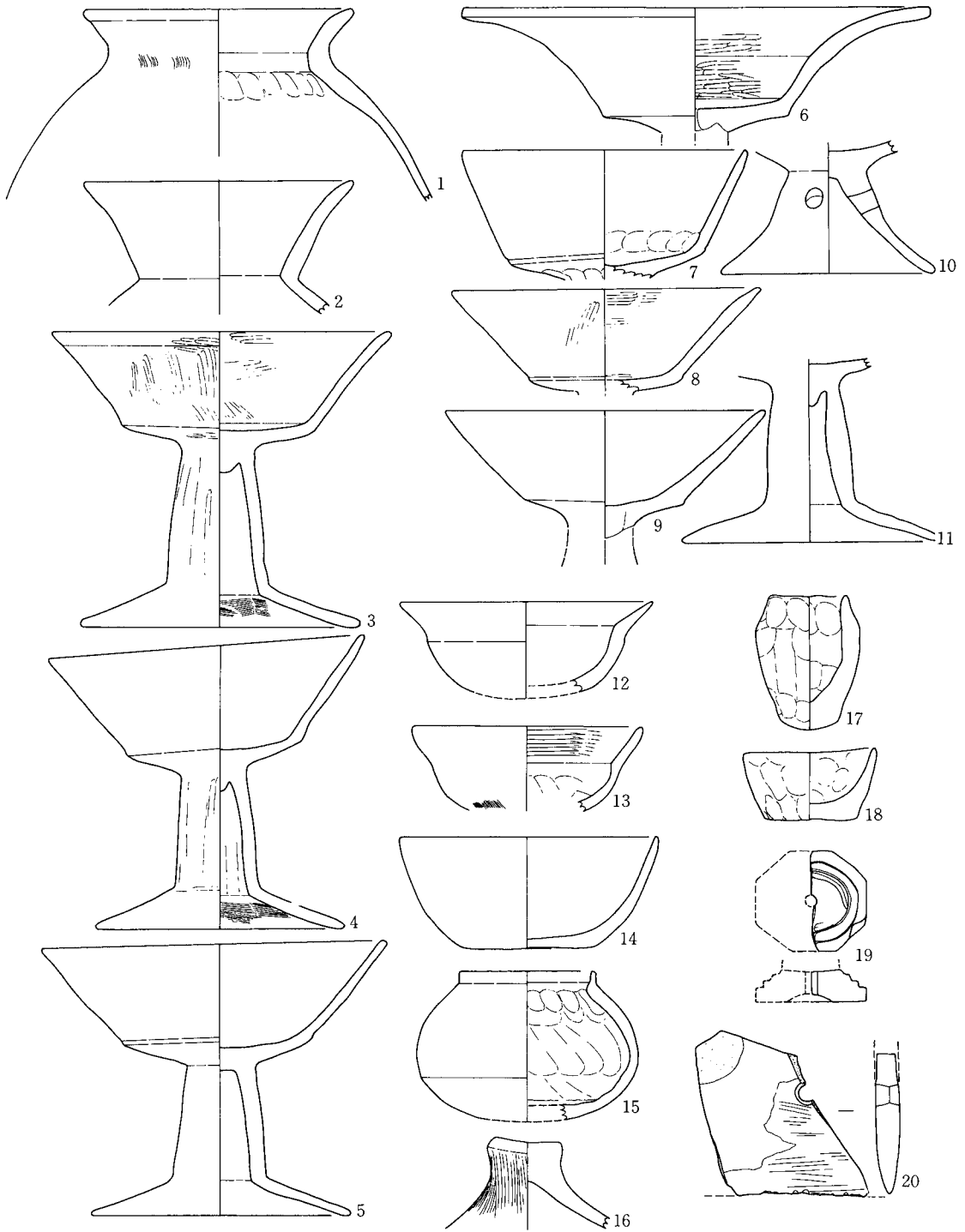
第16図 第2次調査区 溝1(1)・溝2(2~8)・溝3(9~17)内出土遺物



第17図 第2次調査区 溝3内出土遺物

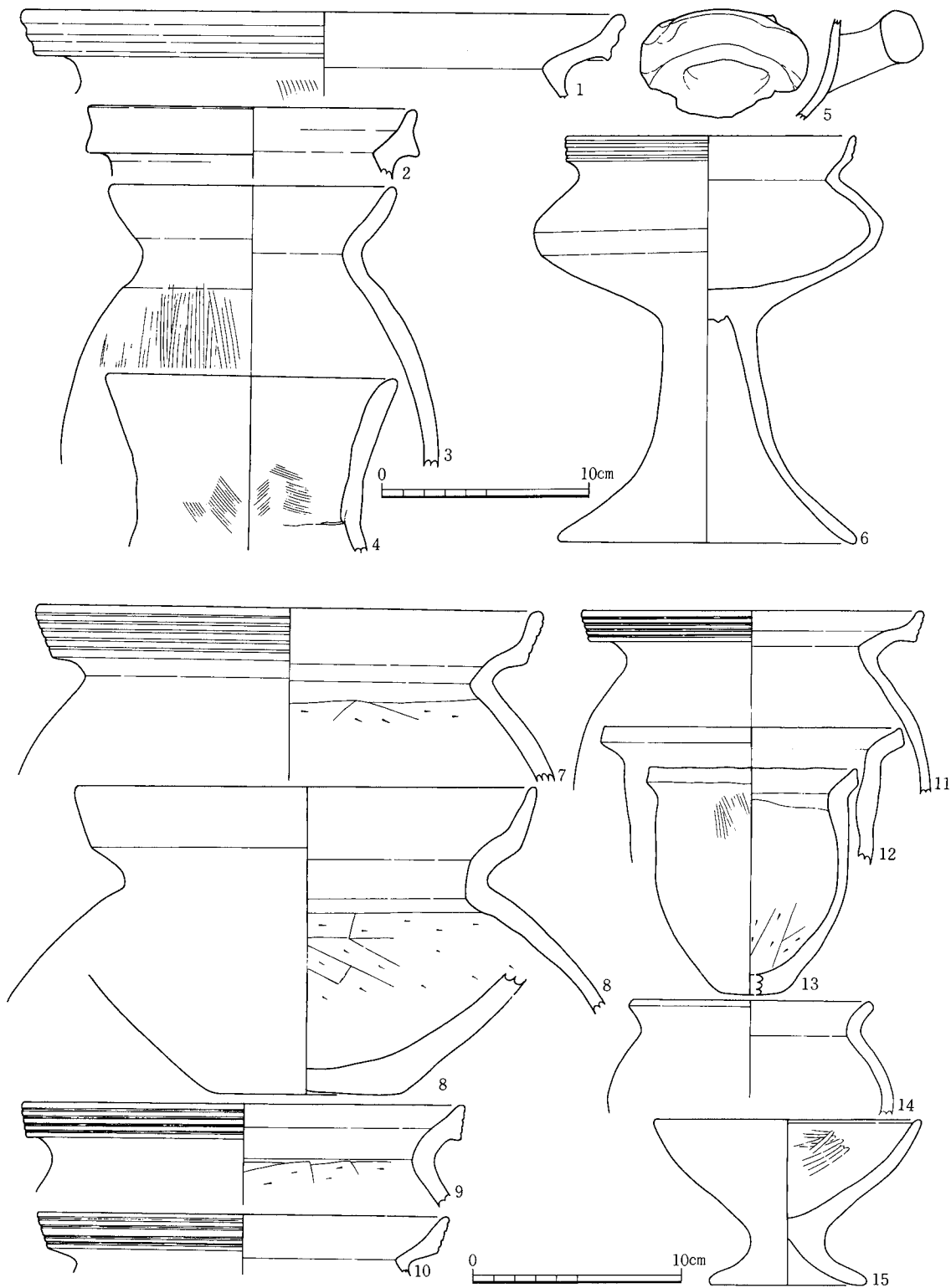


第18図 第2次調査区 溝3内出土遺物

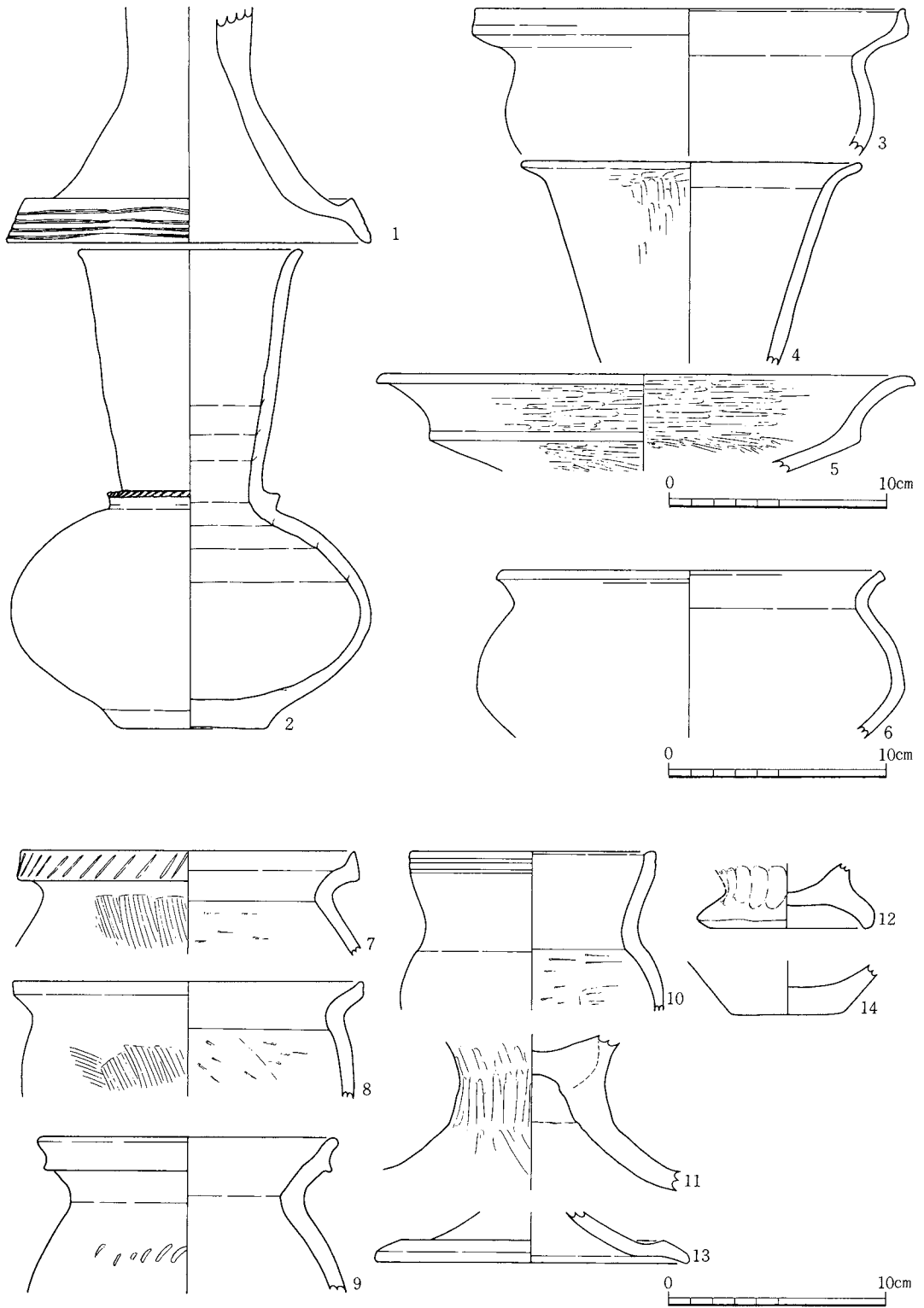


0 10cm

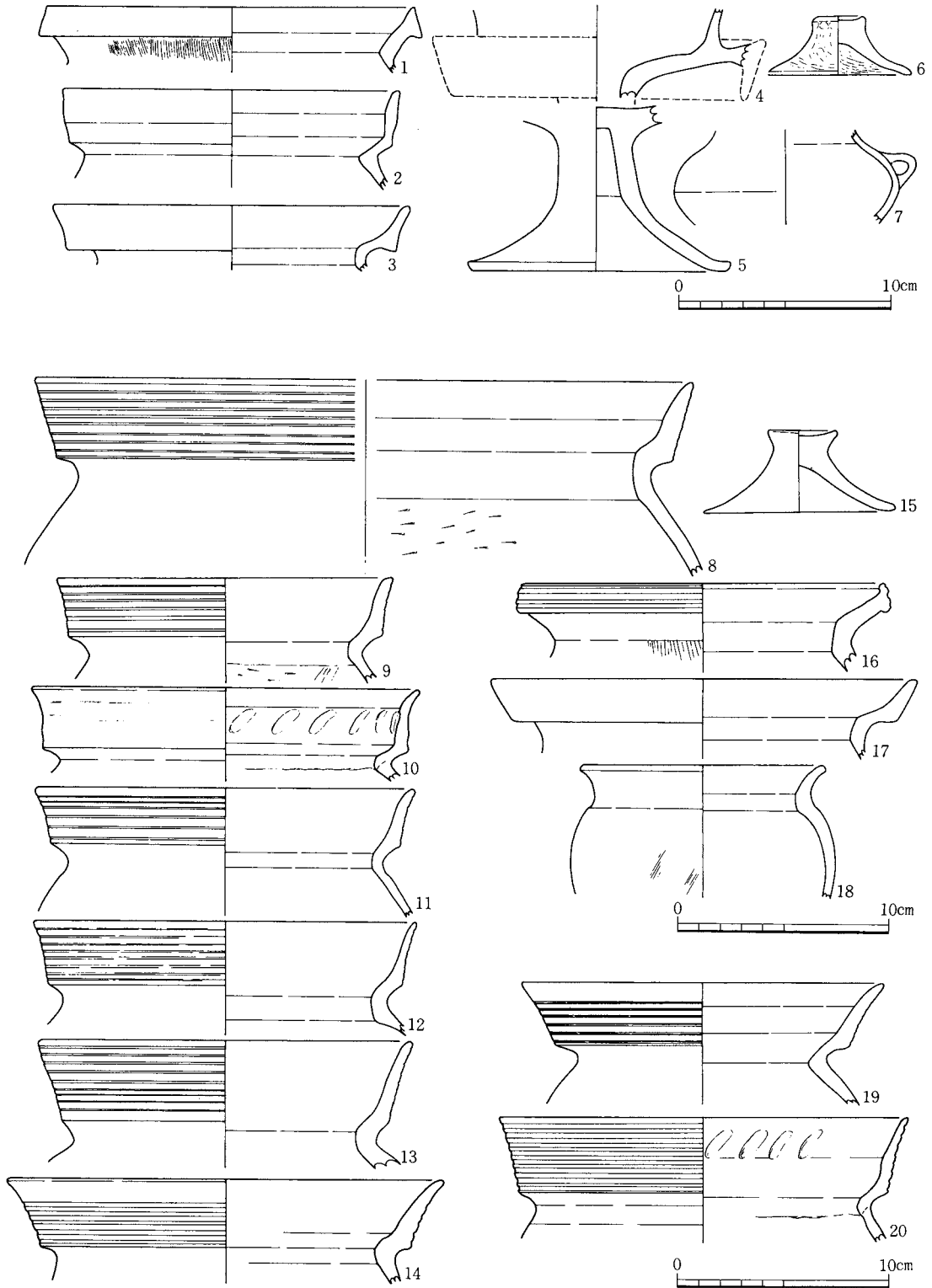
第19図 第2次調査区 溝3内出土遺物



第20図 第2次調査区 溝4(1~6)・溝5(7~15)内出土遺物

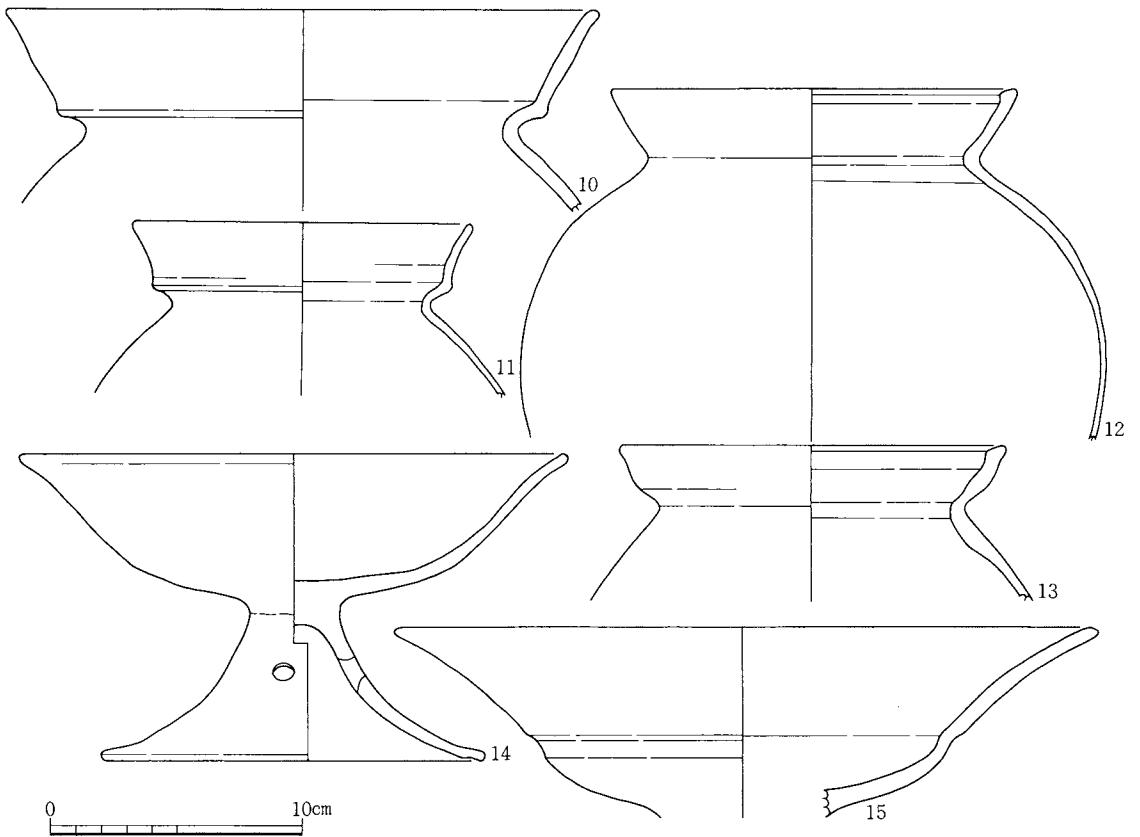
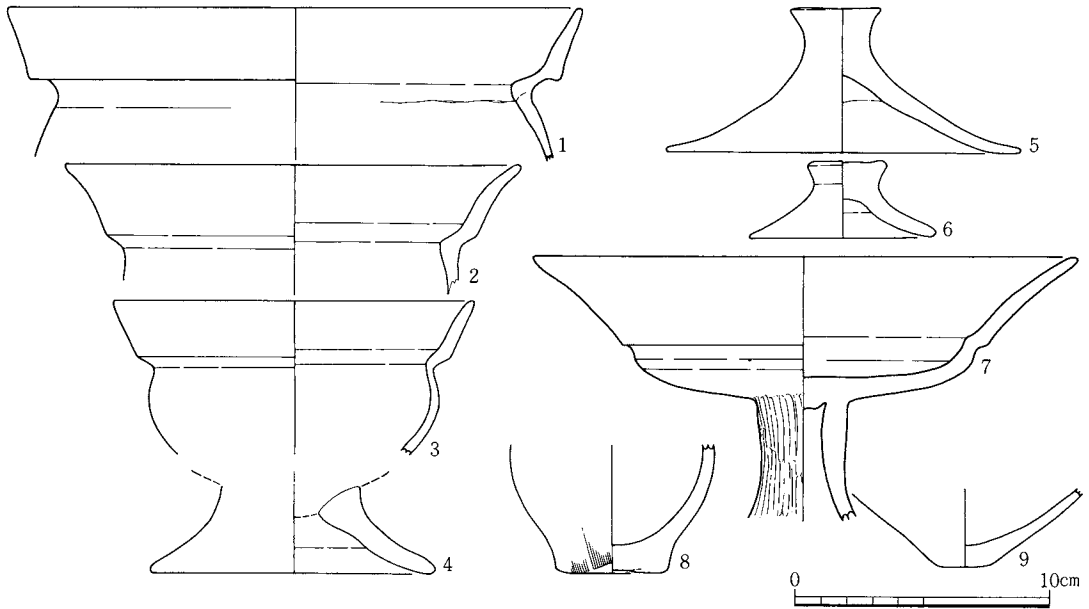


第21図 第2次調査区 溝5 (1・2)・溝5B(3~5)・溝6(6)・溝7(7~13)

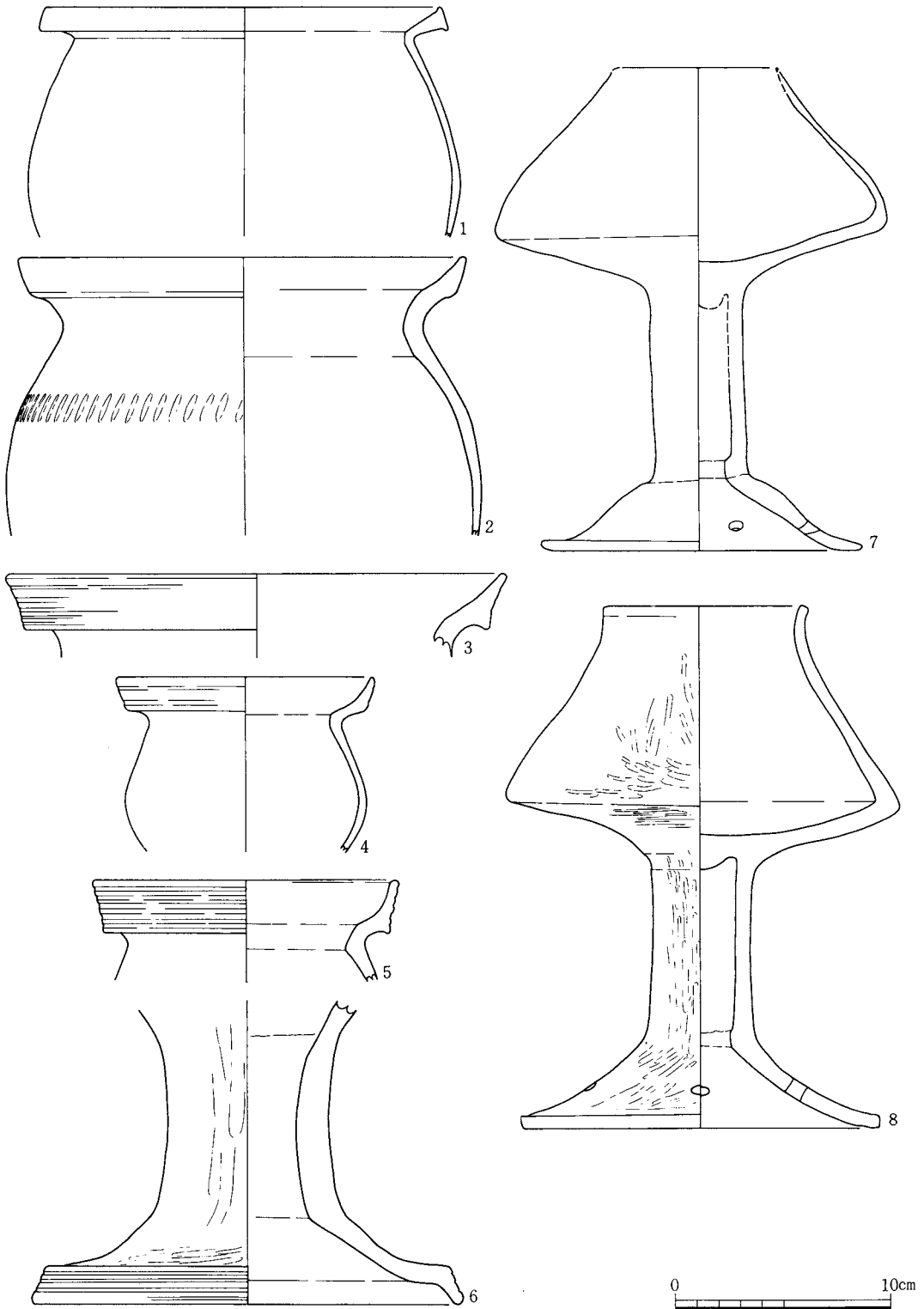


第22図 第2次調査区 溝8(1~7)・溝9(8~18)・溝10(19・20)内出土遺物





第23図 第2次調査区 溝10(1~9)・溝14(10~15)内出土遺物



第24図 第2次調査区 凹地1内出土遺物

の甕形土器では小さくくの字状に折り返した口縁部のもの2種類があり、寸胴状のものと円く体部がふくらむものとのである。第20図15は小型の台付鉢であろうか、外面はナデ調整で内面にミガキ痕がある。第21図1は器台形土器脚部で端部の折り返しと擬凹線文の肥厚帯を象っている。上部にしまりがある。同図2は口頸の這う部をやや外反させる長頸壺形土器で、頸基部に刻み目の突帯があって、体部は横ふくらみとなって比較的大きめの平底となる。内外面ともナデ調整と思われる。

溝5 B 溝5に接して在ったもので、この溝も不鮮明であった。深さ約0.15mで内充土は溝5と同様であり、別溝としたが明証はない。出土遺物は第15図3～5である。4の外面上部にはミガキ・下半と内面にはナデ、5の内外面にはミガキ調整痕がある。

溝6 A-6区隅にある小溝で、幅約0.2m・深さ約0.1mで両延長線部が中世遺構によって切られている。内充土は褐色土で第21図6の土器片1点が出土した。小さくくの字状に外反した口縁部の端部に面取りがあり、体部の最大径は下半部にあつて重心の低い甕が鉢形土器である。

溝7 A-5・6区で主にある弧状の溝で、中世第2号溝に切られている。深さ約0.1mで茶褐色土が内充していた。第21図7～13の8点の遺物が出土した。甕形土器ではくの字状口縁から端部を肥厚させた幅狭の口縁帯に刻みが施される7、肥厚しない8。壺形土器ではくの字状口縁とした端部を中窪みの口縁帯を象る9、比較的長めの口頸部をもつ直口壺風の10とがある。

溝8 A-5区中の溝で、不定形なものとなるが大局的には弧状をとっている。幅約0.8m・深さ約0.2m前後のものであつたと想われる。内充土は暗茶褐色をなし、第22図1～7の土器が出土した。1はくの字状口縁として端部が上下に肥厚する甕で、外面では肥厚帯以下よりハケ状具調整痕がある。2は直立気味とする有段の口縁部をもつ甕形土器であり、口縁帯外面は無文である。3は頸部より内湾気味に外傾する口縁部の外面下端が肥厚する壺形土器となろうか。口縁帯は無文である。4は装飾器台・7は環状の把手が付く土器である。

溝9 A-4区に主としてある不鮮明なものであつたが、東壁側は直線で、西壁側は弧状をなして検出された。比較的明瞭だった中央部での幅員は約0.6mで、深さ約0.2mである。内充土は上面部で淡褐色をなして下半部でやや暗さが増していた。出土遺物は以外と多く、11点の出土があつた。第22図8～18である。口唇部を細長く先細りさせて幅広い口縁帯とする複合様口縁甕形土器が大多数を占める。10の口縁外面は摩耗して明瞭ではないが擬凹線文が施されているようである。15は、頂部が窪んで小さく外反したつまみとなる蓋形土器で、内外面とも赤彩痕が残っている。16～18は壺形土器かと思われる。16の外面口唇帯に擬凹線文・17の口縁帯は無文である。18は円みのある体部から、弧状に急反転した口頸部としており、稜線がある。

溝10 B-5・6区にある弧状となる溝で、延長上にある溝8とは連結していない。幅約1m・深さ約0.2mで、内充土は淡褐色～暗褐色の漸移的な濁りをもっていた。出土土器は、第22図19・20と第17図1～9である。外面口縁帯に擬凹線文を施すものと無文帯の甕形土器がある。第23図2・3は鉢形土器と思われるが、3では台付鉢の可能性もある。5・6は大・小の蓋形土器で頂部面はほぼ平坦としている。7は高坏形土器の比較的浅い椀状の体部から、くびれをもつて外反する長い口縁部がついており、くびれ部では明瞭な稜角をもっている。脚部は幾分か棒状

をとって、途中で八の字状に開くものようである。外面にミガキ痕がある。

溝 14 B-4・5区、C-4区にまたがった不整形なもので、染み状の濁りとして捉えていたが、発掘の結果において比較的大きめの土器片が出土した。深さは0.1～0.15mで、土坑ないし窪地とすべきかもしれないが、一応溝として取り扱った。第23図10～15がここよりの遺物である。10・11は体部から口頸部にかけて器肉をほぼ一定に保ち、頸部と口縁基部の稜角はあまり明瞭とはならず円みをとらせている。12・13は内湾気味のくの字状口縁端部を、内傾させた面取りがあるが、口唇端内面への肥厚は極く小さい。14は内湾する体部からゆるく外反気味で口縁端に移行する坏部と、八の字状にゆるやかに開く脚部とする高坏形土器で、脚部部の穿孔は3つである。15は浅い椀状の体部からくびれをとって長く外反させた口縁部としている。くびれ部分はないから、稜角を明瞭にとっていない。内外面ともミガキ痕がある。

溝 16 D・E-6区にある小溝で、幅約0.3m・深さ約0.2mの輪郭の明瞭な溝であった。内充土は黒褐色土で、土器細片2点が出土しているが図示しなかった。

溝 17 E-4・5区中の、中世第1号溝に切断されているが矩形状となってある溝で、幅約0.15m・深さ0.1mをなす。溝16とは似たもので、あるいは竪穴住居跡の周溝であるかもしれない。内充土は黒褐色土であったが内包された遺物はなかった。

凹地 1 A-5区で中世第11号井戸の東に接し、第3号溝の南に限られる小範囲であるが、本来は遺構であったと思われるが正確に発掘できなかった。上面よりの深さは約0.2mで、暗褐色土の掘り下げによって完形品を含む大振り片で遺存した6点と小片の2点が出土している。第24図1～8が凹地中の土器である。2の体部外面にはヘラ状具によるキザミ目文がある。3・4の口縁帯外面は擬凹線分が板状具ナデが明瞭ではないがかすかな痕跡がある。7の口縁部分は欠けており、8と同様のものとなるか不明である。8の脚部内面を除いては赤彩がある。

### 第3節 平安時代～中世の遺構と遺物

第2次調査区で検出した平安時代から中世にかけての遺構には、床土を含めて耕土即下より確認できたものと、これよりやや下部で検出できたものがある。基本的には下部検出のものは当該期での古段階の遺構に想定されてくるが、検出遺構とその大多数は、耕土下より約10cm前後の濁り（包含層とした）を除去した面で確認できたもので必ずしも構築期別として把握できたものではない。

堀立柱建物3棟相当を検出したが井戸跡の総体あるいは散在的狀況からみれば、数倍の建物跡が検出されても不可思議ではない。調査の初期段階で第1号堀立柱建物（東端の調査区）を発見しており、東西・南北方向にある区画的遺構とそれぞれに規制的で有機的な状況をもっているとの、ある程度の見通しと、井戸・土坑・竪穴状遺構との生活単位的な遺構の存在関係の推測のなかから検索をくり返してきたが明らかにできなかった。しかしながら、まだ桁列・梁列として明示できない柱列状ピットも幾分存在しており、建て替え等を含んで相当の建物が本来この遺跡のなかで生起していたものと考えられる。

井戸跡としたものは総計20基である。地点によってそれぞれ厚薄をもつが検出面よりの下層の一般的層堆積としては、面より約0.2~0.3m下で黒色~青黒色の強粘質土約0.4mの堆積があり、この下は約0.5mの灰白色の強粘質土があって以下1m以上（未確）は砂層が続いている。この砂層より豊かな浸透水があって、砂層上位はやや荒めの粒子であるが下位では微粒となって締りも同えた。この20基の内、砂層にまで穿たれていたものが8基であり、その他は強粘質土に留まるものであった。従って、井戸跡としたものの判断の一応の基準は、砂層に到達した深いもの・到達していなくとも大型で円筒状か方筒状の深さのあるものをこれにあて、その他参考素材としては井戸部材や断片、内充土の類似状況などによっている。しかし、比較的浅くて土坑とした小型のもの内にも灰色系の湿潤な内充土を伴ったものや、坑底を更に一段皿状に窪まるものもあり、後者の例では、小松市佐々木アサバタケ遺跡（県立埋文センター調査・昭和六十三年報告書刊行予定）で曲物筒を収めた溜め井と考えられるものの発見があって、同種の井戸（同上担当者・垣内氏教示）となる可能性が強いものも土坑として区分したものもあり、井戸としたものにも土坑とすべきものがあるかもしれない。

堅穴状遺構としたものは5基である。古代の堅穴住居跡に似た平面形態となるものをこれに充て、想像としては比較的軽易な上屋を設けた作業小屋ないし納屋状のものを描いているが、支柱となる柱穴の痕跡は必ずしも明瞭に捉えておらず、また、こうした遺構であるかも含めて再検討されるべきものとして掲げておきたい。

土坑としたものは、先の溜め井の可能性をもったものも含めて計20基である。建物跡として抽出できていない多数に点在する柱穴状小ピットを除き、これより大きめで深みのあるものをこれに充てた。また、大振りのもものでは坑底が円く、鉢ないし皿状となっているものを、堅穴状遺構としたものと区別してここに含めた。用途・機能的には個々に異なる多様なものが含まれていると思われるが、これを一括として取り扱っている。

溝跡は、第2次調査区内ではL字状となって存在する3条の溝と、直線となって在る2条の計5条によってほぼ要約されるが、個々の溝の前後関係についてはほとんど明らかにできていない。が、調査区北端部にある第1号溝が耕作土（床土含）下での調査の初期段階より確認でき、他の溝跡に比して最も湿潤な青灰色をなしたものであり、調査区中では最終段階まで機能的にあったものと想われる。これらの溝は全て流水性に富むものは無く、滞水性のあるものが主である。

#### 第1号堀立柱建物（第25図）

D-7・8区で検出した3間(7m)×2間(5m)で、床面積35㎡の堀立柱建物である。主軸方位はN-85°-Wを測る。桁行の北側柱列東より第1番目の柱穴は確認できていないが、柱筋・柱間寸法は比較的整っている。桁行は南側柱列の西より順に東側へ、1.6m・3m・2.4mを測る。梁行は西側柱列で、南より2.5m・2.5mとなる。柱穴堀方は約0.8mの略円形をなすものも含まれるが、総体的には0.4m程の円形のものほとんどである。堀方0.8mのものは、第23号井戸上の中央に穿たれているもので地盤的な要因によるものか特殊な状況のためとみられる。柱穴の深さは検出面より約0.2m~0.3mである。なお、関係遺物としては第41図に掲げた、建物内縁の南西隅で石臼（上臼）1点があり、礎石として置かれたか用備品としてあったかは判らないが

地山面に接してあった。第41図2は行火であるが、石臼に隣接して第20号井戸上面に在った。20号井戸は第1号建物構築時には埋まってしまっており、上面には整地土と想われる黄色～白色ブロックが敷かれた様な状態で覆っており、建物に伴っていた遺物の可能性が高いのでここに含めた。石質は軽石凝灰岩で、削り抜きによって器高約15cm前後とし、奥行約9cm・底に高さ約1.2cmの削り出し四足を隅に付けている。外面は平滑となるが、内面壁は粗くノミ痕を残している。

### 第2号堀立柱建物（第26図）

B・C-4・5区で検出した3間(6.8m)×2間(5m)の床面積34㎡となる堀立柱建物と考えるが、東側にもう1間延びる可能性もある。主軸方位はほぼE-Wにとっている。柱筋がとおり、柱間寸法もほぼ整っている。桁行の北側柱列の西より順に東側へ、2.6m・2.6m・1.6mを測る。可能性としてはこれの延長線上の東側1.0mのピットが当たるが、南側柱列の対応ピットでは2.3mにあたり、これを含めた場合約45㎡弱の床面積となる。梁行列では2.5m・2.5mの間隔をとっている。柱穴の径は約0.2mと小さいもので、検出面よりの深度も0.15mを超えない浅い遺存状態であった。この周辺では包含層を含めて遺物が乏しく、時期は不詳。

### 第3号堀立柱建物（第27図）

D-4区、第2号建物跡の北側約10mの位置で検出した堀立柱建物であるが、桁行、梁行ともに対応が得られておらず、規模については不詳である。主軸方位はN-88°30'-Wにあり、第2号建物にちかい方位をとっている。軸線にのる柱穴では、北側桁行列とみられる3間(5.5m)・東側梁行列の2間(3.8m)であり、これに限られるとすれば約21㎡の床面積となり、3棟中で最も小型の建物となる。柱間寸法についても他のものより間隔が短く、東北端のコーナーにあたる柱穴より西に向けて1.6m・1.9m・2.0m、南側に向けて1.9m・1.9mとなっている。柱穴は直径20～30cmの円形で、検出面よりの深さは約10～15cmと浅く、この付近より第2次調査区の西南方向にかけて徐々に浅くなっており、遺構の分布状況も乏しくなっていることからあるいは後世の削平によって消失しているためかもしれない。

### 第1号井戸（第28図）

第1号堀立柱建物の北西に接して検出されたもので、平面形態はいずれも円形の2段掘りとなっている。上段部は径約2m・深さ約0.8mで、下段は径約0.6m・深さ約1mを測る。土層断面の観察では6層区分として確認しているが、円筒状となっている下半部のあり方については大把みの区分に留まっている。上段部分はレンズ状の堆積であり、1層は淡茶褐色・2層は暗茶褐色のいずれも砂質土である。3層は、2層に黄褐色の粘性土ブロックが含まれ、4層は黒褐色の強粘質土となっている。5層は黒褐色土と砂の混合土で、腐食物が目立って含まれていた。6層は濁った砂層で微粒の腐食物が認められた。土器類は、上段部内充土の礫に混じって須恵器・土師器の他、第42図10の肩部に把手のある青白磁片、11は肩部に連子文のスタンプが施された加賀あるいは越前とも想われるもの、12・13は土師質土器皿の大小の出土があった。

### 第2号井戸（第28図）

第1号建物の南側約10mの位置で発見されたもので、平面形態は径約2.1mのほぼ円形をなしている。第1号井戸ほど明瞭ではないが2段状に掘られており、下部には曲物製井筒が遺存して

いた。内充土は、第1層・第2層とも茶褐色系のよく似た層で、2層は粘性を帯びている。3層～7層は暗灰色の粘質土であり、土質的には同様のようであるが炭化物粒を線状にかんで中央部に沈み込む線形がたどれる。8層は青灰色粘質土で9層の灰白色砂とともに裏込めに用いられたと想われるが、実測不十分のまま崩落に遭って曲物筒の取り上げおよび底面未確認のままとなった。遺物は、暗茶褐色粘質土中よりした第42図14～18がある。14～16は越前とみられる鉢で、15の外表面に墨痕がある。17は瓦質の土器で肩部に耳状のつまみが付されている。18は目がほとんどすり消えた下臼で、径約32cm・厚さ約8cmで外面と芯部にノミ痕がある。

### 第3号井戸（第28図）

第1号建物跡の西に接して第1号井戸に並んで発見されたもので、隅円方形とすべきか略円形状をなす径約0.8m・検出面よりの深さ約2mの細長い筒状のものである。土層の観察は充分にできていないが大きく2層に区分しており、底面より約0.5mの遺物を内包した暗茶褐色土（腐食物を含む）より上では砂質の黄褐色土とみており、湧水と作業空間の狭さからヘドロ化したなかで取り上げた遺物には、打ち欠かれたと想われる石製品が多数出土した。第43図～第45図がここよりのものである。第43図2の下臼では8分画の比較的太い目で、径約32cm・厚さ約12cm。芯孔は約3cmの円形状となり、底の抉りを深くとっている。第44図1は茶臼の下臼で、受け皿径、約33cm、台部端はややすぼまる径約29cm、臼面径約18cm、臼高2.5cmで臼面はほぼ平坦で8分画とみられ目の刻み直しがみられるが、これも消えかけている。芯孔は1.5cmの方形をなし、この外で円形の溝がある。台部底面の抉りは浅く、この部分と受け皿体部外面ではノミ痕が残されている。同図2と第45図1は火山礫凝灰岩製の片口鉢で、それぞれ一石からの割り抜きである。先の2では内外面ともにノミ痕が残されている。2・3は行火片で別個体のものである。

### 第5号井戸（第29図）

A-6区で検出した片側が2段状に掘られた井戸跡である。平面形態は楕円形をなし、上面で長軸約1.65m、短軸約1.5m・底面の長軸は約1.1m、短軸1mである。検出面よりの深さは1.6mとなって僅かに砂層に到っている。内充土は、灰褐色土に地山土ブロック多量に含まれた第1層と、地山土ブロックを少量含んだ暗灰色第2層・3層では黒褐色強粘質土となるが、斜傾堆積下端では4層の灰褐色粘質土との混層状態となっている。下半の4層は単一層と想えるが充分観察することができなかった。遺物は内面黒色の土師器と第46図2・3のハシが出土した。

### 第6号井戸（第29図・第76図）

5号井に接した位置で発見した2段堀状となっている井戸跡である。平面形態は径録2mの円形で、底面は未確認であるが径約1m前後の円形のもので推測しているが、内部より横椀木と思われるもの1本の出土もあり、井側に縦板組が使用されていたとすれば方形となろうが明らかでない。内充土は地山土ブロックを混入する暗茶褐色の第1層、地山土ブロックと炭化物粒を少量含んだ黒褐色粘質土の第2層、黒褐色粘質土の第3層上半部までは確認できているが下半での詳細は不明である。この下半部より、上部より沈下した2段を含めて計3段分の曲物製筒が遺存していた他、第46図4～25の遺物が出土した。4は糸切底の皿状のもので、5～18は土師質土器の皿類である。19は菊花のスタンプがあり、砂粒を多く含んで暗灰色をなす。20は径約33cm・厚さ

13.5cmに復元される上臼である。21～24は青磁で、24の高台～外底面の一部にかけて緑灰色をなす釉があり、素地は灰色を帯びて緻密である。25は口径約25cm・器高12cm前後となる鉢で細かい砂粒を多く含んだ胎土で、淡褐色をなしている。

#### 第7号井戸

B-4区の第2号溝に複合して在った井戸跡で、溝内の発掘によってその存在が判った。が、発掘途中の溝内に留まる雨水の侵入等で壁体が崩落してヘドロ状となり完掘できていない。一部の発掘での出土遺物は第47図1～4である。土師器・須恵器の他、2の土師質土器と、4の口縁部内面に波状文を施した播鉢がある。おろし目は7条単位で色調は暗灰色である。

#### 第8号井戸（第29図）

E-5区、第1号溝に近接して在ったもので、検出面では不整形であったが隅円方形プランとなった。長軸約2.5m・短軸約2.3m、底面は長軸約1.7m・短軸約1.6mであり、主軸方位はほぼ南北方向にある。土層の観察では、灰褐色第1層、明灰褐色粘質第2層・暗灰色第3層・暗灰色粘質第4層となるが、4層は下部に従って明るさが加わっていく。第2層中で礫数点と五輪塔水輪部片と陶器片（第47図5・6）が混じって出土した。なお、坑底は砂層に到っていない。5は褐釉のある口縁部片・6は径約28cmで、前面には梵字のバンが浅い葉研堀りで刻まれている。石質は凝灰岩で、無造作に打ち欠き投排棄されているように想われる。

#### 第9号井戸（第30図）

C-5区で検出した平面形態が円形となるもので、径約2mとなる。上面より約1m掘り下げた時点で土層図を作成する予定であったが雨水に浸り崩落し、以下も、ヘドロ状となったものを掘り下げているので堆積状態は不明であるが、検出面で一部確められた礫群が坑中央部に向けて流し込んだ様な柱状の内包があり、この群中には五輪塔下に置かれたものと思われる台座石・水輪なども含まれていた。また、上面より1.8m下では曲物製筒が発見されたが、湧水と側壁の崩れで取り上げができず、底面の確認もできていない。坑内部よりの出土遺物には土師質土器・中世陶器片がある。第47図15の緑色凝灰岩の台座は上面幅18cm、下面幅25cm、高さ約5cmの方形体であったと想われる。上面にはノミ痕が残るがなり平滑で、花卉の堀り出しも明瞭である。第48図1の水輪は凝灰岩製で径約30cmで前面に月輪が残るが梵字はなくなっている。

#### 第10号井戸（第30図）

C-6区、農道際で発見した径約2m強の円筒状のものである。内充土の第1層は明灰褐色泥砂土、第2層は明灰褐色粘質土、第3層は灰褐色土、第4層は暗灰褐色粘質土、第5層は淡灰色砂質土、第6層は黄灰褐色土で、これより以下の第7層は地山土によく似ているがやや濁りがある程度の黄茶褐色土であり、検出面より1.2mまでは確実に壁体との相違が認められるがこれ以下では漸移的に明るさを増して不明瞭となるため、-1.6mを底面とすべきかの確証がない。遺物は少ないが、青磁片など出土がある。第48図3・4は同一個体かは不明であるが透明感のない緑灰色の釉となる青磁碗で、細かい貫入がある。素地は灰色をなして堅緻である。4の釉は高台の外側～内側一部にまで残されている。

#### 第11号井戸（第31図・第77図）



A-5区で検出したもので、5・6号井戸に近接して在る。第2次調査区内では唯一の縦板組が遺存している。堀方の上面は径約3.2mの略円形で、深さは約2.5mである。縦板組の井側は外縁で約1mの方形組となし、真北より東側へ約17°のずれをもっている。一面を2枚で充てる面と2枚に幅狭い板で補充した面とがあり、これを目違い柄の2段の横棧間に支柱を挟む組み合わせとしている。なお、この縦板間の継ぎ合せ部分には外側より補充板があてられていた。この他、側板中の一部には側面にV字状の山・谷の柄をつくるものも認められるが、全てではなく、また、板材の厚さ・長さも不揃いとなっており、別井戸よりの転用と補充によって新たに組み合わせられた可能性が強いように思われる。伴出遺物には堀り方埋土中より出土している土師質土器・青磁などがあり、第48図5～11の遺物である。5～9は土師質土器皿・10は鎬蓮弁文碗で、釉は明緑灰色をなして素地は灰色白でやや粗い。口径は18cmで、直線的に先細りした口唇となっている。11は内面黒色の土師器である。

#### 第12号井戸（第30図）

C-3区で検出した径約2.2mの不整円形をなす。検出面よりの深さは最深部で約1.5mとなり、底面は傾斜した面になっている。底径は約1.2×1mの楕円形状となて粘質層中で止まっている。断面観察はできていないが、内充土上層部より土師器・内面黒色土器・土錘の出土がある。第48図13～16は高台付椀で、胎中に砂粒を多く含む14・16と含まない13などがある。外底面はナデ調整を行っている。17・18は内面黒色の高台付き椀で、18の内面ではミガキ調整の下に削りが伺える。外面には体～底部にかけてナデ調整である。胎中には砂粒が少量含まれている。色調は淡褐色である。19は長さ6.5cm・径3.8cm、重さ84.9g、20は長さ6cm、最大径3.7cm・重さ55.3gの土錘で、孔は円形であるが両端で径が若干異なり、樹枝か竹管に巻きつけたようである。胎土中には砂粒を含み、乳褐色をしている。

#### 第13号井戸（第32図）

D-2区より発見した井戸跡で、平面形態は不整の楕円形状なしている。長軸で2.6m、短軸で約2.4mであり、底面では円形部分に張り出し状部分が備わった形態をもって、長軸で約1.3m・短軸最大幅で約1mとなる。内充土は、明灰色粘質の第1層に灰色粘質土の第2層、暗灰色粘質の第3層、暗灰褐色粘質土の第4層からなり、いずれも湿潤な土層となっている。3層上面から3層中には礫が内包されており、4層中では木片(屑)も認められているが、その他の遺物には須恵器・土師質土器・青磁・中世陶器の出土がある。坑底は砂層に達していない。第49図1～9がここよりの遺物で、1～3は須恵器、4は土師質土器、5・6は口縁外反の青磁碗で口径14.7cmである。釉は淡緑灰色をなし、素地は暗灰白色で堅緻である。5・6とも破片断面には漆がのこっている。7～9は越前と思われる播鉢と甕で、7はおろし目の上辺部分で一条の凹線が巡り、おろし目は幅約3.3cmで11本が認められる他、櫛状目具による十字の刻文がある。外面の体部～底部にかけてはナデ調整としており、付高台とは思えないが高台とする意識がありそうである。8は推定口径約52cmで、外面はナデ調整が伺える。2点とも砂粒を多く含み、7は灰色で8・9は橙褐色をなしている。

#### 第14号井戸（第32図）

13号井戸の北側で、第1号溝に一部切られる状態で検出された。平面形態は大きな楕円形をなして、長軸で約3.1m・短軸で約2.9mとなるが、底面は小さなもので、長軸で0.8m・短軸で0.5mを測る。検出面からの深さは約0.9mと浅く、内充土も単純な3層からなる灰色系粘質土で、上より下部に従って濁りが強いものとなっている。遺物は、第50図1の外底面に糸切痕が認められる小皿が出土した。その他では腐食を滞びた木片がある。

#### 第15号井戸（第33図・第76図）

調査区の北西隅E-1区に在る井戸で、上面で径約1.4m・底面で約1mの円形をなして、深さは約1.4mである。当初の検出面では染み状となって不明確なものであったが、部分掘り下げを行った結果出現した。内充土は上面より約0.4mが地山土にちかいやや濁りのある層で、これより底面にかける裏込め土には粘質の黒褐色土が充てられていた。内部より、半截の削り抜き材の組合せ側があり、下端の筒底内に基底部を円形に固定させる板材が交差して組まれてあった。この板材上には口縁部の欠かれた双耳瓶が倒置状態で遺存していた他、上層部分より土師器の出土があった。なお、結合筒は木材の同一半截部分ではなく、異なった部位を組み合わせていると考えられる。また、粘層中で坑底が留まっている。出土遺物は第50図2～4で、2・3ともに内面黒色である。4は肩部～体部にかけて6条の凹線を巡らしている。

#### 第16号井戸（第33図）

C-6区で検出した小型の円筒状をなすもので、3号井戸と似た形態をなしている。平面形態は略円形の径約0.9～1mで、深さ約1.9mとなり砂層部に到達させている。内充土は全て灰色系の埋土で、第1層明灰褐色・第2層暗灰褐色・第3層暗茶褐色・第4層暗灰褐色粘質土・第5層暗灰色粘質土・第6層暗灰色粘砂土と観察している。第50図5～13の遺物は、この第6層中より出土した。5～8は土師質土器皿で、6・7の口縁部には灯芯油痕がある。10は雷文帯のある青磁碗で、下部に幅広の蓮弁が描かれる。釉は淡緑灰色で内外面とともにあらい貫入がある。素地は灰色を滞びて精良である。口径13cm。11は胎中に微砂粒を少量含む淡褐色をした播鉢で、おろし目は2・7cm幅で11条認められる。12は表面が黒色光沢となる瓦質土器で花瓶の脚台部と思われる。雷文・巴文・S字状のスタンプ文が巡らされている。外面ではタテ方向の細かなミガキが伺える。

#### 第20号井戸（第33図）

第1号堀立柱建物南側桁行列下で、これに接するが一部切られた状態で検出された5基（第20号～24号井）があって、この内の1基である。上面は不整の円形状をなし、径約2mの掘り方をもっていたものであろう。内部には段状に掘られており、底面では楕円形状をなす長軸で約1.1m・短軸で約0.8mとなる。検出面よりの深さは約1.6mで、粘層中に底面が留まる。内充土は、第1層を黄灰色土とするが、当初この上部に粘性の白色と黄色のブロック混成土が不整の浅皿状のようになっており、1号建物建設時の整地土と考えて不用意に取り除いた結果出現したものである。第2層は暗灰黄色土、第3層淡黄褐色土、第4層灰褐色粘質土、第5層は灰褐色土に黄色土と黒褐色土の混土、第6層淡灰褐色土、第7層暗黄灰褐色土、第8層濁灰色粘質土、第9層は地山土に似た黄褐色土、第10層は濁灰色と黒色土ブロック含土と、以上は細かな充土となっているが、この下部では炭化物粒が目立つ暗灰色粘質土となる11層と、目立たない12層との区分としているが、

11・12層は基本的には同様のものであり、上部層に比して単純層となっている。遺物は、この上部層より礫に混じて第51図1の青磁碗片が1点出土している。外面には幅の狭い蓮弁文と、内面見込みにもヘラ描きされた花卉がある。釉は緑灰色をなして、素地は灰白色で精良である。

#### 第21号井戸（第34図）

20号井戸の東に接して在り、第1号建物南側桁行列の西より第2番目の柱穴がこの井戸跡埋土を穿っての構築となっている。また、21号井戸はこれに接した22号井戸を切った状況で検出された。平面形態は不整のものであるが、隅円方形を基調としていると考えられ、片側は2段となった掘り方となっている。上面での南北方向での長さは約2m・東西側約2.1mで底面での長さ約1.4m・1.3mとなる。内充土は灰色系の粘性土と記憶しているが、測図前に倒壊して不備となった。なお、底面は粘層で止まっており、内部より第51図2・3が出土した。2は土師質土器、3は陶器である。釉は灰味がかかった緑色をなし、高台外面部までの施釉があって細かい貫入がみられる。外底面は削りがみられ、内底面では輪状の目痕が残る。

#### 第22号井戸（第34図）

21号井戸に一部切られているもので、平面形は円形とも隅円方形とも想われるもので、南北方向長約1.9m・東西方向長約2m、底面は2段状に掘り窪められた小さな長方形状面となって長軸約0.7m・短軸約0.5mである。内充土は5層として観察したが、いずれも灰色系の湿潤な層からなり、第1層淡灰色粘質土、第2層淡灰色粘質土、第3層灰色粘質土、第4層濁灰色粘質土、第5層暗灰色粘質土と区分した。出土遺物は、第3層上面～第3層中より出土したいずれも須恵器で占められている。坑底は上面よりの深さ約1mで、粘層中で止まっている。第51図4～10の土器である。5・7・8の外底面には墨書がある。4・5・6の外底面の調整ではヘラ切り後のナデである。6の内底面に十の字状の刻線が入っている。いずれも胎中には微砂粒を多量に含み、色調は灰色である。が、7はやや褐色気味となっている。

#### 第23号井戸（第34図）

第1号堀立柱建物の柱穴が中央上にある井戸跡で、平面形態が楕円形状をなした円筒形のものである。上面長軸側で約1.35m・短軸側1.25mとなり、底面では約0.9mと約0.8mである。深さは約1.6mとなって砂層中に到っている。内充土は第1層が暗灰色粘質土に淡褐色土ブロックが含まれ、第2層淡青灰色粘質土、第3層暗灰色粘質土となっており、3層下半については湧水が伴って観察が充分に行えていない。遺物の出土はなかった。

#### 第24号井戸（第34図）

23号井戸に接して在り、切り合い関係はない。平面形態では不整の楕円形状をなし、片側で2段の掘り方となっている。上面での長軸側長約2m・短軸側約1.8mで、底面は上面の長軸側で0.7m・短軸側で約0.9mとなっている。深さは約1.5mであり、砂層に僅かに到っている。内充土は締りの弱い灰色粘性土であったが崩れて図化できていない。内部からの遺物の出土はなかった。

#### 第1号竪穴（第35図）

A-7・8区にかけて在るもので、南側部分は未確認となる。平面形態では隅円の長方形をなすものと思われるが、東側部分では一段低く窪まっており、別遺構との複合であるかもしれない。

検出の当初では、多量の礫を内包して不定一土で埋まっており、不要物の廃棄場が埋め立て場のな状況をなしていた。これを全て取り除いた結果、東西方向長約9.4m・南北方向の約5m(+α)の平面形態と、床面より柱穴状ピットが出現している。この遺構内からは石臼片・石鍋片の他、中世陶器片も礫群と混在して認めているが、包含層中遺物に含めてしまっており個別に提示できなかった。第52図1～4は礫と混在していた石製品で、投棄的な状況での出土である。

第2表 第2次調査区内井戸一覧表

井戸番号	掘方規模			内部構造	出土遺物	備考
	上面	下面	深さ・底標高			
1号井戸	196 × 205 <sup>cm</sup>	56 × 56 <sup>cm</sup>	182 ・ 20 <sup>cm</sup>	不明	土師質土器皿、青白磁瓶 加賀甕?	内部構造は曲物積み上げであったと推定される
2号井戸	220 × 228	85 × 100	200 ・ 0	(曲物積上げか)	越前鉢、石臼、その他	上端が欠損した曲物1段遺存
3号井戸	83 × 84	68 × 70	200 ・ 10	不明	石臼、石製片口鉢、行火	底付近で植物遺体とともに石製遺物多く出土
5号井戸	148 × 165	100 × 106	160 ・ 40	不明	ハシ	曲物積み上げであった可能性あり
6号井戸	205 × 203	115 × 123	262 ・ -80	(曲物積上げか)	土師質土器皿多数、越前鉢・甕、青磁碗、石臼	曲物3段と横棧木2本出土。縦板組かは不明
7号井戸	—	—	—	崩落して不明	土師質土器皿、珠洲鉢	
8号井戸	256 × 248	180 × 176	165 ・ 34	不明	褐釉碗	板組井の可能性がある
9号井戸	196 × 204	(150×154)	(225) ・ (-25)	(曲物積上げか)	土師質土器皿、越前鉢 五輪塔水輪・台座石	曲物1段遺存。上部より多量の礫出土
10号井戸	200 × 218	(184×188)	(160) ・ 40	不明	青磁碗	
11号井戸	320 × 325	145 × 160	250 ・ -40	方形縦板組支柱横棧どめ	土師質土器皿、青磁	遺物は堀方埋土中よりの出土
12号井戸	230 × 230	112 × 102	148 ・ 48	不明	土師器碗(内面黒色を含む)	
13号井戸	277 × 240	128 × 97	102 ・ 80	不明	土師質土器皿、青磁碗 越前鉢・甕	
14号井戸	285 × 312	53 × 83	100 ・ 100	不明	土師器小皿	
15号井戸	140 × 144	98 × 90	140 ・ 48	丸太半截割抜き組合せ	土師器台付皿、須恵器瓶	組合せ筒井側の下端を板材により保持している
16号井戸	93 × 104	88 × 82	190 ・ 8	不明	土師質土器皿、青磁碗 越前鉢	
20号井戸	202 × 237	80 × 108	140 ・ 26	不明	青磁碗	内部構造は曲物積上げであったと推定される
21号井戸	200 × 210	140 × 130	97 ・ 103	不明	土師質土器皿、珠洲鉢	
22号井戸	192 × 190	52 × 74	100 ・ 100	不明	須恵器坏・碗・皿・鉢・瓶	
23号井戸	125 × 133	74 × 96	160 ・ 35	不明	なし	
24号井戸	175 × 204	67 × 78	150 ・ 45	不明	なし	

### 第2号竪穴（第36図）

B-6区で第2号溝の北に接して在る竪穴で、平面形態は隅円長方形をなす。上面での長軸は約3.5m・短軸で約2.8m、底面では約3.2m・約2.2mである。深さは遺存が比較的良い西側で約0.2mである。内充土は暗茶褐色土の単一層となっており、ここより石臼と砥石を含む礫の点状があった。主軸方位はほぼN-90°-Wにある。柱穴等については不明である。第53図1・2がこの遺物で、1の上臼は臼面径約33cm、高さ約15cmを計る。臼面は平坦となって目の過半は消失している。芯棒孔は径約3.1cmで円形をなし、挽き木孔は縦横約4.5cm、奥行約5cmで台形状の抉りとなっている。石質は火山礫凝灰岩である。2は砂岩で、長軸の四面が使用されてそれぞれに中窪み状となっている。端部には自然面が残されており、自然礫より使用しているようである。

### 第3号竪穴（第36図）

C・D-1区で検出した隅円長方形をなす竪穴で、上面での長軸長約4.8m・短軸長3.8m、底面では約4.3mと3mである。検出面からの深さは、北半部が幾分深くなっており約0.4mとなる。内充土は3層に観察され、第1層灰黄褐色土・第2層灰褐色粘質土・第3層暗青灰色強粘質土となり、床面には鉄分の沈着によると想われる固い部分が比較的広く認められた。遺構内出土遺物には土師質土器と中世陶片がある。主軸方位はN-20°-Eにある。第54図1は菊花の印刻に格子の部分とみられるものが伺える体部片で、茶灰色をなして細砂粒を含んでいる。2は茶灰色をなした土師質土器で、外底面はやや円みをもっており、ナデ調整である。

### 第4号竪穴

C-1区で3号竪穴に接して在った。平面形態では北側が方形で南側が円形状となった不整の形態である。長軸側長約6m・短軸側での最大幅約4.5m、深さは約0.25mを測る。内充土は淡茶褐色をなし、地山土に幾分濁りが認められるという判断で発掘しており、当初は遺構とすべきかに迷うものであったがここより土師質土器・青磁・中世陶器片が出土した。方形にある北側の遺構肩口の稜線を軸にとつての主軸方位はN-77°-Wにあり、第54図3～7がこれである。3は緑灰色釉がのる青磁碗片、4は高台径4.5cmで底部より直線的にのびる体部となっている。釉は淡緑灰色をなして、内面から外面中程まで施釉されている。素地は淡灰褐色をなして比較的密である。内面には目痕が残っている。5は土師質土器で内面口唇部にススの付着がある。6・7は凝灰質の行火で、同一個体かは不明である。

### 第5号竪穴

C・D-2・3区るまたがる隅円長形状をなしたもので、検出面よりの深さは約0.1m～0.05mと極めて浅く、単に窪地であった可能性もある。第4号溝とは重複関係にあるが、切り合いの観察では全く不明のままとなった。この凹地内より第54図8の灰釉盤片の出土があった。

### 第1号土坑（第37図）

D-7・8区中、第1号掘立柱建物に重なりをとった位置で検出された大振りの土坑である。建物に伴うものかは不明で、同一面より発見されている。平面形態は隅円の長方形で、長軸で3m・短軸で2.4m、坑底はゆるやかな円みがあって長軸で2.6m・短軸で約1.9m、検出面からの深さは約0.25mである。主軸方位はN-7°-E前後にある。内充土は灰茶褐色の単一層であ

た。遺物は、第54図9の行火の蓋片である。

#### 第2号土坑（第37図）

D-7区中で検出した。第1号建物の西に近接して在る小型の土坑である。平面形態は円形で、上面径約0.75m・底面径約0.55m、深さ約0.6mとなっている。内充土は淡茶褐色土の単層で、礫3点が内包されていた以外に土器類の出土はない。

#### 第3号土坑（第37図）

B-7区で検出。第2号井戸の南に近接して在り、平面形態は胴張りの楕円形状をなす。長軸1.4m・短軸1.35mで底面長軸0.95m・短軸0.85m、深さ約0.7mである。内充土は中央に窪んだ層堆積となる6層に観察した。淡茶褐色第1層・暗茶褐色土に黄褐色土ブロックを含む第2層・暗茶褐色粘質の第3層・暗灰白色粘質土第4層・暗灰色粘質土第5層・暗灰色粘質土に地山土ブロックを混じた第6層となっている。坑内からの出土遺物は、第54図10～12の土師質土器皿・白磁碗の他、三彩盤体部片が出土している。同図12は口ハゲの印花碗で、露胎部は茶褐色をなして以下は淡白灰色となっている。内面の印花は白く浮きてた状態となっている。

#### 第4号土坑（第38図）

B-7区で検出した。第2号溝の東側肩部に近接して在る小型の円形土坑で、上面径約0.8m・底面径約0.6m、深さ約0.7mの筒状となっている。内充土は灰褐色土で、坑中より土師質土器・中世陶器の出土がある。第55図1は片口をもつ小鉢で、体部内面をナデ、外面は体部～底部にかけてケズリのままとしている。口縁部は輪花状となって波状のしぼりが行われている。色調は暗茶褐色をなして、胎中には砂粒が多量に含まれている。

#### 第5号・6号土坑

2基ともA-6区に在って、現状使用中の生活排水跡に接した調査区南端に一部分を検出したが、調査区壁体の崩れもあって下部への発掘を行っていない。あるいは井戸跡である可能性もあるが未確認な部分が多く、単に土坑として掲げたのみである。出土遺物はない。内充土は5号坑で暗茶褐色土・6号坑で黒灰色土であった。

#### 第7号土坑（第38図）

A-5区で検出した小型の土坑であり、6号井戸と11号井戸の間地点に位置している。平面形態は楕円形で、2段状に掘り窪めてある。上面での長径約0.9m・短径約0.8m、底径で0.5mと0.4mで深さは0.3mである。内充土は暗茶褐色をなして上面で礫1点が包含されていた。

#### 第8号土坑（第38図）

A-5区と4区の境界線上にある円形の小型土坑である。上面径約0.9m・底面径約0.7mで、円みをもつ底となっている。内充土は淡灰色粘質土に茶褐色土ブロックを多量に含んだ第1層と、灰色粘質土に淡黄褐色土ブロックが含まれる第2層とに区分でき、第2層は凸レンズ状の埋土となっている。出土遺物はない。

#### 第9号土坑（第38図）

8号土坑の北に並んである中型の土坑で、平面形態が楕円形状をなしている。上面で長軸方向約1.3m・短軸方向で約1.1m、底面では約1mと0.8mとなる。内充土層はほぼ平坦な堆積状態

をもち、第1層淡灰色泥砂土・第2層淡灰色粘質土・第3層灰色粘質土・第4層暗灰色粘質土となっており、第2層～第4層は湿潤な層である。遺物は土師質土器片があったが図化できていない。

#### 第10号土坑（第38図）

A-4区で発見した円形で皿状をなす土坑で、径約1m・深さは最深部で0.1mである。内充土は淡褐色土に炭粒が多量に含まれており、坑底は焼土化にまで至っていないが薄い灰層がのっており、火が用いられた坑と考えられる。土器類の伴出はない。

#### 第12号土坑（第38図）

B-5区で検出した隅円長方形となる大振りの土坑であるが、皿状の浅いものである。第2号溝の埋没後に構築使用されており、坑底は部分的に焼けた状態となっていた。長軸方向で約3m・短軸方位で約1.8mで、底面では約2mと約0.8mを測り、深さは0.1mの規模である。内充土は暗茶褐色土と底面に薬灰かと想われる薄層があった。土器類の伴出はない。主軸方位はN-90°-E・Wにある。

#### 第13号土坑（第39図）

B-3・4区に在り、第2号溝と重複して検出された大型の土坑である。平面形態は隅円長方形をなして長軸で約5.2m・短軸で約3.3mである。底面は椀状の円みをもって面築成的でないが、長軸約4.2m・短軸約2m、検出面よりの深さ約0.6mである。主軸方位はほぼN-86°-Wにある。内充土は淡灰色～淡青灰色粘性土であったが漸移的变化となっており分層をしていない。出土遺物に中世陶があった。なお、2号溝に後出する土坑である。第55図5～7はいずれも小片で、5の体部内外面はナデ調整となるが外面は下地にケズリ痕がある。茶褐色をなして砂粒が多く含まれている。6は暗灰色の微砂粒を多く含む播鉢である。7は菊花のスタンプ文がある灰色をなした体部片で、微砂粒が多量に含まれている。

#### 第14号土坑（第39図）

B-3区、13号土坑の北に接してある円形で浅い小型の土坑である。径約1m・最深部で0.1mの皿状をなし、内充土は淡茶褐色であった。形状的には第10号土坑と似たものであるが、出土遺物などの発見はなく、坑底が僅かに遺存しているもののように想われる。

#### 第15号土坑（第39図）

B-4区、14号土坑の北に隣した隅円の方形をなす小型の土坑である。長軸方向で約1.1m、短軸方位で約1m、深さ約0.1mとなる。内充土は淡茶褐色であったが、この上面には炭粒がかなり含まれており、かすかに被熱した状況が伺えた。坑中より第55図8・9の遺物が出土した。9は土師器であるが、8は青磁椀である。釉は緑灰色をなし、素地は淡灰色で精良である。

#### 第16号土坑（第39図）

B-5区で検出の隅円長方形をなす中型の土坑である。主軸を真北方向にとり、長軸で約1.35m・短軸で約1m、検出面よりの深さ約0.1mである。内充土は暗茶褐色土で、伴出遺物はない。なお、第2号竪穴と隣接して基準方位を同じにとるが、併設的な遺構であるかは判らない。

### 第19号土坑（第40図）

D-5区で検出した、平面形態が隅円方形をなす大型の土坑で、第3号堀立柱建物の東側約3mに位置している。主軸方位はN-80°-Wにあり、上面での長軸は約2.6m・短軸約2.5mである。坑壁は碗状の円みをなすが、平坦状となる底面があり、長軸方向で約1.6m・短軸方向で約1.4m、検出面よりの深さは約0.4mであり、内充土は2層に区分された。第1層は淡茶褐色土・第2層は暗茶褐色土と灰褐色の混土層で、第1層中より土師質土器皿・青磁碗片・瀬戸卸し皿・天目碗・珠洲播り鉢の出土があった。第55図10~14がここよりの遺物である。10は内傾の口唇面に波状目を施こし、体内面では中上位より全面的に卸し目を入れた片口鉢で、内底面部が掘り減ってつるつると平滑になっている。外底面は静止糸切痕がある。胎内には砂礫が少量含まれ、淡灰色をなしている。11は表面が摩耗して、内外面ともナデ調整が部分で伺える土師質土器小皿で、底部より体部にかけて円みをもち、口縁部をやや外反気味にとっている。12は胎色が青灰色をなし、内外面ともに細かい貫入のある緑灰色釉となる青磁片であり、素地は精良で堅緻である。13は内面と、外面体中位程まで暗褐色の釉となる碗で、露胎の体下部はケズリのままとし、高台部ではナデが施されている。素地は淡茶色をなしている。14は内面と、外面体中位まで淡緑灰色の釉がある。外面体下位はナデ、底面ではケズリ痕がある。内底面の卸し目は太くてやや荒く、間隔も粗となっている。胎中には微砂粒が少量含まれ、淡茶色をなしている。焼成は良い。

### 第20号土坑（第40図）

E-5区にある円形でやや深さの伴う土坑である。径約1.4m・深さ約0.9mであり、坑底部は段状に更に掘り窪められた様な形状をもっている。内充土は7層に観察され、いずれも灰色系土層からなり、第1層は明灰褐色土・第2層明灰褐色土に淡黄灰色土ブロックを含む混層・第3層明灰褐色粘質土・第4層暗灰色粘質土・第5層~第7層は暗灰色粘質土で下部層に従って順に色調が暗くなるとともに粘性も強まっている。坑内よりの出土遺物はなく、性格についても類推材料に欠けるが、円筒状で深さのある土坑であることと、坑底は中央部を窪めていることなどは、井戸に通じたものがあり、溜め井の可能性もある。

### 第21号土坑（第40図）

D-6区、農道際で発見した隅円長形状の土坑で、断面は箱形をなしている。長軸で約1.1m・短軸で約0.9m、深さは約0.5mである。内充土は淡茶褐色土で、いずれも小片であるが内部より第56図1~3の出土がある。1は須恵器、2・3は青磁である。2は内面~高台部の外面にかけて緑灰色釉をもち、胎色は淡灰色となるが高台部を除く外底面は淡橙褐色を呈している。3は鎚蓮弁をもつ盤で、口系約21cm。釉は緑灰色で、素地は淡灰色をなしている。鎚はやや不鮮明である。

### 第22号土坑（第40図）

D-4区、第3号堀立柱建物の北に近接して在る土坑で、不整の円形というべきか楕円形状をなし、長軸方向で約1.4m・短軸方向で約1.2m、深さは検出面より約0.6mとなって坑底に円みのあるものである。内充土は細かく分層できて7層を数えるがいずれも粘性土からなっている。第1層明褐色土・第2層暗灰色土・第3層黄灰色土・第4層(2B)暗灰色土・第5層灰褐色土



・第6層暗灰褐色土・第7層濁灰色土の順となっている。坑内よりの出土遺物はない。

#### 第23号土坑（第40図）

E-4区検出の土坑で、22号土坑の北・第8号井戸の西に接して在る。平面形態は円形状をなし、径約0.8m・深さ約0.5mである。内充土は暗茶褐色土で、坑内より第56図4の石臼1点と木杭状木片2点が出土した。石臼は臼面径約31cm、高さ約9cmの上臼で、刻み目は消えて平滑的面となっている。原材料供給口径約4.5cm、芯棒孔径約2.5cm、挽き木挿入孔は縦2cm・横幅約4.5cm・奥行約4.2cmで、火山礫凝灰岩である。

#### 第1号溝

調査区北側の区割E列にある溝で、調査区に併せて東西方向にある溝が北西隅で屈曲し、農道下に続くようである。幅約2m前後で深さは、北川隅が一段深く掘られて最深部で約0.7mとなる部分があるが、この造作のない西側部分では0.2~0.4mとなっている。東西方向からみた主軸方位はほぼN-85°30'-Wにある。出土遺物は多く、第57図~60図がこの溝内より出土したものである。第57図1~9の鉢は茶褐色~淡橙褐色となる5・6を除いては暗灰色~灰色をなしている。胎中では砂粒を多く含む9、ほとんど含まぬ5・7、1ミリ大の砂礫を少量含むその他となっている。体部の調整では、外面にケズリを施した後のナデと観察される2を除いた他は、ナデ調整が伺える。口縁部に強いナデを施し、内面にできた稜線に添って以下に卸し目を刻んだ越前かと想われるものが多い。2は不明で、9は珠洲と思われる内底面の卸し目の摩耗が伺える。10は珠洲の大甕で、口径約41cmである。第58図は1~3が白磁碗片で、玉縁のものと同口径を露胎としたものがあり、2の素地はやや灰味を帯びている。4~10・19は青磁で、4・5は丸彫の粗略化した蓮弁文が巡る大小の碗で、素地は淡白灰色、釉は緑灰色を発して、5はやや色調に暗みがあって蓮弁も不鮮明となっている。6は外底面までの全面の釉で覆われている。7は見込みに花文と想われる印文があり、釉は緑灰色を帯びて内面と外面の高台部を覆う施釉となっている。8は輪花皿で、透明釉がや厚くかけられ暗緑灰色をなしている。施釉は高台部の外側から一部に内側と底面部に流れ込んでいる。内面にはへう描きの粗い花文様の施文があるが、見込み部分では不鮮明となる。9は無文の皿で、外面体下部を露胎としている。釉は透明感のある緑灰色を呈す。19は盤で、釉は透明感のある緑灰色をなしている。11~20は褐釉・鉄釉を施した製品で、11は外面体下部は露胎であり淡橙褐色を呈し、素地は白灰色で精良である。15は、高台畳付に回転糸切痕が残されて、高台部は露胎の淡褐色をなしている。16も外底面に回転糸切痕がある香炉で、釉は口縁部の内面上端部~外面体下部までに施され、露胎部分は淡茶色となっている。脚は三足になると思われる。12も同様の香炉であろうか。17は外面と、内面のくびれ部分まで黒褐色をなす釉が施されている。18は水注かと思われるもので、欠損した注口周辺に雲形か花文様の施文があり、この部分は釉が薄く白っぽい発色となっている。釉は飴色~黒色の不均一な感があり、内面にも釉がのっている。素地は白味のある淡茶色で精良である。20~22は灰釉陶で、21は口径約15.8cmの平碗である。釉は透明感のある淡緑灰色を呈して内面~外面体中位にかけて薄く施こされている。露胎部分は淡橙褐色をなし、素地は灰白色で比較的精良である。23~27は土師質土器で、大まかには3タイプがあるようである。28~32は加賀ないし越前焼と思われる陶器である。

いずれも灰色～灰褐色をなし、細砂粒が幾分含まれている。31は外面に細かな斜格子の押印、32は井桁内に菊花を組み合わせた押印であり、暗緑灰の降灰がのっている。石製品では第59図の石臼4点と、第60図の行火片5点がある。行火では全面に四窓の格子窓としたものと、長方形の一窓として削り抜いたものがある。格子窓とするものは天井部が抜かれて蓋が付くものとなる。また長方形一窓のものは平面形が方形ないし長方形をなすが、格子窓のものは背面を円くしたD字状の形態をなし、蓋もこれに併せたものとなっている。

### 第2号溝

調査区南側のA・B列区割で東西に走る溝で、B-3区でコーナをとって南に延びている。幅員は約2mで、深さは検出面より約0.6mが最深であり、底の傾斜は第1号溝と同じく不定となっており、通流水を主目的とはしていないようである。内充土は茶褐色とその下で灰褐色粘性土の2層からなり、1号溝に次ぐ出土遺物がある。主軸方位は第1号溝とほぼ同様のN-86°-Wにある。遺物は第61図1～21で、1・14が須恵器、2は雷文が描かれた青磁碗で透明感のある緑灰色釉は内外面ともに粗い貫入がある。素地は淡灰色を呈している。3は天目碗で、釉は黒褐色をなして内底面部と外面体下位の端尻が厚くなっている。素地は白灰色をなして精良である。4は越前焼と思われる小壺で、暗茶色をなしている。胎中には微砂粒および粗砂が多量に含まれている。5は外底面に回転糸切痕のある土師皿、6～12は底部から体部にかけてナデ調整の土師質土器である。13は陶質の硯と思われるもので、暗灰色をなして3ミリ前後の粗砂粒が少量含まれている。15～17は体部に施文、スタンプのある陶片で、格子と斜向線が組み合わされた16・格子地に菊花をあしらう17は加賀焼の可能性がある。18は暗灰色をなして、須恵器とも陶器とも判断のつかぬ瓦質様のもので、胎中には微砂粒が少量含まれて内面はナデ・外面は縦方向のハケ状具調整としたものである。19は淡橙色をなして胎中に微砂粒が多量に含まれている。調整は内外面とも板木口によるナデ上げでの擦痕が残されている。20は播鉢片で越前焼と思われる。21は口径約32cmの甕で、胎中には微砂粒が少量含まれていて淡灰色の焼き上がりとなっている。内面の肩部では指頭状押圧痕が伺えるもので、越前ないし加賀焼と思われる。

### 第3号溝

2号溝の南に、併走状となってある溝で、東側の調査区では捉えられておらず、西側では浅く細い溝として検出できた。2号溝の西約4mで南方に屈曲し、4号溝と重なるが、これとの前後関係は判らなかつた。また、2号溝とは検出時の直感的な観察においては3号溝が後出とみているが、土層畦の観察では追認できなかった。軸線の方位はN-85°-Wで、1・2・3号溝ともに同様の方位面をとるようである。この溝中よりの出土遺物は第61図22・23の2点がある。22は内面黒色の土師器で、高台部が丸いへラグリ様の形態をもつが、付高台か削り出しかは表面の風化・摩耗によって不明である。外面の色調は淡橙褐色をし、微砂粒が少量含まれている。23は土師質土器の皿で、底部・体部・口縁部の区分的なナデ調整としている。淡褐色をなして胎土・焼成ともに良好である。

### 第4号溝

南北方に向けて直線的にある溝で、区割りの2列～3列にまたがって延びてD区で止まってい

る。幅約1.8m・深さ約0.4～0.6mで、南北の中間部が深くなっている。内充土は茶褐色第1層と暗～濁茶褐色第2層からなっており、湿潤性では第1号に比べれば乏しいものであり、早期に埋まった感がある。軸線の方位はN-9°-Eであり、陶磁類の出土はなかった。

#### 第5号溝

4号溝の北端部に、東西方向で在る溝で幅約1m・深さ約0.1～0.2mのものである。4号溝が後出的に想えたが、確証をもっていない。ほぼN-86°-Wに軸線があり、出土遺物はない。

### 第4節 包含層中の出土遺物

包含層中出土した遺物（第62図～第75図）には、遺構中より出土した土器群等と同時期性が認められるものも他、遺構が全く不明であった時期の遺物も存在しているように思われる。これらの遺物は基本的には遺構との係わりが明確でなく、孤立的に点在していたものを取り集めたものとなるが、あるいは遺構プランが検出されるまでの、遺構上面部にあつたと想われるもの・調査区の冠水～排水作業などによって所属地点から外れて不鮮明となったものなどを含めている。なお、図版では下部包含層中出土・包含層中出土と区分した題号としているが、出土状況については第1節のとおりで、上下に明確としていたものではなく便宜的なものとなる。以下、図版に沿って概略の補足を行っていきたい。

第62図は3を除いて、有段ないし有段状の口縁部とする甕形土器で大・中・小がある。口縁部の造作では、ナデを基調とした比較的幅狭い口縁帯のものから、上方向へ伸長させた幅広い口縁帯のもの、頸基部の強いナデによって形骸的な有段状となすものまである。口縁外面の擬凹線文は7・13を除いて認められるが、1は目の詰まった細かく浅いものとなっている。体部の調整は表面が風化して不明のものもあるが、9・10の体内面にはナデが観察され、外底面が丸みのあるものとなっている。その他の体内面は不明の7・8を除いてはケズリ調整である。なお、2・5の口縁部内面はナデ調整であるが、指頭状圧痕が観察され、5の体部～口縁部外面にかけてはススの付着も認められる。3は口唇部上縁に刻みが施されたもので、口縁内面と頸部よりやや下がった外面に荒いハケ状具調整がある。橙褐色をなして2mm大の砂粒が少量含まれている。

第63図はくの字状をなす口縁部をもつ甕形土器を集めた。1はやや円みのある口唇部となるがその他では端部のナデ・押さえなどによる面をとっている。明瞭に内面側へ肥厚するのは2・3であるが、微かに伺える4・7などもある。また、口縁部を内湾気味につくるものが多いが、8・11では外反したものとなる。調整では口頸部内外面をナデ調整するものが主であるが、5では内面・12は内外面にハケ状具による調整痕が残されている。体部では外面を縦のハケ状具で、横方向にも施こされたものは4・5・7であるが全般的に表面が風化・摩耗があつて部分的に観察できてもよく判らないものが多い。体部内面にハケ状具痕が認められるのは12で、あとは削り調整のようであるが、3の削り調整は頸部よりかなり下つた体中上位からのものとなり、この間を肩部に指頭状押圧痕が観察できるナデとしている。これらは、淡褐色をなして1mm大の砂粒を多く含んだものである。

第64図は、甕形土器かもしれないものも含むが壺形土器としてとり集めた。甕形土器同様に有段状ないし有段につくる口縁部となるもので、大きくは7ないし8類別される多様なものがある。口唇部のつまみ上げないしナデによる幅狭い口縁帯をつくる1の帯部には櫛歯状具の刺突文が施こされ、外体部はハケ状具調整が伺える。2～4の口縁帯には擬凹線文があり、3～4にかけて口縁部の伸幅・伸長が加えられてきたものようである。これら胎中には砂粒を多く含むが1は目立って多い。5・6は口縁帯を断面三角形状に部厚いものとし、粘土紐貼付により加飾するもので、頸部は比較的長めの直線的なものとしている。6の口縁帯外面には、表面の摩耗があって確個と観察はできないが擬凹線文様の痕跡があり、櫛歯状具調整後のナデ消しであるのか又は擬凹線文を施こしているかのどちらかである。色調は淡褐色をなして1mm以下の砂粒を含んでいる。7～9は甕形土器かもしれないがここに含めている。複合様の口縁部とする外面の有段基部が突出状につくるもので、口縁帯外面部が内窪みとなって先細りしている。7は上方向へやや長めに延ばすものとなるが、8・9は小さく外反させたものとなる。9は頸部即下の体内面に指頭状押圧痕がみられる。10は孤状にとる長めの頸部から大きく外反させて長く延びる口縁部は先細りさせている。色調は淡褐色で2mm程度の砂粒を含んでいる。11～16は、有段の外面部が突出状となる類で、口唇端部が面取りないしナデによって厚みをもつことと、口縁基部が内外面からのナデにより概して薄く仕上げられている。やや直立的な口縁部とするものと外傾・外反気味とするものがあり、系譜的に同一かは判らない。淡茶～灰茶色をなして砂粒が多く含まれるものが多い。17は外面に赤彩痕がある。強く短くくびれた頸部から外傾して直線的な長い口縁部とするもので、胎中には1mm程度の砂粒が少し含まれている。

第65図1・2は口径約30cm前後となる大型の壺形と想われる土器で、器肉も厚くずっしりとしたものである。2は直立的でやや外反気味の口頸部に、基部でタガ状の突帯を付けたもので、体部形態は不明であり甕形土器かもしれない。胎中には1～2mm大の石英・長石粒が多く含まれており、橙褐色をなしている。3～8は高坏形土器で、皿状の体部から短く外反りさせた口縁部の3・4は、口縁端部に面取りを行った3と先尖りとした4とがある。5・6は坏部が有段鉢形をなすもので、口縁部が外反して長くのばされている。6は口縁部が先細りのものとなっている。7は体部に深みをとらず平坦状として、直線的に外傾させた口縁部となるもので、8はさらに体部と口縁部の稜界が不鮮明な、椀状の坏部とし、小さな八の字状の脚部を付している。風化・摩耗品が多く調整はよく判らないが、3・5の内外面にはミガキ調整が伺える。9～14は小形丸底の壺形土器で、頸部をしめて長い口縁をとるものと、くの字状の短い口縁とするものなどがある。15～17は鉢形土器かと思われるもので、有段の長い口縁部の15・短く外反させた16・小さく二段にくびれる口縁部の17では、円い底部となっている。

第66図1～3も鉢形の土器で、直線のかやや内湾気味にとる口縁部となっている。1の底部は平底様となっているが稜線が明瞭ではなくやや円みがある。3は体部～頸部にかかる内外面にハケ状具調整痕が認められる。4～11は器台形土器であるが、6は蓋形土器であるかもしれない。5は装飾器台または結合器台と呼ばれているもので、比較的小型のものようである。7は器受部をほぼ水平にとり、大きく外反させて伸ばす口縁部と、八の字状の大きな脚部をもつ。脚部の

透し孔は3つで、1mm程度の礫多く含む。8は口径15.5cm・底径約14.5cm・器高約6.5cmの鼓形器台で、淡褐色をなして細砂粒が多く含まれている。9・10は円みのある小さな小皿状の器受部に八の字状の小さな脚部となるもので、体部～口唇部へは器肉を薄めて先尖りとなっている。11は有段口縁状につくる受部に山高の八の字状脚部がついている。受部の内外面はナデ、脚部外面はハケ状具調整後のナデ・内面は上半はケズリで下半はナデが伺える。淡灰褐色をして0.5mm程度の砂礫を多く含んでいる。12～23はその他の小型土器と土製品である。14は口縁端部ちかくに穿孔1つがある。16・17は舟形土製品で、16は全体の約3分の1程度となろうか、体部より強くしまつて先細りで反り上った部分に穿孔があり、軸先部分であろうか。船艙に当る部分はほぼ平坦となっている。17は長さ4.3cm・幅2.4cmの極小品で、サキ・トモが不明瞭であるが図中で左側がやや鋭角につまみ出されているようで、サキのように思われる。18は動物形（犬かと思われる）の土製品で、口先・頭頂・後足部分を欠くが、耳・目・やや開きかけた口・傾むきかげんの頭など、表情性がある。高さ3.5cm・幅2.4cm・遺存長5.1cmである。19～23の土錘は、径約3～5cmの円いものが多い。

第67図1～8は古墳時代の須恵器・9～25は平安時代の須恵器と土師器である。1はほぼ全面的に回転ヘラ削りされた丸い天井部より、直線的に垂下した口縁部をもち、口唇端部はわずかに凹面をなして内傾する。天井部と口縁部を界する稜は鋭さがなく、円みをもってわずかに造作されている。内面と口縁部外面は比較的丁寧なナデ調整で、胎中には細砂粒が多く含まれている。口径12.4cm・器高4.9cmである。2は頂部につまみ（欠損）がついた蓋で、天井部は円みが備わるが頂部より約半分に回転ヘラ削りが行なわれている。口縁部は微かに外開き気味となり、端面は明瞭な段をもっている。稜線は1とよく似たもので、口径12.4cmである。3は天井部の約3分の1が回転ケズリされ、この部分がやや平坦状となってナデ肩様の天井部である。稜は、口縁基部への強いナデによって形骸的に浮出されているようなもので、内面側では天井部から口縁部にかけて一連的な円みをもっている。口唇部は内面にかすかな段状の形態も残されるが、明瞭ではないものとなっている。口径12.8cmである。4～8も含めて陶邑窯編年（中村浩『和泉陶邑窯の研究』1981）のⅡ型式1段階を前後した時期のものではなかろうか。9～19の須恵器は15がC3区・17がB3区・18がB4区出土で、その他のものはD7・8区中よりのもので、第22号井戸の周辺から出土している。蓋では口縁部を水平方向に折って、端部を玉縁様に巻き返したものと、肩部よりなだらかに先細りさせたものがある。盤では底部の器肉が厚くやや大きめのものと、全体的に薄くて小振りのものがある。椀状をなす13は、口径13cm・器高4.2cm・底径5.4cmをなし、体部は内外面ともナデ調整・外底面はヘラ削りが行なわれている。色調はあずき色がかつた灰色をなして、1mm以下の砂粒を多く含んでいる。高台付杯・皿類では、16も13と同様の色調をなすが、内底面と外底面～高台の内法にかけては橙褐色となっており、同器形の皿の重ね焼きによるものと想われる。内外面ともにナデ調整で、外面に付高台の接合痕が伺える。胎中には1mm以下の砂粒を多く含み、石英粒が目立つ。15は椀かもしれない。外底面に回転糸切痕が残され、高台接合のナデによって糸切痕の外周のみが消されている。色調は灰色をなし、胎土は15に似たものである。19の鉢形土器は内面は平滑に仕上げたナデ調整となるが、外面には凸帯状に隆出させた

2段からなる象りのナデとしている。細砂粒が多く含まれて焼上りは良い。20～25は土師器で、22・24は内面黒色の土器で22～25はいずれも付高台と想われるが概して低い高台のものである。24・25の高台部は小さな断面三角形状をなし、25の観察では外底面に粘土板の貼付から、輪状に高台部が引き出されているように思われる。細かな石英粒が目立つ。これら平安期の土器群は県内の編年案（吉岡康暢「第2章 奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』1984・田嶋明人「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』1986）に沿うと、Ⅲ1期（9C前半）～Ⅷ2期（11C末頃前後）のものを含んでいるものとなる。

第68図1～5は暗灰色～暗茶褐色をなし、体部にハケ状具調整が残されて焼け締りもやや弱く、比較的低温の酸化焰によるかと思われるものといふし状に焼かれたかとおもわれるものもある。1の体部外面は縦方向のハケ・内面はナデ調整後に楡歯状具による卸し目が施こされている播鉢である。2・3は外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整が残されており、2は片口が付けられて一部ナデによって削されている。4は外面は横ナデで内面は横ハケのままとなっている。これらの胎中には細かな砂粒が多く含まれていることも共通している。こうした類品の出土例を知らないが、加賀陶の第Ⅰ期（吉岡康暢『越前珠洲』日本陶磁全集7）製品中の甕胴部に刷毛などで調整によって仕上げたものが存在するようであり、12世紀中葉頃からの開始が考えられている加賀の初期段階の製品である可能性をもつものと思える。6～10は珠洲陶と思われるもので、口唇上端面に楡歯状具による波状文を施こした播鉢3点の他、大甕などがあるが、播鉢の特徴では比較的薄手で卸し目が伴うとすればやや間隔をあけたものとなる6と充填されて器肉も厚手の7などと、幾分幅をもつものとなる。

第69図は越前ないし加賀陶と思われるものである。1・2は口唇端部に比較的幅広で深めの凹線が入る播鉢で、1の体下端部外面は横方向のケズリが入っている。内面には7条1単位の卸し目があって、内面下半はすべすべとして手触り感があり、よく使込まれたようである。2の外面にはへら描の文様状のものがあるが内容的には不明である。3は口縁端部が小さくくびれ、端面取りがある。内面には細くて浅い、左から右側に傾斜した卸し目が施こされている。4では内面口縁にナデの凹線部を設けて以下に卸し目を入れている。比較的深く、密に入るものとなろう。5～8は高台のある鉢ないし播鉢であるが、内外面ともナデとなって不明な7を除いては付高台である。5・6では外面の体下部ないし下端部に横方向のケズリが残っており、接合部と体上位側ではヨコナデが行なわれている。調整から接合の手順としては、全体的なナデ→底部・体下部のケズリ→高台部の接合→接合部～外底面のナデとしているように思える。9～11は播鉢の底部で、ナデ調整である。12は口径21cmで、甕と思われる。13・14はスタンプ文をもつ体部片で、いずれも細線の陽刻原体からなる連子文がみられ、13では井桁の中央に花芯を置いて外方へ放射線を刻んで花卉を表現したと思われる原体も加わっている。13・14は14世紀前半代ではなかろうかとする加賀焼との教示（垣内光次郎氏・石川県立埋文センター主事）を得た。

第70図は1～26が灰釉・27～39が鉄釉の製品である。1は口径11cm・器高3.3cmで、腰以下はへら削りで露胎とし、高台は回転糸切り後の削り出しとした輪高台のようである。釉は淡緑色をなし、内面全体と外面の腰部までの施釉となっている。3は体部～口縁部を直線的にのびした皿

で、口径約11cm・器高3.4cmである。体中位以下はへら削りの露胎となっており、外底面は円い上げ底風の袂りにナデが加えられている。釉は内面と、外面では体中位より以上の、ナデ調整とした下地部分に施こしている。4は口径約13cm・器高2.8cmの外傾度を強くとする皿で、口唇部は横に引き出されて、上端面は中窪み状になっている。内外面はナデ調整であり、外底面は浅い削りが入ってかすかな輪状の高台となっている。釉は内面と、外面には体上部～一部では中位に施こされている。5は口径約7cm前後・器高4.2cmの小碗で、底部は平底で糸切痕が残されている。その他は平碗・卸し皿・盤などと思われる体部・底部片である。27～39は黒褐色の釉をもつ碗で、口径12cm前後のものである。口縁部の形態にそれぞれ特徴があるが、口唇を先細りとする群と、一定的に保つ群とがあるようで、後者のタイプでは腰部に張りをとって体部をあまり開かない、木椀様の形態をもっているようである。

第71図1～7は鉄釉・褐釉の製品。8～37は白磁・青磁製品である。1は肩部に横置き環耳があり、素地には微砂粒が含まれていて淡褐色をなしている。土瓶か四耳の茶壺か。2は袴腰形の香炉で口縁端は波状の象としている。釉は内面の口縁部上端部分～外面の腰下半部付近までに施こされている。口径は約18cmの大振りのものである。3は瓶状のものであるが、縦方向に二本の把手状のものがある。4は口径5.3cm・器高4.3cmの猪口かとも思われる小型品で、外底面は回転糸切りのままとしている。釉は口唇部内面～外面の体下半部までであり、体部の内外面はナデ調整となっている。5は板状となった卸し皿で、目の荒い櫛歯状具によって斜め上方よりの刺突によって目がつくられている。6は蓋のつまみであろうか。7は内反りの面に恵比須とみられる貼付文があり、下地には細かなカキ目であろうか浅い条線が入っている。徳利の胴部片のようであり、備前であるか瀬戸・美濃製品かであろう。8～12は白磁碗で、九歴論集4の横田・森田編年の玉縁碗Ⅱ類とⅣ類がある。15は青白磁の水注かと想われるもので、把手に龍頭と思われるかたどりがあがる。また、頸部ではへら彫の蕉葉文風のものが見える。16～37は青磁製品で、16は器台状のもので、上端部が波状となる。素地は白灰色をなして釉は淡緑色に発している。17～26は碗でシノギとするものからへら描き・無文のものなどがある。27～30は瓶・皿類と思われるがよく判らない。28は稜花皿で、釉は透明感のある比較的厚いものであり、緑灰色を呈している。全面に貫入がみられ、口唇部は鈍い稜花が見える。内唇部には二条ほどの沈線文が入っている。37は見込みに印花文をもち、釉は暗さのある緑灰色をなしており、高台部をこえて内側の外周部まで到っている。

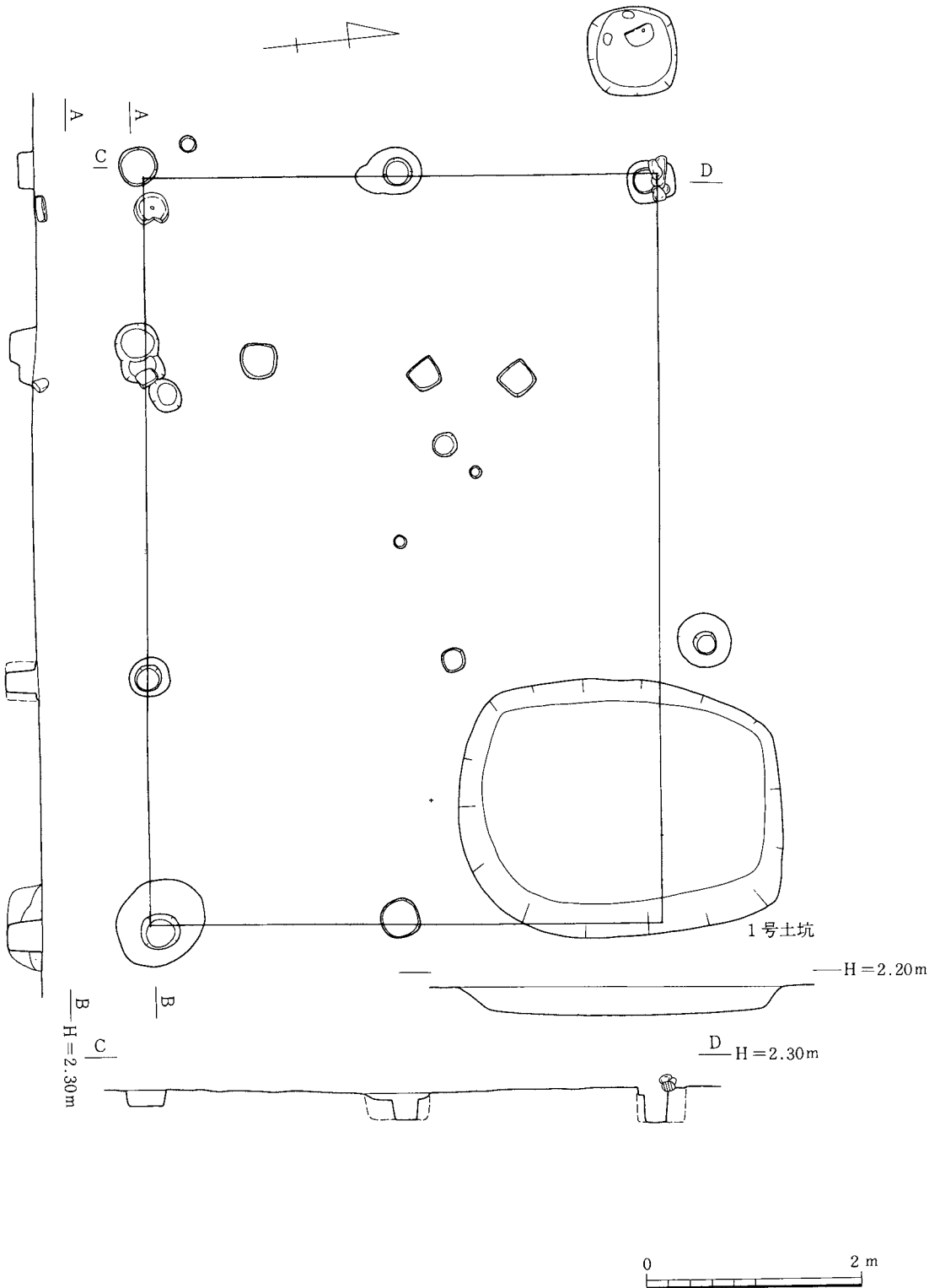
第72図は1～3が青磁、4～17が土師質土器、18～21・22が瓦質製品、23～29が陶器、30～36が染付の磁器である。1・2は花文と想われるもの、2は魚文のスタンプ文がある。施釉は1では外面の高台部下端部までで、畳付～内側は露胎となっている。2は外面では高台畳付までとなっている。3は畳付部分のみ露胎となっている。3は明るさのある、1・2は暗い緑灰色をなしている。4～17は、口径14cm前後のものとは7cm前後の大小があり、小型のものでは口唇に灯芯油痕のあるものが見立つ。18～21は仏花器類かと想われるもので、18はややくすんだ黒灰色であるが19～21は黒く光沢がある。雷文・花卉文かのスタンプ文を巡らせている。22は口径約40cmで、火鉢のようである。口縁部上端には二条の粘土紐の貼付帯に細かなスタンプ花文の充填がある。

23は備前と思われる播鉢で、内面に斜傾の比較的荒い卸し目がみられる。胎中には微砂粒が少量含まれており、内外面ともナデ調整となるが外面体部は粗略的なナデとなっている。色調は内外面とも茶褐色をなしており、口縁部外面は釉化の光沢がある。24～27は産地がよく判らない。24の素地は淡灰色、釉は深く濃い灰青色で厚みにムラがある。内面には大きめの目痕が残っている。25と淡褐色の素地に灰白色釉がのり、胎中には微砂粒が少量含まれている。26は明るい茶色の素地に透明感のある釉がのって茶色に発色している。施釉部分は内面と、外面では口縁上端部のみである。27は内面と外面上半に施釉があり、下半は露胎となっている。素地は淡茶色で、透明感のある釉により淡茶色をなし、細かな貫入がある。これらは志野・唐津などの製品でもあろうか。28・29は越前の甕と思われるが、28は加賀かもしれない口径が40cmを越える大甕である。30～36は青花・葉脈状の文様が描かれた染付碗皿類である。青料は淡青色に発するものが多く、全体的ににじみにもよるか文様が鮮明ではない。

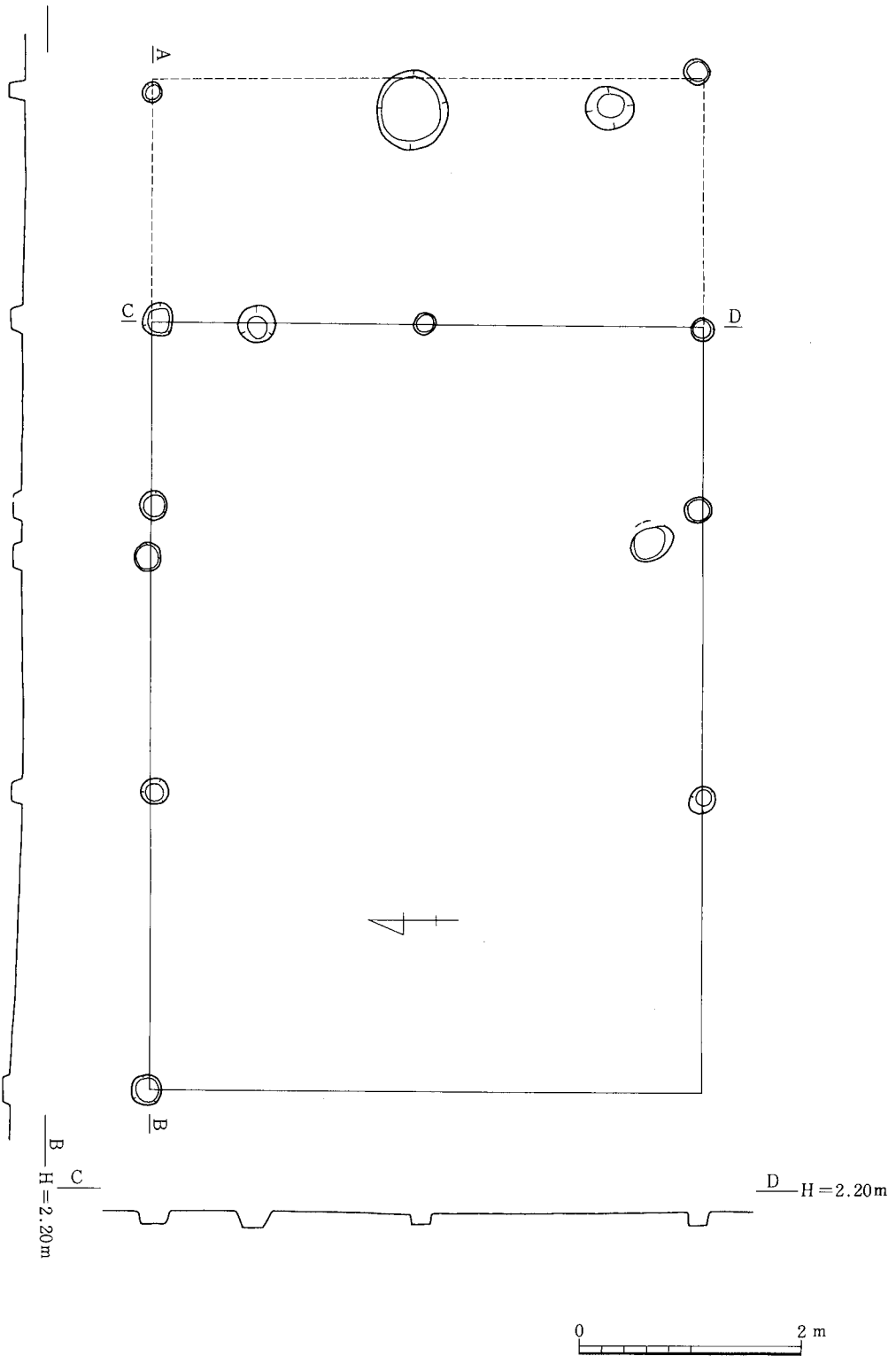
第73・74図の石臼は臼面が径約30cmのものであるが、73図1の六区画か七区画の不整で疎略な刻み目が残ったものと全く滅失した74図2などがあり、その他も刻み目がほぼすり消えている。

第75図1は大型の打製石斧と思われる損片であるが、下部遺構時期に伴ったものと思われる。2～5は砥石であるが、5は一面のみが使われて、図中左側に円形の窪みが設けてある。6～9は行火の蓋・体部片で、Dの字状となる6の蓋は第60図1の体部が付くようである。10は硯で、長さ8cm、幅約3.7cm、厚さ約1.7cmのシルト質岩で、全側に提がある。陸部と海部の稜線は明確ではないが、断面V字状に海部を刻んでいる。陸部の中央部は長楕円形状にすりへって窪みをなしている。11はフィゴの羽口片である。

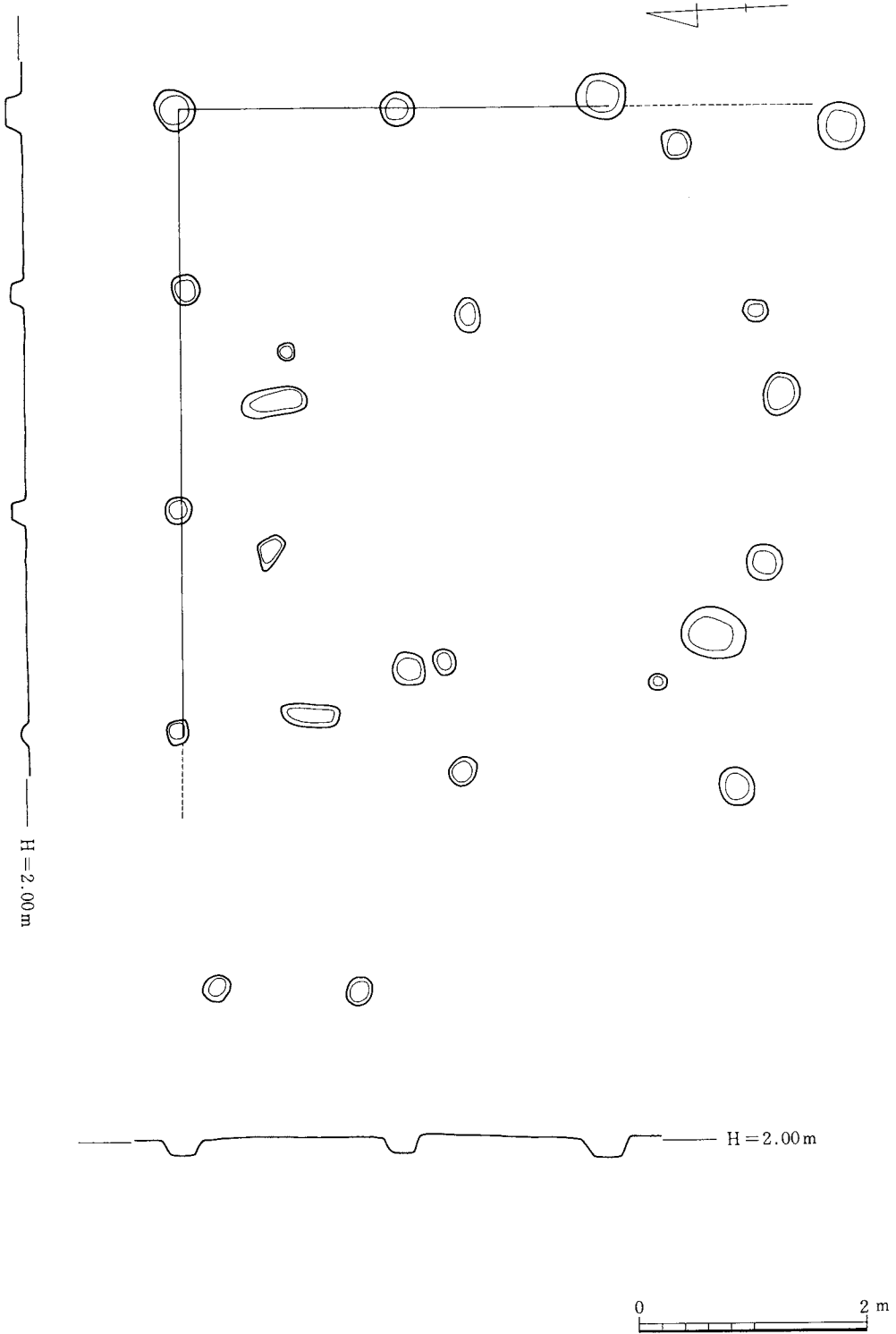




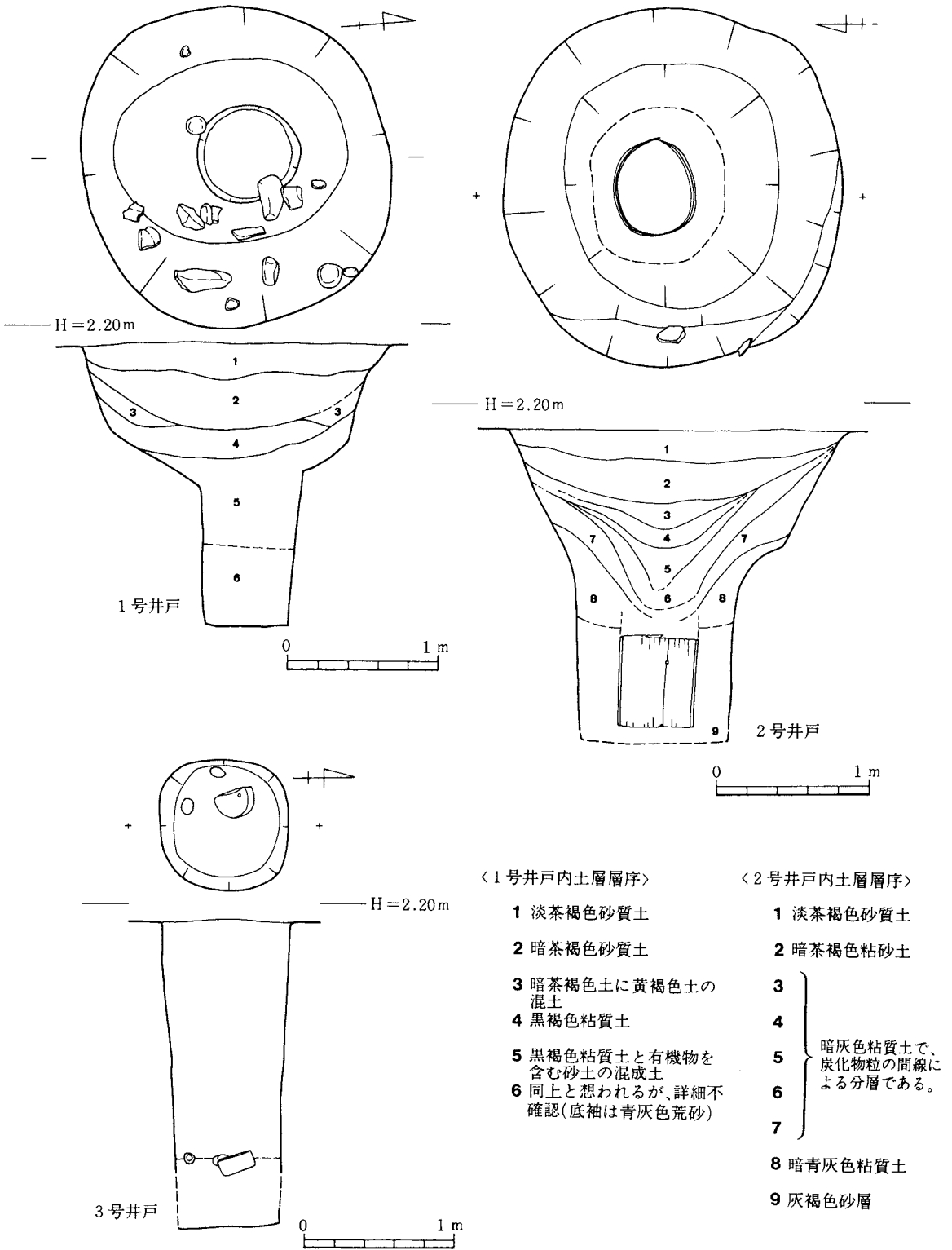
第25図 第2次調査区 第1号掘立柱建物実測図



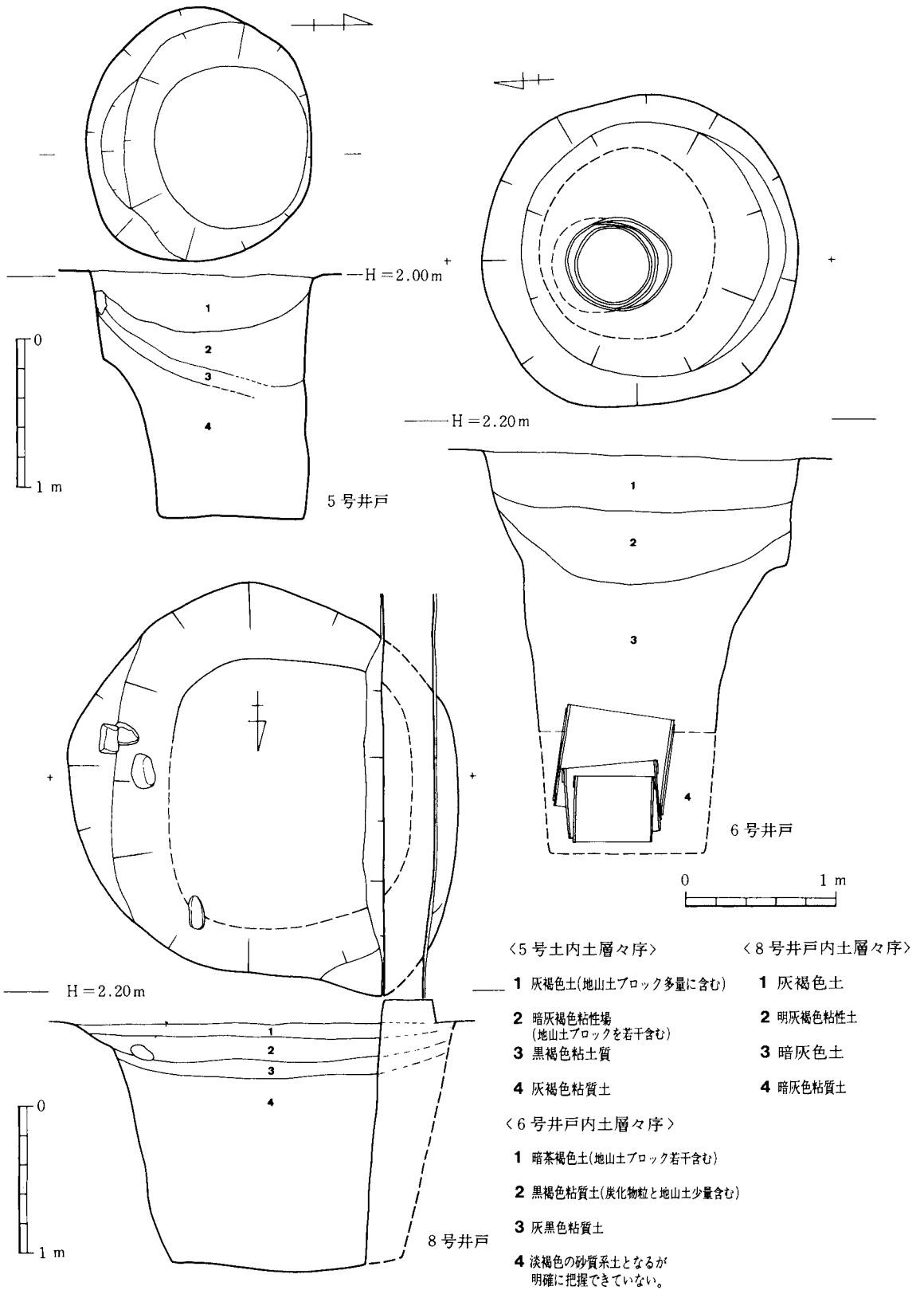
第26図 第2次調査区 第2号掘立柱建物実測図



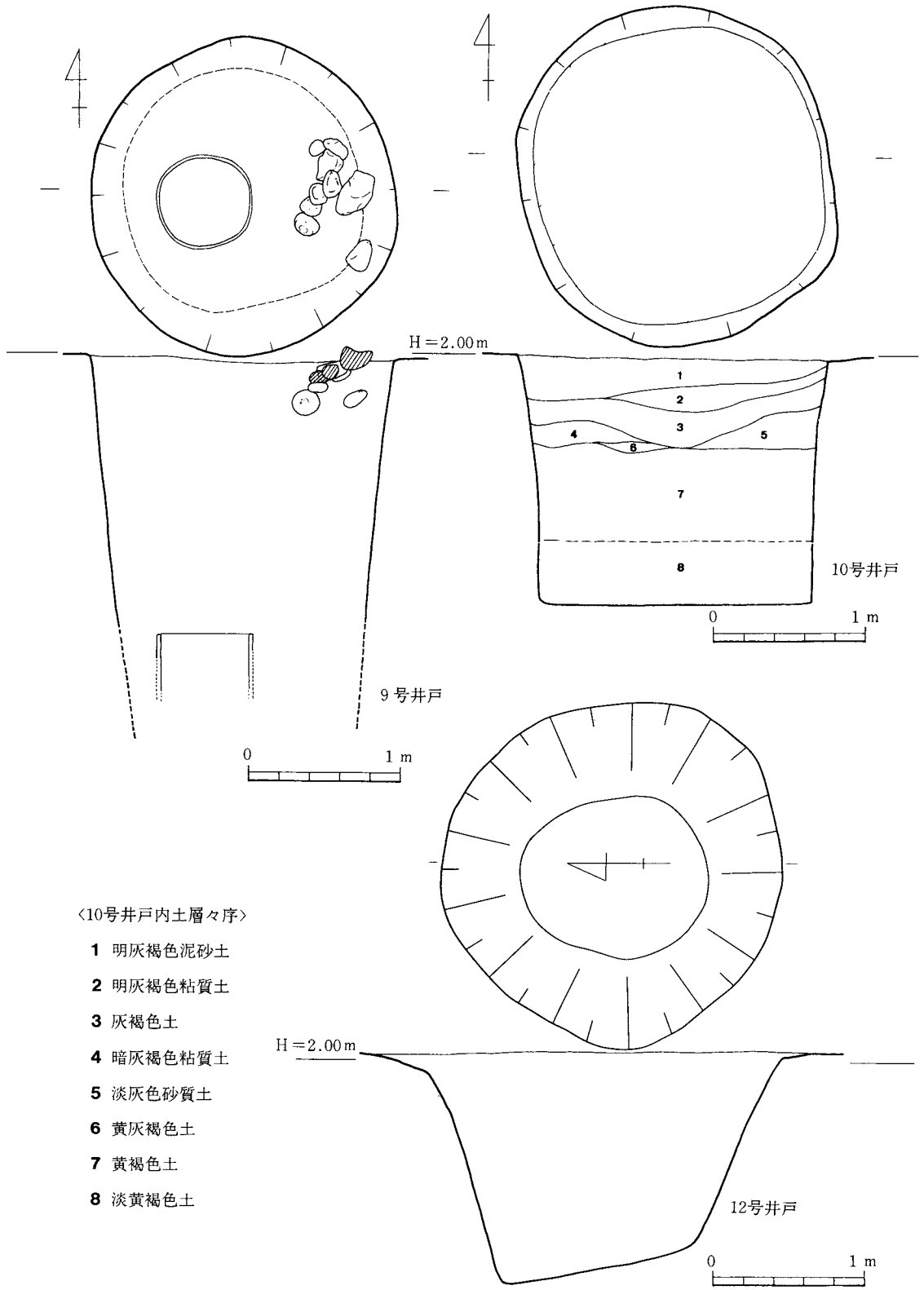
第27図 第2次調査区 第3号掘立柱建物実測図



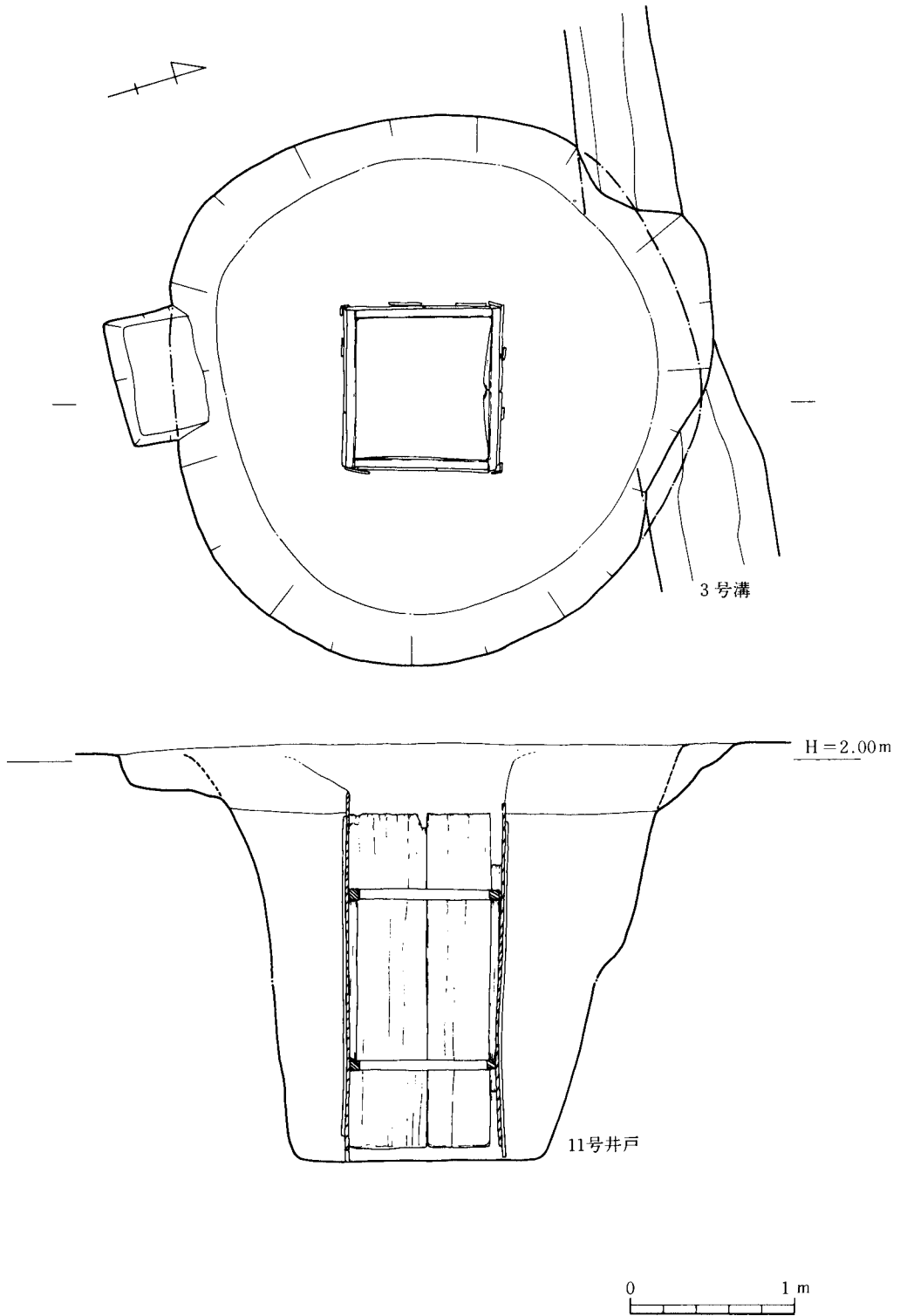
第28図 第2次調査区第1号・2号・3号井戸実測図



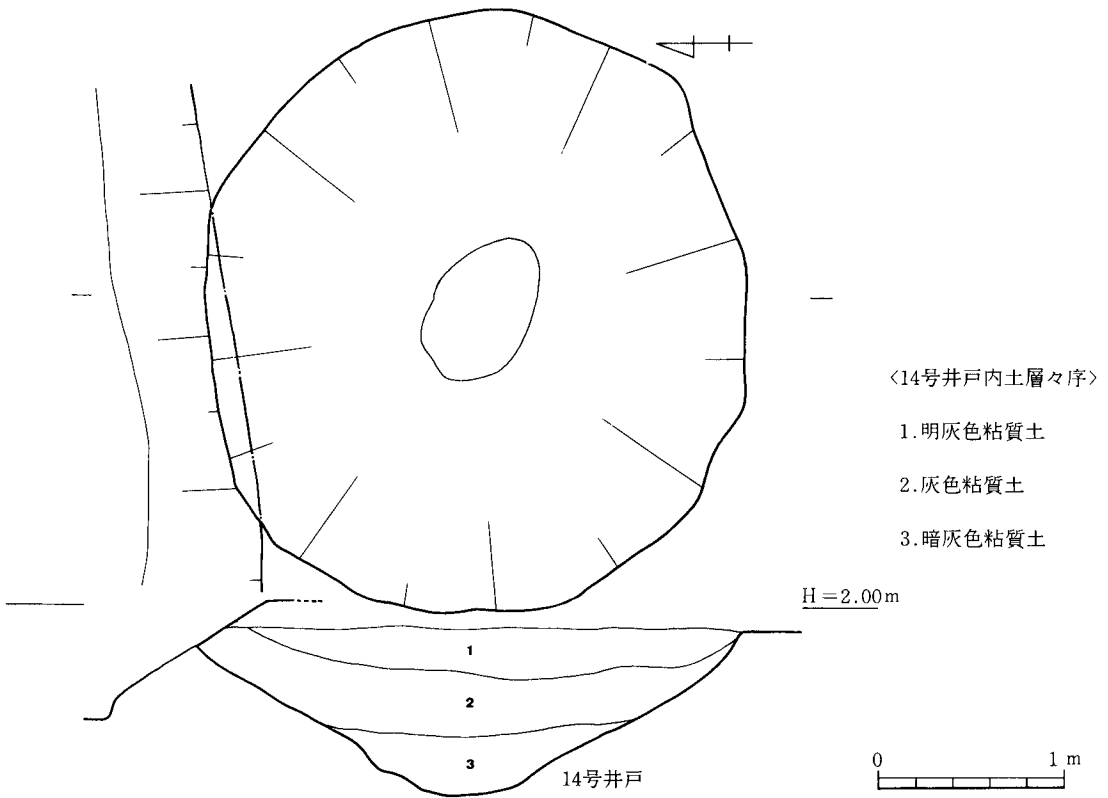
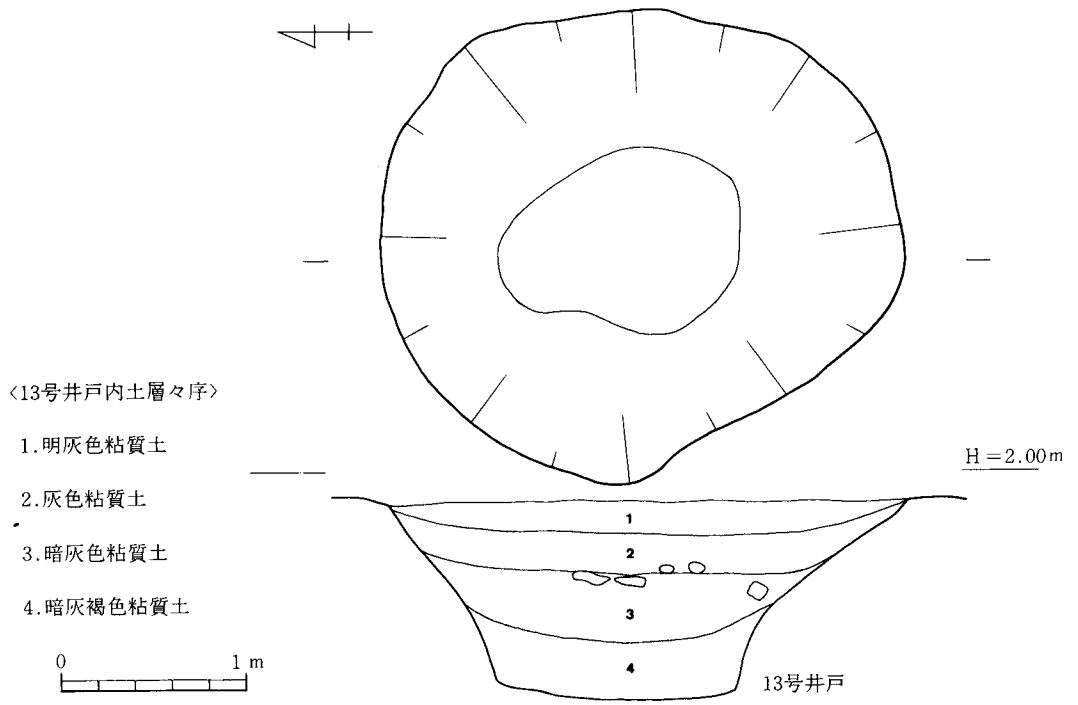
第29図 第2次調査区第5号・6号・8号井戸実測図



第30図 第2次調査区第9号・10号・12号井戸実測図

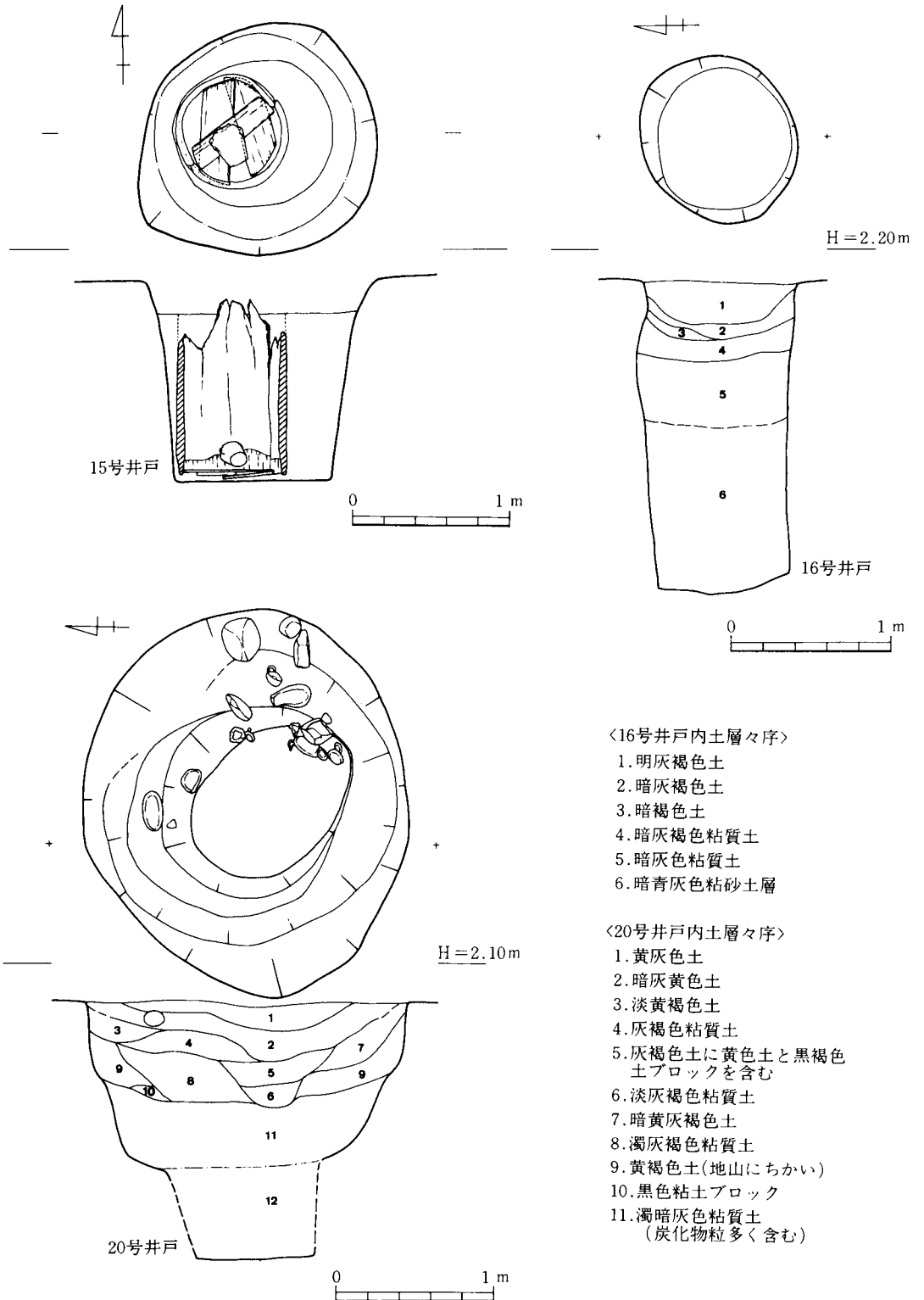


第31図 第2次調査区 第11号井戸実測図

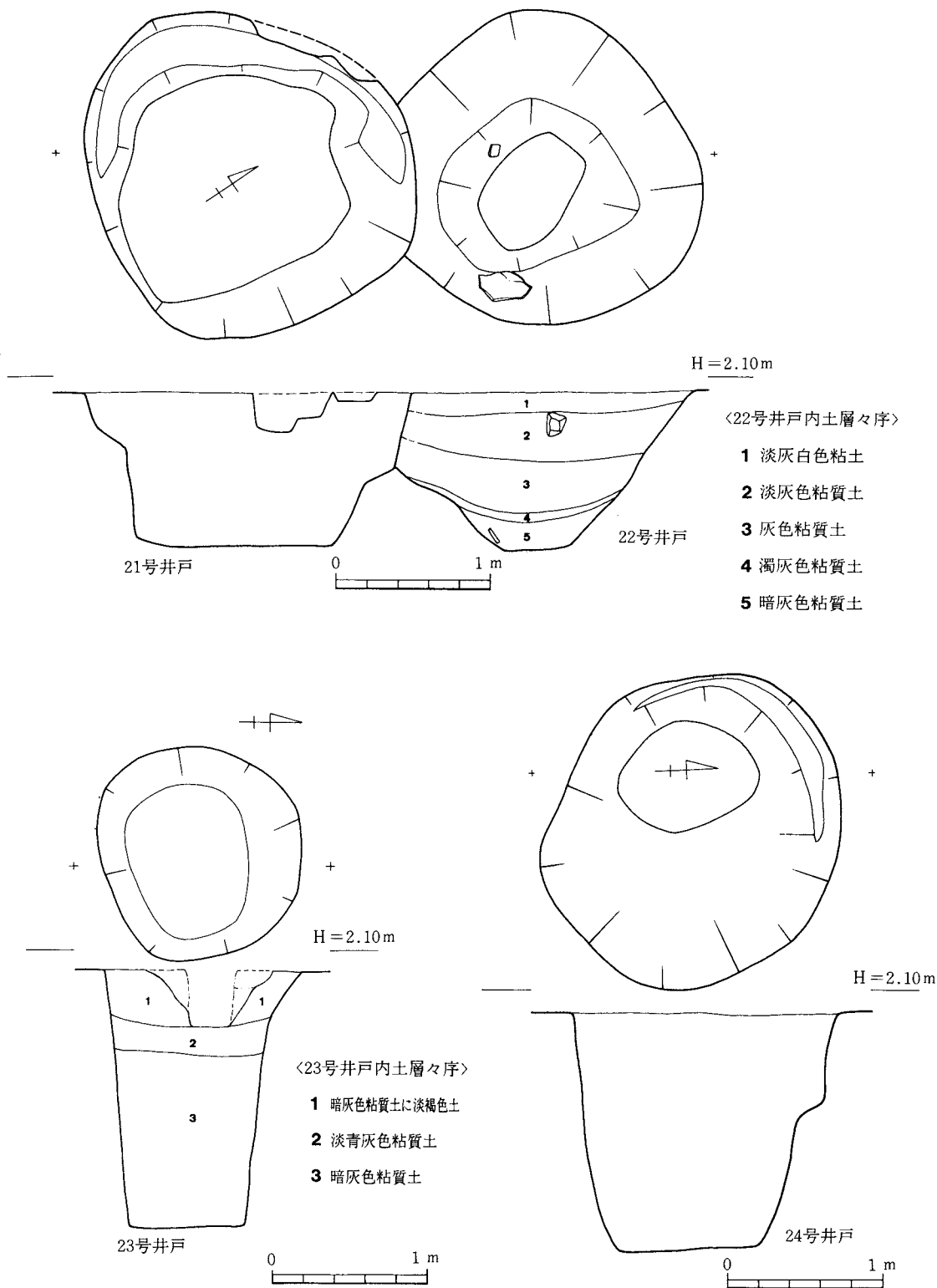


第32図 第2次調査区 第13号・14号井戸実測図

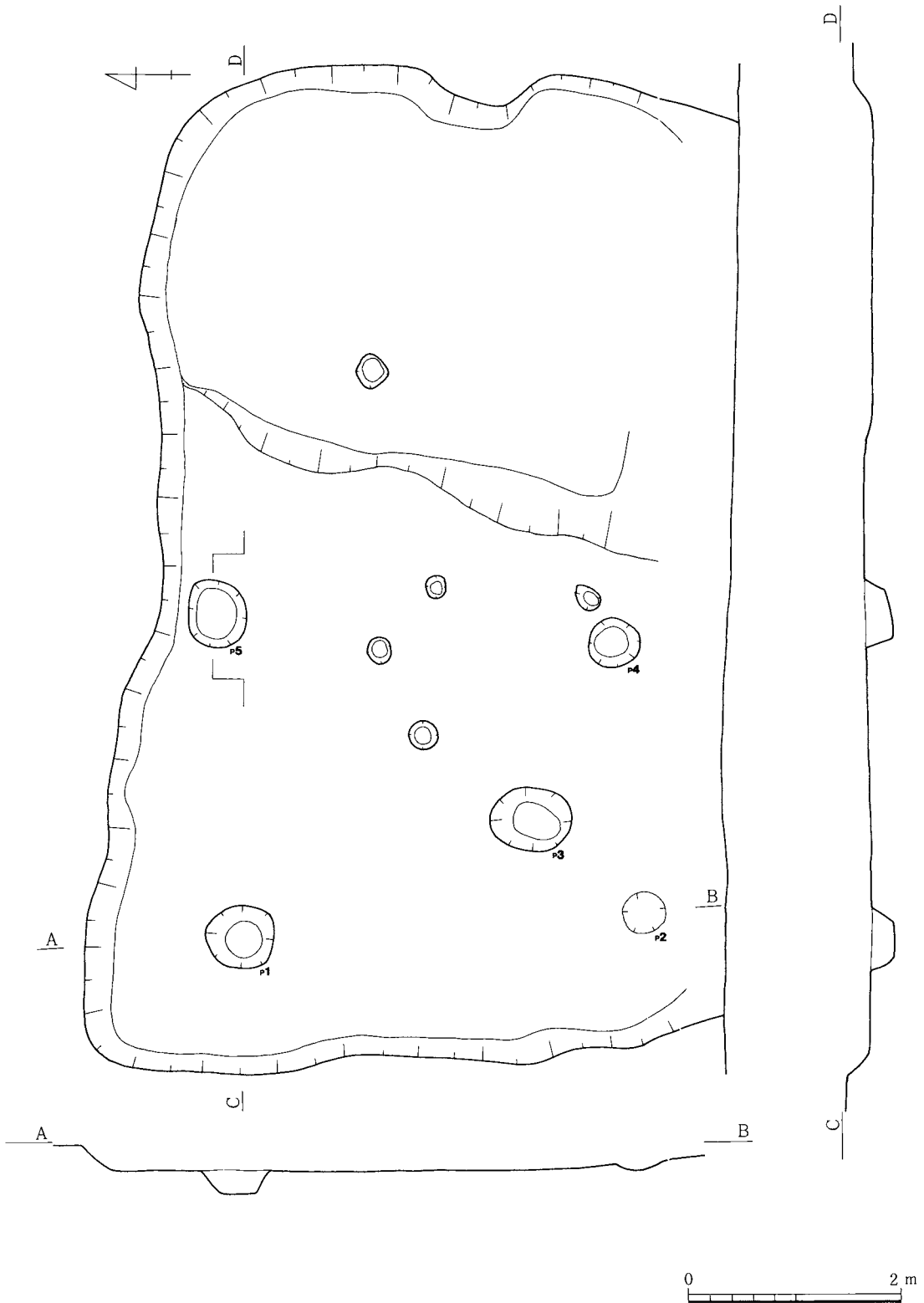




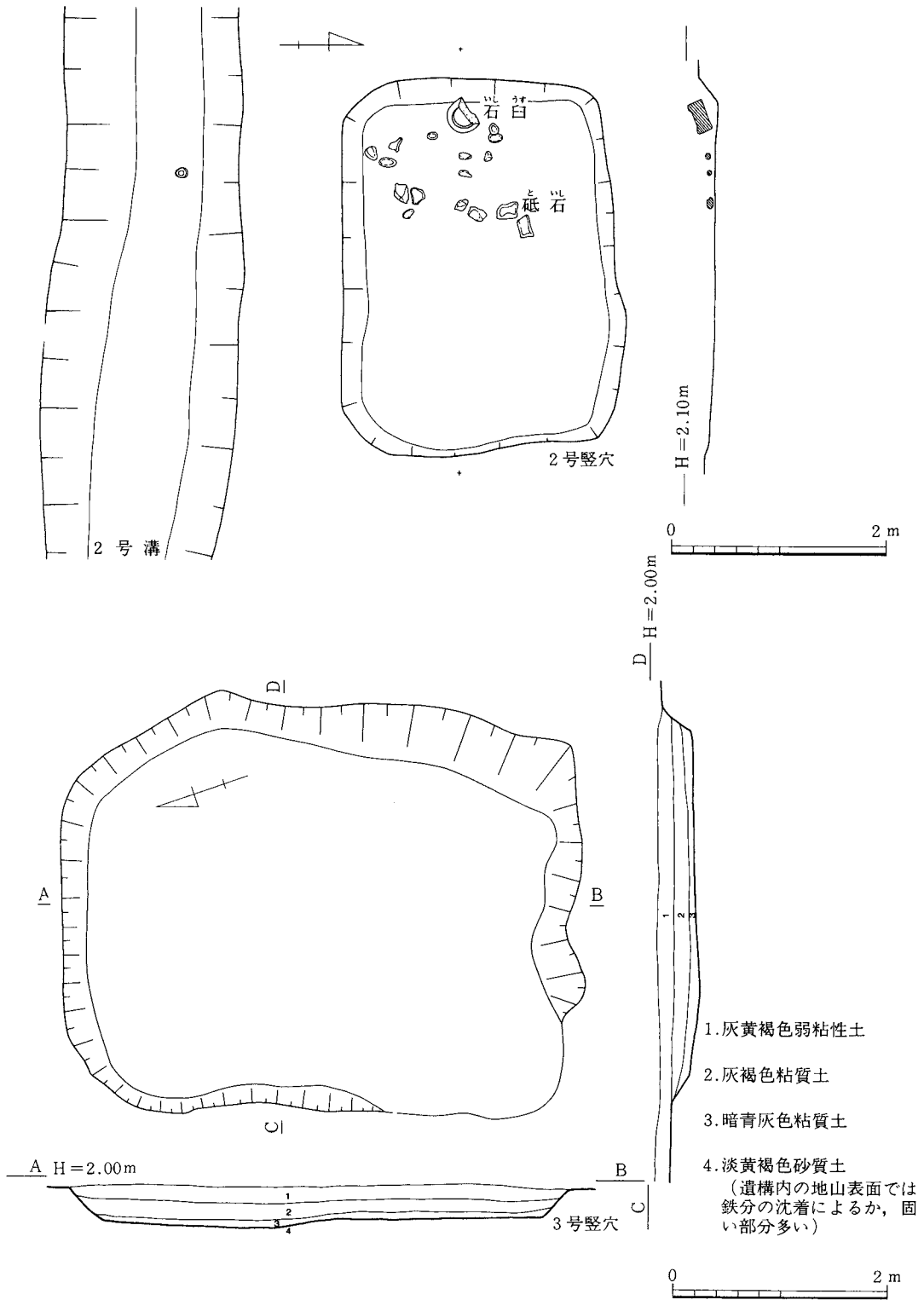
第33図 第2次調査区 第15号・16号・20号井戸実測図



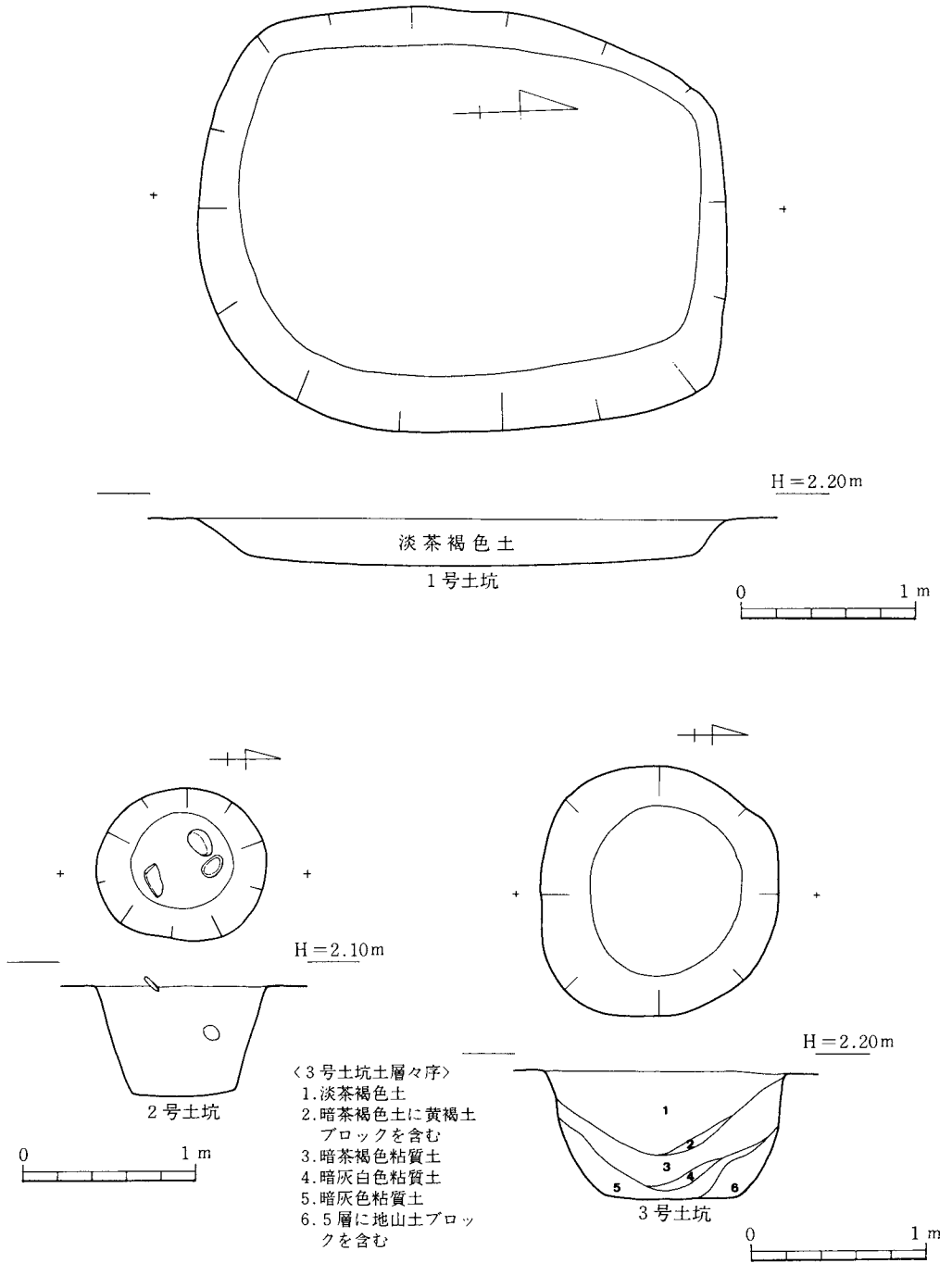
第34図 第2次調査区第21号・22号・23号・24号井戸実測図



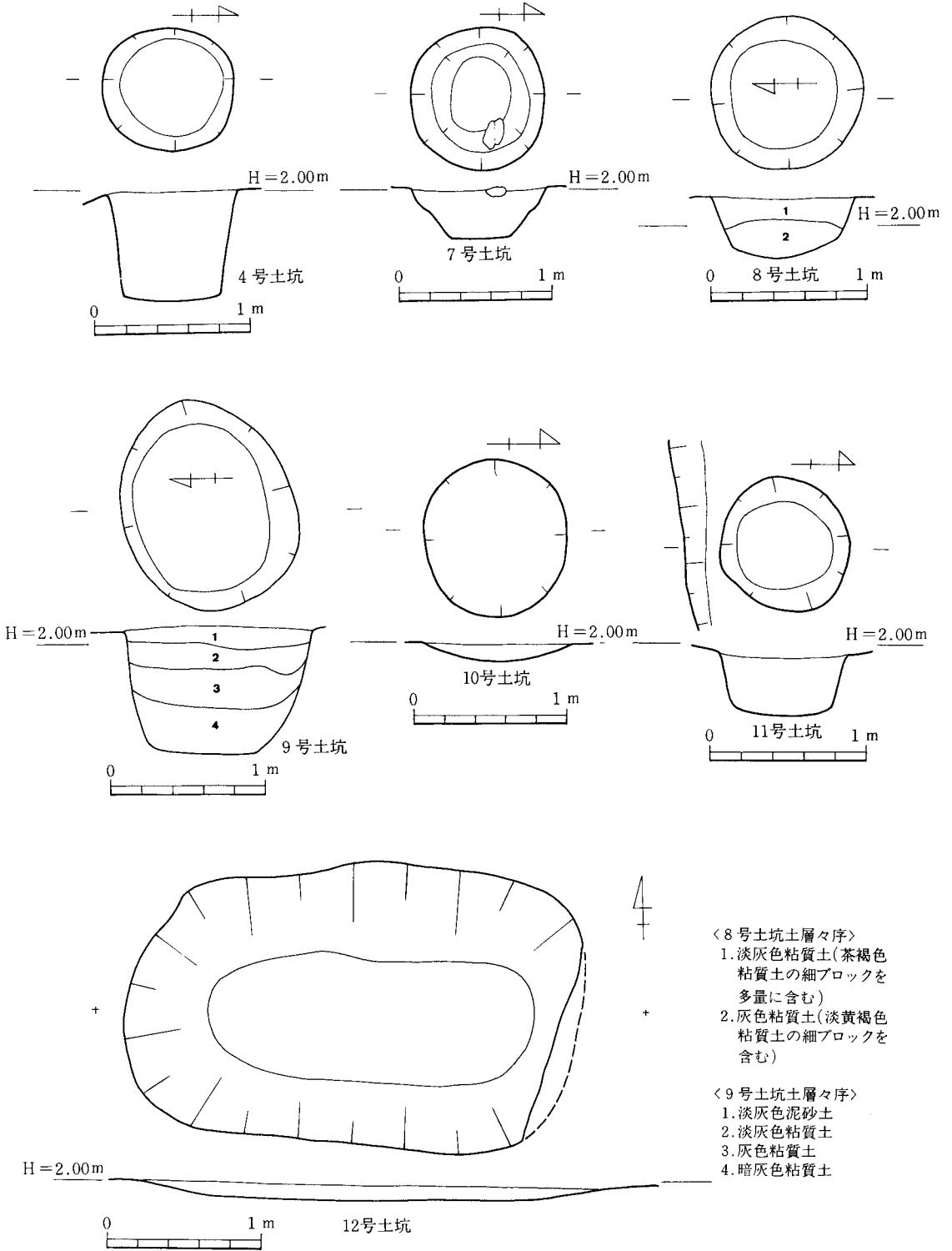
第35図 第2次調査区 第1号竖穴実測図



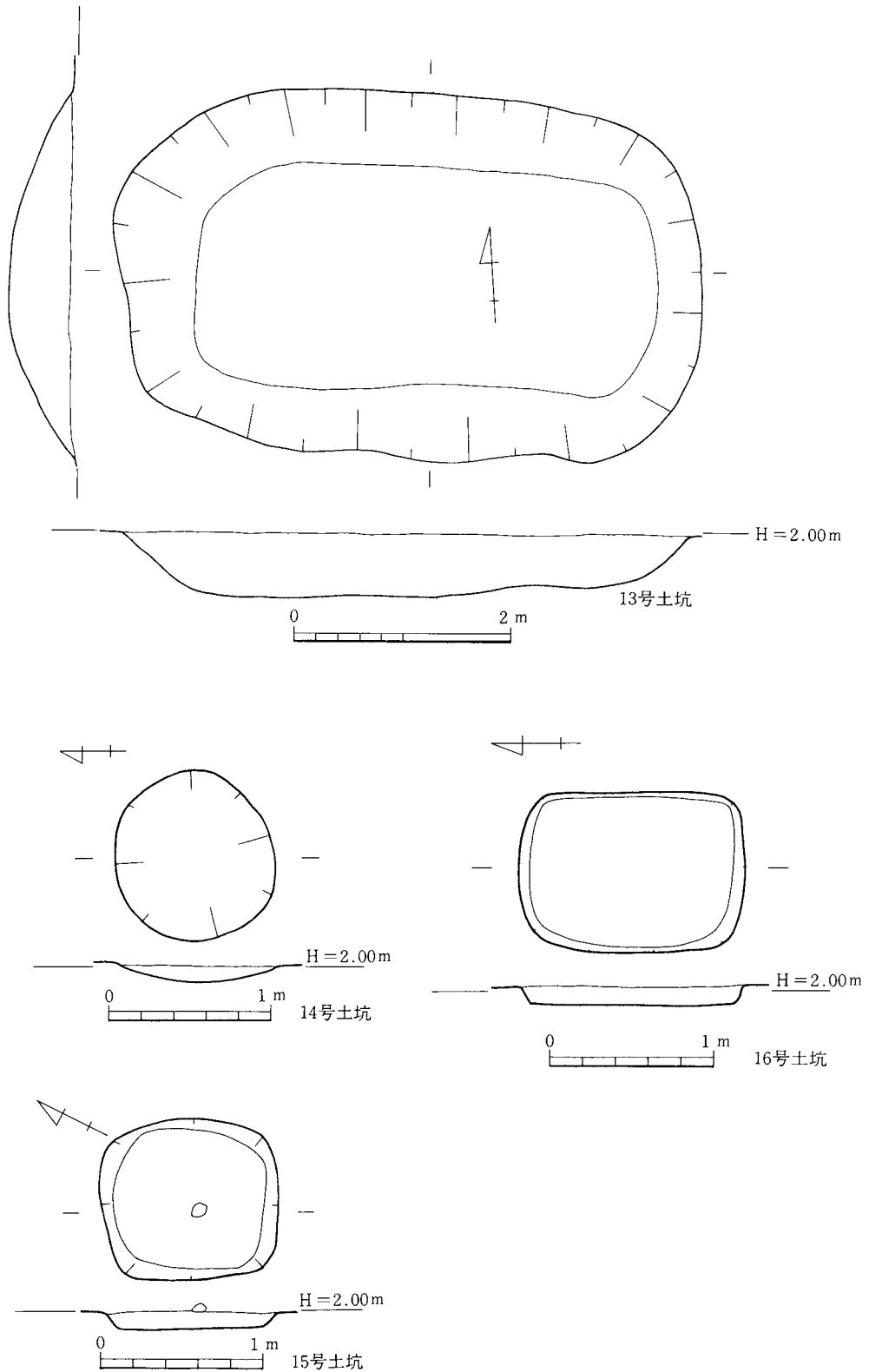
第36図 第2次調査区 第2号・3号竖穴実測図



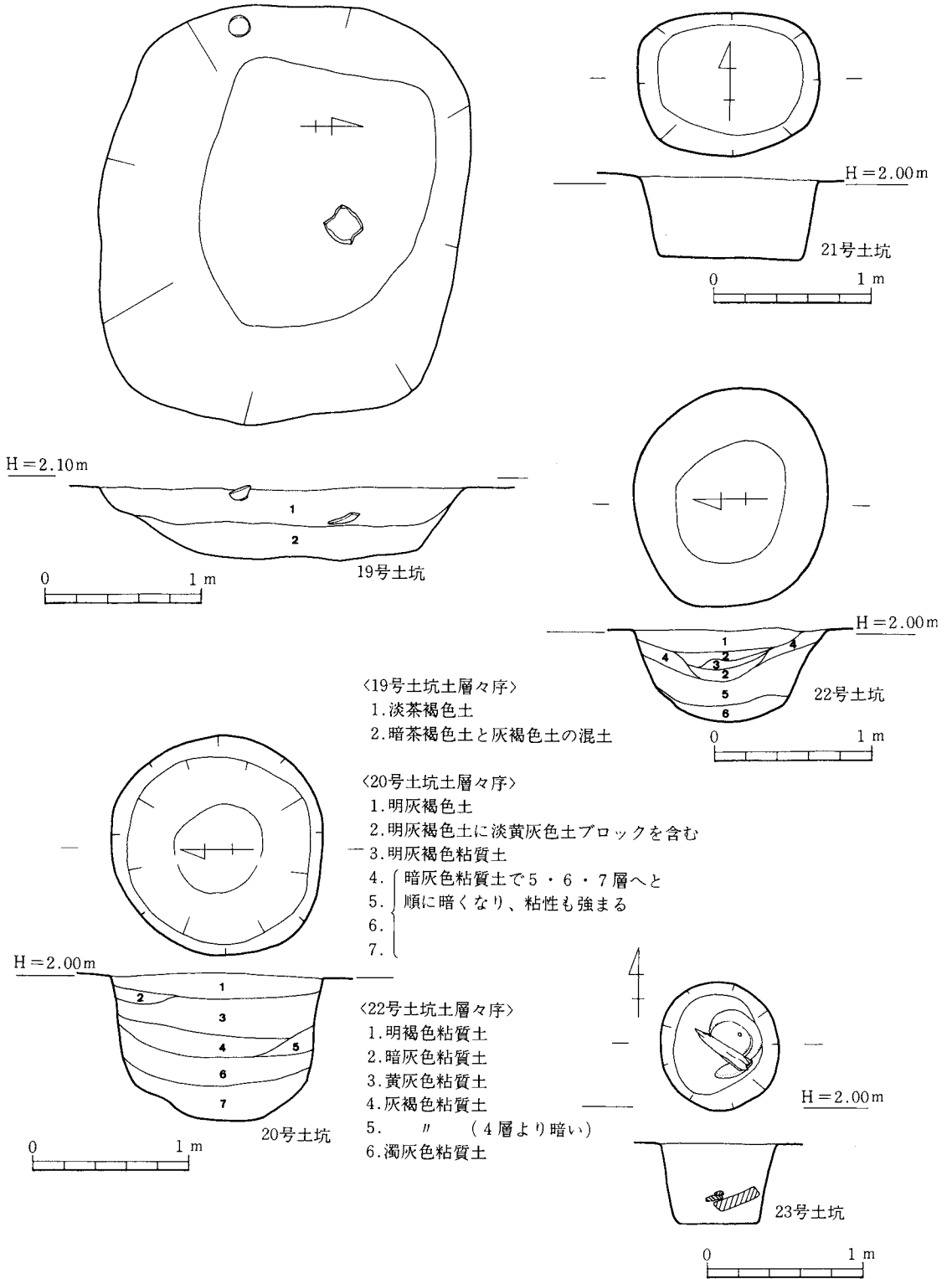
第37図 第2次調査区 第1号・2号・3号土坑実測図



第38図 第2次調査区 第4号・7号・8号・9号・10号・11号・12号土坑実測図

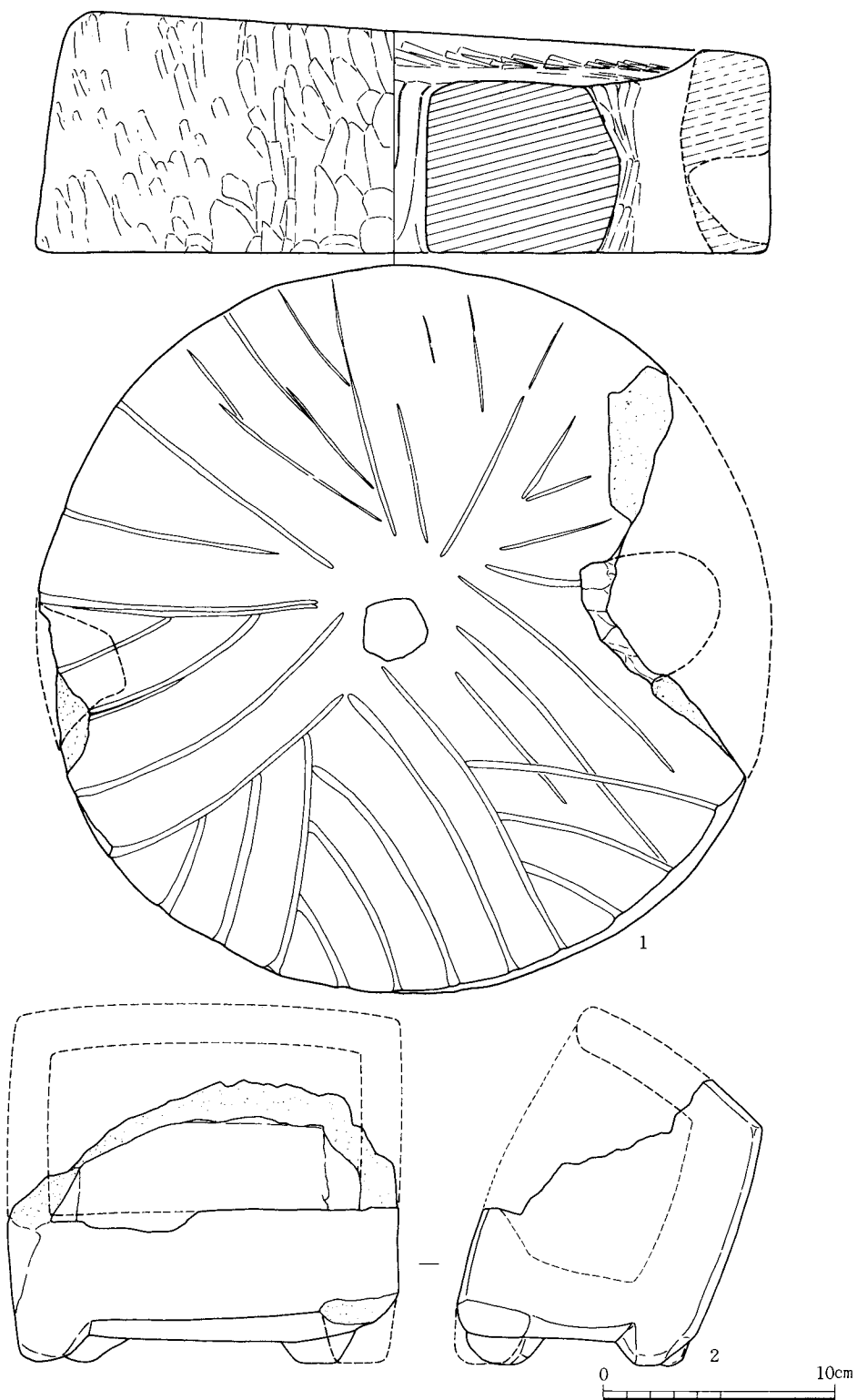


第39図 第2次調査区 第13号・14号・15号・16号土坑実測図

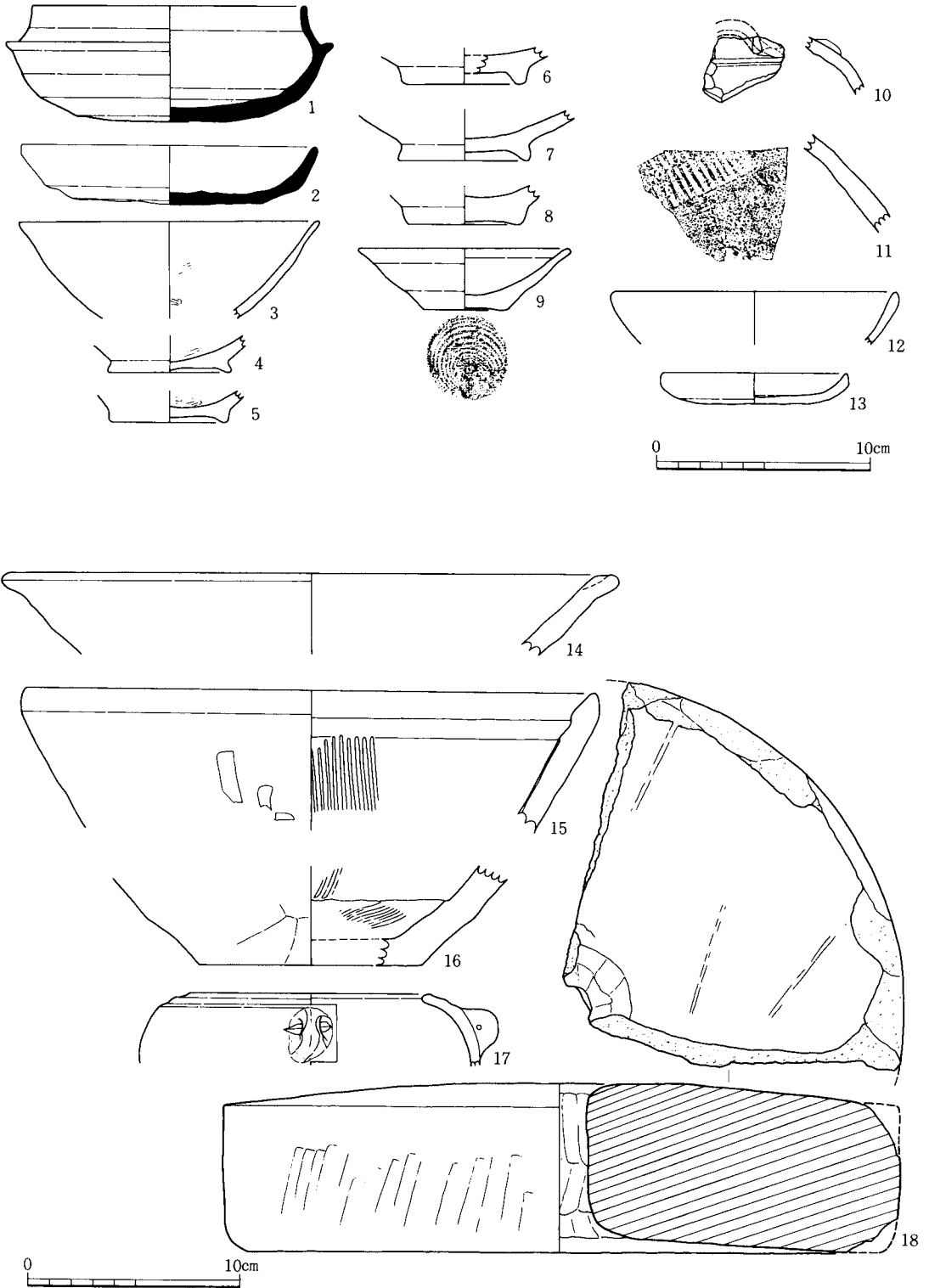


第40図 第2次調査区 第19号・20号・21号・22号・23号土坑実測図

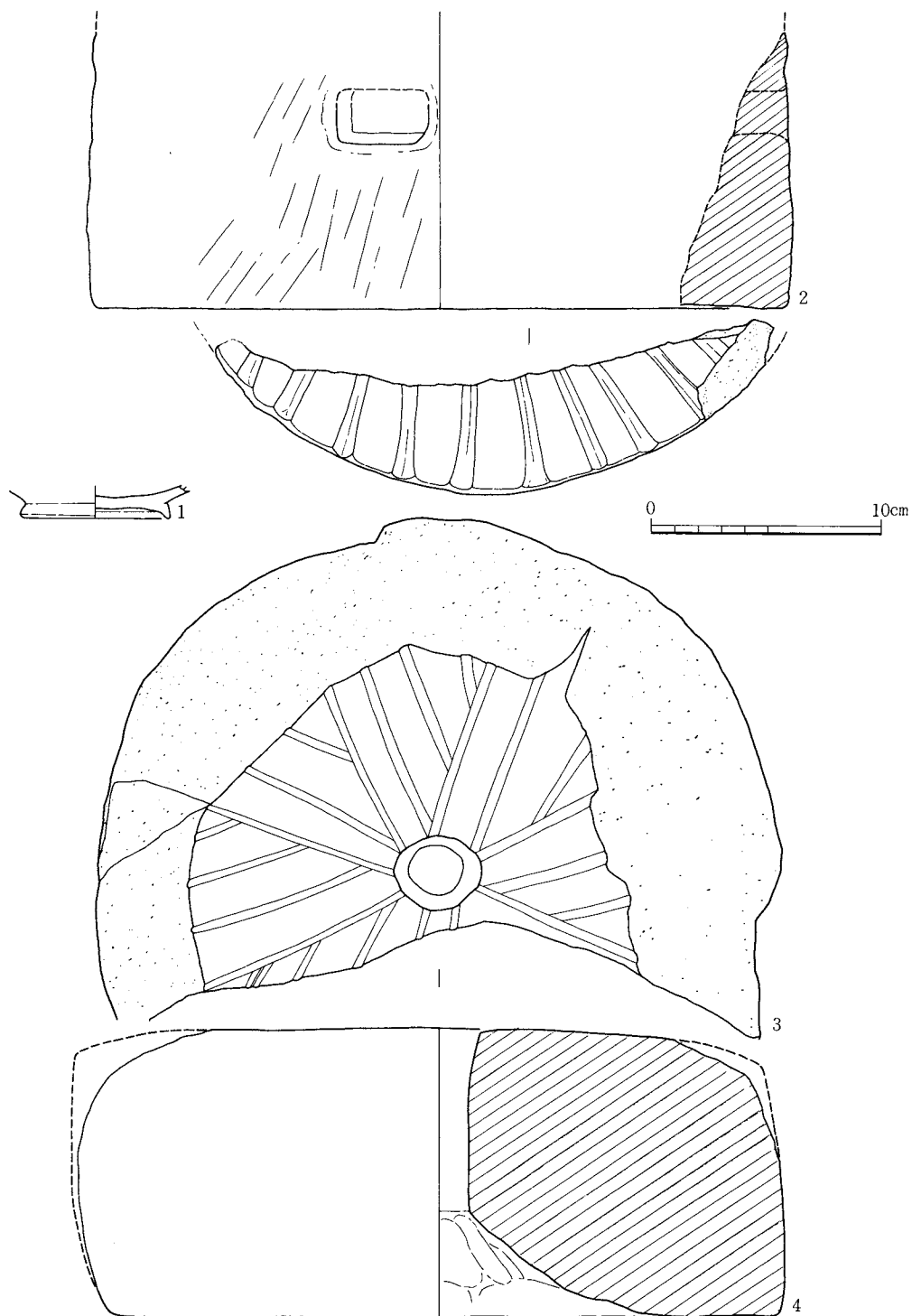




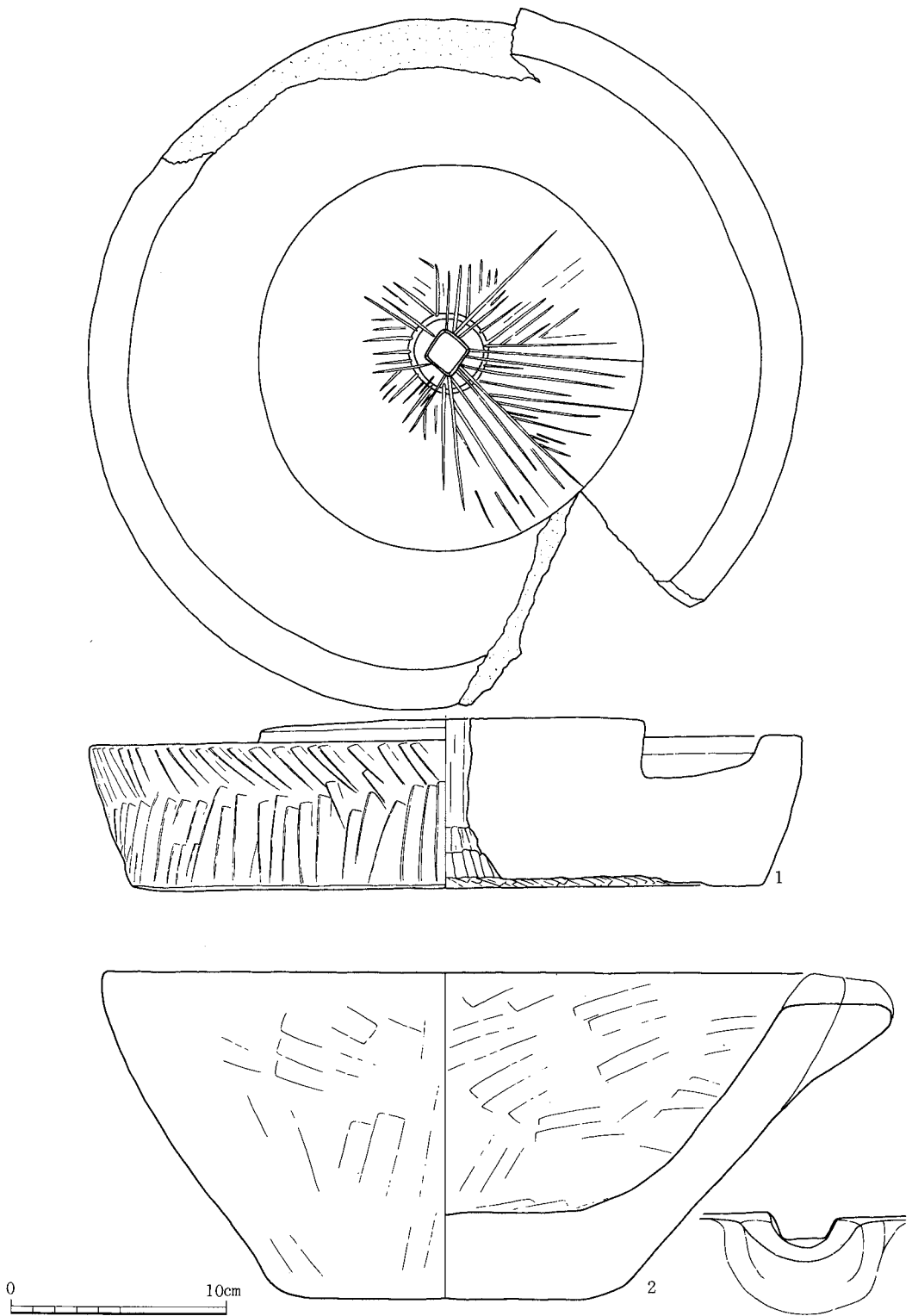
第41図 第2次調査区 第1号掘立柱建物跡出土遺物



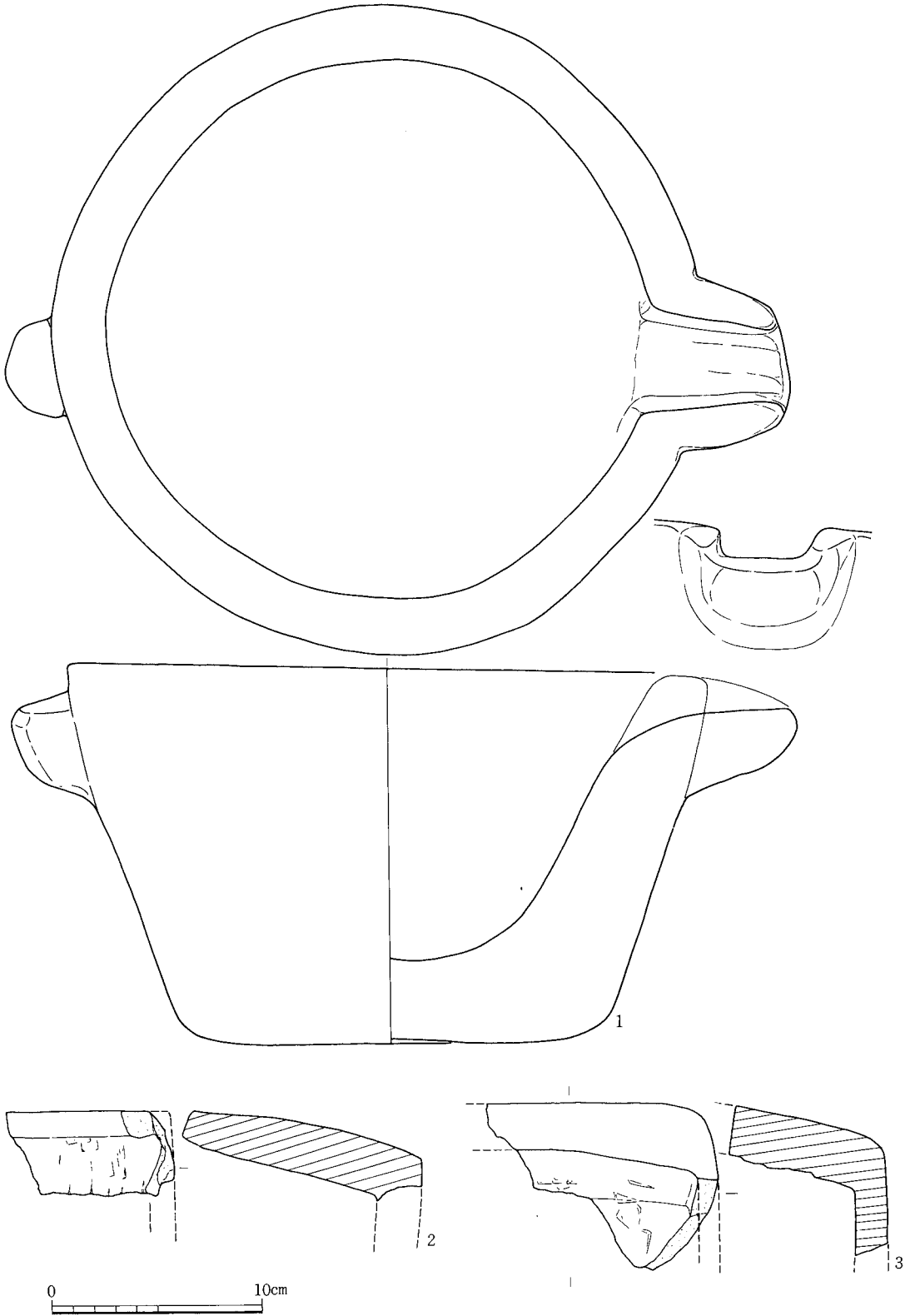
第42図 第2次調査区 第1号井戸(1~13)・第2号井戸(14~18)内出土遺物



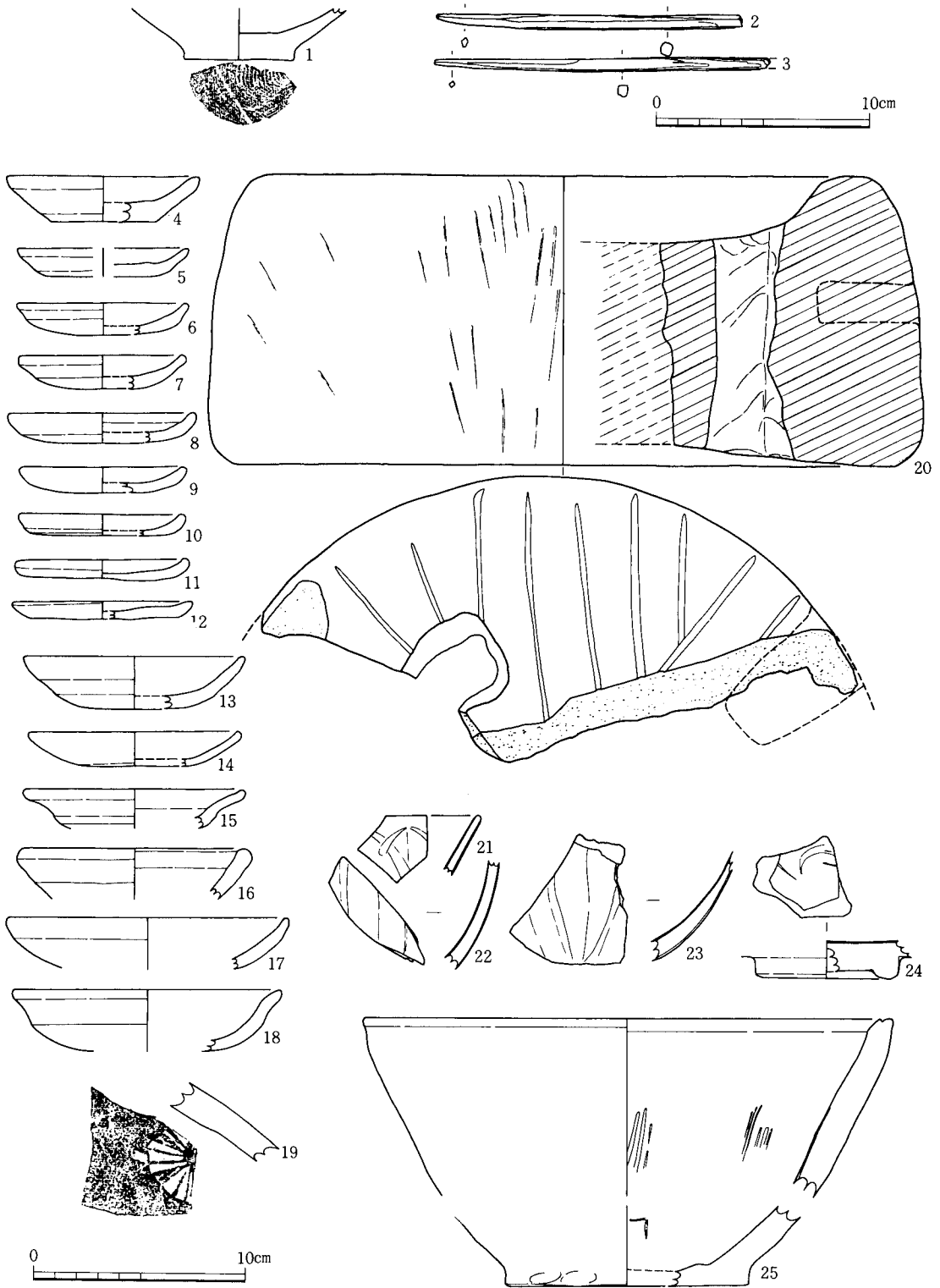
第43図 第2次調査区 第3号井戸内出土遺物



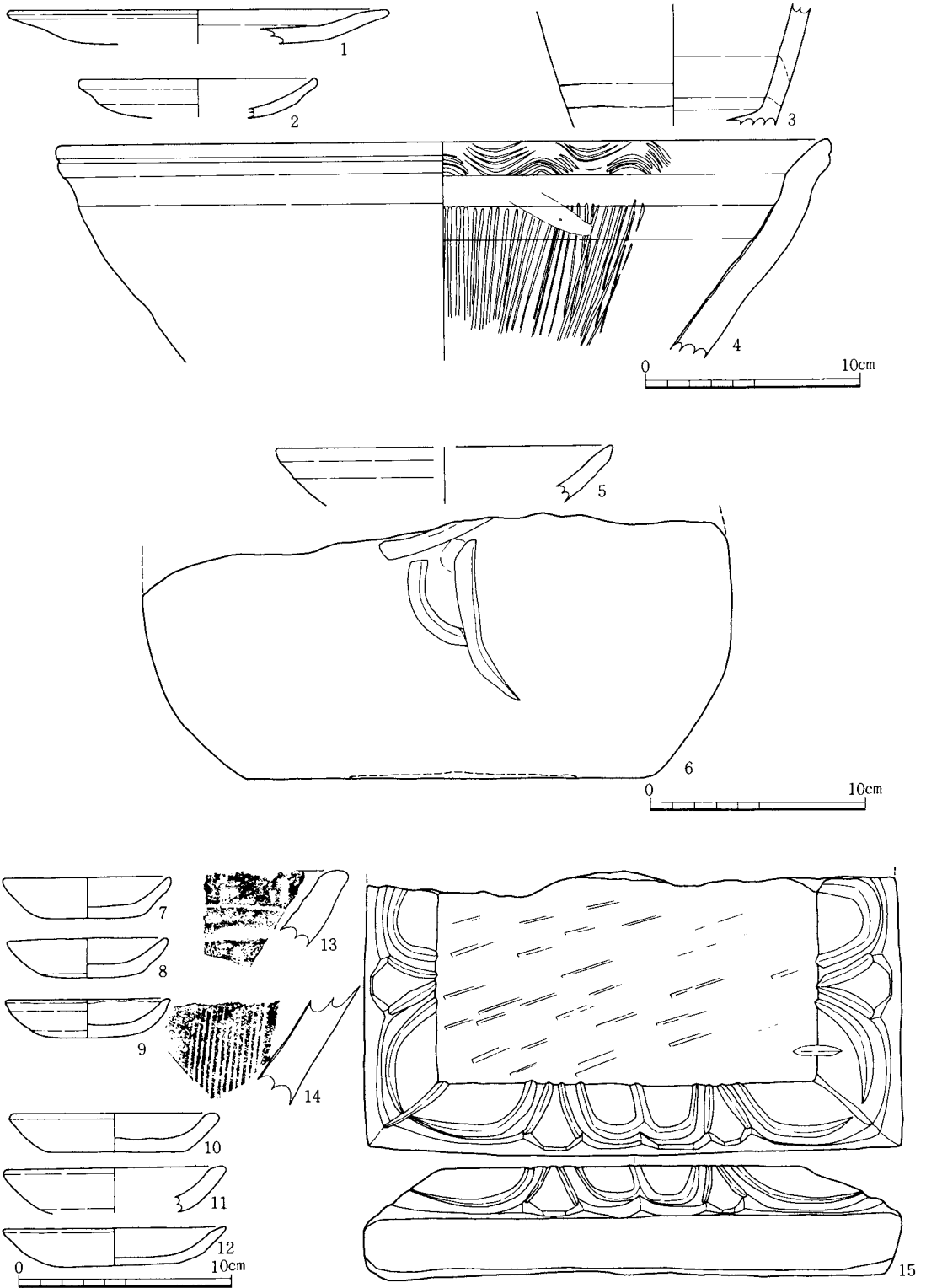
第44図 第2次調査区 第3号井戸内出土遺物



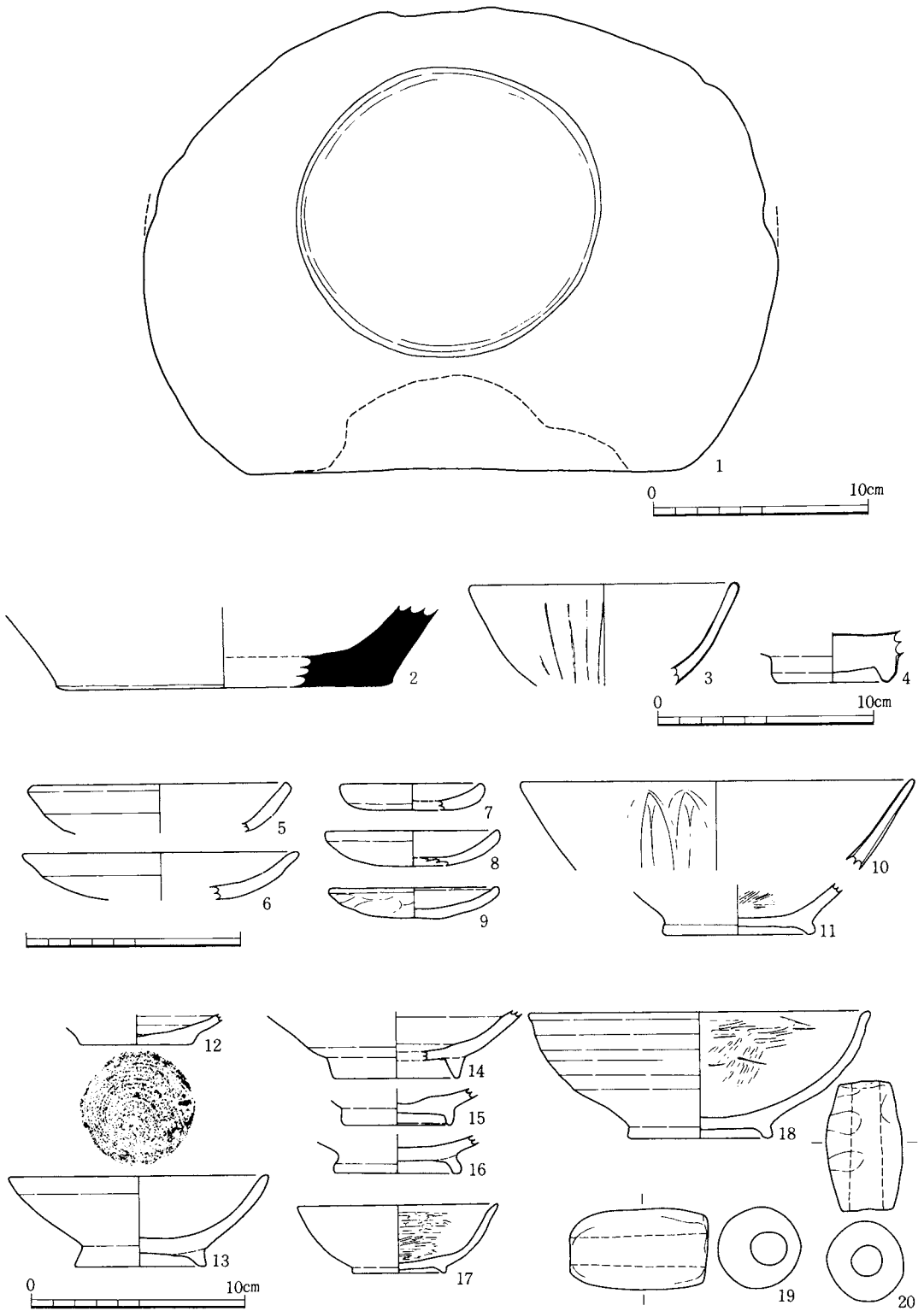
第45図 第2次調査区 第3号井戸内出土遺物



第46図 第2次調査区 第5号井戸(1~3)・第6号井戸(4~25)内出土遺物

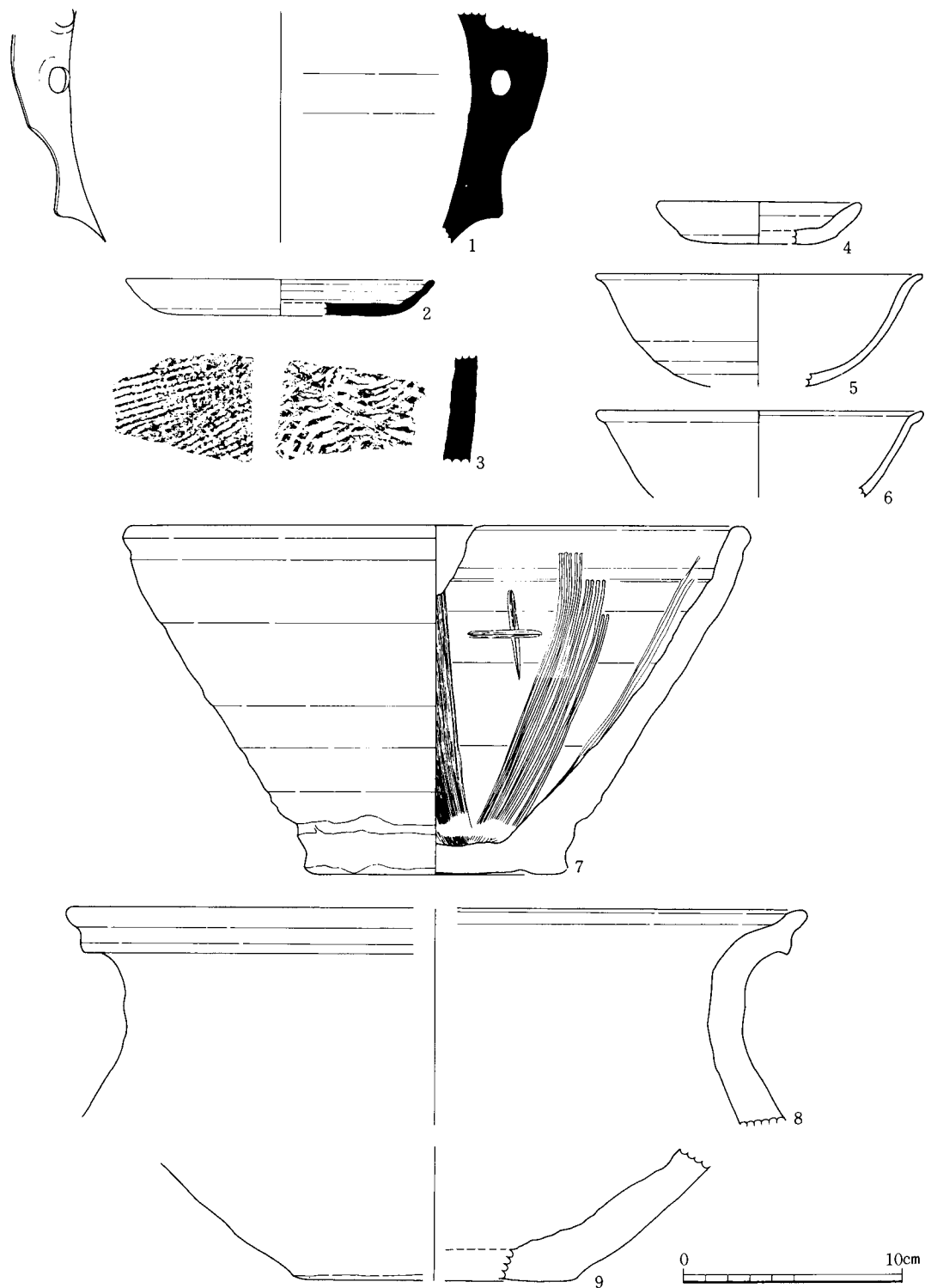


第47図 第2次調査区 第7号井戸(1~4)・8号井戸(5~6)・9号井戸(7~15)内出土遺物

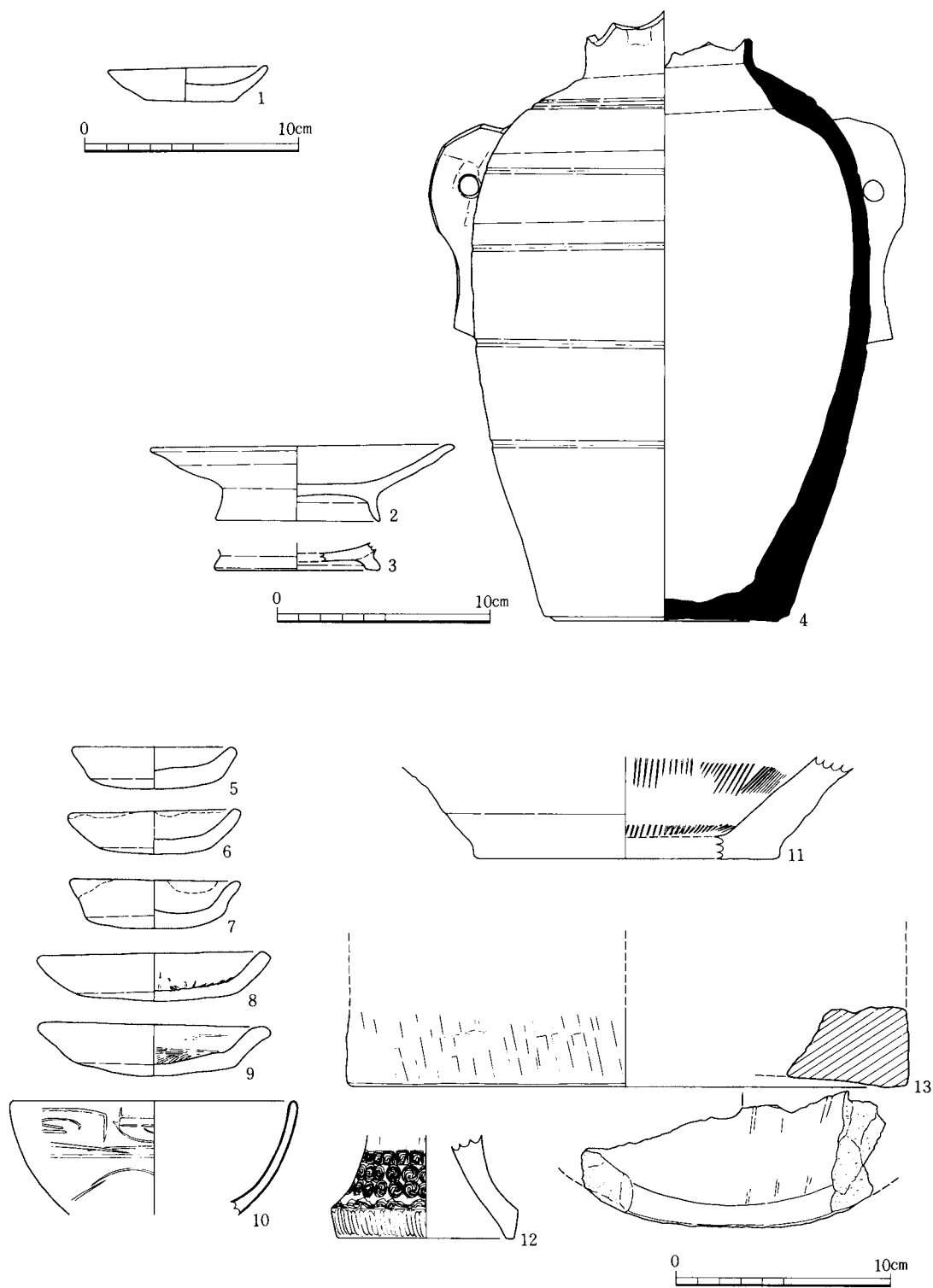


第48図 第2次調査区 第9号井戸(1)・10号井戸(2～4)・11号井戸(5～11)・12号井(12～20)内出土遺物

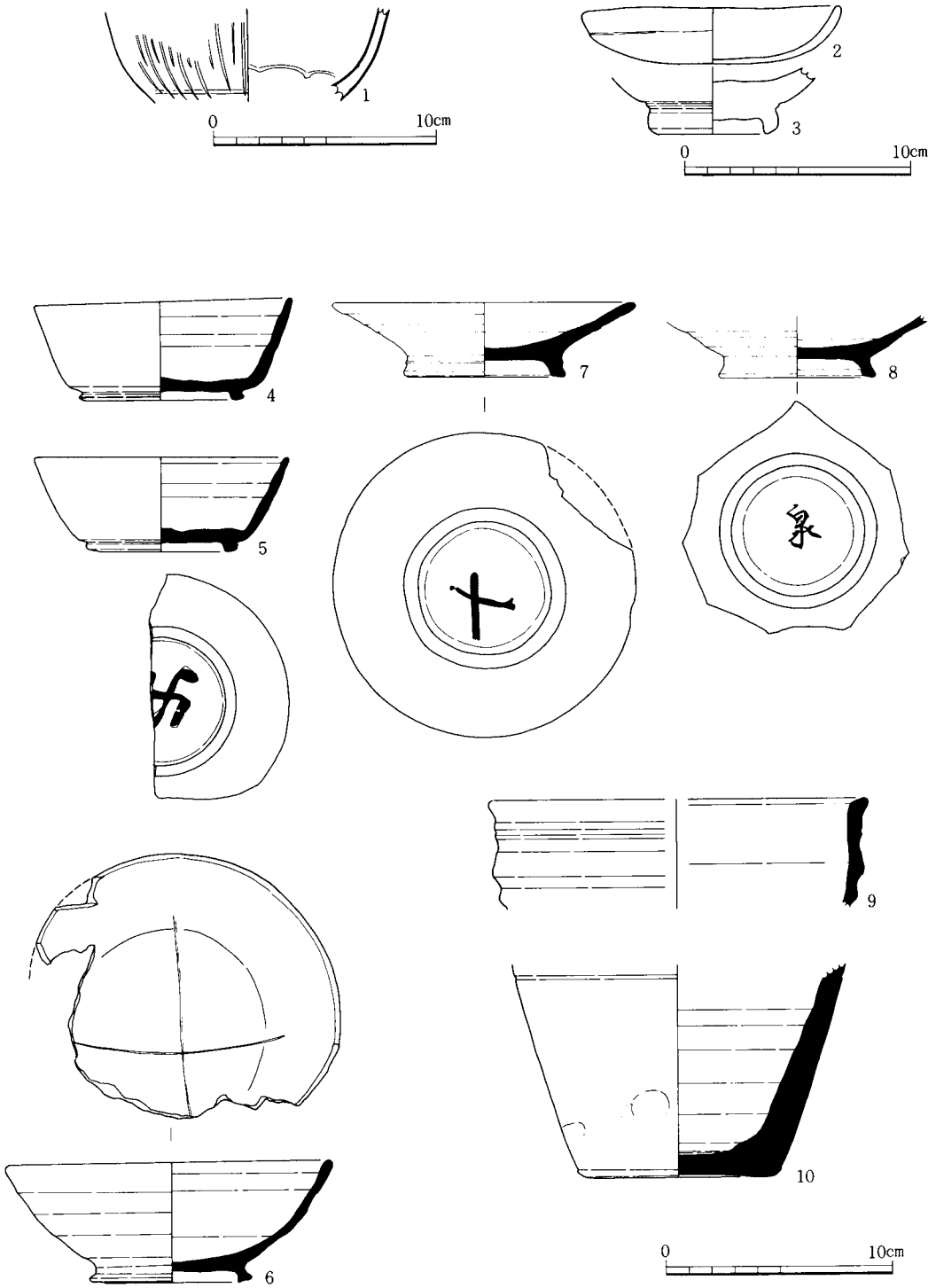




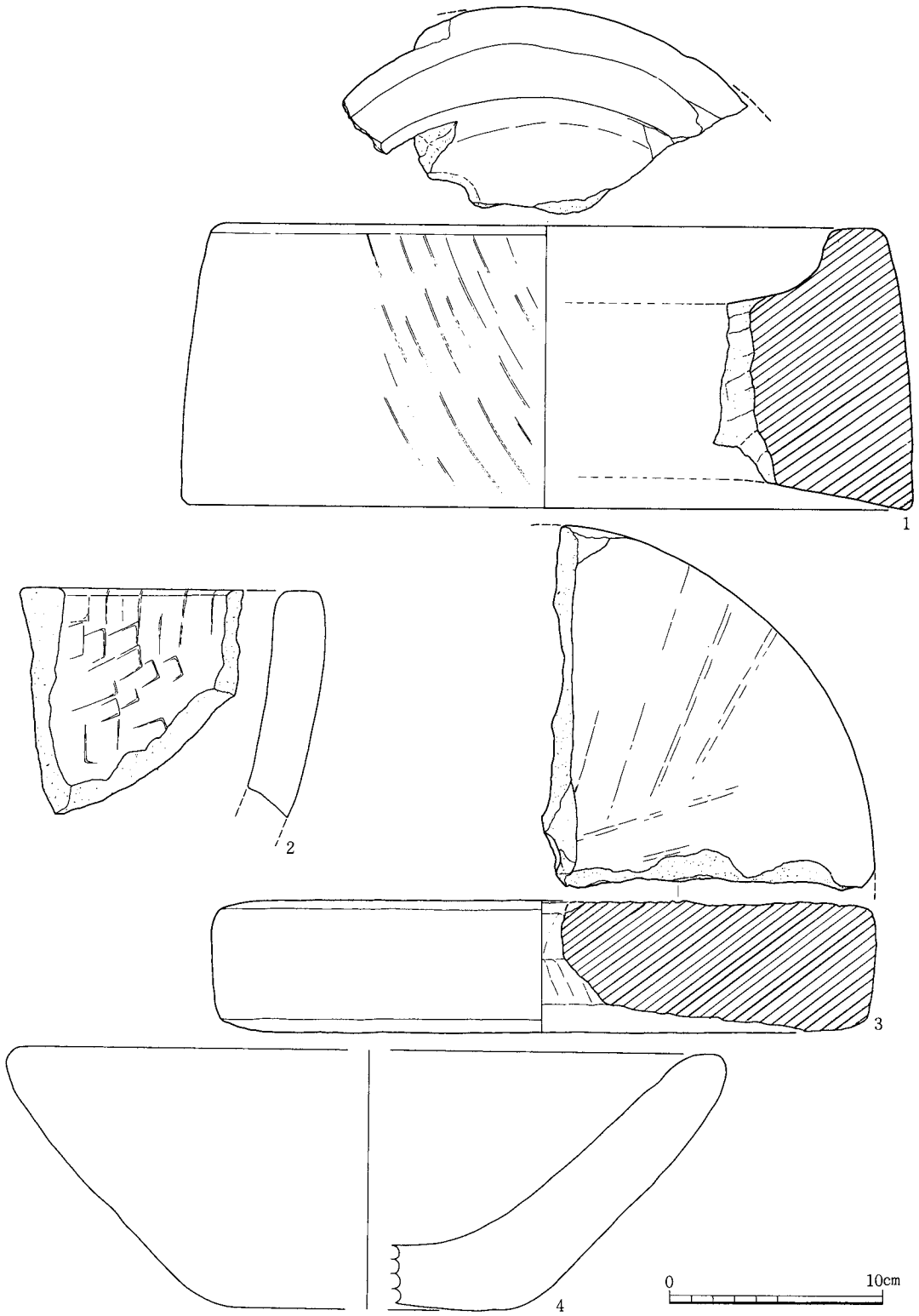
第49図 第2次調査区 第13号井戸内出土遺物



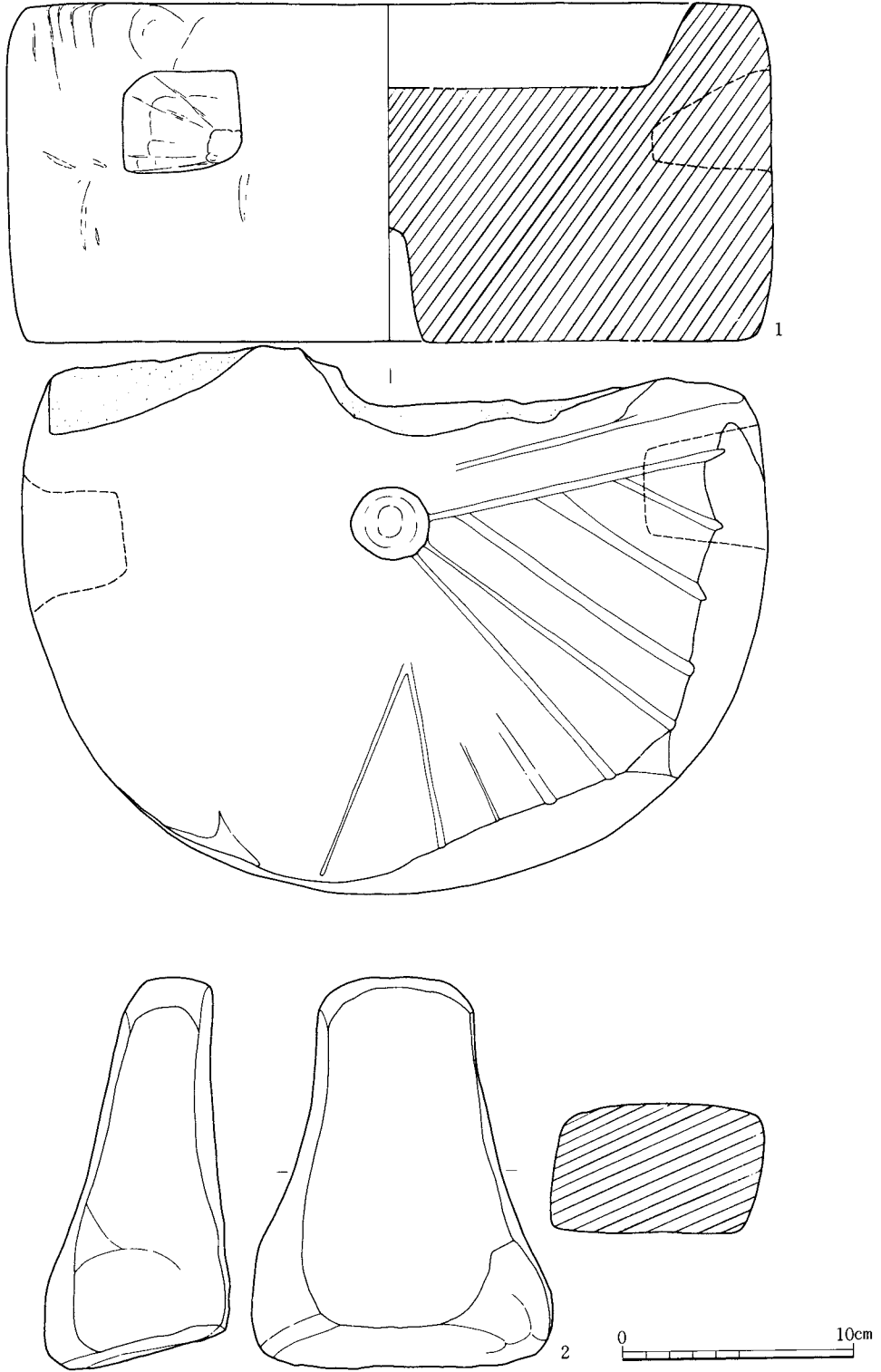
第50図 第2次調査区 第14号井戸(1)・15号井戸(2～4)・16号井戸(5～13)内出土遺物



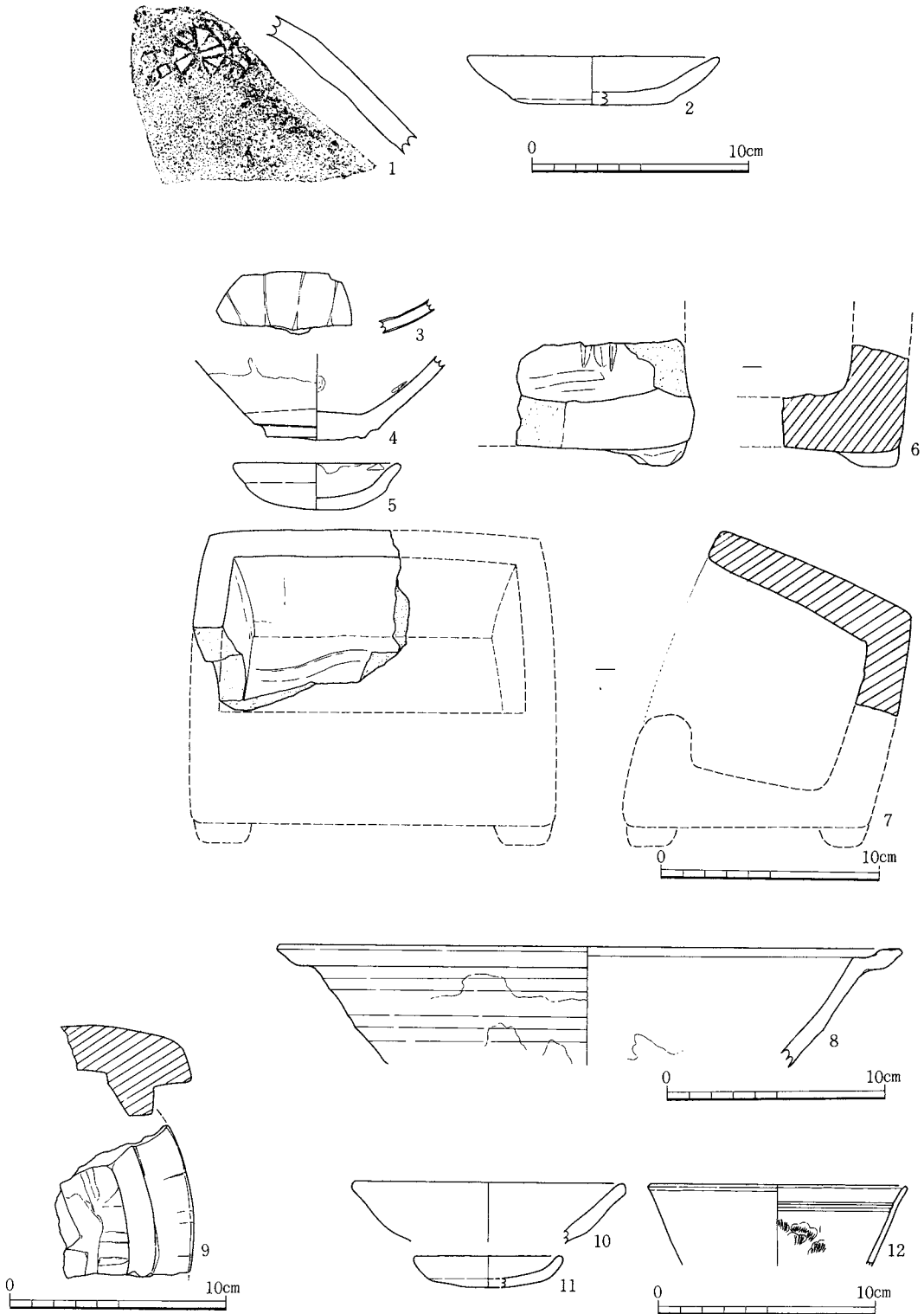
第51図 第2次調査区 第20号井戸(1)・21号井戸(2・3)・22号井戸(4～10)内出土遺物



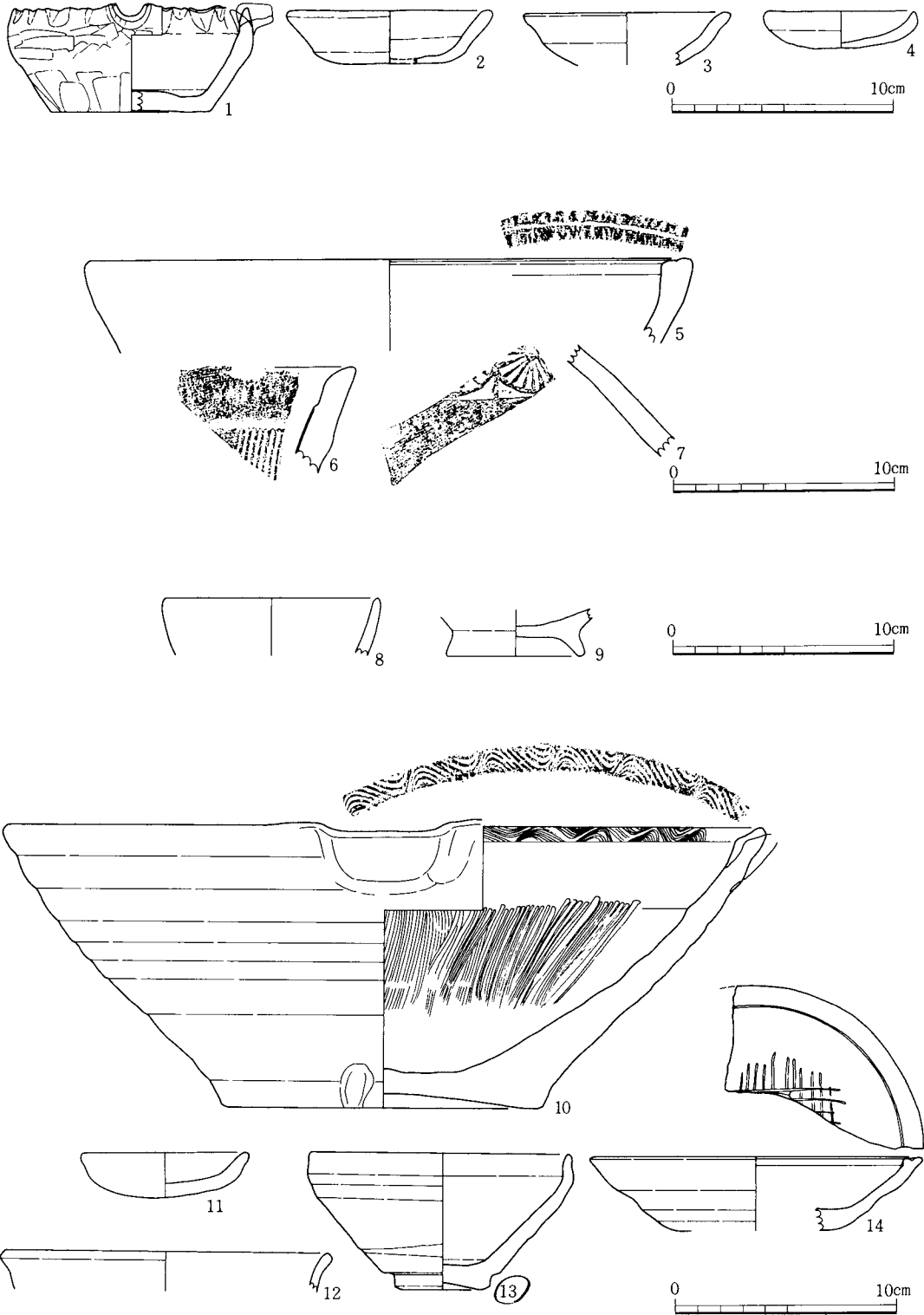
第52図 第2次調査区 第1号竖穴内出土遺物



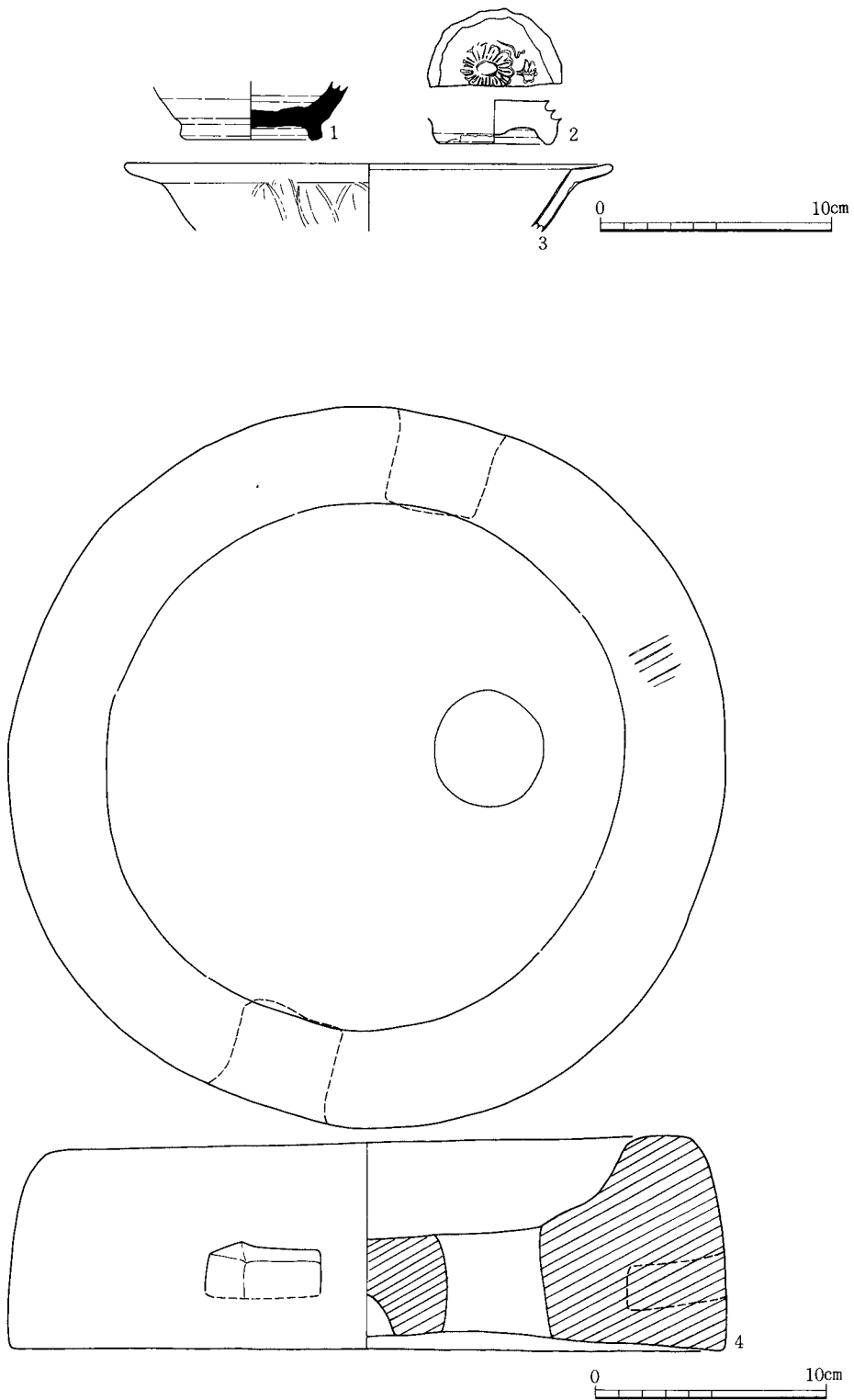
第53図 第2次調査区 第2号竖穴内出土遺物



第54図 第2次調査区 第3号竖穴(1・2)・4号竖穴(3~7)・5号竖穴(8)・  
第1号土坑(9)・2号土坑(10~12)出土遺物

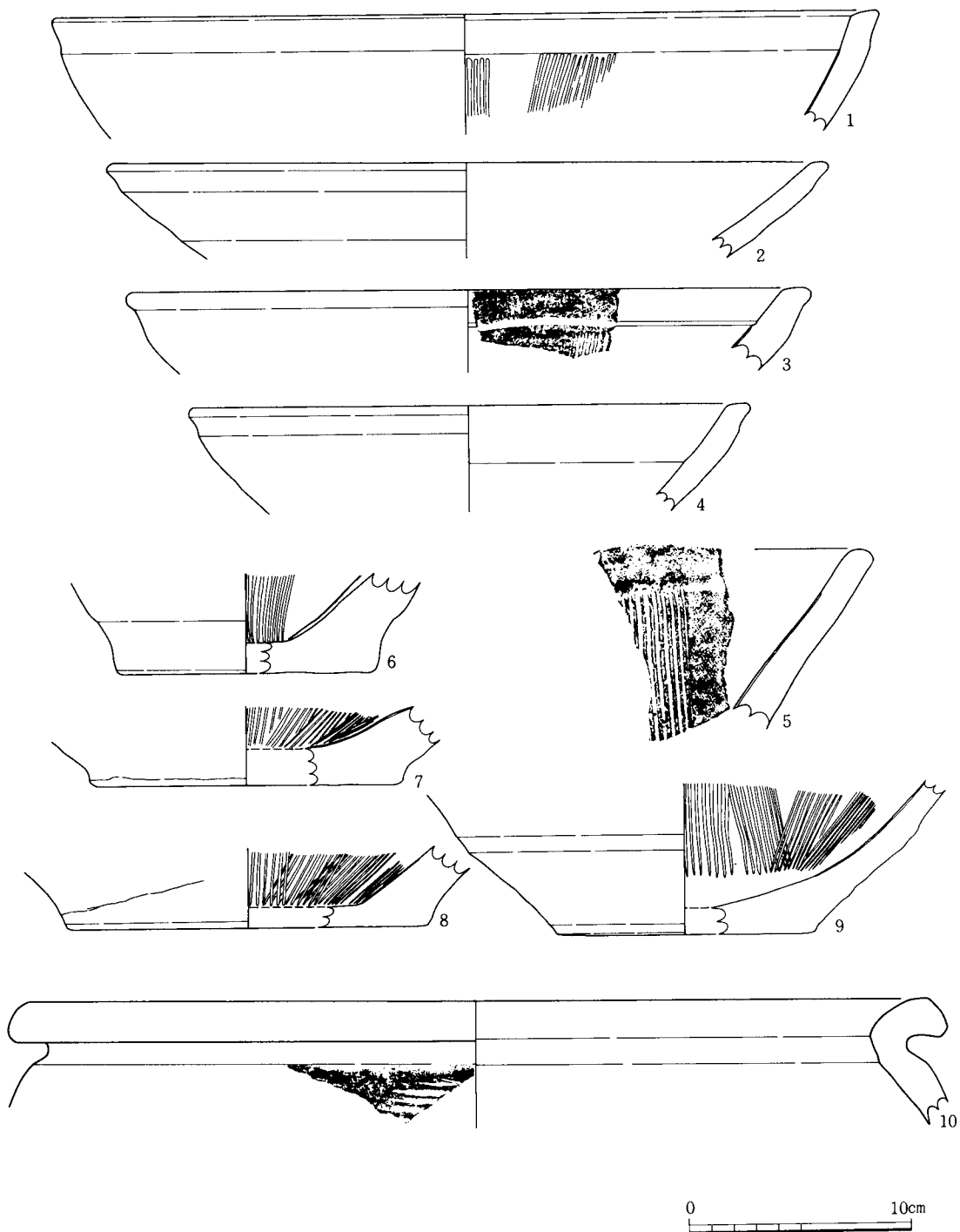


第55図 第2次調査区 第4号土坑(1~4)・13号土坑(5~7)・15号土坑(8・9)  
 ・19号土坑(10~14)出土遺物

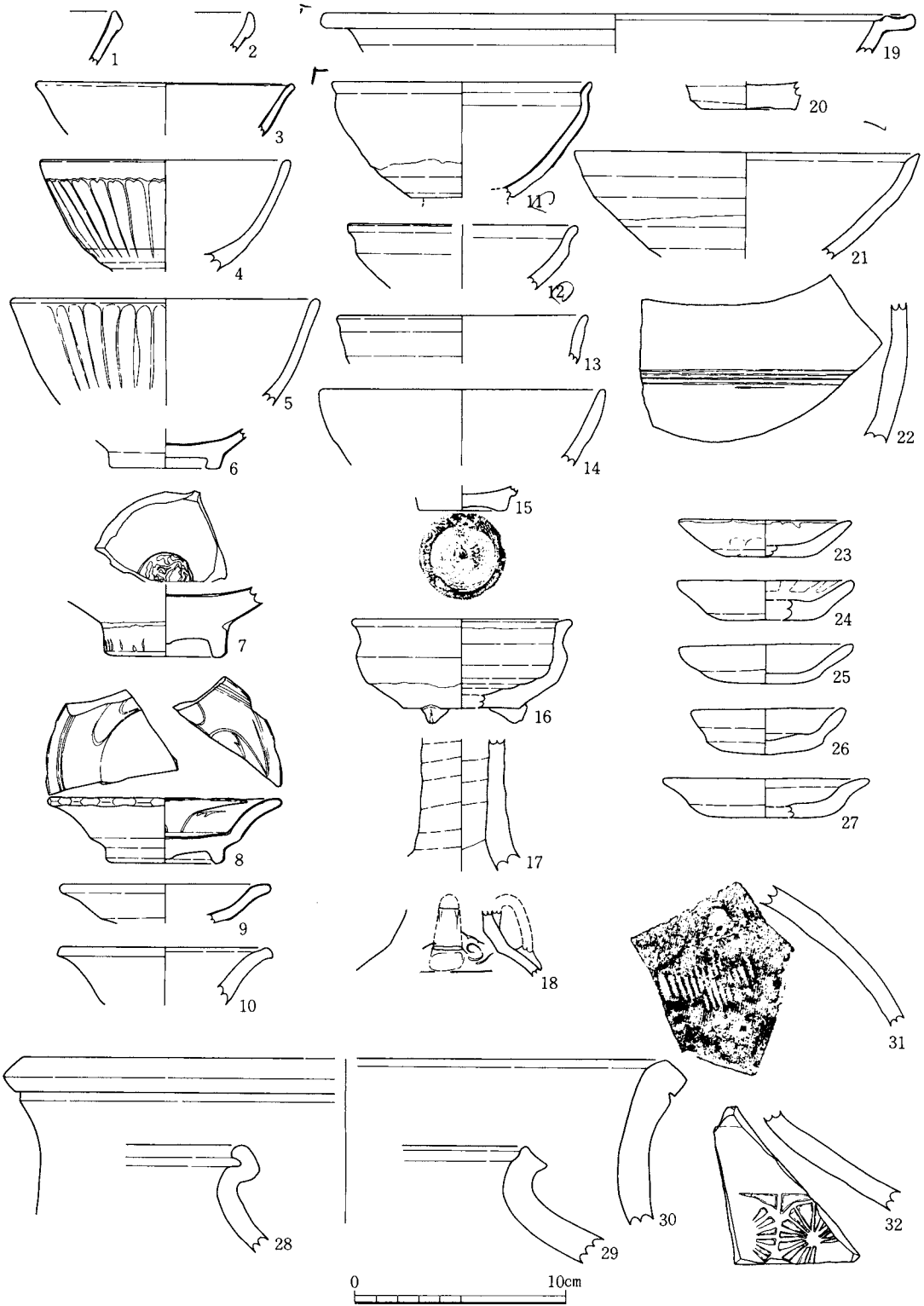


第56図 第2次調査区 第21号土坑(1~3)・23号土坑(4)出土遺物

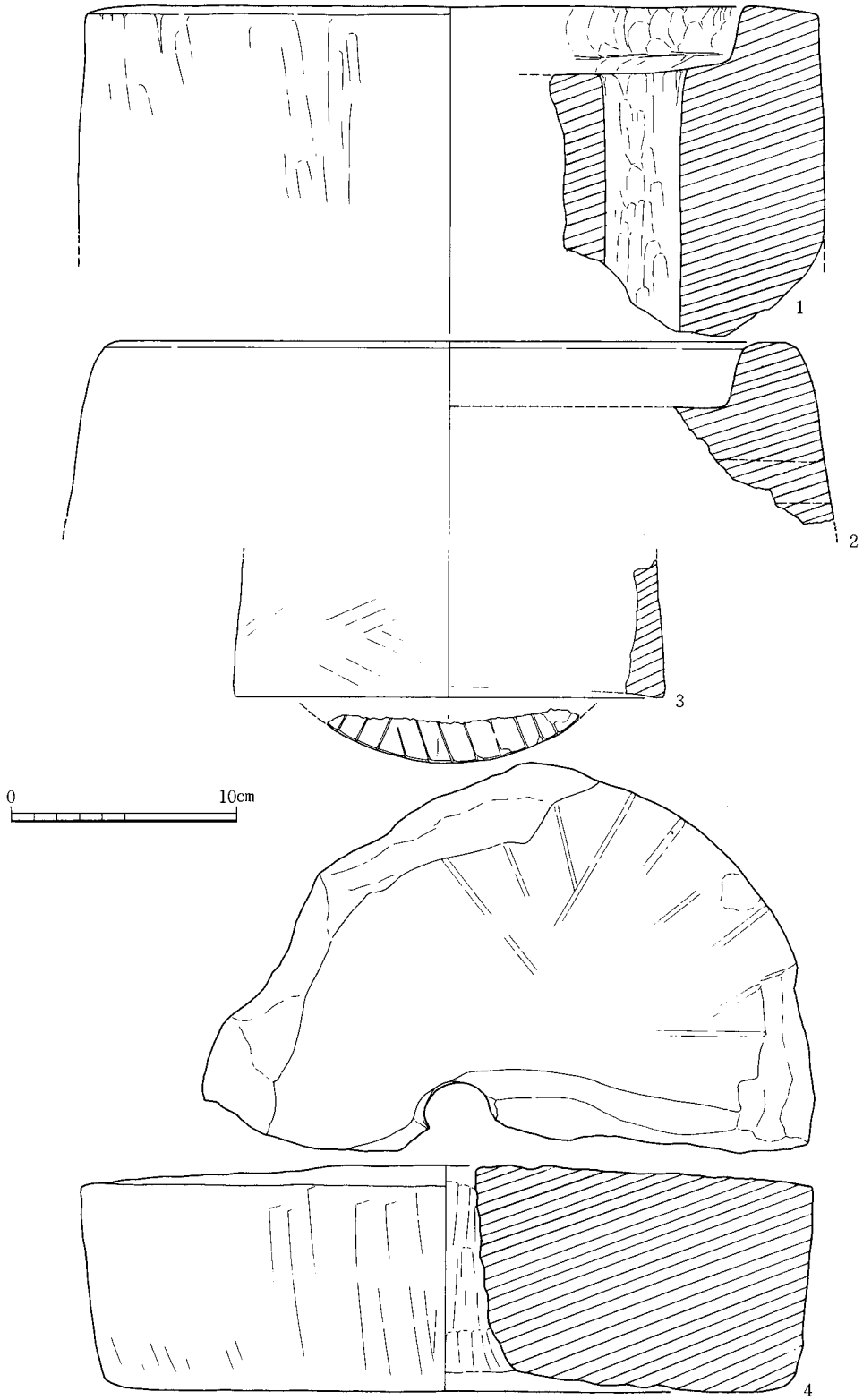




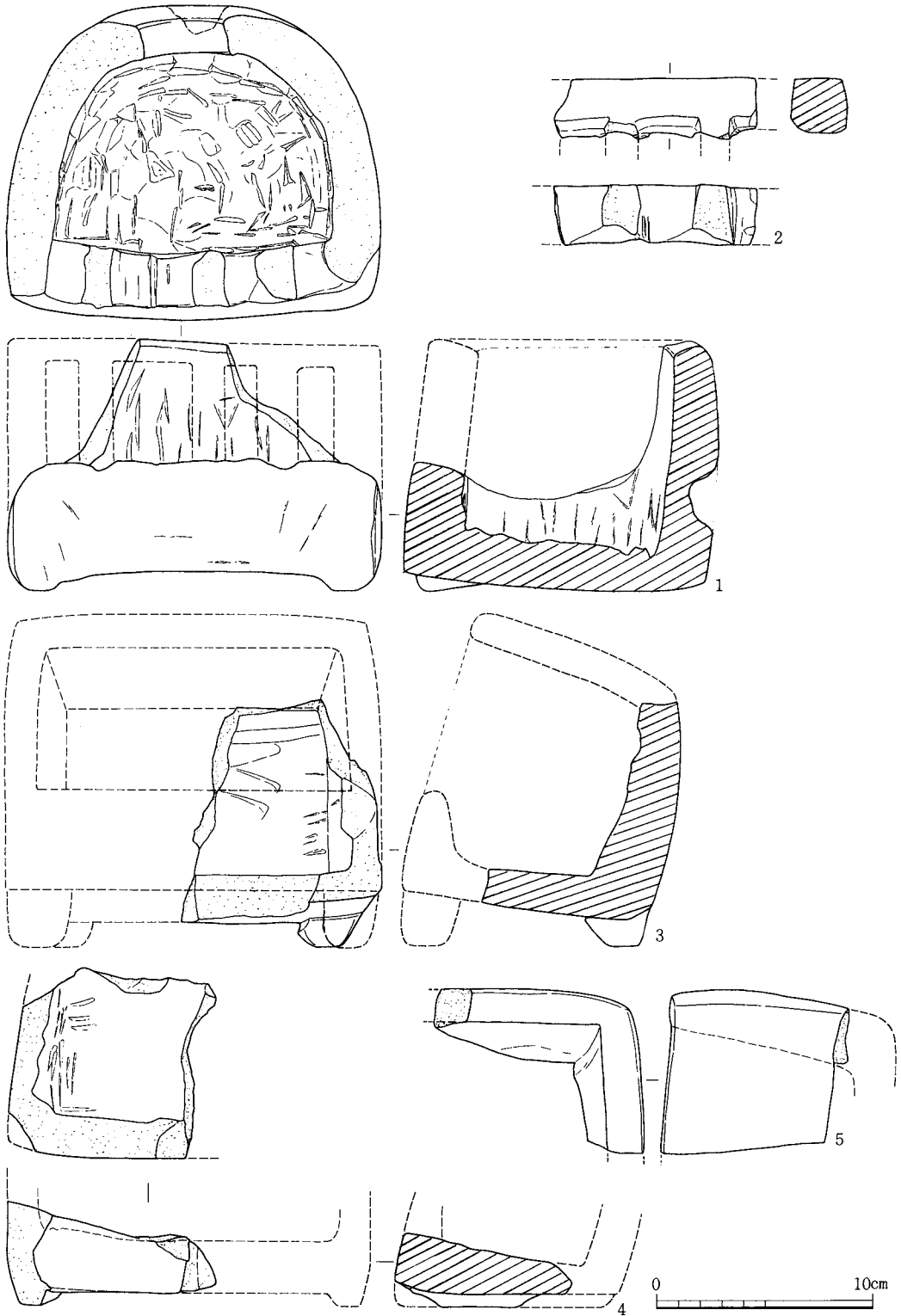
第57図 第2次調査区 第1号溝内出土遺物



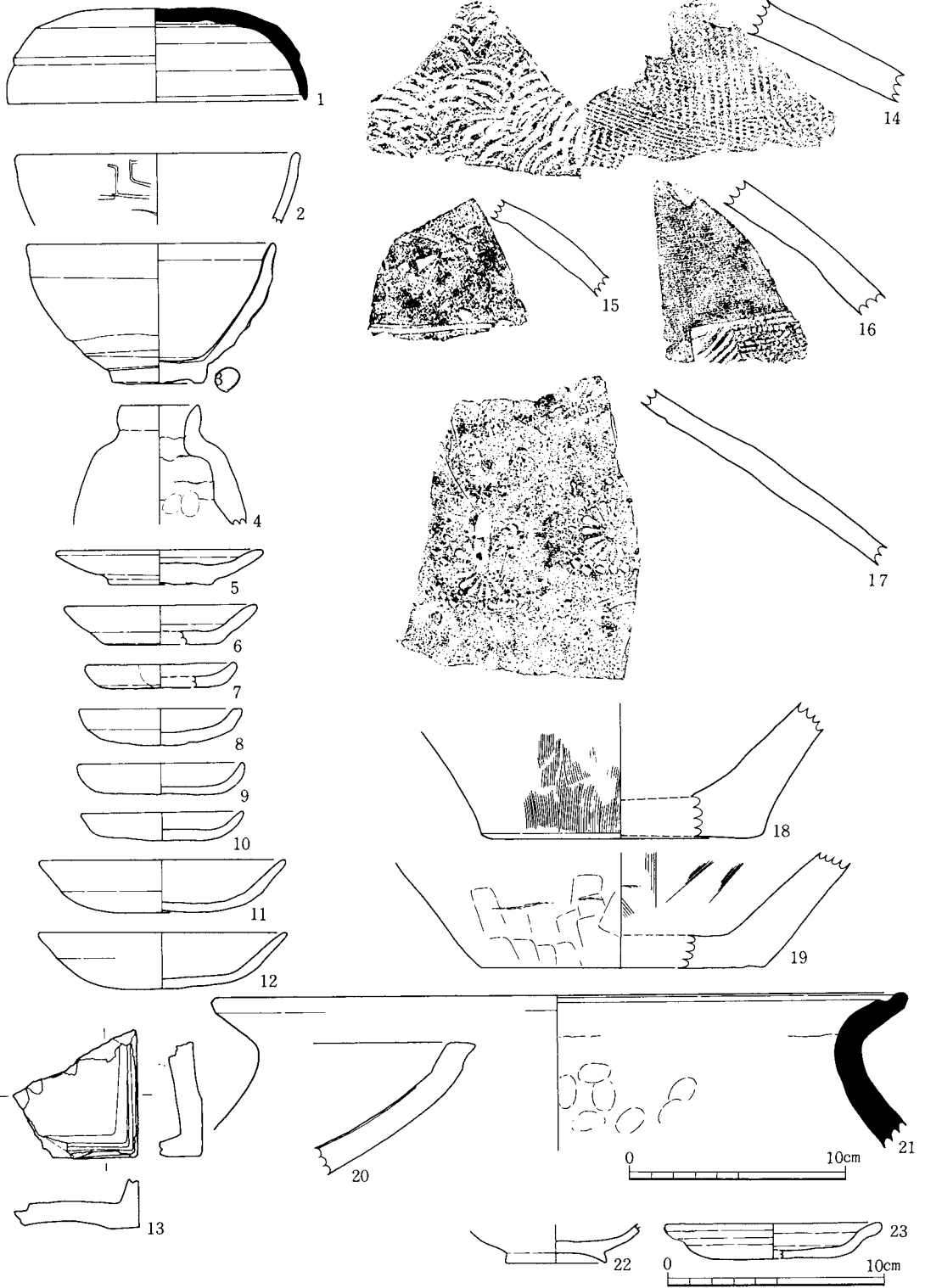
第58図 第2次調査区 第1号溝内出土遺物



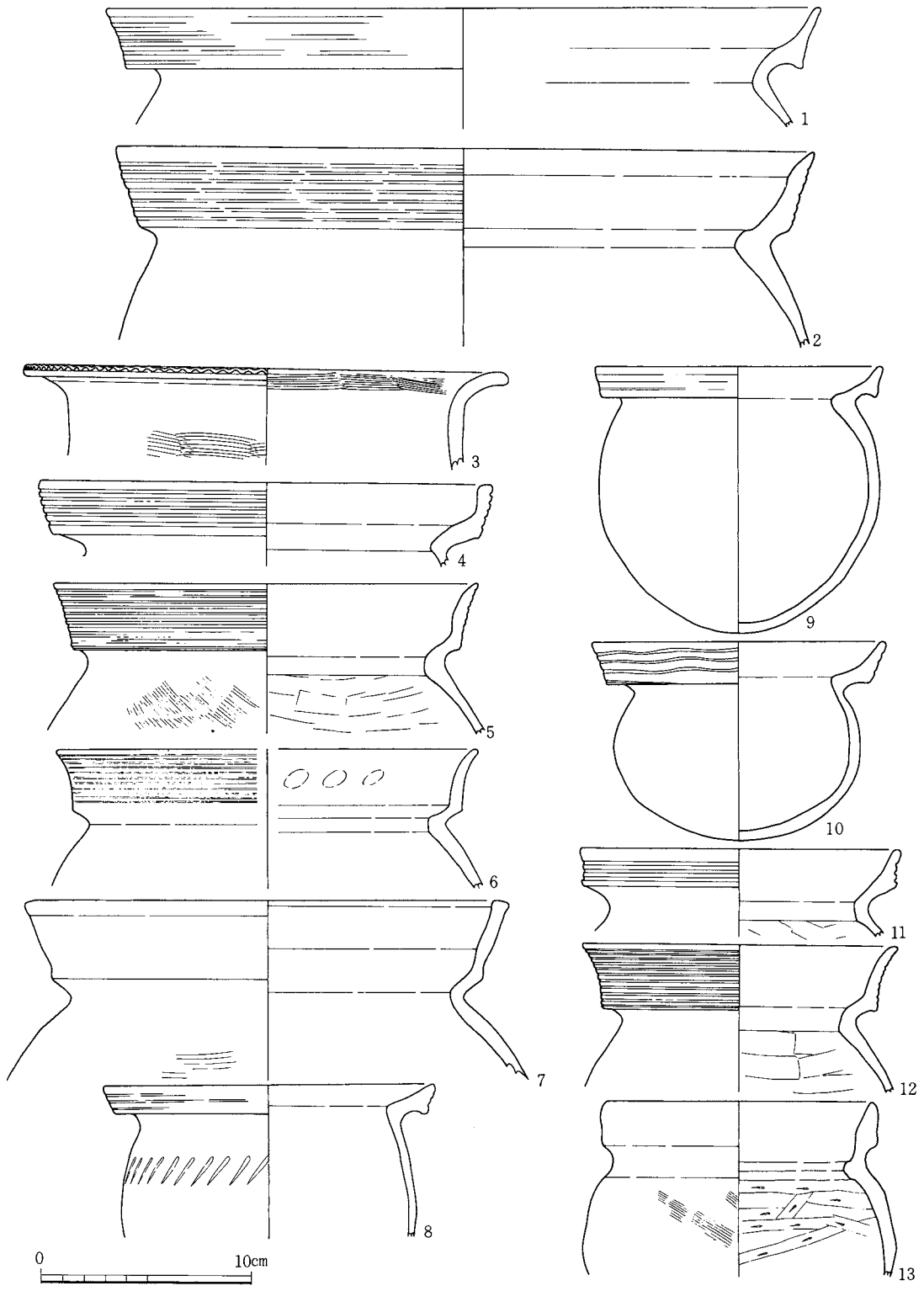
第59図 第2次調査区 第1号溝内出土遺物



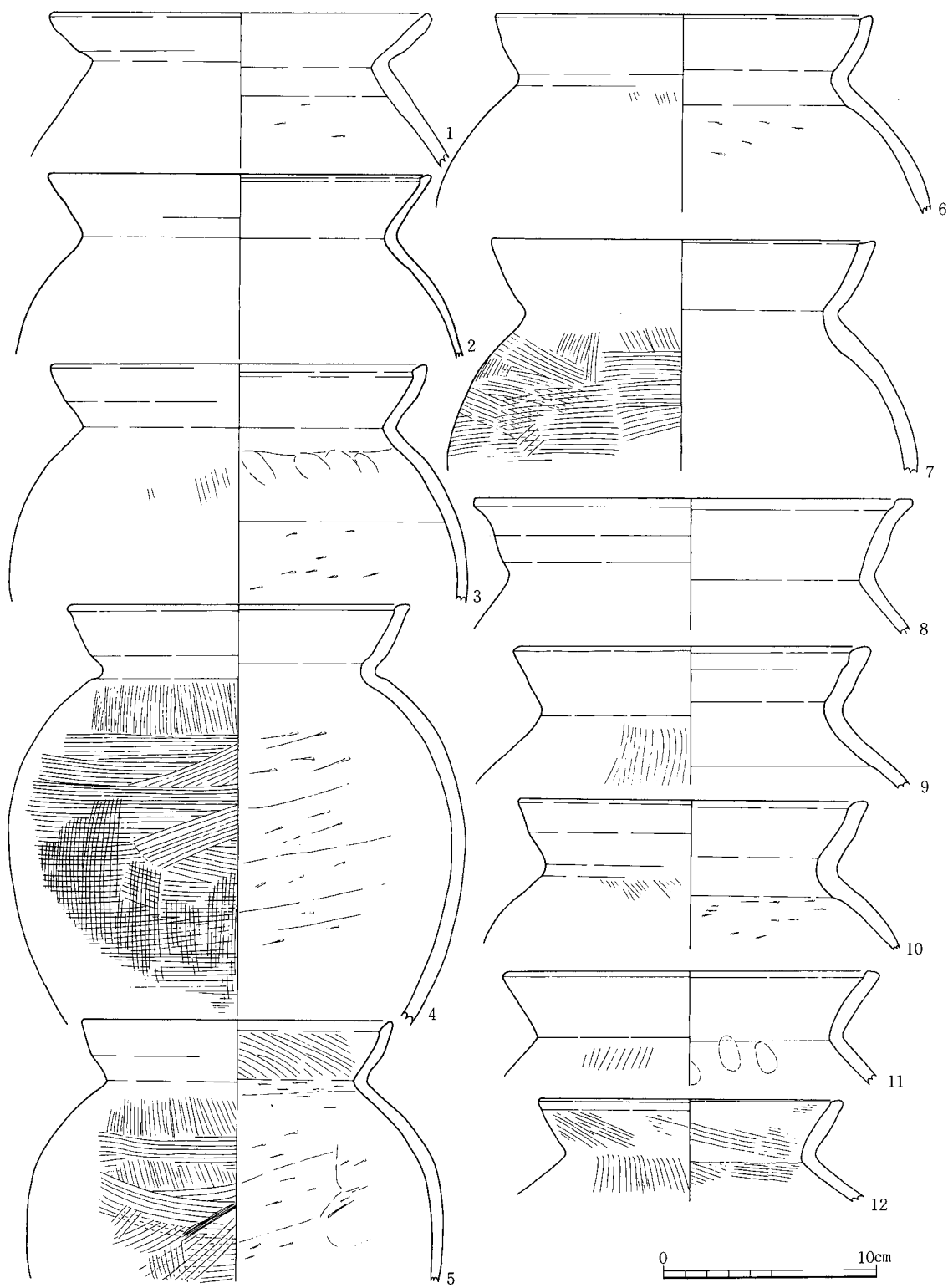
第60图 第2次調査区 第1号溝内出土遺物



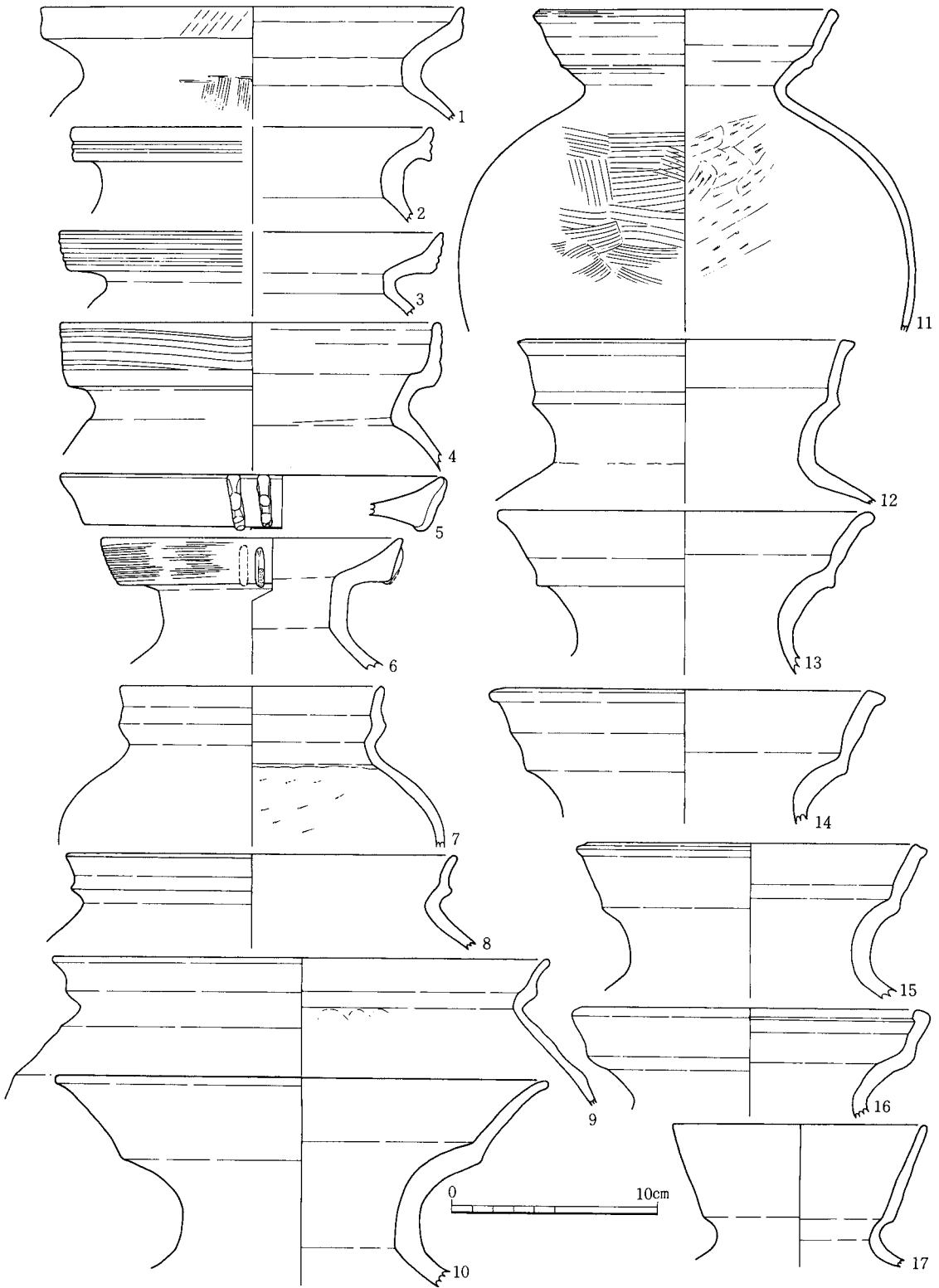
第61図 第2次調査区 第2号溝(1~21)・第3号溝(22・23)出土遺物



第62図 第2次調査区 下部包含層中出土遺物

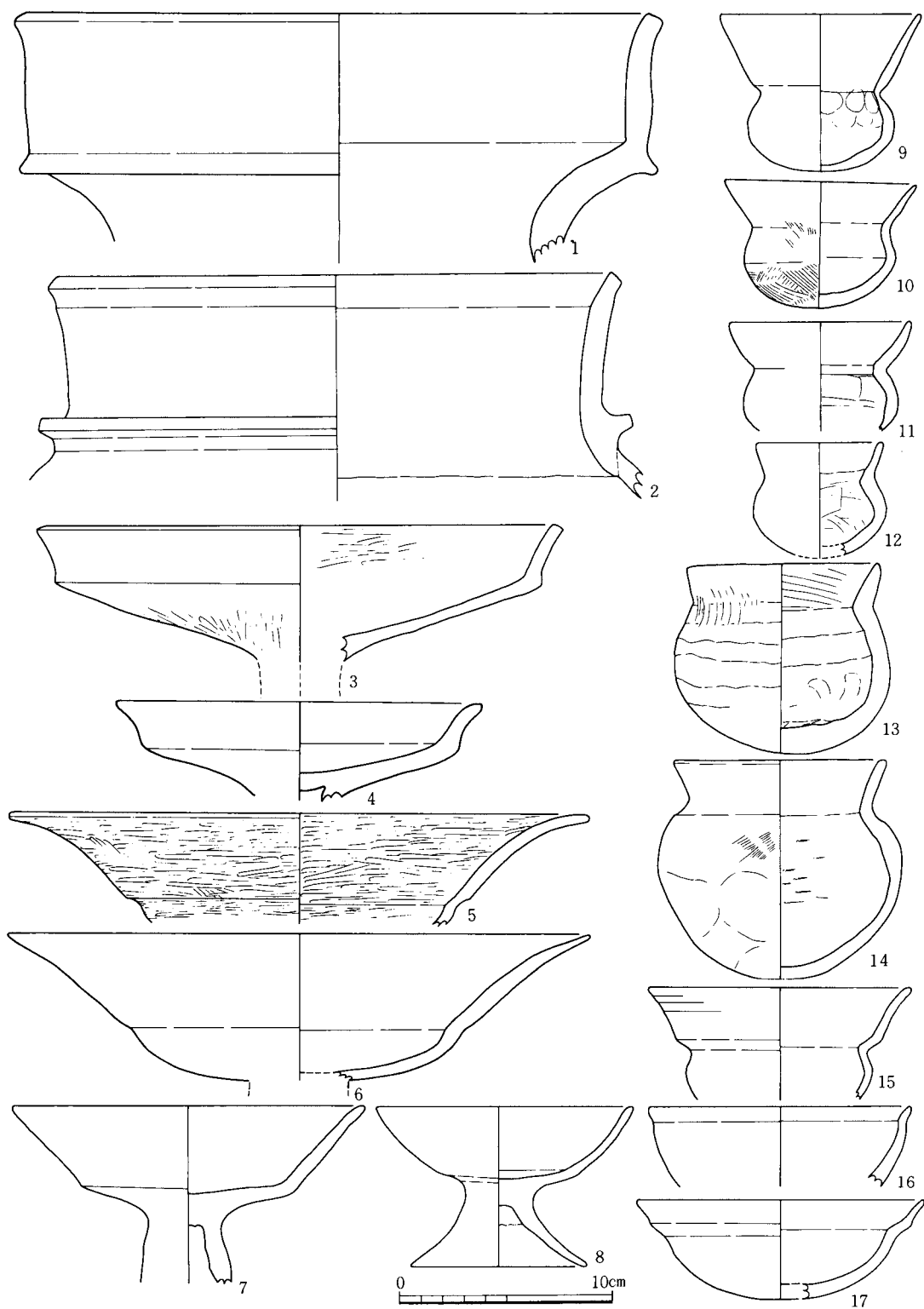


第63図 第2次調査区 下部包含層中出土遺物

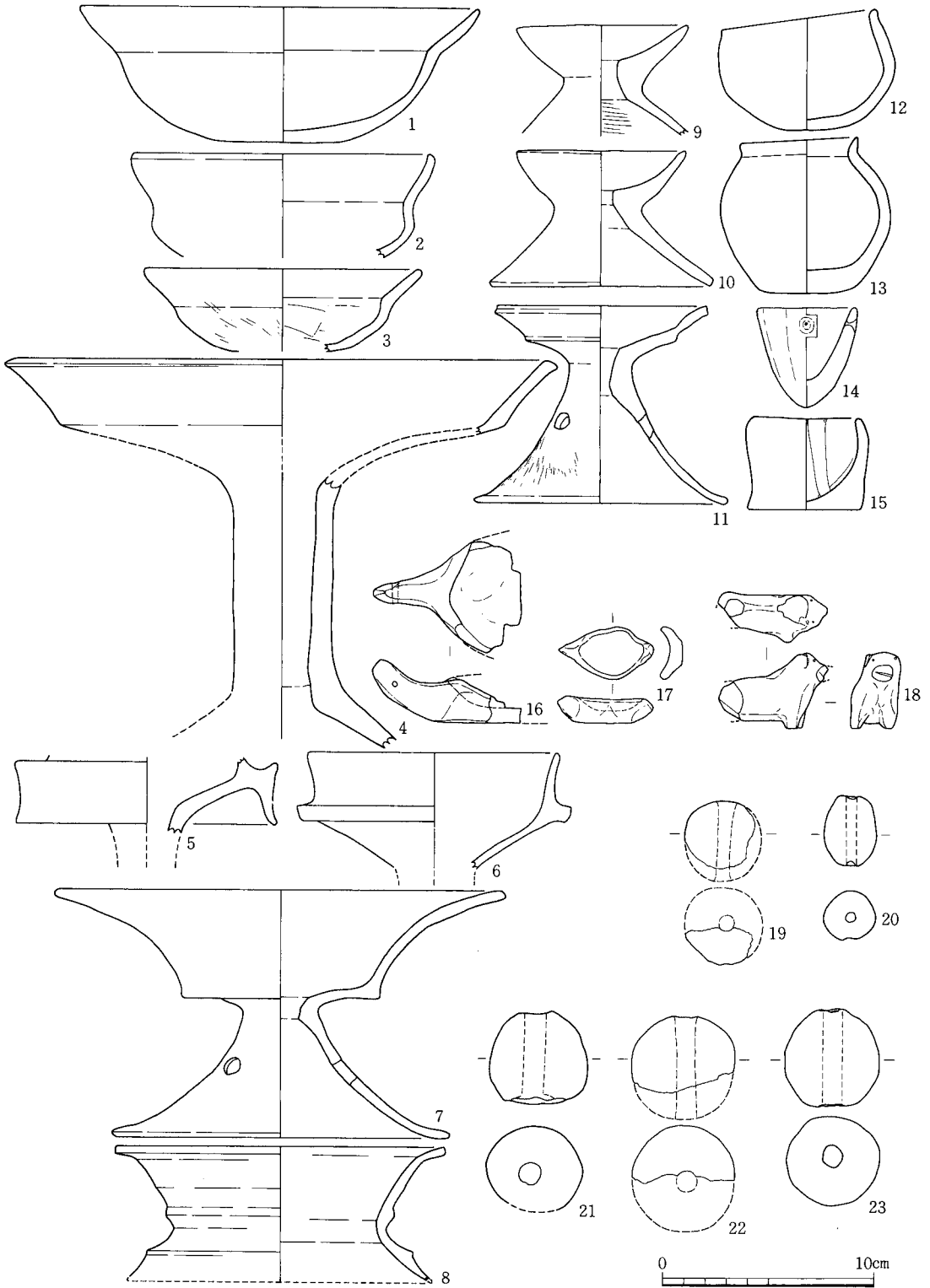


第64図 第2次調査区 下部包含層中出土遺物

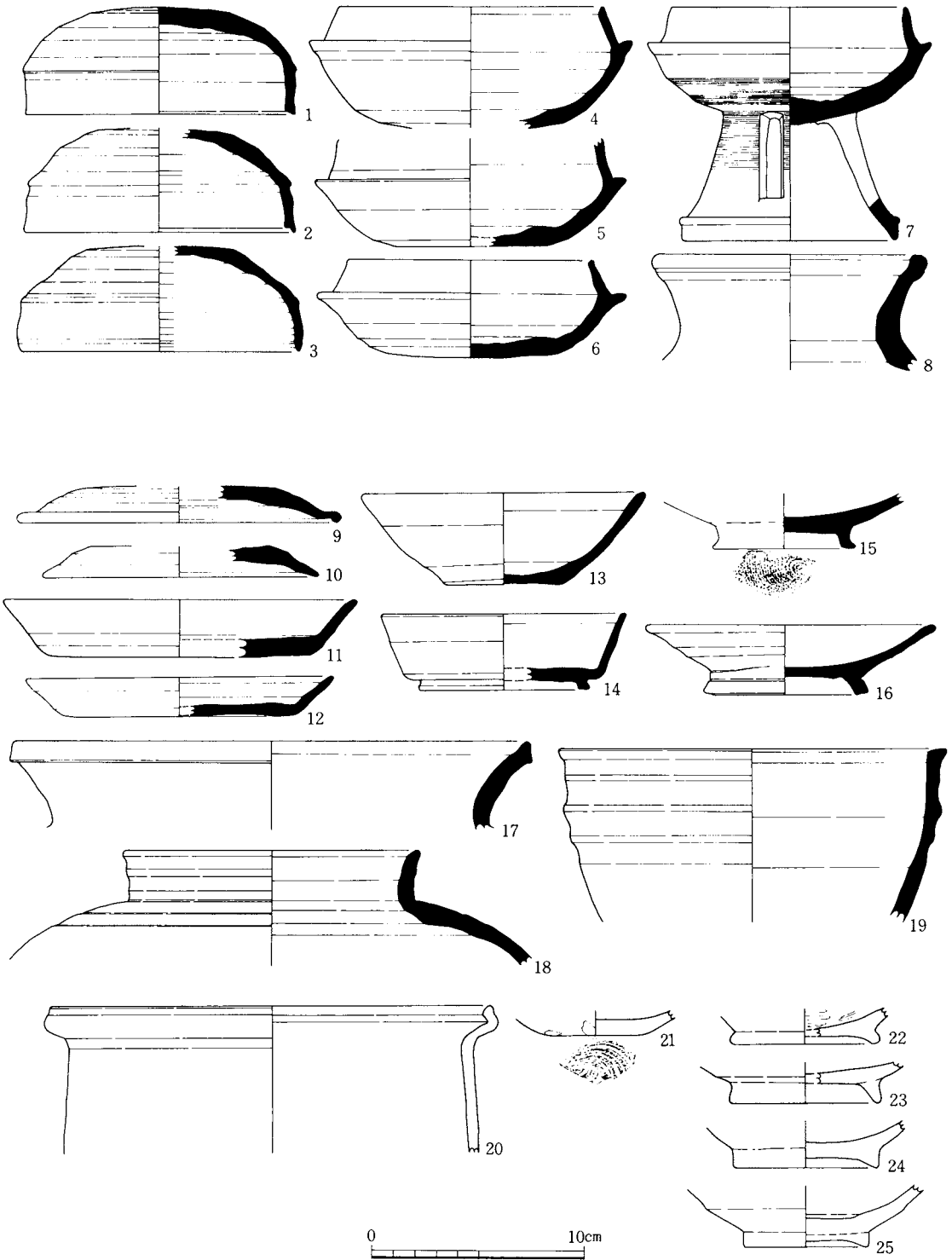




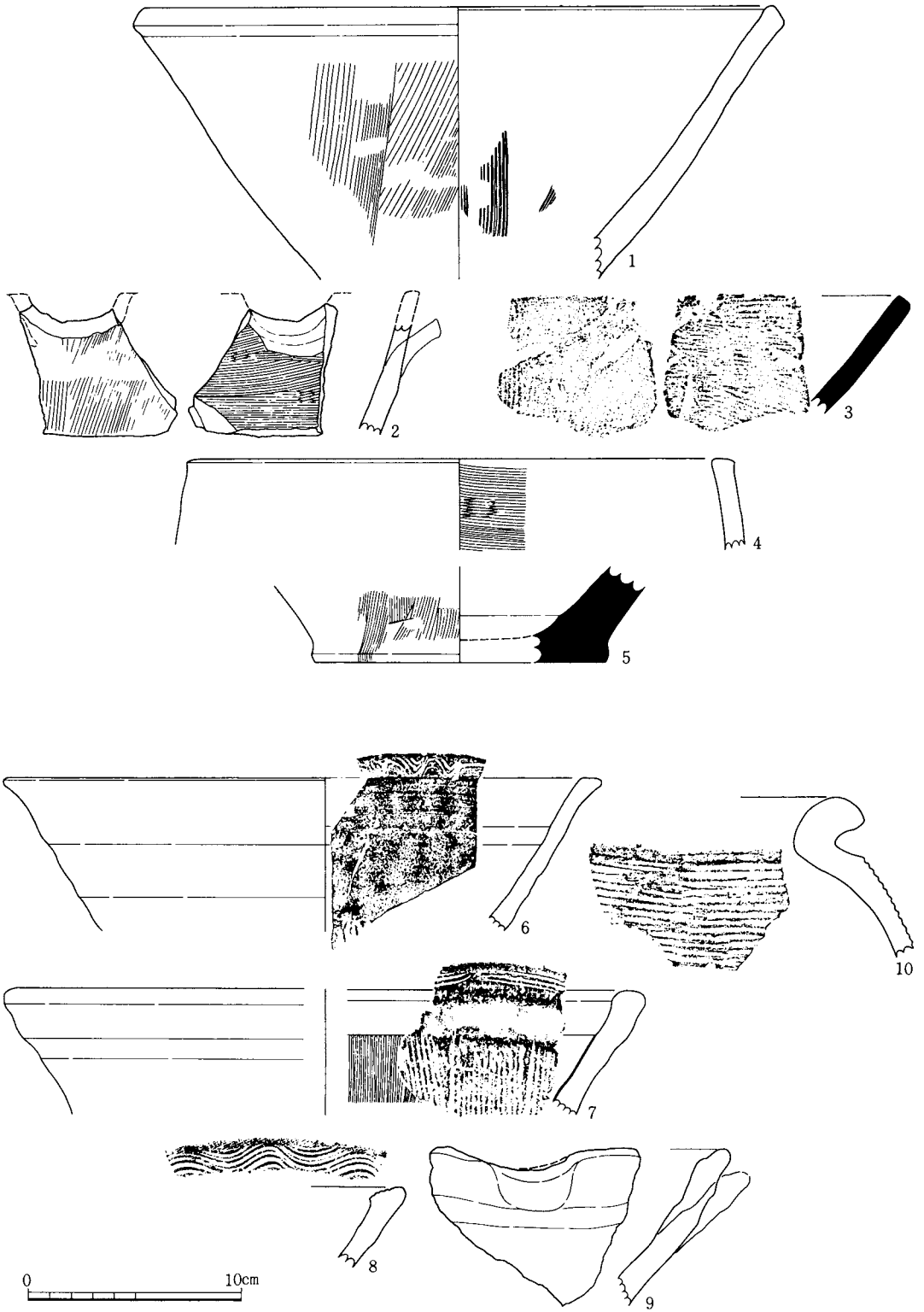
第65図 第2次調査区 下部包含層中出土遺物



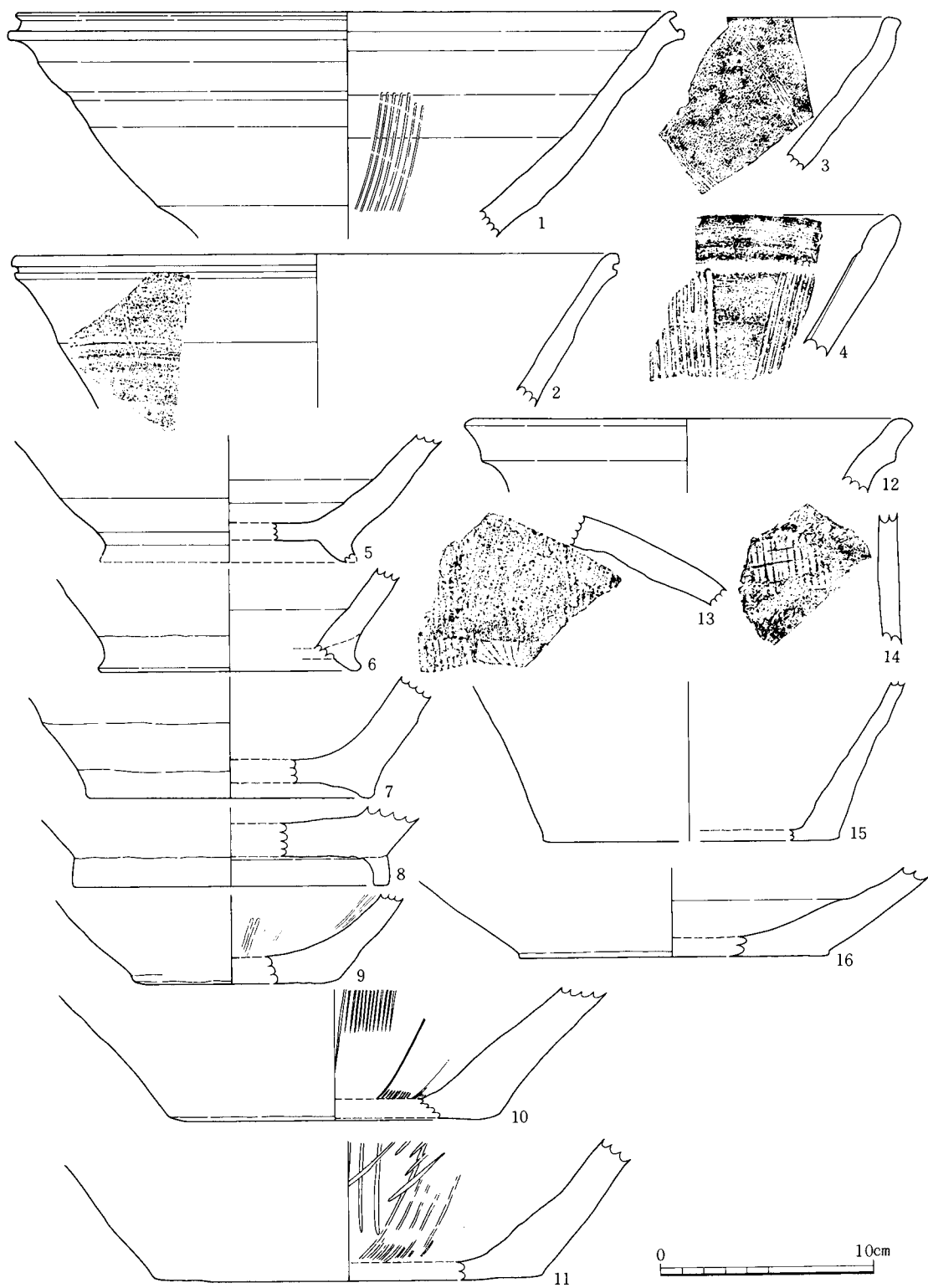
第66图 第2次調査区 下部包含層中出土遺物



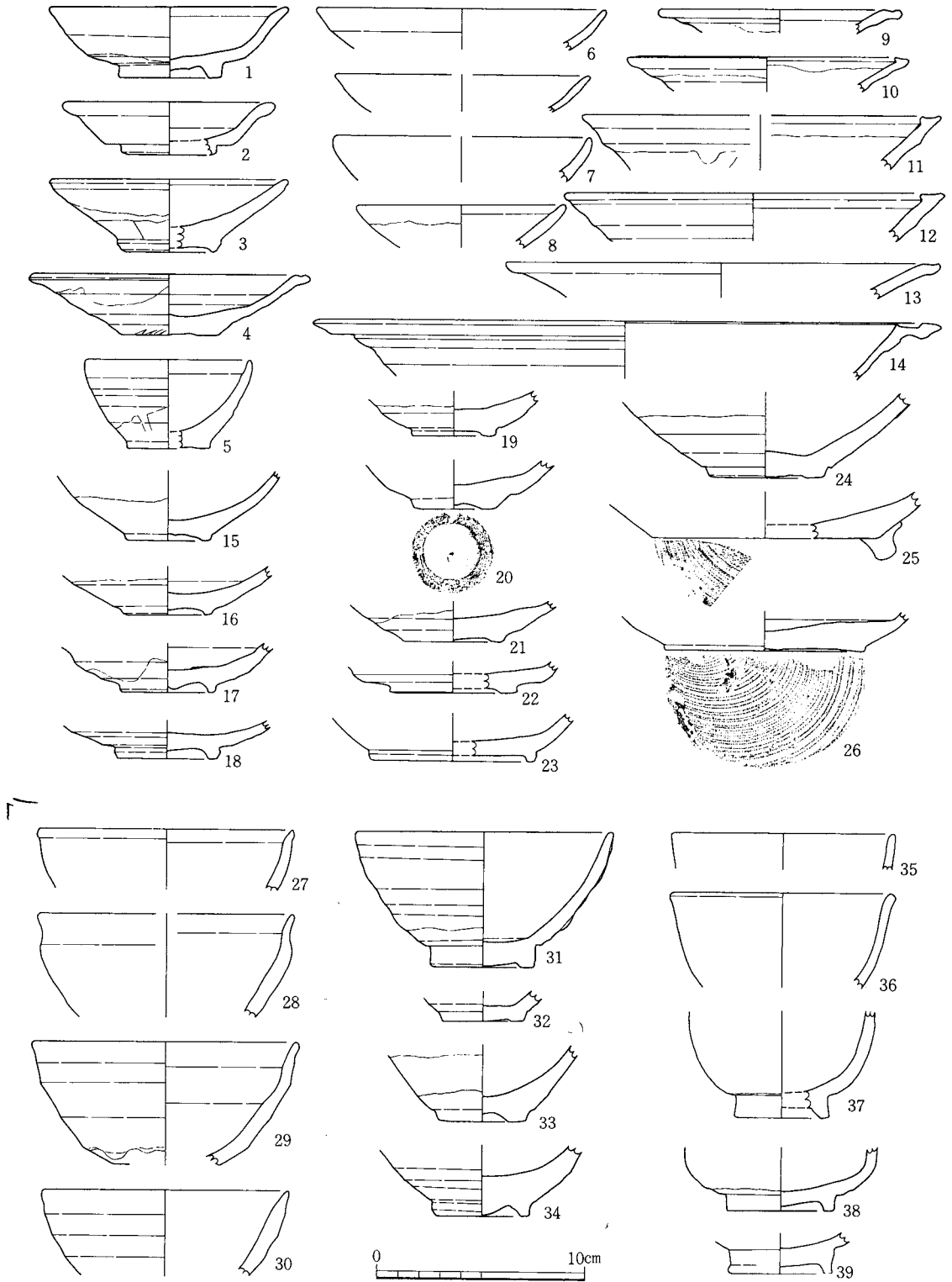
第67図 第2次調査区 包含層中出土遺物



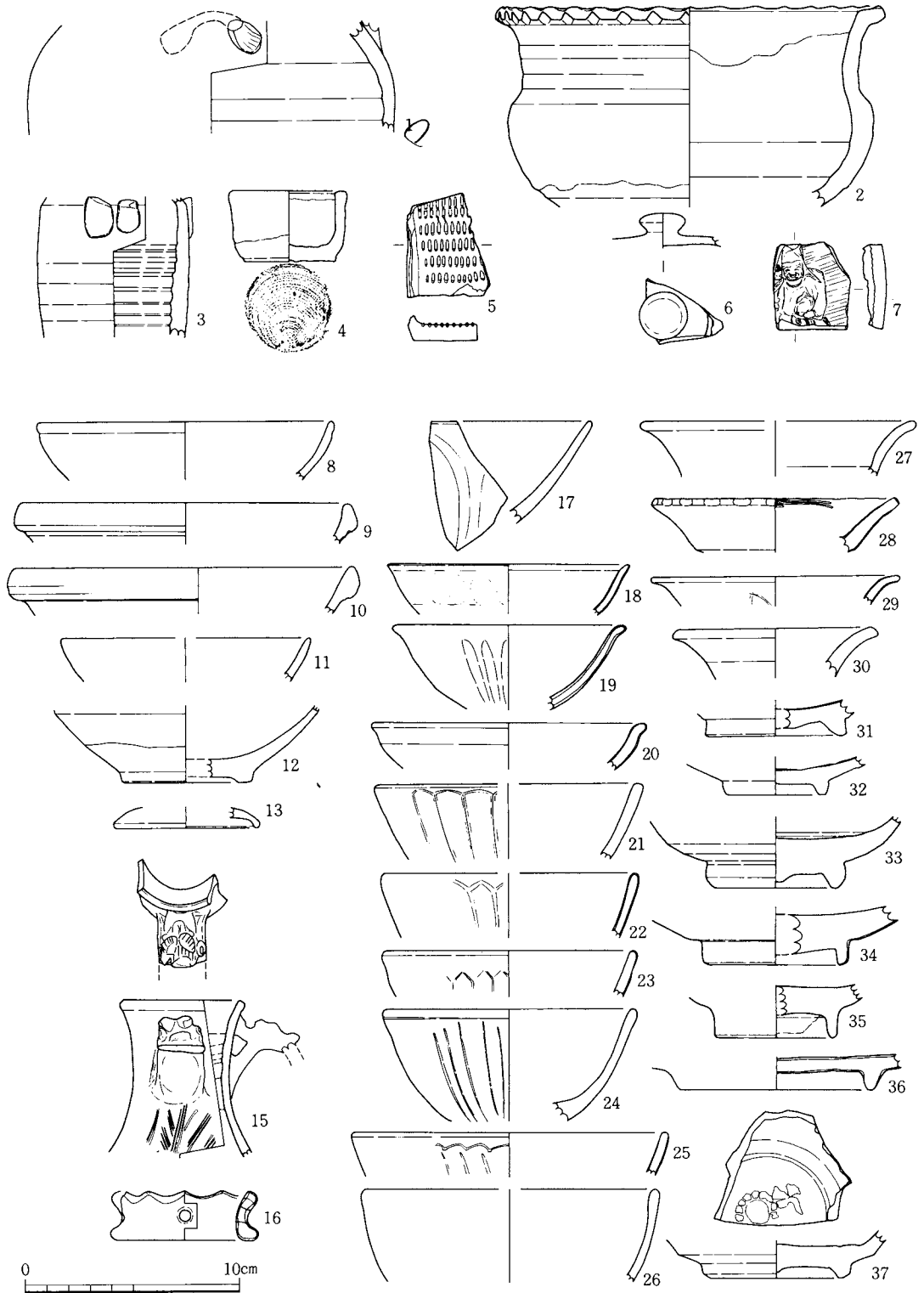
第68图 第2次調査区 包含層中出土遺物



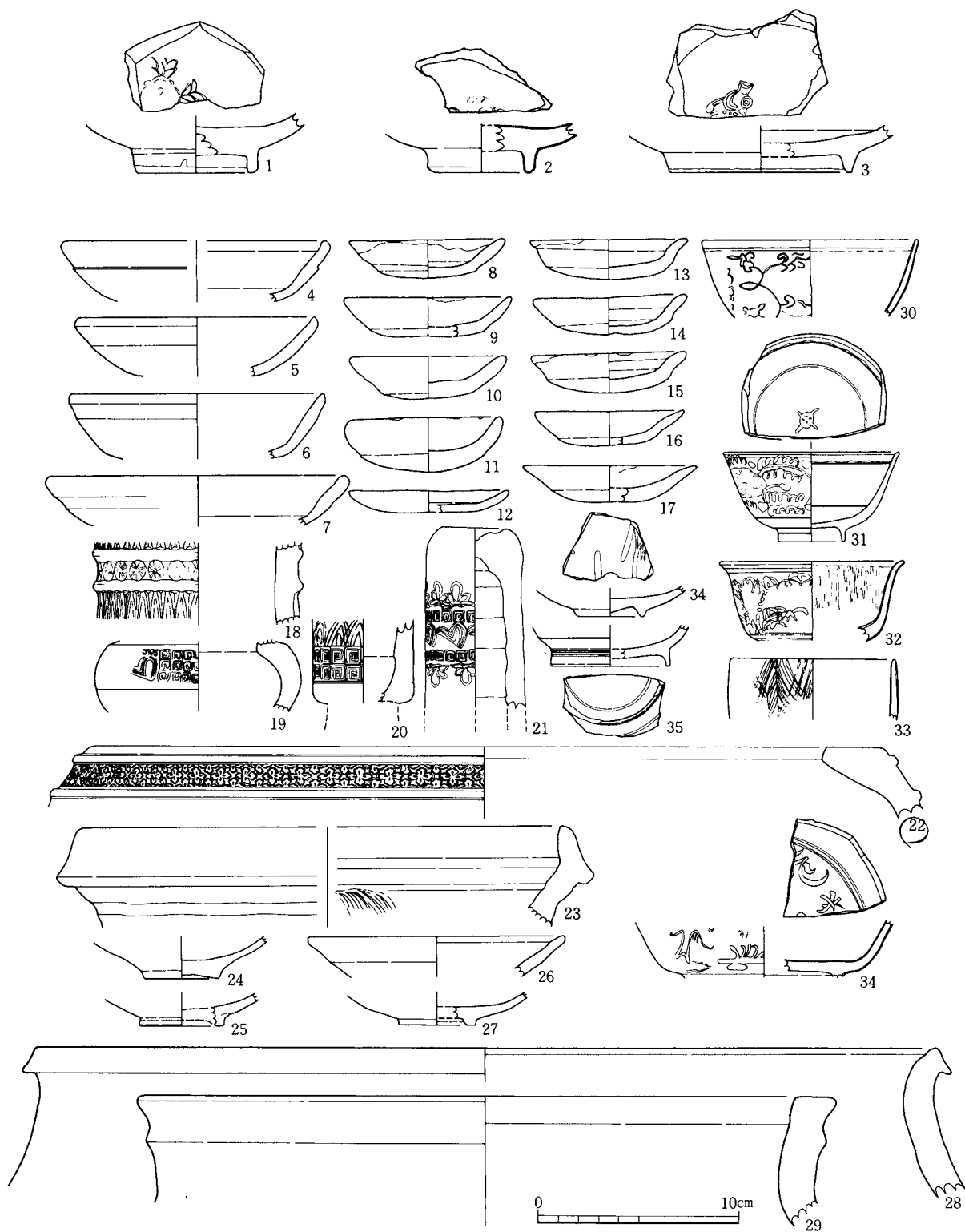
第69図 第2次調査区 包含層中出土遺物



第70図 第2次調査区 包含層中出土遺物

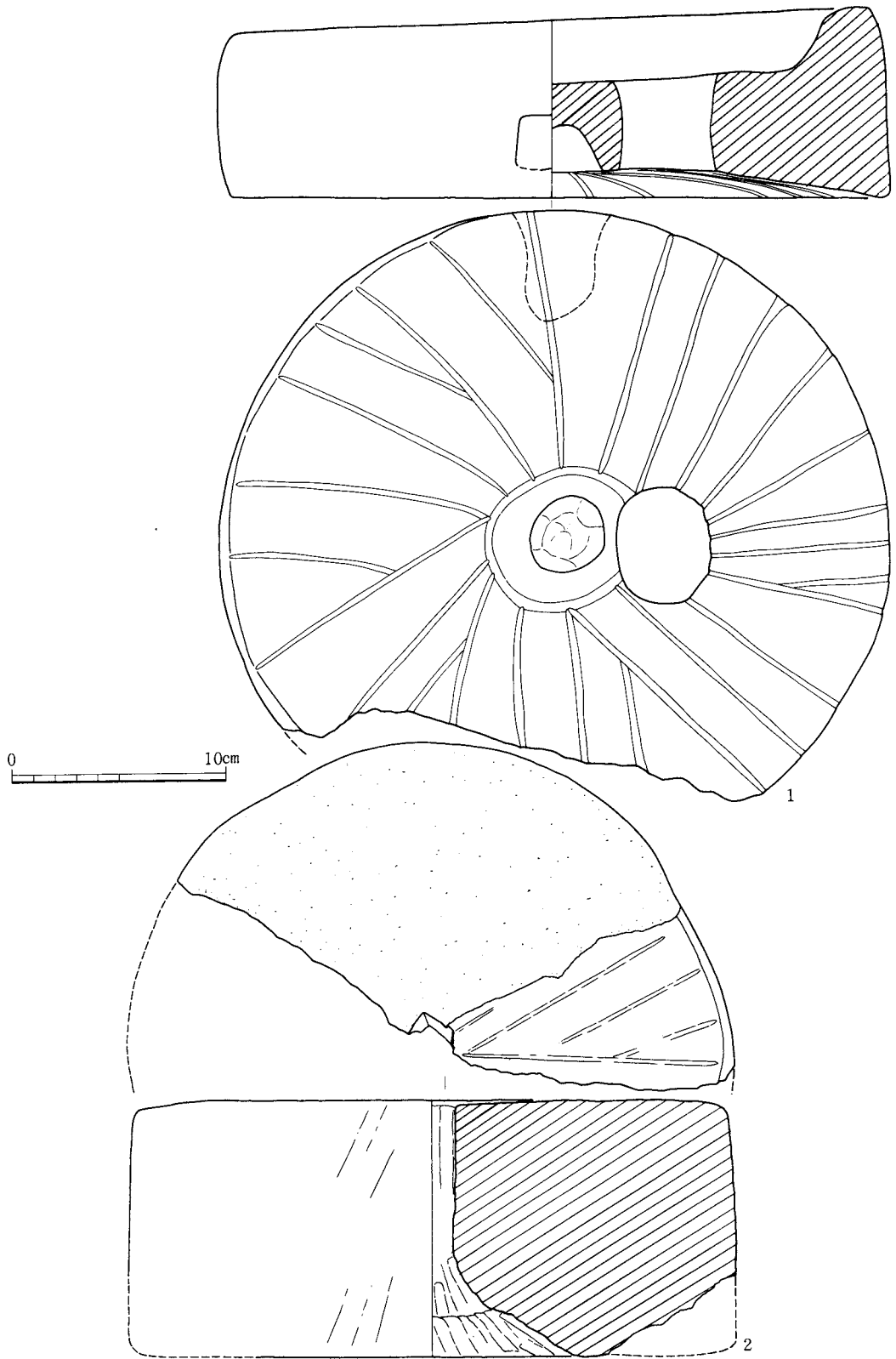


第71図 第2次調査区 包含層中出土遺物

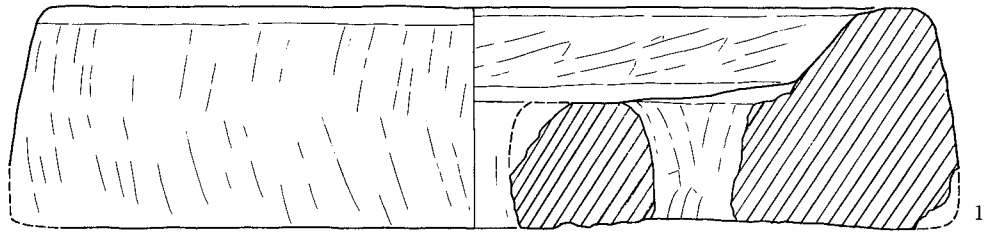


第72図 第2次調査区 包含層中出土遺物

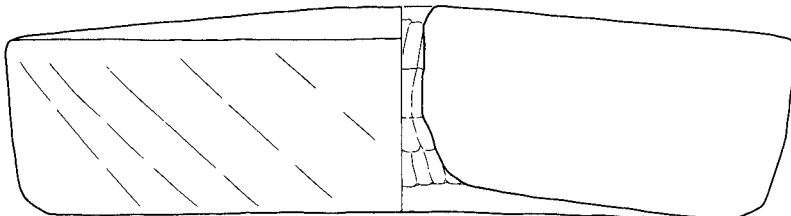
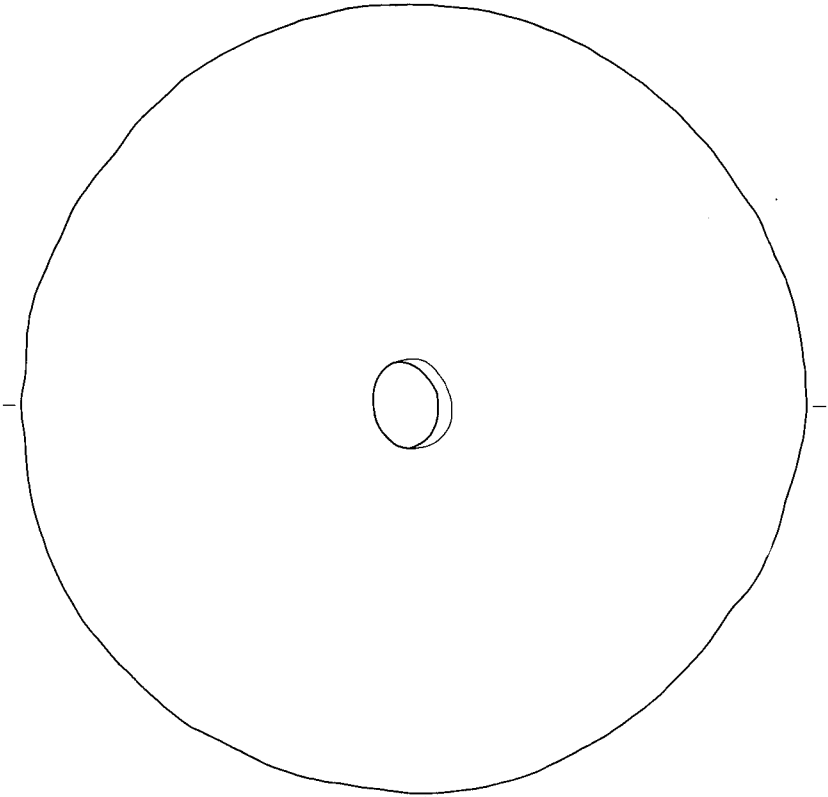




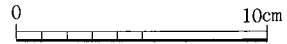
第73図 第2次調査区 包含層中出土遺物



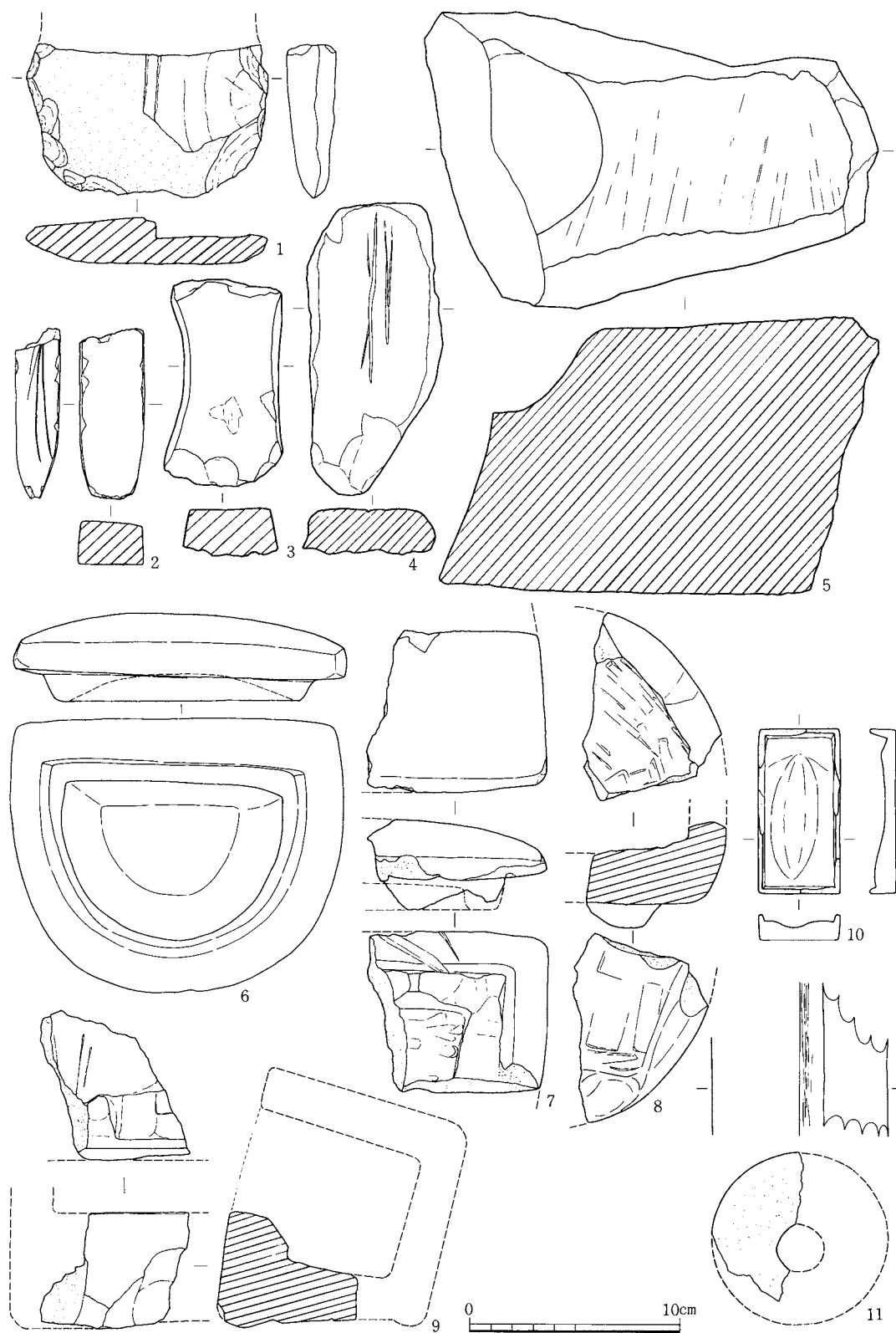
1



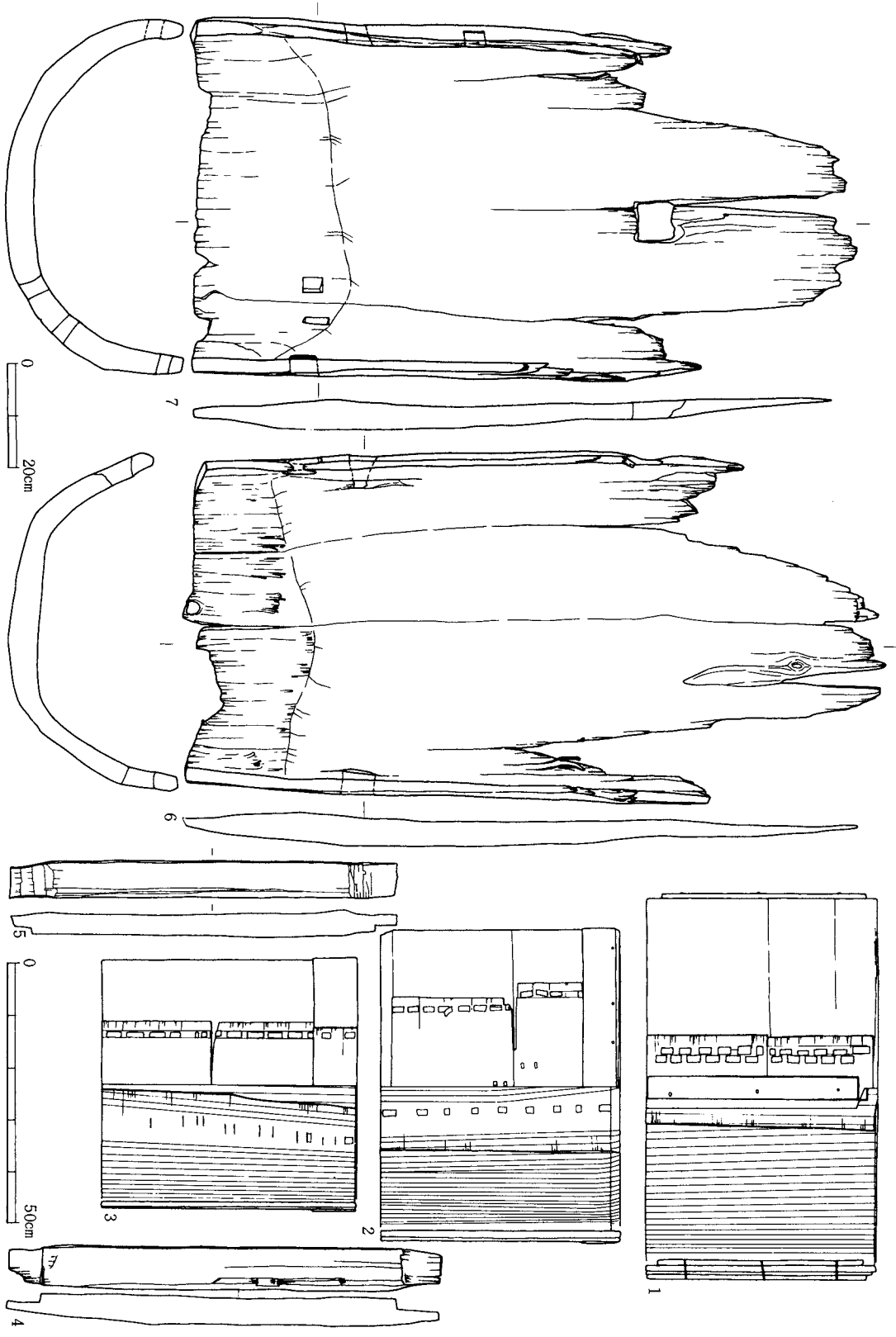
2



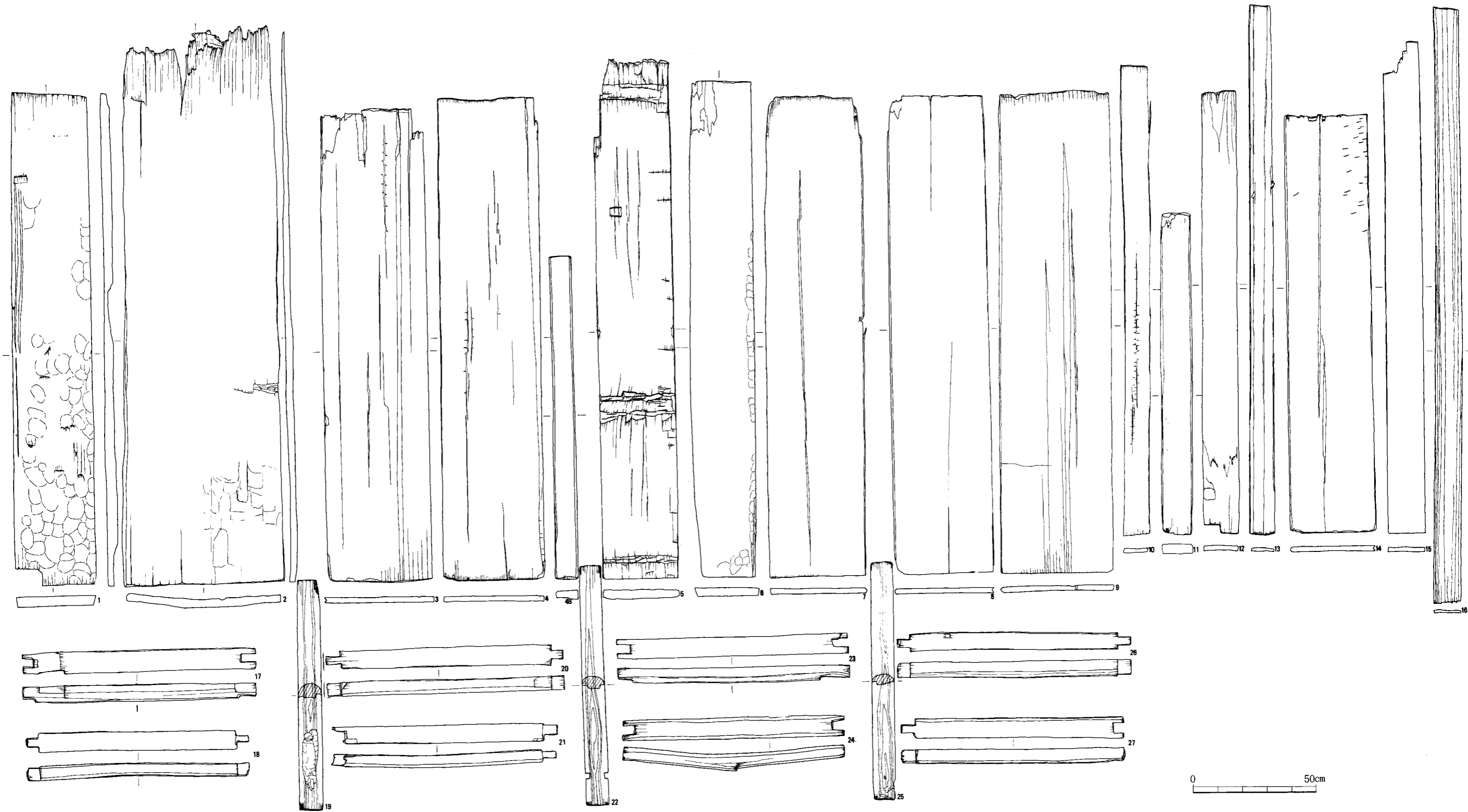
第74図 第2次調査区 包含層中出土遺物



第75図 第2次調査区 包含層中出土遺物



第76图 第2次調査区 第6号井戸(1~5)・第15号井戸(6・7)出土井戸部材実測図



第77図 第2次調査区 第11号井戸出土井側部材

## 第5章 第3次調査の遺構

### 第1節 層 序

第3次調査は分布調査の結果から梯川に近接する箇所が、中世以降の旧梯川河道にあたることが判明したため、この区域を除外して調査区を設定した。従って、西端で約20m、東端で約40m、南端で約100m、北端で約130m、総面積約2,900㎡の東西方向に長い台形の調査区となった。第2次調査区とは幅6mの農道と両脇に設置された用水路を挟んで、8mの間隔をもつ。調査区の区割りは、第2次調査区の区割りを踏襲して10m角としたが、第2次調査後の施工時に東西方向の基準杭が失われたため、結果として西へ2mずれることとなった。付図に示した遺構配置図でこの関係を示したが、各調査区割りの区画名称が統一的に整合しないことを断っておく。また、第3次調査では、南北方向に大分割して4区にまとめ、おおむね1～3をⅠ区、4～6をⅡ区、7～9をⅢ区、10・11をⅣ区として出土遺物を取り上げた場合もある。

第3次調査では、後述のように38基もの中世を中心とする井戸が検出された。これらの井戸は、18cm前後の耕作土の下に存在する古墳時代前期を主体とした良好な遺物包含層とその基盤となる黄褐色砂質粘土（地山）や、更にその下の黒色と白色の強粘土層を掘り抜いて、湧水層である灰色砂層にまで達したものであった。ただ、これらの土層の堆積状態は必ずしも一定しておらず、また中世の遺構の調査に重点をおいたために、井戸・溝・土壇等の発掘時の断面から観察して土層々序の広がり把握することとなった。この観察の結果を加味してまとめると、基本的な層序と平均的な厚さは次のようになる。

1. 耕土18cm前後。（但しそれより浅いところも多い。）
2. 灰色砂質粘土30cm以上。（中世以降のおそらく近世のある段階での旧梯川河道による堆積土。調査区の約1/3より北側に分布。古墳時代～近世の雑多な遺物を含む。）
3. 茶灰色砂質土5～20cm。（中世の遺物包含層。南側では薄く、北側では次第に厚くなる。）
4. 黄色砂層あるいは黄灰色砂質粘土10～25cm。（調査区の東側、G-9区とJ-11区を結ぶ線より東に広がる。中世遺構面の基盤となるが古墳時代後期の須恵器等を含んでおり、その時期以降に堆積した層とみられる。）
5. 暗茶色砂質粘土10～30cm。（調査区のほぼ全域に存在。弥生時代後期から古墳時代前期の良好な遺物包含層。中世遺構の検出面となっており大量の土器を含む。部分的に実施したトレンチ調査では下層包含層として扱っている。）
6. 黄褐色粘土20cm前後。下層包含層の遺構基盤となる。ここまで下げれば古墳時代前期を主体とする遺構の確認が可能である。）
7. 黒色もしくは黒灰色強粘土10～40cm。全くの無遺物層で地表下60～70cmの深さに存在。）
8. 白色もしくは灰白色強粘土10～20cm。全くの無遺物層で上の黒色もしくは黒灰色粘土と混じって暗灰色や灰色粘土となっている所も多い。7・8層は場所によって層の厚さや色調が必ずしも一定していない。）
9. 青灰色砂層。（井戸の水を得る湧水層で、上部では粘土質であるが下へ行く程砂となる。井戸の発掘時に激しい湧水をみた井戸は、底がこの層にまで達していた。地表下60～120cmに確認された。標高では約1.4～0.8mの高さに位置することになる。）

## 第2節 掘立柱建物

第3次調査区の全体では500を超えるピット群が確認された。しかし調査の対象とした中世の遺構面は、耕土直下の古墳時代前期の包含層にあるため、その検出は困難であった。中世以降のおそらく近世・近代の稲架穴も混在していて、地山面まで掘り下げれば、まだその識別が容易であったといえる。中世の遺構の覆土は古墳時代のそれと比較して灰色を帯びており、検出そのものはできても発掘作業自体が難しかった。付図にみる如く、ピットはG-2~5区、G-8~9区あたりとI・J-9・10区に集中して検出された。I・J-9・10区では古墳時代包含層の上に黄灰色砂質粘土が存在していたため、検出が容易であったのであり、他の区域でも建物の柱穴が重複して分布した可能性が高い。以下、建物として把握した柱穴についてのみ概要を記す。

第1号建物(第78図、図版26) I・J-10区を中心に検出。第2・3号建物と重複するが、切り合い関係は不明。4間(9.8m)×4間(9.0m)の総柱建物で、主軸はN-2°-W。柱間寸法は東側柱列で北より2.3m・2.6m・2.6m・2.3m、北側柱列で東より2.2m・2.4m・2.4m・2.2mを測る。柱穴は深さが8~15cmでやや不揃いである。平面積は約88㎡。

第2号建物(第78図、図版26) I・J-10区で検出。第1・3号建物と重複する。3間(7.2m)×3間(7.1m)の総柱建物で、主軸はN-10°-W。柱間寸法は東側柱列で北より2.4m等間、北側柱列で2.4m・2.4m・2.3mを測る。柱穴の深さは20cm程度のもが多い。平面積は約52㎡。

第3号建物(第78図、図版26) I・J-10区を中心に検出。第1・2号建物と重複するが、切り合い関係は不明。2間(7.2m)×2間(4.6m)の東西棟で、主軸はN-90°-W。柱間寸法は北側柱列で2.6m等間、東側柱列で2.3m等間となる。平面積は約33㎡。

第4号建物(第78図、図版26) I-9区を中心に検出。第1・2・5・6号建物と重複。4間(10.1m)×3間(7.5m)の総柱建物としたが、南東部の柱穴の検出が十分でないためか、全ての柱筋を把握できない。また西側柱列に1間のはり出し部?がある。主軸はN-13°-W。北側柱列で東より2.9m・2.4m・2.4m・2.4m、西側柱列で北より2.5m等間+2.5mとなる。西側2列の柱筋は他のそれと較べて良く通っている。平面積は約80㎡。

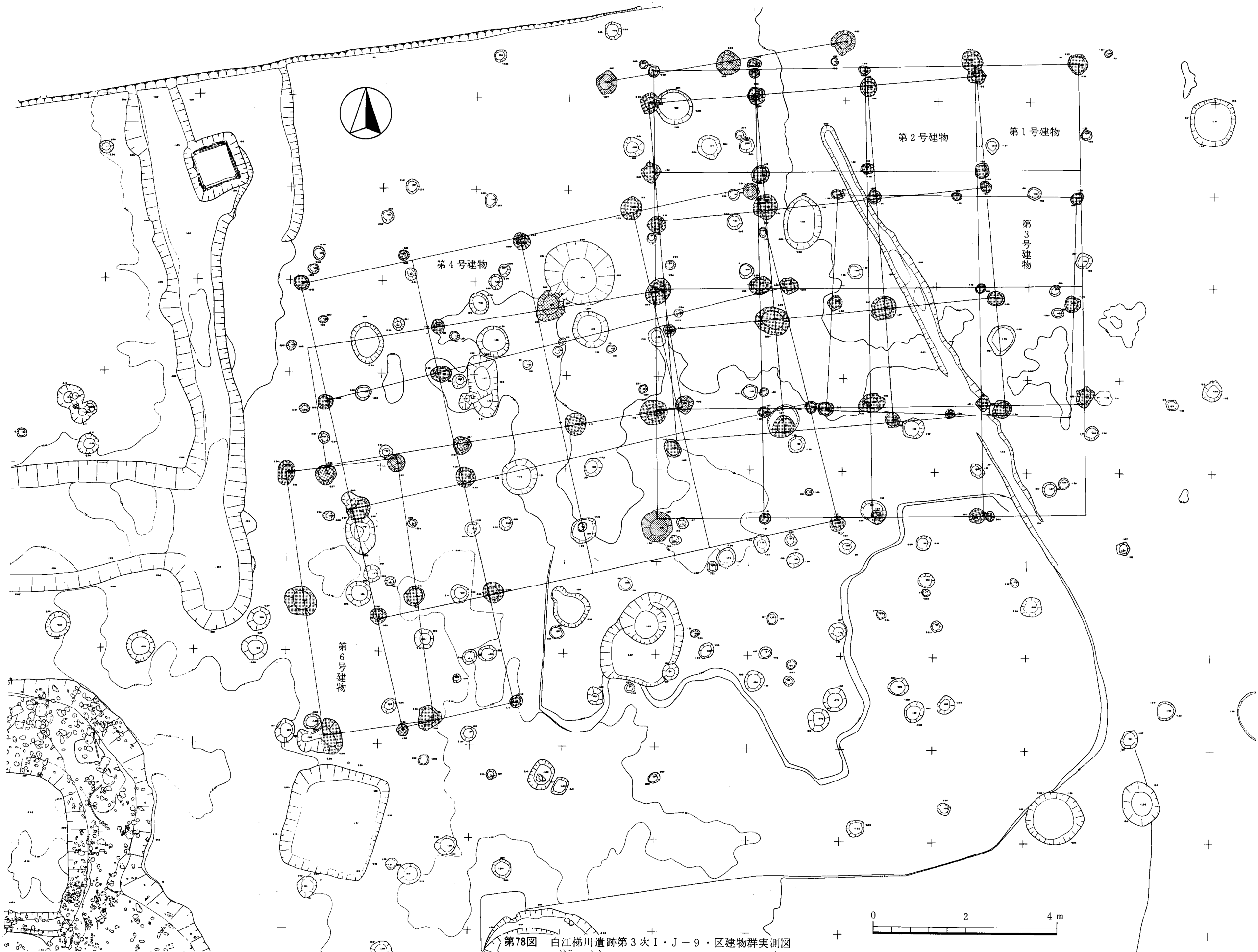
第5号建物(第78図、図版26) I-9・10区で検出。第2・5号建物と重複。3間(7.5m)×1間(2.7m)の東西棟で、主軸はN-96°-W。柱間寸法は北側柱列で2.5m等間となる。平面積は約20㎡。

第6号建物(第78図、図版26) I-9区で検出。第4・5号建物と重複。2間(5.6m)×1間(2.3m)の南北棟で、主軸はN-9°-W。柱間寸法は西側柱列で2.8mとなる。柱穴は10~15の深さをもつ。平面積は約12.8㎡。

柱列(第78図)J-10区で第1号建物と重複して検出。東西方向の2間分で、2.6m等間となる。

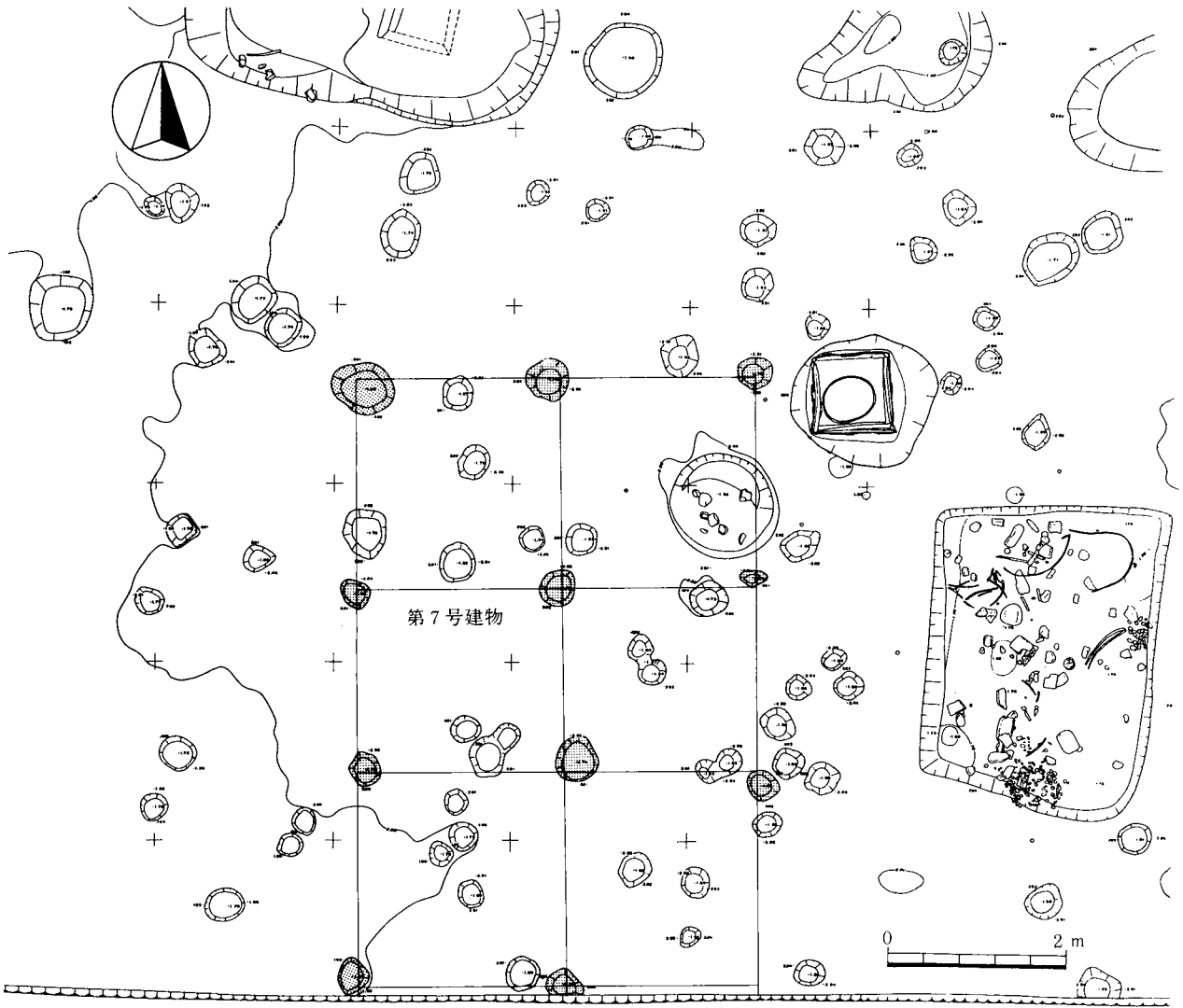
第7号建物(第79図)G-4・5区を中心に一部を検出。3間以上(6.9m)×2間の総柱建物。主軸はN-2°-Wを測る。

以上の他、柱穴の中に五輪塔の一部を転用して台石とした例や、凝灰岩の断片が出土する例があり、これらを礎石として用いた建物が存在していた可能性がある(図版26)。遺構面が耕土直



第78图 白江梯川遺跡第3次I·J-9·区建物群実測図





第79図 白江梯川遺跡第3次G-4.5区建物

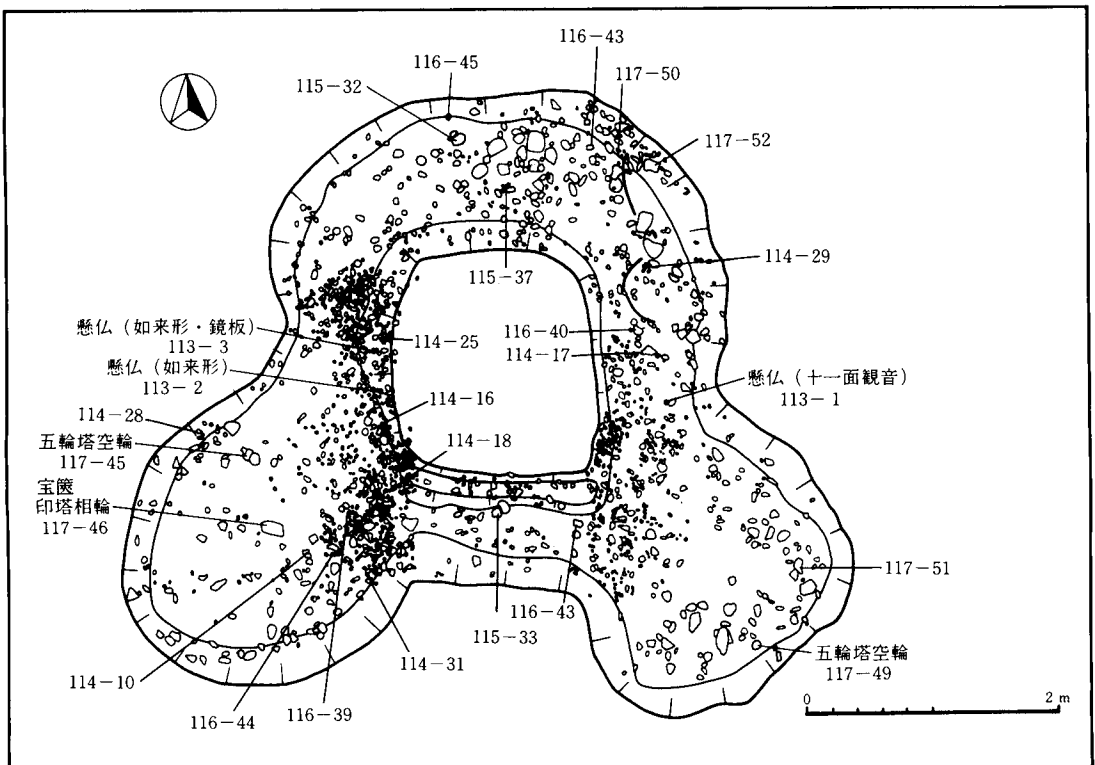
下にあることを考慮すると、耕作時に建物の礎石が抜き取られることもあったと思われる。

### 第3節 祠跡推定遺構

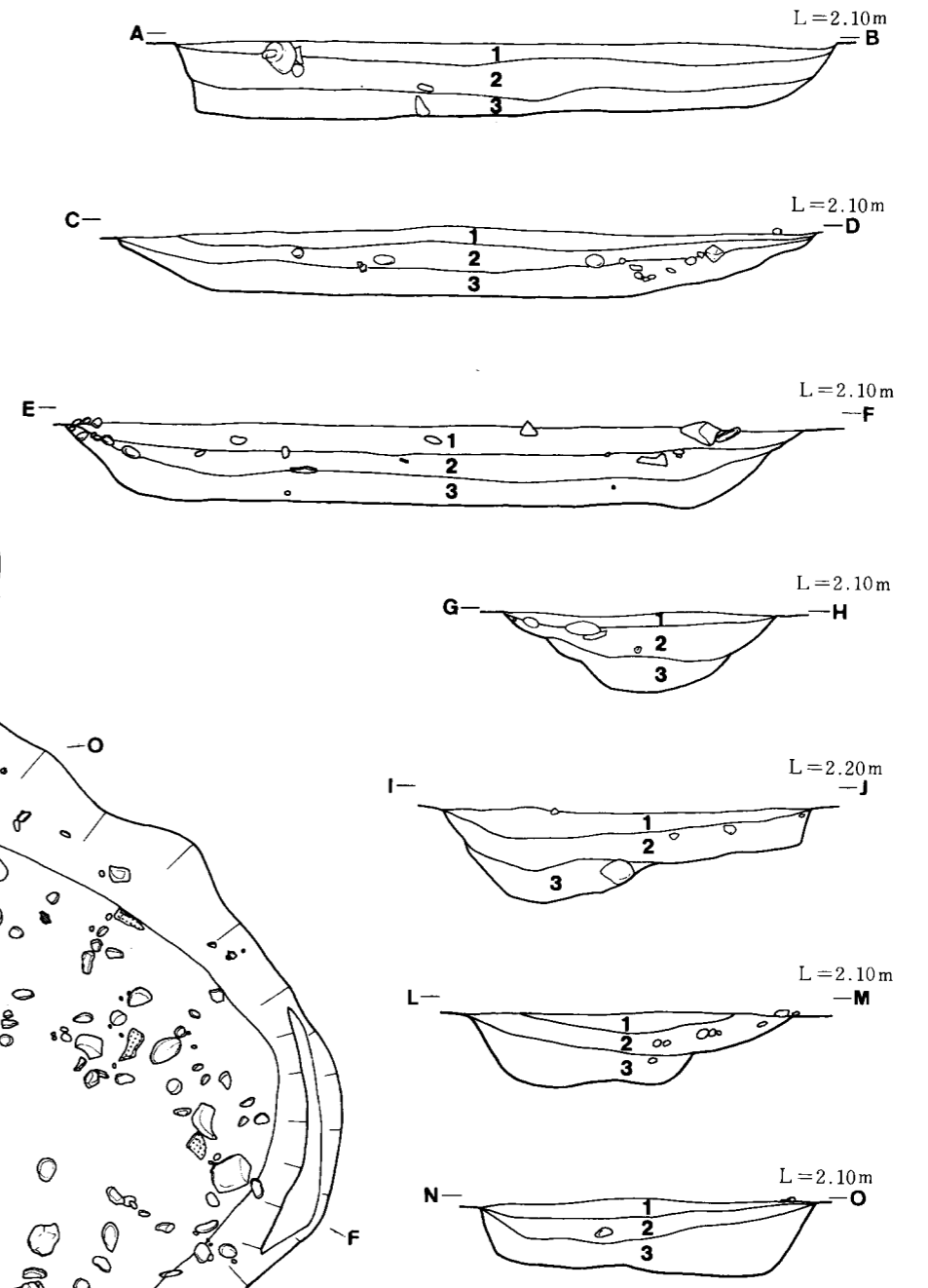
H-8・9区とI-8・9区の一部にまたがって検出された遺構は、特異な構造をもっていた。(第80図、図版27～31) 検出段階では方形周溝状を呈する南辺東西の角に円形の井戸または土壇が重複したのではないかと推定した。調査が進行してこれが1つの遺構であることが判明し、懸仏3体が出土するに及び宗教的な施設であったと推定するに至った。南北2.9m、東西2.65mの方形台部の四周を深さ約40cmの溝で囲み、南側の東西の角に略円形の土壇状の掘り込み(深さは溝と同一)を接合したような形をとる。溝は北・東・西で幅1.8m前後、底端約1.4m、南で約

1.4m、底端約0.7mを測ってなだらかに立ち上る。東西両角に位置する円形の張り出し部は、東は台の角から約3.7m、西は約4.1mに広がっている。調査時には平面形からミッキーマウスと愛称したが、張り出し部は丁度その耳に該当する。耳に挟まれた南溝は他の部分よりも幅が狭く、台部の側に15cmばかりの段状の平坦面が存在した。従って南を正面とし（東西に並ぶピットは後世の架穴）、溝を挟んだ台部に祠などの施設が存在したとみている。溝で画された台部には柱穴等は認められなかったが、溝内にはこの台部から滑り落ちたような状況で、多数の円礫（2～15cm程度の河原石）が発見された。礫群中からは懸仏3体の他、土師質土器、越前等の中世陶器、五輪塔等石造遺物の残欠、石臼・バンドコの断片、木の枝の断片など第113図1～第117図52に示した遺物が出土した。

溝に転落した円礫を集めて台部に置いてみると図版30のように復元された。また北と東側の周溝には、径20～30cmの台石にも十分使用可能な石（自然礫と凝灰岩の両方を含む）が混在しており、これが祠の基礎として用いられても何ら不思議ではない状況であった。懸仏を納めていた祠などの建物が存在した可能性は高いが、その規模は1間（1.8m）四方程式の小さなものであったろう。東側の溝底には、強い粘土層が堆積し、自然の木枝断片が残っていた。これからすると、溝や円形の張り出し部が湛水した可能性もある。溝などから出土した遺物は、この遺構が破棄された段階で捨てられたとみられるが、15世紀代を中心としている。約2m離れて北側に造られた確認長15.6m、幅2m、深さ0.3mのL字形に曲る第15号溝もこれに関係した遺構であるとみたい。



（参考）祠跡推定遺構遺物出土地点（番号は実測図番号を示す）



- 1 灰褐色砂質粘土
- 2 灰色砂質粘土
- 3 暗灰褐色粘土



第80図 白江梯川遺跡祠跡推定遺構実測図

## 第4節 井戸

第3次調査の結果、平安時代から中世に継起的に掘られた井戸38基を検出した。うち1基は調査終了間際にI-5・6区で検出した第39号井戸で、未掘の状態で水田下にそのまま残している。但し、11号井戸は調査時の手違いから欠番となっている。

37基の井戸についてはその上面が工事の実施により削平されることになったため、発掘調査を実施した。本遺跡の第2次調査においても井戸が20基調査されているから、全体では6,400㎡の調査対象地に58基もの井戸が存在したことになる。湧水層に達することが比較的容易であったという自然環境を考慮しても、いささか異常ともいふべき井戸分布密度の高さであるといえよう。

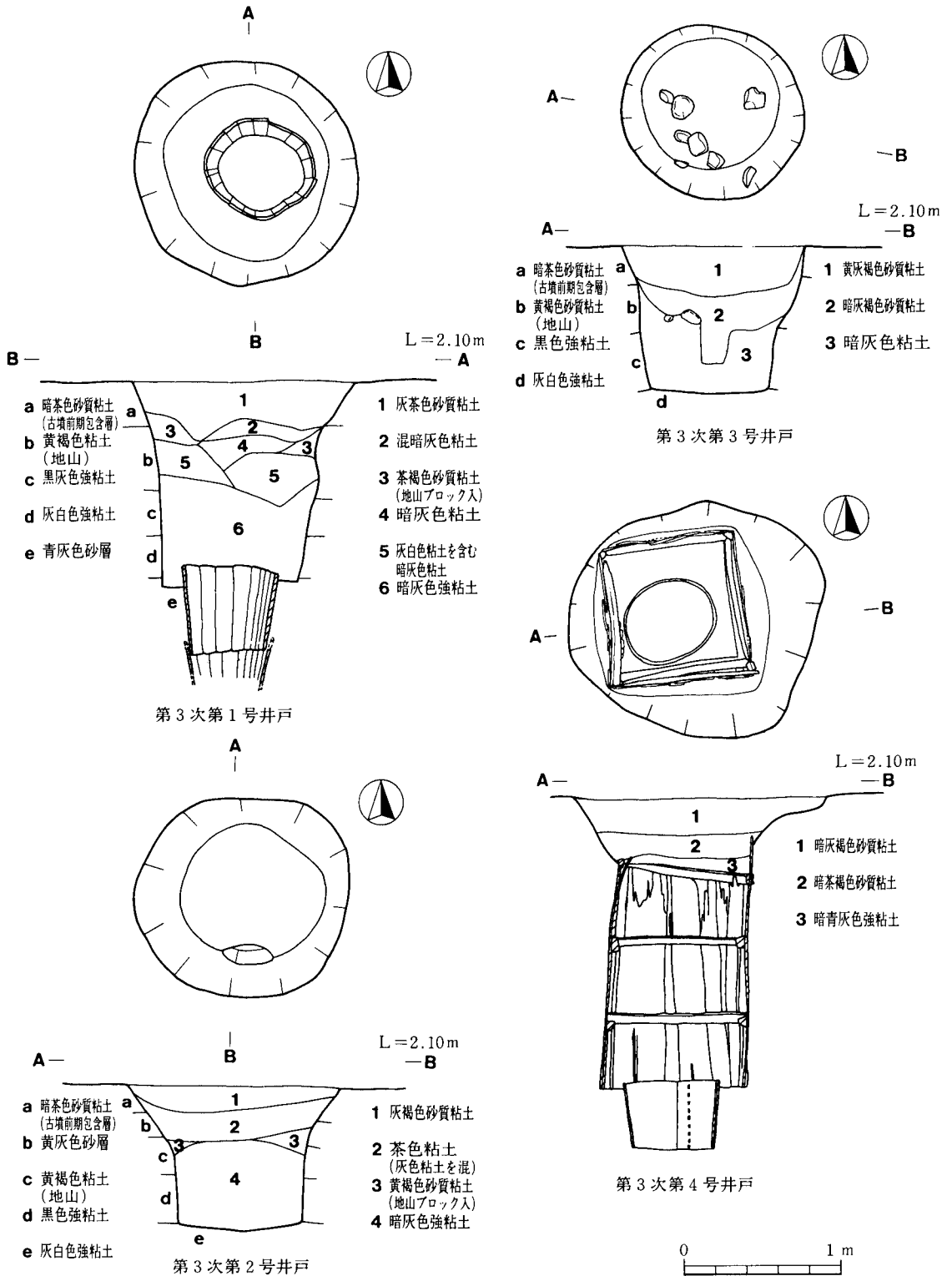
第3次調査によって発掘した井戸のうち、井戸側材やまなこが存在して井戸の構造が判明したものが16基含まれている。構造の説明にあたっては、部分名称を山本 博氏の区分<sup>(1)</sup>に従い、井戸の形式分類では宇野隆夫氏の区分<sup>(2)</sup>に準拠して進めることとした。即ち、①井戸の地上に設ける部分を井桁。(本遺跡ではこの部分が残存した井戸は無いため、掘り方の形状より類推することになる。)②井壁の崩壊を防ぐため地下壁面に設ける部分を井戸側。③湧水を溜めるために底に設ける部分をまなこと呼ぶことにした。井戸の形式分類では、素掘り井戸をA類。井戸側木組み井戸をB類。井戸側石組み井戸をC類としたが、発掘時に井戸側やまなこが確認できず、A類であったのかその他の類であったのか判別し難い例も多く、本稿では主としてB類木組み井戸の分類に主眼を置いて記述したい。

**第1号井戸** (第81図、図版32) G-3区東南隅で検出。掘り方は上端で径1.4mの円形である。検出面から約1.3mの深さで桶を転用したまなこを確認した。桶は二段に重ねられ、上の桶は径60cm、高さ28cmを測る。桶は厚さ0.8~1cmの板を21枚使って竹のタガで締めてある。底板を抜いて転用したものであり、ポンプによる排水時には下の桶の存在が確認されたが、激しい湧水のため最下部まで発掘することはできなかった。湧水層に据えられた桶転用のまなこは判明したが、それより上部の井戸側にあたる部分の構造は不明である。宇野分類のBIX類に含まれようか。覆土中より土師質土器、中世陶器、加工のある石材等が出土したが図示し得るものは少ない。転用桶の内部より第118図1の漆器椀1点が出土している。

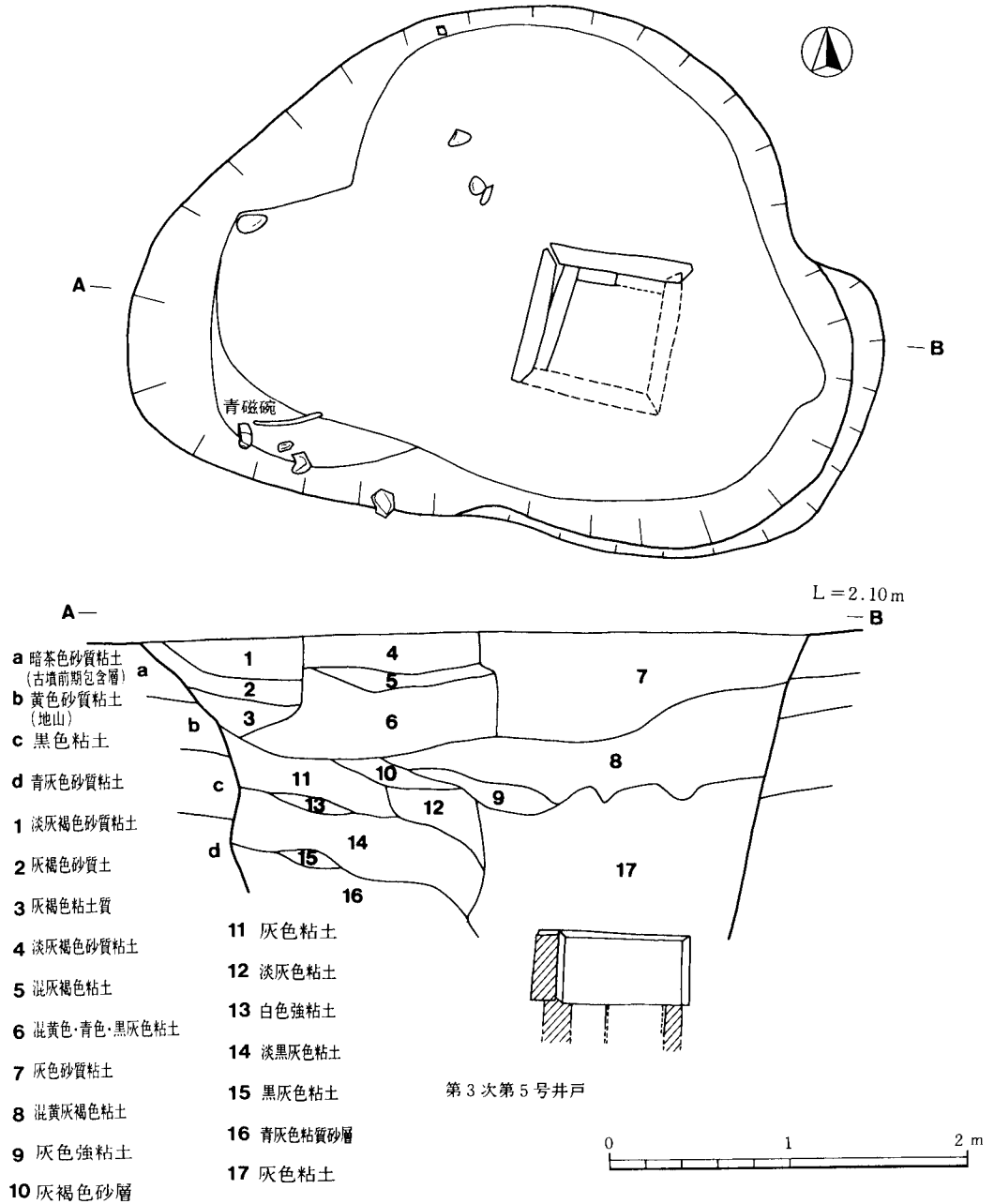
**第2号井戸** (第81図、図版32) G-4区西南隅で第1号井戸から約1m離れて検出された。径65cm前後の円形掘り方をとる。検出面より87cm下がった灰白色の強粘土層を抜いておらず、その下の湧水層には達していない。井戸側等の検出はなく、構造は不明である。覆土中に自然礫や砕かれた凝灰岩の小礫、土師質土器の小片などが若干含まれていた。

**第3号井戸** (第81図、図版32) G-4区とG-5区の区割り上中央で検出。径約105cmの円形掘り方で検出面から約86cm下がった灰白色の強粘土層を抜いていない。先の第2号井戸と類似する。井戸側等の検出はなく、構造も不明であるが、覆土中に自然礫や加工した凝灰岩の断片などが投げ込まれたような状態で多く出土した。第118図7に示したものがその一部で、須恵器、中世陶器、土師質土器等も出土している。

**第4号井戸** (第81図、図版32) G-5区の西中央で検出。第3号井戸とは約0.6m、第9号土



第81図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(1)



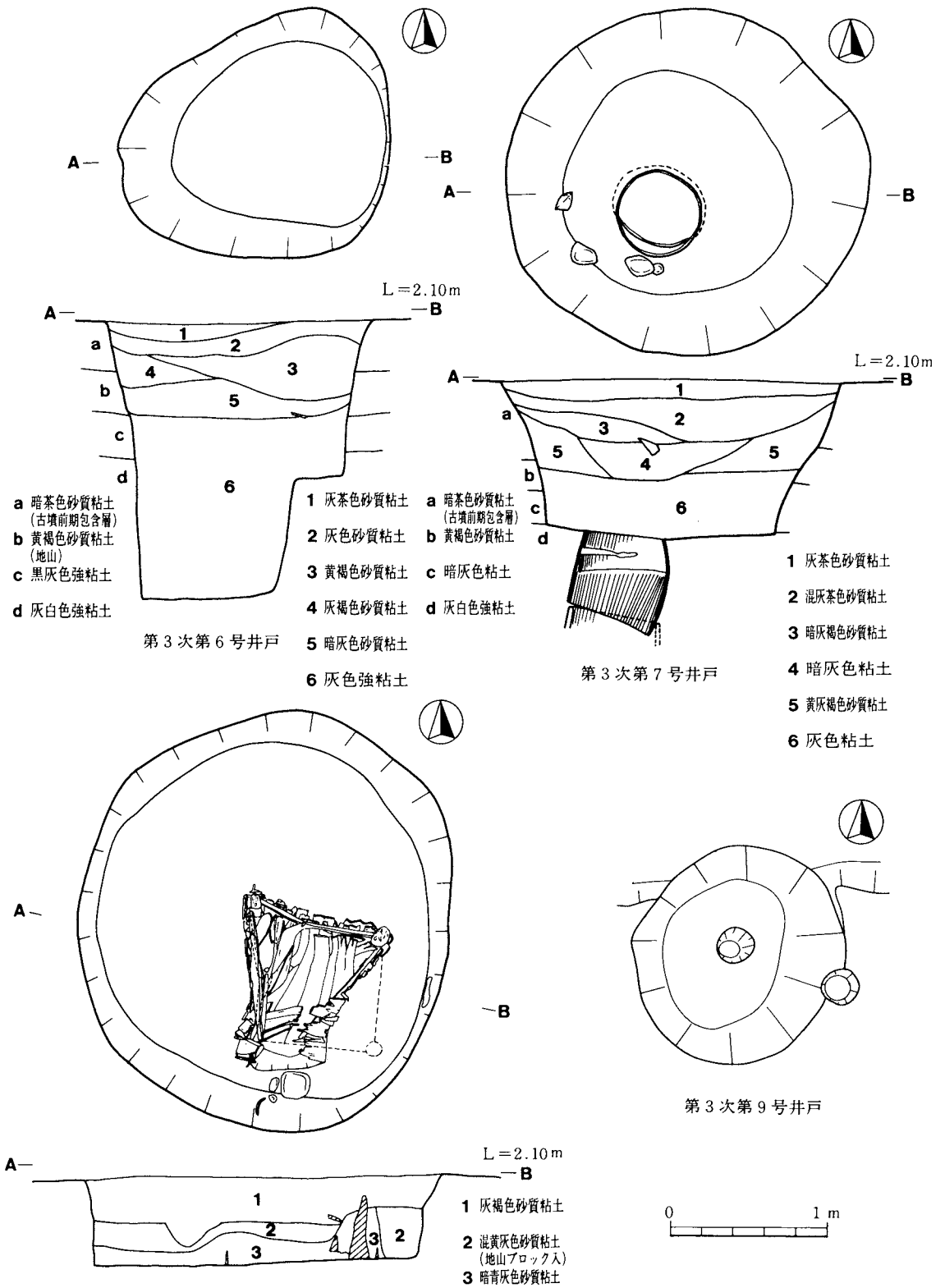
第82図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(2)

墳とは約0.8m離れている。検出面での掘り方は長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形を呈す。検出面から25cmばかり掘った時点で井戸側の存在が確認された。井戸側は宇野分類のBⅢ類とBⅣ類の折衷形式ともいべきもので、方形縦板組支柱横棧どめと呼びたい。井戸側は一辺約85cmの方形で、縦板の最長は156cmを測る。縦板は厚さ約2cmの薄板を2～3板重ねて縦方向に組み3～5cm角の角材の横棧で止めている。掘り方の四周に縦板を組みながら三段の横棧で止めて上方へ組みあげているが、横棧の四隅は長さ40cm前後、一辺約5cm角の支柱で内側から支えている。井戸側に柱を建て柄穴を切って棧で止める隅柱横棧どめの改良型といえる本形式の井戸は、隅柱の替りに横棧間に支柱を置くことを特徴とする。また、この形式の井戸の掘り方は比較的小さくて済むという利点をもつようにみられる。井戸の底には径約60cm、深さ40cmの曲物を用いたまなこが存在する。曲物は厚さ1.5cmの板に筋目をつけて曲げ、桜の樹皮で止めたものである。第4号井戸からは、土師質土器や中世陶器の他、第119・120図に掲げた折敷の断片や曲物の底板、加工のある材などとともに38点の箸が出土した。井戸側の下部やまなこからまとまって出土しており、井戸祭祀に関係するものと考えている。

第5号井戸（第82図、図版32） G-4区とH-4区にまたがって検出。検出段階から2基の井戸が重複して存在すると想定されたが、断面の観察でも西側の井戸が後で掘られたことが明らかとなっている。東側の井戸の掘り方は崩落によって検出時より大きくなってはいるが、径約2.6mの大きな掘り方を持っていたと思われる。検出面より165cmの深さで切石凝灰岩を方形に組んだ井戸側？二段を確認した。切石は一辺約80cm、厚さ12cm、高さ35cmの整形の良い板石で、上段では北と西側の石材のみが残存していた。切石の両端部の内側を三角形に隅切って組合わせている。下段の切石は四周がほぼ残存しているようであったが、激しい湧水の中、手探りでの確認に止まった。下段の石も同様な加工をもつとみられるが、北側は長さ約40cmの切石2個を用いていた。標高約0.5mに位置する切石組の井戸側から上部の構造は不明と言わざるを得ないが、上まで切石組であった可能性もあり、宇野分類のCⅣ類に含まれると理解しておきたい。後出の西側の井戸は径約1.6mの円形の掘り方をもっていたが、井戸側などは存在せずその構造は不明である。第121図に二つの井戸から出土した遺物を示したが、中世陶磁器類の他に、円礫や加工のある凝灰岩断片、曲物の底部、板材などがみられる。

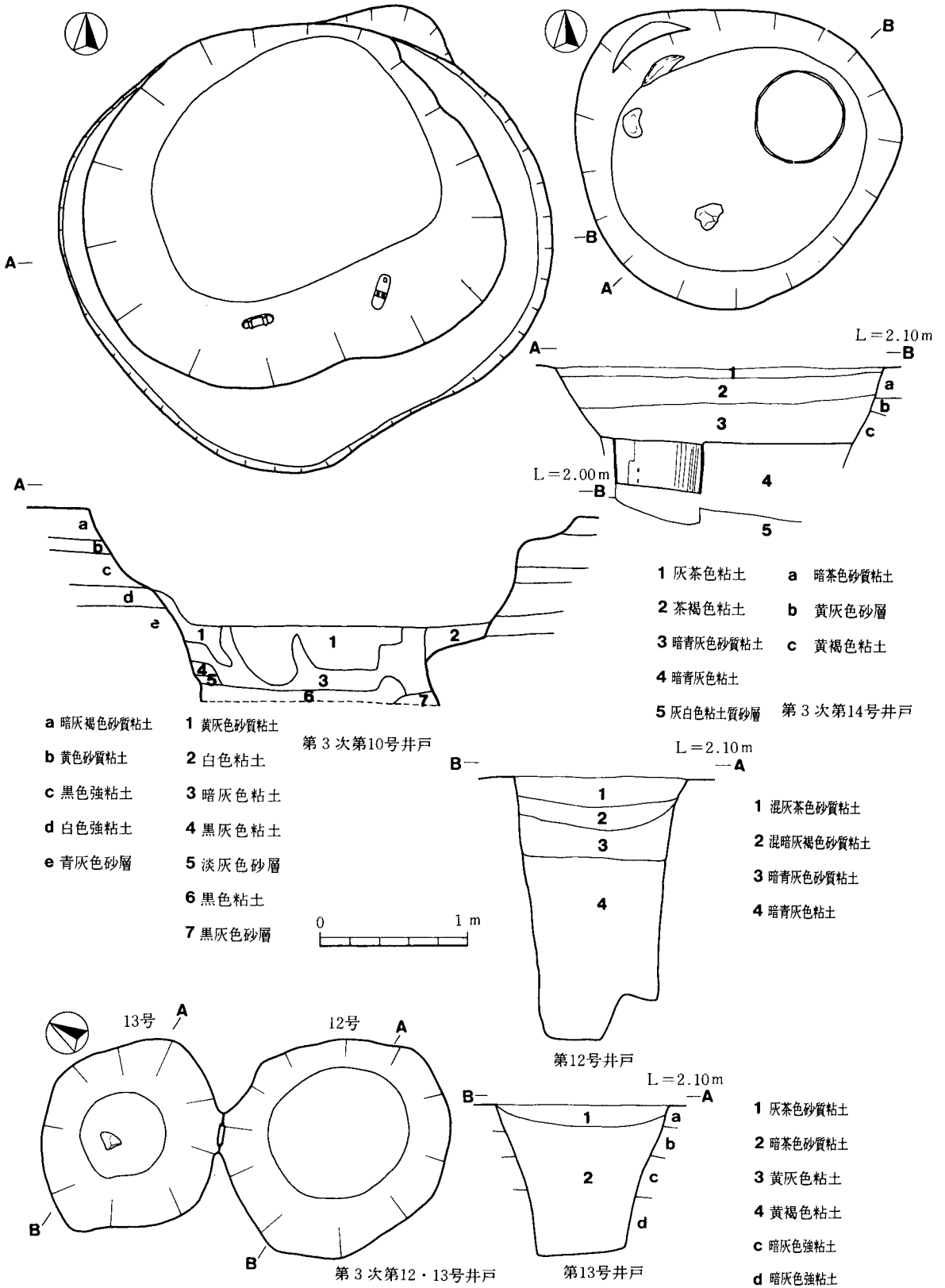
第6号井戸（第83図、図版33） G-5区中央北側で検出。径1.5mの円形の掘り方をもつと思われる。検出面から約175cmまで掘り下げ、湧水層に達したが、井戸側などは確認されなかった。遺物は覆土の中位より上で出土することが多かった。第122図66～70に示した土師質土器や中世陶磁器類がある。

第7号井戸（第83図、図版33） H-5区東南隅で検出。径2.2～2.4mの円形の掘り方を掘り下げると、検出面から約95cm下の灰白色粘土層を切って、曲物が二段据えられていた。掘り方の中心からやや東南方向にずれて曲物は位置する。厚さ5mmに満たない薄い曲物を重ねていたが、上段の曲物は土圧により変形し、一部壊れていた。径60cm、深さ25cm前後を測る。曲物は薄板材に筋目をつけて曲げ、樹皮で止めたものであるが、先述した第4号井戸の曲物と比較すれば、板が薄いだけに弱くみえる。湧水層に位置する下段の曲物はその一部を見るにとどまるが、上段と



第83図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(3)





第84图 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(4)

同様の構造をもつ。曲物より上部の構造は不明であるが、同種の曲物が積み重ねられていた可能性が高く、宇野分類のBⅧ類曲物積上げ井戸に含まれよう。掘り方の覆土中からは土師質土器や中世陶器の断片や板の残欠などが出土し、第122図に示したが、掘り方の下層や曲物内からは板材、箸などが集中して発見された。第122図73～88の16点の箸の殆どは曲物内からの出土である。

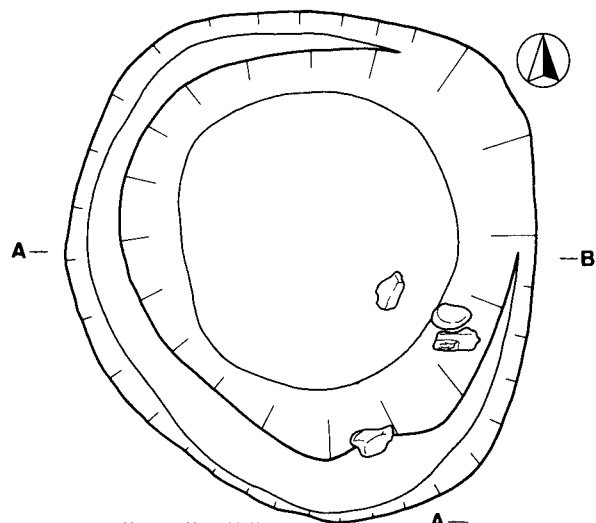
**第8号井戸**（第83図、図版33） H-5と6区の境で検出。約6m南に第7号井戸、約1m北東に第16号井戸がある。掘り方は径2.2mの楕円形を呈する。検出面より15cmばかり下げた所で隅柱が確認された。井戸側は一辺90cmの方形縦板組隅柱横棧どめであるが、南東の隅柱が土圧によって押されて折れ込み、井戸側の上部は大きく変形していた。隅柱は一辺10～15cmもある転用材を用いており、柄穴を切って3段の横棧をはめ込んでいる。縦板は他の井戸と同様に厚さ約1.5cm、幅10cm前後の板を2～3枚ずつ重ねている。井戸の内部は約1mまで掘り下げたが、空間が狭いことと、湧水のため完掘はできなかった。井戸の中の暗灰色粘土からは第127図に示した20点の箸と土師質土器等が出土した。

**第9号井戸**（第83図） H-5区のはぼ中央、第6号溝の東端に位置する。掘り方は径1.2mの楕円形を呈する。検出面から約1mばかり掘り下げたが、白色粘土層を抜いておらず湧水層にまで達していない。井戸側などは検出されず、本来素掘りであったか、井戸側が抜き取られた可能性がある。出土遺物には第127図154～157の土師質土器小片と箸1点などがある。

**第10号井戸**（第84図、図版34） H-3区とH-4区にまたがって検出。旧梯川河道に接して位置しており、河道覆土の灰色粘土を除いたところで確認された。発掘時の崩落により、本来の掘り方より大きくなったが、長軸2.8m、短軸2.2mを計測する。井戸側等は確認されなかったが、底部では約1.3m程度の方形プランとなった。失われた井戸側の規模を示しているのであろう。検出面から70cmばかりの掘り下げた時点で、青灰色砂の湧水層に達し、湧水が激しかった。掘り方の南側で第123図96、97に示した下駄2点が出土した他、中世陶器片や曲物の底部、木片などが出土している。井戸側が確認されなかったため、その規模は不明であるが、薄い板材断片や横棧に用いられたと思われる角材断片が若干出土しており、縦板組横棧どめの井戸側が存在していたと推定される。

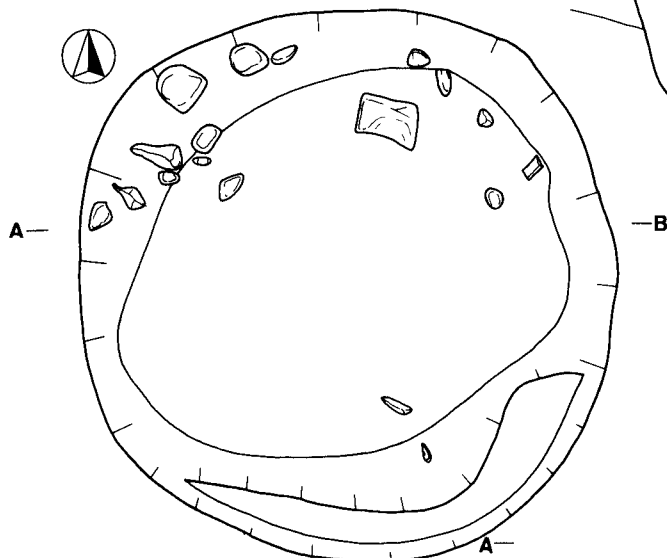
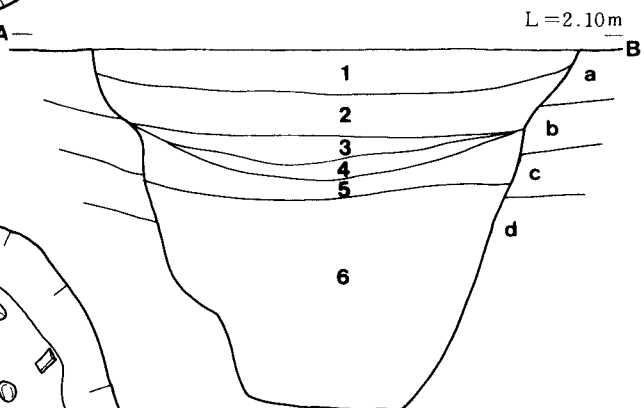
**第12号・第13号井戸**（第84図、図版34） G-6区とG-7区にまたがって検出。二基の井戸が並列して検出されており、まとめて説明を加える。第12号井戸は径1.4mの楕円形掘り方をもつ。検出面から約1.75mまで掘り下げ、湧水層に達したが、井戸側などは存在していなかった。覆土中の下層（暗青灰色粘土）からは、第124図に示した箸14点などの木製品や土師質土器片などが出土した。第13号井戸は第12号井戸の北西に隣接して径1.25mの円形掘り方をもつ。約1.20mまで掘り下げたが、第12号井戸と同様に井戸側などは確認されなかった。覆土中からは若干の土師質土器等が出土している。

**第14号井戸**（第84図、図版34） G-6区中央、やや西側で検出。西南に第12・13号井戸が、東に第15号井戸が存在する。掘り方は長軸2.08m、短軸1.80mの楕円形を呈する。検出面から42cm下がった青灰色粘土中に径約60cm、高さ36cmの曲物が一段据えられていた。曲物は掘り方の北東隅に位置する。曲物は厚さ1cm以下の薄板に筋目をつけて樹皮で止めたもので、一段のみが確



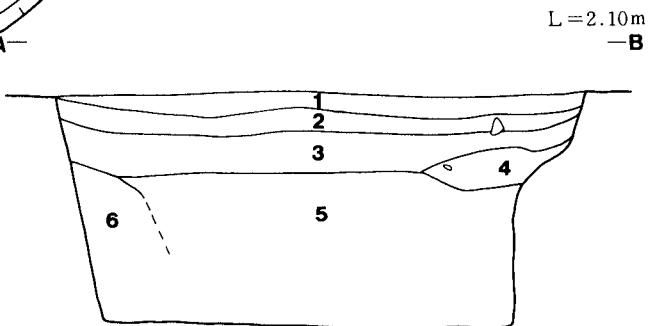
第3次第15号井戸

- |           |                        |
|-----------|------------------------|
| 1 灰色砂質粘土  | a 暗茶色砂質粘土<br>(古墳前期包含層) |
| 2 灰茶色砂質粘土 | b 黄灰色砂層                |
| 3 黒灰色粘土   | c 黄褐色粘土<br>(地山)        |
| 4 暗灰色粘土   | d 暗灰色粘土                |
| 5 淡灰褐色粘土  |                        |
| 6 灰色粘土    |                        |

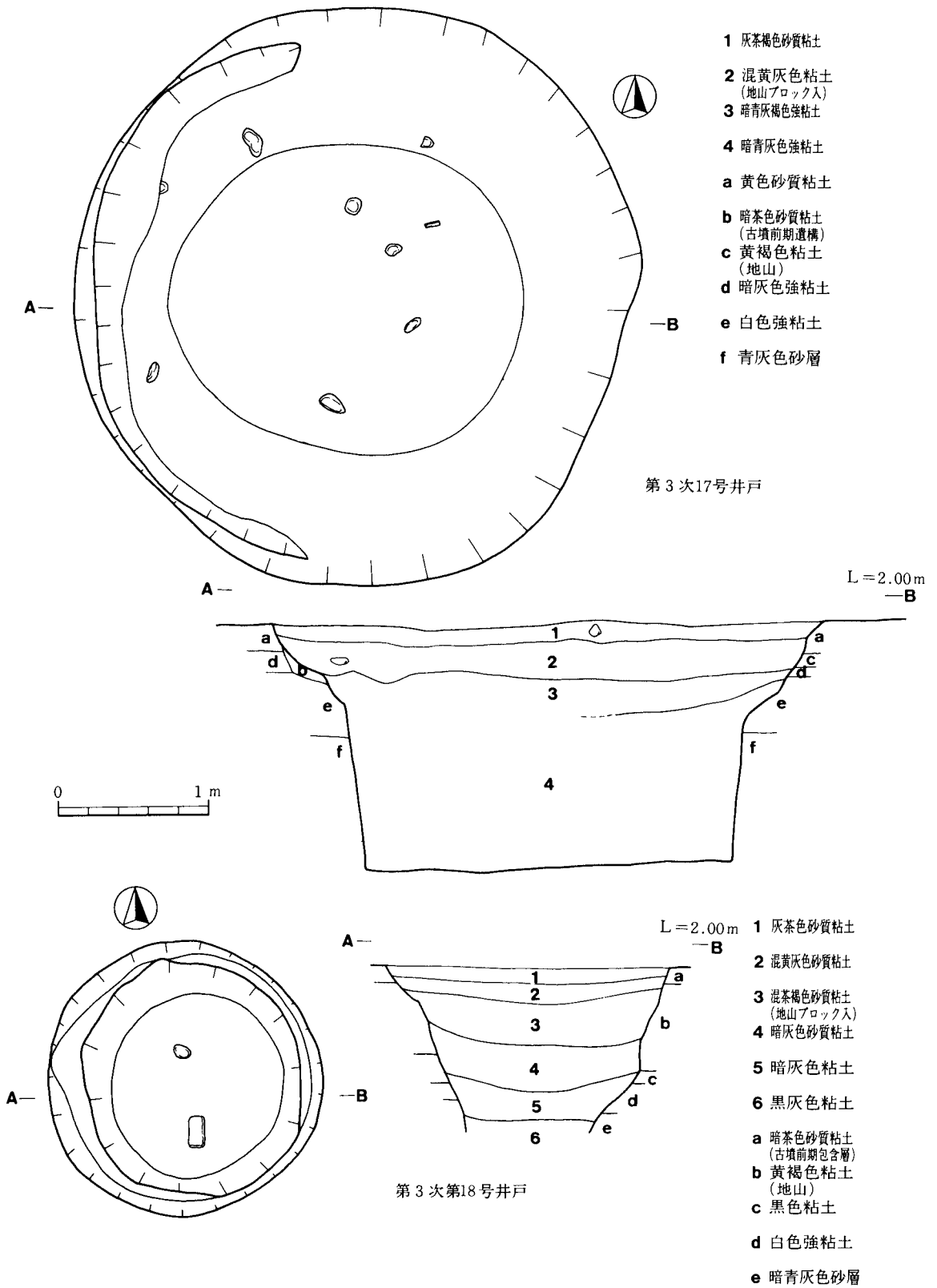


第3次第16号井戸

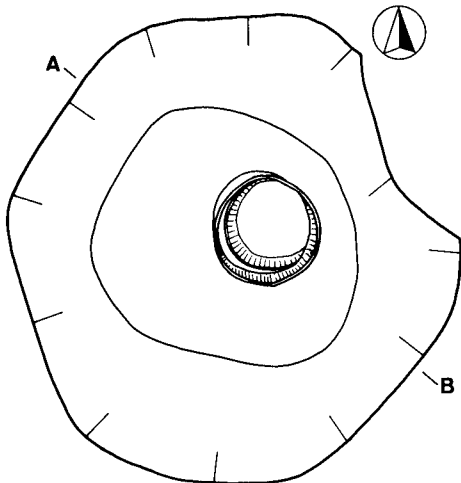
- |                         |
|-------------------------|
| 1 灰茶色砂質粘土               |
| 2 灰色砂質粘土                |
| 3 混黄灰色砂質粘土              |
| 4 暗黄灰色砂質粘土<br>(地山ブロック入) |
| 5 暗灰色砂質粘土               |
| 6 青灰色粘土質砂層              |



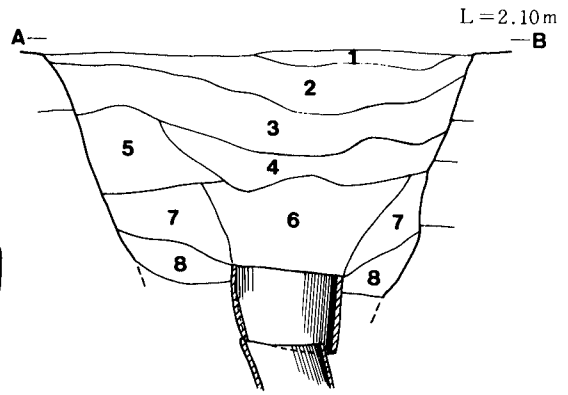
第85図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(5)



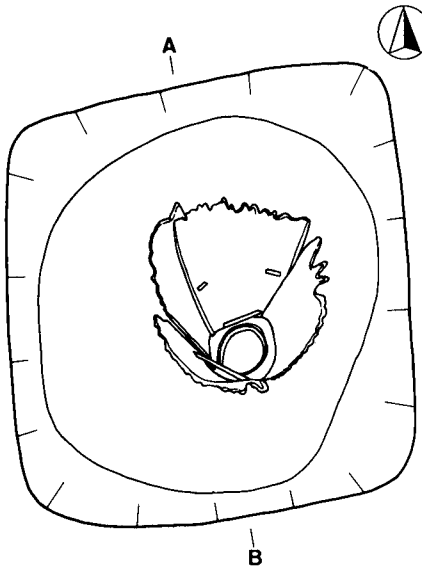
第86図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(6)



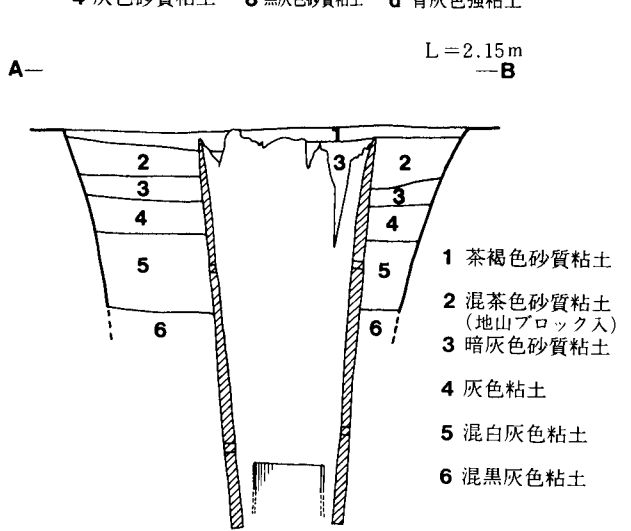
第3次第19号井戸



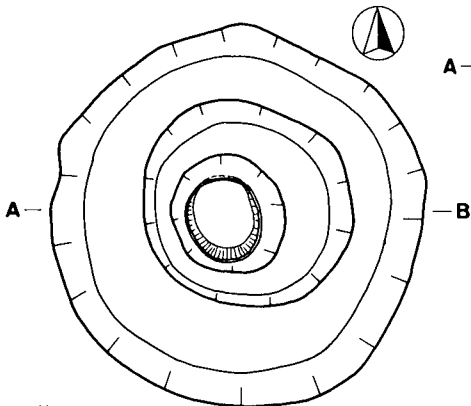
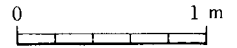
- 1 灰茶色砂質粘土
- 2 黄灰色砂層
- 3 灰色粘土
- 4 灰色砂質粘土
- 5 暗灰褐色粘土
- 6 黒灰色粘土
- 7 暗灰褐色粘土
- 8 黒灰色砂質粘土
- a 暗茶色砂質粘土 (古墳前期包含層)
- b 黄色粘土 (褐色味をもつ)
- c 黒色強粘土
- d 青灰色強粘土



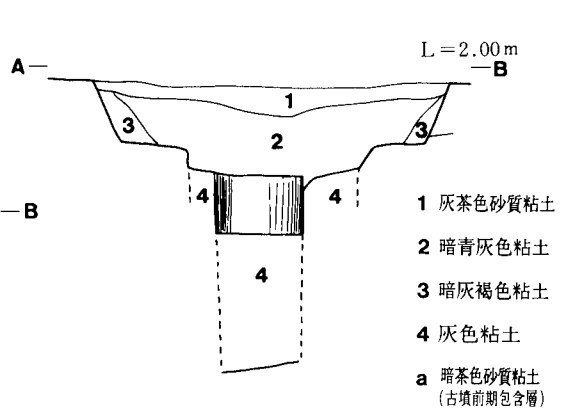
第3次第20号井戸



- 1 茶褐色砂質粘土
- 2 混茶色砂質粘土 (地山ブロック入)
- 3 暗灰色砂質粘土
- 4 灰色粘土
- 5 混白灰色粘土
- 6 混黒灰色粘土

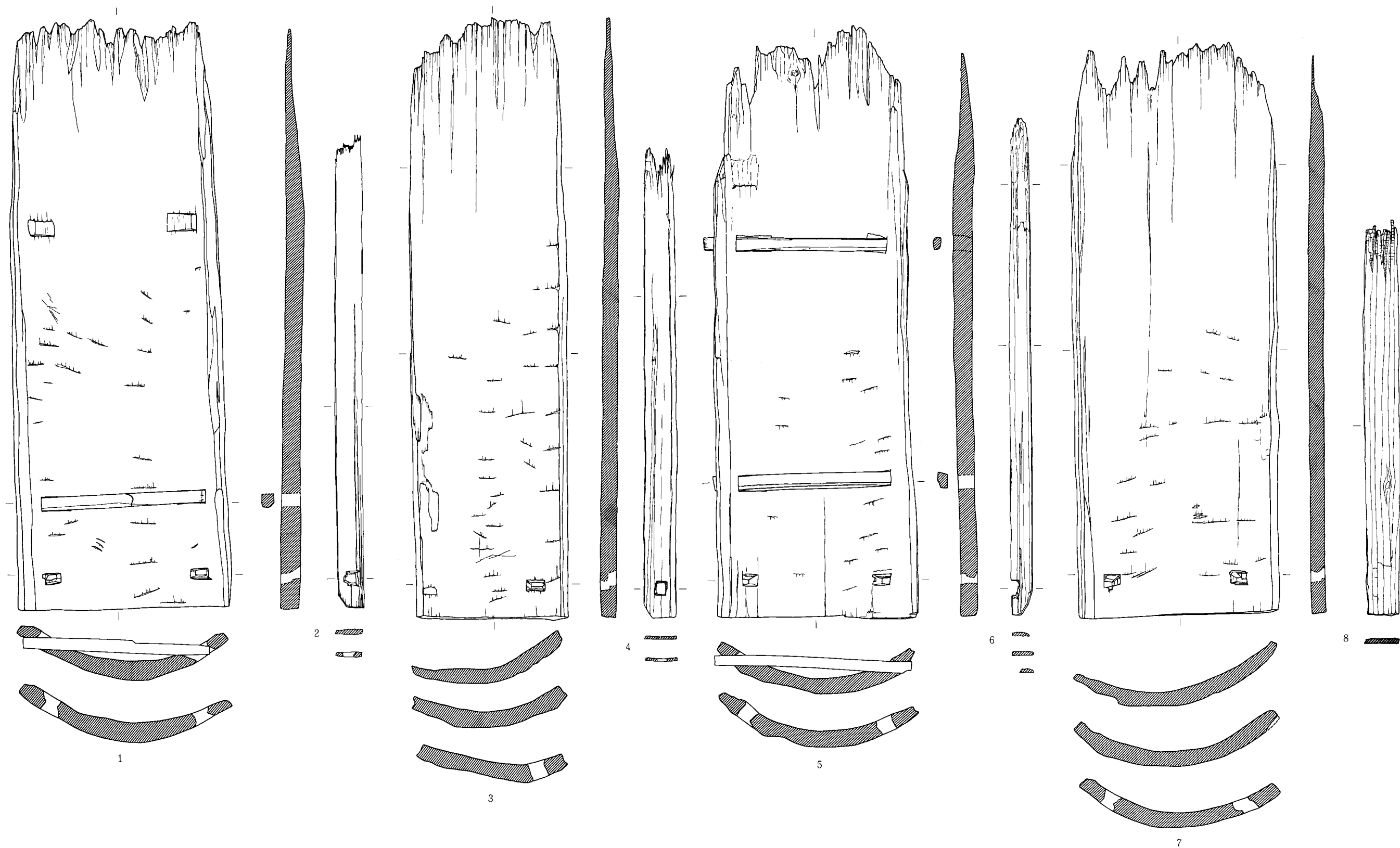


第3次第21号井戸



- 1 灰茶色砂質粘土
- 2 暗青灰色粘土
- 3 暗灰褐色粘土
- 4 灰色粘土
- a 暗茶色砂質粘土 (古墳前期包含層)

第87図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(7)



第88图 第20号井戸出土部材実測図 (S=1/8)

認め他には見当らなかった。曲物の下も下げてみたが、灰白色粘土層を破っておらず、湧水層にまで達していない。また、曲物までの深さも浅く、上部の土層観察からも曲物から上に更に何か存在した形痕は判断出来なかった。以上のことから、この井戸は設置途中で放棄されたか、湧水を求めるというよりも溜め井戸的な機能をもったものと考えたい。覆土中からは礫や第127図158の土師質土器小片等が出土した。

**第15号井戸**（第85図、図版34） G-6区、第14号井戸の東に1.4m離れて検出。長軸約2.2m、短軸約2mの楕円形の掘り方をもつ。覆土は水平推積を示し、1.9mまで掘り下げたが、井戸側等の存在は確認されなかった。覆土の上層には礫や加工のある凝灰岩が土師質土器片等と出土し、下層の灰色粘土からは第125図に示した中世陶器片や板材断片が出土した。

**第16号井戸**（第85図、図版35） H-6区とI-6区にまたがって検出。掘り方は検出面で径が3.2~3.3mと大きい。約60cm掘った所でも径は2.6mを測る。調査時の崩落を考慮してもその直径は3m前後になることは違いない。1.6mまで掘り下げたが、井戸側等は確認できなかった。覆土の上層には礫が含まれ、第125・126図に示した中世陶器類と石造遺物の残欠が混在していた。不用となった井戸を埋める際に石造遺物などを一緒に投棄したような状態であった。下層へ行く程粘土が強くなり、若干の木片が出土したが、井戸の構造を知るまでには至らなかった。

**第17号井戸**（第86図、図版35） I-5区中央南端で検出。第18号井戸が隣接する。調査時の崩落によることもあるが、掘り方は径約2.8mの大きなものであった。約1.5m掘り下げた段階で激しい湧水となり、発掘を途中で断念した。覆土の上位から中位にかけて第129図に示した中世陶磁器類が出土している。井戸側等は確認されていない。

**第18号井戸**（第86図） H-5区とI-5区の中央にまたがって検出。掘り方は検出面で径1.8mの円形となるが、掘り下げる程に狭くなり約1mの深さで径0.8mとなる。覆土は水平推積を示し、井戸側等は確認されなかった。湧水のため完全な底までを調査することはできなかったが、第127図159~161に示した土師質土器が出土している。

**第19号井戸**（第87図、図版35） G-8区の西側で検出。掘り方の一部を後出の第8号溝で切られている。掘り方は検出面で径約2.4mの円形を呈する。約1.2m掘り下げた時点で曲物が現われ、二段重ねであることが判明した。曲物は土圧によって若干変形しているが、上段は径約56cm、高さ約38cm、厚さ3cm前後を測る。下段は径約42cm、高さ約36cm、厚さ2cm前後を測るが、下段のものは湧水のため正確な計測ができなかった。曲物の構造は他の井戸にみられたそれと同じであるが、曲物板の厚味があってしっかりしている。覆土の観察からすれば曲物の上に最低もう一段は曲物が重ねられていた可能性があり、宇野分類のBⅧ類に含まれる。覆土中からは第129図179・180に示した遺物が出土した。

**第20号井戸**（第87図、図版35） G-7区東で検出。耕土直下で南北2.3m、東西2.1mの方形掘り方を検出し、そのほぼ中央で割り抜き板4枚を組み合わせた井戸側を検出した。井戸側は耕土直下で確認されたが、耕作時にはその先端部が足にかかるような状態であったと思われる。井戸側は第88図に示した割り抜き板4枚を組み合わせ、その合わせ部分を外側から板で押さえている。井戸側の上部は腐蝕により凹凸が激しいが、下に行く程遺存状態は良好である。井戸側内を

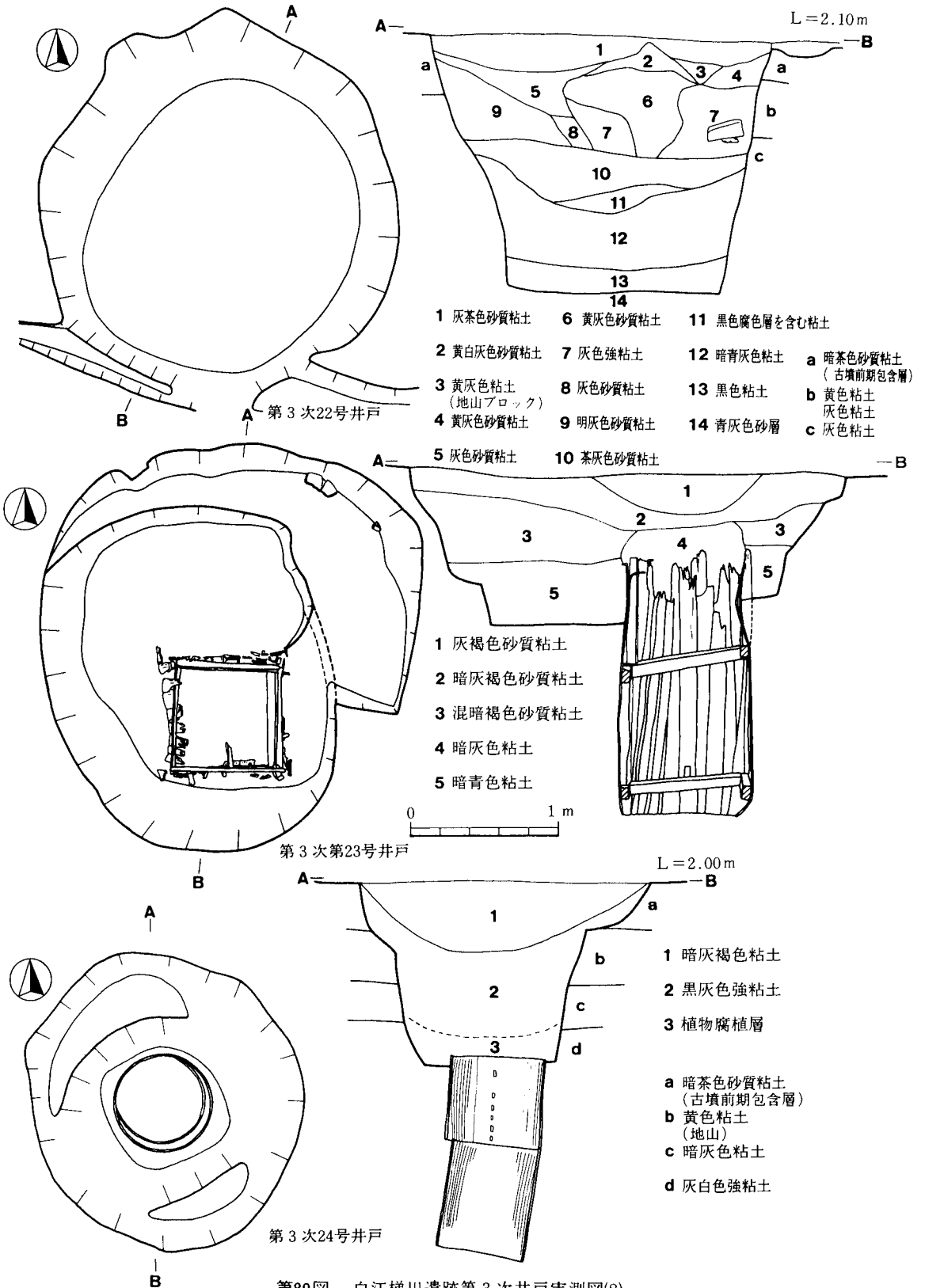
検出面から約170cm掘ったところで中央に曲物のまなこが検出された。曲物は径約37cm、厚さ3cm前後を測るが激しい湧水のため高さは測れなかった。耕土直下の検出面で確認された方形の掘り方は、井戸側の上に設けられた井桁が方形であったことを示している。宇野分類のB I 類の範疇に含まれる。井戸側材は堅牢であったため取り上げて図示したが、曲物は砂に埋没して上げることはできなかった。第128図に示した中世陶器等は掘り方および井戸側内から出土したものである。

第88図は第20号井戸の削り抜き板組み合わせ井戸側板の実測図である。1は北側の板材で全長222.4cm、最大幅81cm、最大厚7.2cmを測る。底より約10cm、39cm、145cmに6×5cmの方形の穴を1対ずつ穿ち、長さ60.9cmの角材を挿入して井戸側材の変形を防止していた。角材は下から中位のもののみが残っていたが、他の穴にも角材が渡されていたとみられる。材の内外面には刃幅が3～10cmの工具による削り痕が残っており、細身の刃をもったチョウナなどの工具により整形がなされたようである。3は西側の板材で全長226.8cm、最大幅58cm、最大厚7cmを測る。底より約10cmのところ7×5cmの方形の穴が1個のみ穿られている。この板は他の材よりも幅が若干狭く、元は対に穿たれようとした穴が一方のみで留ったか、板材の加工時に一部が破損したために、片方の穴のある部分が失われ、側面を再整形した可能性がある。1と同種の工具による整形痕が認められる。5は南側の板材で全長224.2cm、最大幅76.6cm、厚さ7.6cmを測る。底から約12cm、50cm、138cmに7×5cmの穴が1対ずつ穿たれて、1の板材と全く同じ形をとる。穴に差し込まれた角材は、中と上位のものが残っていた。1・3と同じ加工痕が認められる。7は西側の板材で全長217.6cm、最大幅77.4cm、最大厚5.6cmを測る。底から約10cmに6×5cmの穴が1対穿けられている。他の板材と同様の調整になる。2・4・6・8は各々の削り抜き井戸側材の合わせ目に外側から重ねられていた板材で、全長184.6cm～144.6cm、幅13.4～8.4cm、厚さ2.0～1.4cmを測る。縦割りにした板材で、面での調整はない。2・4・6の板材では底から約7～9cmのところ5×4cmの穴が穿たれており、先の井戸側材にある最下段の角材の突出部へはめ込んで固定したものである。

第21号井戸（第87図、図版36） G-7区とH-7区の東側にまたがって検出。掘り方は検出面では径1.9mと大きかったが、約45cm掘り下げて曲物の上面が確認されるようになると、径1m足らずの大きさに縮小している。曲物は土圧によりやや変形しているが、径46cm前後、高さ約30cmを測る。厚さは5m前後の薄板を用いていた。曲物の下も約1.3mまで掘り下げたが他には確認されなかった。構造的には既述した第14号井戸と類似しており、同様の溜め井戸的な機能をもつものと考えられる。

第22号井戸（第89図、図版36） H-7区とH-8区の東側にまたがって検出。第21号井戸の北東約1.5mに位置し、第8号溝と重視する。掘り方は約2.4mの円形を呈し、検出面から約1.3mの湧水層まで掘り下げたが、井戸側等の存在は確認されなかった。ただ中位層より下には板材や角材の断片が散在して出土したから、本来は縦板組の井戸側があった可能性がある。覆土の上位には礫が多数投げ入れられたような状態で出土し、凝灰岩製の石造遺物の断片も含まれていた。中位から下位の粘土層には腐植層を含んでおり、編籠の断片や桶のタガの一部、藁縄などが出土





第89図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(8)

した。植物質遺物の大半は調査時点で崩れてしまったが、第129図に出土土器を示した。

第23号井戸（第89図、図版36） H-9区東端で検出。検出時の掘り方は長軸約2.7m、短軸約2.5mの楕円形を呈したが、約1m掘った所で長軸約2.25m、短軸約1.6mとなっている。掘り方の中央より南に方形縦板組支柱横棧どめの井戸側が存在するが、縦板の外側には掘り方が確認されず、既に第4号井戸で指摘したと同様の構築法をとったものとみられる。一辺約80cmの方形をなす井戸側は、検出面から30cmばかり掘った所から出現し、2.25mの湧水層まで完存する。縦板は最長で約175cmを測るが、幅10~15cm、厚さ5mm以下の薄い板を2~4板重ねている。横棧は底から12~20cm、45cm~52cm、30~35cmの三段に渡して、横棧の間に5~8m角の支柱を立てて支えている。底は湧水層で調査時にも二段目の棧あたりまで湛水した。掘り方と井戸側内の出土遺物を第130・131図に示したが、中世陶器類の他に石臼の断片の出土が目される。

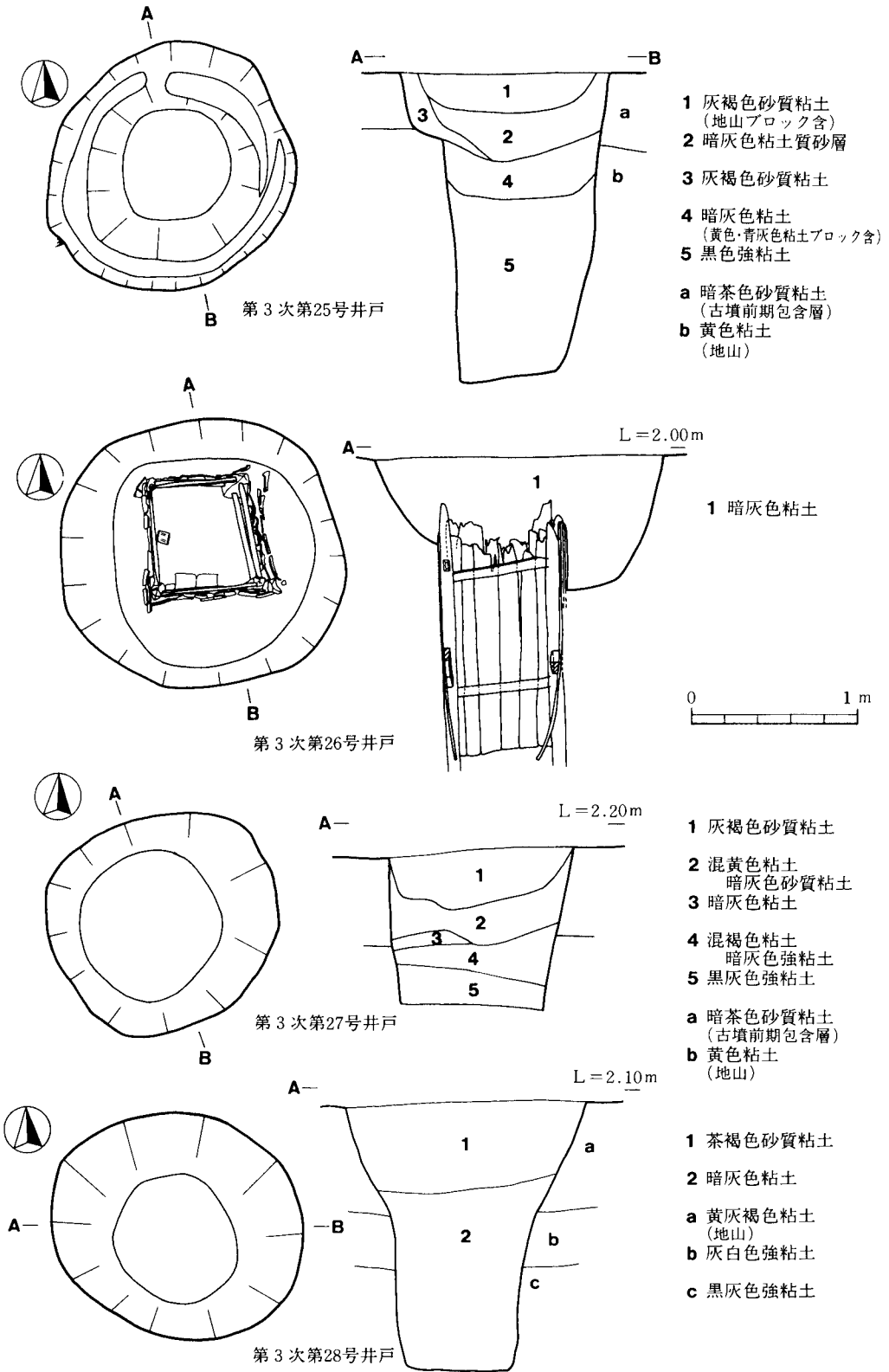
第24号井戸（第89図、図版36） 9-G区のほぼ中央で検出。掘り方は長軸2.05m、短軸1.4mの楕円形で検出したが、40cmばかり掘ると段状となり、径1.1cmの円形を呈する。検出面から約1.1mで曲物の枠を検出し、更に中を掘ると二段になることが判明した。上段の曲物は、径63cm、高さ60cm、厚さ2cmを測る。板の内面に2cm前後の間隔で筋目をつけて曲げ桜の樹皮で止めてある。下段の曲物は、径58cm、高さ76cm、厚さ2cmで同様の造作となっている。いずれの曲物も板が厚いためか遺存状態は良好であった。土層の観察からは更に曲物が積み重ねられていたかは不明であったが、検出面までの高さを考慮するとそうであった可能性が強く、BⅧ類に含まれよう。掘り方と曲物の中からは第131図197~200に示した中世陶器の他、土師質土器の小片や板材の断片が出土した。

第25号井戸（第90図、図版37） 9-G区の北側で第24号井戸から約2m離れて検出。掘り方は1m強の円形を呈する。検出面から1.9m掘り下げ湧水層に達したが、井戸側の存在は確認されなかった。覆土中より土師質土器若干が出土した。

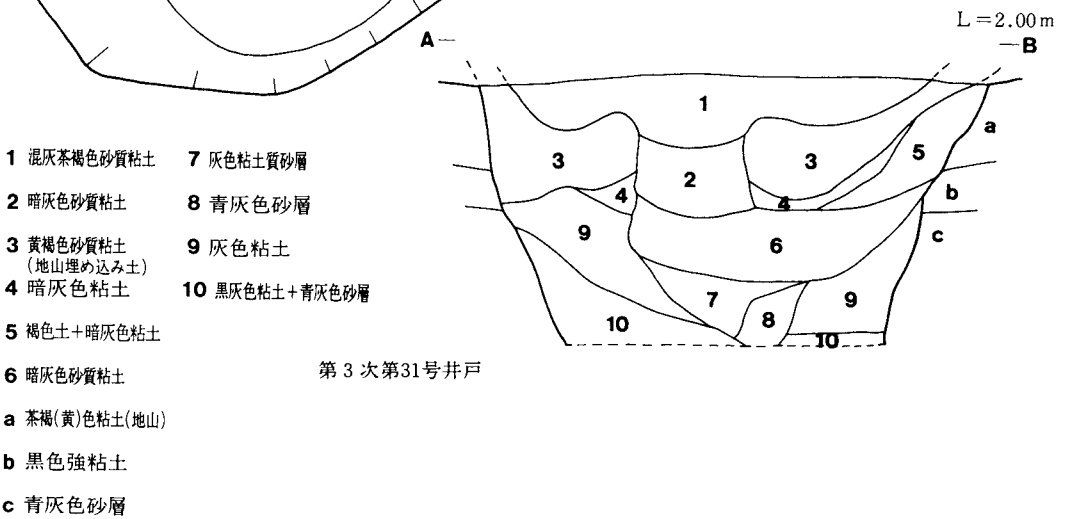
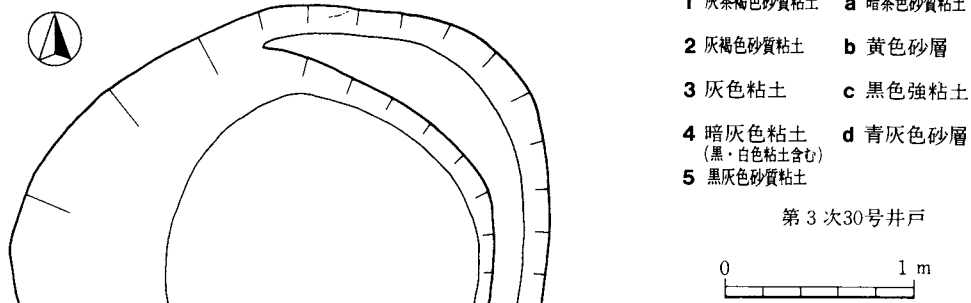
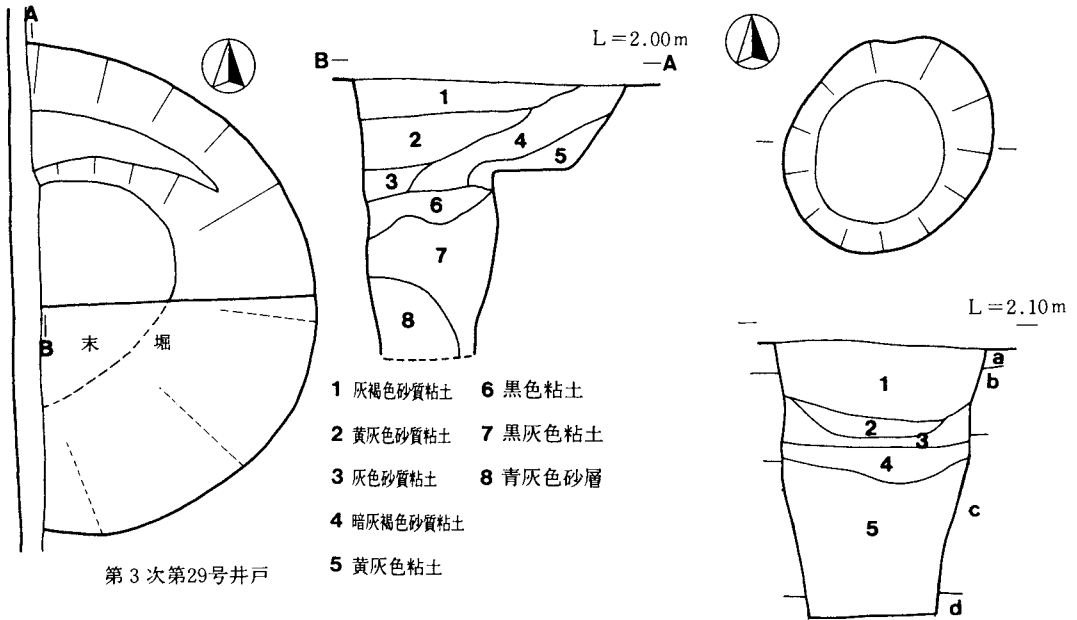
第26号井戸（第90図、図版37） 10-Jの北東部で検出。掘り方は1.7m×1.6mの略方形を呈する。検出面から30cm足らずで井戸側の先端を確認した。北50cm、東68cm、西66cmの若干ゆがんだ方形の井戸側が北に寄って位置する。井戸側は方形縦板組隅柱横棧どめで横棧は2段存在した。縦板は幅10~15cm、厚さ3mm前後の薄板で、最長で約1.5mを測る。隅柱は10cm角の角材を四隅に立て、検出面から65cm前後と140cm前後に3×6cmの柄穴を切って横棧を嵌め込んでいる。約180cmで井戸底に達し、砂層からの湧水は激しくなる。井戸側には位灰色粘土が充ちており、西壁に接して井戸底から10cmばかり浮いた状態で第132図202に示した柄杓1点が出土した。

第27号井戸（第90図、図版37） H-9区中央付近で検出。検出面での掘り方は1.4×1.1mの楕円形で約1mまで掘り下げたが、井戸側などは確認されなかった。素掘りの井戸であった可能性もある。覆土中からは少量の土師質土器が出土したにとどまる。

第28号井戸（第90図、図版37） J-9区とJ-10区にまたがって検出。周辺の建物群と重複して存在する。検出面での掘り方は径約1.4mの円形を示すが、40cm掘った時点では径0.8mと狭くなる。約1.8mまで掘り下げたが井戸側は確認されなかった。しかし、中位より下の暗灰色粘土中より、第132図204~209に示した板材や杭などが出土している。



第90図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(9)



第91図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(10)

第29号井戸（第91図） G-1区北側で検出。当初土壇と想定して調査を進めたが、北半部を下げたところ井戸であったことが判明した。東半部は農道の下となっている。検出時には径2.5m大型の掘り方となったが、50cm下げたあたりから径0.6mと狭くなった。約1.5mまで掘り下げた井戸側等は確認されていない。下半部の砂の混じった黒灰色粘土層からは第133図212・213の柄杓と漆器碗が出土したが、柄杓の曲物部は破損してしまい、底板のみしか図示できない。

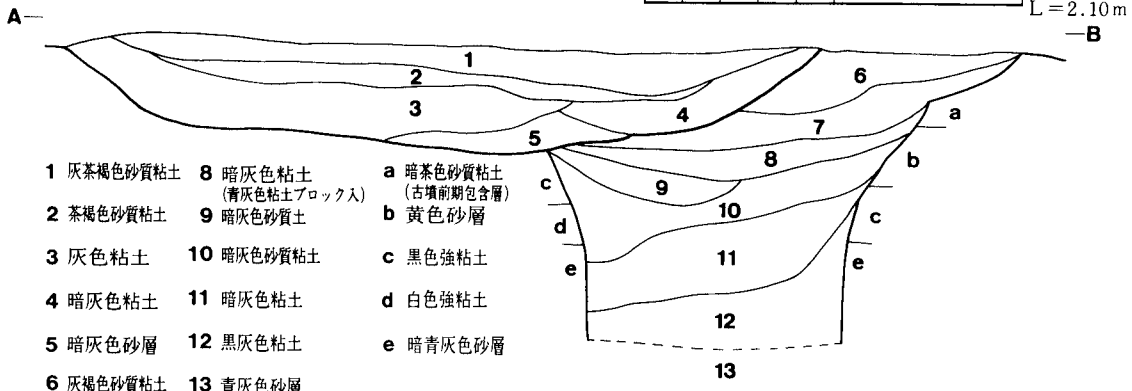
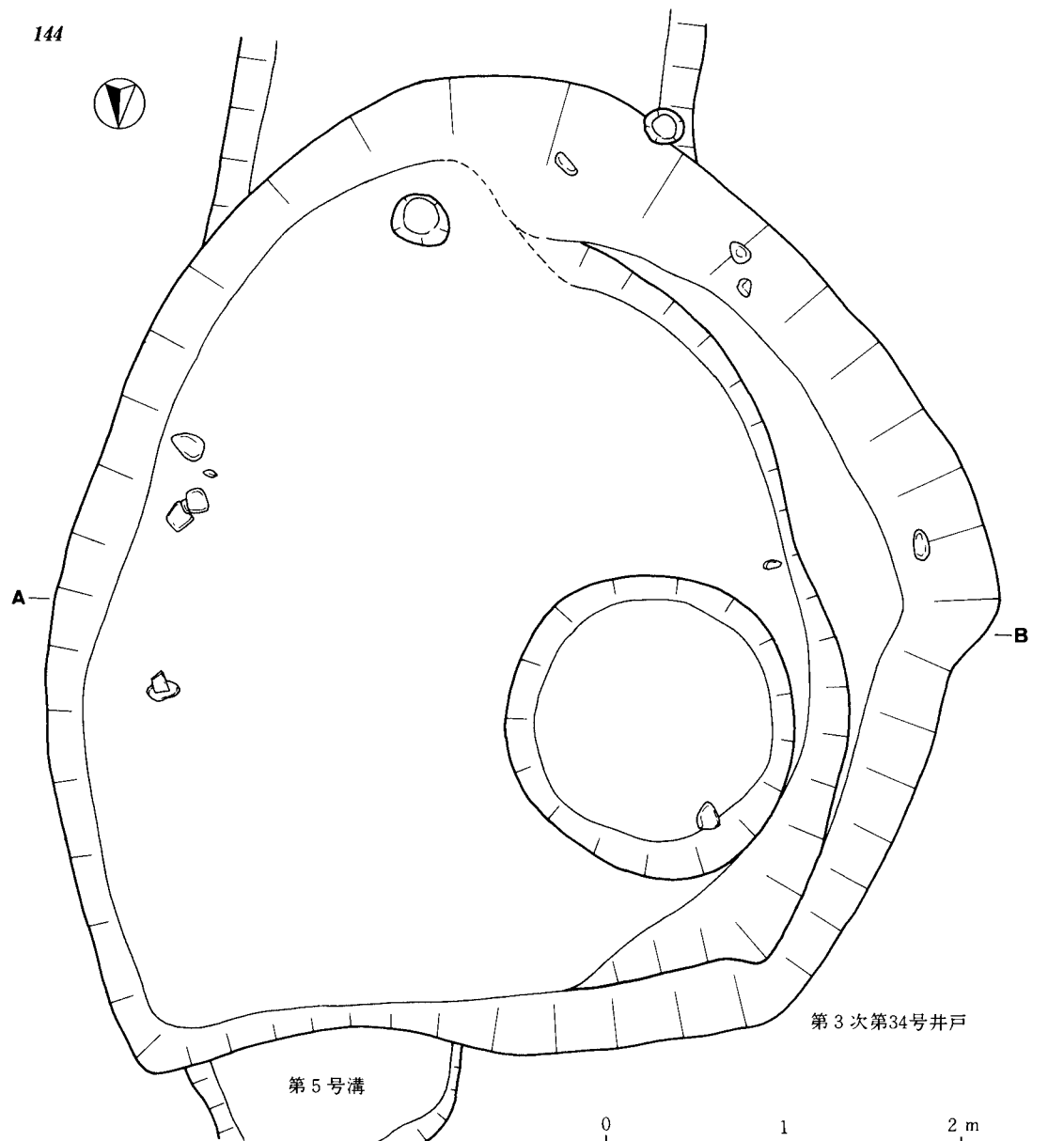
第30号井戸（第91図） G-2区中央から東へ寄って検出。約0.6mに2号土壇がある。検出面では1.2m×1mの楕円形をなしたが、掘り進むと0.8mの円形となった。130cmまで掘り下げ湧水層に達したが井戸側等はみられない。当初、第7号土壇として発掘を始めたが、井戸であると判断されたため名称を変更している。覆土中からは、土師質土器や中世陶器の断片若干が出土した。（第132図210）

第31号井戸（第91図、図版37） H-2区中央で検出。東西方向に伸びる第3号溝と一部で重複する。掘り方は径25cmの円形を呈するが、調査終了時点では崩落のため上端が広がってしまった。約1.4mまで掘り下げ湧水層に達したが、井戸側は確認されなかった。ただ、覆土中からは薄板や杭の断片とみられる木片が出土し、土層観察からも縦板組の井戸側が存在していた可能性が高い。

第32号井戸（第93図、図版38） G-3区で第5号溝と重複して検出。溝底の精査時点で掘り方を確認した。湧水と崩落のため掘り方の正確な規模の把握は十分ではなかったが、一辺約1.4mの方形をなしていたと思われる。検出面から約1.4mで湧水層に達したが、西側に約80cmが離れて薄い板が立っていた。縦板組井戸側の一部とみられる。覆土中からは第132図211の土錘の他、土師質土器若干が出土した。

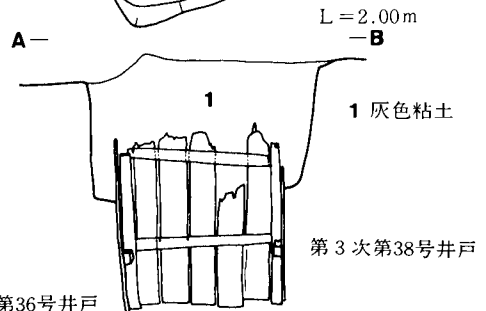
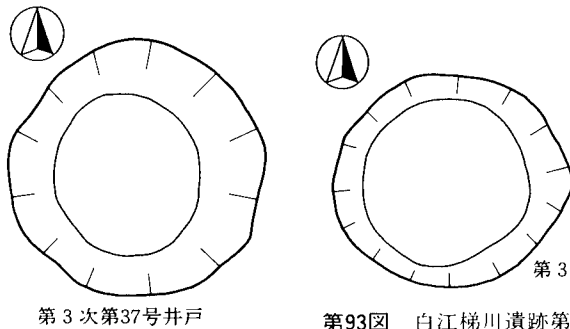
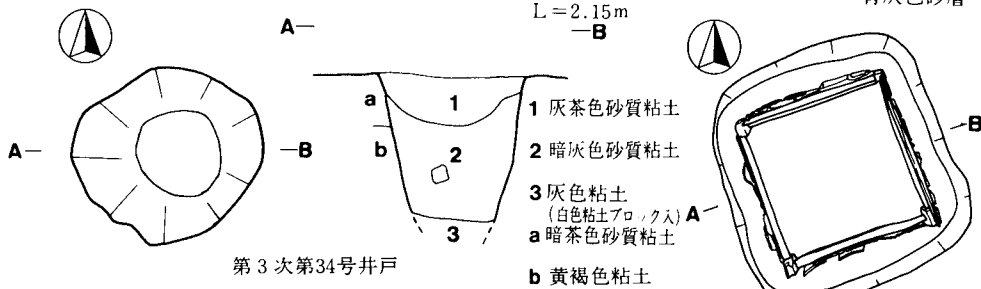
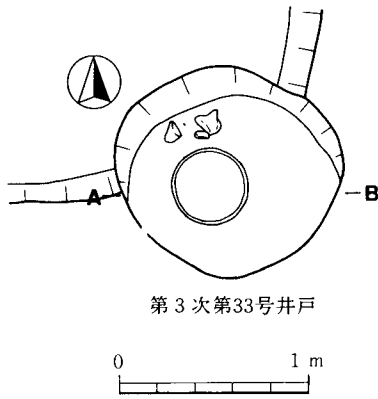
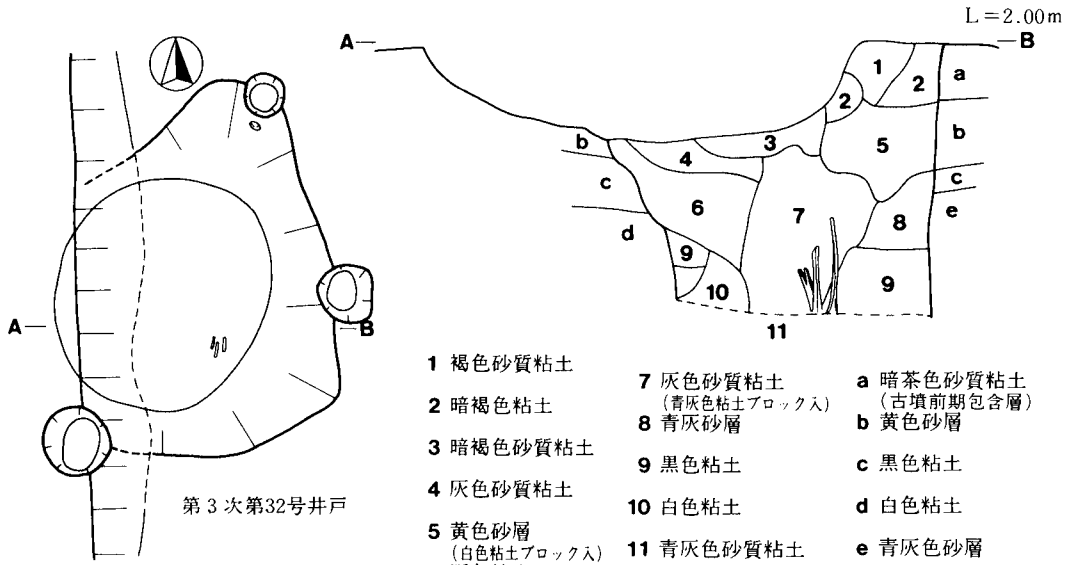
第33号井戸（第93図） G-3区西端、第2号土壇と重複する。検出時には土壇の東南隅に、張り出す形で井戸の掘り方の半分が検出され、土壇が井戸を切って造られていた。井戸の掘り方は1.2×1.1mの円形を呈し、1.5m掘り下げた段階で、中央に曲物の上部を検出した。曲物は二段存在することが湧水の中を手で探ると確認されたが、正確な計測はできなかった。上段の曲物は径40cm、厚さ1cm以下の薄い曲物で遺存状態も余り良くない。板の内側に筋目をつけて曲げ、樹皮でとめたものである。掘り方の覆土から中世陶器片や木片が若干出土したが、曲物内の覆土の最深部から第133図215・216に示した土師器甕2点が出土しており、これからすると本井戸は平安時代後期に掘られたとみることができよう。

第34号井戸（第92図、図版38） H-3区南側で第5号溝と重複して検出。溝の覆土を除くと井戸の掘り方が検出されたから、井戸を切って溝が造られたと判断された。これは検出時において約5.4m×4.4m、深さ約50cmの楕円形の大きな落ち込みが確認され、この部分を掘り下げた段階で初めてその北西部に径約1.6mの井戸の掘り方を検出したためである。そしてこの落ち込みが一定の平坦面を形成することから、井戸に関係した付属部分であるとも考えられた。しかし、またこの落ち込みが井戸の廃絶後に第5号溝とともに切って造られた別の遺構であったとすることも土層観察からは可能性である。落ち込み部分からは礫や中世陶器片などが出土している。井戸本体の掘り方は、検出面から約1.1mで湧水層に達した。覆土中からは第134図に示した土師質



- |            |                         |                        |
|------------|-------------------------|------------------------|
| 1 灰茶褐色砂質粘土 | 8 暗灰色粘土<br>(青灰色粘土ブロック入) | a 暗茶色砂質粘土<br>(古墳前期包含層) |
| 2 茶褐色砂質粘土  | 9 暗灰色砂質土                | b 黄色砂層                 |
| 3 灰色粘土     | 10 暗灰色砂質粘土              | c 黒色強粘土                |
| 4 暗灰色粘土    | 11 暗灰色粘土                | d 白色強粘土                |
| 5 暗灰色砂層    | 12 黒灰色粘土                | e 暗青灰色砂層               |
| 6 灰褐色砂質粘土  | 13 青灰色砂層                |                        |
| 7 明灰色粘土    |                         |                        |

第92図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(11)



第93図 白江梯川遺跡第3次井戸実測図(12)

土器の他に箸11点、下駄1点と加工のある木片が出土している。この他、井戸側の一部とみられる薄い板材も数点しており、縦板組の井戸側が存在した可能性が高い。

第35号井戸（第92図） G-8区第8号溝の北側で検出した。掘り方は径0.8mの円形で約1mまで掘り下げたが湧水層に達しなかった。覆土中から土師質土器片若干が出土した。

第36号井戸（第93図） H-11区北東隅で検出。掘り方は径1.2mの円形で、約1mまで掘り下げたが湧水層に達しなかった。出土遺物は若干の土器類の他に第135図241～244に示した石造遺物の断片や板材の小断片が出土した。

第37号井戸（第93図） H-10区の東南部で検出。掘り方は径1.3mの円形で約1mまで掘り下げたが、湧水層に達しなかった。覆土中から第135図245の越前焼壺断片が出土した。

第38号井戸（第93図、図版38） J-9区西側で検出。第15号溝とわずかに重複するが、切り合い関係はつかめなかった。掘り方は一辺約1.1mの方形を呈し、検出面から40cmで井戸側を確認した。井戸側は一辺80cmの方形縦板組隅柱横棧どめであった。検出面から1.3mに縦板の下端を揃えている。下にまなこなどの施設は無い。残存する縦板は長さ約90cm、幅12～18cm、厚さ1～1.5cmの板を2枚ずつ重ねている。隅柱は1辺6～8cmの角材を用い、底から約30cmと80cmのところに柄穴を切って一辺4～5cmの横棧をはめ込む。井戸側は宇野分類のBⅢ類の典型ともいえる。掘り方や井戸側内からは若干の土師質土器片と木片が出土したのみである。

第39号井戸（付図） J-5区とJ-6区にまたがって検出。中世以降の旧梯川の堆積土を除去し、川跡の肩を確認した際に検出した。工事削平高より下位に確認されたため、掘り方の規模を把握するにどとめた。掘り方は径約3mの円形を呈する。

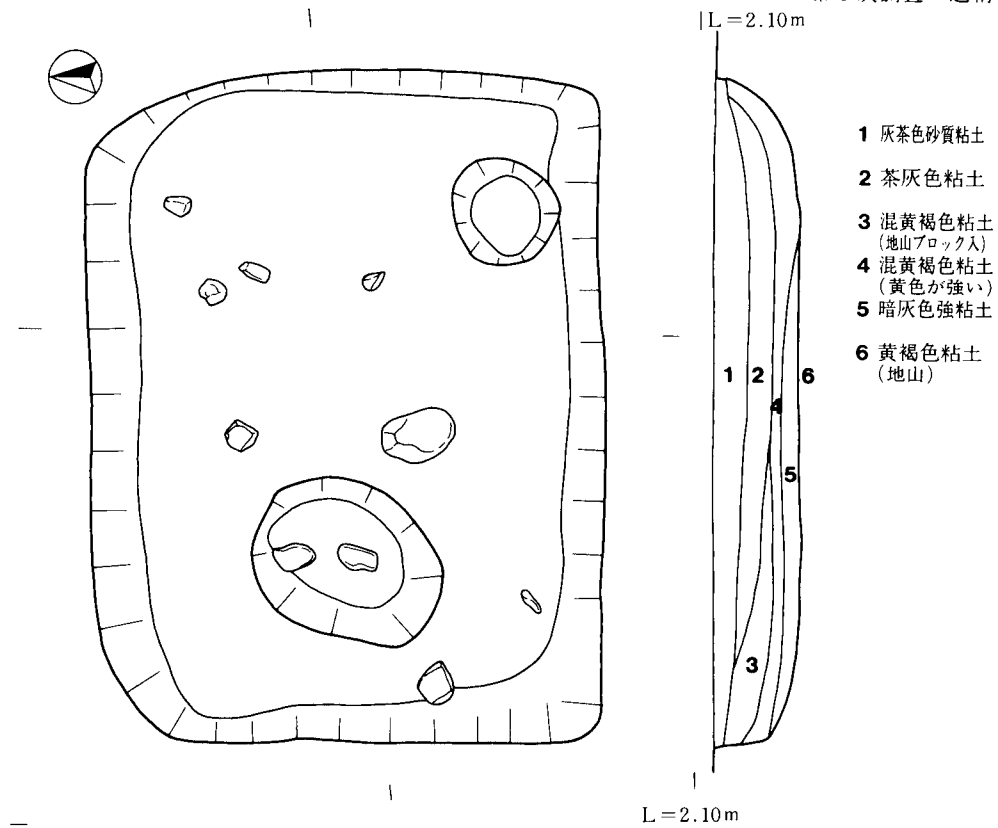
## 第5節 土 塚

遺構の検出時点で土塚として扱ったものは20基を数えた。しかし、発掘調査の結果、井戸であったことが判明したり、下層の古墳時代前期の遺構の一部であることが明らかになったものがあって、これらを除くと確実に中世の土塚と見て良いものは、7基となった。また、本節で土塚として扱う遺構は、第2次調査の土坑と同意語として使用したものであることを断っておく。

第1号土塚（第94図、図版39） G-2・3区で検出。北に位置する2号土塚とは約1.6m離れている。長軸3.55m、短軸2.7m、深さ40cmの長方形を呈する。覆土はほぼ水平堆積を示し、坩底の地山面には浅い凹みが2カ所存在した。覆土中には河原石や角礫も若干含まれていた。出土遺物は少なく、実測可能な土器を第136図1～3に図示した。珠洲焼や土師質土器からみて15世紀後半の遺構とみられる。

第2号土塚（第94図、図版39） G-2・3区で検出。1号土塚と並列する位置にあたる。長軸2.5m、短軸2.35m、深さ12～20cmの隅円方形を呈する。南西のコーナー部にある第33号井戸を切って造られていた。土塚々底の中央部がやや高まりをもち、周縁部に緩やかに傾斜していた。覆土中からの出土遺物は少なく、しかも殆どが断片である。第136図4に示した越前播鉢からその営造年代の上限は15世紀とみられる。

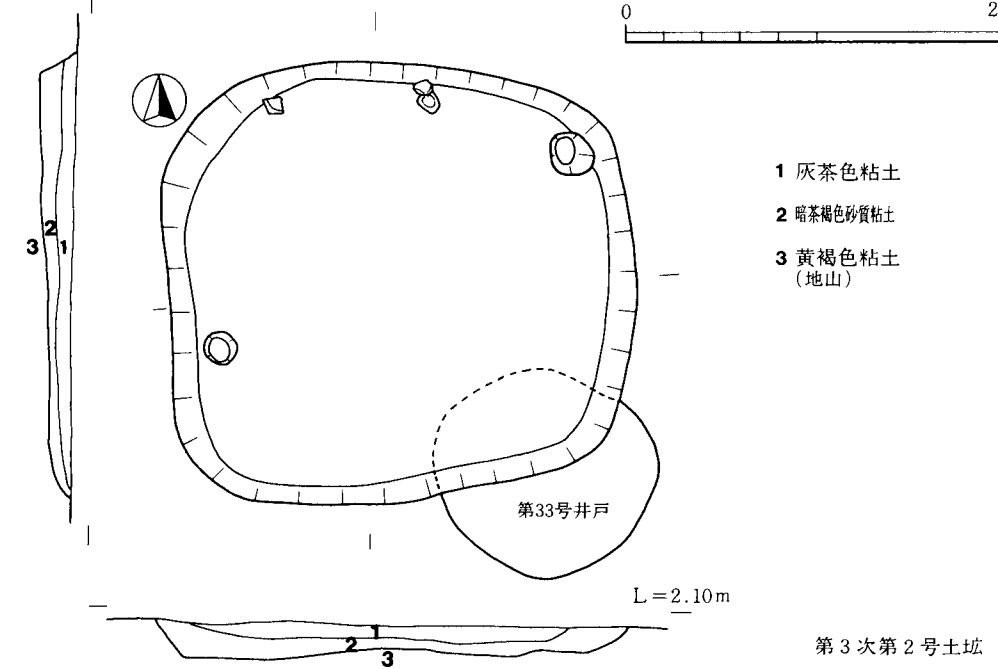




- 1 灰茶色砂質粘土
- 2 茶灰色粘土
- 3 混黄褐色粘土  
(地山ブロック入)
- 4 混黄褐色粘土  
(黄色が強い)
- 5 暗灰色強粘土
- 6 黄褐色粘土  
(地山)



第3次第1号土坑

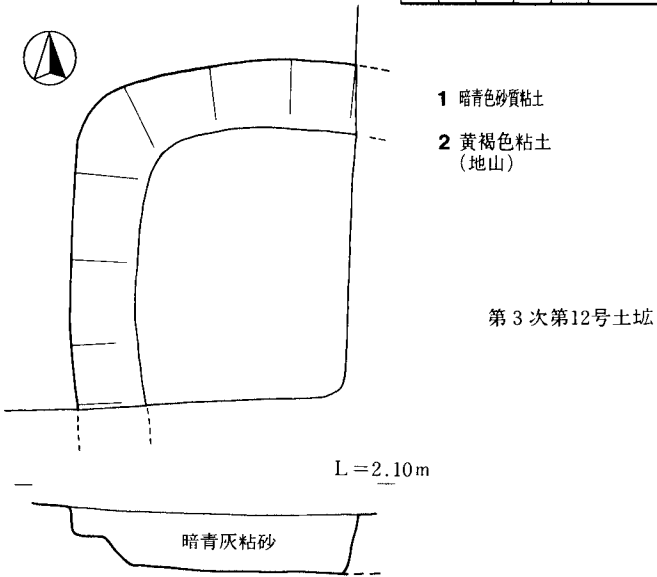
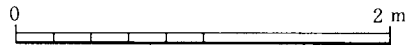
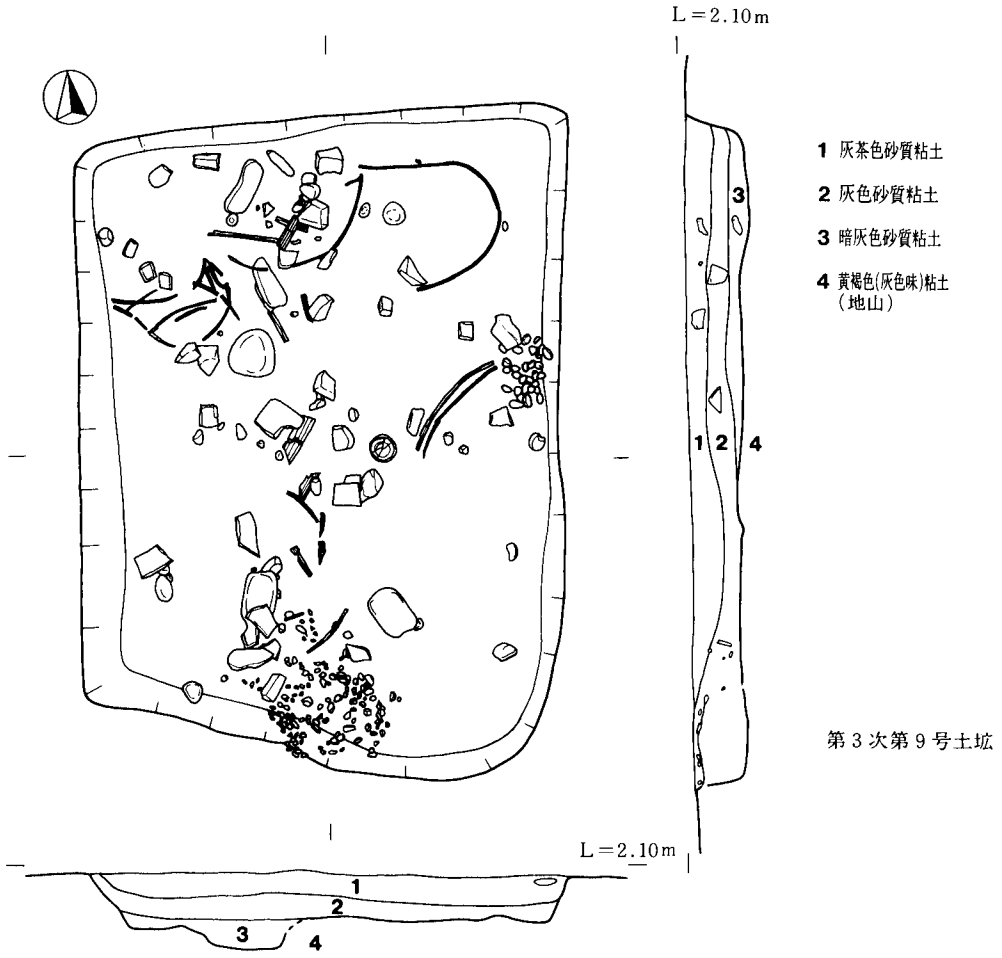


- 1 灰茶色粘土
- 2 暗茶褐色砂質粘土
- 3 黄褐色粘土  
(地山)

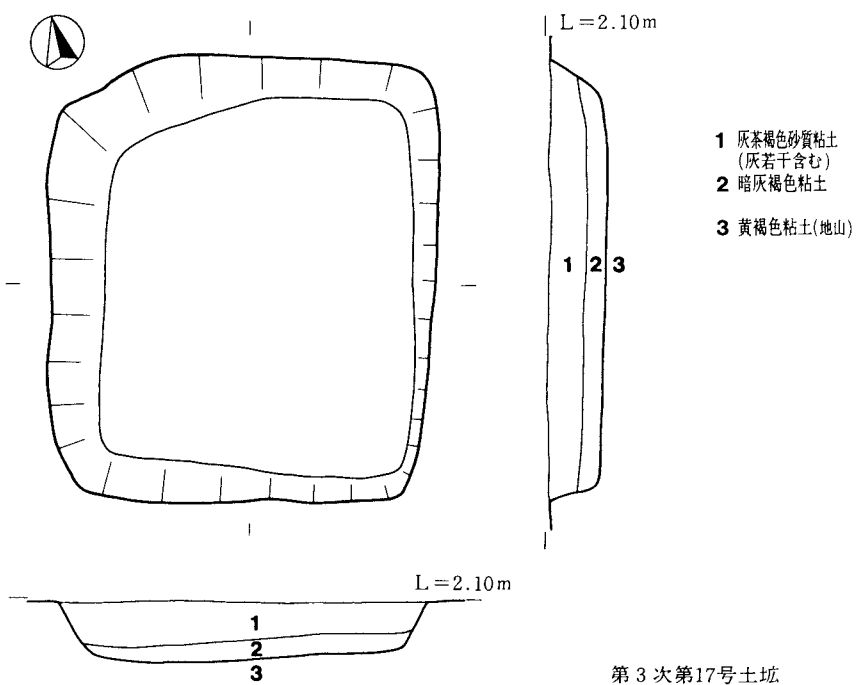
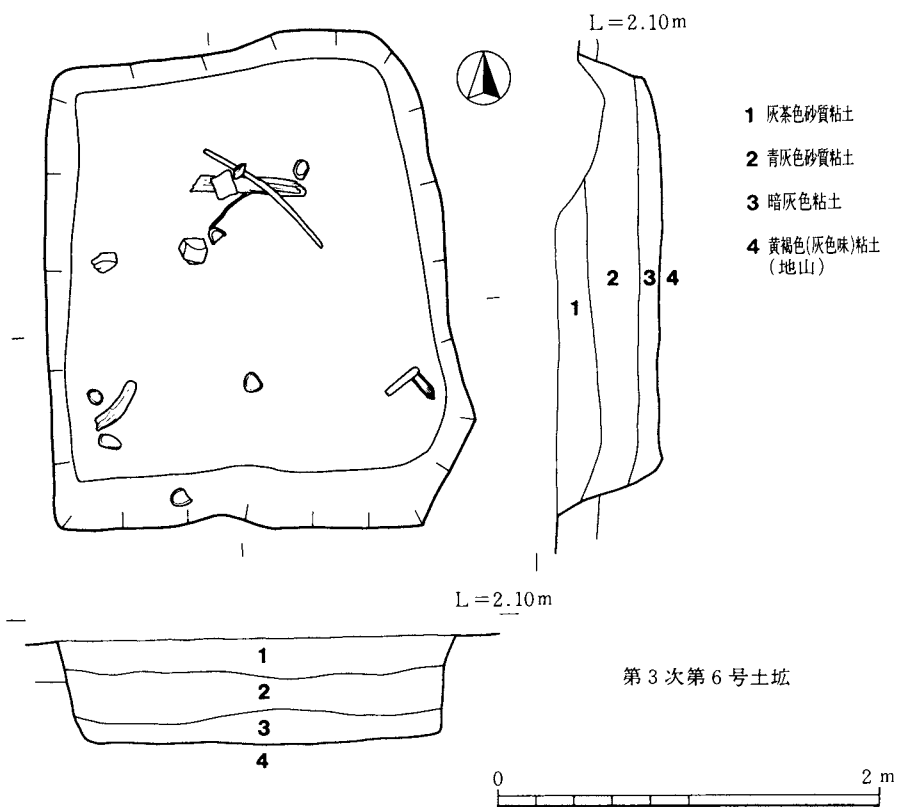
第33号井戸

第3次第2号土坑

第94図 白江梯川遺跡第3次土坑実測図(1)



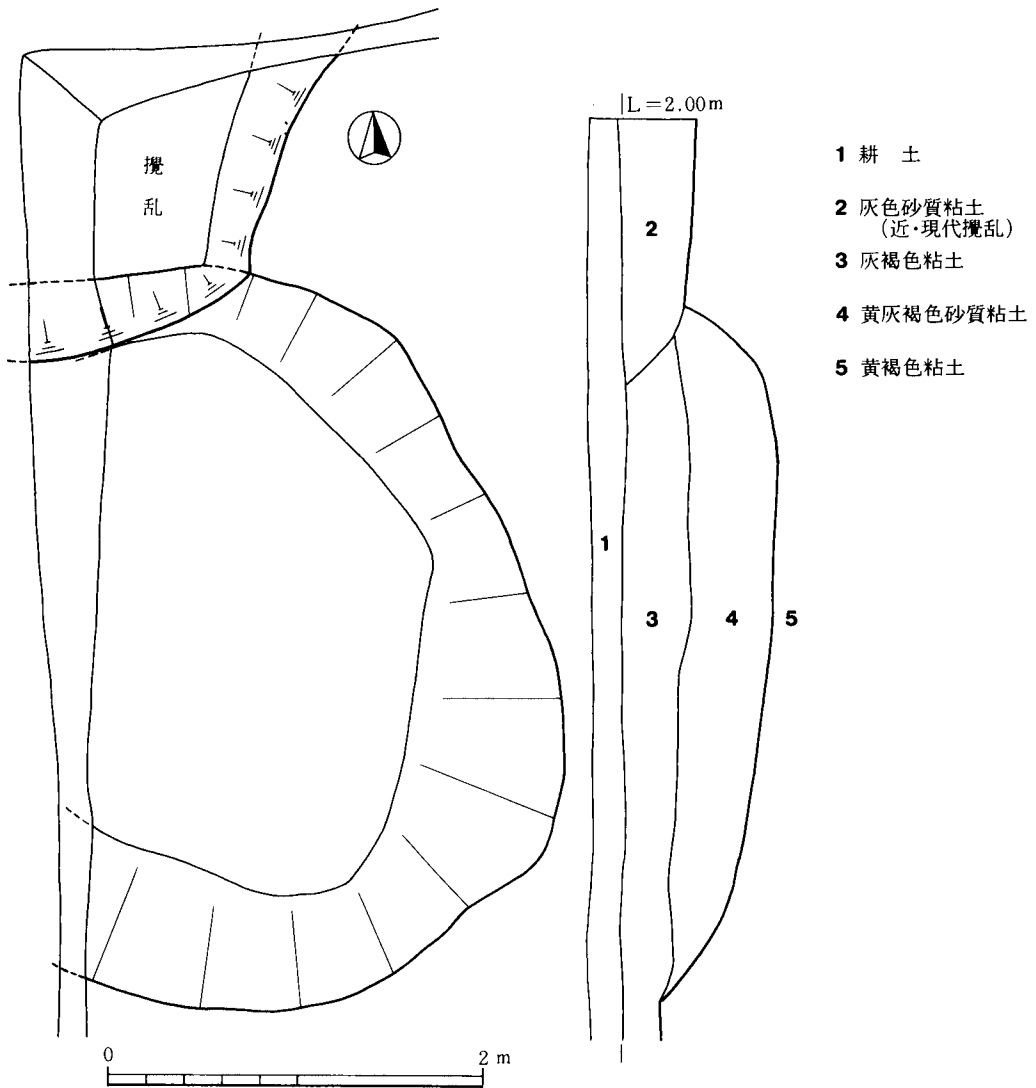
第95图 白江梯川遺跡第3次土坑実測図(2)



第96図 白江梯川遺跡第3次土坑実測図(3)

第6号土坑（第95図、図版39） H-2区西南隅で検出。土坑の北端部を東西に浅い第4号溝が切っている。長軸2.6m、短軸2.1m、深さ55cmの方形をなす土坑。覆土は下へ行く程粘質が強く、黒灰色を帯びてきた。覆土中からは第136図7～9の中世陶器等の遺物の他、礫、自然木の枝、板材の断片などが出土した。

第9号土坑（第95図、図版39） G-5区南側で検出。長軸3.45m、短軸2.55m、深さ20～30cmの長方形を呈する。土坑の覆土は暗褐色砂質粘土で坑底に近づく程粘質が強くなり、黒灰色を帯びていた。土坑の南端部と東側で遺構の検出時点から径7～2cmの小さな円礫がかたまりをもって確認された。南側の礫は坑内へ落ち込むような感じでまとまっている。坑内からは20cm程度の河原石の他、第137図22、第138図23・24の凝灰岩切石断片が出土した。また中世陶器類の他、



第97図 白江梯川遺跡第3次土坑実測図(4)

自然木（枝状）や板材の断片が分散した状態で発掘されている。陶器類からみて世紀後半の遺構とみられる。

第12号土壇（第95図） 6-F区北側でその一部を検出。全体の約1/4を調査したにとどまる。東西1.2m以上、南北1.3m以上で、深さ25cmを測る。方形プランの土壇の一部と推定されるが、覆土中から土器小片が出土したのみである。時期は不明。

第19号土壇（第96図、図版39） J-7区北側で全体の約1/2を検出。南北3.92m、東西2.5m以上の楕円形土壇とみられる。最深部で80cm前後となる。北側では後世の攪乱を受けており、覆土中にも明らかに混入したと判断される遺物が混じっている。第139図23から44に示したものがその遺物であるが、中世陶器類の他に石造遺物の断片の多い点が目につくのであり、破損した不用品を廃棄した穴と思われる。

## 第6節 溝

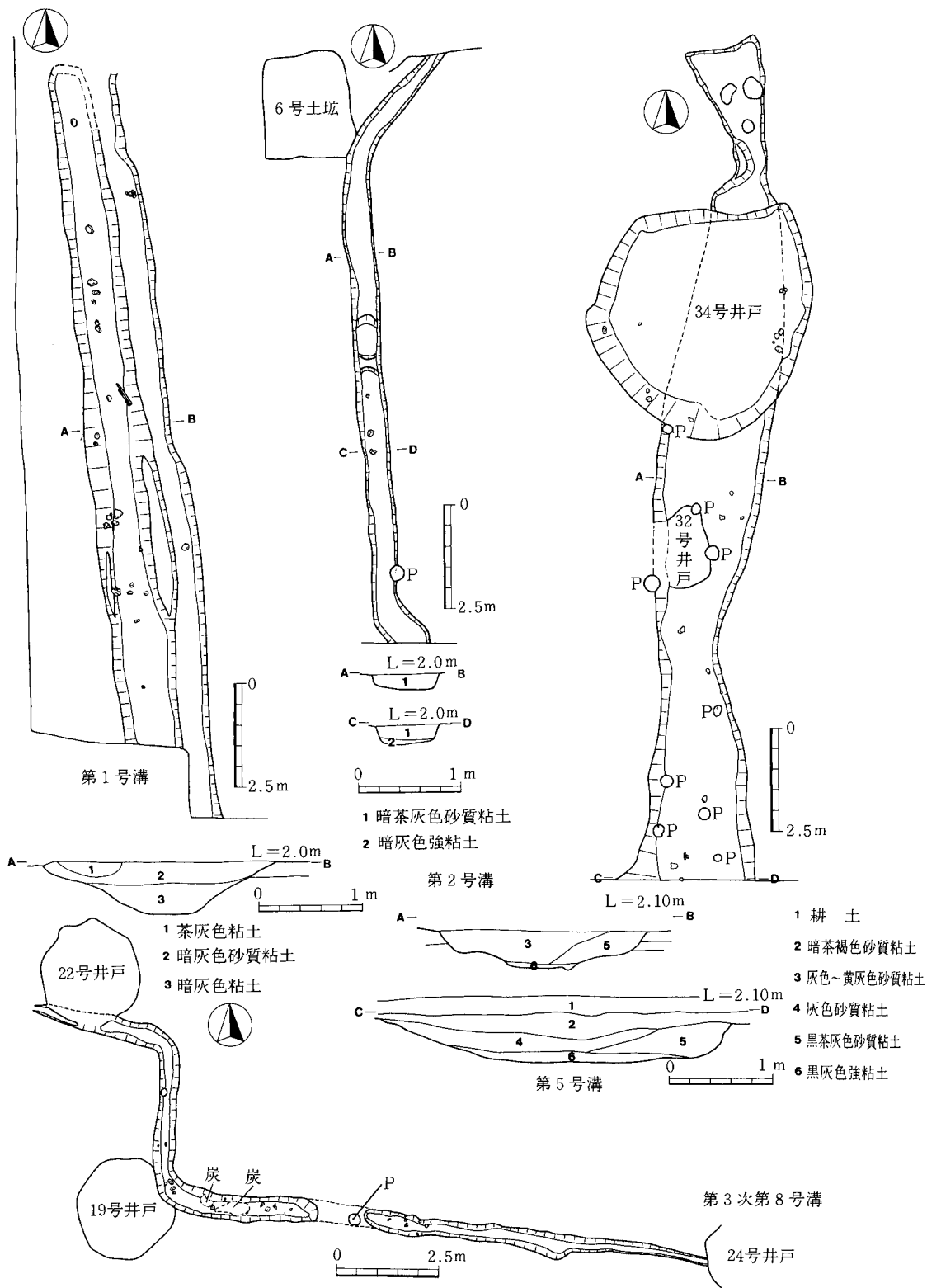
溝は遺構検出時点で特にH-8・9とG-8・9区周辺で南北方向に平行する細い溝が確認されたため、検出順に番号を付していったのであるが、調査の段階ではこれが耕作時についた浅い溝であったことが判明したため、結果として多くの欠番を生ずることとなった。また、明らかに近世以前の溝であることが出土遺物や覆土の状態から確認された溝もあるが、削平のためか途中で途切れてしまっている。全体的な位置関係は別添の遺構配置図を参照願うこととし、本稿ではその中でも主要な溝の概要を記しておく。なお、実測図は平面図が約1/150、断面図が約1/60の変則的な図版となっているが、了解願いたい。

第1号溝（第98図、図版40） H・G-1区東側で検出。確認した長さは約18mで南側の第2次調査区へ伸びている。幅は上端で180~120cm、深さ30cm前後を測る。東側は幅約60cmで浅いテラス状の二段掘りとなっている。断面形は大きく開くU字形をなす。覆土は中位より下部では粘質が強い。第2次調査区のE-1~8区で調査された第1号溝のコーナー部でつながる可能性が高く、区画溝の一部と考えている。溝内からは第140図1~12の中世陶器類等の他、板材の断片が出土した。出土した土器から16世紀にかかる溝とみている。

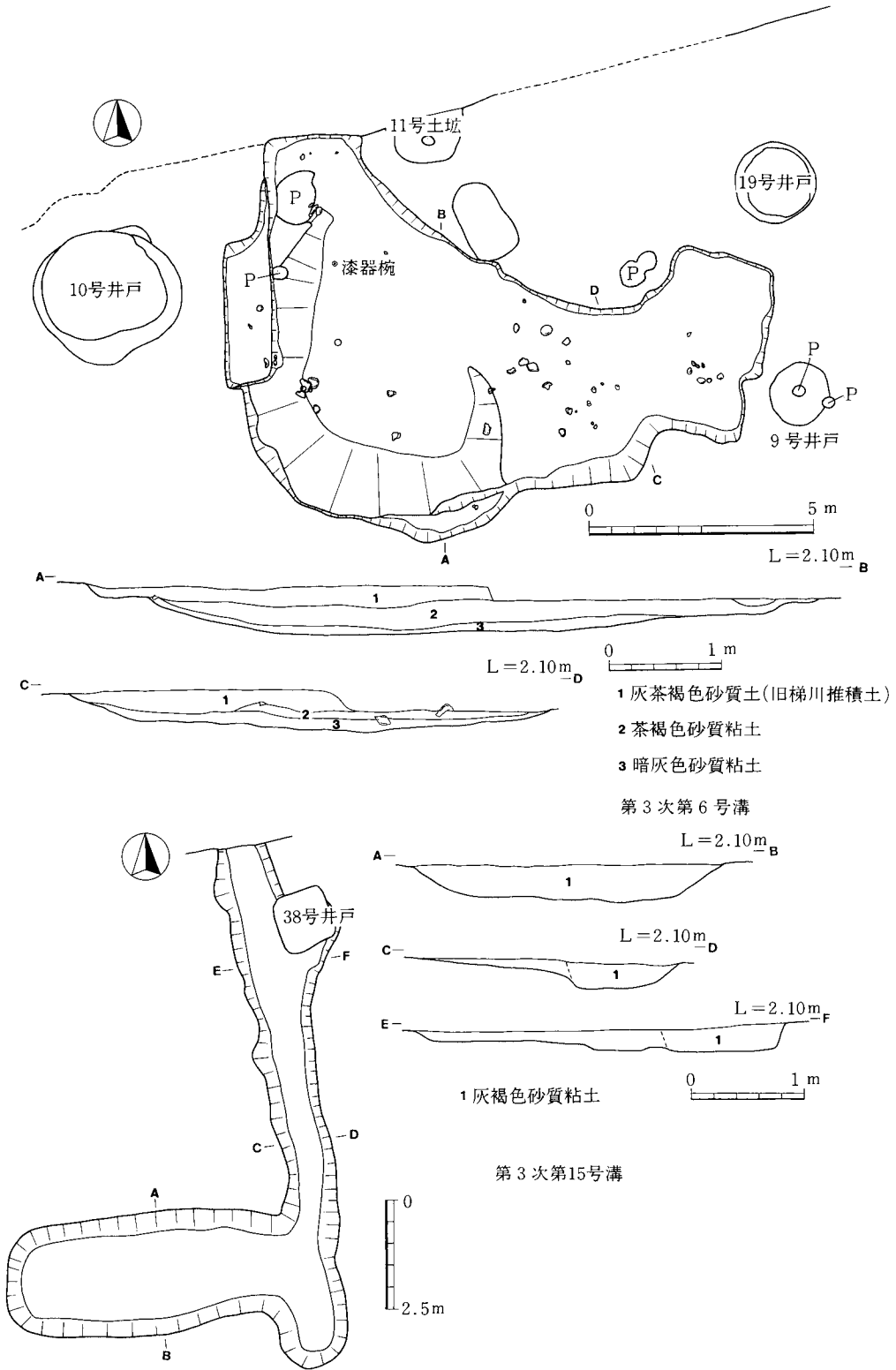
第2号溝（第98図、図版40） H・G-2区で1号溝とほぼ平行して南北に走る溝。幅約70cm、深さ約19cmの小さい溝で、確認した長さは約14mであった。南は第2次調査区へ伸びているが、第2次調査区には達していない。第141図14・15に示した遺物から15世紀後半の溝とみられる。

第5号溝（第98図） H・G-3区で南北方向に続く幅広の溝。32・34号井戸と重複する。北側端は梯川の旧河道のため明瞭でないが、確認した長さは約20mであった。幅2.2m前後、深さ約30cmの幅の広い溝で、肩はゆるく立ちあがる。溝底は平らで黒灰色の強い粘土が薄く堆積していた。第142図29~35に掲げた遺物が覆土中から出土している。14世紀後半の所産であろう。

第6号溝（第99図、図版40） I-4・5区で検出。確認時点では溝として判断していたが、発掘作業の進行の段階で、大きな凹地であったことが判明してきた。北側の一部は梯川の旧河道によって攪乱を受けている。西側で南北方向に約8m、南側で東西方向に約12.4mの胃袋の様な



第98图 白江梯川遺跡第3次溝実測図(1)



第99図 白江梯川遺跡溝実測図(2)

平面形をとる。西側が深く40cmの深さであるが、東へ行くに従って浅くなり、15cm程度の深さとなっている。覆土中からは大型の自然礫が点在して出土し、第142・143図36～42に示した多様な遺物が分散して出土した。また、北西部の底から漆器椀1点が発見されている。遺物の出土状態や遺構の形態からみると、元から凹んでいた地形の場所に遺物が継起的に捨てられたような可能性もある。

**第8号溝**（第98図、図版38） G-8・9区で検出した東西方向に伸びる溝。19・22・24号の各井戸と重複する。全長約20mの細い溝でその一部と両端は削平のためか失われている。G-8区北から曲って南へ伸び、更に曲って東へ続いている。最大幅でも60cm、深さも10cm足らずの浅い溝であるが、覆土の暗茶褐色の砂質粘土には多くの炭粒を含んでいた。第143図43～45に示した珠洲焼壺の体部断片がまとまった状態で出土しており、15世紀後半の溝とみられる。

**第15号溝**（第98図） I-8、J・I-9区で検出したL字形の平面形をとる溝。前述のように祠跡と推定した遺構の北側に約1.8m離れて位置しており、両者は関連をもって配された遺構であったとみている。溝は東西方向へ6.6m、南北方向へ11.9mを測る。北で36号井戸と重複し、梯川の旧河道によって切られている。東西で幅2.8m、深さ30cm、南北で幅1m、深さ20cmを測る。灰褐色粘土の覆土中から第144図46～53の各時代の須恵器と中世の遺物が混ざって出土している。遺構の年代を決める遺物に恵まれていないため、判定は難しいが祠跡推定遺構の造られた15世紀後半頃の溝とみておきたい。

註)

- 1) 山本 博 『井戸の研究』 1970
- 2) 宇野隆夫 「井戸考」 史林第65巻5号 1982



## 第6章 第3次調査の遺物

白江梯川遺跡は前章まで記述したように弥生時代後期から古墳時代前期と中世それも南北朝・室町時代を主要の時期とする集落遺跡である。調査に際しては下部の古い時代の遺構の調査を最小限におさえ現状で保存するよう考慮したため、結果として中世の遺物に重点を置いてその概要を記すことにしたい。記述に際しては特に井戸などの深い遺構からの出土遺物には当然古い時代の遺物が混入して含まれていたが、これをもまとめて扱ったことを断っておく。

### 第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

Ⅰ－7区下層土器群出土土器（第100～102図） 第3次調査では中世の遺構面である下層の弥生後期から古墳前期の遺構や遺物包含層は、極力発掘をしないで現状で残すように努めた。しかし、一部においては耕土直下で土器が出土したため、取り上げざるを得なかったものもあった。Ⅰ－7区では第103図に示すように、土器が並んで出土した。弥生後期後半を中心とした土器群を主体としている。おそらく幅60cm程度に溝に入れられたと思われる。以下簡単に器類の分類を進めながら紹介するが、分類は『漆町遺跡Ⅰ』と『吉竹遺跡』の報告書を参考にした。

壺A（第100図1・2・4～6） 短い有段口縁をもつ長頸壺。全形を知るものはないが、口径18cm前後、器高35～38cm程度となる。器表は摩耗した個体が多く調整を観察できない。5には口縁帯に4条の擬凹線をもつ。吉竹遺跡の壺A類と同じ。

壺B（第100図3） 細頸壺。体部のみで頸部より上は欠失する。摩耗が激しいが体部の一部に赤彩痕をとどめる。吉竹遺跡の壺C類と同じ。

甕B（第101図8～10、15・16、第102図17） 有段口縁の甕で、口縁部外面に擬凹線（4～8条）を施す。口縁部の形態差と口縁部内面の指頸圧痕の有無によって更に細分が可能である。8・15と9・16・17、それに10に分けられる。体部は摩耗の激しい個体が殆どで、調整は細かくわからない。北陸西南部における弥生後期の一般的な甕で、吉竹遺跡の甕A類と同じ。

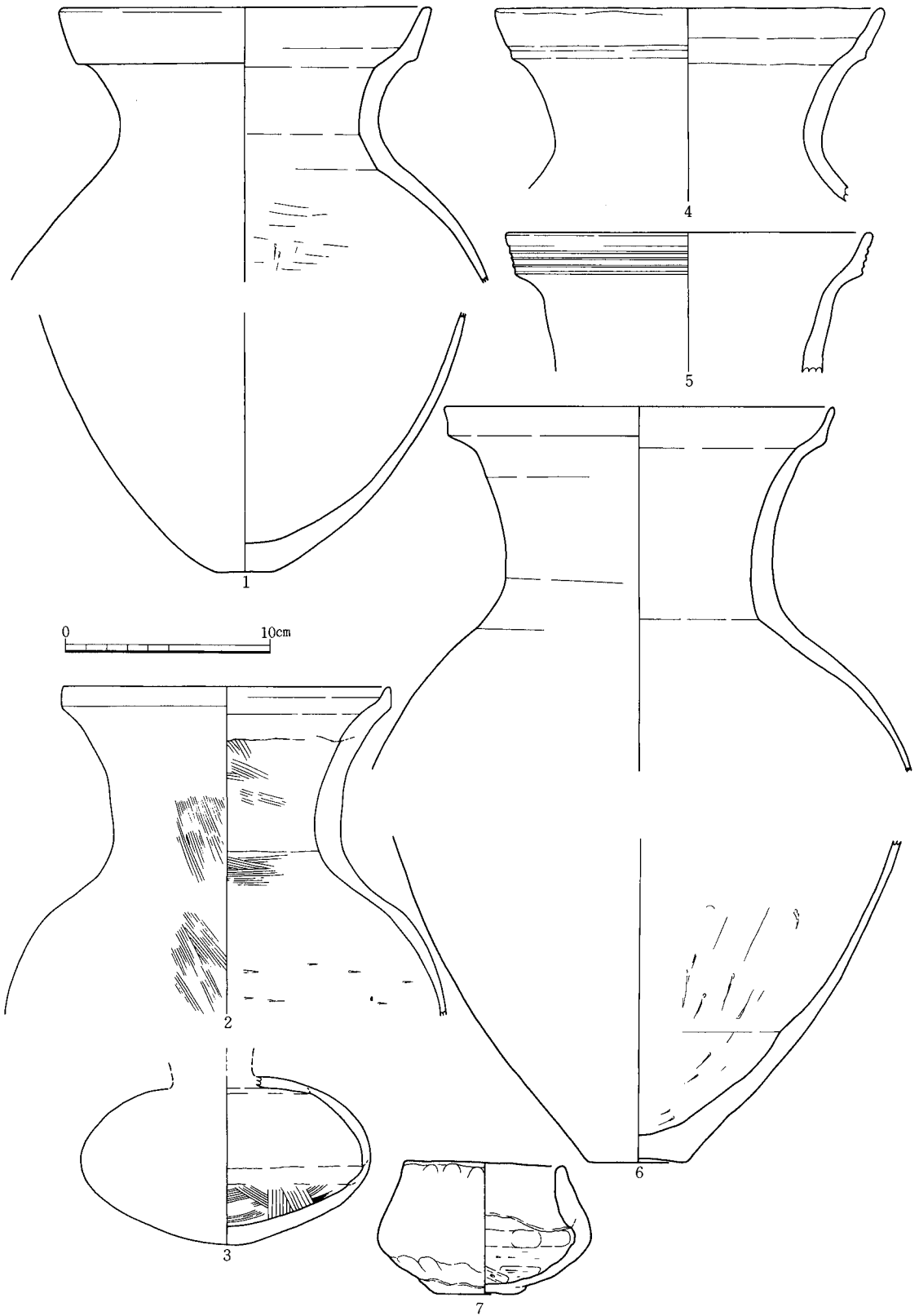
甕C（第101図11～13） 有段口縁の内外面をヨコナデする甕。頸部以下の調整は外面をハケ、内面をヘラで削る。B類と同様該期の甕の主流をなす。吉竹遺跡の甕B類と同じ。

甕D（第101図14） いわゆる布留系の甕。土器群の中では異質で包含層の土器が混入したものか。内湾ぎみのくの字口縁の端部は把厚する。包含層出土土器の中に類例は多い。

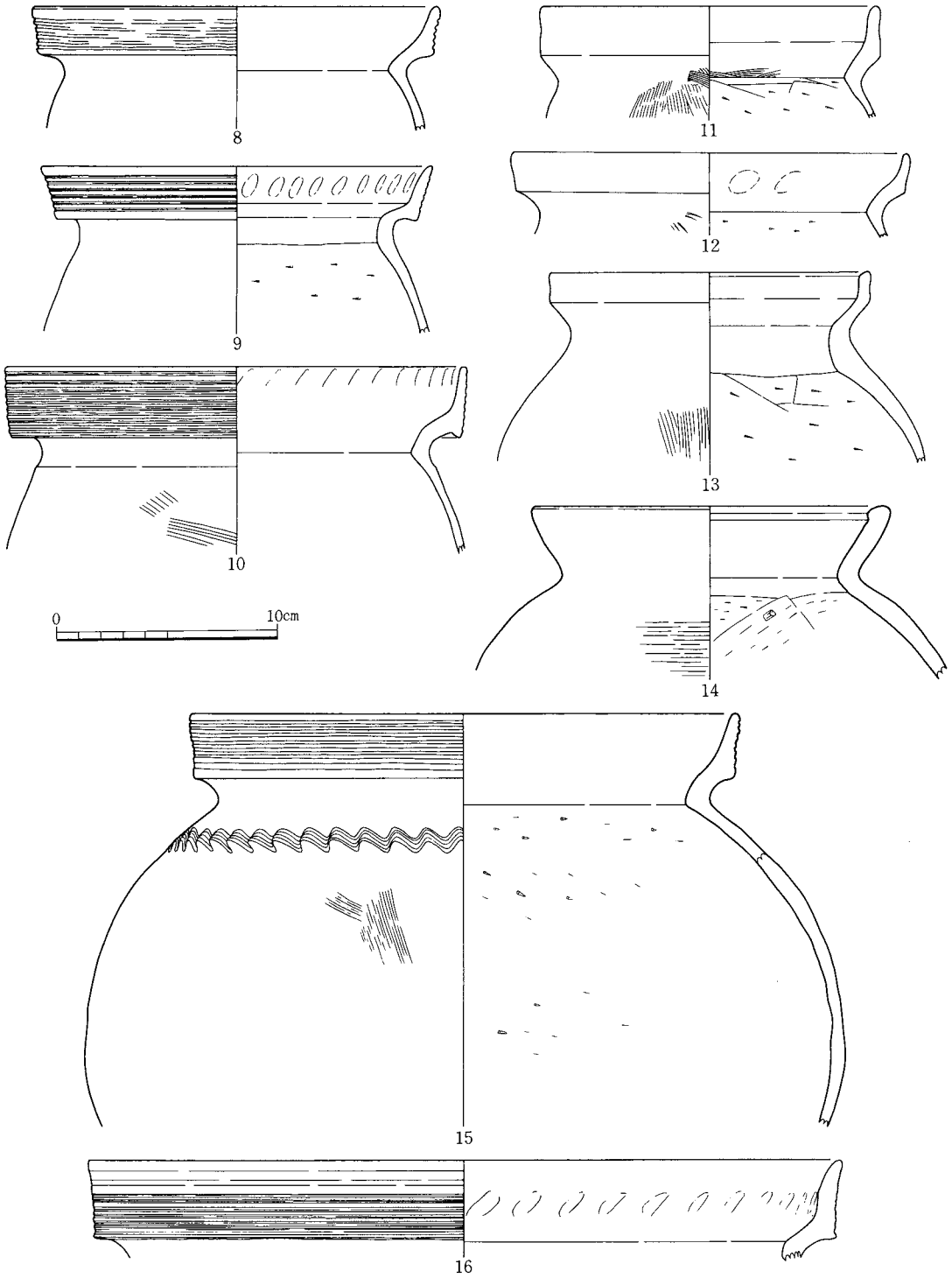
高坏A（第102図21） 口縁端部に幅広の面をもつ。口径32.6cmの大型品である。外面はヘラで研磨するが、内面は不明。吉竹遺跡の高坏A類と同じ。

高坏B（第102図20） 杯部が有段鉢形を呈する。

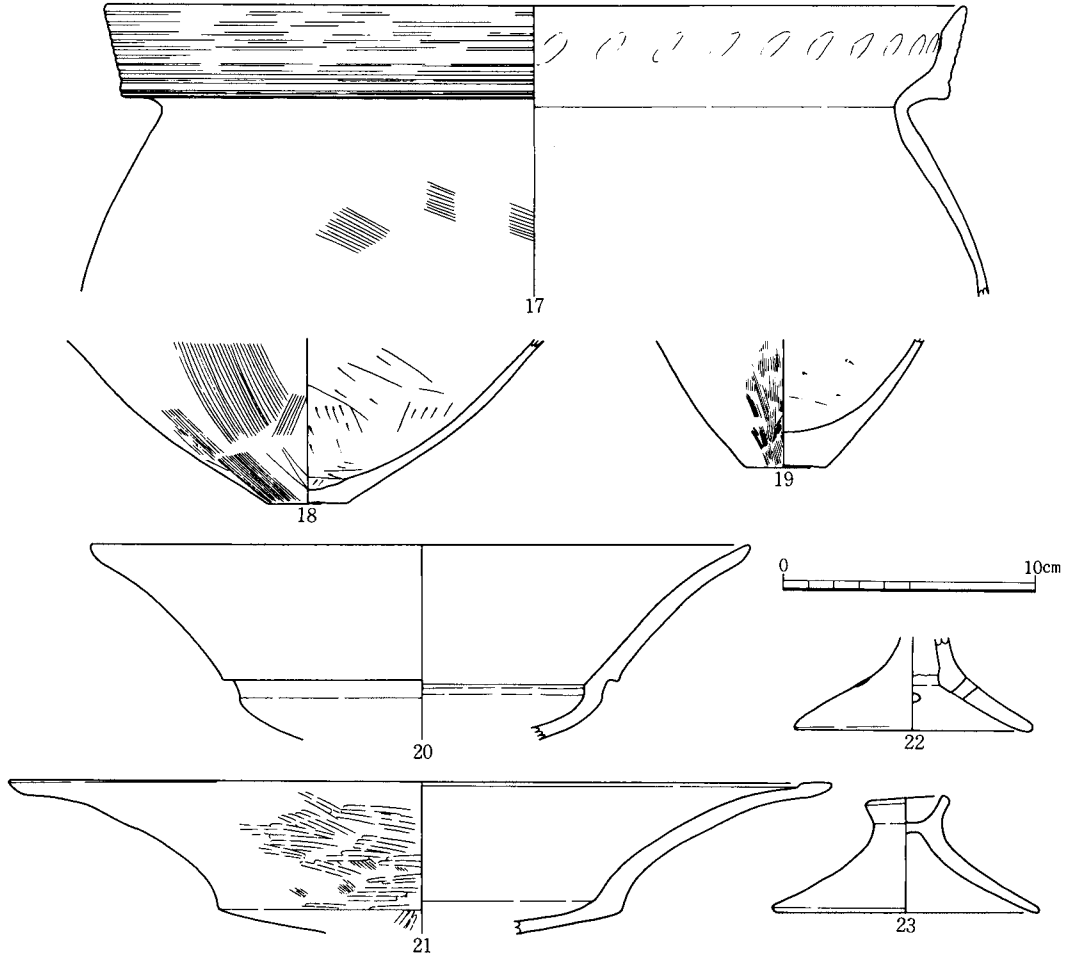
以上の他、小形土器（第100図7）・器台の脚部（第102図22）、蓋（第102図23）が出土している。出土状態から土器群として包括的に扱ってきたが、明らかに新しい14の甕や22の器台を除くと、弥生時代後期後半（法仏式～月影Ⅰ式に併行）の資料とみられる。



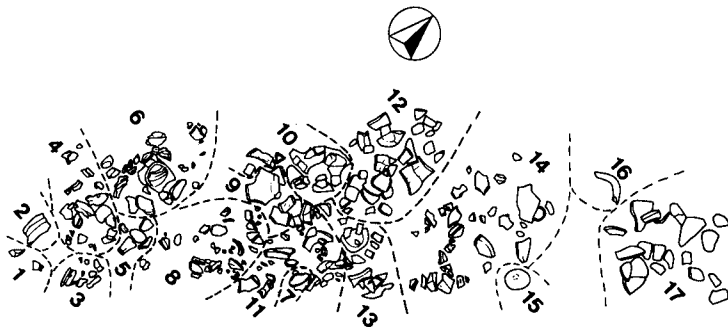
第100図 白江梯川遺跡第3次I-6・7区下層土器群出土土器 (1)



第101図 白江梯川遺跡第3次I-6・7区下層土器群出土土器 (2)



第102図 白江梯川遺跡第3次I-6・7区下層土器群出土土器 (3)



第103図 白江梯川遺跡第3次I-6・7土器群  
(番号は取りあげブロックの番号)

下層包含層出土土器（第104図～第110図） 前述のように下層の調査は極力控えたが、一部下層の状態を見るためにトレンチで下げた部分がある。G-6～I-6区とF・G-7～F・G-10区で幅2mのトレンチを設定し、土壇や溝など古墳時代前期を中心とした遺構の確認を目的とした訳で、その調査の際に、多量の土器が出土した。特にG・H-6区とF・G-7・8区では遺物量が多かった。ここでは先と同様に簡単な分類を進めておく。なお類別にあたっては、図版番号順を優先させたため、見づらいものとなっている。了解願いたい。

壺C（第104図26） くの子口縁の壺。口縁端部に面をもち、内該面をハケ調整する。口径15.2cmを測るが頸部以下を失っている。胴部は球胴となろう。胎土中に小粒の砂粒を多く含む。漆町遺跡の壺I類に同じ。

壺D（第104図27・34） 頸の短い有段口縁の壺。27は口径14.9cmを測る。外面の調整は不明であるが、内面はヘラで研磨する。34はむしろ次のE類に類似するが、口縁帯下部が稜をなさないことをもって、本類に含めた。口径17.8cmで胎土中に多くの砂粒を含む。

壺E（第104図28～30・33） ゆるく外反して開く頸部に、更に開いた口縁部のある壺。30以外は頸部以下を失っているため、調整はわかりにくい。28では口縁の有段部でも接合している。口径23.4cmを測る30は最大径がほぼ胴の中位にくる球胴となろう。28・29と異なって胎土中に含まれる砂粒は少なく、摩耗もみられない。頸部以下には内外面ともに斜方向のハケ調整を行う。以上の3点は漆町遺跡の壺D類と同じ。33は口縁部に3本4単位の粘土鈕を貼って加飾しており、やや趣きを異にしている。更に細分して扱う必要があるかも知れない。

壺F（第104図31・32） 外反して開く口縁部先端に断面三角形の口縁帯をもつ壺。31の口縁帯には12～13条1単位のハケによる波状文と、2本4単位の粘土鈕を貼ってこの浮文を棒で2・3点押さえた加飾がある。口径18.3cmで胎土中に多くの砂粒を含む。32も口縁帯に同種の加飾をもつ。摩耗が著しいため調整は不明である。漆町遺跡の壺F類に同じ。

壺G（第105図35、第105図37～45、第106図49・50） 有段口縁の下端が突出する、いわゆる山陰系の壺。口縁部が外反するタイプ（38～41・43）と直立ないしはやや内湾するタイプ（37・39・44・49・50）がある。また大きさも大・中・小の三形態に分けられる。胴部下半を欠くものが多く、摩耗したものが多いため、体部の調整は不明。中型壺は口径18cm前後で最も個体数が多い。大型壺の49・50は口径が約22cmとなって器壁も厚い。本類は漆町遺跡の壺E類に同じ。44は山陰系の影響下に在地で生まれたものであろうか。厚ぼったい有段口縁をもつ。内・外面ともにヘラで削る点も他と異なっている。

壺H（第104図36、第105図46） 球形の体部から外反して伸びる長い口縁部をもった壺。口系は11～12cm、器高は12～13cm程度と推定される。胎土は褐色味帯びており、胎土中にも大粒の砂は少ない。しかし、いずれも摩耗が激しく、体部内面に押圧調整痕をみるのみである。漆町遺跡の壺M類に同じ。

甕A（第104図24・25） くの子に外反する口縁の甕。口縁端部を面取りする。24ではここに櫛の斜行押圧文がある。胎土中には砂粒を含むが焼成は良い。弥生時代の後期でも前半における古式の甕である。

甕B（第106図51） I-7区下層土器群にみた甕Bと同じ有段口縁の甕。口径18.9cmを測り、口縁部外面に4条の擬凹線をもつ。外面肩部に棒による斜行押圧文がある。内面の頸部以下はヘラで削る。胎土中に大粒の素粒を多く含んでいる。

甕C（第106図47・48・52） I-7区下層土器群にみた甕Cと同じ有段口縁の甕。52は口径14.8cm器高14.9cm、底径2.8cmの小型甕で、体部外面はハケ調整を施す。胎土中に大粒の砂を多く含み、摩耗が激しい。甕B類とともに弥生時代後期後半の甕の主流をなす。

甕D（第106・107図53～58・62～64） 有段口縁をもつ山陰系の甕。口縁部の形態から62とそれ以外に分けられる。有段口縁の下端部に稜をもつことがその特徴である。62ではこの稜が突出していない。口径9.2cm（53）の小形品、口径12～15cmの中形品（55・56）、口径20cmを超える大形品（56・57・62～64）の3タイプに大きさからは分けられそうである。ただ、口縁部のみの断片しかないものが多く、壺G類との区分は形態的な区別からは難しい。胎土中に多くの砂粒を含み、橙褐色や茶褐色の色調をなすものが多い。漆町遺跡の甕B類と同じ。

甕E（第107図59・60・69・70） 受口状の有段口縁で、底部に脚をもつ東海・近江系ないしその影響を受けたとみられる甕。59は口径10.8cm、推定器高13cmの小ぶりの甕。淡褐色を呈し、胎土中には細かい砂粒を多く含む。器表は著しく摩耗しており調整等は不明である。漆町遺跡の甕D類と同じ。

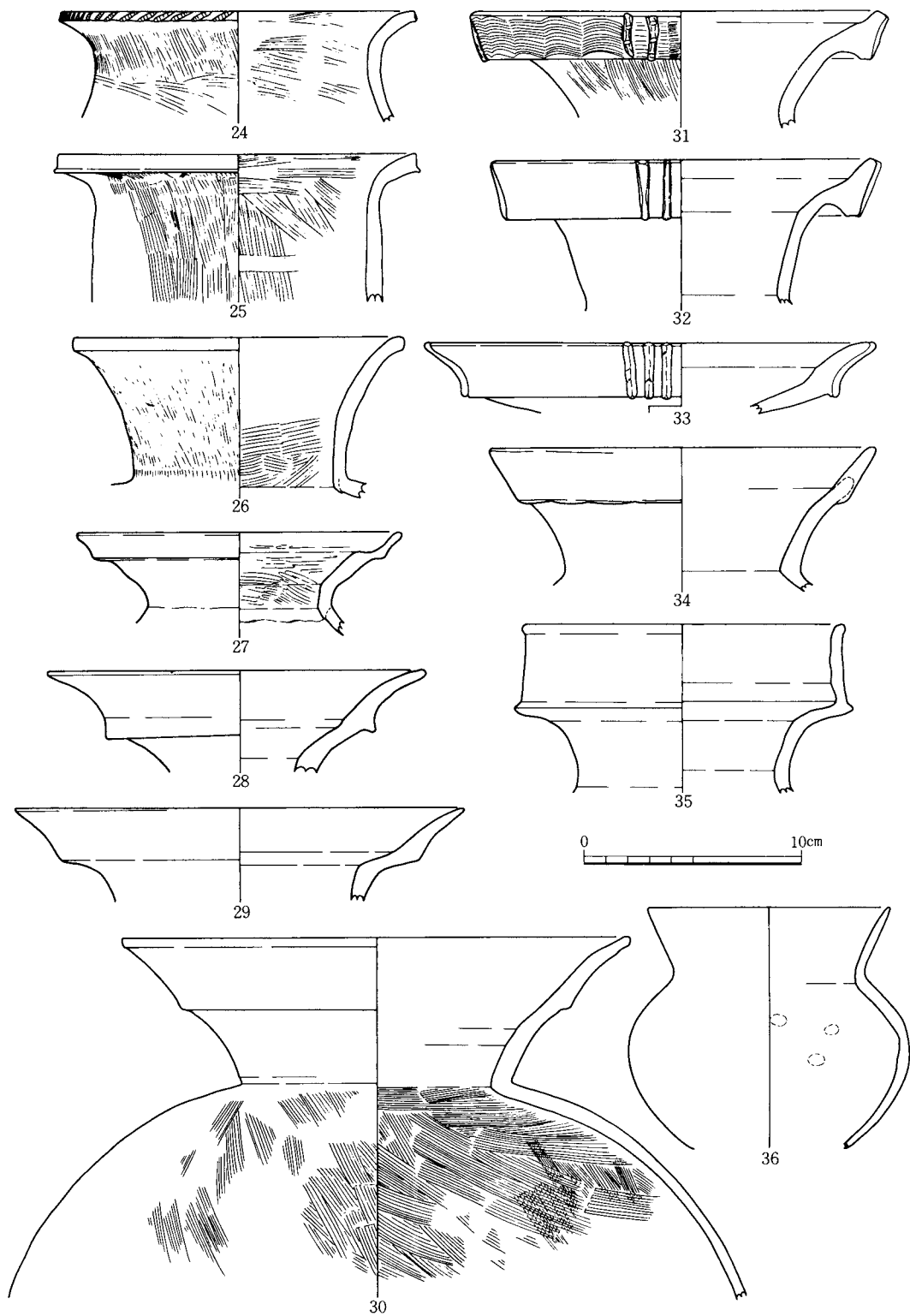
甕F（第107・108図61・72・77） く字口縁の甕で球胴に近い体部をもつ甕。口縁端部は丸味をもち、体部の器壁も厚味をもっている（61・72）。61は口径12cm、器高14.8cmの小形品で、体部内面はヘラで削る。72は口径20.4cm、器高30.4cmの中形品で体部外面をハケ、内面を削りとナデで調整する。胎土中には大粒の砂粒を含んでいる。漆町遺跡の甕G類と同じ。

甕G（第108・109図73・74～76・78～89・91） いわゆる畿内系のく字口縁の甕で、口唇部が把厚していないもの（73・74・85・88）と、口唇部が把厚したもの（78～84・87・89・91）をまとめて扱った。漆町遺跡の甕H類およびI類に該当する。特に後者は布留系の甕で、口唇部の把厚の度合や体部の形態から更に細分が可能である。白江梯川遺跡の下層包含層において最も良く目につくのがこの甕であり、第2次調査では良好な資料を得ている。口径10～12cmの小形品（78・83）と16～18cmの中形品に分けられ、中形品が多い。胎土中に砂粒を含み、淡い褐色ないしは明るい灰褐色の色調のものが多い。体部は外面をハケ、内面をヘラで削って調整するが、摩耗が著しく不明なものが多い。

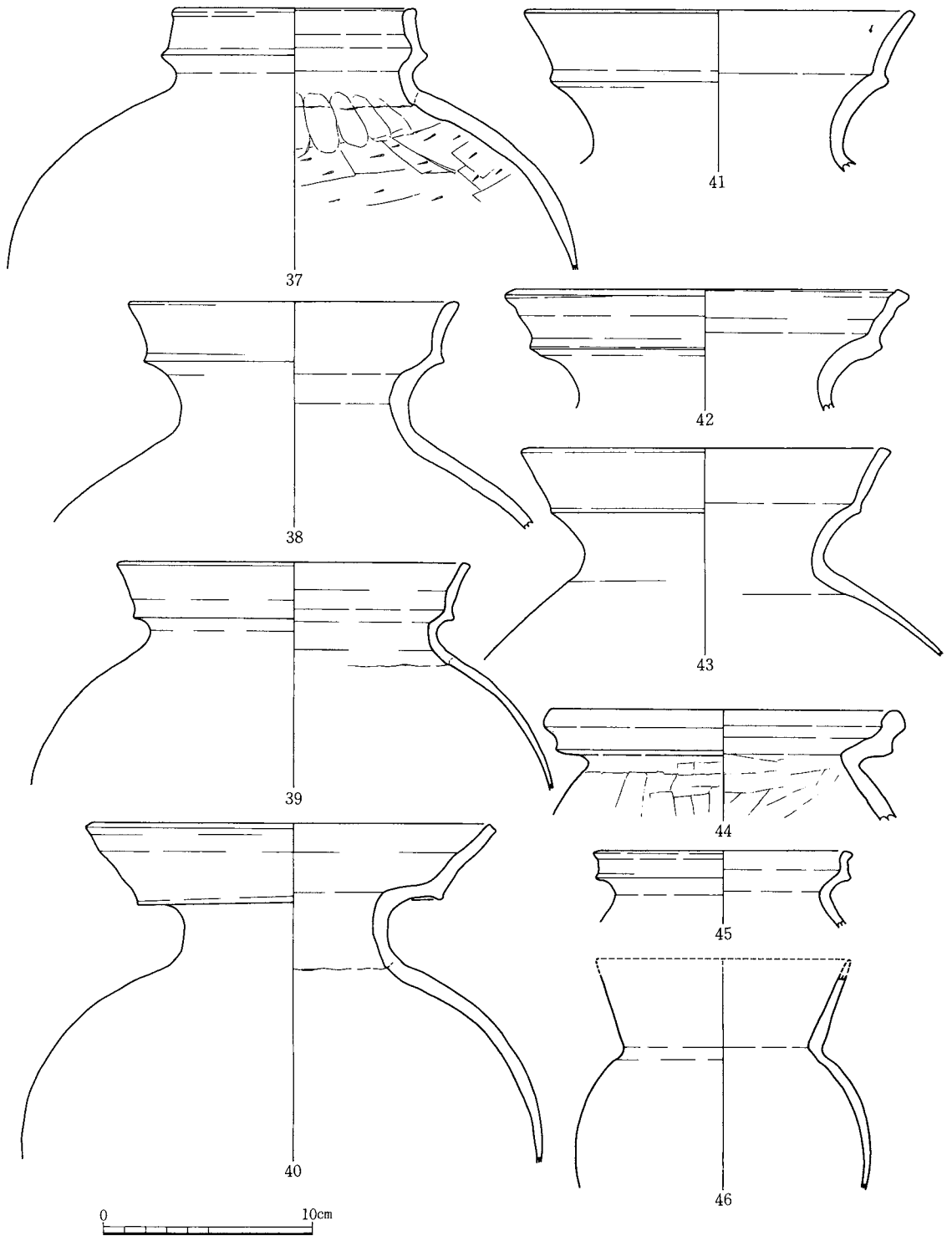
高杯C（第110図102・103） 脚裾部で強く折れて開く脚部をもつ高杯。畿内系の高杯とみられ、漆町遺跡の高杯H類と同じ。102は明るい灰色、103は淡い橙色をしている。

器台A（第109・110図93～95） 受部と脚部が有段となる器台。93は口縁帯に二段21条、94は14条以上の擬凹線をもつ。93は受部としたが、脚部となる可能性もある。灰色味のある胎土中には大粒の礫を含んでいる。95は脚部断片で4個の円形透しがある。弥生後期後半の器台で、吉竹遺跡の器台AないしはB類と同じ。

器台B（第110図96～100） 受部を欠いたものがあり、全形を知り得ないものもあるが、96・97にみるいわゆる小形器台の部類に含まれるものである。形態差から更に細分は可能であろうが、

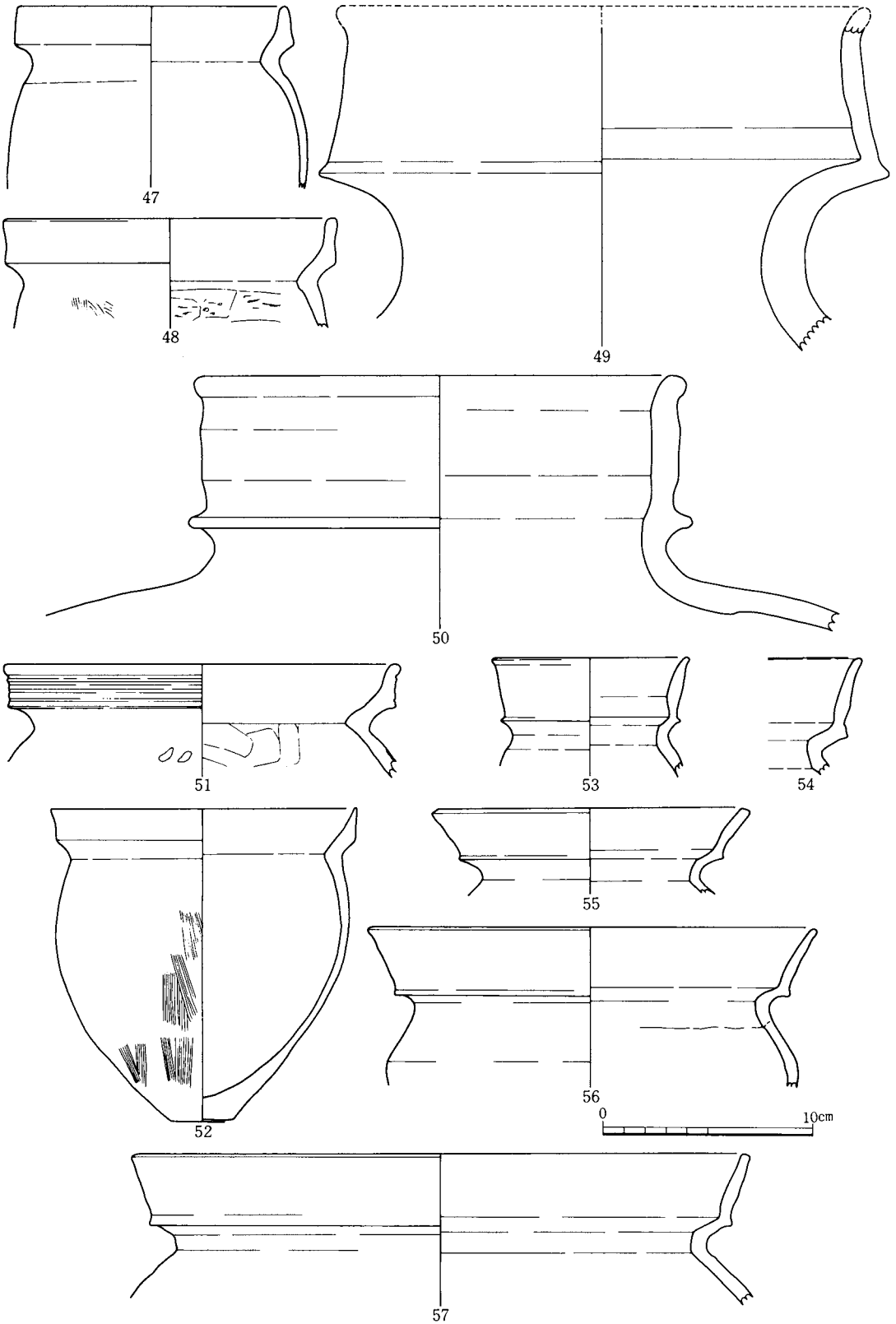


第104図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (1)

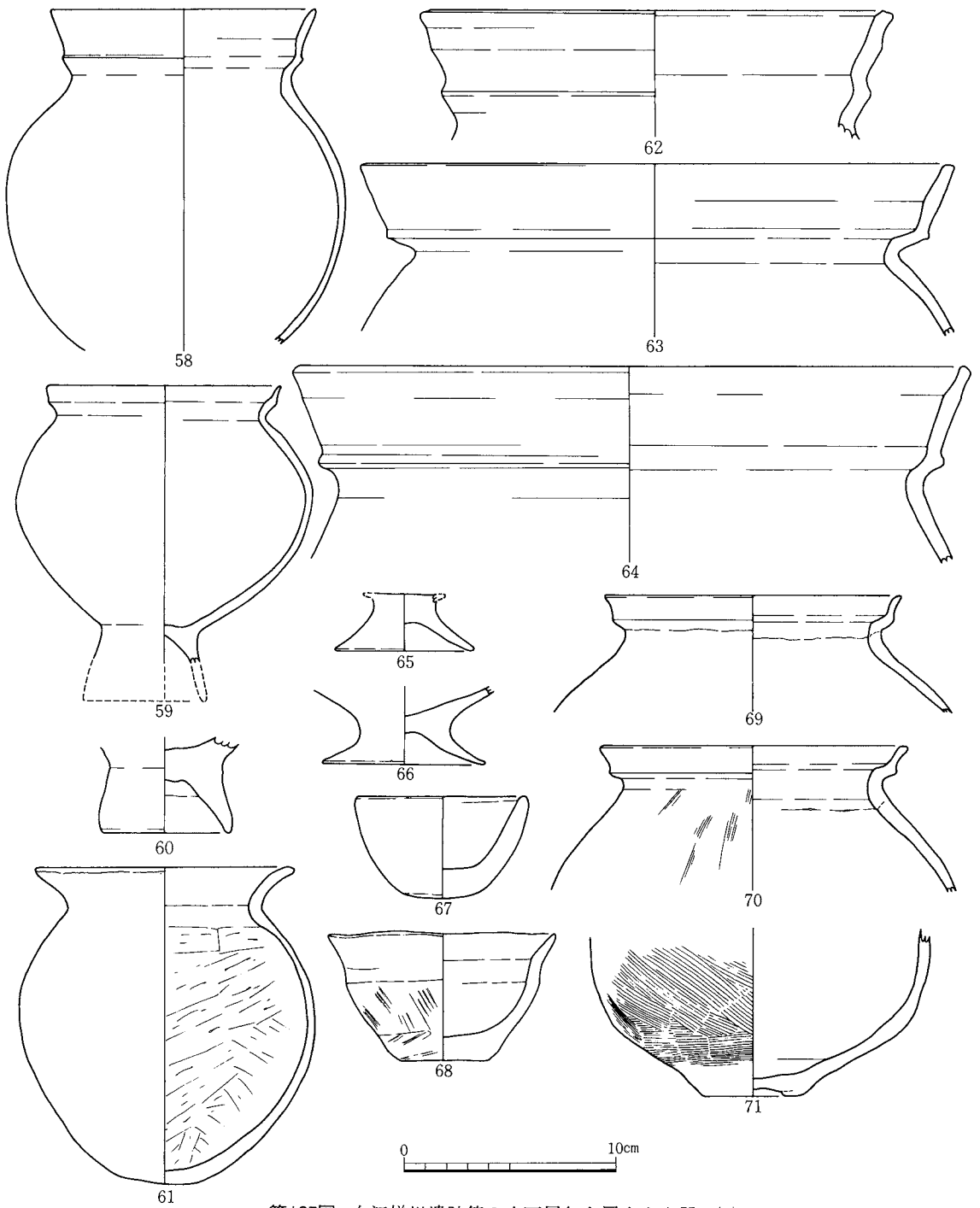


第105図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (2)

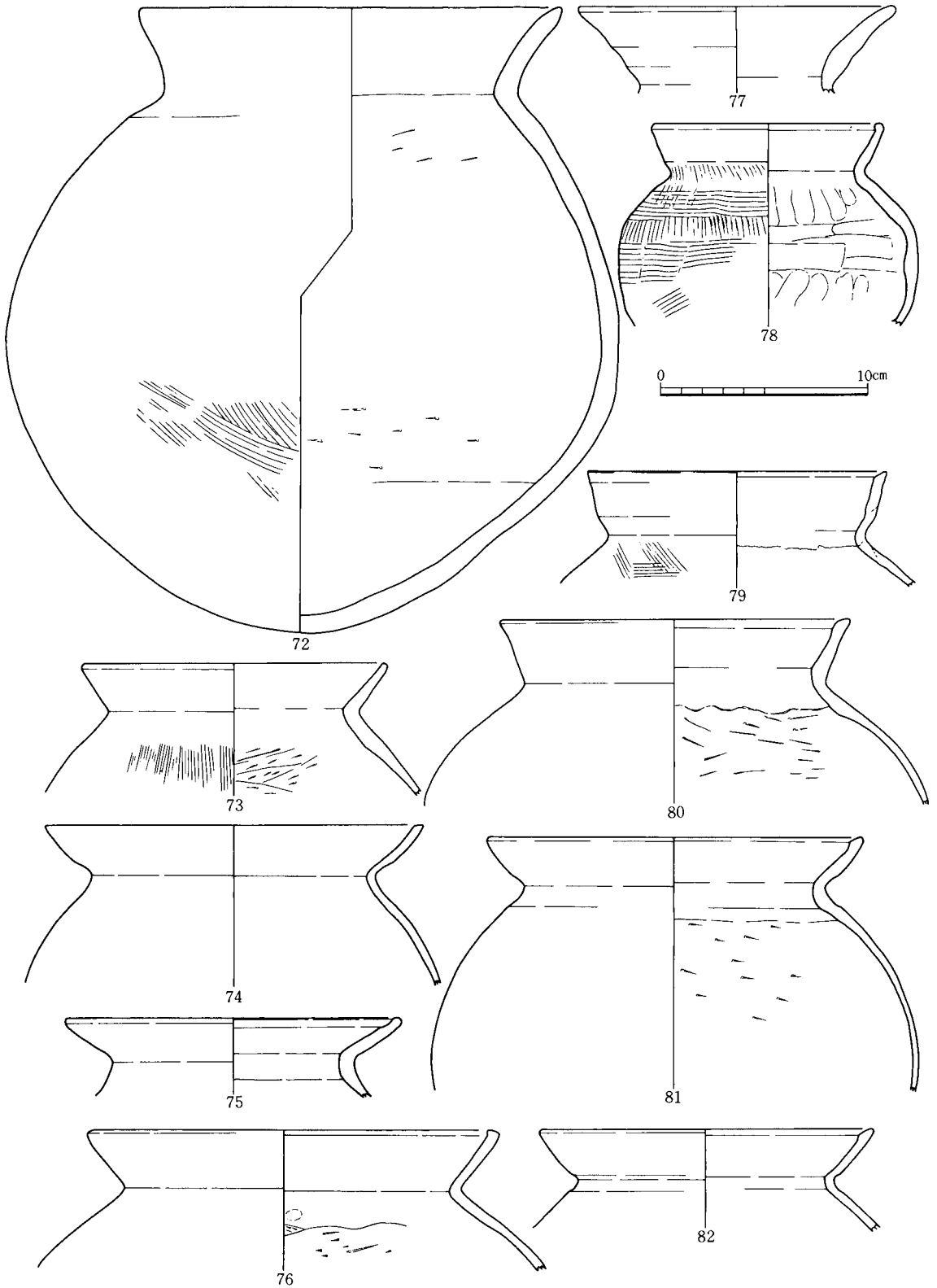




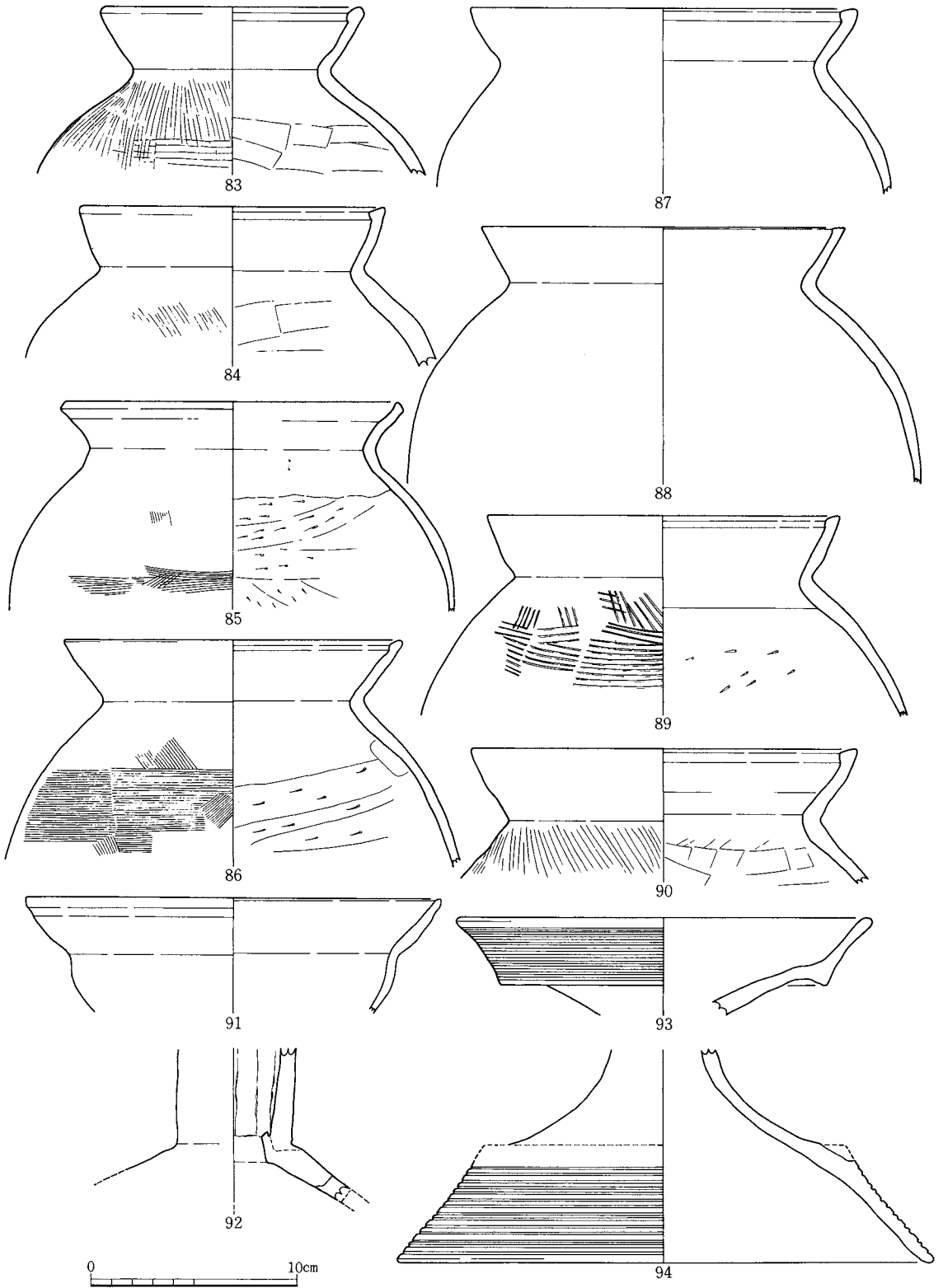
第106図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (3)



第107図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (4)



第108図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (5)



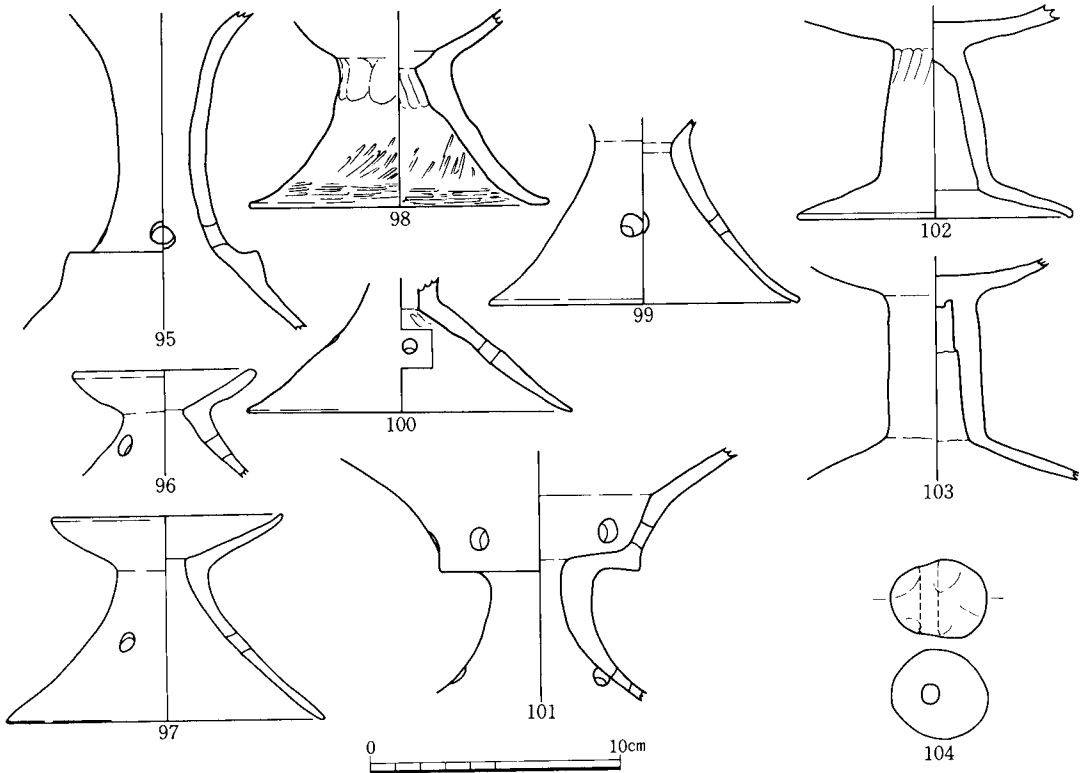
第109図 白江梯川遺跡第3次下層包含層出土土器 (6)

点数も少ないためまとめて扱った。脚部にみられる円形の透しは96・97が3孔、100が4孔である。また、98の脚部はヘラ磨きをしている。灰色系の98を除く他の胎土には細かい砂を含み、淡褐色から橙褐色を呈する。摩耗した断片のため赤彩等の痕跡は不明である。漆町遺跡の器台Iに同じ。

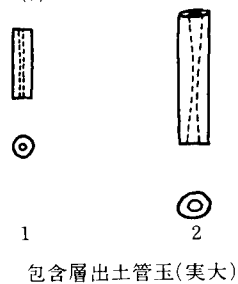
器台C（第110図101） 受部底から屈曲し、外反して大きく伸びる口縁をもつ器台。受部には7個、脚部には5個の円形透しがある。摩耗のため調整不明。漆町遺跡の器台Bに同じ。

以上の他、鉢（91）、蓋（65）、小形土器（68）などが図化し得ている。

管玉 中世の井戸覆土と包含層から各1点ずつの管玉が出土した。弥生時代後期から古墳時代前期の所産であり、第110図下に掲げた。1は径2.2mm、長さ9.4mmで0.8mmの穿孔がある。濃い緑色の緑色凝灰岩を用いた細身の管玉である。2は径4mm、長さ17mmの管玉で一部に研磨調整段階の面を残している。径1.8mmの両方からの穿孔である。軟質の淡い緑色をする緑色凝灰岩を母材とする。



第110図 白江梯川遺跡第3次下層含層出土土器 (7)

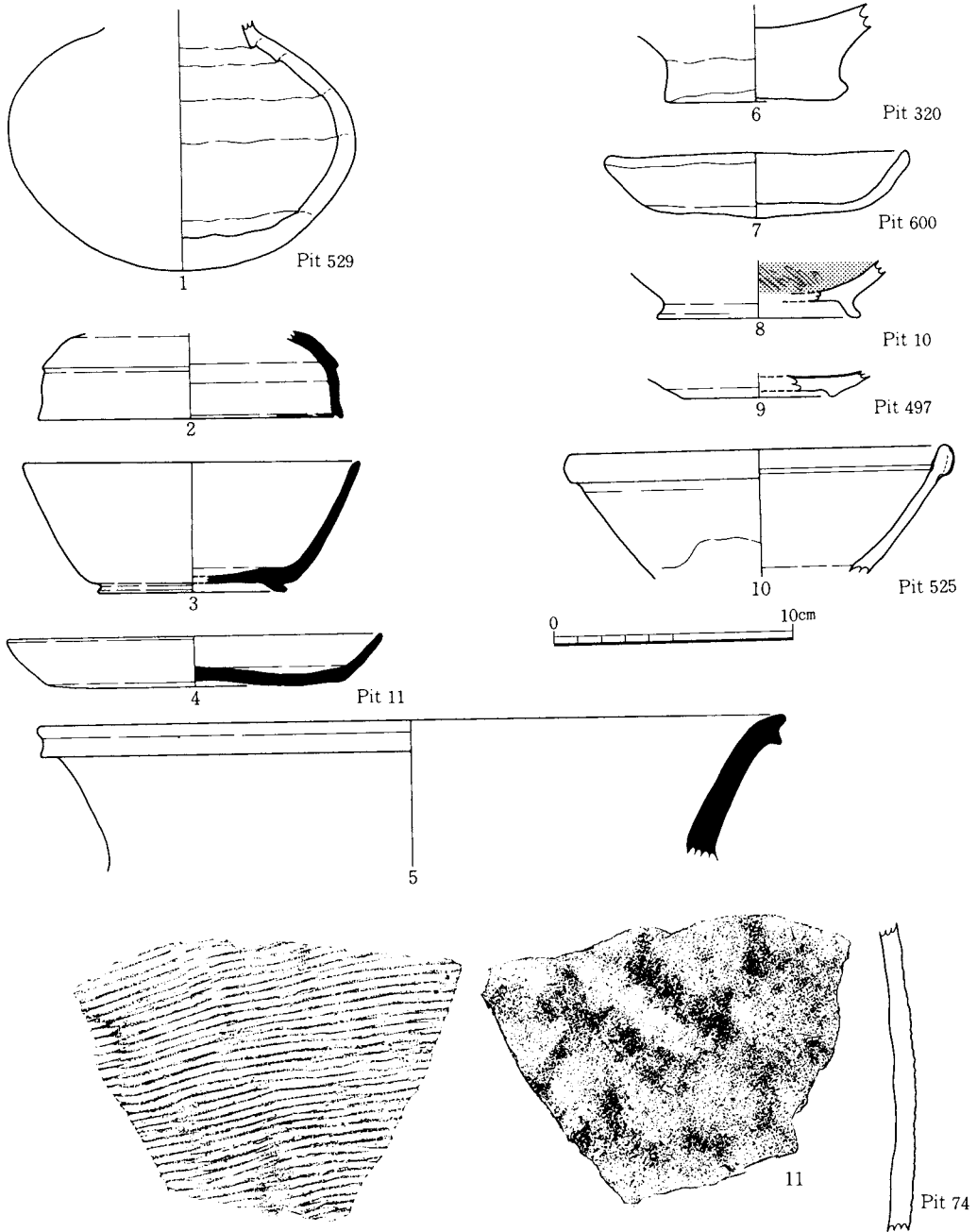


包含層出土管玉(実大)

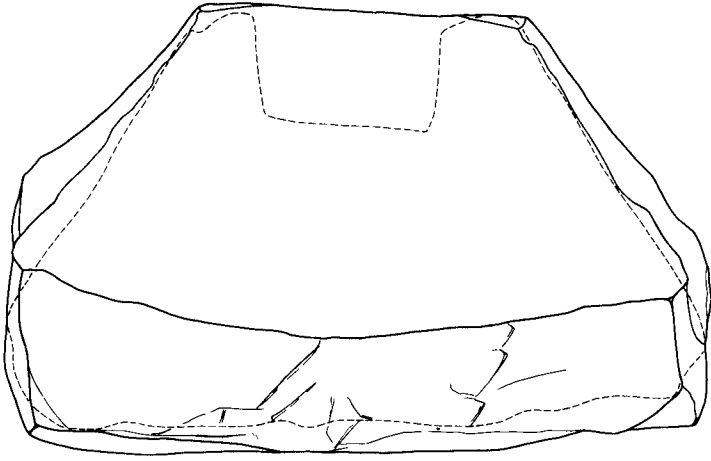
## 第2節 中世の遺物

**P i t 出土の遺物**（第111・112図1～12）P i t から出土した遺物をまとめて扱うこととした。中には土師器や須恵器など平安時代以前の遺物を含んでいるが、中世の遺物では図示し得るものが少なかったため、まとめた次第である。P i t の位置については遺構全体図を参照してもらいたい。1は古墳時代前期の壺の体部。先の分類の壺Hに含まれる。2～5はG-2区の西側で並んで検出されたP i t の1個（P11）から出土した須恵器であるが、古墳時代後期から平安時代中期までの遺物を含んでいる。3～5は戸津窯跡をはじめとする南加賀窯跡群の産になることは、砂粒を多く含む胎土から識別できる。8の黒色土師器は先のP i t 列の最も北のP10から出土した。平安中期のものである。7の土師質中皿はI・J-10区で検出した第2号建物の東南隅に位置するP600から伏せて置かれたような状態で出土した。完形で建物の柱穴内に埋納されたものと思われる。9もI-10区のP i t 群から出土しており、建物群の中に11～12世紀代に建てられたものを含むことは確実である。11はG-3区のP74から出土した珠州焼甕の体部である。12は五輪塔の火輪でH-9区の43号井戸の北に接してあったP i t の中に頂部を下にして据え置かれていた。次の13と同様、建物の基礎に転用されたものとみられる。五輪塔の形態的变化の研究成果からみれば、14世紀前半代までさかのぼり得る古式の様相を備えたものといえよう。13は五輪塔の出土した（P594）の北にある（P592）から出土した凝灰岩切石の断片である。3cm幅の工具痕がみられ、もとは直方体の板石であったと思われる。

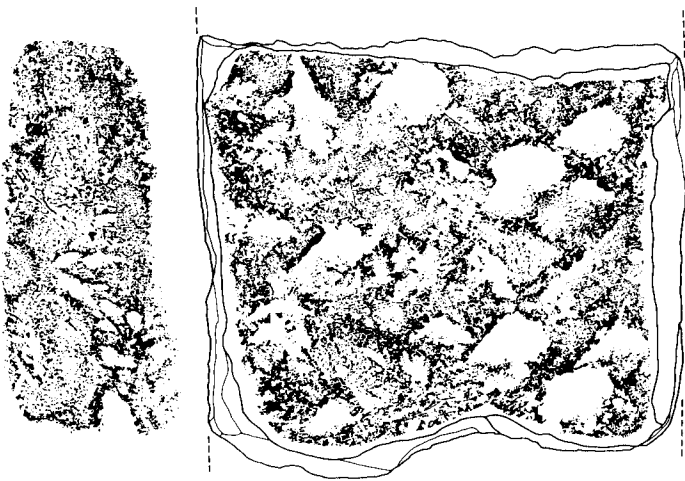
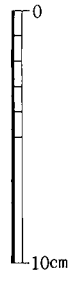
**祠跡推定遺構周溝出土の遺物**（第113～117図1～52）祠跡と推定した遺構の周溝部からは多様な遺物が出土した。3点の懸仏の出土は、遺構の性格を考えるうえで重要である。第113図1は東側周溝の溝底近くで出土した。尊像は銅鑄製の菩薩座像で像高4.75cm、幅2.95cm、重さ16gを測る。渡金の痕跡をわずかに留めている。天冠台にたて線を入れて分ち、髻をたてに束ねるように表すのは十一面観音を簡略にしたものと思われる。右手は与願印。衣の襷を表す線刻がみえる。左手は曲げて供物を執る形につくる。胸部背後から柄を鑄出し、柄には楔穴がある。2は西側周溝の東の立ち上がり部分、浅い所から出土した。尊像は銅鑄製の如来座像とみられ、像高4.35cm、幅2.95cm、重さ17.3gを測る。背面には銅薄板の一部が付着している。定印を結び、衣の襷を表す線刻が部分的にみえる。胸部背後から柄を鑄出し、柄には楔穴がある。3は2の北、約40cm離れて礫に混じって出土した。尊像、鏡板ともにほぼ完存する。尊像と銅鑄製の如来座像と思われるが、像の鑄上がりも良くないためはっきりとはしない。尊像は像高4.2cm、幅2.7cmを測る。青銅色の皮膜の下には赤銅の地金が一部でみてとれる。鏡板は径9.9cm、厚さ4mmの征目板を木心にして銅薄板を重ねている。円板の縁に幅広の覆輪があったようでその一部が残存する。肩には鋤起で作った獅嚙座を鋤止めするが、その本来の形は退化している。尊像の上には天蓋を止めたと思われる鋤の跡がある。また、尊像の左右には鋤起の花瓶が1対鋤で止められている。完存する左側の花瓶は約2cmを測る。尊像の腹部から柄を鑄出し、鑄板に楔で止めている。3体の懸仏いずれも退化した形態の懸仏といえ、南北朝～室町時代（14世紀後半頃）の作といえよう。



第111図 白江梯川第3次Pit出土土器



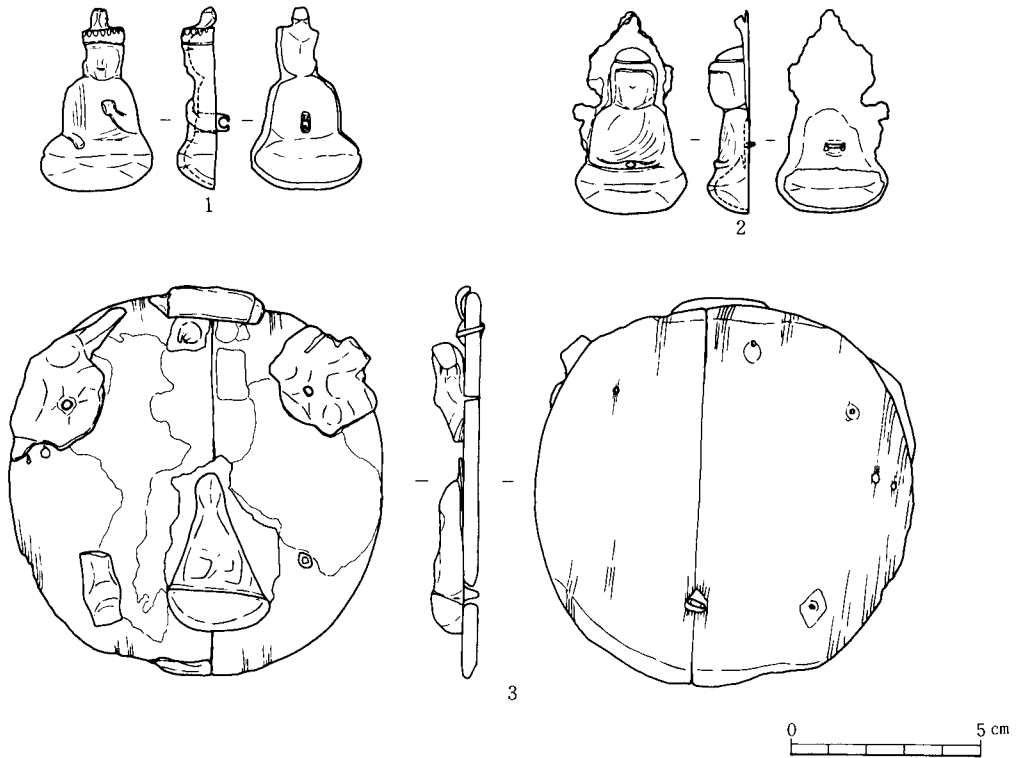
12  
Pit 597



13  
Pit 592

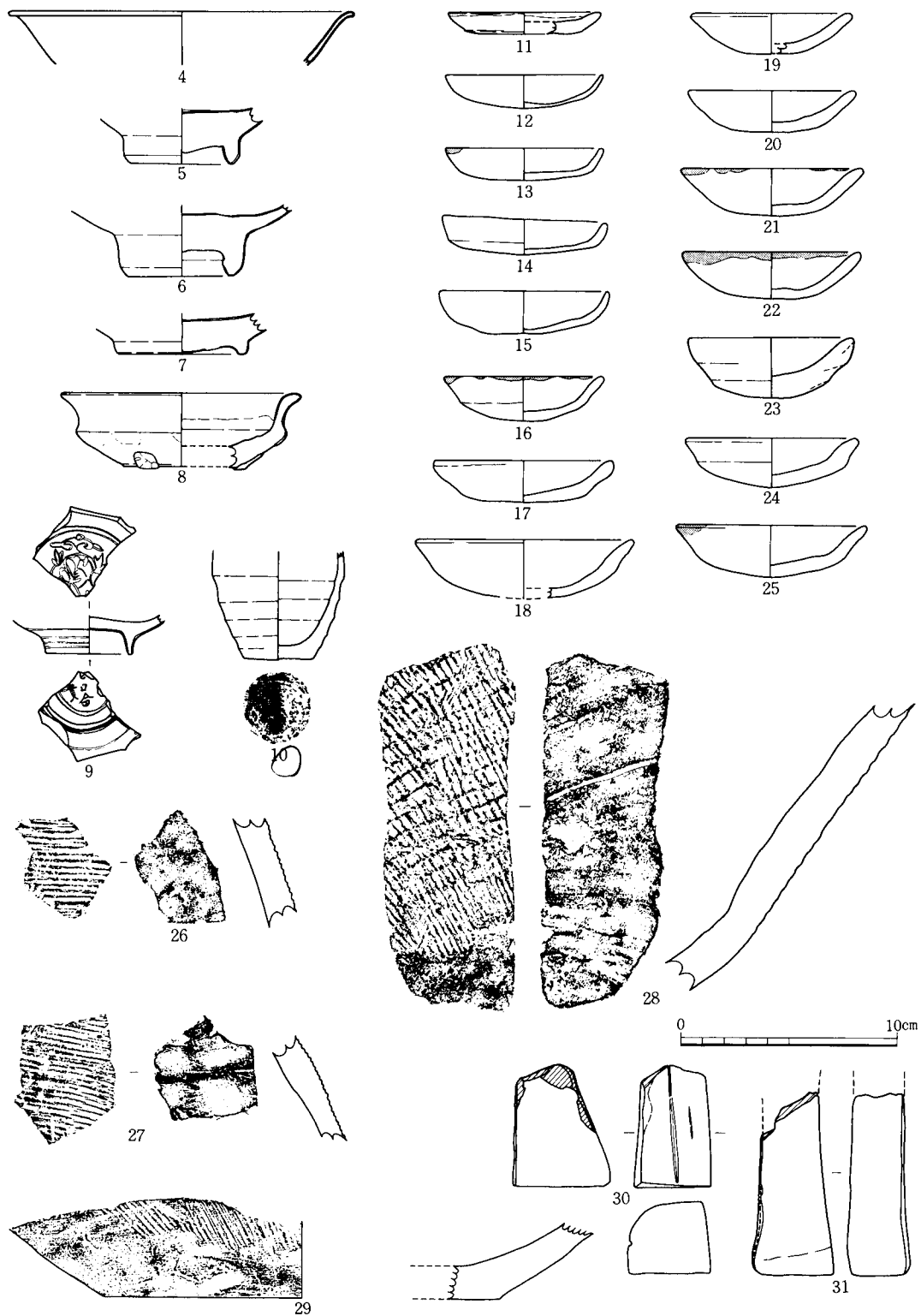
第112図 白江梯川第3次 Pit 出土石造遺物



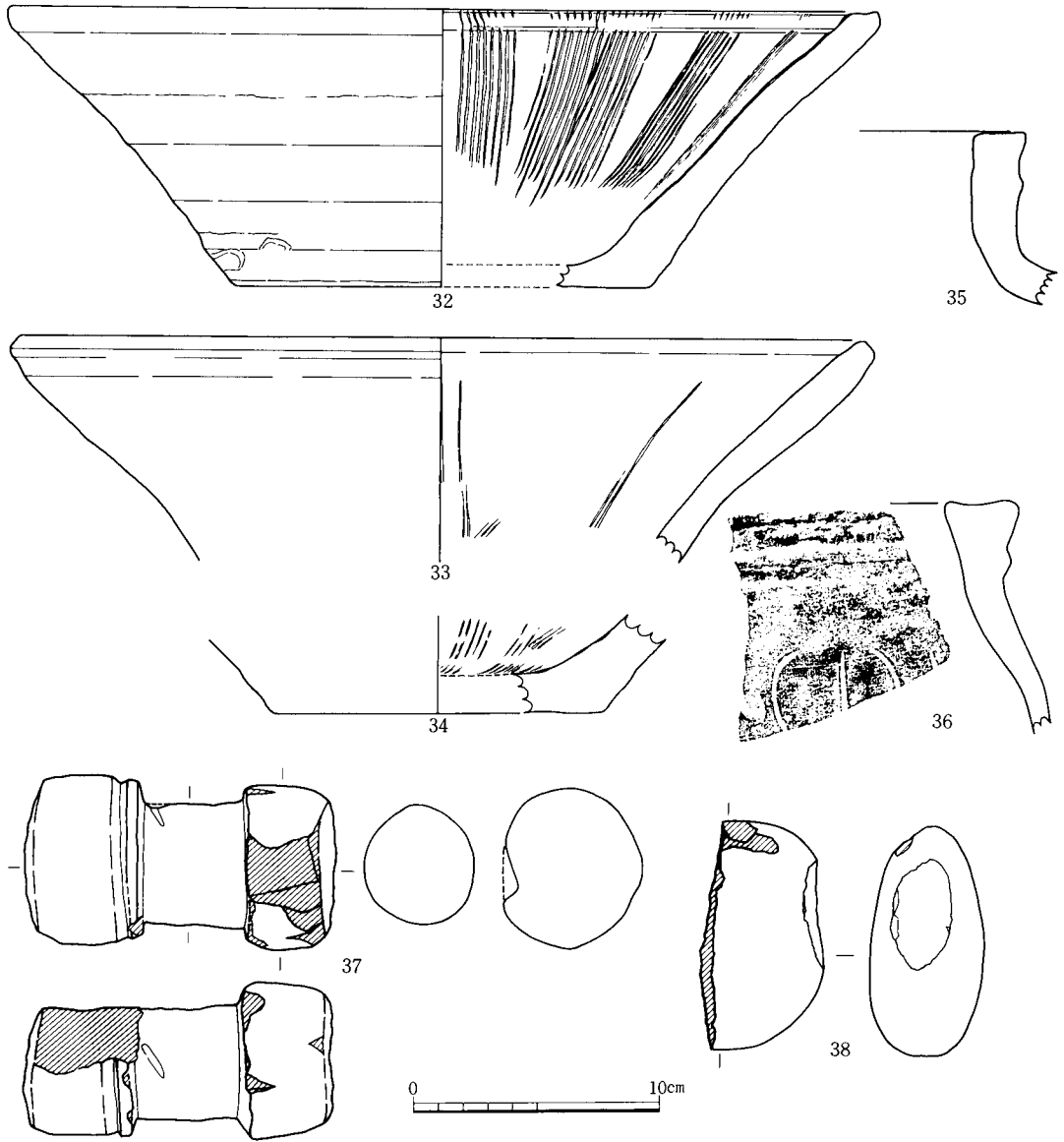


第113図 白江梯川遺跡第3次祠跡周溝出土遺物 (1)

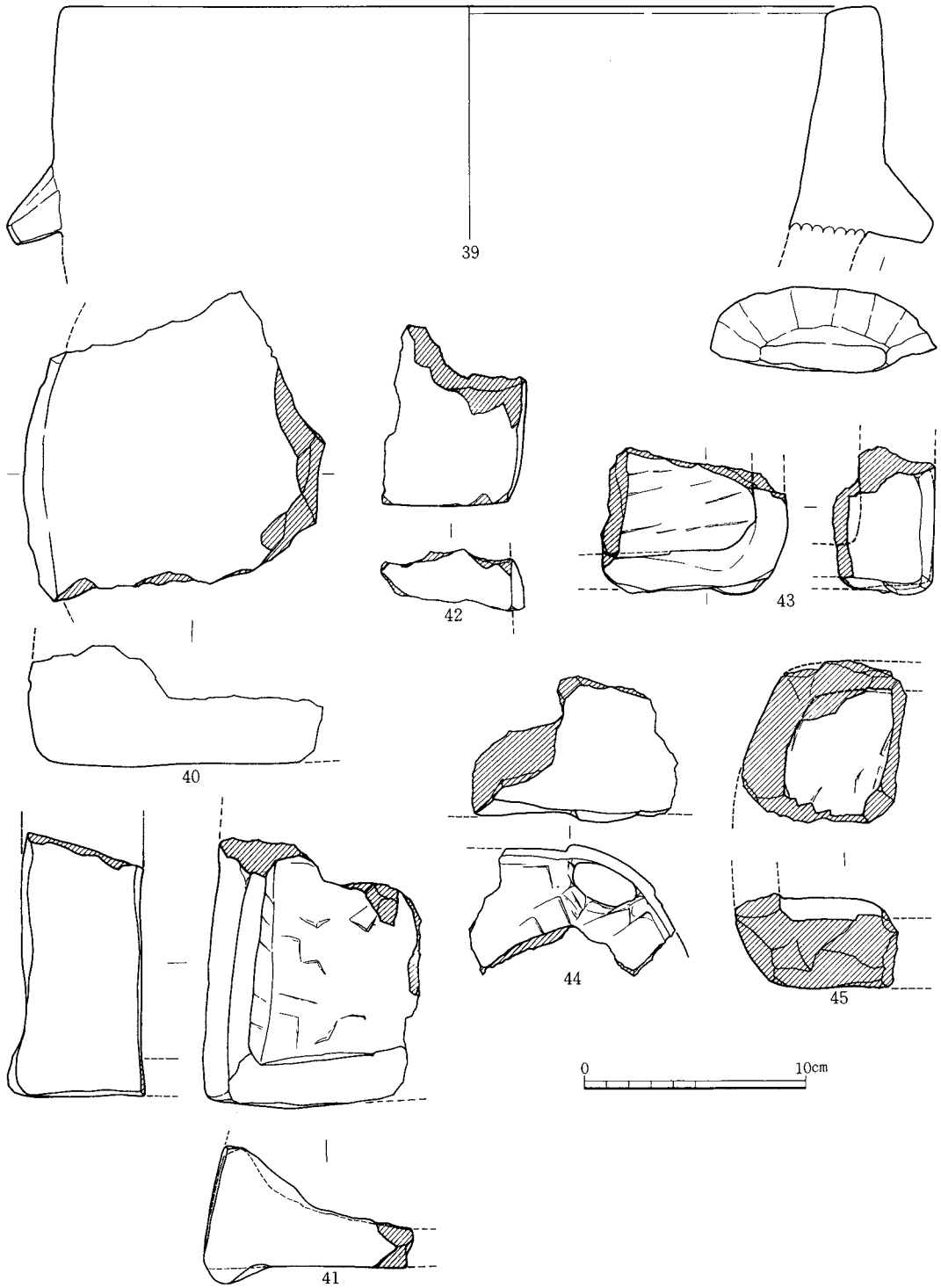
4は白磁の皿。口径16cmで口縁部が外へ開く。胎土は緻密で焼も良い。5・6は青磁碗の底部。いずれも見込みに印刻の文様をもつが判読できない。6は濃緑色の釉がかかっているが、二次的な加熱を受けているようで表面がざらついている。7は瀬戸の碗。内面に淡緑の釉がかけられている。8は瀬戸の香炉。口径11.1cm、器高3.4cmを測る。三足の短い足をもち、浅黄色の釉がかかっている。9は明染付の碗。見込みに鮮やかな藍色の釉薬で唐草が描かれ、高台の中には「長命富貴」と記されている。溝出土の陶磁器類では最も新しく16世紀も後半に置かれよう。10は瀬戸の茶入れ。黒茶色の釉が全面にある。径3.2cmの底部には回転糸切り痕をとどめる。11～25は土師質小皿。形態によって11、12～15、19～22、16～18・23～25の4グループ位に分けられそうである。色調からも褐色系の11・23、白灰色ないしは白黄色で軟弱な12～15と、明るい灰色をなす16～18、淡い黄(橙)系の19～22など少しずつ違うようである。軟質で器表が剥落したものも多いが11・13・16・21・22・25など口縁端部に煙痕を残すものがある。口径の大きさでは約10cmの中型品(18)と8cm前後の小形品になる。いわゆる土師質土器の編年は、能登の穴水地域を中心とした編年案と加賀の大聖寺地域を中心とした編年案が出されているが、これらと比較すると溝内から出土した土器の新相は、16世紀前半頃までとみておきたい。26・27・29は珠洲の壺ないしは甕の断片。叩きの状態からみると珠洲のⅢ期(14世紀後半)のものであろう。28は産地が現時点で分からない須恵質の甕断片。外面に格子の叩きをもつ。灰色をなすが、これと同種の断片が20・23・24号の各井戸から出土している。30・31は砥石。軟らかい頁岩を用いたものか。30には鋭いV字形の研ぎ跡がある。32～34は越前の播鉢。北側周溝から出土した32は口径33.8cm、器高11.1cmを測る。淡い橙色をなし、胎土中に多くの荒砂を含む。8条1単位の卸し目がみられるが底では使



第114図 白江梯川遺跡第3次祠跡周溝出土遺物 (2)



第115図 白江梯川遺跡第3次祠跡周溝出土遺物 (3)



第116図 白江梯川遺跡第3次祠跡周溝出土遺物 (4)



第117図 白江梯川遺跡第3次祠跡周溝出土遺物 (5)

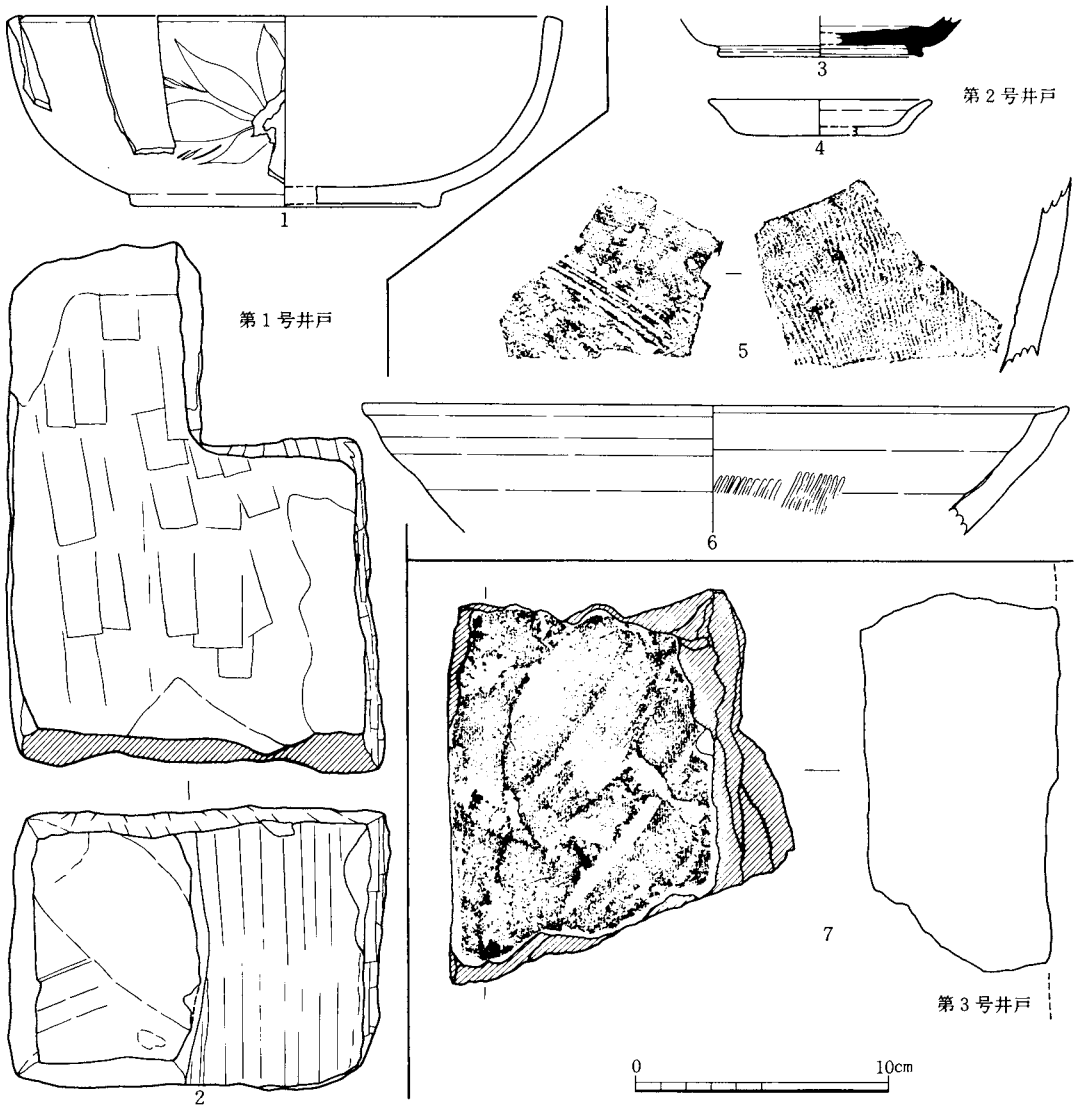
用により擦り減っている。33は南側周溝から出土。灰褐色の色調で弱い卸し目がある。35・36は越前の大型の甕。36には直線と弧線からなるヘラ描き文がある。37は北側周溝々底で出土した凝灰岩の石製品。一部を欠くがほぼ完存している。長さ12.4cmの円筒形をなし中央は径約4.6cm、両端部は径約6.8cmを測る。仏具の独鈷を連想させ片方が約4.6cm、もう一方が約3.8cmの幅で中央より太くなっている。片方の隆帯部に断面V字形の刻みを入れる。重量420gを測る。38は河原石を用いた磨石で、半分は欠失している。重さ250g。39は凝灰岩を削り抜いた把手付の石製鉢断片。復元口径36.4cmを測り、把手には工具痕が残る。40は凝灰岩石臼の断片。42～45は凝灰岩製のバンドコの断片。41・43・44はバンドコの底部隅の破片で小さな足を削り出している。46は宝篋印塔の相輪。南から向かって左側の土壇状遺構で底から浮いた状態で出土した。現存高33.2cm、頭部径8.2cm、九輪の高さ13cm、請花の下端径11.5cm、請花の高さ3.7cm、ほぞの長さ4.7cm、重量4.5Kgを測る。九輪・請花ともに簡略化されており、幅2mm程度の線刻でもって表わされている。47～49は石製組合せ式五輪塔の空風輪もしくは風輪の一部である。47は先の宝篋印塔と同様に左側の土壇状遺構から出土した。ほぞの先端をわずかに欠く他は完存する。現存高31cm、空輪高14.8cm、風輪高9.4cm、空輪径16.7cm、風輪径17.2cmを測る。49はほぞの断片。高さ5.8cmを測る。49の空輪は右側の土壇状遺構から出土。砂岩質でもろくかなり風化している。高さ14cm、径12.3cmを測る。50・51は凝灰岩製の石臼断片。51は右側の土壇状遺構から出土。復元した底径で24.6cm、高さ8.2cmを測る。外縁が土手状に高く、内外面に製作時の工具痕(石ノミ)を残す。52は凝灰岩の切り石断片。表面を石ノミで削っている。このような加工をもつ凝灰岩の断片は小片も含めるとかなりの数が出土しており、建物の基礎などに用いられていた可能性がある。

### 井戸出土の遺物

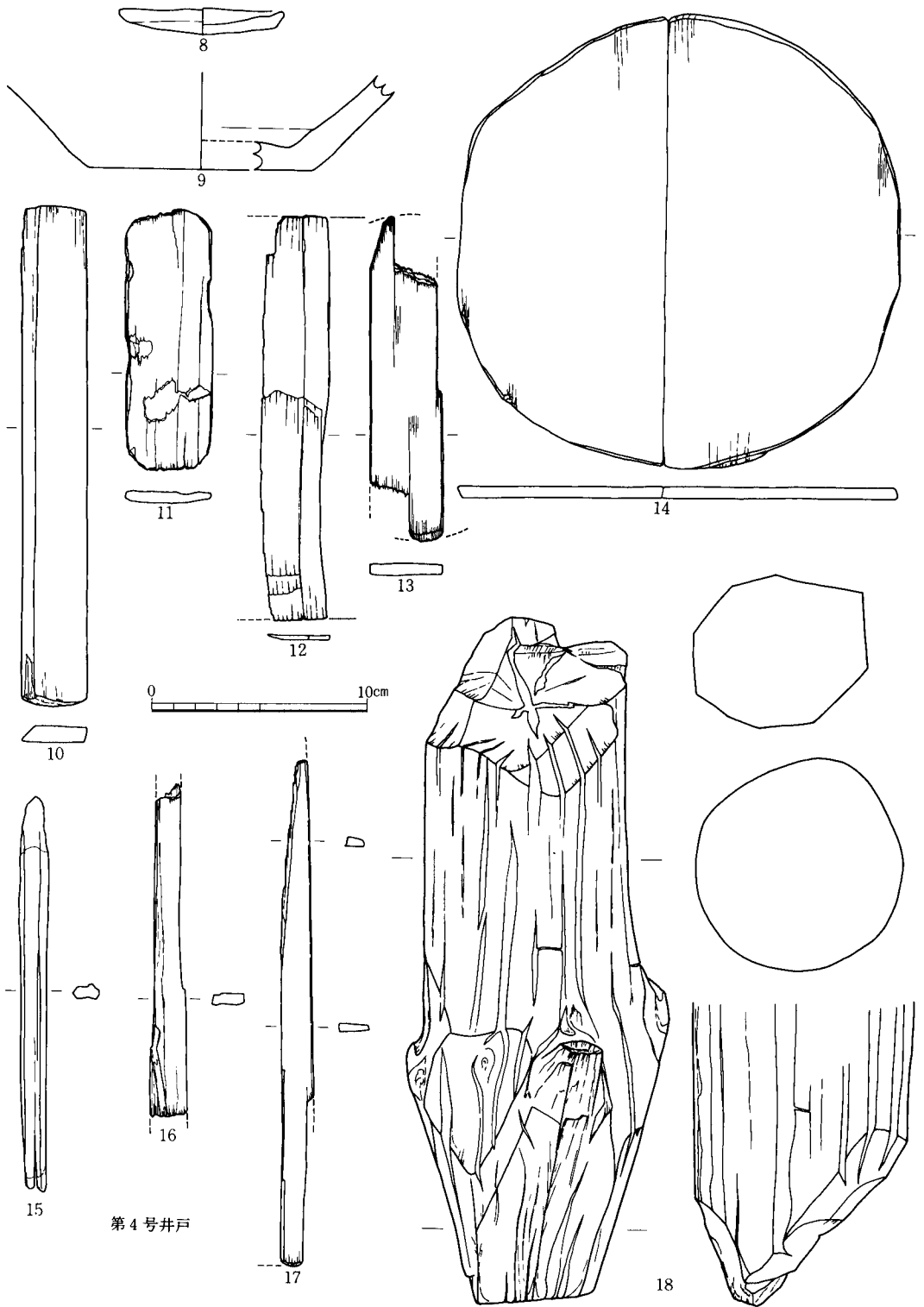
第1号井戸（第118図1・2）1は漆器碗の断片。桶転用の井戸側内より出土した。口径20.6cm、底径12.2cm、器高7.5cmを測る。器肉は厚く、口縁部では7mmの厚さをもつ。高さ4mm、幅6mmの低い高台があり、全体としては高さの割に口径の大きな碗である。内外面に黒漆をかけ、外面に鮮やかな朱漆でモミジの葉を描く。2は凝灰岩切石の断片。幅15cmの直方体の切石でL字形に削り込んでいる。表面には幅1.5cm前後、削り込み部では7mm前後の工具痕をとどめる。建物部材の一部であろうか。

第2号井戸（第118図3～6）3は須恵器の有台杯。底径7.8cmを測る。平安時代前期頃の所産とみられ混入品である。4は口径8.8cm、器高1.4cmの土師質小皿。淡い橙褐色をして軟らかい。5は灰色を呈する壺体部の断片。外面に縦位の細かいハケ調整があり、内面にも同様なハケ調整が斜方向になされている。同種の断片が第20・24号井戸と第3次調査区などでも出土しており、加賀焼の古い段階（13世紀後半）の一種と考えられている。6は口径27.8cmの珠州焼播鉢。11条1単位のおろし目がある。珠洲IV期（14世紀前半）の所産であろう。従って第2号井戸は13世紀後半から14世紀前半の年代観を与えておきたい。

第3号井戸（第118図7）本井戸からは土師質土器の小片が出土したが図示し得ない。7は凝灰岩の切石断片で幅2.5cmのノミ痕をとどめる。

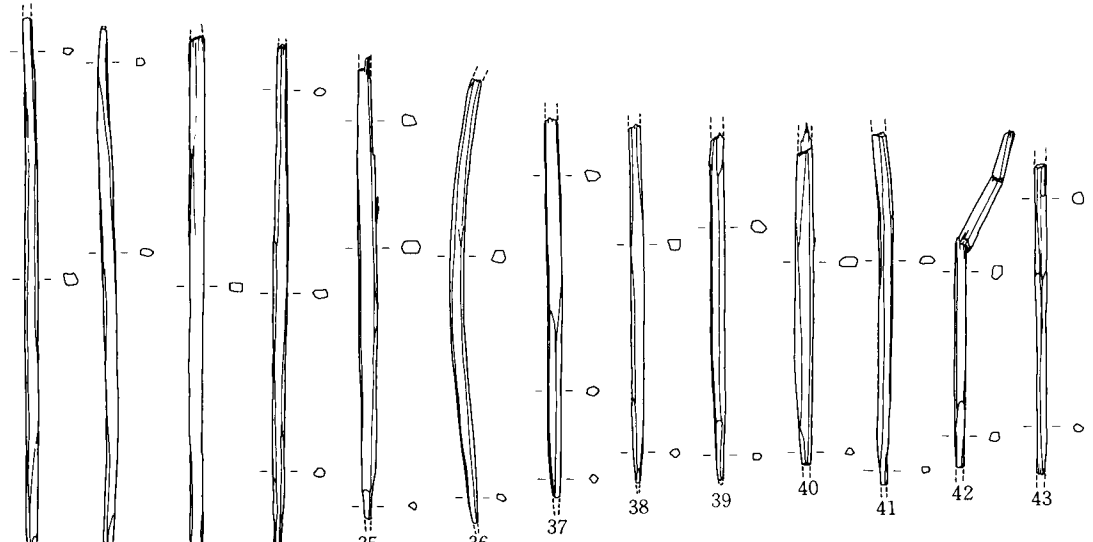
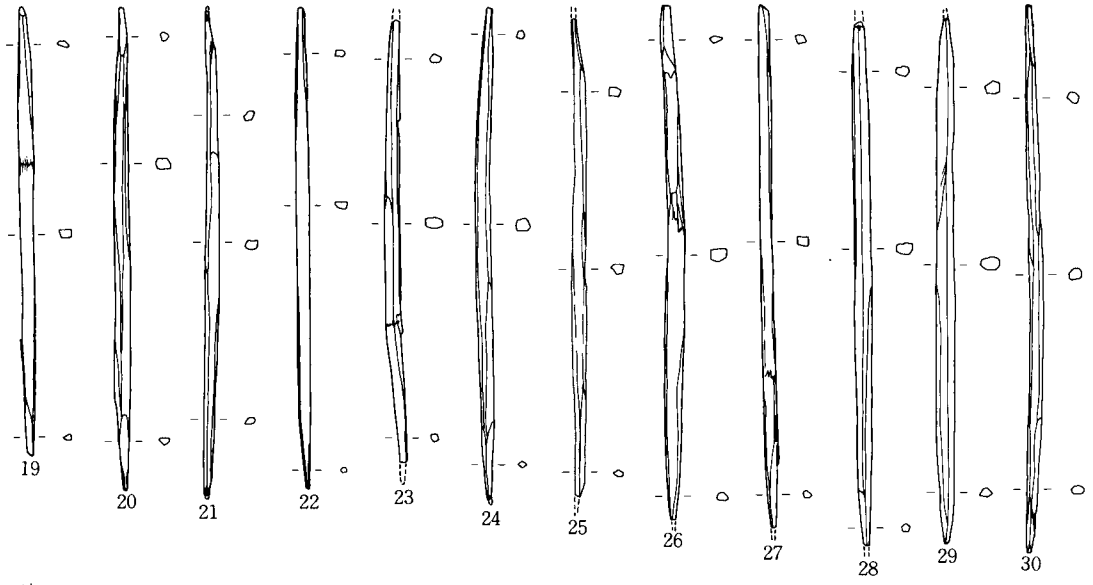


第118図 白江梯川遺跡第2次井戸出土遺物 (1)

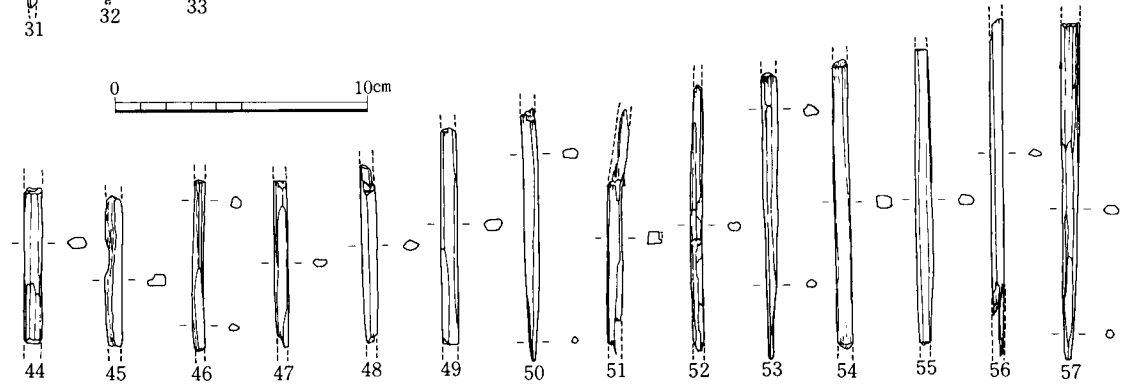


第119図 白江梯川遺跡第2次井戸出土遺物 (2)

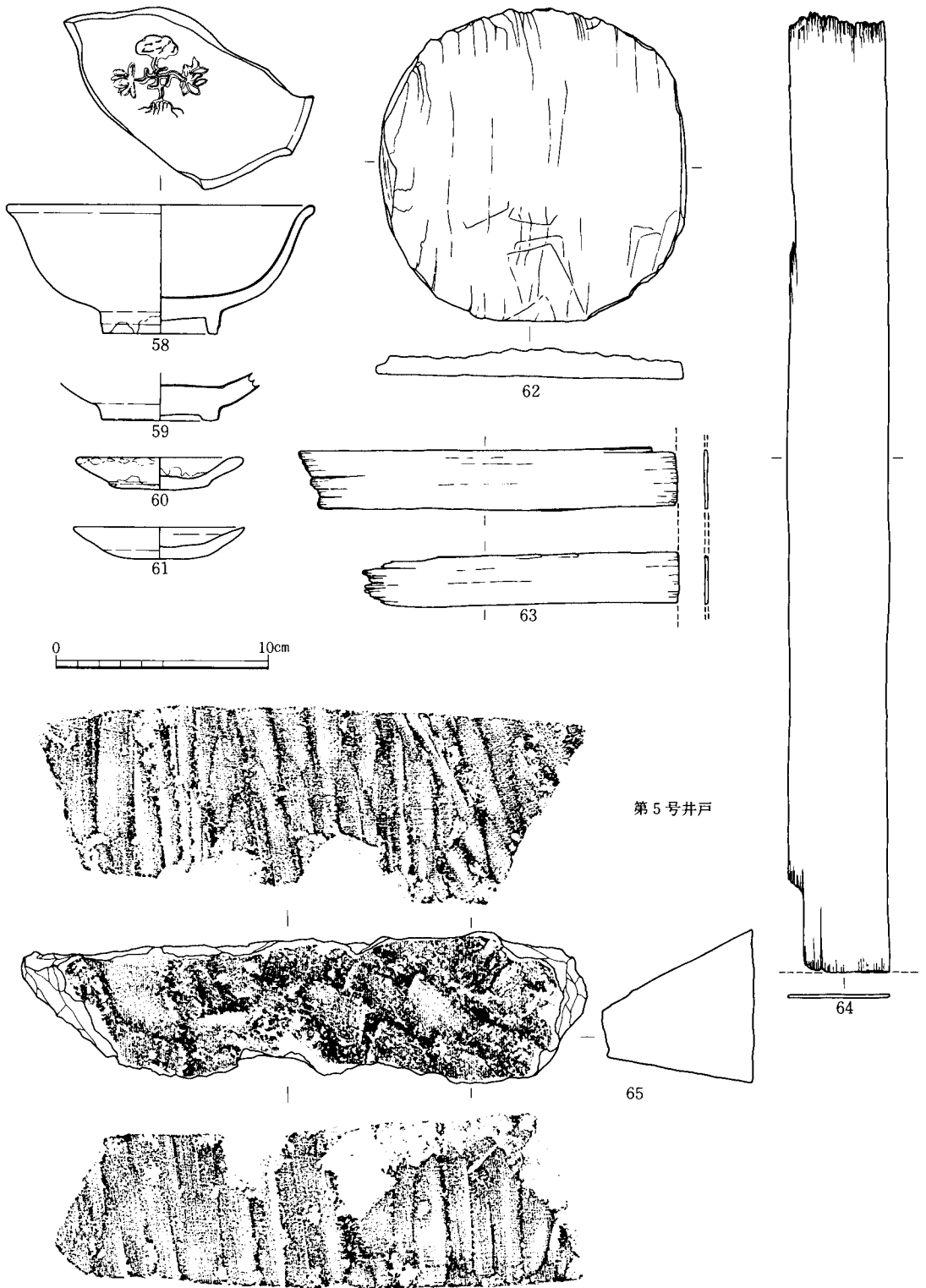




第4号井戸



第120図 白江梯川遺跡第2次井戸出土遺物 (3)



第121図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (4)

第4号井戸（第119図8～120図57）井戸側内から多数の木器が出土した。特に39点もの箸の出土は、井戸祭祀に関わるものとして注目される。8は口径7.5cm、器高1.1cmの土師質小皿。淡褐色で軟らかく口縁はヨコナデをする。9は底径10.2cmの壺または甕の底部。中世陶器であるが暗褐色を呈して外面は丁寧なナデ、内面はヨコナデ調整をする。産地を特定できない。10は長さ27.3cmの割り板。11は長さ11.9cm、幅4cm、厚さ1.5cmの小さな長方形の板。四隅を切っている。12は折敷の底板とみられる断片。長さ18.5cm、厚さ2.4cmをはかる。13・14は曲物の底板。13は径14.8cm、厚さ5.5mmを測る。14はほぼ完存する底板で径20.3cm、厚さ5.5mmを測る。正円ではなく縁部を削って円板としている。15は長さ18.5cm、幅1.35cmの細い棒。両端が燃えており、付け木と思われる。16・17も割り板の断片。18は長さ31.5cm、最大径14.1cmの丸太断片。杭状に削って一方を尖らせ、上部を切断している。第120図19～57は井戸側の内部よりまとまって出土した箸。折れたりしてその全形を知れるものは39点のうち18点である。完存する箸の中でその大きさをみると、長さ17.8cm、太さ5mmの19が最小で、長さ22.7cm以上、太さ5mmの31が最大である。その多くは19～20cm、太さ5mm前後で両端部を削って細くしている。箸は鋭利な刃物で削って加工されており、断面形は五ないし六角形をなすものが多い。白江梯川遺跡における箸の集中出土は特定の井戸に限られており、共食を伴う井戸祭祀に関係したものではないかと想像している。井戸の使用年代を決める土器の出土が少ないため、その比定には困難を伴うが、8の土師質小皿から14世紀代の所産とみておきたい。

第5号井戸（第121図58～65）先述したように本井戸は2基の井戸が重複したものである。58～61は西側井戸の掘り方でも浅いところから出土している。58は青磁の碗。口径14cm、底径5.4cm、器高6cmを測る。暗緑灰色の釉薬が高台部を除く全面にかけられている。見込みの生地には図案化された植物がある。59も青磁碗の断片。底径5.4cmを測る。58と同様灰色の胎土は精良で暗緑灰色の釉がかかっている。60・61は土師質の小皿。60は口径7.8cm、器高1.5cmを測る。口縁部をヨコナデして底部外面はくびれる。灯明に用いられており口縁部内外面に油煙の痕跡が著しい。61は口径8.1cm、器高1.5cmを測る。淡褐色を示し摩耗がはげしい。62は曲物の底板と思われるが、工具による荒い削り痕を残す。径14.5cmを測るが正円とはいえない。厚さも中央で盛り上がって1.5cmを測る。63・64は折敷の断片とみられる薄板。63は同一個体の板が二つに割れている。現存する長さ18cm、厚さ1.8mmを測る。64は現存する長さ45cm、厚さ1.8cmを測る。いずれも征目取りの薄板である。65は5号井戸東側井戸の覆土中から先の63・64などと共に出土した凝灰岩の加工石。長さ26cmで断面台形の石材である。幅1.5cm前後の石ノミによる明瞭な加工の痕跡を残している。欠失部がないことから何らかの目的をもって加工されたものと思われる。重量は1.19Kgを測る。

第6号井戸（第122図66～70）66は瀬戸の碗。底径4.6cmを測る。内面と外面の一部に黄緑灰色の釉がかかっている。淡褐色の胎土中には砂粒を含み体部外面の下半はヘラ削りのままである。67～69は土師質の小皿。67は口径7.2cm、器高1.4cmを測る。淡褐色の胎土は良い。68は口径11.4cm、器高2.6cmを測る。口縁部は底から外反して開き、底部外面には弱いくびれを認める。淡褐色の胎土中には若干の砂粒を含むが焼成ともに良好である。69は口径11.6cm、推定器高2.6cmを

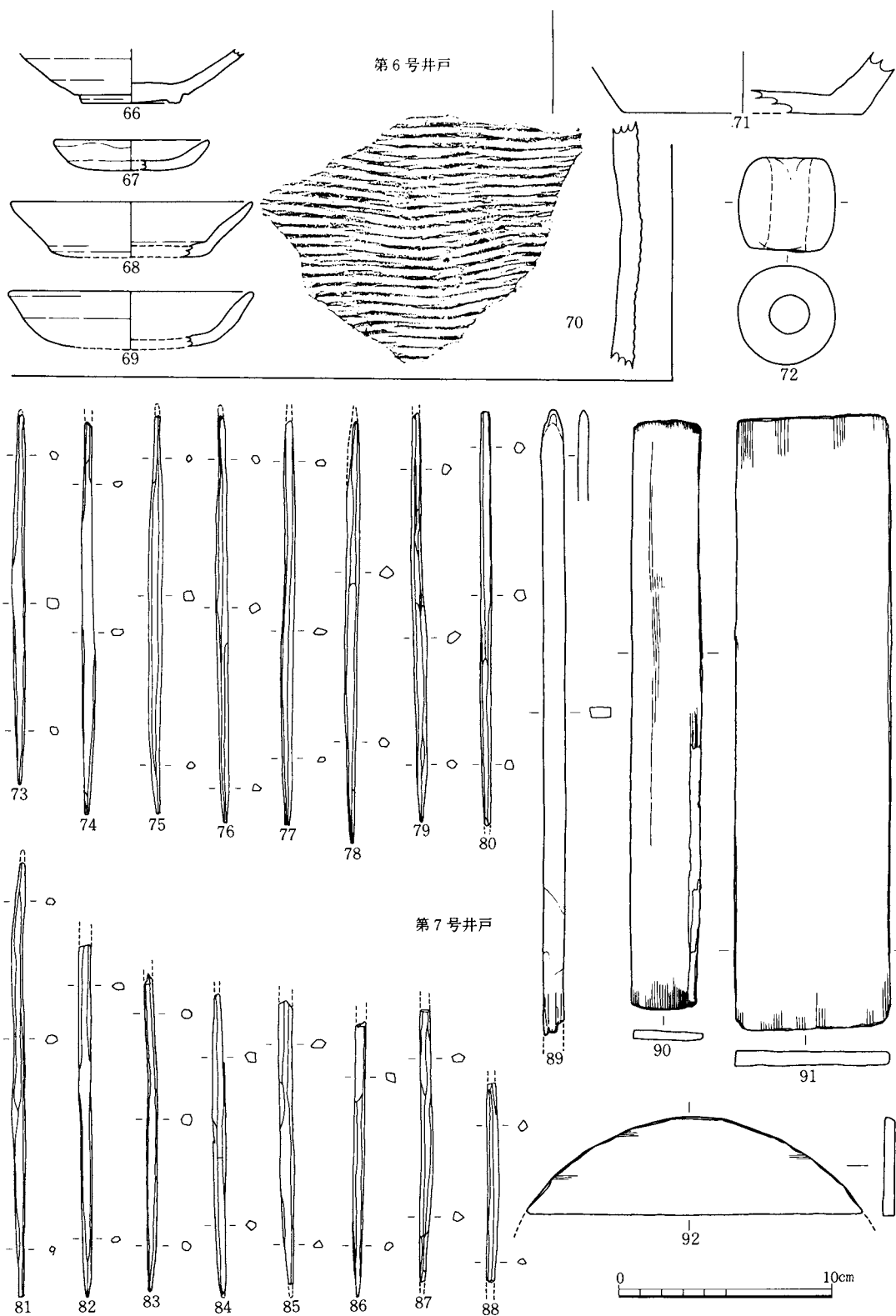
測る。口縁はゆるく立ち上がりヨコナデをする。淡褐色を呈し胎土も良い。70は珠洲焼の断片。斜方向の平行叩きがある。土師質土器からみれば14世紀前半頃の所産とみておきたい。

**第7号井戸**（第122図71～92）71は加賀焼の壺の底部。内面に明緑灰色の自然釉が付着している。胎土は灰色で焼成は良い。72は長さ4.5cm、幅4.6cmの土師質の土錘。穴の径は1.8cmを測り、重さは87gである。73～88は曲物の井戸側内から出土した箸。16点のうちほぼ完存するものは9点で、他は断片である。長さの分かるものの中で最大は81の20.7cm、最小は73の17.4cmを測る。18cmから19cm代のもが多い。太さも5・6mmで断面形が変則的な五から七角形をなす。完存するものは両端を細く尖らしている。89は長さ29.6cm、幅1.05cm、厚さ0.5cmの角棒。一方の先端が焼け焦げており付け木として使用されたようである。90は長さ28.8cmの板材であるが、両端部が弧を描いていることから曲物の底板の一部とみられる。91は長さ28.8cm、幅の0.68cmの長方形の板材で、折敷もしくは方形の曲物の底板の一部と思われる。92も曲物の底板の断片である。以上の板材3点はいずれも征目の板である。

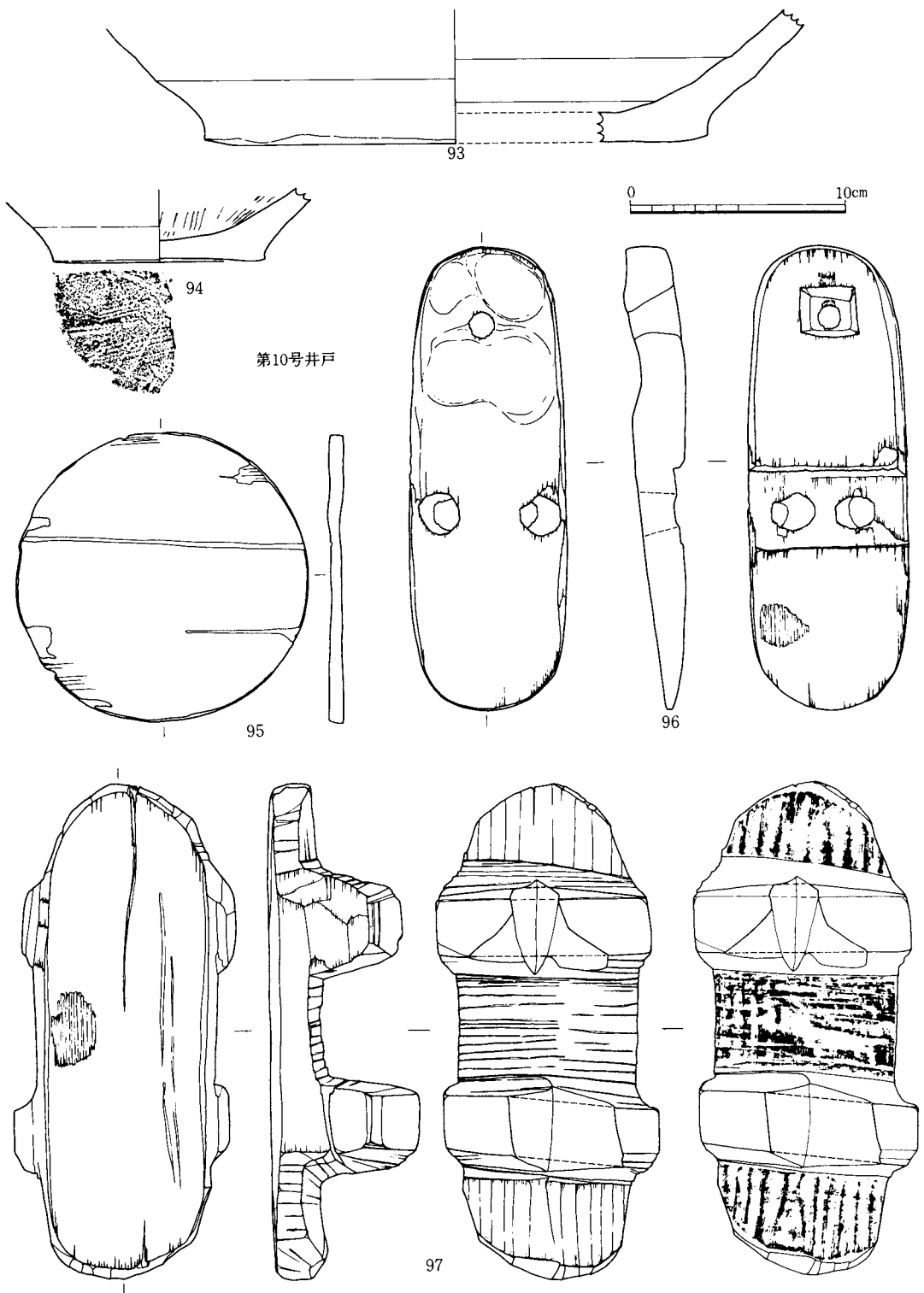
**第8号井戸**（第127図129～153）本井戸は井戸側が土圧により大きく変形してしまっていたが、第127図に示した遺物はその井戸側内からの出土品である。129～132は土師質の小皿。129は口径6.3cm、器高1cmを測る。底部から折れて立ち上がる口縁部はヨコナデ調整を行っているが、焼成前につけた浅いV字形の切り込みが1ヵ所みられる。灯明皿に使用する際に灯芯を出すためのものであろうか。淡赤褐色の胎土は良く、外面に整形の際の指紋痕が残っている。130は胎土中に若干の砂粒を含み、摩耗が著しい。色調は淡赤褐色。131・132は口径・器高ともに近似し、底部から弱いくびれをもって開く形態も類似する。133～141は井戸側内でも1m近く掘った所でまともな出土した箸である。全形の知れるものは20点のうち7点で、最大は139の21cm、最小は133の16.1cmを測る。ここでも長さは18cm前後、太さも5、6mmのもが多いといえる。133は一方をV字形に尖らしており、長さが他の箸より短いことから削り直したものである可能性が高い。断面形は変則的な五から七角形となり、両箸を細く尖らすことも他と同様である。142は長さが28.3cm、最大幅が1.2cmを測る。断面形が五ないし六角形に削り、一方の先を尖らしている。箸の範疇に含まれるか疑問であるがこれと同じ用途に用いられた製品であるとみておきたい。出土した土師質土器から井戸の時期は14世紀後半頃を下限とするものであろう。

**第9号井戸**（第127図154～157）154は青磁瓶の口縁部小片。口径6.2cmを測る。胎土は白灰色で精良な土を用い、淡い緑灰色の釉がかかっている。155は口径10.9cm、推定器高1.8cmの土師質小皿。内面の底付近は黒く灯明皿に使用されたい。淡赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良い。156は底部に回転糸切り痕をとどめる土師質の椀断片。154・155の土器よりも明らかに先行する資料であり、混入品といえる。157は唯一出土した箸の断片である。155の土師質土器からみると本井戸の時期は14世紀後半頃と考えておきたい。

**第10号井戸**（第123図93～97）93は越前焼甕の底部。復元径23.4cmを測る。胎土中には1mm前後の荒い砂粒を多く含み、表面にはぶい褐色をしている。器表内外面の一部に漆状の黒色付着物がみられる。94は越前焼の播鉢で底面に静止糸切り痕を残す。使用のためおろし目は擦り減って底がつるつるしている。胎土中に砂粒を多く含み、灰赤色を呈する。95は曲物の底板。径13.3cm、



第122図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (5)



第123図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (6)

厚さ6.5mmを測る。96は女物の下駄。台長21.4cm、幅7.3cm、台厚2.4cmで、遺存状態は良い。鼻緒を止めた前壺は径1.1cmで、裏は方形に削り抜かれている。後壺は斜方向に穴が穿たれ、裏面は長方形に削り抜かれている。使用により裏面はかなりすり減っており、前壺の前後には指の跡が強く残る。台裏には歯が無くて、かかとが当たる部分が大きくすり減っている。類品として金沢市普正寺遺跡出土例があげられる。97は下駄の未製品。台長23cm、幅10cm、厚さ7cmを測る。前後に幅2~2.5cm、高さ4.5cmの歯が削り出されている。表は平滑であるが、裏は歯のつくり出しのノミ痕が明瞭に残っている。壺穴はまだ穿たれておらず、製作の途中で放棄されたものである。

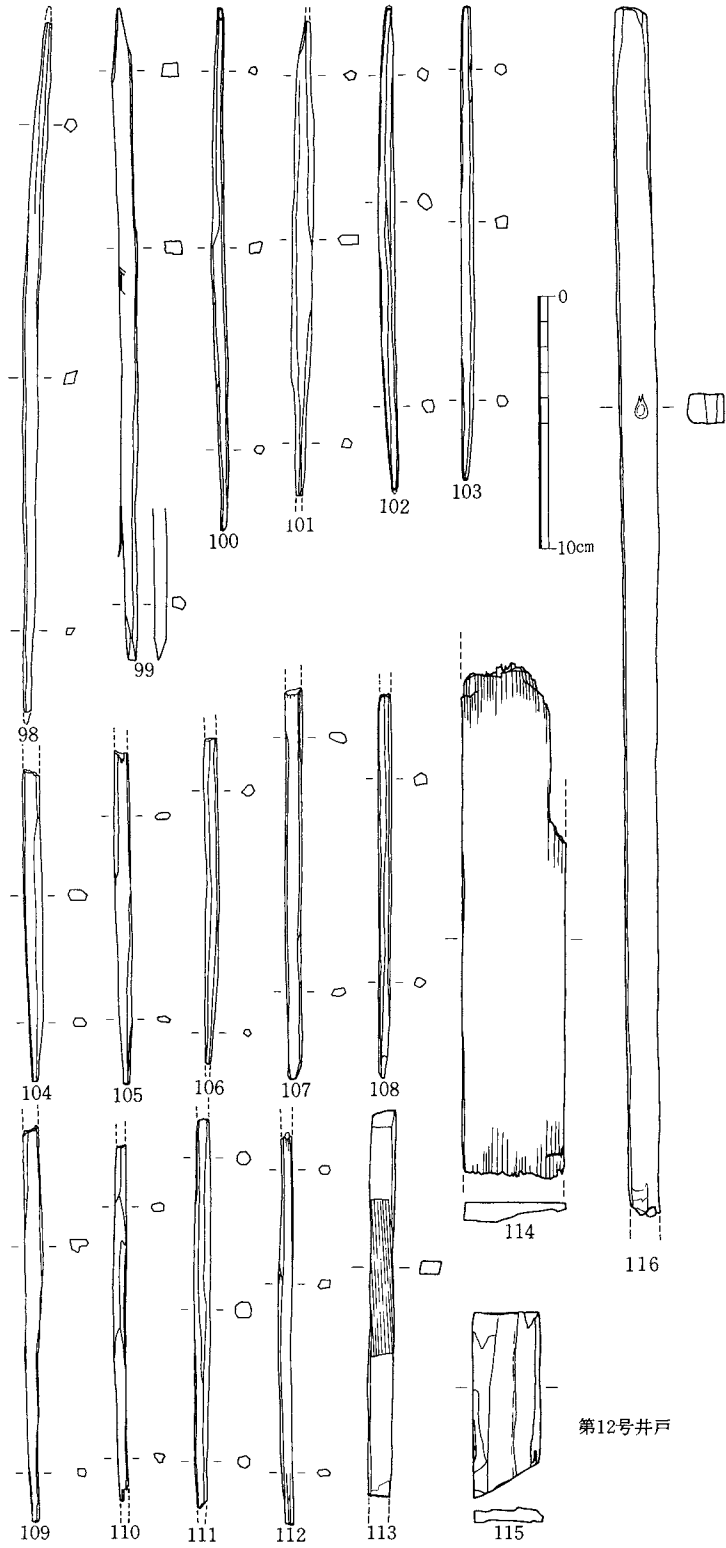
第12号井戸（第124図98~116）本井戸からは覆土中から土師質土器片が出土したが、図化し得ない。箸は15点出土しており、そのうち6点がほぼ完形である。最大は98の27.1cm、最小は103の18.1cmで18cmから20cm代の長さとなる。径は5~7mmを測り、変則的な五ないしは六角形をとることが多い。両端を細く削ることは他の箸と同様であるが、99は未製品であろうか。断面方形をなし、両端はV字形に削っている。113は幅9.6cmの細い角材の断片。中脳に割り材の跡を残す。114は現存長20.3cm、幅4.45cmの征目板断片。115は長さ7.4cm、幅2.7cmの割り板断片であるが、一辺を斜めに切っている。116は現存長47.4cm、幅1.47cm、厚さ1.3cmの細い角棒の断片で、2ヶ所に釘止めの痕跡が認められる。

第14号井戸（第127図158）覆土中から出土した土師質土器片1点のみを図化し得た。復元口径11.3cm、器高約2.7cmと推定される。口縁部はわずかに厚く、弱い面をもつ。淡黄灰色に橙色が混じる色をしており、軟らかい。

第15号井戸（第125図117~122）117は口径20.6cmの越前焼の甕。胎土は灰色で、外面に降灰が付着する。胎土中に荒い砂粒を多く含む。118は口径30cmの珠洲焼播鉢。内面に5条一単位のおろし目がある。119は口径12.8cm、器高2.6cmの土師質小皿。口縁部は底からわずかにくびれて外面する。胎土は灰白色を呈する。120は折敷の底板。長さ17cm、現在幅10.6cm、厚さ3mmを測る。征目板を用いている。121は17.8cmの割り板、一方の端を斜めに切断している。122は凝灰岩の切石断片。幅3cm前後の石ノミ痕を残している。出土土器から14世紀前半頃の遺物とみられる。

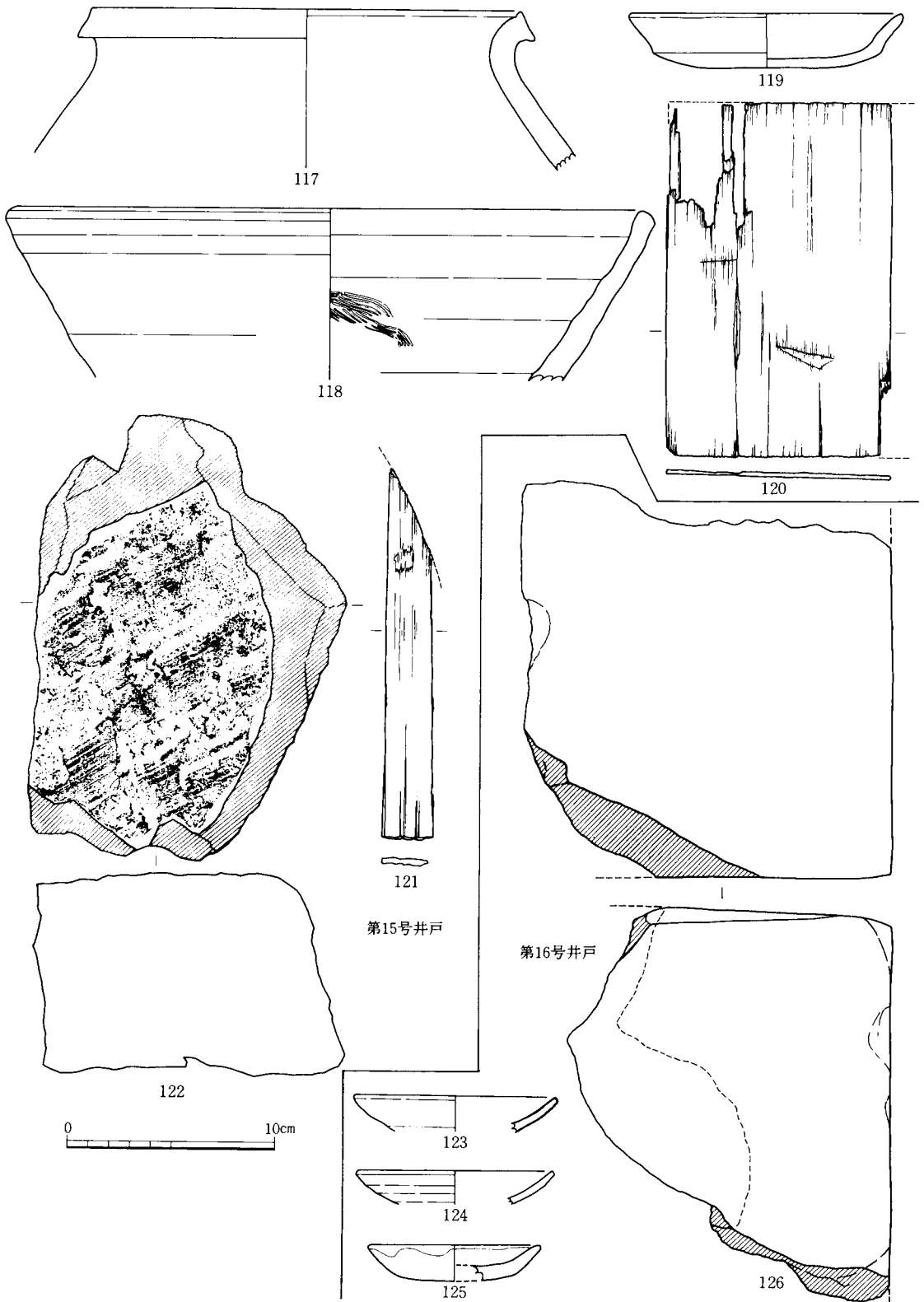
第16号井戸（第125図123~126・第126図127・128）123は口径9.7cmの瀬戸小皿、内外面に白色の釉がかかっている。胎土は灰白色をするが良いとはいえない。124も同様な瀬戸小皿。内面と外面上半部に白色の釉がある。胎土は灰白色をして良い。125は口径8.4cm、器高約1.8cmの土師質小皿。丸みをもつ口縁部に油煙痕がある。以上の土器は15世紀前半頃に位置付けられる。126は五輪塔水輪の残欠。一部に石ノミ痕を留めるが、砂質の凝灰岩を加工したものである。全体の1/4程度の断片である。127は白乳色の凝灰岩の加工石。下辺21cm、高さ36.5cmの長い台形状をしている。厚さは6cm前後で四周の側面に幅約3cmの明瞭な石ノミ痕を残す。台石の目的で加工されたものであろうか。128は凝灰岩製の五輪塔水輪の残欠。全体のおよそ半分を欠失する。完存する辺は33.8cm、高さ16.3cmを測る。中央をノミでえぐって5cmばかり、凹ませている。これらの石造遺物は、井戸廃棄の際に埋めこまれたものとみている。

第17号井戸（第129図175~178）175は越前焼壺の胴上半部断片。内外面は褐色で胎土中に粗

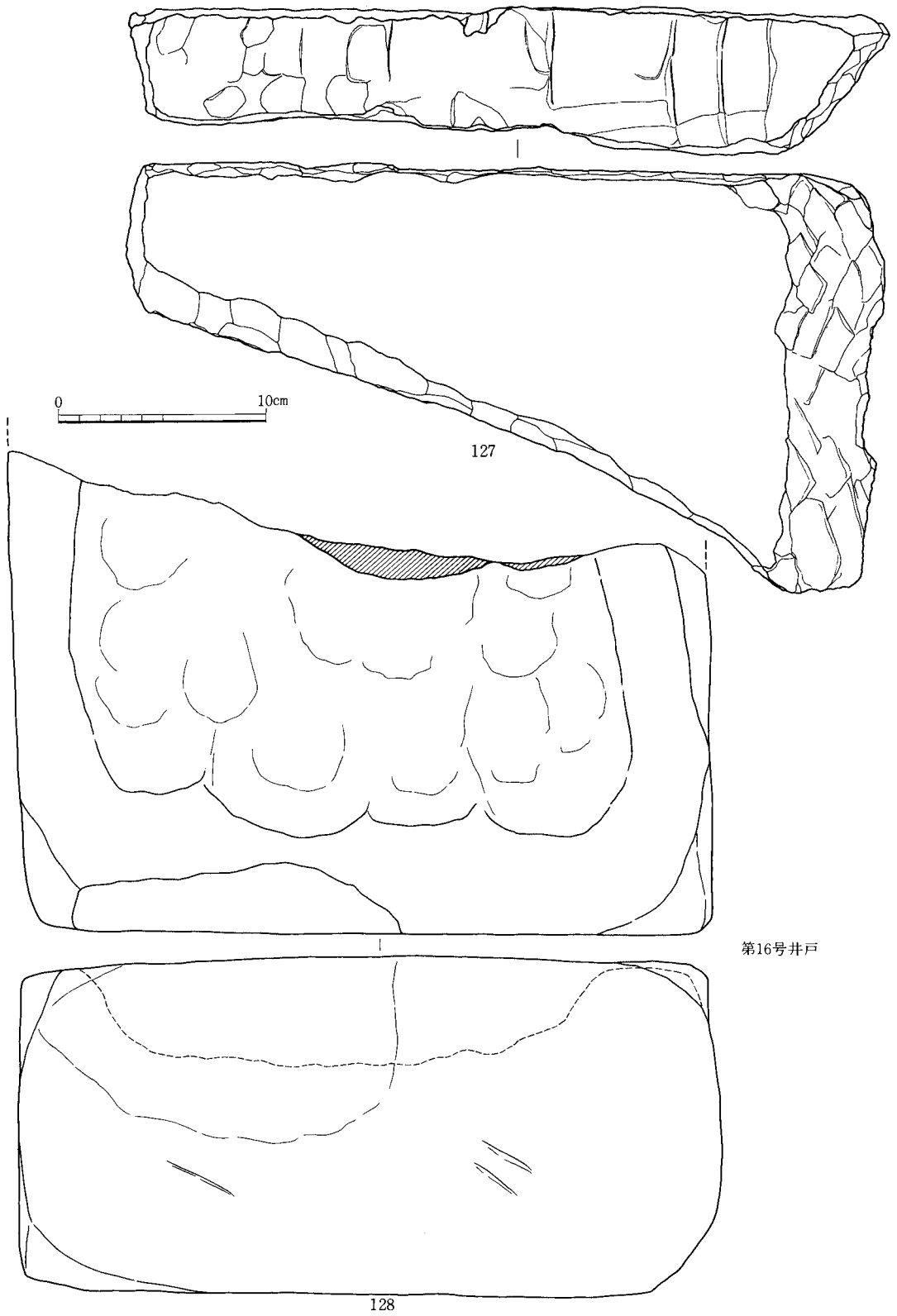


第124図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (7)

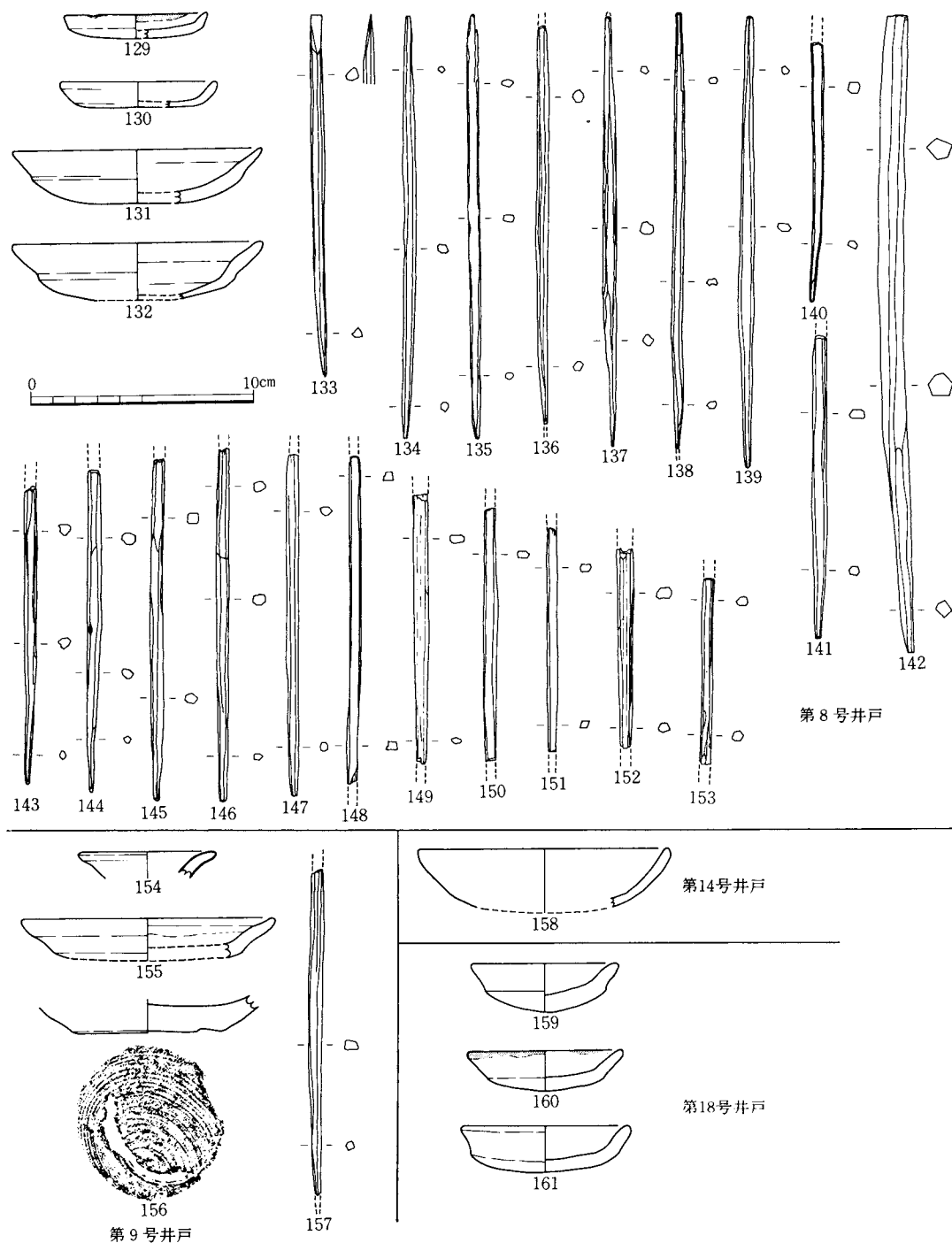




第125図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (8)



第126図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (9)



第127図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (10)

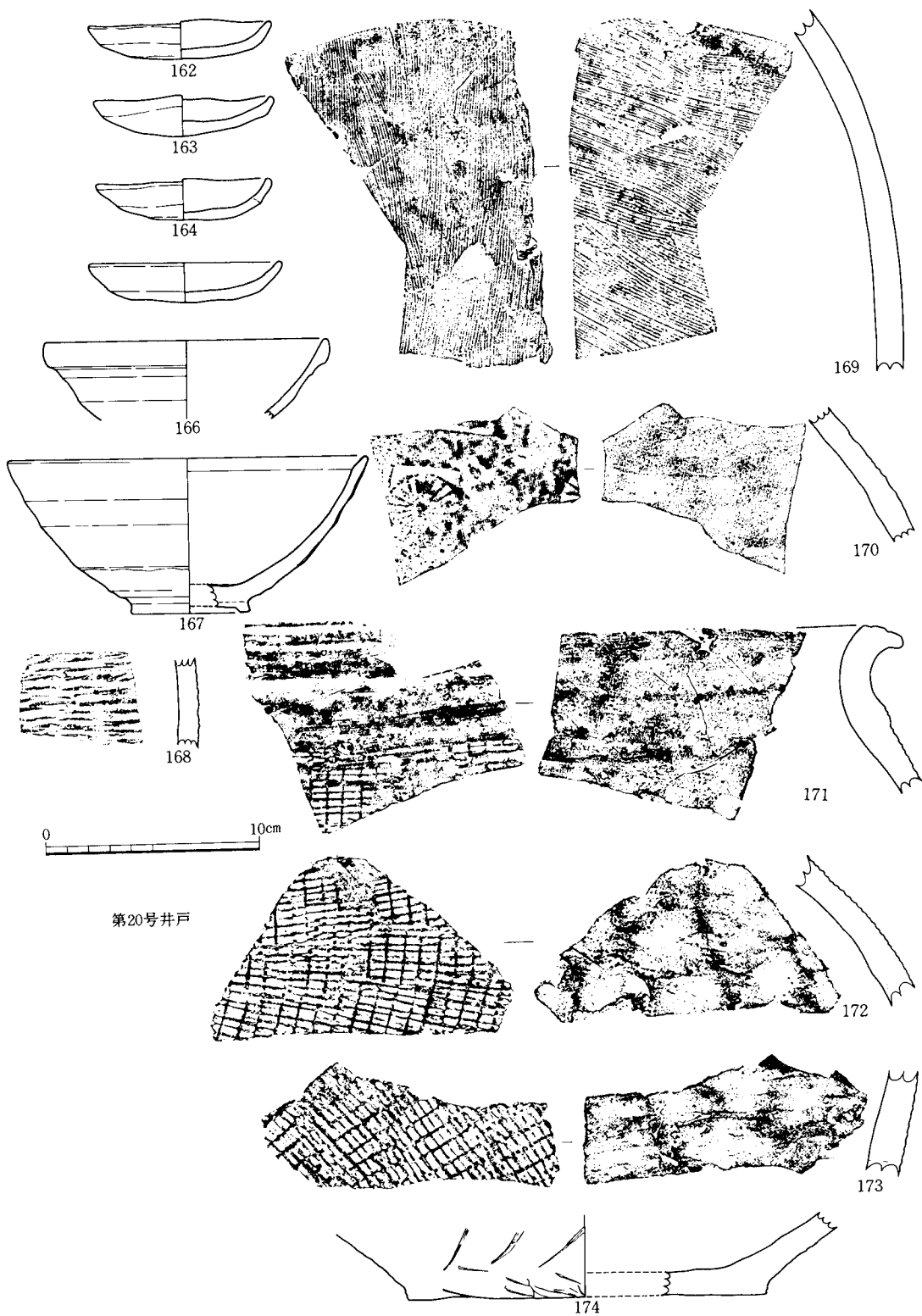
砂を含む。176は越前焼壺の底部。外面は淡い灰色、内面は褐色をしている。177は口径8cmの土師質小皿。器高は2cm程度となる。口縁部に油煙痕があり、灯明皿として用いられていた。胎土は灰白色で軟質である。178は瓦質土器の火舎の断片。肩の部分に隆帯とその間に5～7cm間隔の浮文を置く。灰白色で焼成はあまい。本井戸出土の土器は、15世紀前半頃の所産であろう。

**第18号井戸**（第127図159～161）3点の土師質小皿を図示した。159は口径6.5cm、器高2.2cmの厚味のある小皿。丸底風につくり、立ち上がり部がわずかにくぼむ。胎土は浅黄色である。160も口径7cm、器高1.8cmの小皿。丸底風なところや胎土の色調も159と似る。口縁部に油煙痕がみられる。161は口径7.6cm、器高2.1cmを測る。底を大きめに作るが胎土は前の2点と似る。15世紀後半頃の土器とみておきたい。

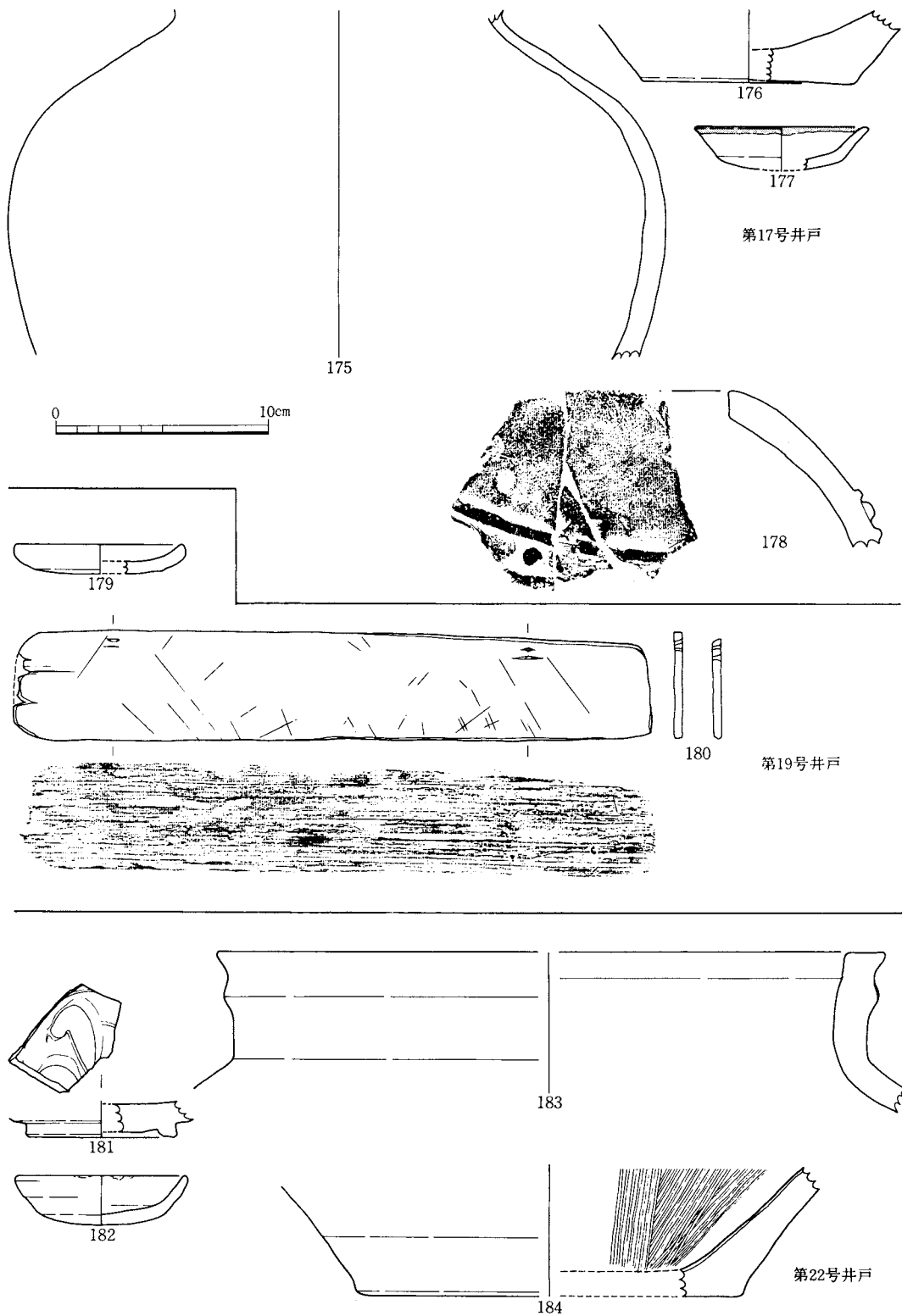
**第19号井戸**（第129図179・180）179は井戸の掘り方から出土した口径7.8cm、器高1.4cmの土師質小皿。厚味のある底からゆるく口縁部が立ち上がる。内外面をヨコナデし、胎土は灰白色で部分的に明赤灰色をする。14世紀後半に置かれようか。180は長さ29cm、幅5cm、厚さ4.5mmの短冊形の板。長辺の片方に寄って2個ずつ並列する釘止めの穴がある。板の片面に刃物による細かい切り傷が多くみられ、まな板の断片であった可能性がある。

**第20号井戸**（第128図162～174）162～165は土師質土器の小皿。162は口径8cm、器高1.75cmを測る。内外面はヨコナデ調整するが、手づくねの歪みがある。胎土は灰褐色をする。163も162とはほぼ同じ大きさの小皿で、これも歪んでいる。胎土は乳白色をして焼成も良い。164も先の2点と良く似る。歪みが激しく口径は7.9×8.4cmの楕円形をなす。胎土は淡い橙褐色をして、焼成も良い。165は口径8.8cm、器高2cmを測り、若干口径が大きい。胎土は淡い褐色をする。166は復元口径13cmの白磁碗。口縁は玉縁状に肥厚する。釉は灰白色で胎土は灰色を呈する。胎土は精良で焼成も良い。167は瀬戸の碗。口径16.6cm、器高7.1cm、底径5.4cmを測る。外面の約7割と内面に灰オリーブ色の釉がかかっている。胎土は淡黄色をして若干の砂粒を含む。124は珠洲焼の小片。平行叩きがある。169は灰色をする壺体部の断片。外面に縦位の細かいハケ調整があり、内面にも同じハケ調整が斜方向になされている。第2号井戸にも同種の破片があり、加賀焼の古い段階（12世紀後半）の所産と考えられている。170は加賀焼壺の肩部断片。灰緑色の釉がかかり、19弁の花弁からなる菊花の押圧文がある。171～173は体部に0.5×1cmの格子目叩きのある壺破片。ゆるやかに広がる171の口縁部は端を肥厚して幅約1.6cmの面とし、2条の太い沈線をめぐらせる。内面はヨコナデをして調整をする。胎土は暗灰色をして白色の砂粒を若干含む。現在のところ本遺跡での出土例しか知られておらず、産地は不明である。174は甕の底部断片、外面は斜方向のケズリの痕跡と押圧の跡がある。暗灰色の胎土をし、大粒の砂粒を若干含む。越前焼に含まれると思われるがはっきりしない。土師質土器と瀬戸碗からみて15世紀前半に位置付けておきたい。

**第22号井戸**（第129図181～184）181は青磁碗の底部断片。釉は灰オリーブ色をして内面と外底面中央を除く全面にかかっている。見込みには花弁状の文様がある。高台部は胎土の色調が異なっており、接合の状態が良くわかる。182は口径7.9cm、器高2.3cmの土師質小皿。外にわずかなくびれがあり、底は丸底風につくる。胎土は淡褐色で焼成は良い。灯明に利用されたらしく、



第128図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (11)



第129図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (12)

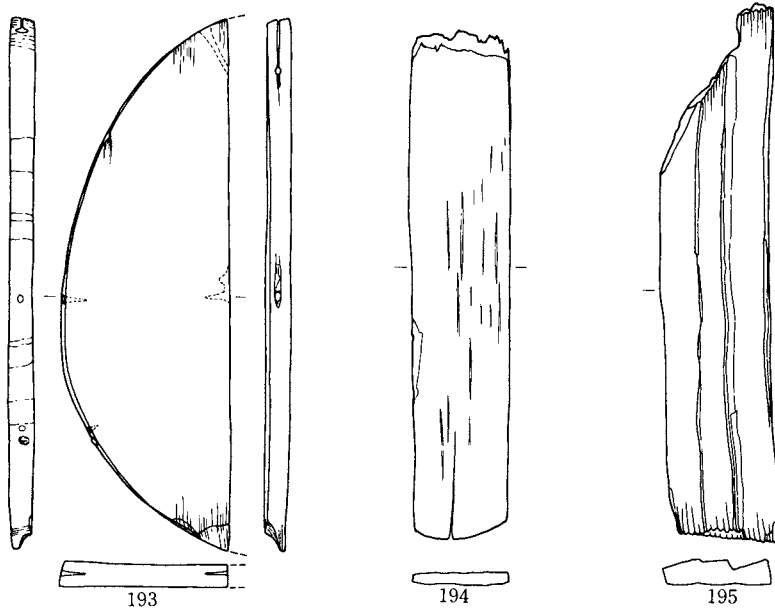
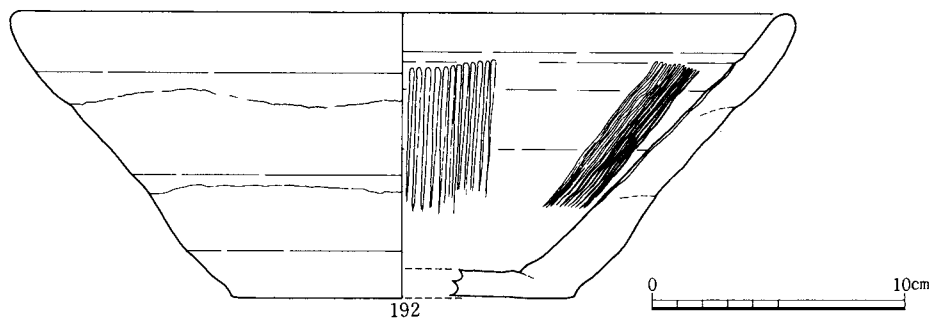
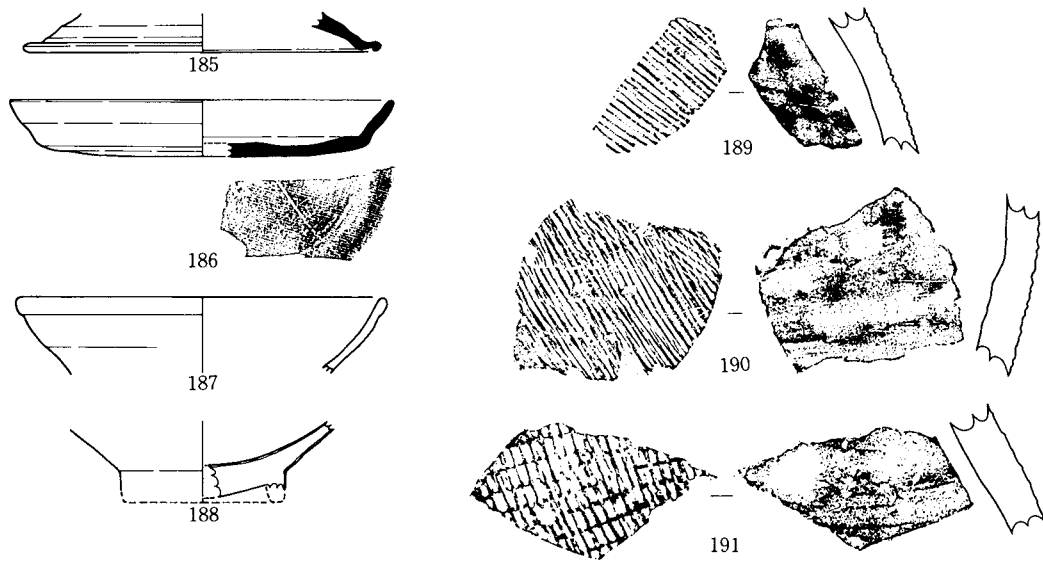
口縁部に油煙痕がわずかに付着している。183は復元口径約31cmの越前焼の甕。口縁部は若干肥厚する。外面に灰緑色の釉がかかり、内面は茶褐色である。184は越前焼の播鉢の底部。底径約18cmを測り、内面に11条一単位のおろし目がある。土師質土器から15世紀でも後半頃の所産とみたい。

第23号井戸（第130図185～195・第131図196）185・186の須恵器は覆土への混入品であり、平安時代前期（9世紀）のものとみられる。186の杯の外面には×のヘラ描きがある。187・188は別個体の白磁碗断片。187は口径14.4cmを測り、灰乳色の釉がかかっている。188は白灰色の胎土に淡いオリブ色の釉がかけられ、見込みには細かいハケによる施文がある。189・190は珠洲焼甕の体部小片。外面に平行叩きがある。191は第20号井戸出土土器の171～173でみたと同じ格子目の叩きをもつ小片。外に0.5×1cmの長方形からなる叩きを行い。内面はヨコナデをする。胎土は暗灰色をし、白色の砂粒を若干含む。192は越前焼の播鉢。口径30.4cm、器高11.3cm、底径11.3cmを測る。口縁部は丸くおさめ、内面には12条一単位のおろし目が間を置いて配されている。胎土は淡い黄褐色をして多くの砂粒を含んでいる。193は曲物の底板断片。径24cm前後に復元される。厚さ1cmの柁目板を用いており、側板を止める目釘穴が4個、間隔を置いて認められる。194は現存長20.1cm、厚さ0.5cmの割り板断片。一方の端を丸く削っている。195は長さ21.3cmの割り板。一方の端をノミを用いて斜めに切断している。196は凝灰岩の石皿。1/2強を失っているが、径約33cmに復元される。高さ12.5cmを測り、側面に1cm前後の石ノミ痕を残す。片面に放射状のおろし目が刻まれ、もう一方は中心の軸穴に向かってえぐられている。越前の播鉢などからみて、16世紀前半の年代観を与えておきたい。

第24号井戸（第131図197～200）197は外面が縦方向の細かいハケ、内面に横方向の同種のハケ調整を行う甕の体部断片。胎土は灰色をし、若干の砂粒を含む。加賀焼の古い段階に置かれているものである。198・199は先にも説明を加えた特徴的な格子状叩きをもつ。内面はヨコナデ調整が行われ、これまでにみた胎土と同じ暗灰色の色調を呈する。200は珠洲焼播鉢の底部。内面に荒いおろし目がある。胎土は灰色を示し、粗砂を若干含んでいる。

第26号井戸（第132図201・202）201は加賀焼播鉢断片。内面に荒いタッチのおろし目があり、外面はヘラで削る。胎土は杯白色で器表は淡い黄橙色している。1mm前後の粗砂を多く含む。202は曲物の柄杓。径14.2～15cmの曲物に径13～13.8cmの底板をはめ込んでいる。曲物は高さ9.9cmを測り、厚さ3mmの薄板の内面に線刻を入れ、曲げて桜の樹皮でとめている。側板に6×7mmの穴を穿ち、細い柄を取り付けていたが、柄は失われていた。加賀焼の播鉢は14世紀の前半頃に位置付けられるものであろう。

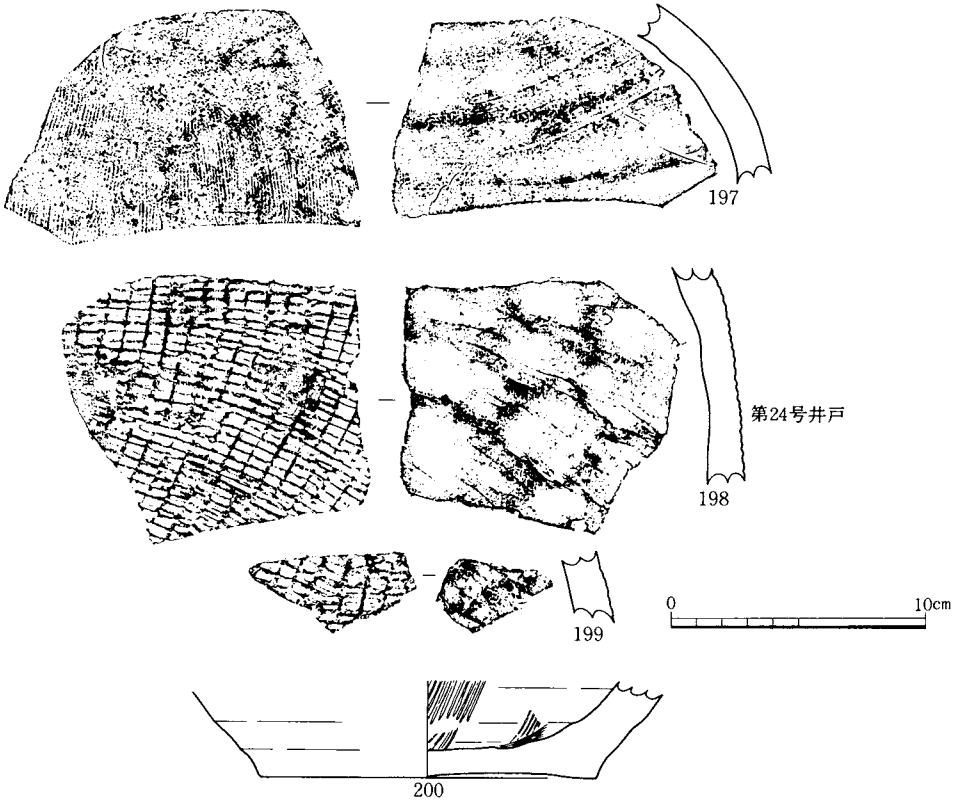
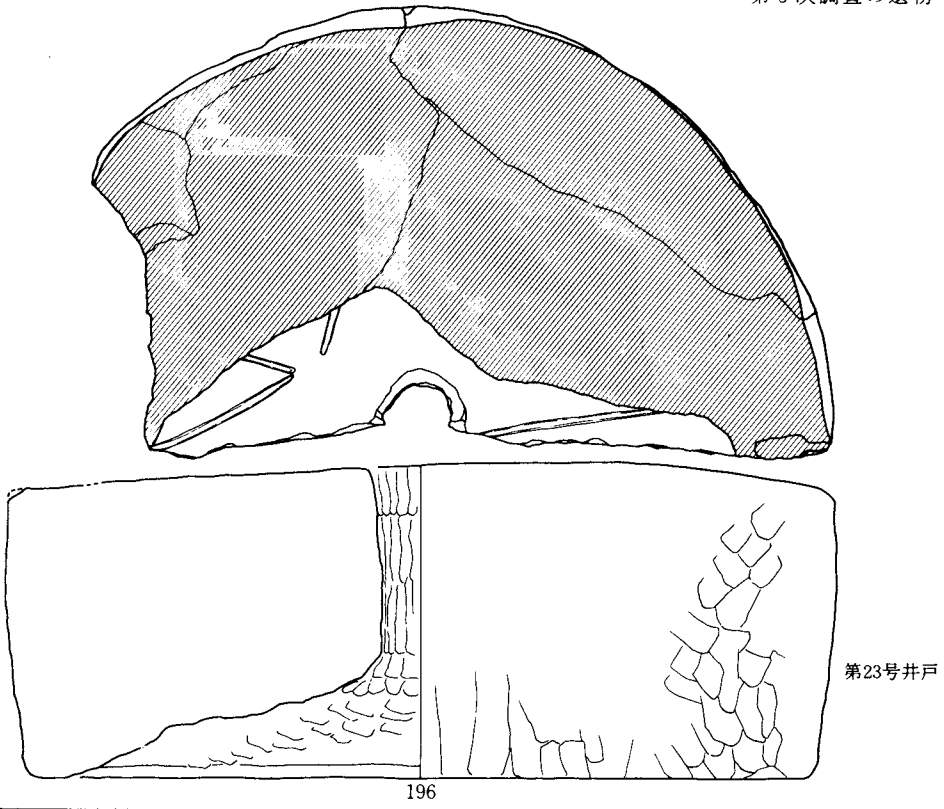
第28号井戸（第132図203～209）203は口径8.7cm、器高2cm、底径4.5cmの土師質小皿。底部は明瞭で口縁部はゆるく立ち上がる。胎土は淡い橙褐色を呈し、砂粒をわずかに含む。12世紀後半から13世紀の前半までに位置付けられよう。204は箸とみられるが両端部を欠いている。現存長で22.3cm径5mm前後で、断面は六角形をしている。205は2cm×1.8cmの角材の一方の端を斜めに切って削ったものである。207も一方の端を斜に削っている。206は割り板の断片。208・209は割り板材の端を削って杭状に加工している。



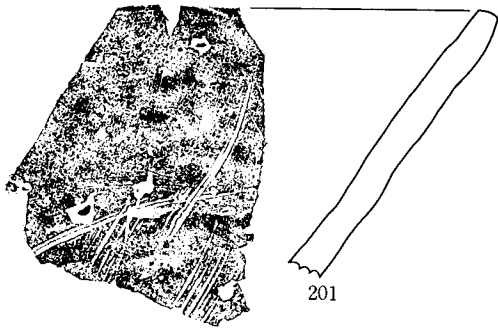
第23号井戸

第130図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (13)

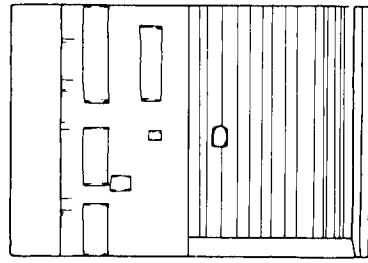




第131図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (14)

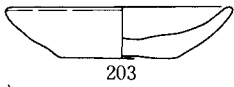


201

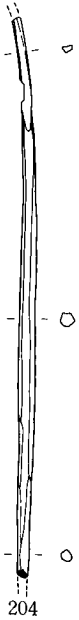


202

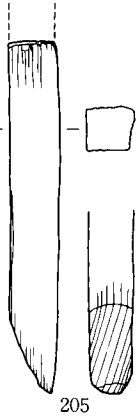
第26号井戸



203



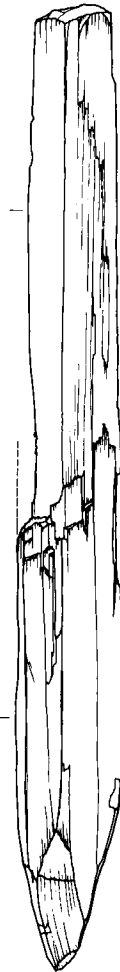
204



205



208

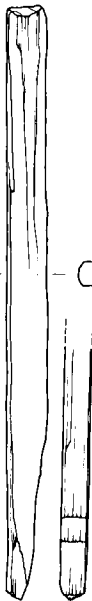


209

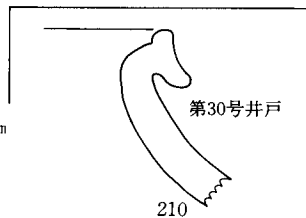
第28号井戸



206



207



210

第30号井戸



211

第32号井戸

第132図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (15)

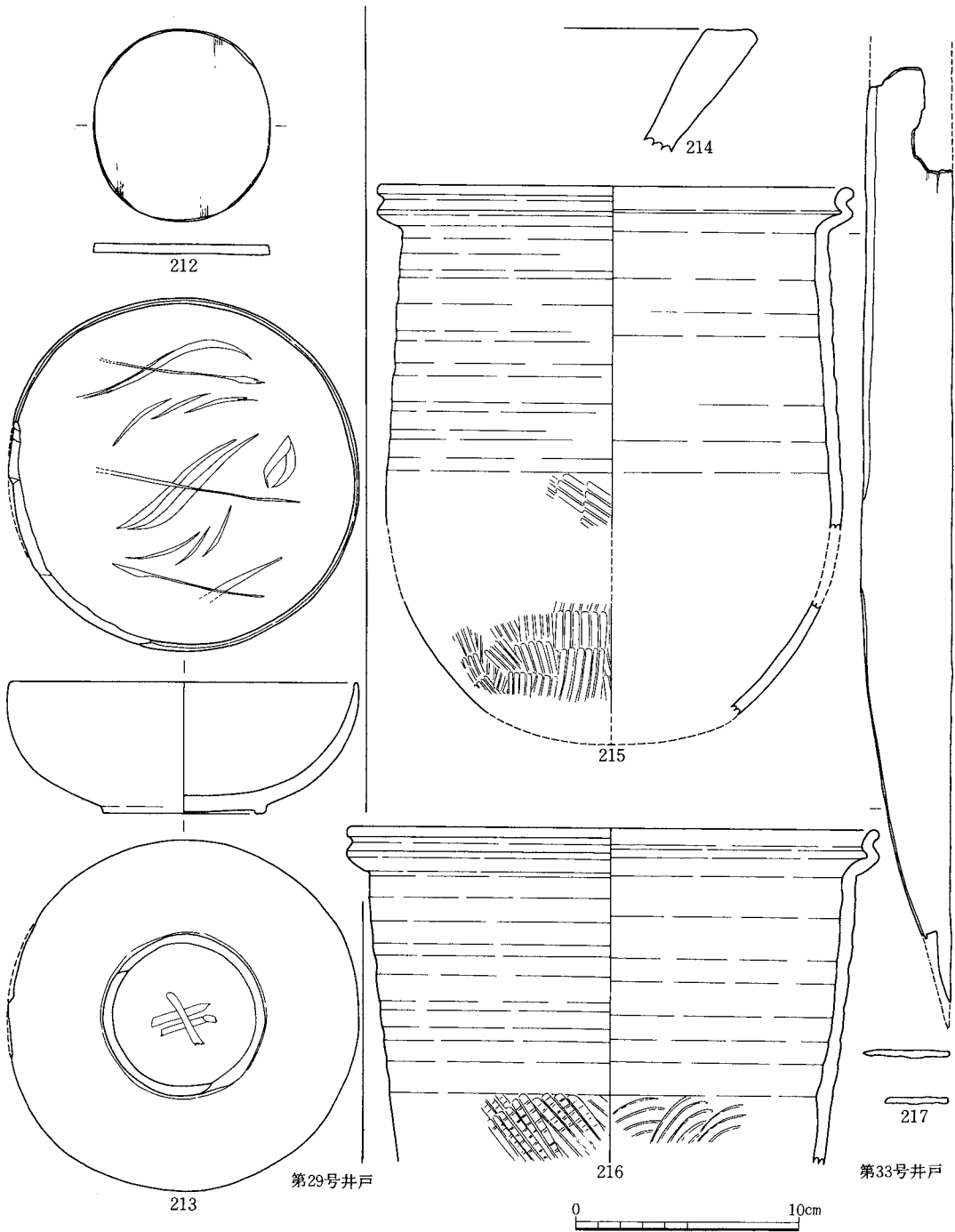
第30号井戸（第132図210）加賀焼甕の断片1点のみを図示した。口縁部内外のナデが強く、口縁部および外面に灰釉がかかっている。

第31号井戸（第132図211）小形の土師質土錘1点のみを図示した。長さ3.5cm、幅1.8cmで径6mmの穴がある。全体の約半分は欠失している。

第29号井戸（第133図212・213）212は曲物柄杓の底板。出土時にはつぶれた側板も存在したのであるが、破損して図化し得ない。底板は径7.8～8.5cm、厚さ4mmを測る。213の漆器椀は口縁の一部を失うが、ほぼ完存する。口径15.4cm、器高5.8cm、底径7.2cmで2mmの低い高台が付く。全面に黒漆をかけ、見込みの部分に鮮やかな朱漆で幾何学的な文様を描く。文様は中央に細長いキの字状文様を描き、その上下に間隔をあけて細長い×印状の文様を置く。更にその空間を3個ずつの短い弧線で埋め、キの字状の右手に△形の弧線を入れている。また、高台の中央にも、やはり朱漆でキの字状の施文を描いている。

第33号井戸（第133図214～217）214は覆土の浅い所から出土した越前焼鉢の口縁部。胎土は暗い灰褐色をしている。215・216は曲物内の覆土中から出土した土師器の甕。215は口径21cmを測る。口縁は屈曲して折れている。体部上半はヨコナデ、体部下半は叩き目がある。胎土は淡い灰褐色をして、細かい砂粒を多く含む。焼成は良い。216もほぼ同形の甕で、口径23.6cmを測る。胎土も良く似ている。この2点の甕は平安時代後期（11世紀前半）に位置付けられ、井戸の築造年代を示すものとみられる。217は現存長41.5cm、幅3.7cm、厚さ4mmの板断片で、割り木の跡を残している。側面の一部を削り、端をゆるやかな弧状に削って尖らしている。

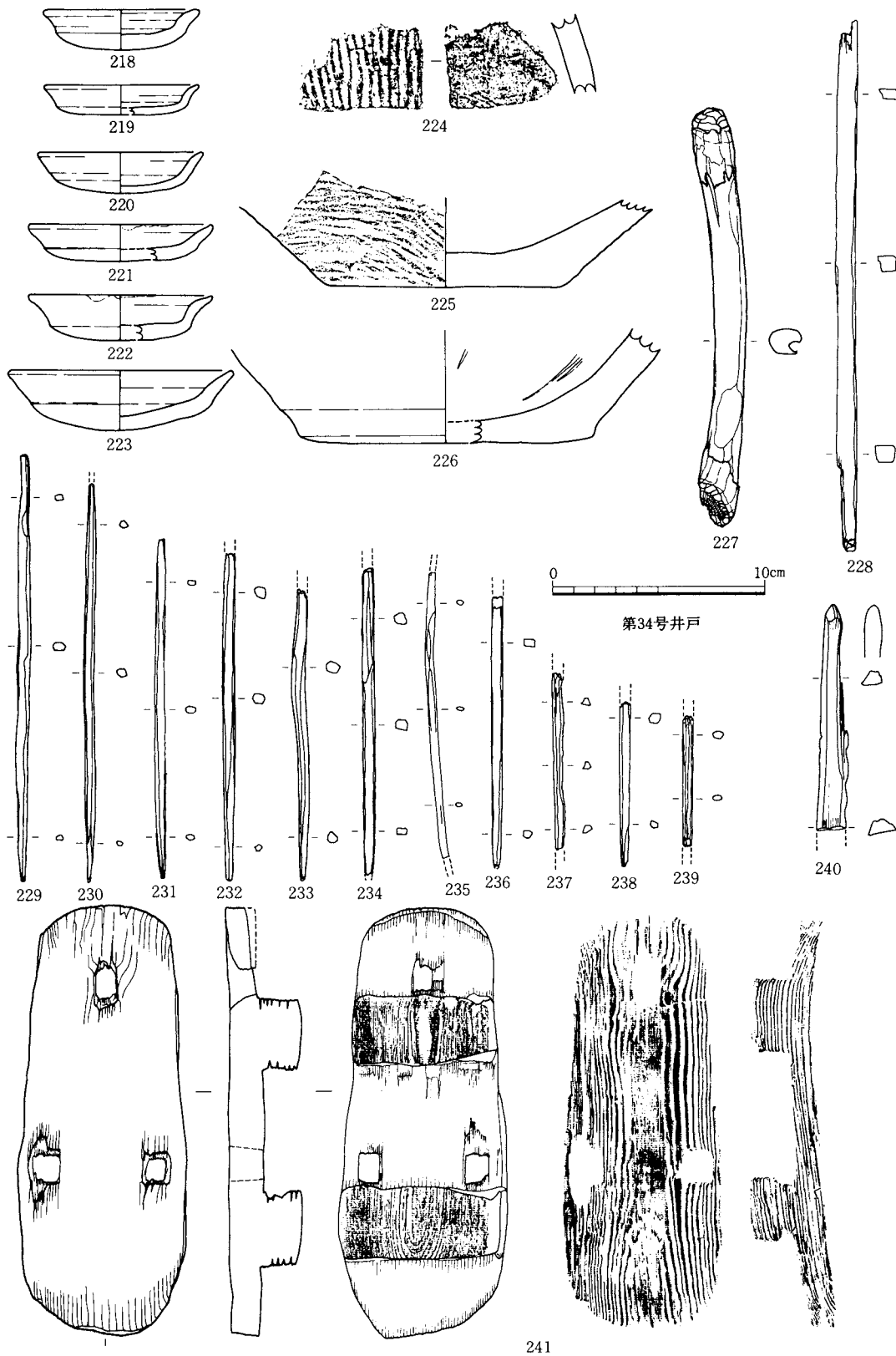
第34号井戸（第134図218～241）218～223は土師質の小皿。口径によって7cm代の218～220、8cm代の221・222、10cm代の223に分けられるが、形態的には底部からくびれて立ち上がり、口縁が外反するタイプとそれに比べて底面が大きく、口縁が斜め上方に伸びるタイプに分けることもできる。いずれも口縁部はヨコナデし、底部は押さえてなでている。218は器肉が厚く、内外面のくびれも強い。口縁部に油煙痕があり、灯明皿に使われたものである。219は器高が14cmと小さく浅い。胎土は淡い褐色を示し、軟質である。221・222は底からくびれて立ち上がる口縁の端部がわずかに内湾気味に凹んでいる。2点とも口縁に油煙痕がある。223は口径10.4cm、器高2.8cmを測って他の小皿よりは一まわり大きい。胎土は220～222などと類似し、淡い褐色を呈する。以上の土師質小皿は、主としてその形態的特徴から15世紀前半に位置付けられるものであろう。224は外面に平行叩きをもつ体部小片。須恵器の可能性もある。外面は淡い茶褐色、内面が灰褐色をしている。225は珠洲焼壺の底部。外面に平行叩きがある。226は珠洲焼播鉢の底部。胎土は灰色から暗い灰褐色をして、粗い砂を少量含んでいる。内面におろし目があるが、使用によりすり減っている。227は長さ19.8cmの棒。枝を用いた付け木とみられ、両端が焦げている。240も付け木とみられ、割り木棒の先が焦げている。228は割り木角棒の断片である。229～239の箸の中でほぼ完存するものは229～231の3点到過ぎない。最長の20cmの229と最小の16cmの231があげられるが、その主流となるのは断片の長さから考えても230のように18cm前後となるのが多いようである。太さも径5mm前後で、断面形が五～六角形となることも他の箸と同様である。241は完存する下駄。長さ20.4cm、幅7.8cm、厚さ1.6cmの台に幅3.5cm、高さ2cm前後の歯が削り出



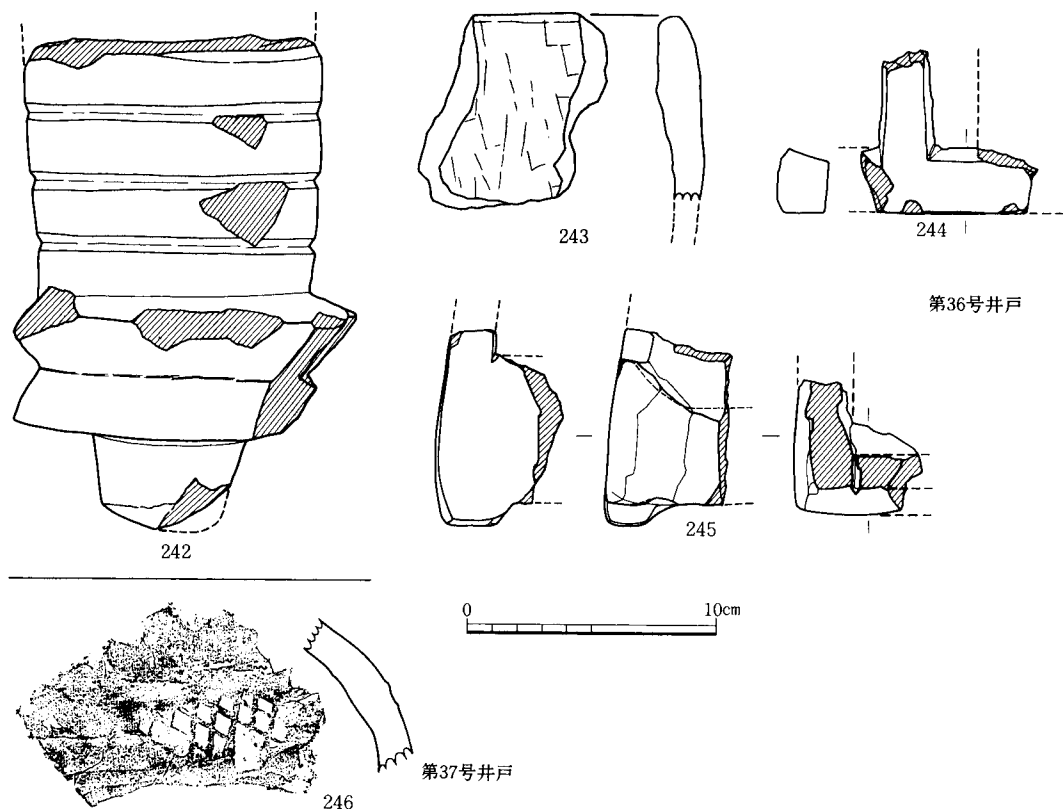
第29号井戸

第33号井戸

第133図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (16)



第134図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (17)



第135図 白江梯川遺跡第3次井戸出土遺物 (18)

されている。製作時のノミの痕は歯の付け根に一部見られるだけで、他は平滑に仕上げられている。鼻緒を止める3個の壺穴は約 $1.8 \times 1$  cmの方形をなし、垂直に穿けられている。歯は使用により若干すり減っている。

**第36号井戸** (第135図242~245) 本井戸の覆土からは若干の土師質土器が出土したが図示し得ない。その結果、図示し得たのは4点の石造遺物の断片である。242は宝篋印塔の相輪の一部で頂部を欠く。現在高19.4cm、九輪の高さ10cm、九輪の径11.8cm、請花の高さ5.8cm、請花の端部推定径16cm、ほぞの長さ4.4cmを測る。九輪・請花ともに簡略化されており、九輪は幅6~8mmの浅いV字の線刻で表現され、受花もV字形にえぐられている。243は凝灰岩製の石製鉢の断片。外面はきれいに整形されているが、内面に幅約1cmの石ノミ痕を留める。244と245はバンドコの断片。いずれも凝灰岩を加工して造られ、244は窓、245は底部の断片である。

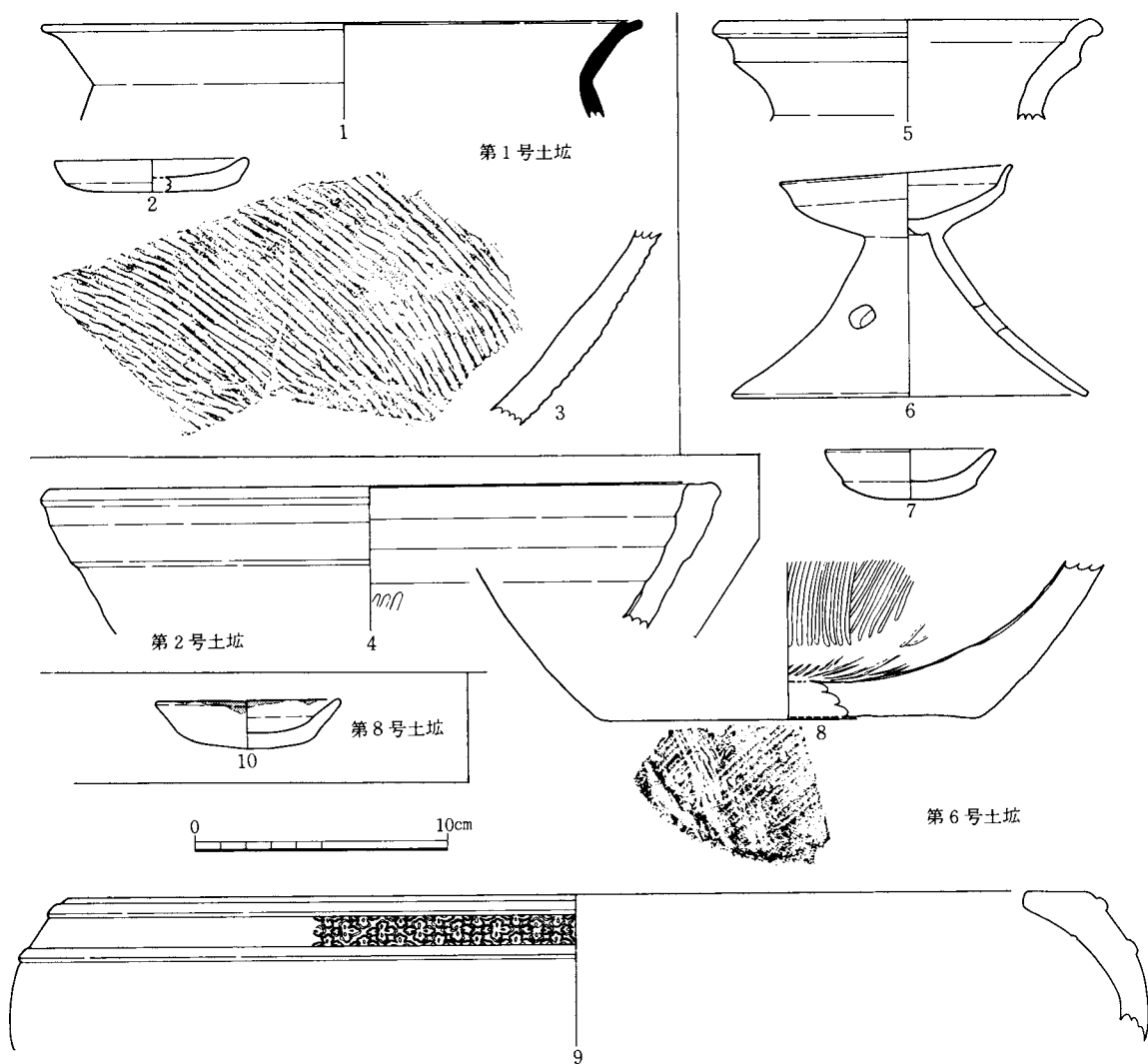
**第37号井戸** (第135図246) 越前焼甕の断片で格子目文のスタンプが施文されている。胎土に粗砂を含む。

土坑出土の遺物

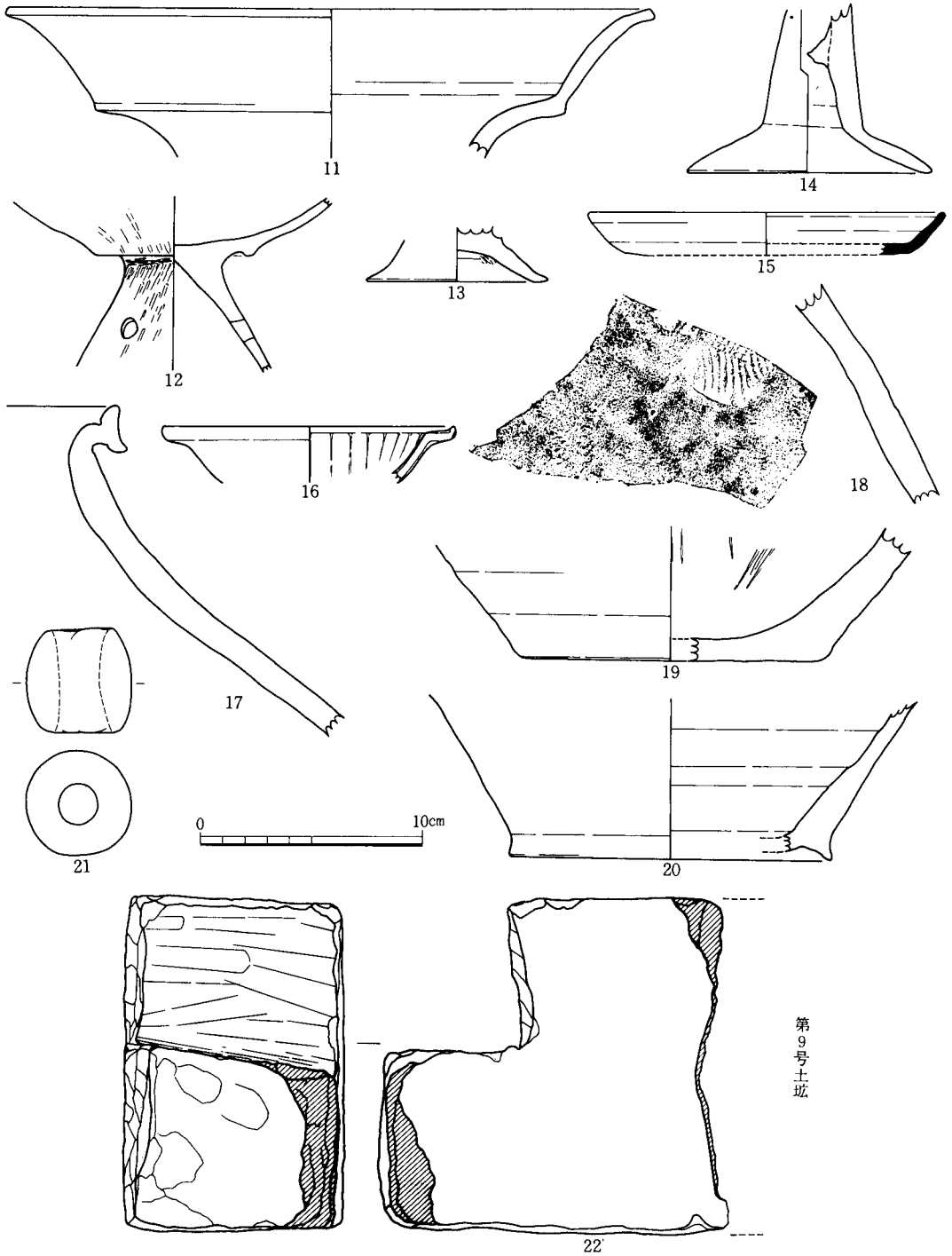
第1号土坑（第136図1～3）1は須恵器の壺。口径23.8cmの広口壺である。胎土中に粗砂を多く含む。2は口径7.6cm、器高1.3cmの土師質小皿。口縁部は厚く底部から立ち上がる。淡褐色を呈し焼成は良い。3は珠洲焼甕の体部断片。外面に斜行の叩き目がある。1は混入とみられ、2および3から本土坑の年代は13世紀を考慮しておきたい。

第2号土坑（第136図4）口径26.8cmの播鉢断片。灰色の色調を呈し、口縁部は肥厚している。太いおろし目がわずかにみられる。外面の一部に黒色の付着物（漆状）がある。越前の播鉢と似るところもあるがはっきりしない。

第6号土坑（第136図5～9）5は越前焼の壺口縁部。口径14.4cmを測る。外面は灰色をするが内面に自然釉があって灰褐色となる。胎土中に大粒の砂粒を含む。6は下層包含層の古式土師器が覆土中に混中したものである。器台B類に含まれる。7は口径6.6cm、器高2.1cmの土師質小

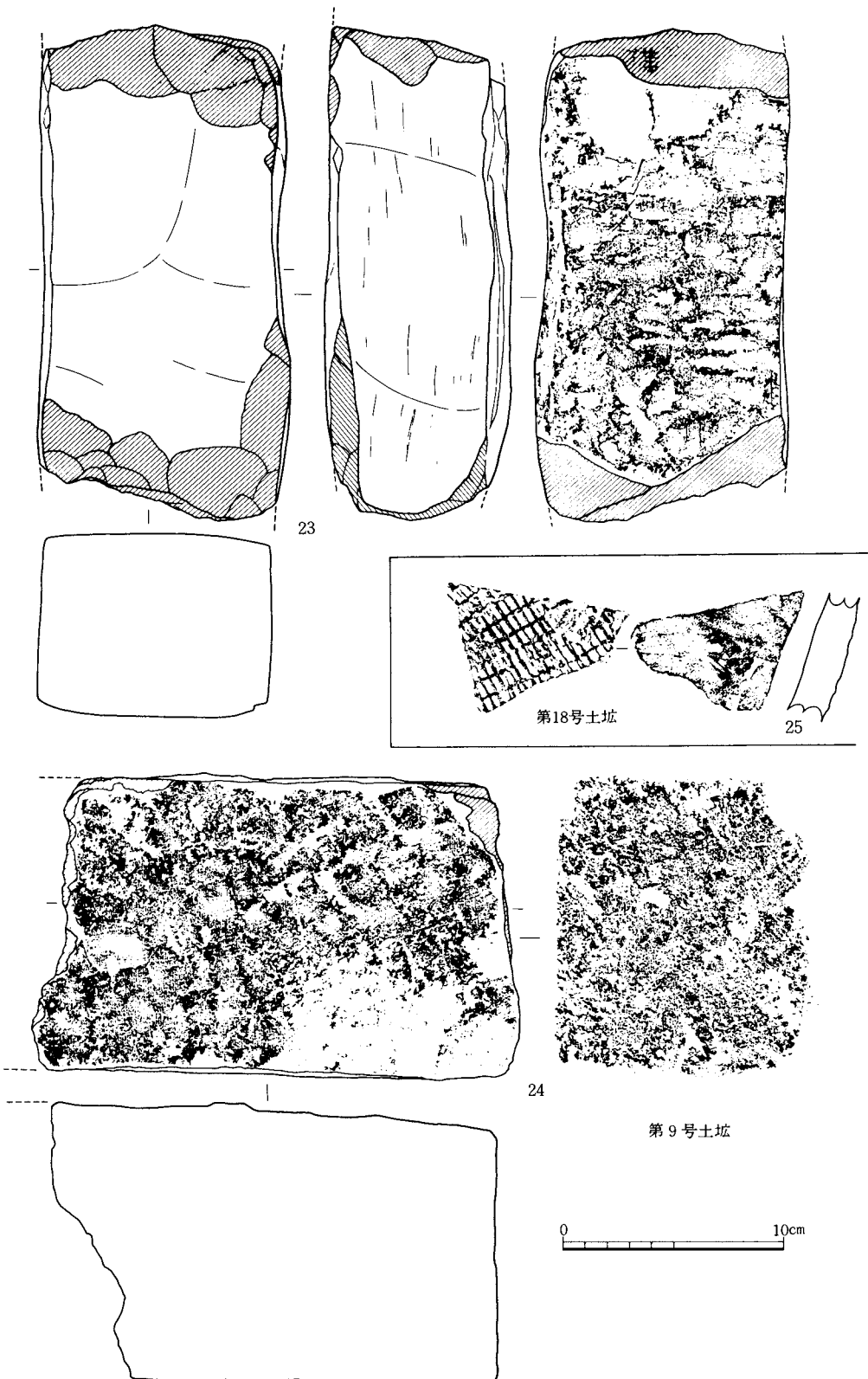


第136図 白江梯川遺跡第3次土坑出土遺物 (1)



第137图 白江梯川遺跡第3次土坛出土遺物 (2)





第138図 白江梯川遺跡第3次土埴出土遺物 (3)

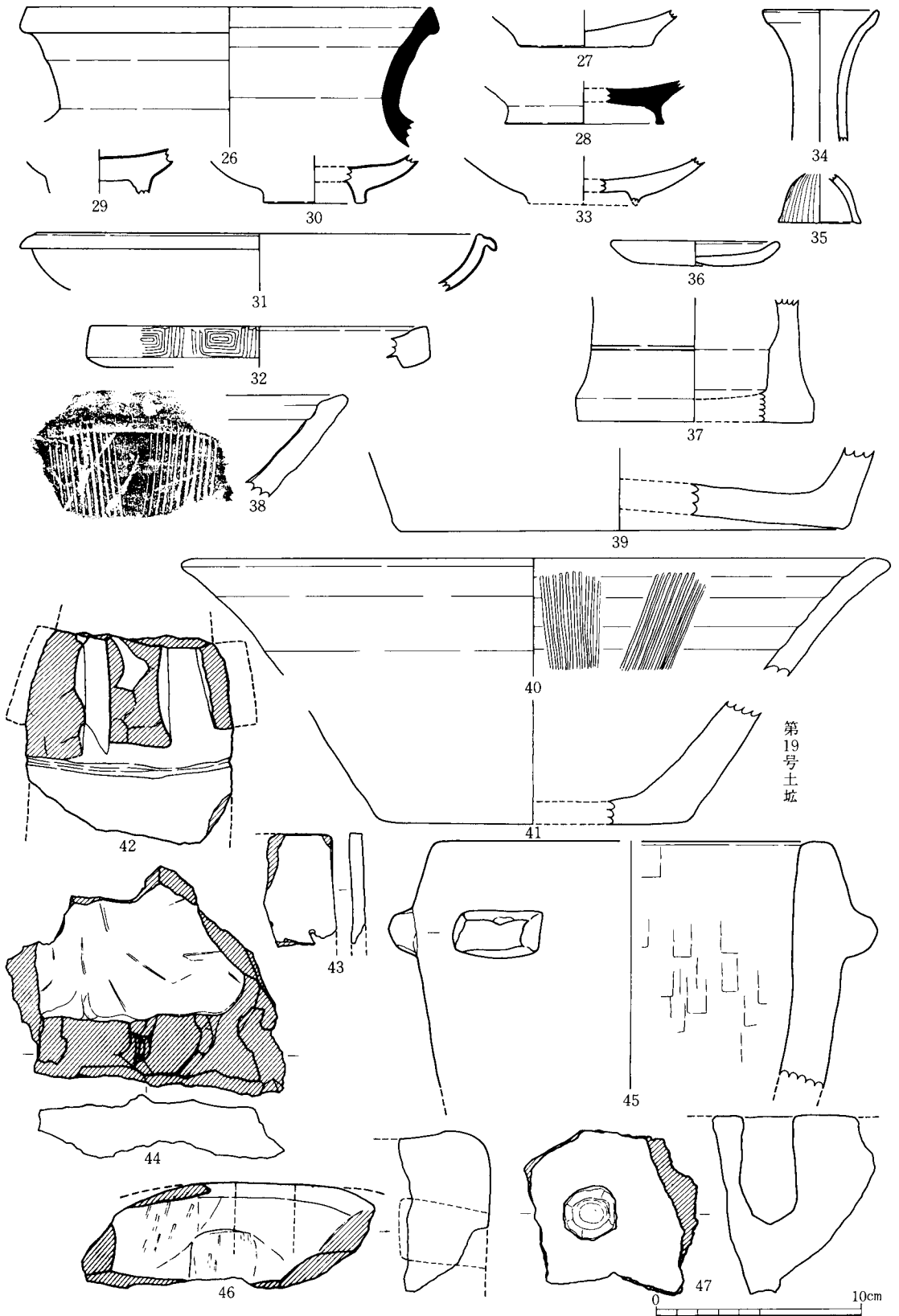
皿。底は丸味をもち、底部から体部にかけてくびれる。淡褐色をして焼成は良い。8は珠洲焼の播鉢底部、淡灰色の胎土中に大粒の砂粒を若干含む。内面に5条1単位のおろし目があるが、使用によって滑らかになっている。底外面に板の痕跡を残しており、製作時に板の上に置かれたことがわかる。9は瓦器の火鉢断片。復元口径35.6cmを測る。灰褐色で胎土は良いが軟質で焼成は甘い。口縁部は水平で5mmばかり下に幅1.3cmの文様帯とそれを囲む隆帯があり、橋のスタンプによる刻文が押されている。5・7・8などから15世紀前半頃の遺物と考えられ、本土坩もその時期の所産とみられる。

第8号土坩（第136図10）口径7.2cm、器高1.9cmの土師質の小皿1点を図示した。丸味をもち、外面はわずかにくびれる。淡褐色を呈し焼成は良い。15世紀前半の所産であろう。

第9号土坩（第137図11～22・138図23・24）11～14は下層包含層からの古式土師器。11は平安時代の須恵器である。いずれも土坩覆土への混入とみられる。11は口径28.6cmの壺。G類に含まれるが剥落が著しく調整等は不明である。12は高杯の断片。杯部は大きく開き、脚部もラップ状に広がる。外面はへう磨きがなされ胎土も良い。漆町遺跡での高杯F類に含まれよう。14は高杯の脚部。脚筒部から脚が外反する。高杯C類に含まれる。11は口径15.6cm、器高1.9cmの浅い杯。胎土中に砂粒を含み、戸津産の須恵器であろう。16は青磁の小皿。口縁端部は小さな有段状となる。口径13cmを測り、緑灰色の釉がかかっている。内面には輪花があり胎土は精良である。17は加賀焼の甕断片。推定口径約65cmの大型甕となる。胎土中には砂粒を多く含み、外面には褐色の釉がみられる。漆による接合痕がある。なお第7号井戸から出土した破片が接着することが判明している。18は加賀焼甕の体部断片。表面の肩にあたる部分にスタンプ文がある。内外面ともに灰色を呈し、焼成は良い。19は珠洲焼播鉢の底部。内面は使用により滑らかになっており、わずかにおろし目が残っている。20は越前焼鉢の底部。底面の高台状の突出が特徴的である。黒灰色を呈し、焼成は良い。21は土師質の土錘。径4.6cm、重さ120gを測る。22はL字形の切り込みがある凝灰岩の切り石。1cm前後の幅をもつノミ痕をとどめている。同様の加工石は第1号井戸からも出土している。23・24も直方体の凝灰岩の切り石。ブロック状に加工された表面には、ノミ痕を残している。

第18号土坩（第138図25）格子目叩きのある甕の小片。第20号・24号井戸などから出土している産地不明の製品である。

第19号土坩（第139図26～47）本土坩は北側部分で後世の攪乱を受けていたため、出土した遺物も雑多なものを含んでいる。しかし、特に石造遺物では見るべきものもあるので記しておきたい。26と28は須恵器。28は椀形の杯の底部であり、平安時代後期の戸津窯で焼かれたものである。27は土師器の杯底部。摩耗が著しいが、底面に回転糸切り痕を残す。29は攪乱土層からの出土で近世の志野焼の碗とみられる。胎土は橙褐色で灰白色の釉がかけてある。30は青磁碗の底部。胎土は灰色で緑灰色の釉がかけてある。31は近世の瀬戸の鉢。口径21.5cmを測る。胎土は灰色で緑灰色の釉がかけてある。32も近世の瀬戸の鉢。肥厚した口縁帯の雷文のスタンプがあり、緑色の釉がかけてある。33は瀬戸の小皿。内面に緑灰色の釉がかけてある。34は近世の瀬戸の花瓶。内外面に黒褐色の鉄釉がある。35は合子の蓋とみられ、全面に白色の釉がかけてある。外面に



第139図 白江梯川遺跡第3次土壇出土遺物 (4)

放射状の施文がある。36は口径8.1cm、器高1.2cmの土師質小皿。胎土は淡い橙灰色をしてして砂粒を含む。軟らかく摩耗している。37は瀬戸の瓶底部。外面に2条の弱い沈線があって黄緑色の釉がかかっている。胎土は白灰色で焼成も良い。38は越前焼播鉢の断片。11条一単位のおろし目があり、にぶい赤橙色をしている。39は復元口径21.6cmの越前焼甕の底部。淡褐色で胎土中に多くの粗砂を含む。40は越前の播鉢。口径34cmを測り、口縁部内側に1条の弱い沈線をめぐらす。おろし目は10条一単位で、3.4cmの幅となる。灰色を呈し、胎土中に砂粒を若干含む。41は壺または甕の底部。外面は褐色で胎土は白灰色をしている。底の内面に緑色の灰釉がかかっている。42は宝篋印塔の頭部断片。径10cmで6個の長方形の突起が削り出されている。43は長方形の砥石の断片。現存長5.5cmを測る。44は宝篋印塔台座の断片。45は凝灰岩製の把手付鉢で、復元口径は19.4cmを測る。厚さ2cmを超える器体に長方形の把手が付いている。内面には幅約1cmのノミ痕がある。46は石臼の断片。側面に3cm角の握り棒を差し込む穴がある。47も石臼の断片。上臼の中央にある心棒を入れる穴がみられる。以上、本土壇の遺物は後世の攪乱もあって決して良い資料ではないが、宝篋印塔や石製鉢など中世に逆のぼり得る資料を含んでいるとみておきたい。

### 溝出土の遺物

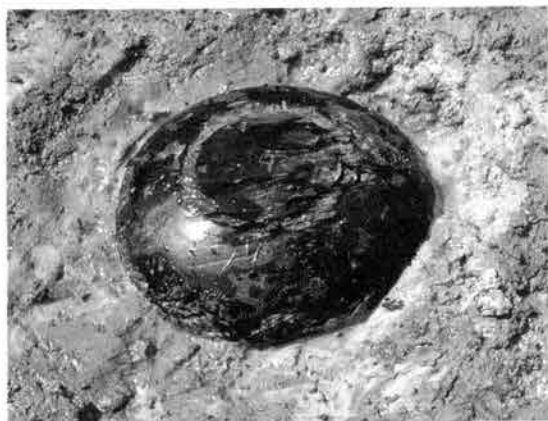
第1号溝（第140図1～12）1は須恵器の有台杯小片。2は青磁碗の底部。高台は高く、底部に粘土を貼り付けた痕跡が割れ口から観察される。内外面に灰オリーブ色の釉がかけられ、胎土は緻密で白灰色をする。見込み部分に花文が描かれているが不鮮明である。3は瀬戸香炉。口縁部と外面に暗茶色の鉄釉がかかる。口径は約11.4cmに復元される。4は瀬戸のおろし皿。内底部にヘラによる格子状のおろし目があり、黄緑色の灰釉がみられる。底部には回転糸切り痕がある。5は瀬戸小形鉢の底部。粘土塊を貼り付けた3個の短い脚が付く。外面を削り、内面をナデて調整し、体部外面には緑灰色の灰釉がかけてある。胎土は白灰色で緻密である。6.7は土師質の小皿。6は底部を丸底風にする。7は口径8.1cm、器高1.8cmの浅い皿で、口縁部に油煙痕がある。胎土は暗褐色を呈する。8は越前焼甕の小片。断面に黒漆が付着している。9・10は越前焼播鉢の口縁部断片。9には9条一単位のおろし目がある。11は越前焼播鉢の底部。10数条で一単位となるおろし目がある。12は珠洲焼播鉢の底部。内面は使用により、すり減っている。第1号溝の造営時期は以上の出土土器から15世紀後半から16世紀前半頃の幅をもってみておきたい。

第2号溝（第140図13～17）13は古墳時代後期の須恵器高杯の小片。14は口径17.8cmの青磁碗で、口縁部の内外面に雷文帯を置く。体部にも文様があるが破片のため不明である。器表に濃い濃緑色の釉をかけている。胎土は精良で灰色をする。14は瀬戸の鉢。復元口径24.4cmを測り、口縁部はラップ状に開いている。体部の上半に淡い黄色の釉をかけ、それ以下は灰褐色の素地となっている。16は白磁の小皿。口径9.6cm、器高2.25cmを測るが、高さ約5mmの透し高台が着いている。体部の全面に乳白色の釉がかけられ、中に灰色釉で描かれた文様がある。目込みには焼成時の目跡がある。17は16とともに近世に下る磁器片とみているが、全面にガラス質の白色釉がある。須恵器と近世の遺物を混入品として除いた14・15が溝の所属時期を示すと考えられ、15世紀前半の溝とみられる。

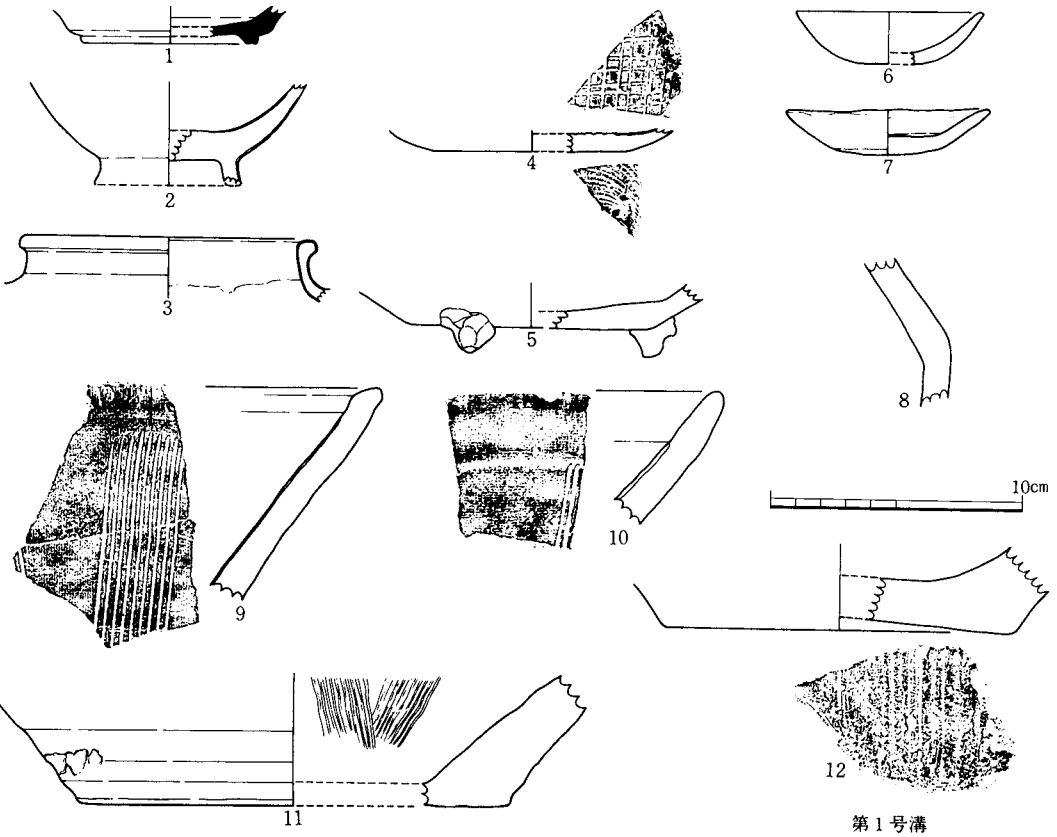
第3号溝（第140図18～20・第141図21）18は瀬戸の天目茶碗。口径8.8cmの小形品で、茶褐色の釉がかけられ、外面では流れている。素地は灰色で、緻密である。19は口径7.6cm、器高1.9cmの土師質小皿。丸底風の底部から口縁がくびれて立ち上がる。淡い白橙色をして軟らかい。20・21は珠洲焼の播鉢。20の口縁部には片口があり、9条程度のおろし目がある。おろし目は使用により磨滅している。胎土は暗灰色をして粗砂を若干含んでいる。21は11条一単位のおろし目があり、胎土は灰色を呈する。第3号溝は調査区の西側中央部、H-3・4区とG-3・4区の境界にまたがって確認された幅20cm、深さ7～10cmの細い溝で、南北方向に約8m分を確認している。出土遺物から14世紀後半代の年代が与えられよう。

第5号溝（第141図22～28）本溝は32・34号井戸と重複するが、ここに図示した遺物はこれらと重複していないG-3区での溝からの出土遺物である。22は須恵器の鉢の底部で灰色の胎土中に多くの砂粒を含んでいる。23は加賀焼？の小壺。灰色を呈し、薄い釉がみられる。24も加賀焼の甕の口縁部小片。灰色の胎土に内面黄緑色の釉がかかっている。加賀でも古い段階の形態をしている。25は瀬戸の灰釉盤。口縁は外に折れ、口径35.7cmを測る。灰白色の素地の体部下半を除く全体に黄緑色の釉がかけられている。破損した断面に漆による接合痕がある。26・27は土師質の小皿。径8.1cmを測る27には口縁部と内面に油煙痕が残っている。28は凝灰岩の加工石断面。一部に幅約2cmの石ノミ痕がある。

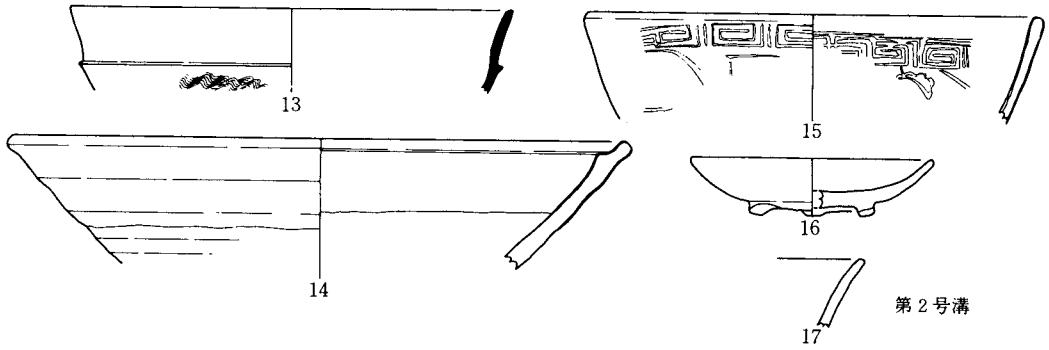
第6号溝（第141図29～34・第142図35～41・第143図42）本遺構は前章で説明したように、調査の結果から溝ではなく大きな凹地であったことが判明したものである。従って本来ならば名称を変更するなどして遺構の性格に合わせて扱うべきものであるが、時間的余裕もなく、また混乱を防ぐ意味からもその作業を行っていないことを断っておく。29は須恵器杯の蓋。口径12.6cmを測り、外面の稜は強い。古墳時代後期の包含層からの混入品である。30～33は土師質の小皿。口縁が底から斜め上方に開く30と、口縁が折れて立ち上がる31・32、更に口縁が外反した33と3タイプの小皿がある。30は口径7.9cm、高さ1.7cmと浅く、外面に油煙の痕跡がある。31・32は軟質で摩耗が著しい。33は口径10.5cm、高さ2.5cmのやや大きい小皿であるが、口縁部を強くヨコナデして外へ広げている。34は珠洲焼の播鉢。口縁に波状の櫛描き文を置き、内面に6条一単位のおろし目がある。胎土中に砂粒を含み暗灰色をする。珠洲焼の第VI期、15世紀後半頃に比定される。35は珠洲焼の鉢底部。底面に静止糸切りの痕を残す。36は越前焼の播鉢断片。口縁端に1条の沈線がみられ、内面は8条一単位のおろし目がある。色調は淡い黄色を示すが、胎土中に大粒の粗砂を多く含んでいる。37も越前の鉢断片。やはり口縁端に1条の沈線をもつ。胎土に多くの砂粒を含む。38は遺構の底近くの暗（黒）灰色粘土から出土した箸。1点のみの出土であるが、現存長



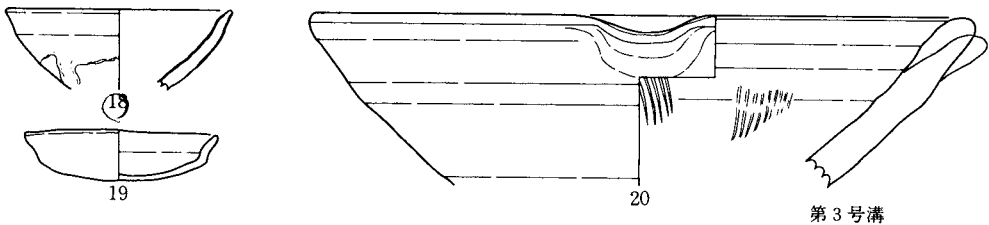
第6号溝 漆器碗出土状況



第1号溝

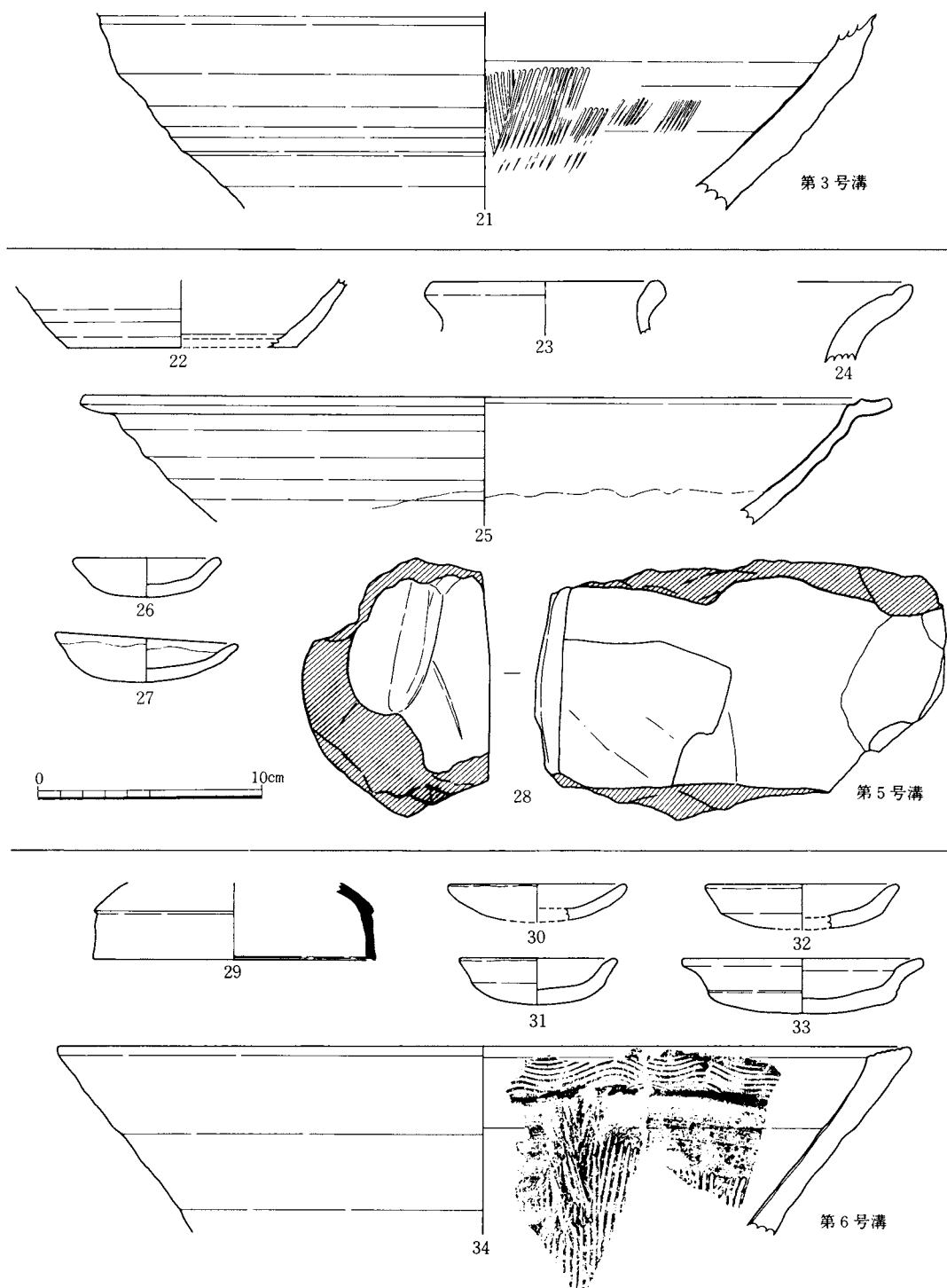


第2号溝

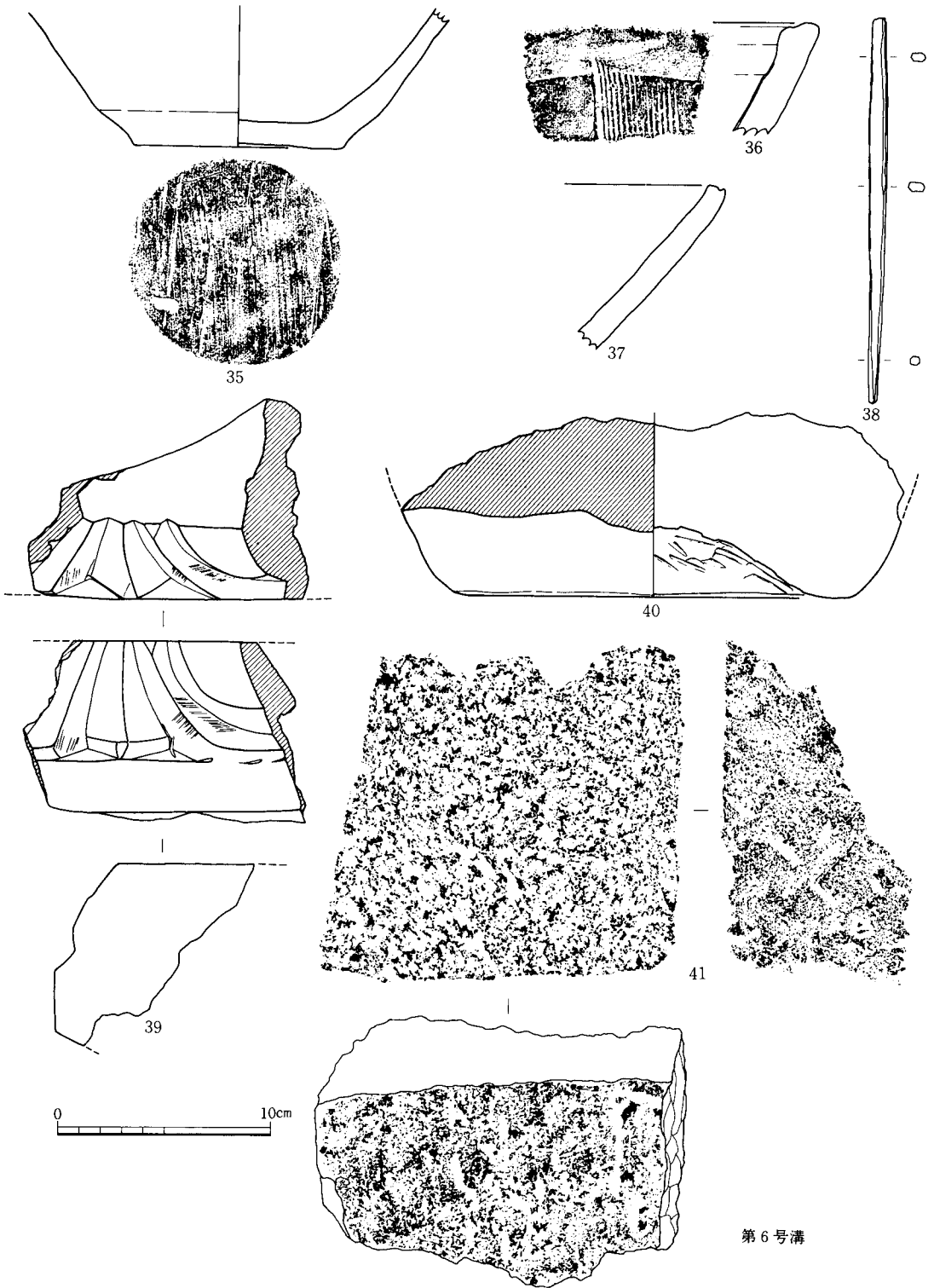


第3号溝

第140図 白江梯川遺跡第3次溝出土遺物 (1)

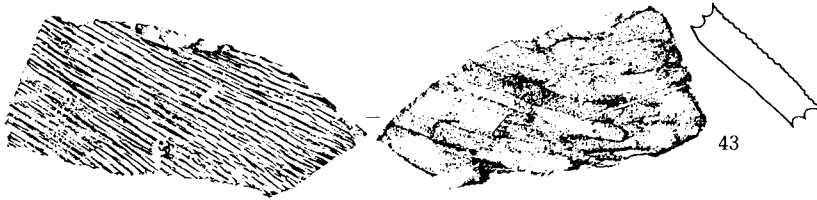
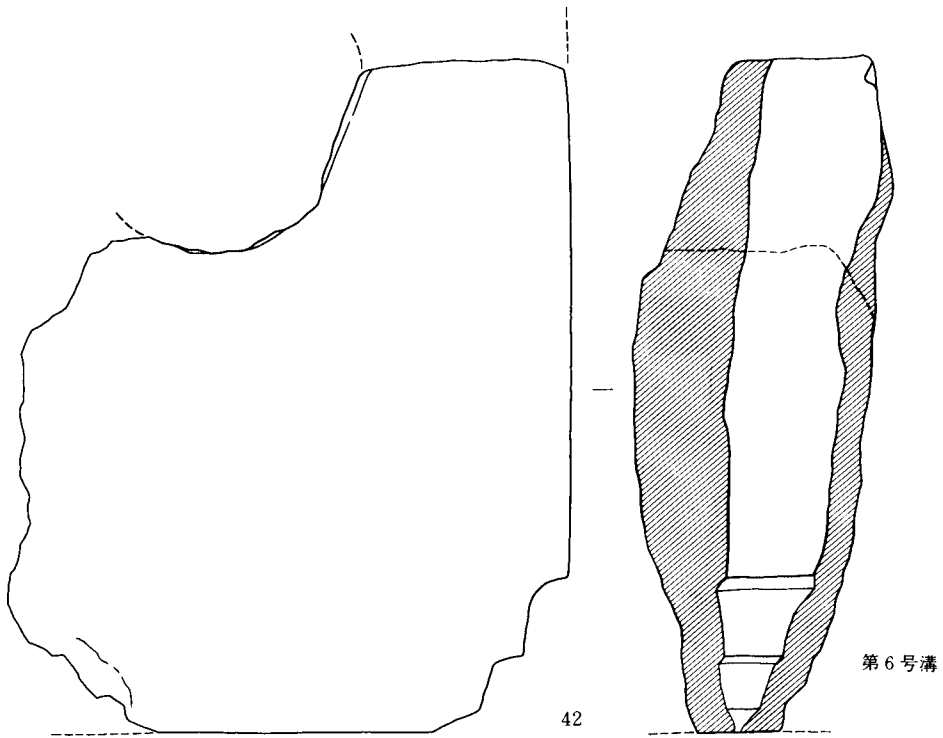


第141図 白江梯川遺跡第3次溝出土遺物 (2)

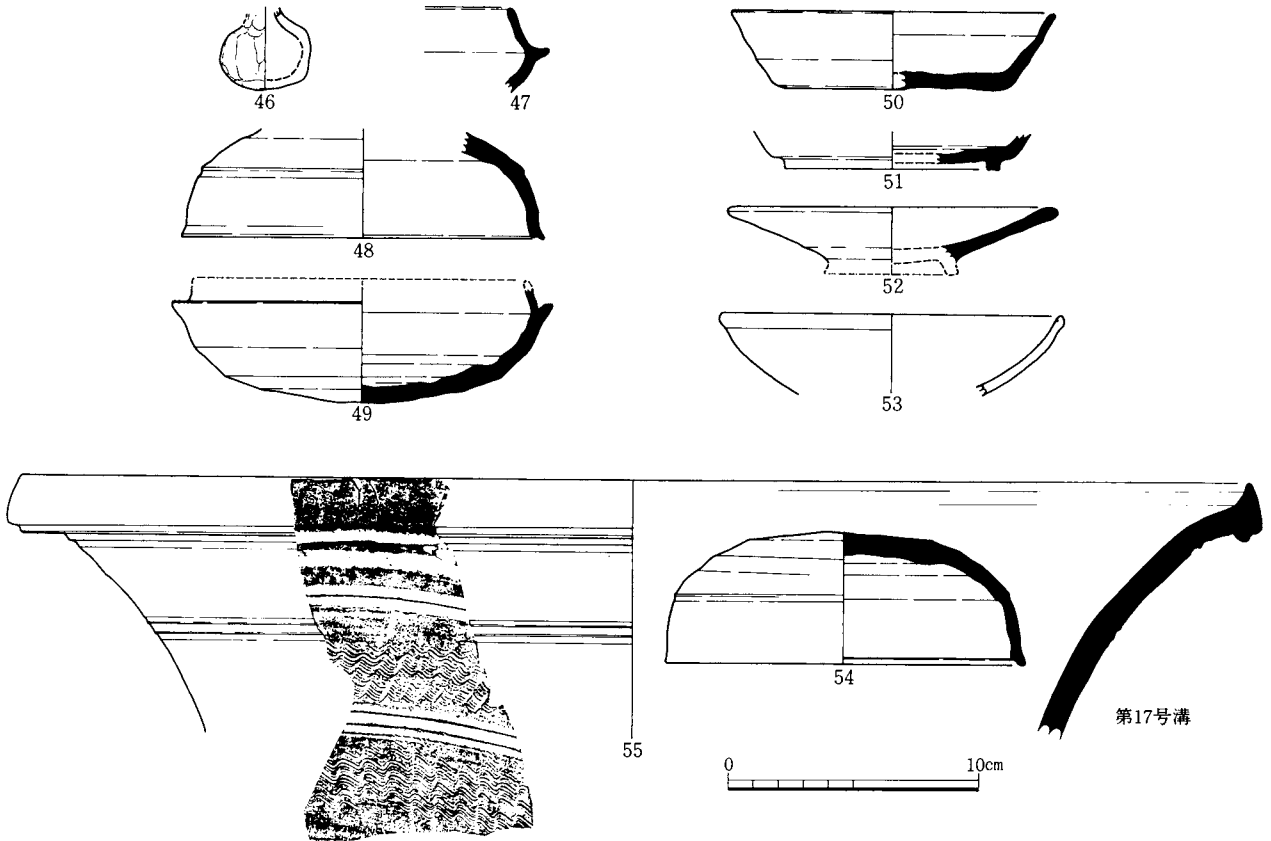


第142図 白江梯川遺跡第3次溝出土遺物 (3)





第143図 白江梯川遺跡第3次溝出土遺物 (4)



第144図 白江梯川遺跡第3次溝出土遺物 (5)

12.6cm、幅7.7mmの扁平な断面形をしている。39は輪花を刻んだ凝灰岩製の台座断片。淡い青灰色の良質な石材を刻んでいる。第2次調査の第9号井戸から出土した台座(第47図15)と同種の石造品とみられる。40は凝灰岩製の五輪塔水輪の断片。41は凝灰岩の加工石断面。二次的な加熱を受けており、もろくなっている。42は宝篋印塔の断片であろうか。中央に11cmばかりの穴が穿たれ、側面には段状の刻みがある。この他、図示できなかったが遺構底面から漆器碗1点が出土した。黒色の漆をかけた生地に朱漆で松の木を3カ所に描き、底面には「上」と記されている。

第8号溝(第143図43~45) 43~45は珠洲焼の壺ないしは甕の同一個体の断片である。焼成が甘いためか灰黄色を示し軟質である。器表は赤味を帯びており、出土時には鮮やかな赤色を示していた。あるいは赤色の顔料の容器に用いられていたものが沈み込んでいるのかも知れない。

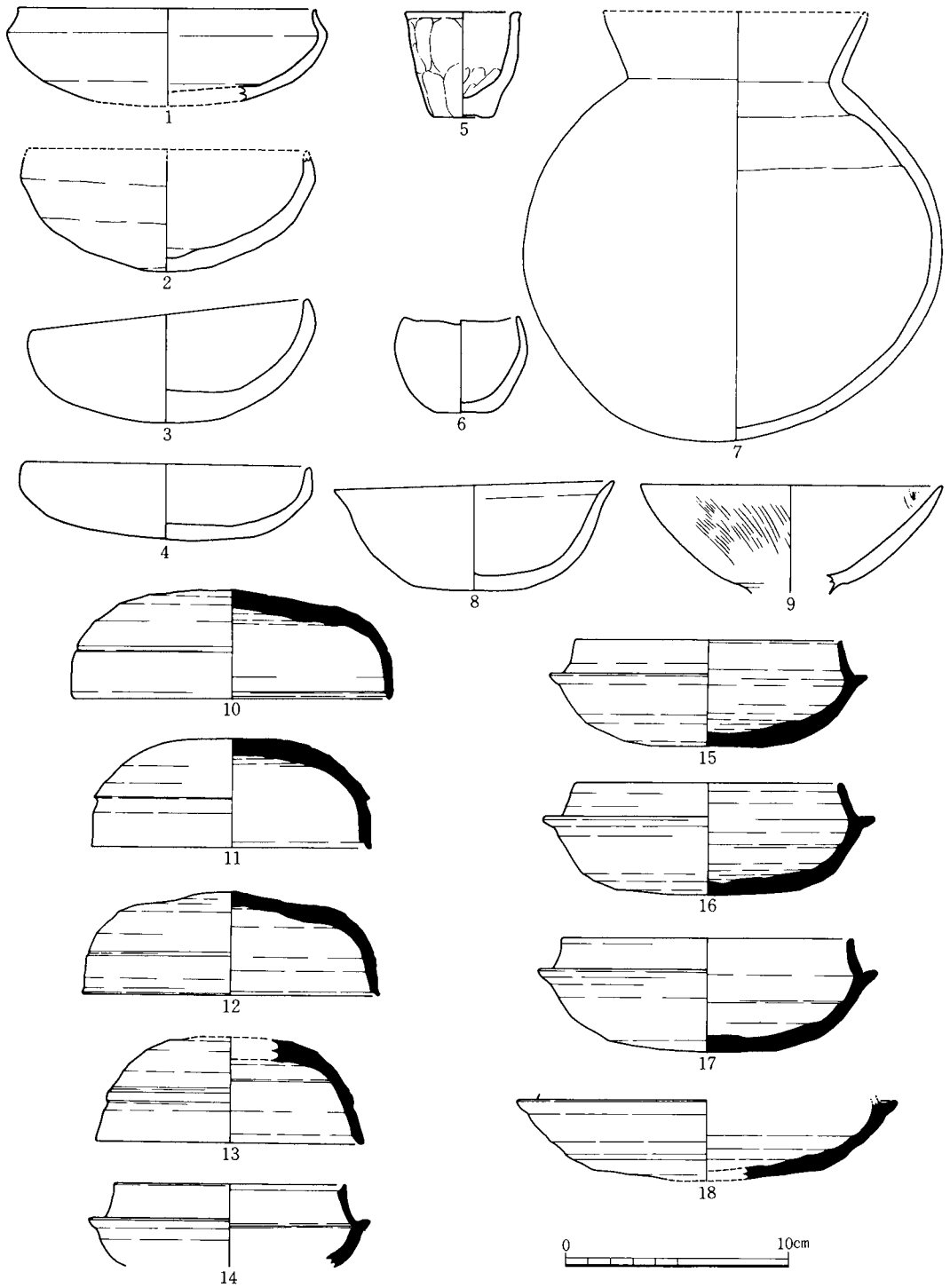
第17号溝(第144図46~55) 本溝はG-11区の北側で検出した溝であるが、その一部を確認したのみで全体像を把握するまでには至らなかったものである。黄色味を帯びた灰色の覆土は、地山である黄褐色粘土との識別が困難であったことによる。幅約1.8m、長さ約7mまで確認している。覆土中からは図示した遺物が混在して出土しており、種々の時代の土器が含まれている。46は小さな袋状の手ずくね土器。指頭による押圧の痕跡が全面にみられる。胎土中には古式土師器にみられるような砂粒を多く含んでいて淡い褐色を呈する。47~49・54は須恵器の杯。口縁部

のごく一部を失っている49や完形品の54がみられる。蓋にみられる稜は弱く、杯部の立ち上がりもやや内側に傾いている。55の須恵器甕もこの須恵器と同じ古墳時代後期（6世紀前半）の所産とみられる。50～52は須恵器の坏。平安時代の後期（10世紀）に該当されよう。53は瀬戸の皿。口径13.3cmを測り、淡灰色の素地に明灰色の釉がかかっている。

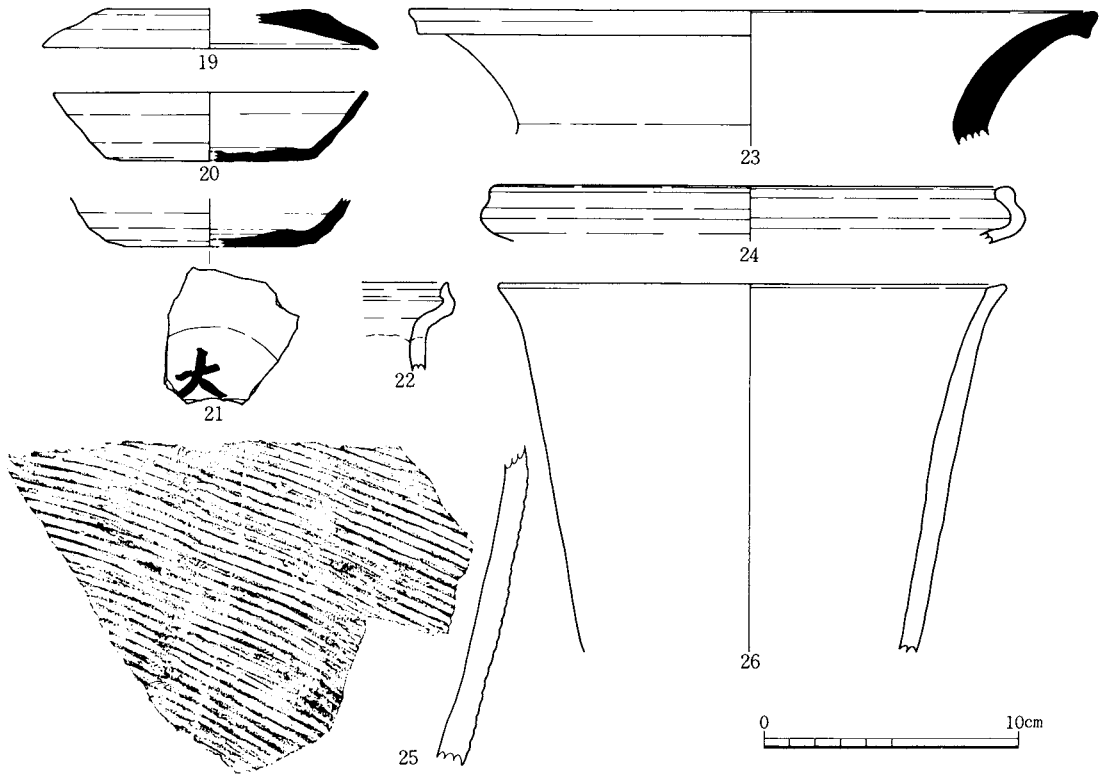
### 第3節 包含層出土の遺物

第145図から第152図に示した遺物は、遺構に伴わない種々な時代の遺物である。古墳時代前期を主とする下層包含層の遺物は第1節で扱ったから、本節では古墳時代以降の主要な遺物について説明を加えたい。1～4・8は土師器の椀。胎土中に荒い砂粒を含むことは少なく、きめの細かい粘土を用いているが、軟らかいものが多く摩耗が著しい。8は内面黒色の椀である。古墳時代後期に含まれる土師器が多いと思われ、10～18に示す須恵器とほぼ同じ時期の遺物であろう。10～18の須恵器坏は蓋の稜がまだ明瞭な11と、稜が退化している10・12・13とそれぞれにセットとなる14と15～18の二種類の形態に分けることができる。11・14は古相を示し、その他の資料は新しい様相を示している。特に11-G・H区の包含層では須恵器の出土が集中しており、付近に遺構等が存在したものと推定される。六世紀前半を中心とした、中村編年のⅠ型式5段階からⅡ型式4段階までの幅をもっている。胎土中には白色ないしは灰白色の砂粒を含むことが多く、南加賀古窯跡群で生産、供給されたものと思われる。第146図は平安時代でも中期から後期を主体とする土器をまとめた。但し25は珠洲焼甕の体部である。21の須恵器杯の底面には「大」の墨書がある。26は土師器の鉢か甕の上半部とみられるが、摩耗が著しい。

第148図45は青磁の皿。口径12.2cm、器高7.2cmを測る。胎土は白灰色で緑灰色の釉がかかっている。見込みに印花文らしき刻文があるがはっきりしない。46の青磁碗の断片で、割れ口に漆が付着している。白灰色の素地に淡緑灰色の釉がかかっており、体部外面に蓮華紋と見込みに花の様な印刻文がある。47も青磁皿の底部断片。見込みに施紋があるが図化できない。高台内側の底面に墨痕がある。49の青磁碗は白灰色の精良な胎土に明るい緑灰色の施釉がされている。見込みに花の刻文がある。51は青磁の皿断片。素地は灰色でガラス質の淡緑色の釉薬がかかっている。見込みに施文があり、底部は回転糸切りとみられる。53の青磁碗の体部には細い蓮華文がある。54は復元口径10.8cmの青磁碗。口縁部に1条の沈線をめぐらせ、灰オリーブ色の釉をかけている。55は青磁香炉もしくは輪台の断片。径6.8cmを測り、頂部は波状となっている。56・57は白磁の碗。56は内面に灰白色の釉がみられ、外面は削っている。高台も削り出している。57は高台の端を除く全面に白色の釉がかかっている。58は瀬戸の灰釉碗。淡白褐色の胎土に黄緑灰色の釉がかかっている。59～61は瀬戸の鉄釉碗。黒茶色の釉がかけられているが、61では二次的な加熱のため器表が荒れている。62は瀬戸灰釉のおろし皿小片。淡い緑灰色の釉があり、片口の付いた小皿であったとみられる。63は瀬戸鉄釉の小皿。64は志野の小皿底部。灰白色の釉がある。65は瀬戸の灰釉瓶底部。66～70は土師質の小皿。口径7cm前後で煙痕の付着するものが多い。71～73は土師質の中皿。72で口径12.6cmを測る。74は土師質の獣足断片。指の表現は弱く、足の幅は2.8cm



第145图 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (1)



第146図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (2)



開通元寶



聖宋元寶



熙寧元寶



熙寧元寶



紹聖元寶



元符通寶



光順通寶



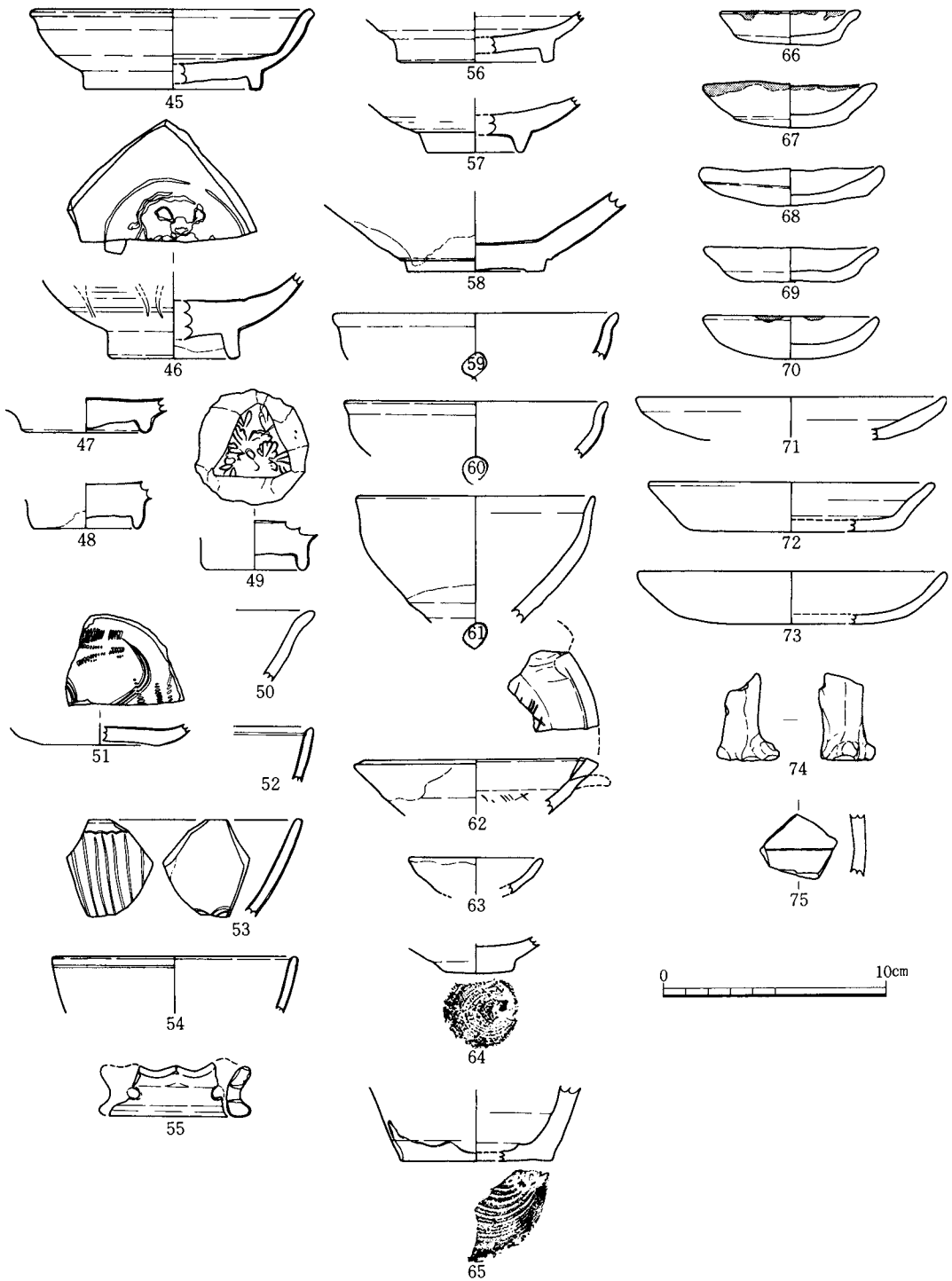
寬永通寶(古)



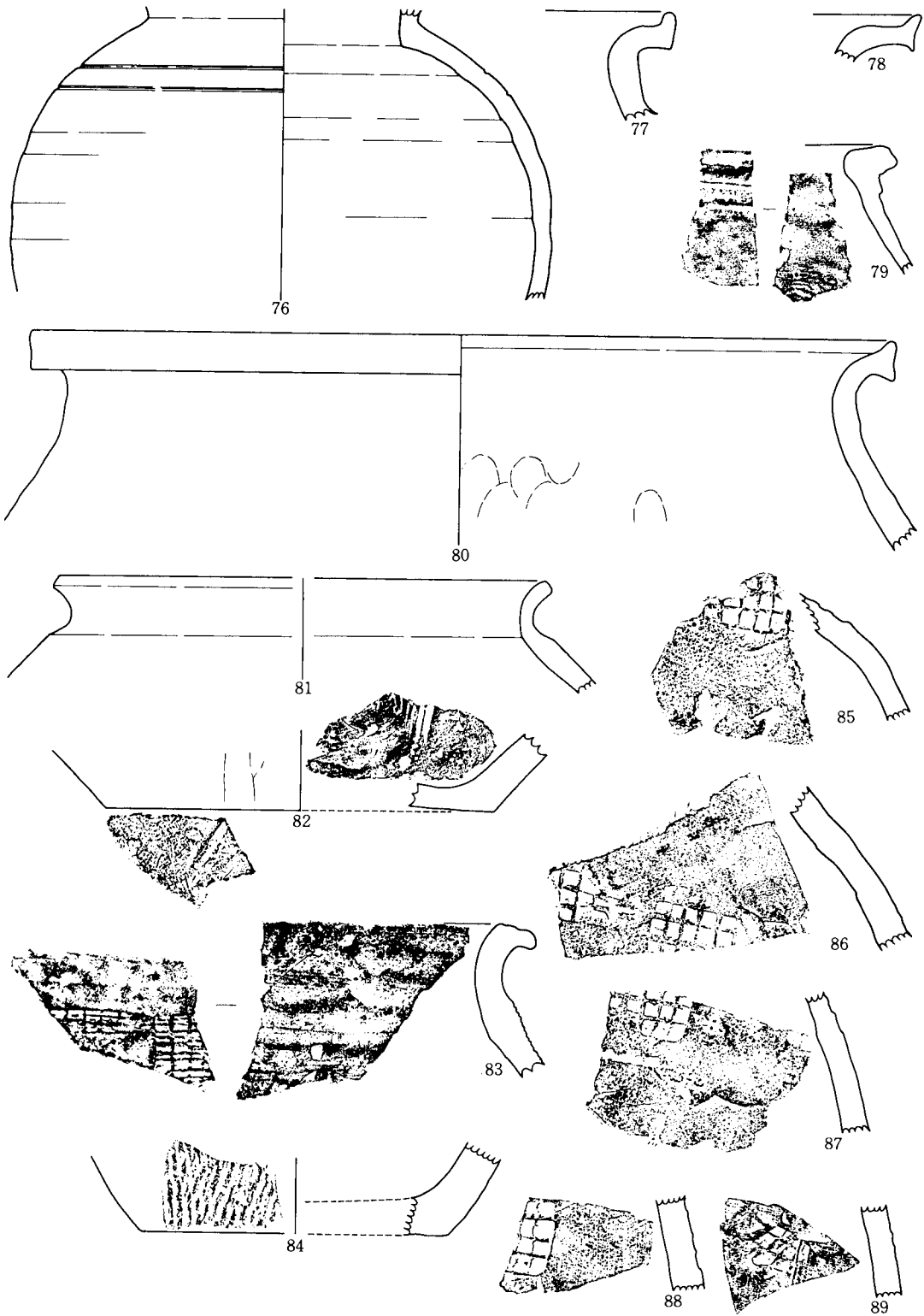
寬永通寶(新)



第147図 白江梯川遺跡第3次出土銅錢拓影



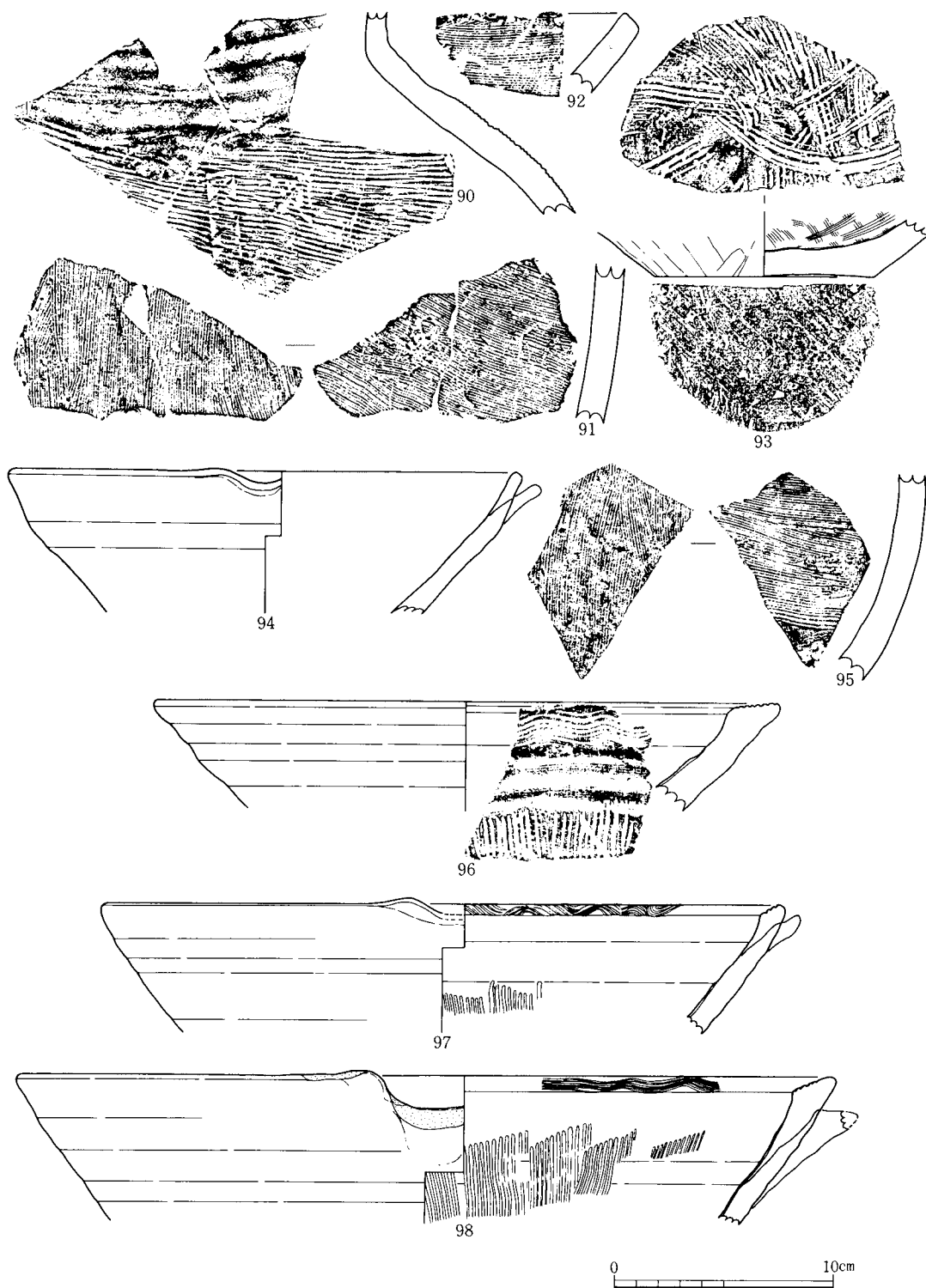
第148図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (3)



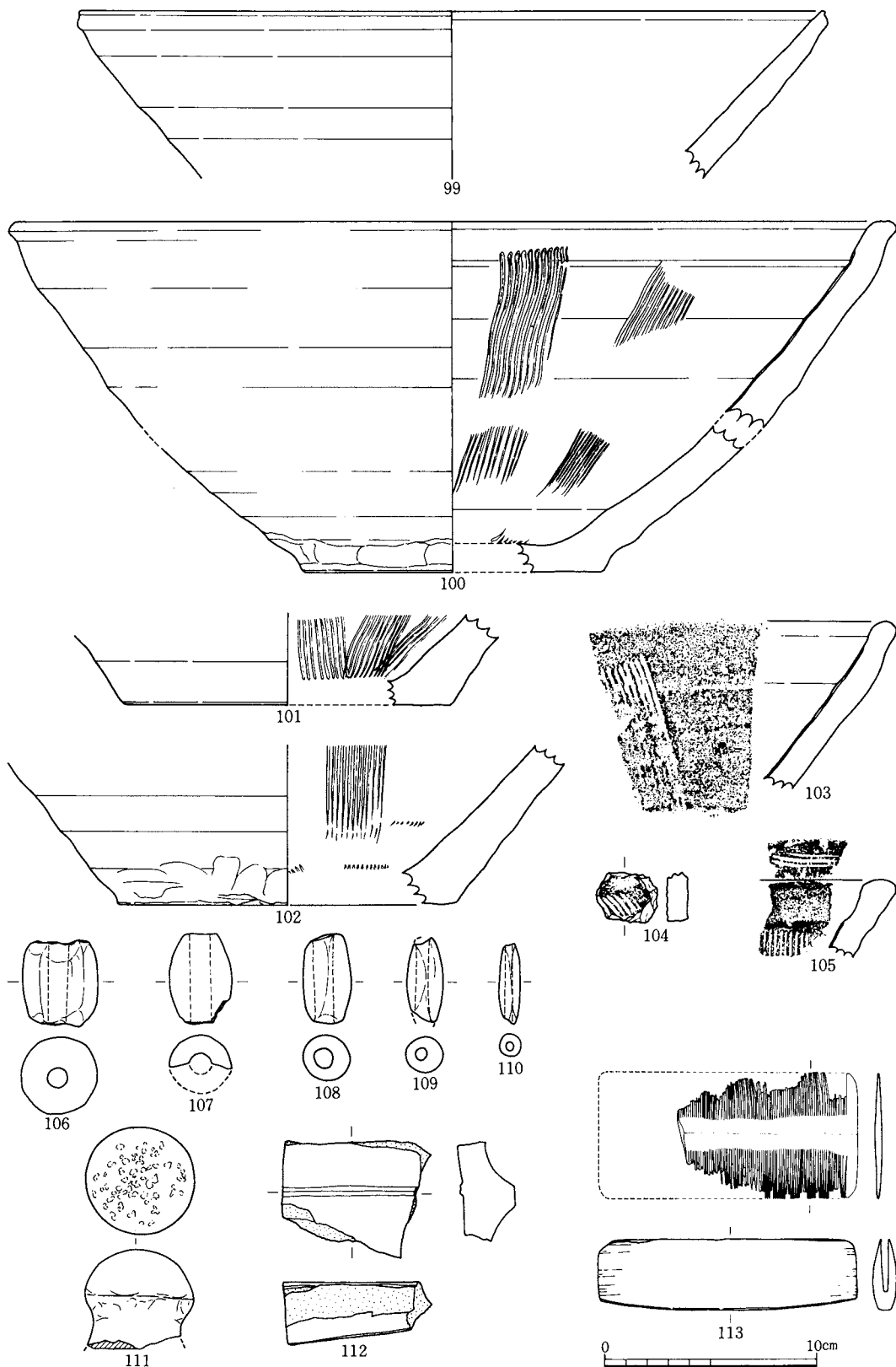
第149図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (4)

を測る。75は明緑色の鮮やかな釉がかかっており、輸入された中国産の二彩断片と思われる。76は灰色の色調を呈するが越前焼の瓶肩部と思われる。77～80は越前焼の甕の口縁部。79は口縁が肥厚して横へ折れている。黒茶色を帯びた灰色の内面には叩き目がある。88は口縁部の外面を強く横ナデして口縁部を広げる頸の短い壺。淡灰色の色調を示し、産地を特定できていない。82は加賀焼の播鉢底部。83は第20号井戸の出土品でみた産地不明の製品と同じ壺の口縁部。口縁を肥厚させて面とし、2条の沈線をめぐらせている。体部外面には格子目の叩きを施す。84は外面に平行叩きを施す底部断片。外面は褐色を示し、特徴的な叩き目をもつ。85～89は越前焼の甕の体部。方形の格子状叩きがある。90は珠洲焼の甕と思われるが体部に左から右方向に叩いた細い平行叩き調整がされ、肩に凶を組み合わせた刻文が押されている。91・92・95は外面を縦方向のハケ目、内面を横方向のハケ目調整を施す加賀焼の古式段階の製品と推定されているものである。92は鉢の口縁部小片とみられる。いずれも灰色を呈し、胎土中に若干の砂粒を含む。93は加賀焼の播鉢底部。内面に播し目がみられ、外面はへうで削る。底は静止の糸切りの切り離し痕跡がある。灰白色をして胎土中に粗砂を多く含む。94～99は珠洲焼の播鉢。96～98には口縁端部に波状文があり、珠洲でも新しいIV期の所産であろう。播し目は96・97が6条一単位、98が11条一単位を数える。99～103・105は越前焼の播鉢。104は越前焼播鉢の小片を加工したメンコと呼ばれる製品である。周辺を打ち欠いて丸くしている。106～110は土錘。ほぼ完存するものの重量を記せば106が46 g、108が15.6 g、109が8.7 g、110が3.8 gとなる。111はいわゆる有頭石錘の頭部断片。頂部は敲打により整形し最大径で3.2cmを測る。最近、県内の中世の集落遺跡からの出土例が増えてきている資料である。112は風字硯の断片とみられ、須恵質である。幅3 mm 2条の紐を並べて境界としている。使用面は平滑でつるつるしている。113は盛土工法により現状で保存した遺跡の東側の試掘調査を実施した際に井戸の一部と推定される箇所より出土した櫛。両歯の櫛で全体の1/3を欠失しているが、納められていたサヤから全長が約12cmであったことがわかる。櫛は幅6 cmで中央に幅1.4 cm前後厚さ3.5 mmの峰の部分がある。櫛歯は約1 mmの幅で厚さも約1 mmと精巧な加工がされている。一方で82本、もう一方で90本の歯があり、後者の歯の方がやや細かい。櫛歯の片方が入ったままの状態出土したサヤは長さ12.2 cm、幅3.3 cm、厚さ1.1 cmを測る。第152図には各種の石製遺物をまとめて図示した。114は凝灰岩製の石臼の小片。復元径で20.6 cmのやや小型品である。115は五輪塔の断片であろうか。中央に径4 cmばかりの穴が穿たれている。116は五輪塔風輪の残穴。二次的な打撃等により殆んど原形をとどめていないが、頂部に一辺約5 cm、深さ2.5 cmの空輪をさし込む方形の穴が掘られている。117は軟質の石を用いた硯の断片。旧状は長方形をなす硯の陸の部分で、幅2 mmの縁帯が削り出されている。118は滑石製の石鍋の小破片を二次加工して温石に転用したものである。短辺5.5 cm以上（もとは7 cm程度か）、長辺9.5 cmの長方形にした中央部を楕円形にくぼめ、一方の端に径6 mmの穿孔をしている。鋭い錐状の道具で傷をつけ、打ち割られた痕跡がある。119は石包丁の断片とみられ、黒灰色の粘板岩のような石を用いている。二辺に幅6・7 mmの刃が付いている。120～127は砥石。軟質の砂岩や珪岩を使っているようで、灰褐色ないしは淡い褐色を示すものが多い。125は長径10.2 cm、厚さ1.1 cmの自然礫を砥石として利用しており、両面に先の尖った細い錐状の道具を砥いだ筋が

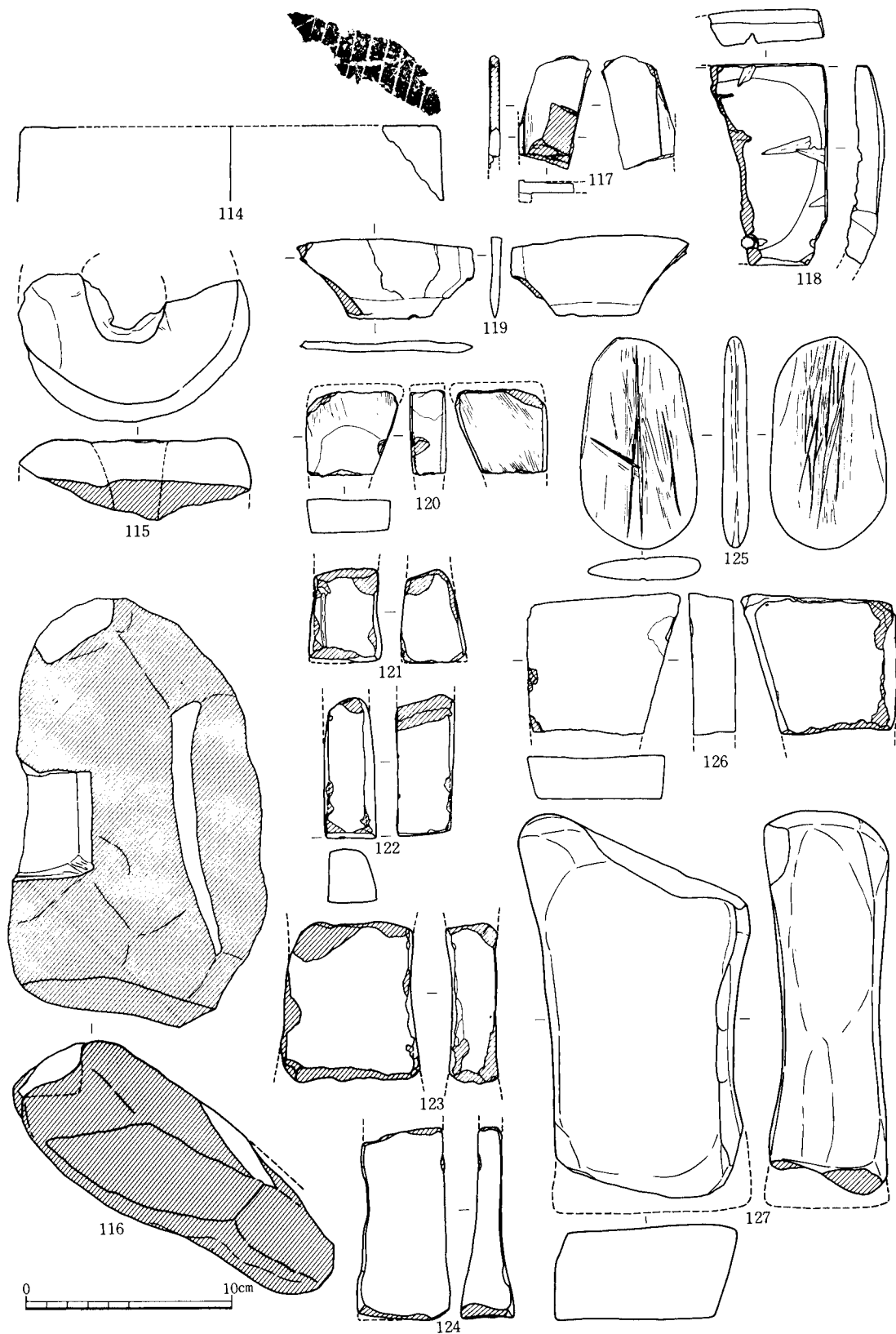




第150図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (5)



第151図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (6)



第152図 白江梯川遺跡第3次包含層出土遺物 (7)

多くついている。127の砥石は現存長18.7cm、最大幅11.7cm、厚さ6.1cmの大形の砥石で四側石を利用している。端面が割れて欠失した後もなお利用し続けていたことは端部上面が滑らかになっていることから、明らかである。

銅銭（第147図） 第3次調査では7種9枚の銅銭が出土した。祠跡推定遺構の溝内から「熙寧元寶」（初鑄1068年、篆・行各1枚）2枚、第8号井戸の井戸側内覆土から「元符通寶」（初鑄1098年、行）1枚の北宋銭が出土している。また包含層からは「開通元寶」（初鑄621年、隸）1枚、「聖宋元寶」（初鑄1001年、篆）1枚、「紹聖元寶」（初鑄1084年、篆）1枚の唐・北宋銭と「光順通寶」（1460～69年、階）1枚の安南銭、「寛永通寶」（初鑄1636年、階）2枚の国産銭が出土した。北宋銭が最も多く、4種5枚を数えるが、1枚の安南銭は県内での出土例は知られておらず注意しておきたい。

#### 参考文献

- 栃木英道ほか 『吉竹遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 田嶋明人・越坂一也ほか 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター 1987
- 中村 浩 『和泉陶邑窯の研究』 1986
- 四柳嘉章ほか 『西川島一能登における中世村落の調査』 穴水町教育委員会 1987
- 田嶋正和・小森秀三 『三木だいもん遺跡』 加賀市教育委員会 1987
- 吉岡康暢 「中世陶器の生産と流通—北東日本海域の珠洲系陶器を中心に—（一）（二）」 『考古学研究』 108、110、1981
- 吉岡康暢 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」 『庄内考古学』 18号 1982
- 上野与一・小村 茂 『加賀古陶』 ニューサイエンス社 1984
- 三浦純夫・久田正弘 『米光萬福寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987
- 垣内光次郎 『普正寺遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1984

## 第7章 ま と め

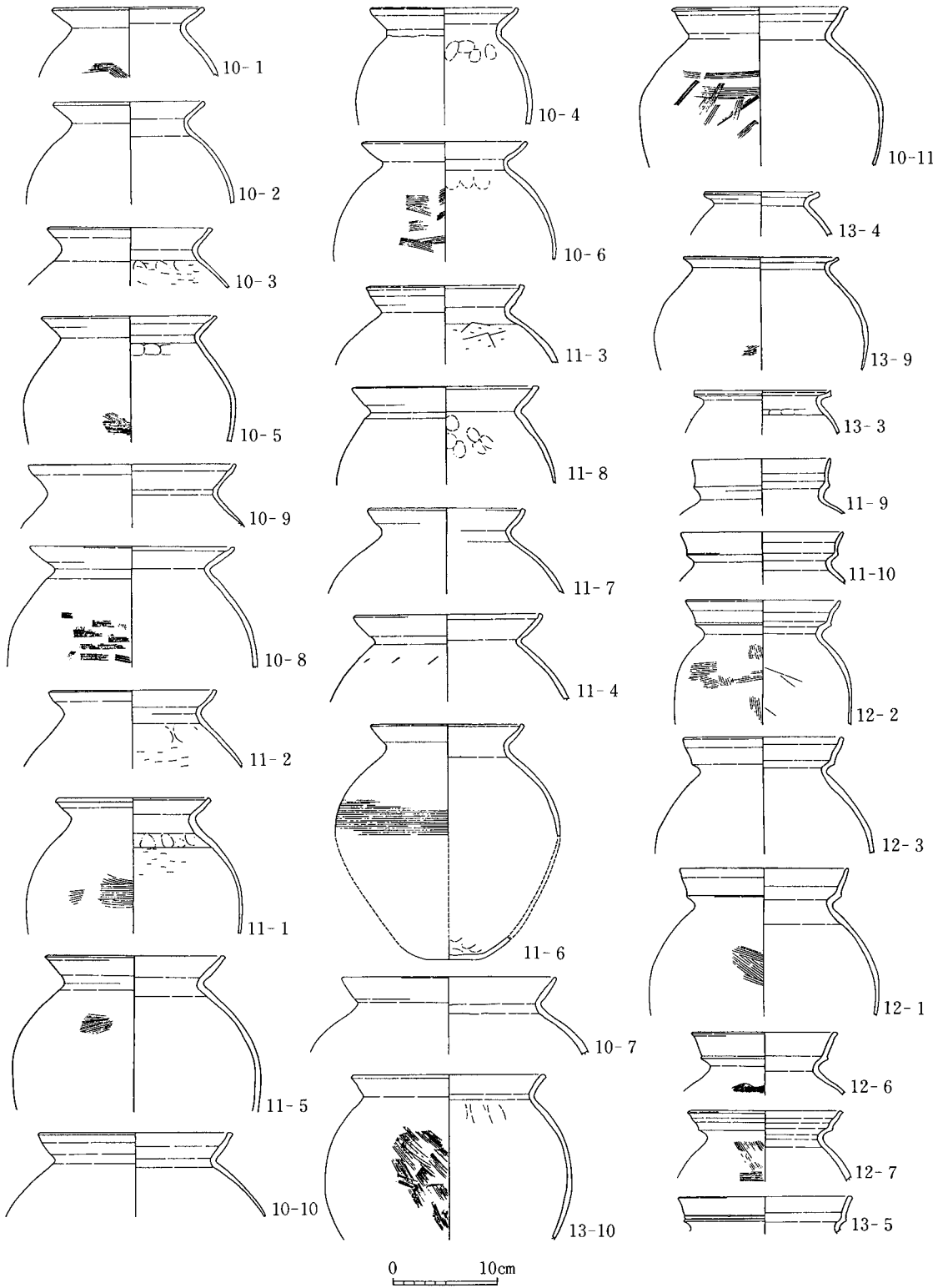
### 第1節 遺跡の概要

県営公害防除特別土地改良事業に伴う白江梯川遺跡の発掘調査は、今年度実施した第4次調査を含めると全体で約8,500㎡の調査を実施したことになる。遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期の下層遺跡と中世でも南北朝から室町時代を中心とした集落遺跡であった。重金属汚染除去の客土工事が工事の主たる目的であったこともあって、下層の遺跡は最小限の調査にとどめ、遺跡を現状で保存することに努めた。従って第2次から第4次の調査では、耕土直下に確認されて工事によって影響を受ける中世の集落遺跡の調査にその主眼を置いて進めている。遺跡の分布調査結果からみれば、梯川の右岸から白江集落の北西部に広がっており、確認された範囲だけでも約50,000㎡に達する規模の大きな集落遺跡であったとみられる。遺跡の地理・歴史的環境については、第1章に詳述したが、中世における本遺跡の発展は、水運に用いられた梯川と北国街道が白江町付近で交差していたという地理的環境を見逃すわけにはいかない。梯川流域に展開した漆町遺跡群や佐々木ノテウラ・アサバタケ遺跡などの集落遺跡も、古府台地周辺に位置していた加賀国府と梯川を媒体として成立・発展したことは疑い得ない。加賀国府の位置については、吉岡康暢氏が文献史料から考定されており、「11～12世紀代には、加賀国府－府南社－国分寺－中宮八院が相互に近接して」古府台地周辺に位置したとされている<sup>(1)</sup>。最近、北野博司氏は加賀国府の所在地について、大東急本『和名類聚抄』の記載から指摘されている能美郡と加賀郡の二つの国府所在郡をとりあげ、また、能美郡の梯川中流域地域と加賀郡の金沢平野北西部の遺跡群の動態を比較して、「加賀郡に国府の所在を求めれば、遺跡群の動態からみて可能性のあるものは9世紀前半～10世紀前葉、11世紀の2時期であろう。」としている<sup>(2)</sup>。北野氏の分析ではこの時期のどちらかに国府が能美郡から加賀郡へ移った可能性がある訳であるが、白江梯川遺跡の中でみれば第2次調査の14号・15号・22号の各井戸と第3次調査の33号井戸などからの出土土器が10世紀から11世紀前半を主体としており、建物の検出はできなかったものの、この段階に集落が存在した可能性が高い。

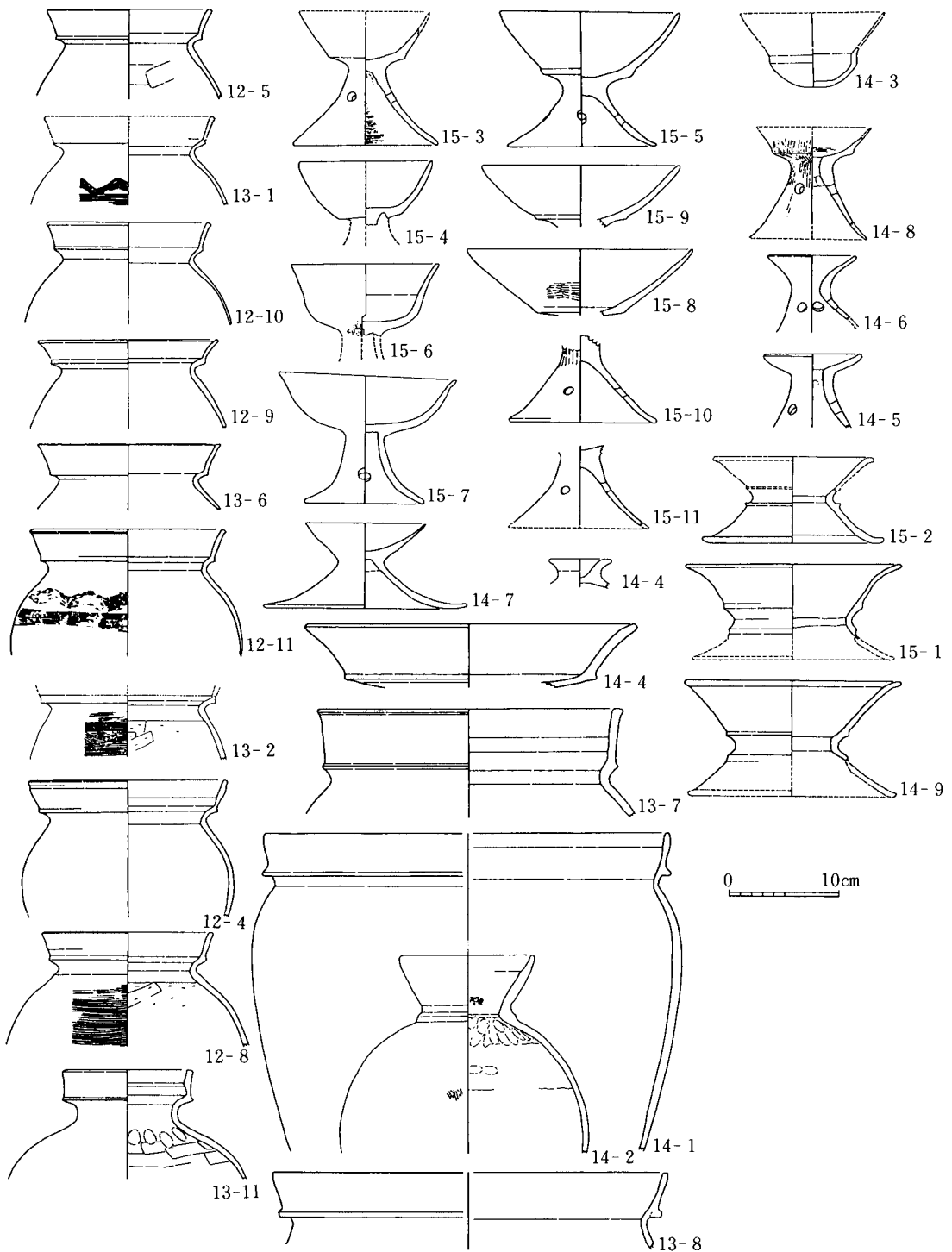
白江梯川遺跡での中世の集落の展開は、前章までに説明した遺構・遺物から12世紀から16世紀までの時期幅をもっている。垣内光次郎氏の教示によれば<sup>(3)</sup>、出土陶磁器類からの検討からみると13世紀から15世紀の遺物が最も多く、また井戸などの遺構の時期も、当然この13世紀から15世紀のものが多いといえるとのことで、中世の集落の盛期もこれに一致すると考えられる。

### 第2節 下層の土器群

下層として扱った包含層は主として弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層であった。客土工事が調査の原因となっており、下層の包含層や遺構の調査は工事によって影響を受ける最少限の部分としたため、下層の遺構で発掘調査の対象としたものは少ない。それでも第2次調査区



第153図 白江梯川遺跡第2次調査区坑21内出土器(1)(S =  $\frac{1}{6}$ )



第154図 白江梯川遺跡第2次調査区坑21内出土器(2)(S =  $\frac{1}{6}$ )

の西側では工事の実施によって影響を受ける溝や坑が確認されたため、発掘調査を実施して良好な土器の資料を得ることができた。本節では中でも多量の土器が出土した坑21の土器について補足的に説明を加えておく。

坑21内出土土器は本文中でも触れた如く、すでに田嶋明人氏が『漆町遺跡Ⅰ』において漆・7群土器の標式資料として扱われている。漆・7群土器の編年的位置付けは、田嶋氏によって次のように説明されている。<sup>(4)</sup>「7群土器は在地系土器群が払拭され、変わって「畿内系」土器群を始めとする外来系土器群が、在地での土器組成の主体となる時期で、5～8群土器を2分する画期をなす土器群である。多地域の土器群が混在したあり方を示すが、主たる組成は、6群土器（白江式）の組成を引継ぐ。しかしその一方では、甕形土器に大きな相違がみられ、突然ともいう状況で「布留系」甕形土器が加わり甕形土器の主体となる。また、山陰系甕形土器も増加する。ただ、この段階の甕形土器はI<sub>2</sub>ではなくI<sub>1</sub>が主体である点は、8群土器とは異なるとともに、この時期の重要な特色である。（中略）先学の編年観（谷内尾<sup>(5)</sup> 1983）では「古府クルビ」期とされた時期に概念的には最も近いであろう。」更にその編年的位置付けについて谷内尾晋司氏の編年観と対比される中で田嶋氏は、「6群土器は在地系土器が一定量残存する点で谷内尾のいう（古府クルビ式）古相に類似するが、現段階では6群土器に「布留系」甕形土器1類が確実に共伴した例はなく、ましてや2・3類の共伴例はない。同様に、新相とするものも、それを7群土器と対比すれば、在地系が払拭されるという点では類似するが、7群土器は、「布留系」甕形土器2類を少量含む可能性をもつが1類が主体で、少なくとも4類は含まない。」と説明されている。また、田嶋氏は、「どの土器群をもって「古府クルビ式」期とするかは、統一見解に達していない。漆6・7群土器をそれにあてる理解と（谷内尾<sup>(5)</sup>・<sup>(6)</sup> 1983・1985）、漆7群に限定して用いるべきとする理解があるといえる。」と述べられている。<sup>(7)</sup>

田嶋氏の論点をふまえ、白江梯川遺跡坑21出土土器をみてみよう。第153図には「布留系」甕を載せた。体部調整は器体の剝落の著しい個体が多く不明なものが多いが、外面は斜め方向ないしは横方向のハケ調整を施す。口縁部はくの字に外反して開き、口唇部端は外傾するものとはほぼ水平につくられるものと（田嶋氏の1類に該当）、口唇部がわずかに肥厚するものが主体を占め、口唇部の肥厚の大きい甕は含まれていない。山陰系とみられる有段口縁の甕は第153図右から第154図左にかけて示した。田嶋氏の甕B類に分類されるが、この有段口縁をもつ甕の全ても山陰系と考えるのは難しいと思われる。有段口縁甕の分類の細分はここでは進めないこととしたいが、山陰系の甕がかなりの量比をもって存在することは確実である。大形甕の13-7・8や14-1も山陰系の大形甕である。壺は点数が少ないが山陰系のE類13-11とI<sub>1</sub>類14-2がある。高杯は変化に富む。東海系の15-4や14-7がある。器台も種類が多く、14-5・6の小形器台と山陰系の鼓形器台3点の存在が注目される。

坑21出土土器の特徴は、田嶋氏の指摘された如く、口縁部端が肥厚しないか、肥厚の度合が小さい「布留系」甕と山陰系の有段口縁甕で構成され、それ以前の6群土器にみられた在地系の甕は口縁の一部に凝凹線がある13-5を除いてみられない。また大形甕や壺、鼓形器台など山陰系の土器群が主要な器種構成となっている。漆7群土器の指標ともなった「布留系」甕（I<sub>1</sub>類）と



山陰系土器の圧倒的な優位性は、そこに大きな画期の存在を意味している。田嶋氏は「古府クルビ式期を漆7群土器に限定して用いるべきであり」とされ、その前段階の漆5・6群土器が月影式土器（漆4群に該当）と7群土器の間に位置付けられる土器群であり、月影式土器のもつ在地性の崩壊とこれに替わる外来系土器を加えた組成を積極的に評価して「白江式」の設定を提唱されている。<sup>(6・7)</sup>湯尻は漆7群土器が大きな画期であり、月影式土器のもっていた在地性が失われてしまう段階である事は確かであるが、その前段階である田嶋氏の漆6群土器（白江式）と谷内尾氏の古府クルビ式土器の古相の段階<sup>(8)</sup>にはすでにこの画期への動き－在地性の崩壊が急速に進行していたものとして理解している。しかし、白江梯川遺跡坑21出土土器でみたセット関係が梯川流域以外の加賀地域でも普遍的に存在するかどうか、なお資料の蓄積をまって考えたいと思う。

### 第3節 祠跡推定遺構

第3次調査で調査を実施した祠跡推定遺構は、現在までのところ類例を知らない特異な構造の遺構であった。南北2.9m、東西2.65mの方形台部の四周を溝で囲み、溝の南側の東西の角に略円形の土壇状の掘り込みを接合したような形をとる。溝内には台部から滑り落ちたような状況で多数の円礫が出土し、礫群中からは懸仏3体（十一面観音菩薩座像1体、如来座像2体）が発見された。懸仏はいずれも退化した形態の尊像で南北朝～室町時代（14世紀後半頃）の作とみられている。溝と土壇状の掘り込みからは土師質土器、中世陶磁器類、五輪塔等の石造遺物残欠、銅銭など多様な遺物が出土しているが、15世紀代を中心としたものであり、最も新しい遺物では16世紀後半代の染付小片が出土した。以上のことからこの遺構が15世紀代を中心しに営まれた祠跡の遺構であると推定した訳である。南側を正面とし、背後に梯川を臨む1間四方程度の小さな祠が台状に建てられ、円礫はその基部に配されていたものとして復元した。3体の懸仏は、祠の中に御正躰として納められ、集落の人々の信仰の対象とされたのであろう。1体の十一面観音座像と2体の如来座像（うち一体は阿弥陀如来か）の存在からすると中世の白山信仰に関係していたとみるのが自然であろう。祠の周囲をめぐる溝とこれに続いて正面の左右に存在する長径4m前後の略円形の土壇状の掘り込みは、すでに指摘したように湛水していた可能性があり、とすれば祠の建っている台状部は浮島の如くに見え、背後に流れる梯川と同一視されるような状況が復元される。本集落で初めて確認されたこの祠跡推定遺構は、長年の梯川流域における集落遺跡の考古学的調査の中でも、中世集落の様相を復元する重要な手繋りを与えている。一般に中世集落内の宗教的活動はわずかな仏具や陶磁器等の出土から復元されているが、本遺跡は小規模ながら白江梯川遺跡で展開された白山信仰にかかわる祠の存在を具体的に示している。いずれにしる例のない遺構であり、中世集落内に居住した人々の信仰の場であったと推定されるが、今後、文献史学や宗教的視点等方面からの検討を必要とする遺構であり、諸氏の御指摘、御検討を願うものである。

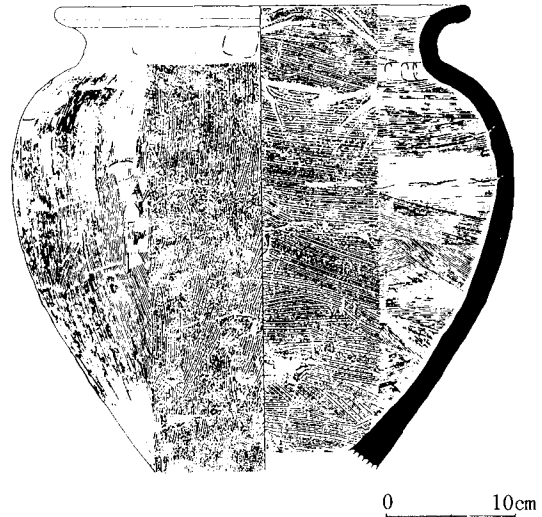
## 第4節 井戸

井戸は第2次調査で20基、第3次調査で38基の計58基を確認した。62年度の第4次調査でも約10基の井戸を確認しているから、非常に密度の高い分布状況である。県内の井戸については奈良・平安時代の井戸については楠正勝氏の集成と分類があり、最近では弥生時代から中世の井戸が久田正弘氏によって集成・分類されている。<sup>(8)</sup> 白江梯川遺跡の第2・3次調査において調査した58基の井戸のうち、井戸側材やまなこが存在して構造が判明したものは18基であった。この他に井戸の覆土中から出土した部材の断片や掘り方の形状から井戸の構造を推定できた例も4基ある。井戸側の種類からみると多種多様であり、方形切石組1基、方形縦板組隅柱横棧どめ3基、方形縦板組支柱横棧どめ3基、縦板組3基、円形削り抜き板（半載）組み合わせ1基、円形削り抜き板（4枚）組み合わせ1基、桶転用積み上げ（2段）1基、曲物（厚）積み上げ（3段）1基、曲物（厚）積み上げ（2段）1基、曲物（厚）積み上げ（1段）1基、曲物（薄）積み上げ（2段）3基、曲物（薄）積み上げ（1段）1基、曲物積み上げ1基のようになる。曲物を利用した井戸側は、まなこの可能性がある1段のものを除いては本来曲物が重ねられていた可能性がある。曲物はその厚味が1cm以下のものを薄、それ以上のものを厚として扱ったが、機能的には差がなかったであろう。本遺跡での井戸の中で切石組井戸が存在することは重視したい。切石組井戸は加賀市永町ガマノマガリ遺跡でも検出されているが、県内でも現在までにこの2例しか知られていない。<sup>(9)</sup> 木製井戸側の構造についてみれば曲物を用いた井戸側の多いことが注目される。7ないし8基が曲物枠を用いており、井戸側を曲物の積み上げで行ない、この目的で曲物が製作される場合も多かったと思われる。桶の底板を抜いて転用し、積み上げた井戸側も曲物の井戸側と同種の井戸側であるが、県内での出土例はこれまでのところ知られていない。方形縦板組の井戸側はその四隅の柱の構造から二分した。奈良時代以降の遺跡において出土例の多い隅柱横棧どめ形式とこれを改良した支柱横棧どめ形式である。支柱横棧どめ形式の井戸側は県内では梯川流域地域の遺跡でのみ例が知られており、白江梯川遺跡での成果からみれば14世紀代以降に出来たものと考えられる。木を削り抜いた板材を組み合わせた井戸側は2基確認されたが、第2次調査の第15号井戸は出土した須恵器の双耳瓶から平安時代後期の年代を与えられている。漆町遺跡群の金屋サンバンワリ1号井戸（10世紀）とともに削り抜き井戸側の古い段階の例といえよう。白江梯川遺跡の井戸から出土した遺物からその年代を考えると平安時代後期の10・11世紀の土器の出土した井戸と、14・15世紀の土器が出土した井戸がある。もちろん後者の時期の井戸が圧倒的に多い訳であるが、集落の盛期を反映したものといえよう。

## 第5節 中世の遺物

白江梯川遺跡は前節でも述べたように14・15世紀を1つの盛期とする集落遺跡である。本節ではこの時期を中心にした陶磁器類の様相についてまとめておきたい。本遺跡の中世陶器の中で注目されるのは、現状では産地を特定できていない格子目叩きを施した須恵質の甕の出土があげら

れる。第3次調査の各遺構や包含層からわずかに出土したもので、全形態の資料は得られていないが、今後、中世陶器の研究の中でこれら少量の陶器の歴史的な位置づけや流通が明らかにされよう。また、本資料以外にも、須恵器質で体部の外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整した加賀焼の古段階に位置付けられると考えられている新しい資料の出土があり、第2次調査で11片、第3次調査で14片の出土がみられる。第2次調査の資料で片口鉢の断片が出土したことから、従来辰口町の徳久地内を中心とした辰口西部遺跡群で出土している甕<sup>(1)</sup>とともに貴重な資料を提供した。今後は更に生産窯跡の特定と消費遺跡での資料の増加と検討をまちたい。



第155図 辰口西部遺跡群出土甕

本遺跡出土の中世陶磁器の組成と様相に関しては、現在、点数の確認・集計作業途中であるため、本節ではその全容が整理された佐々木アサバタケ遺跡のデータ<sup>(12)</sup>を援用してみたい。土器組成は約70%が土師質土器で、加賀焼などの日常容器が15%、瀬戸焼2%、中国陶磁3%が主なものである。これらを製品別にみるならば、中国製陶磁器では青磁が約60%、白磁約30%、染付等10%で構成される。青磁は碗を主体として、少量の皿、鉢、盤、香炉などが認められる。白磁は玉縁の碗以外は15世紀を中心とする皿で占められる。染付の出土は1%にも達せず極めて少ない。これは本遺跡がこれら16世紀の染付や白磁製品が搬入される頃には大きく衰退していたことを示している。国産の施釉陶器である瀬戸焼は天目茶碗を中心とし、各種の製品が確認されている。畿内産と考えられる瓦質土器は火鉢、香炉、花瓶など主に15世紀の加賀地方の中世集落遺跡出土と同一形態のものが出土している。加賀地方に生産窯跡が存在する加賀焼などの日常容器の構成は、佐々木アサバタケ遺跡とほぼ同一視できる。全体組成では加賀焼50%、珠洲焼約30%、越前焼約20%の比率で消費されている。これを各器種別にみるならば、甕の場合、加賀焼60%、珠洲焼15%、越前焼25%で加賀焼が中心を占める。壺の場合、珠洲焼が中心で加賀焼、越前焼と続く。片口鉢（播鉢等）の場合、珠洲焼を中心とはするが、越前焼、加賀焼ともに三者似たような比率で消費されている。これら消費状況は、一般的には製品の搬入状況や生産窯跡の動向を大きく映し出していると考えられている。もっとも消費量が多い土師質土器は、13世紀前半では、大皿の製品が認められるが、それ以降は中・小皿に限定されてしまう。胎土や色調から4タイプ程度の生産ブロックの製品が搬入され、消費されているようである。

以上、事実誤認もあろうと思うが、ひとまずの区切りをつけておきたい。 (文責 湯尻)

註)

- 1) 吉岡康暢 「平安前期の地方政治と国分寺(上) - 加賀国分寺をめぐる問題」『金沢大学日本海域研究報告第8号』 1976
- 2) 北野博司 「第3節 加賀における奈良・平安時代遺跡の動態 - 加賀国府の所在地をめぐる」『佐々木ノテウラ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 3) 中世の遺構・遺物については、当センター垣内氏の教示に負う所が大きい。本章でも第2・5節の記述についても同氏の教示を得ている。感謝したい。
- 4) 田嶋明人 「IV考察 - 漆町遺跡出土の編年的考察 -」『漆町遺跡 I』石川県立埋蔵文化財センター 1986
- 5) 谷内尾晋司 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1984
- 6) 谷内尾晋司 「II 北加賀出土の布留系土器について - 北安江遺跡出土の布留系甕の分析から -」『金沢市北安江遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1985
- 7) 田嶋明人 「古墳出現期の土器群と「月影式」土器」『シンポジウム「月影式」土器について 報告編』石川考古学研究会 1986
- 8) 楠 正勝 「V考察 (1)井戸」『金沢市大友・近岡遺跡』金沢市教育委員会 1984
- 9) 久田正弘 「第4章考察 第1節 石川県内出土の井戸について」『米光萬福寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987
- 10) 越坂・田嶋『永町ガマノマガリ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1987
- 11) 北野博司ほか『辰口西部遺跡群 I』 石川県立埋蔵文化財センター 1988  
 なお、第155図に掲げた甕実測図は辰口西部遺跡群下開発G区14号土坑出土土器の中の一資料である。
- 12) 垣内光次郎 「加賀地方における中世陶磁器の様相」石川県立埋蔵文化財センター市町村職員等研修会資料 1987 および垣内氏の教示による。



白江梯川遺跡第1次調査全景(東より)



白江梯川遺跡第1次調査全景(西より)



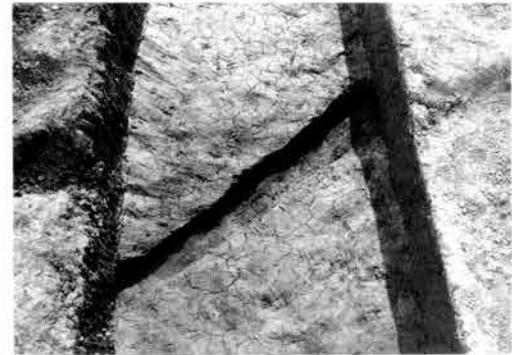
第7号溝(東より)



第4号溝(西より)



第3号溝(西より)



第5号溝(西より)



調査状況



調査着手時の状況



第1号溝



第6号溝



第2次調査区全景(東より)



溝1(下部遺構)発掘状況

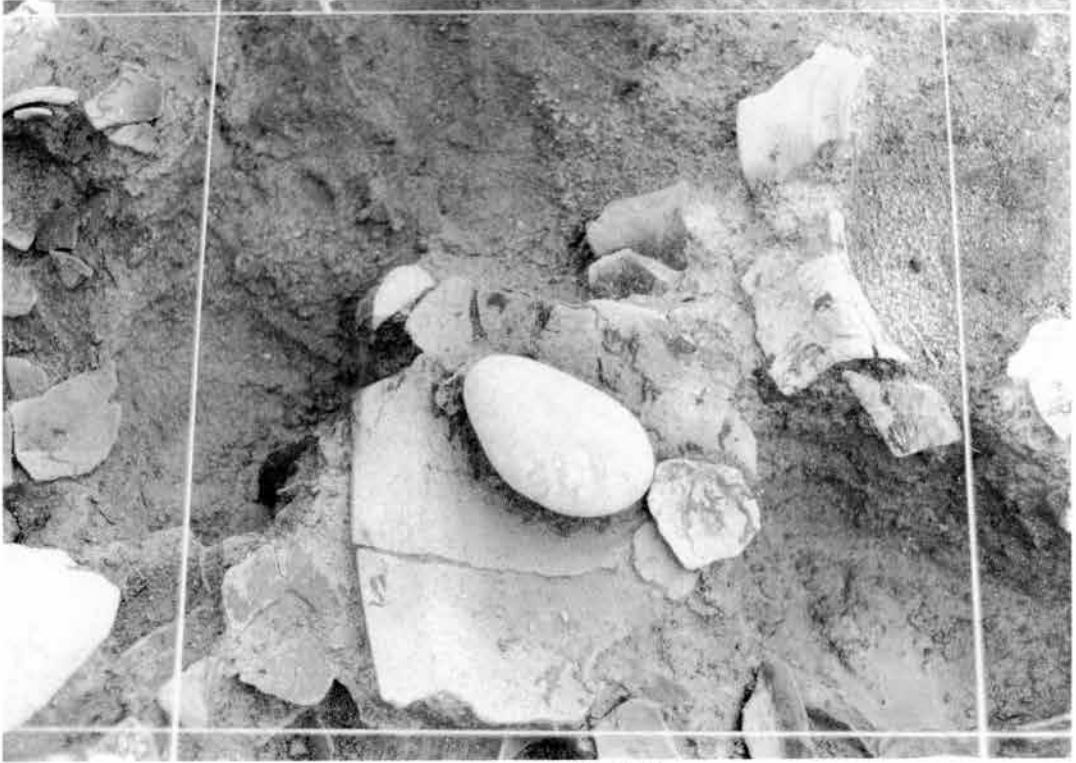


坑21(下部遺構)発掘状況

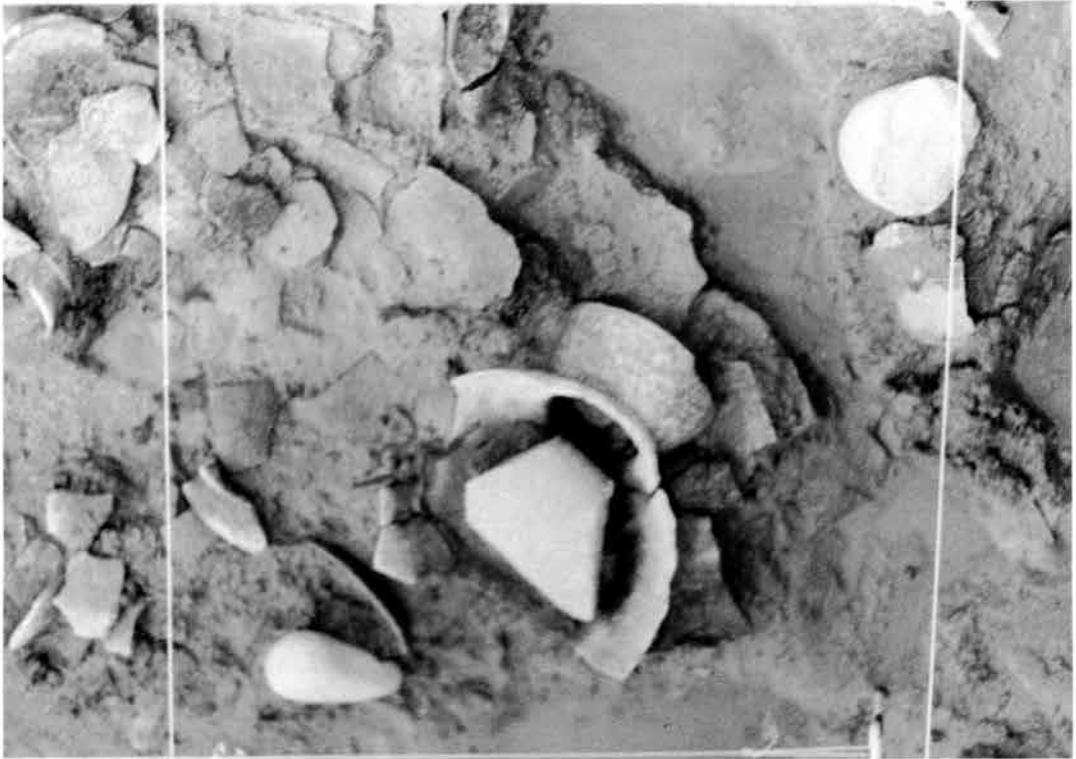


坑21(同上、部分)





坑21(下部遺構)部分



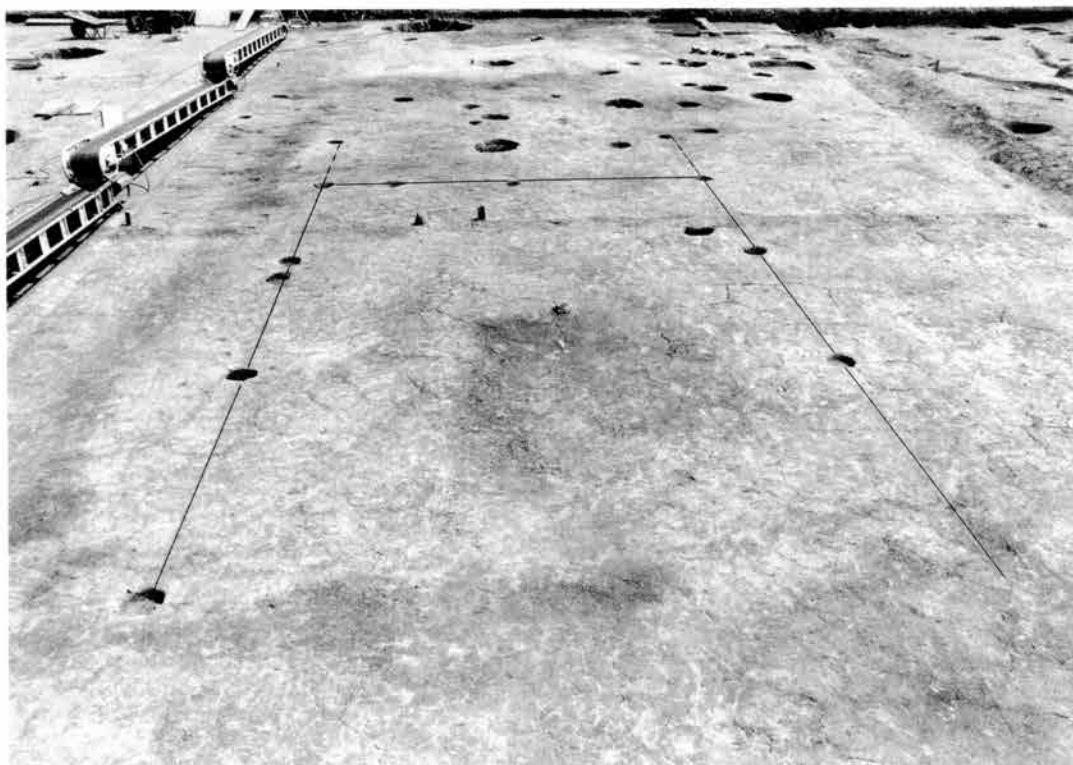
同上、部分



第1号掘立柱建物跡(東側より)



第1号土坑(北東側より)



第2号掘立柱建物跡(西より)



同 上(東より)



第1号竪穴状遺構北西側部分



第2号竪穴状遺構(東より)



第1号井戸跡(南側より)



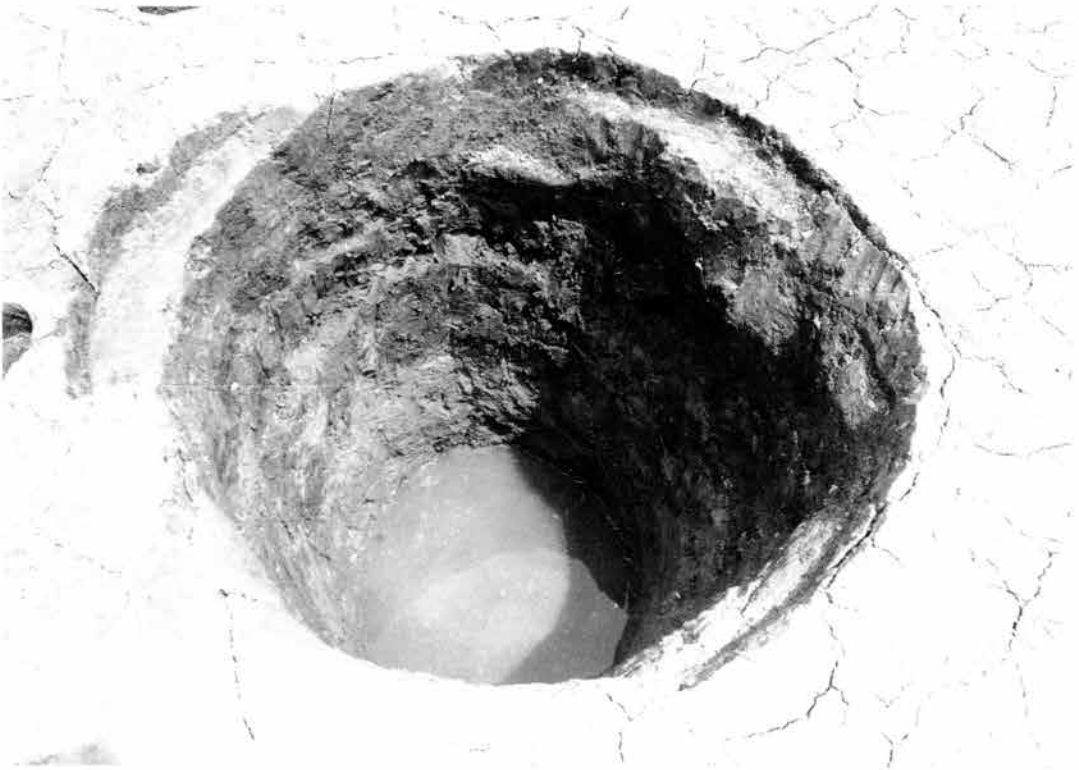
同上、発掘状況



第2号井戸跡(東側より)



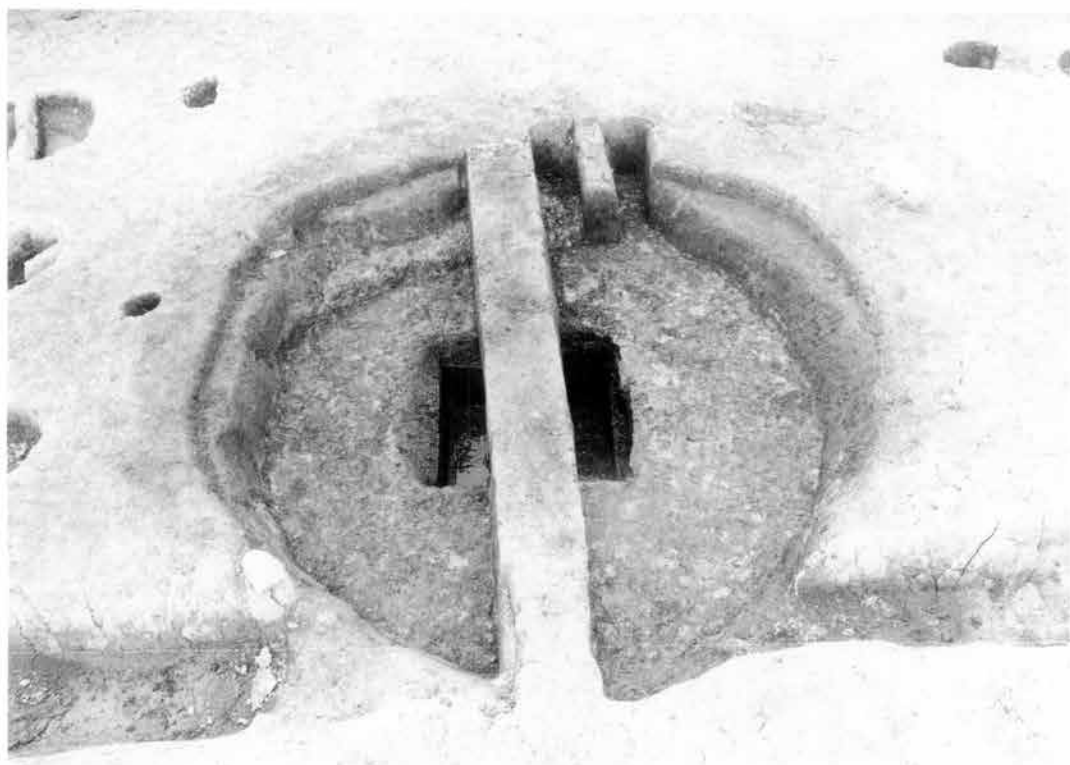
第3号井戸跡(西側より)



第5号井戸跡(西側より)



第9号井戸跡(西側より)



第11号井戸跡(北側より)

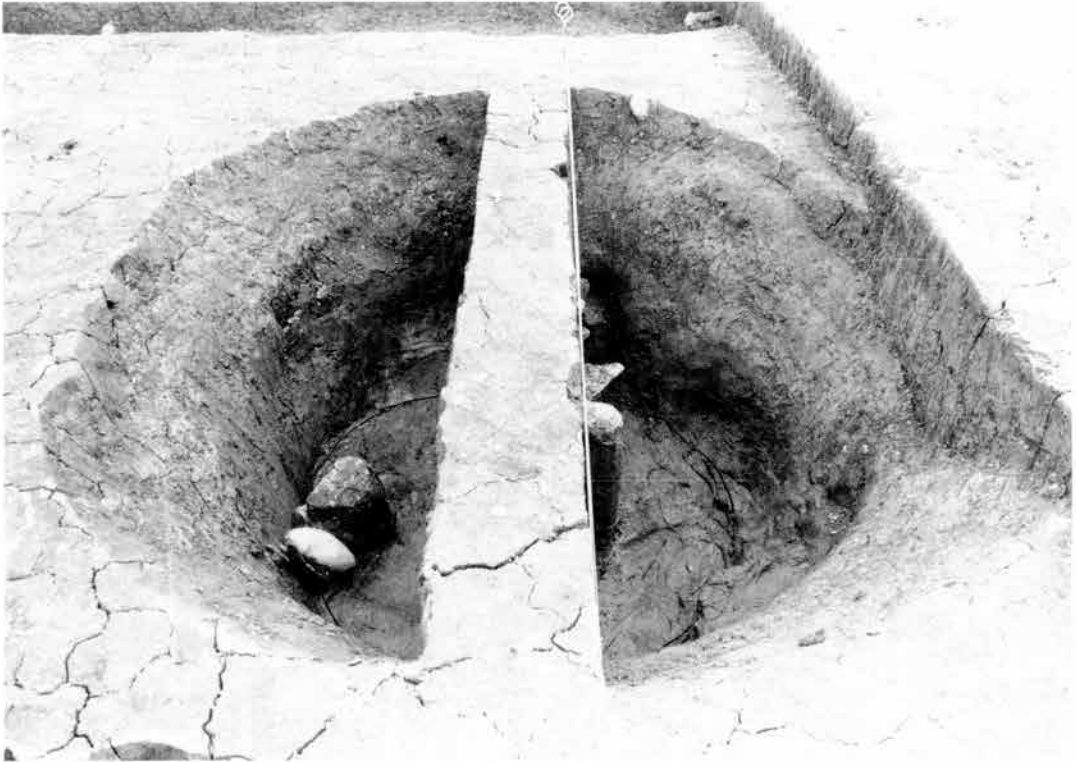


同上、発掘作業風景





第12号井戸跡(西側より)



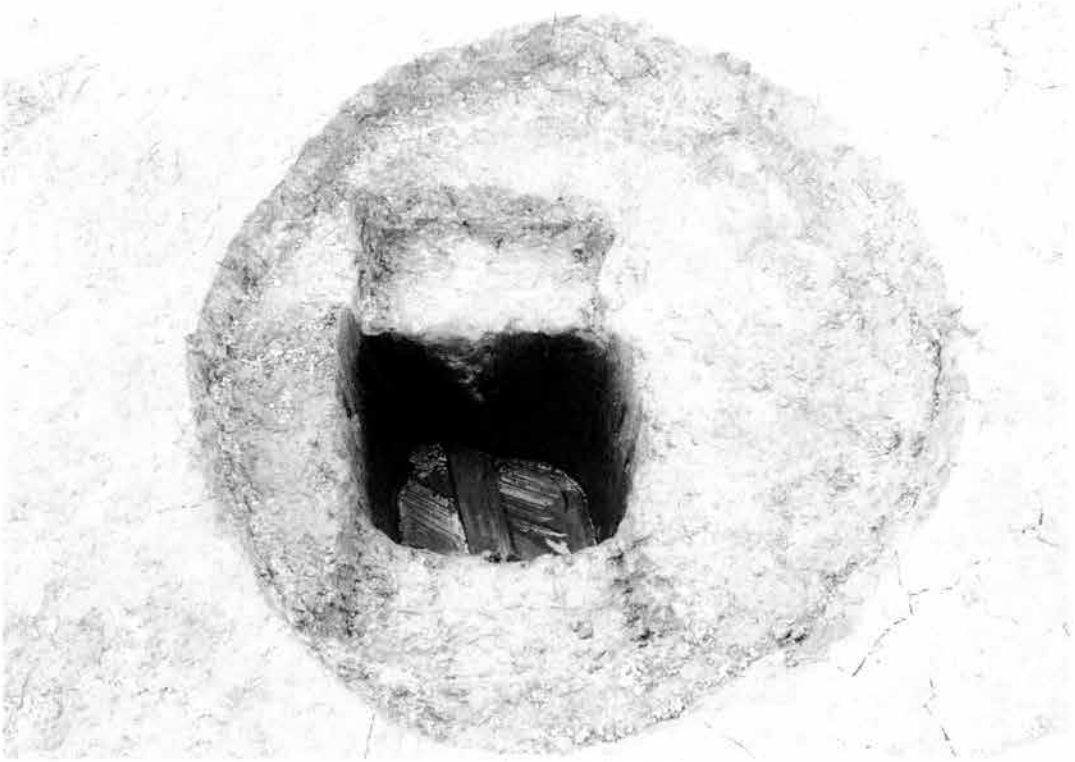
第13号井戸跡(北側より)



第14号井戸跡(西側より)



同上、発掘状況



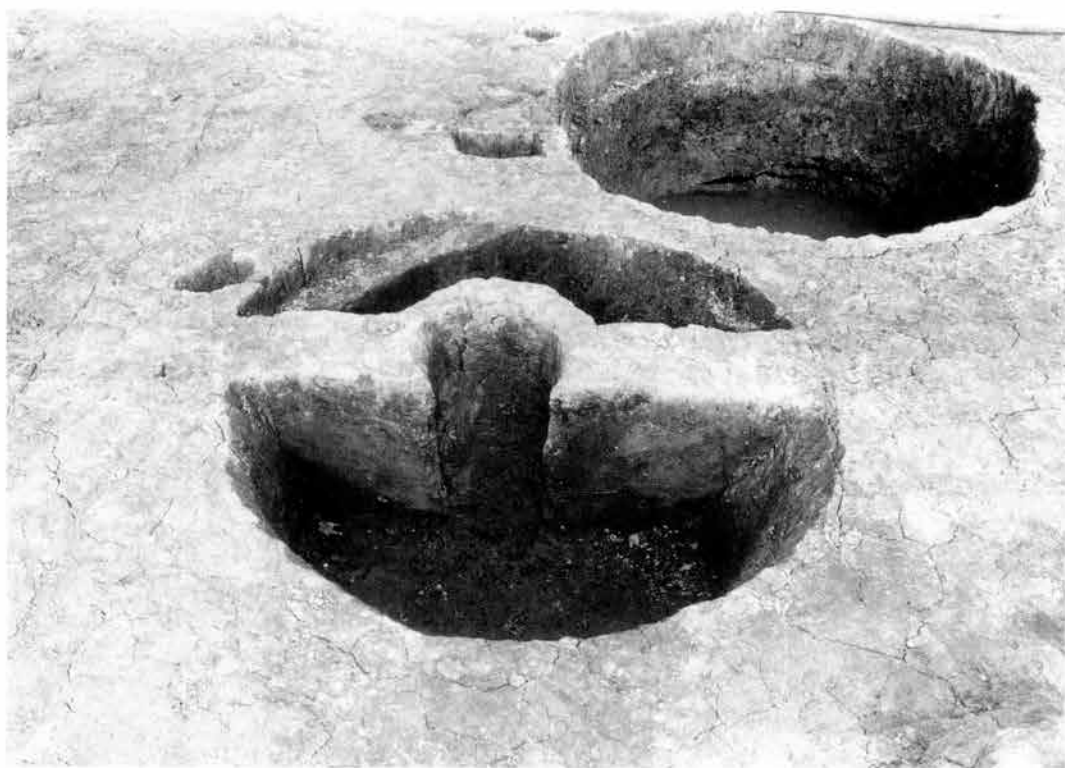
第15号井戸跡(西側より)



同上、筒底の保持板



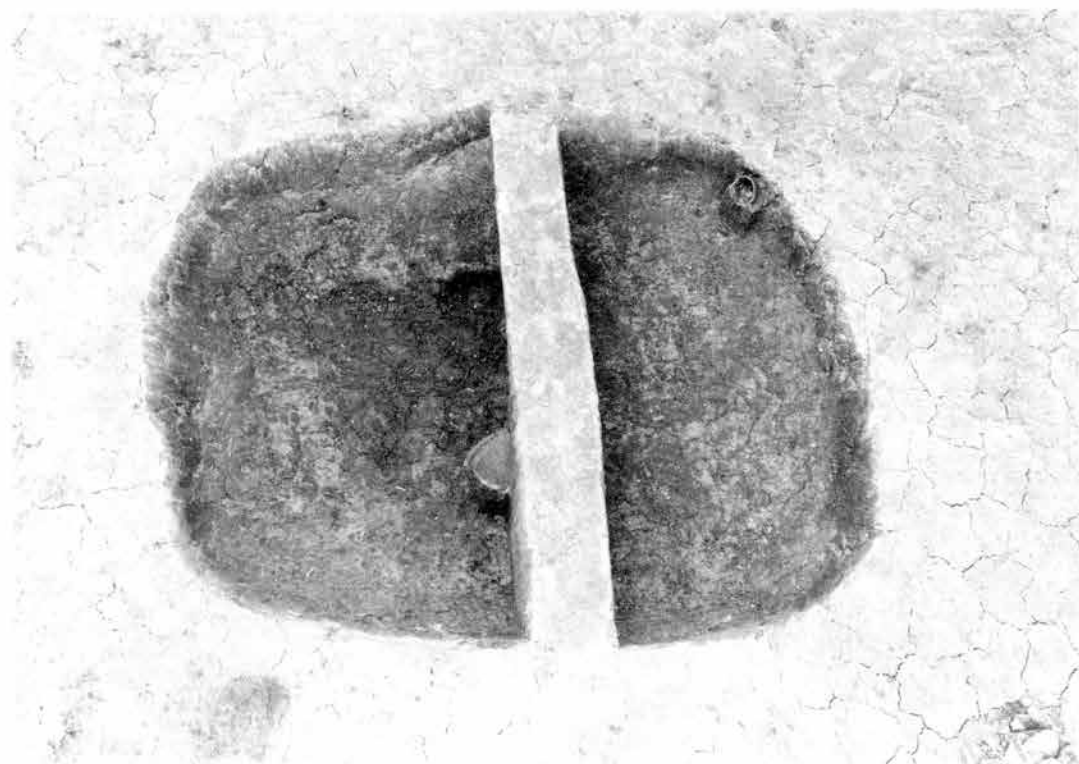
第20号井戸跡(西側より)



第23号・24号井戸跡(北側より)



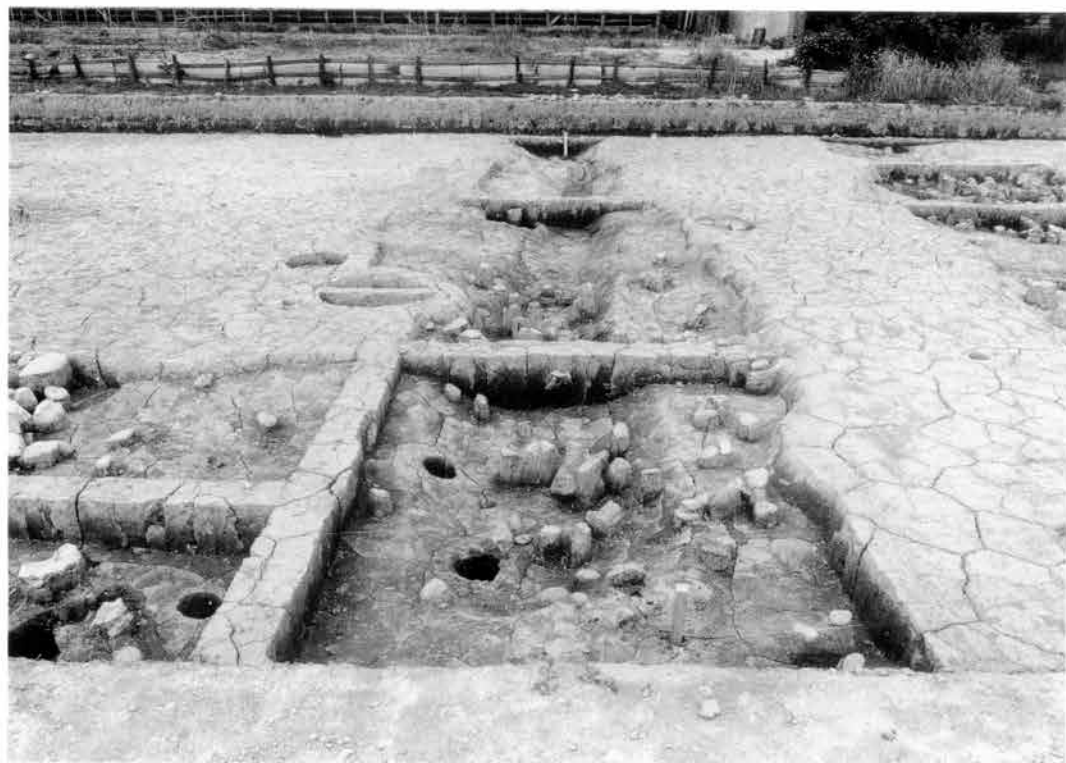
第4号土坑(西より)



第19号土坑(北側より)



第1号溝コーナー部分(南西側より)



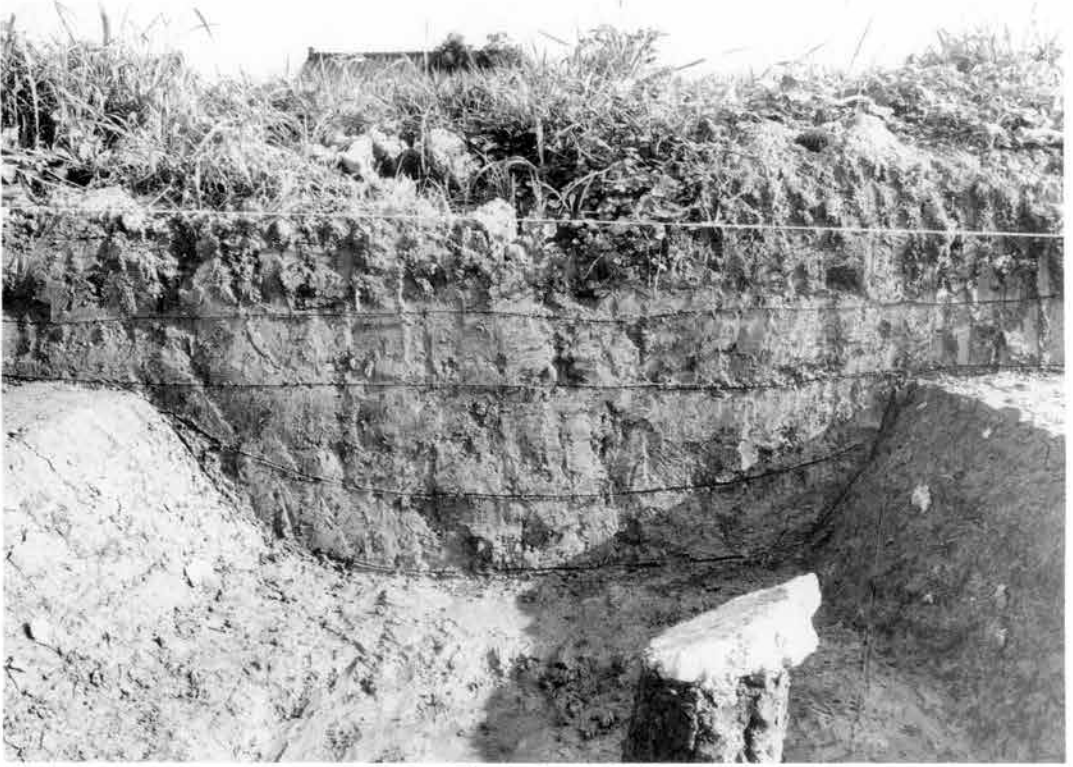
第2号溝東側部分(西より)



第2号・3号・4号溝発掘状況(西より)



第2号溝コーナー部分(北側より)



第3号溝土層写真(調査区南壁)



梅雨時溜水状況写真(北東側より)

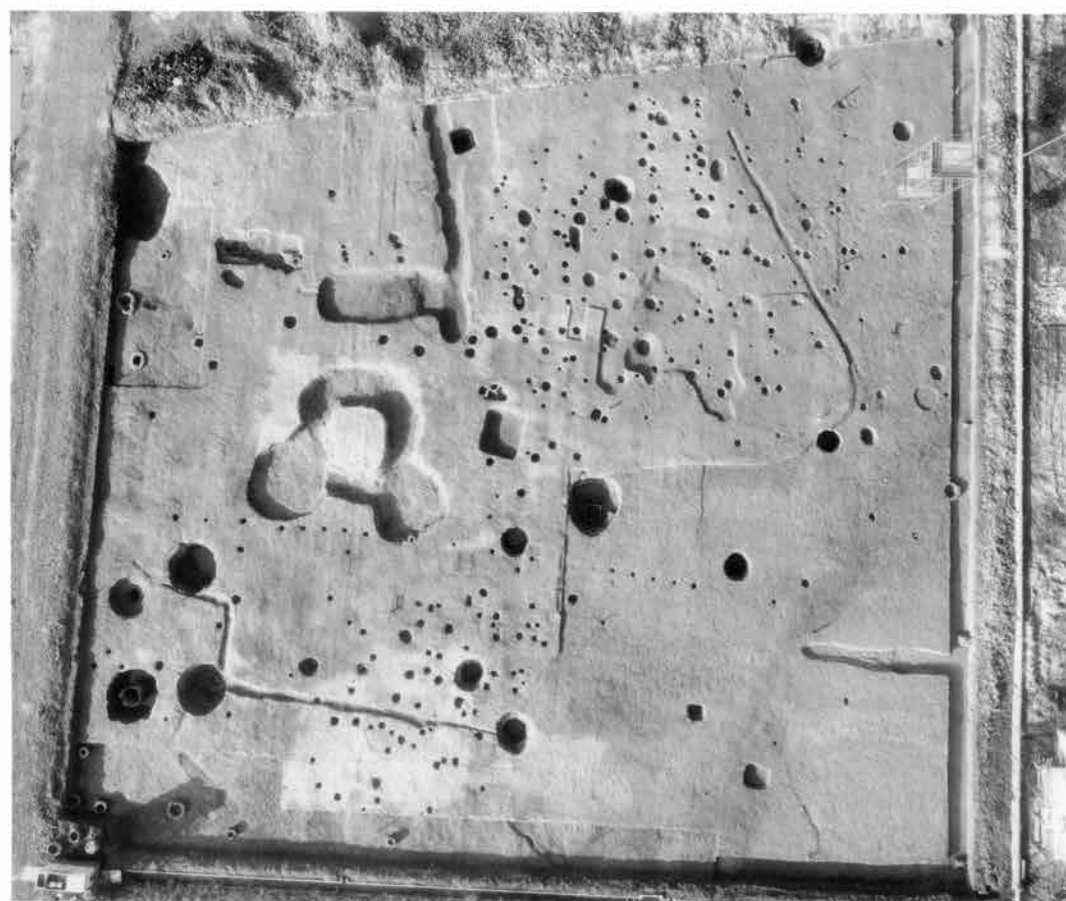




第3次調査区全景(西より)



第3次調査区全景



空中垂直写真



調査区全景(上：西より、下：東より)



下層たちわり状況



I-7 土器群出土状況



I-7 土器群調査状況



G-9区ピット群



J・I-9～11区掘立柱建物群



J・I-9～11区掘立柱建物群(西より)



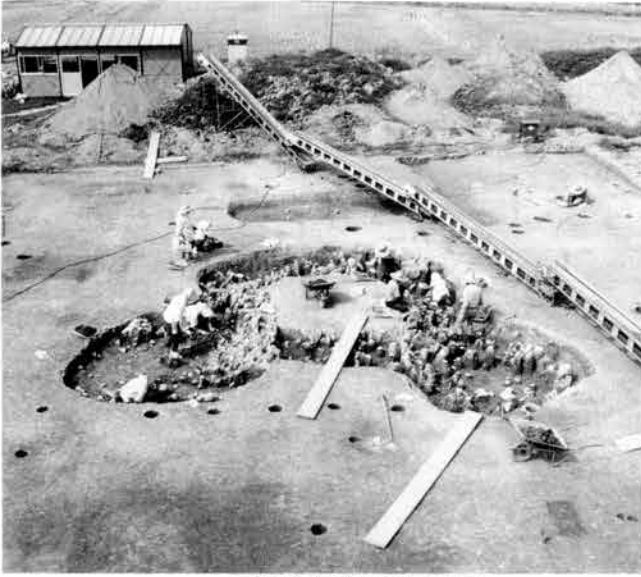
P 600 土器出土状況



P 11土器出土状況



P 594 五輪塔残欠出土状況



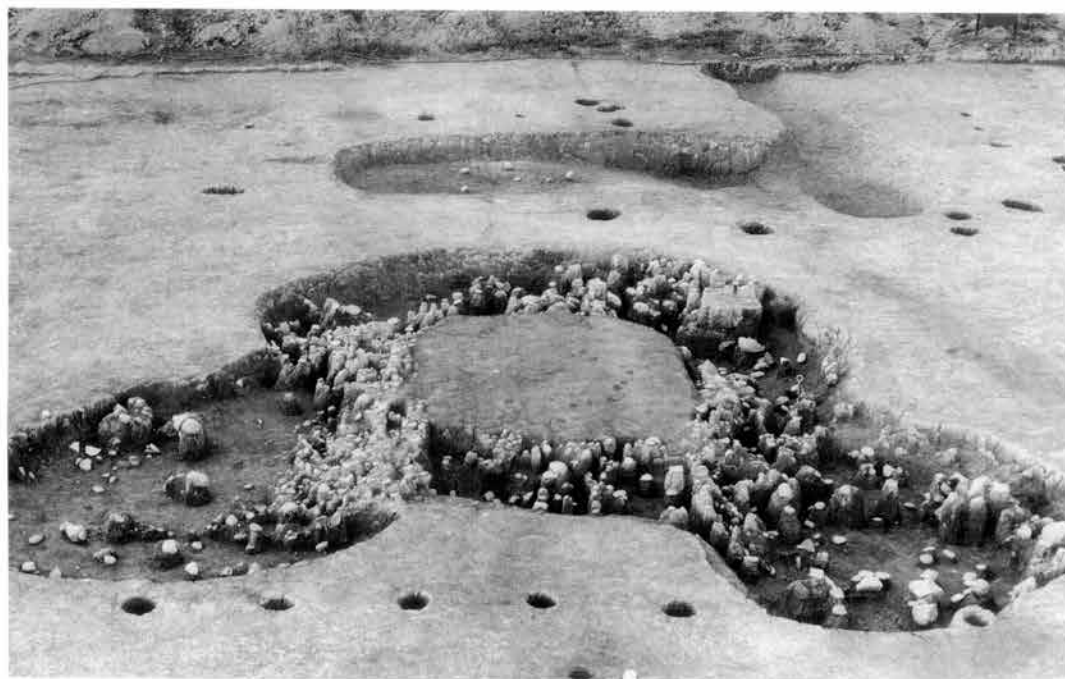
祠跡推定遺構発掘状況



同 右



祠跡推定遺構全景(南より)

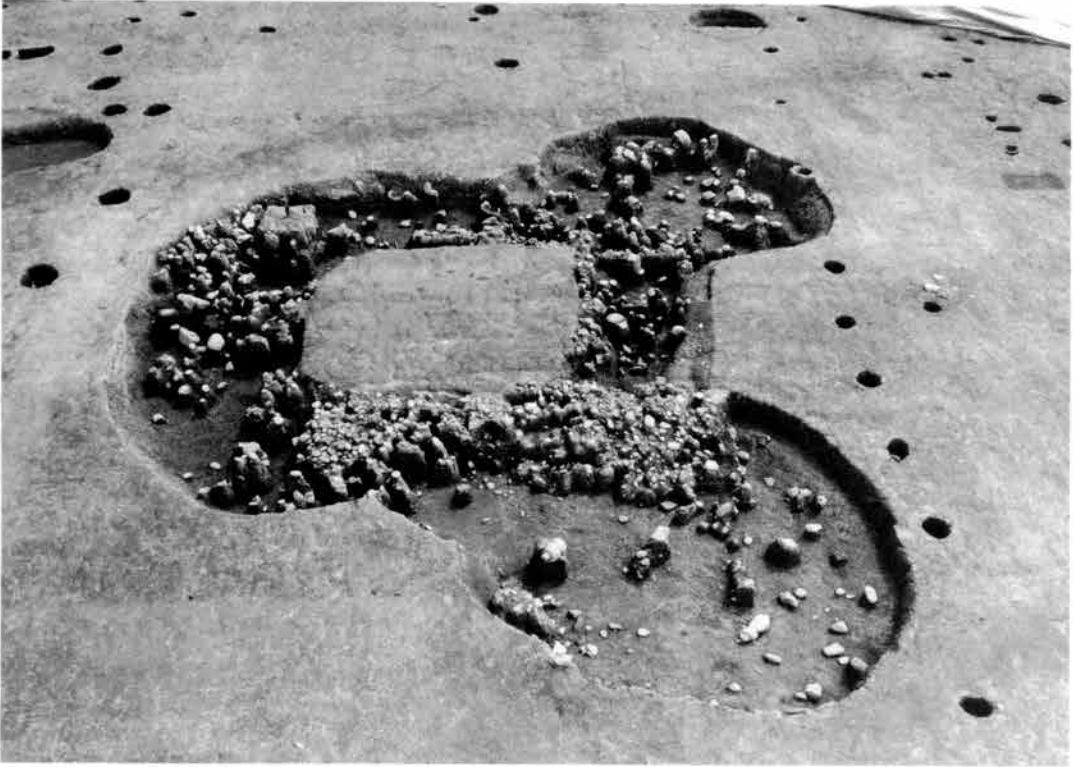


祠跡推定遺構全景(ピンホールは懸仏出土地点)

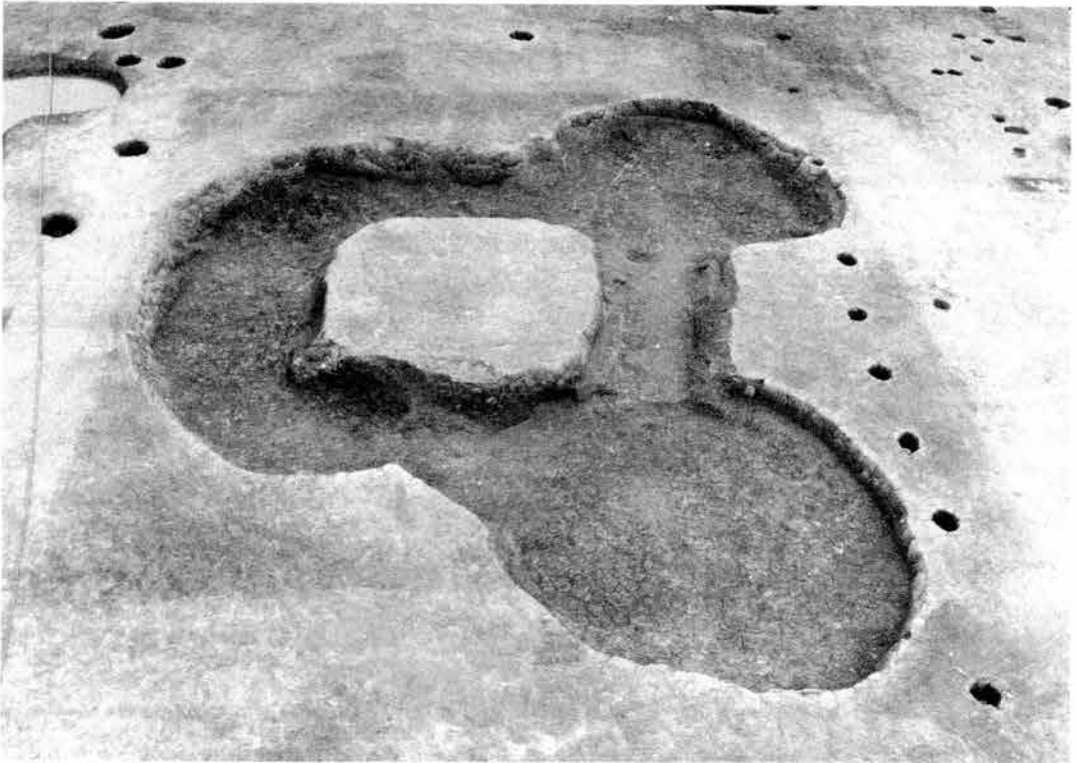


祠跡推定遺構完掘状況(南より)

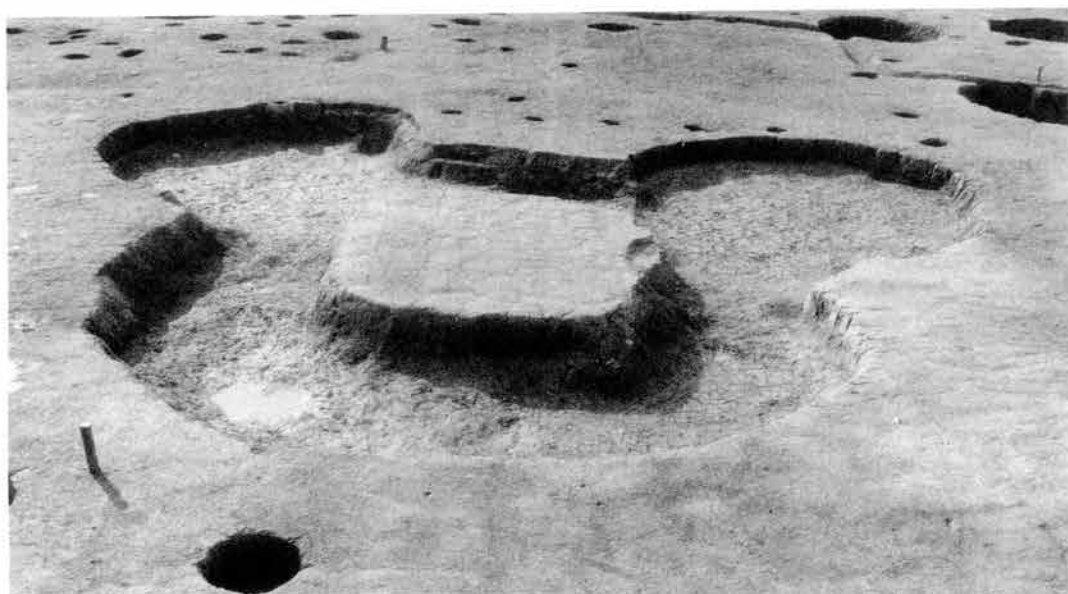




祠跡推定遺構全景(西より)



祠跡推定遺構完掘状況(西より)



祠跡推定遺構完掘状況(南より)



敷石復元状況(西より)



懸仏3出土状況



懸仏3出土状況



懸仏2出土状況



懸仏1出土状況



宝篋印塔出土状況



加工石材出土状況



五輪塔出土状況



越前播鉢出土状況



五輪塔出土状況



越前播鉢出土状況



独钴石状石製品出土状況



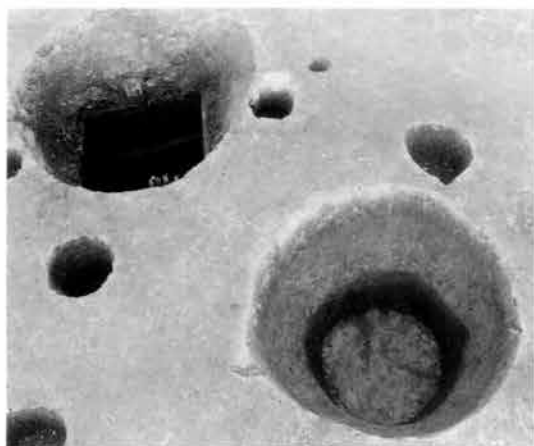
石臼出土状況



第1号井戸



第2号井戸



第3号井戸(右)と第4号井戸(左)



第4号井戸(東より)



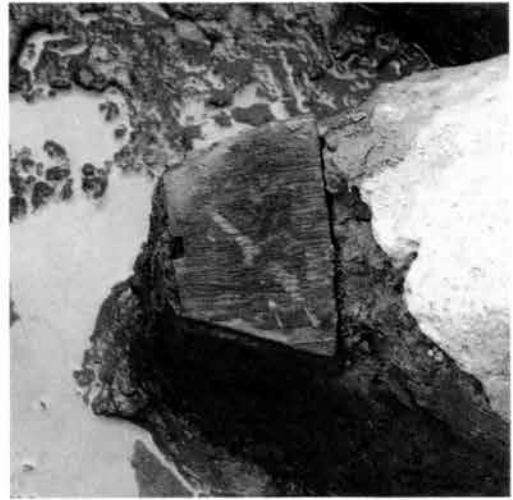
第5号井戸(西より)



第5号井戸切石組井戸側(南より)



第6号井戸(東より)



第6号井戸下駄出土状況



第7号井戸(東より)



第7号井戸曲物椗坑大(東より)



第8号井戸



第8号井戸



第10号井戸(北より)



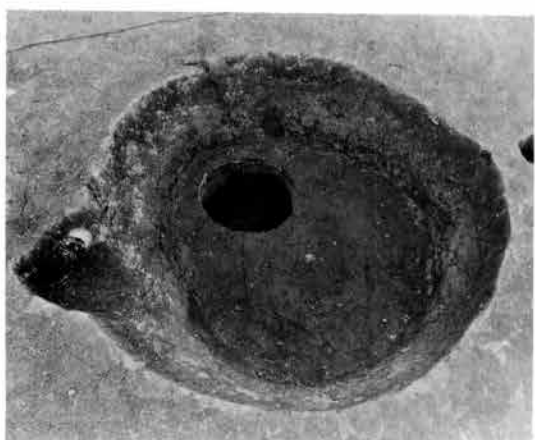
第10号井戸下駄出土状況



第12・13号井戸(南より)



第10号井戸下駄出土状況



第14号井戸



第15号井戸(北より)



第14号井戸曲物棒



第16号井戸発掘状況(南より)



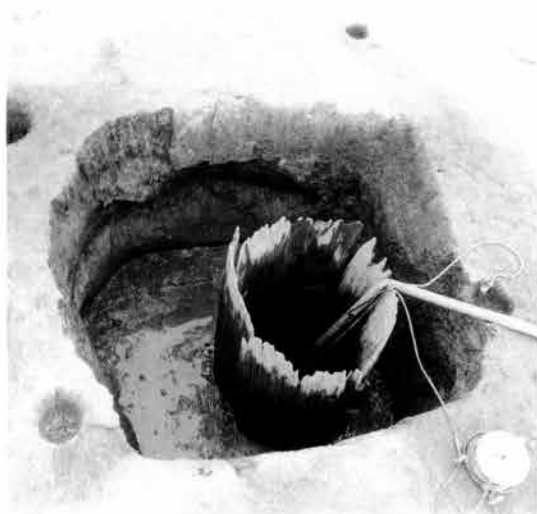
第17号井戸(西より)



第19号井戸(東より)



第19号井戸曲物枠



第20号井戸



第20号井戸



第21号井戸(東より)



第22号井戸



第23号井戸(南より)



第23号井戸(西より)



第24号井戸発掘状況(西南より)

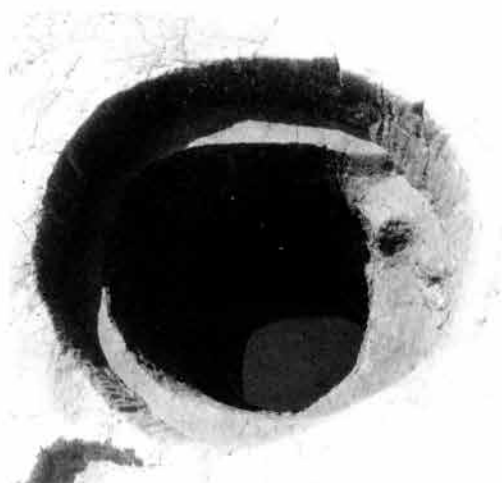


第24号井戸曲物枠





第26号井戸(東より)



第25号井戸(東より)



第26号土器井戸側



第26号井戸柄杓出土状態



第28号井戸



第31号井戸



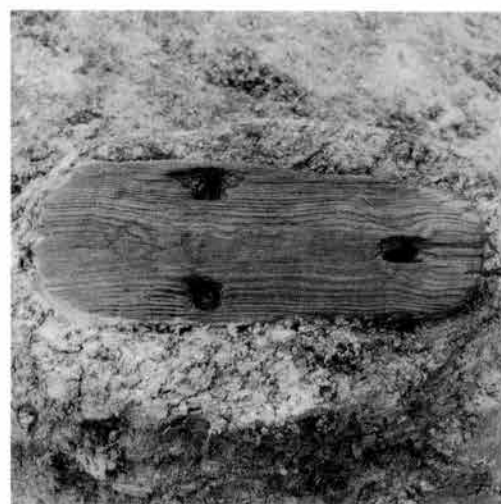
第32号井戸



井戸群と第8号溝(東より)



第34号井戸



第34号井戸下駄出土状況



第38号井戸



第38号井戸



第1号土壇と第2号土壇



第1号土壇(右)と第2号土壇(左)



第9号土壇(南より)



第9号土壇(西より)



第6号土壇(南より)



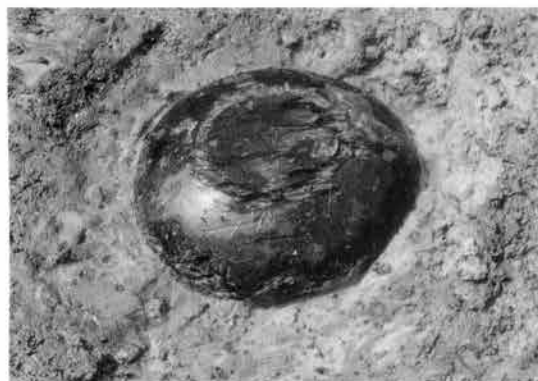
第19号土壇(東より)



第1号溝(左)と第2号溝(南より)



第6号溝(北より)



第6号溝漆器椀出土状態



第8号溝遺物出土状況



100-6



62-8



62-10



106-52



9-13



62-13



101-10



62-6



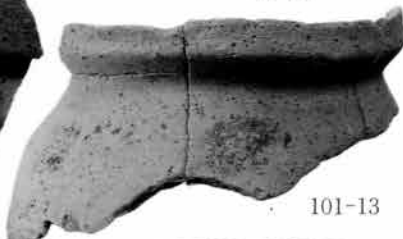
18-10



22-11



101-9



101-13



21-7



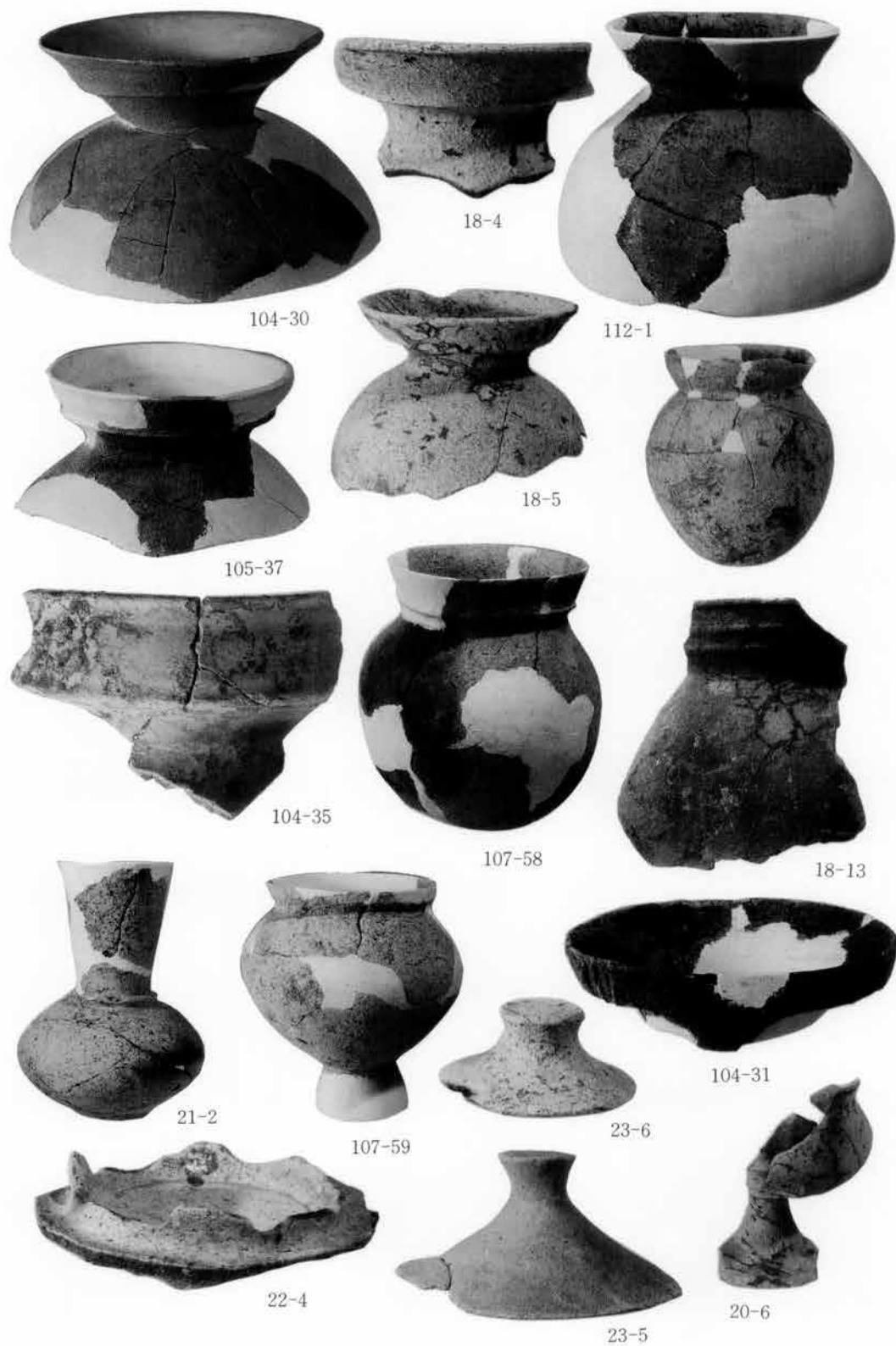
22-8



101-5



21-1



弥生土器・古式土師器



108-72



11-61



11-8



17-5



108-81



65-13



64-4



65-14





136-6



19-3



20-6



110-97



19-5



24-8



66-9



19-4



24-7



65-8

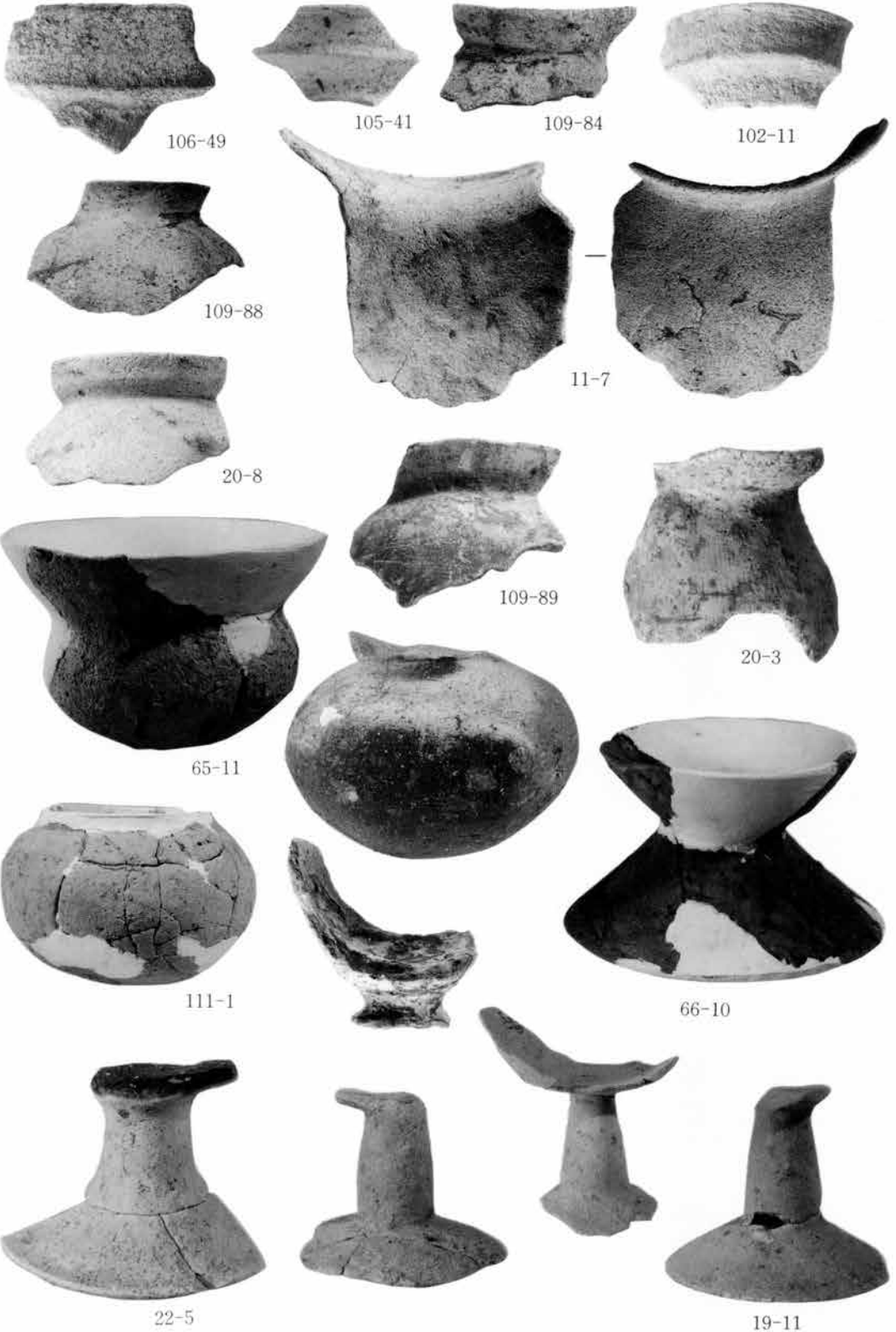


66-15

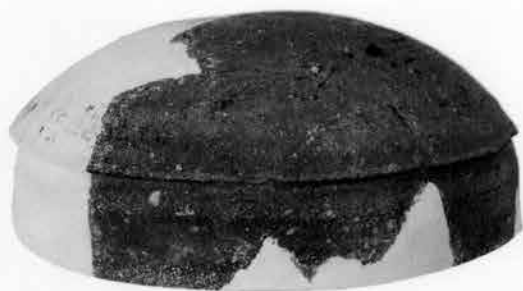


66-16





古式土師器



145-11



67-1



144-54



145-16



67-1



144-55



147-380



133-215



133-216



51-5



67-13



51-6



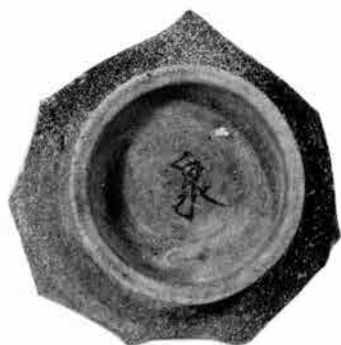
51-4



51-7



51-8



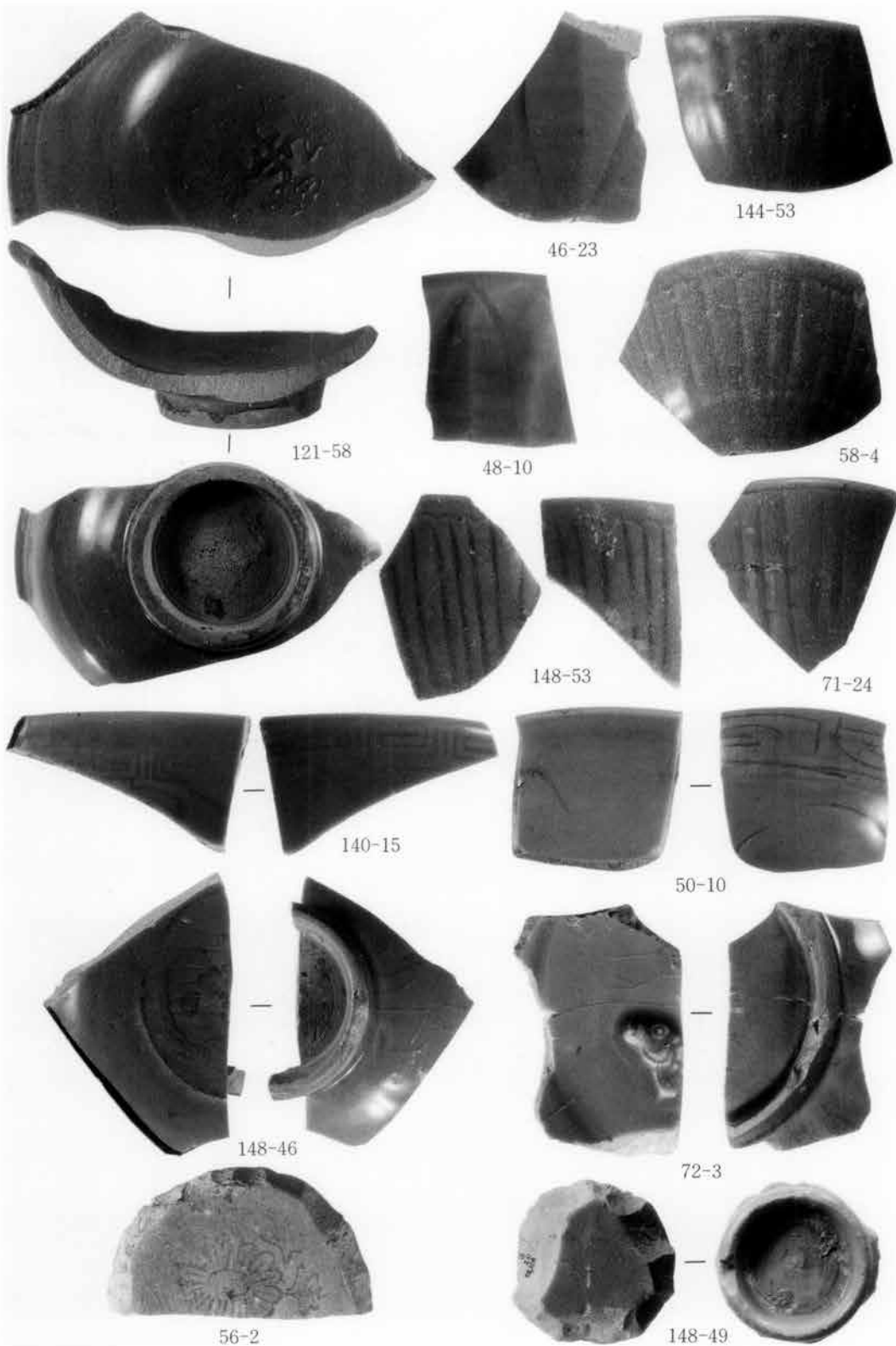
67-16

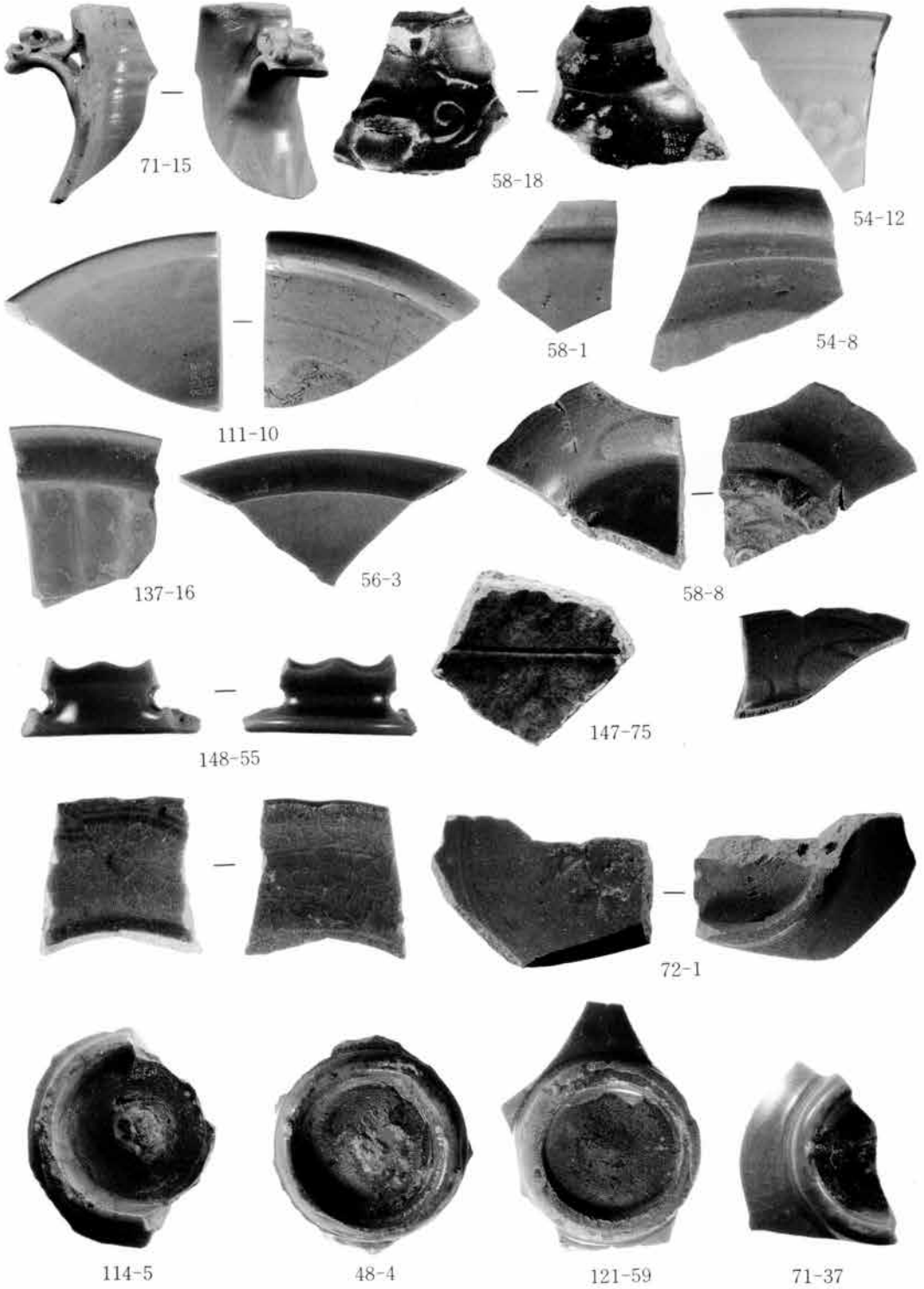


50-2



50-4







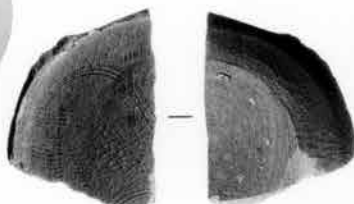
128-167



35



55-14



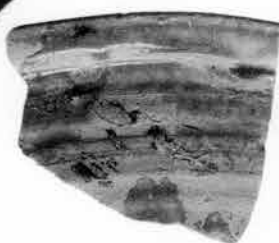
148-51



148-62



70-1



54-8



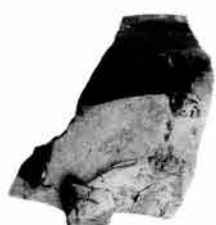
141-25



49-66



114-8





72-21



42-17



50-12



72-28



72-28



136-9





61-21

49-8



61-4

—

41-17



148-80

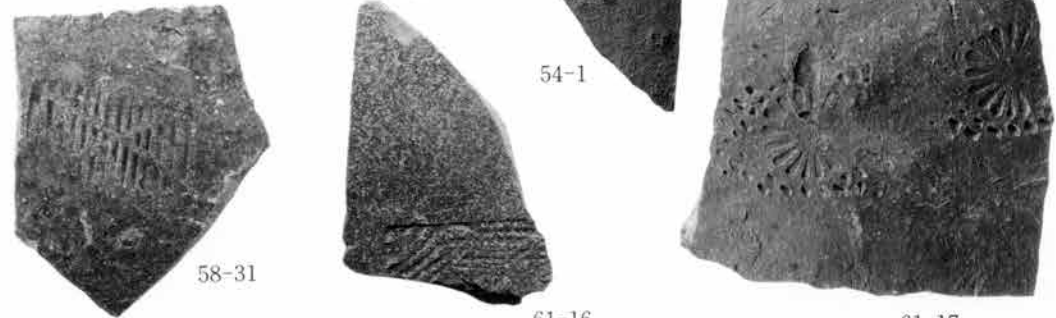
58-32

128-170



58-31

54-1



61-16

61-17



61-15



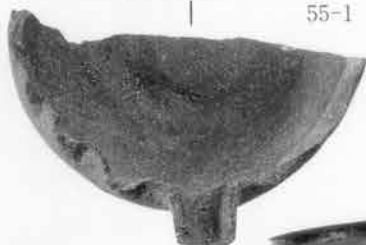
46-19



55-1



49-7



57-5



42-15

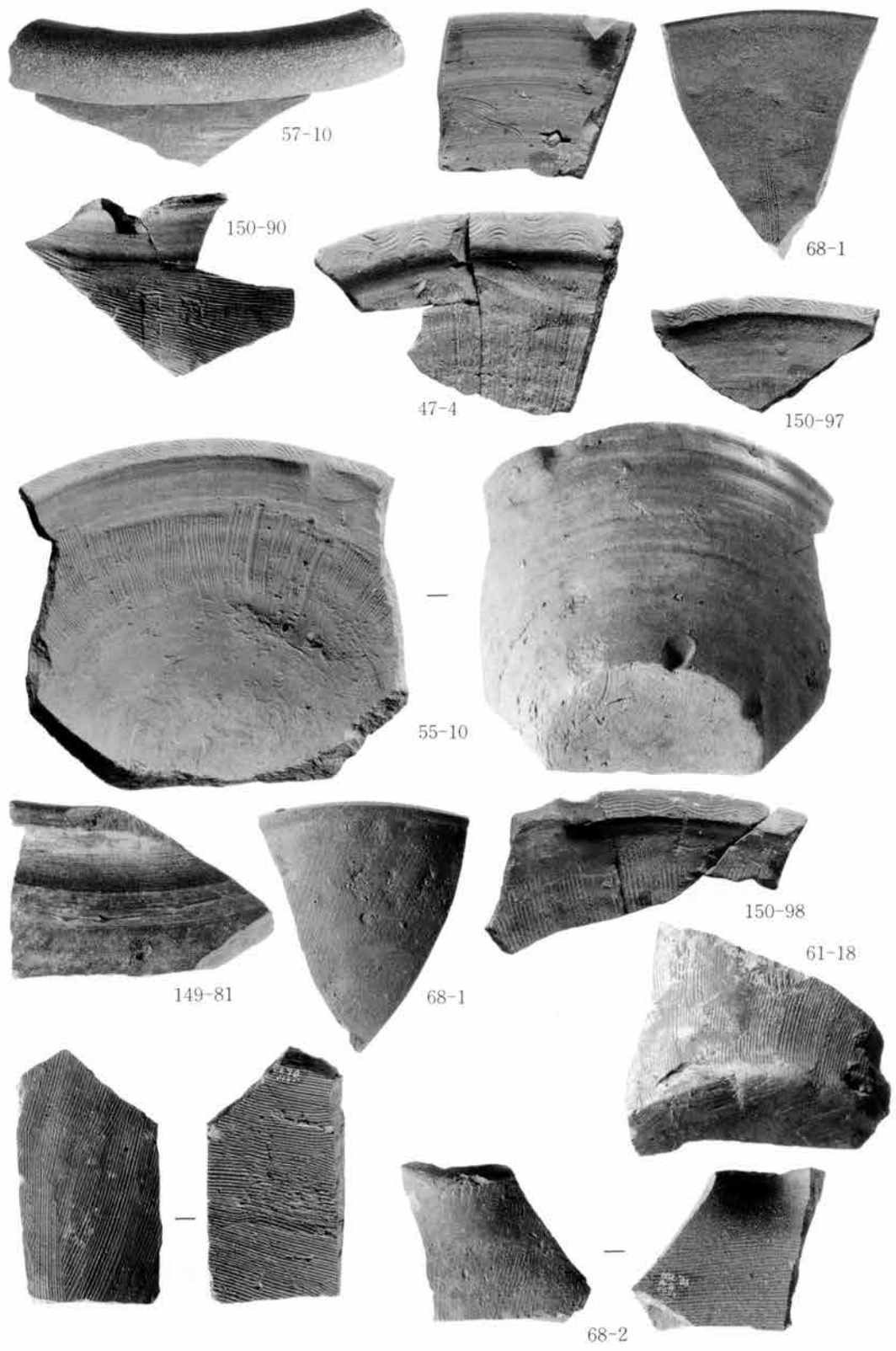


115-32

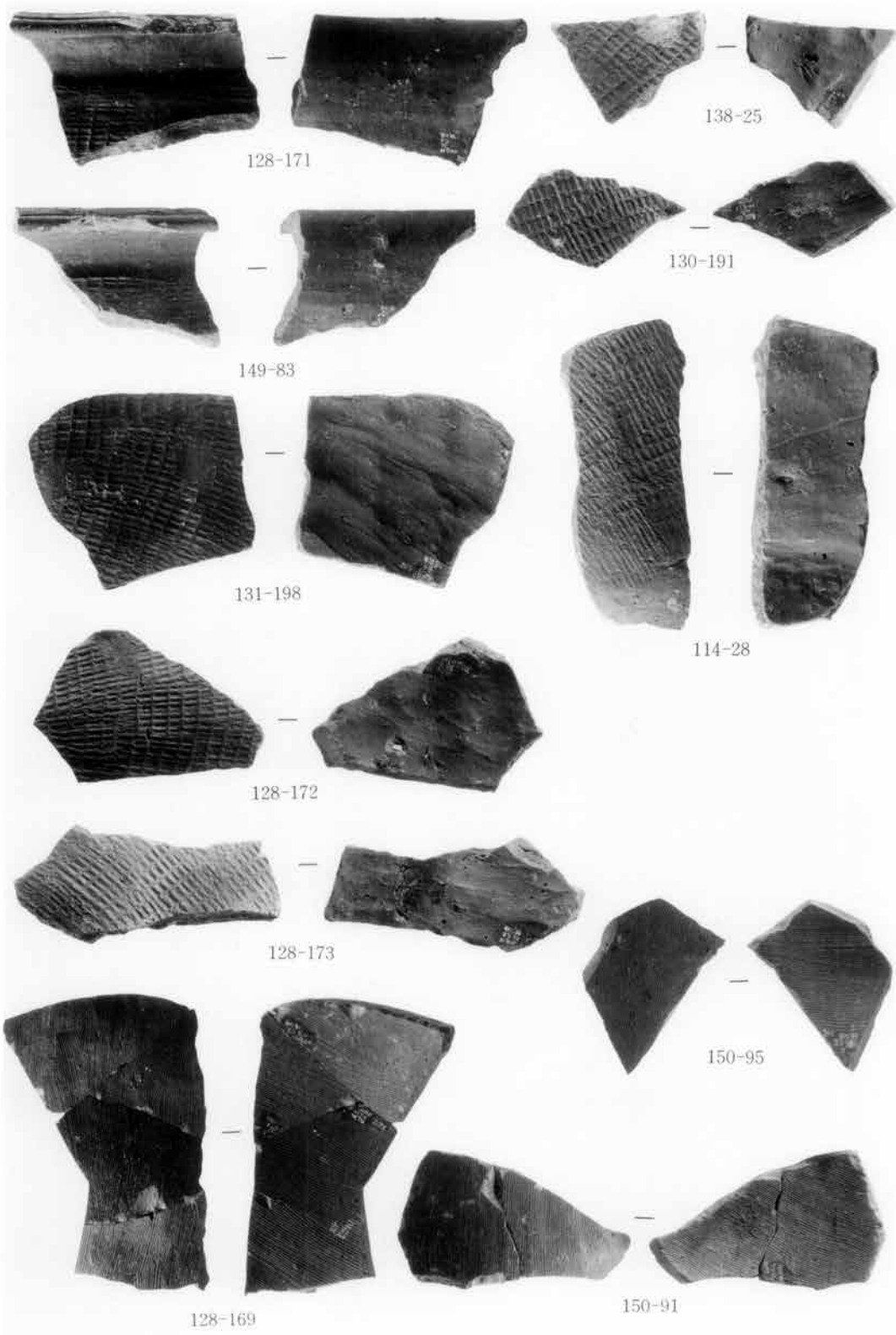


130-192

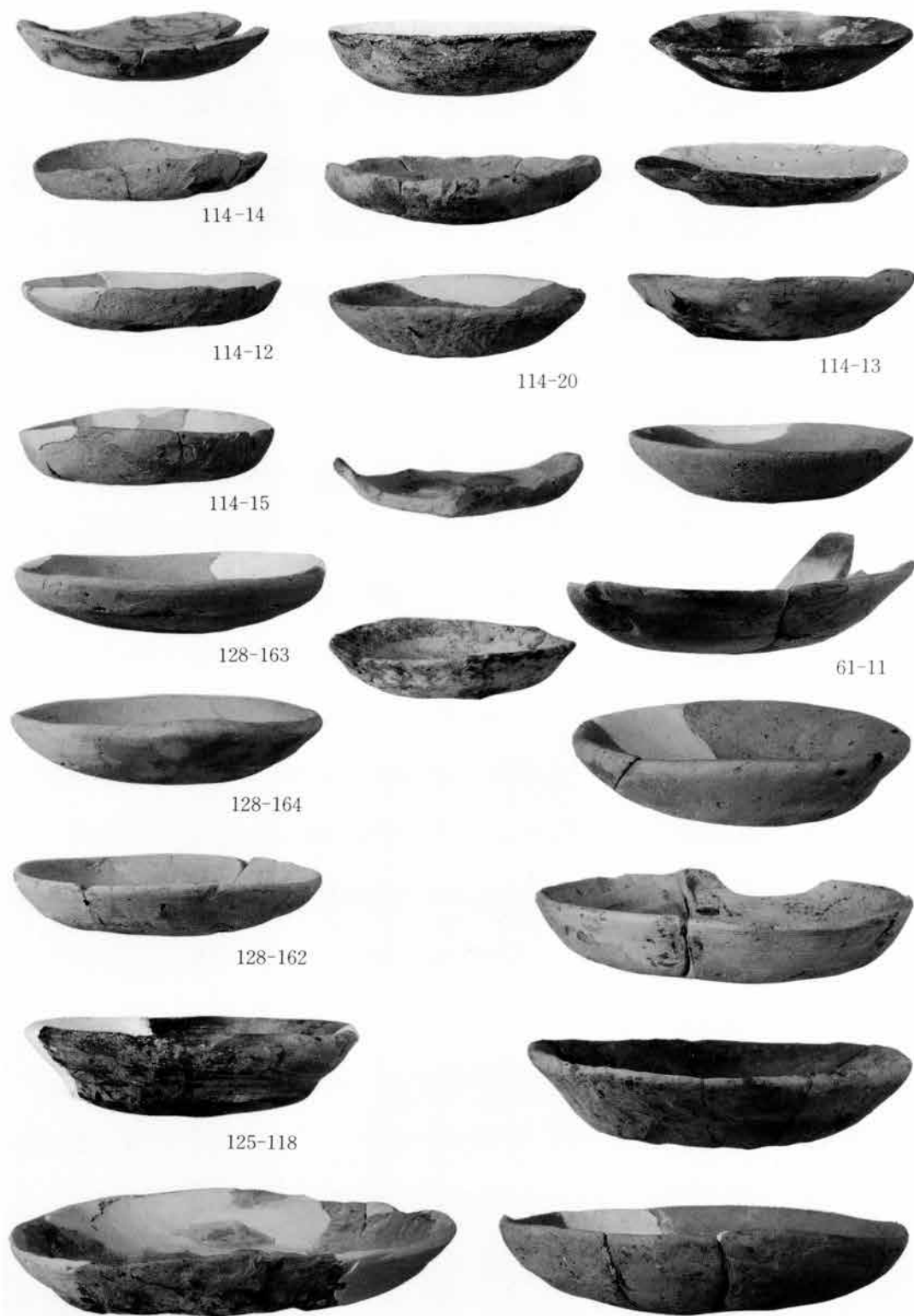




珠洲ほか



産地不明中世陶器



土師質小皿



141-27



148-67



土師質小皿



58-26



58-23



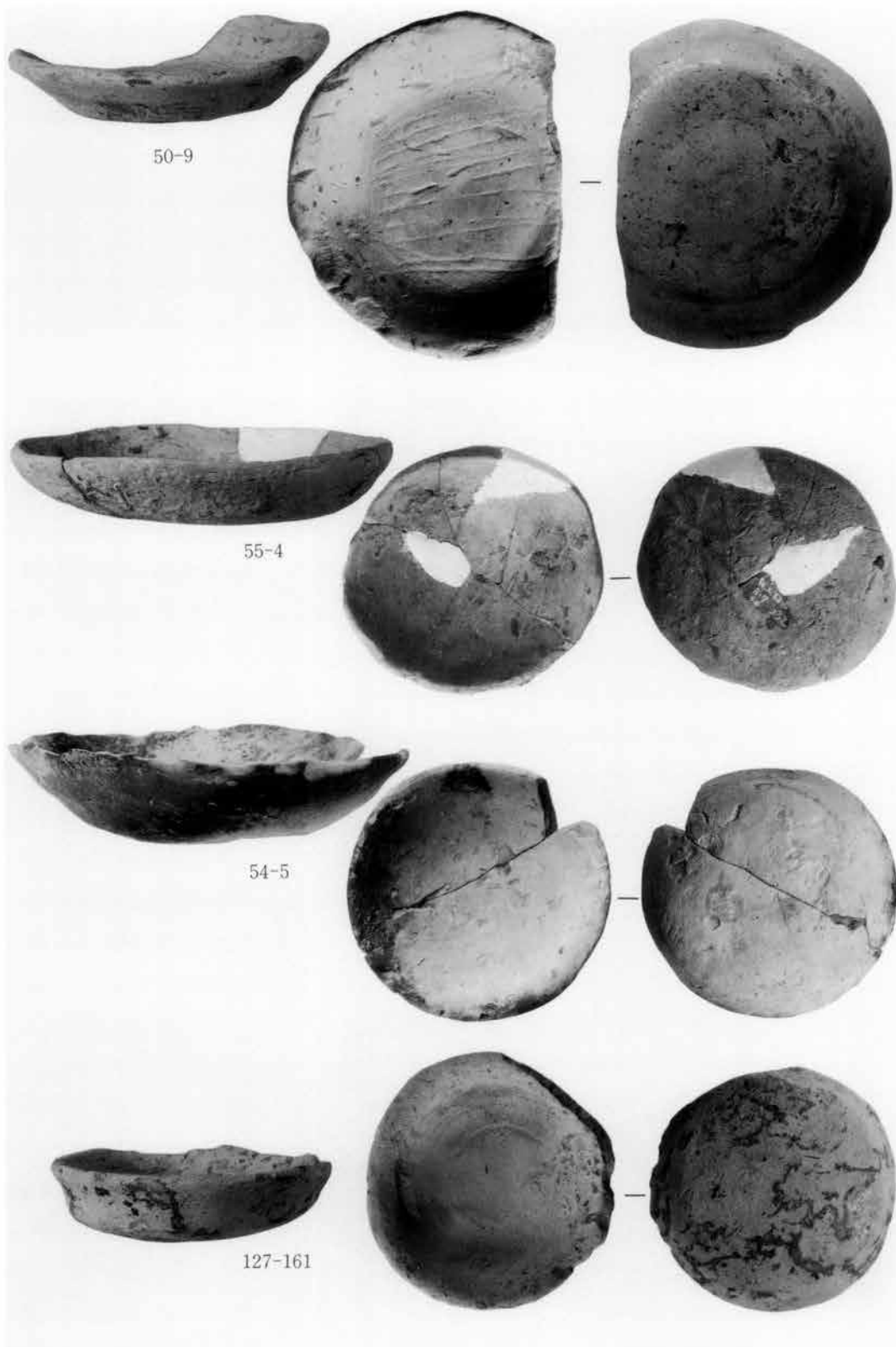
114-16



114-22



土師質小皿



土師質小皿





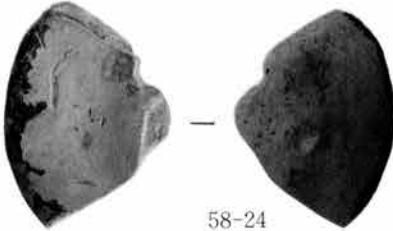
134-219

50-8

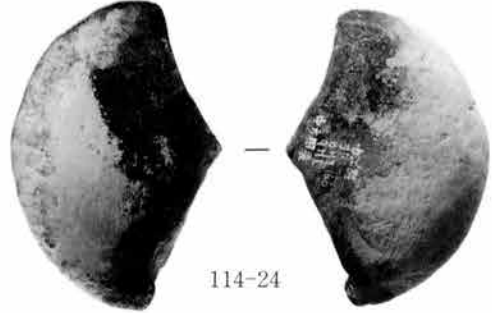


47-8

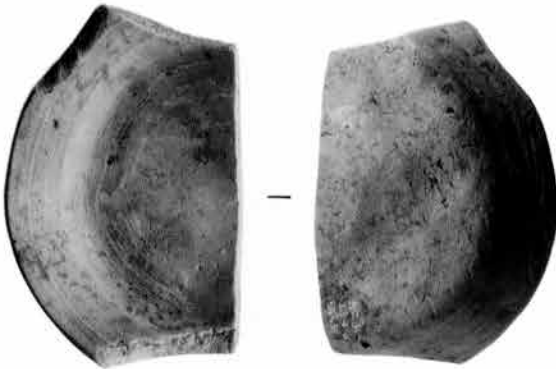
134-217



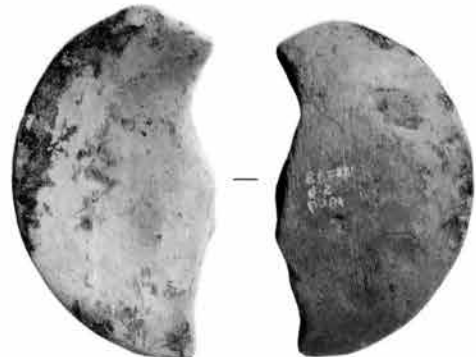
58-24



114-24



134-222



136-10



113-3



113-1



113-2

懸

仏



117-46



117-47



135-241



47-6



112-12 Pit597



142-39



47-15



115-37



118-2



137-22



48-1



112-13 Pit 592



139-44



52-4



117-49



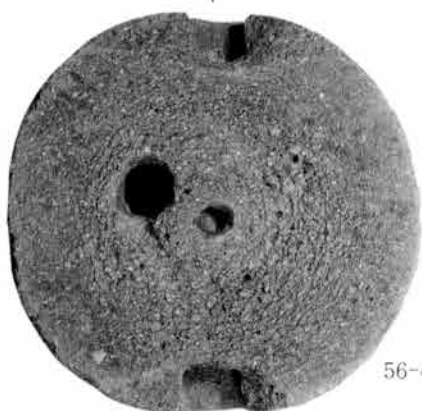
139-42



125-121



138-23

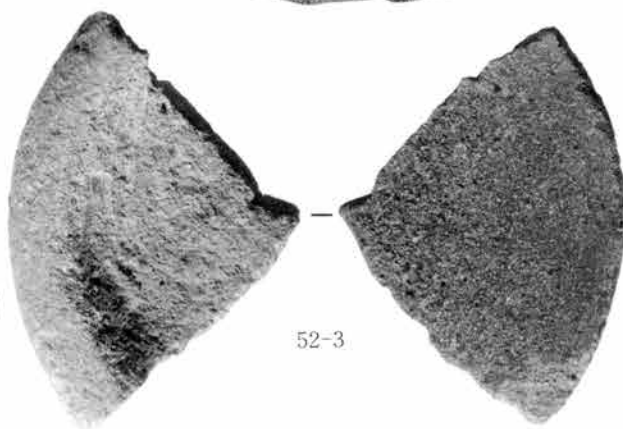


44-1

56-4

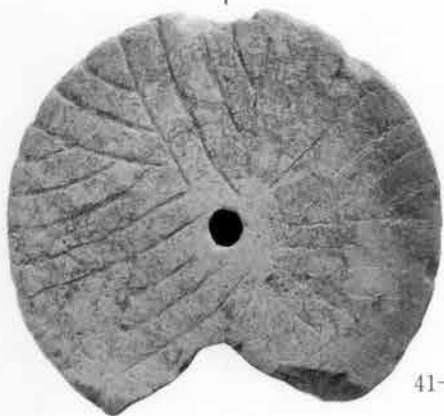
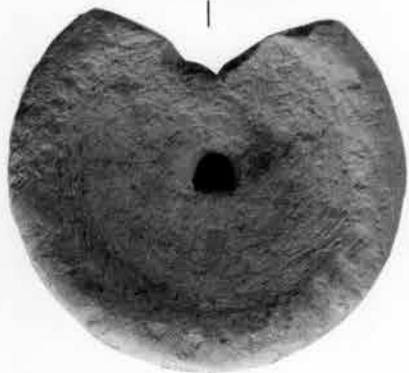


46-20



52-3

石 白



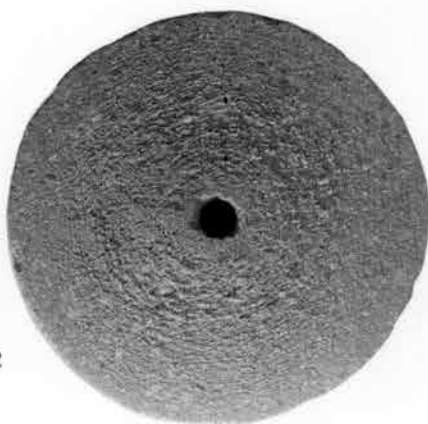
41-1



73-1



74-2





75-6



152-127



60-1



152-125



151-111



41-2



152-118

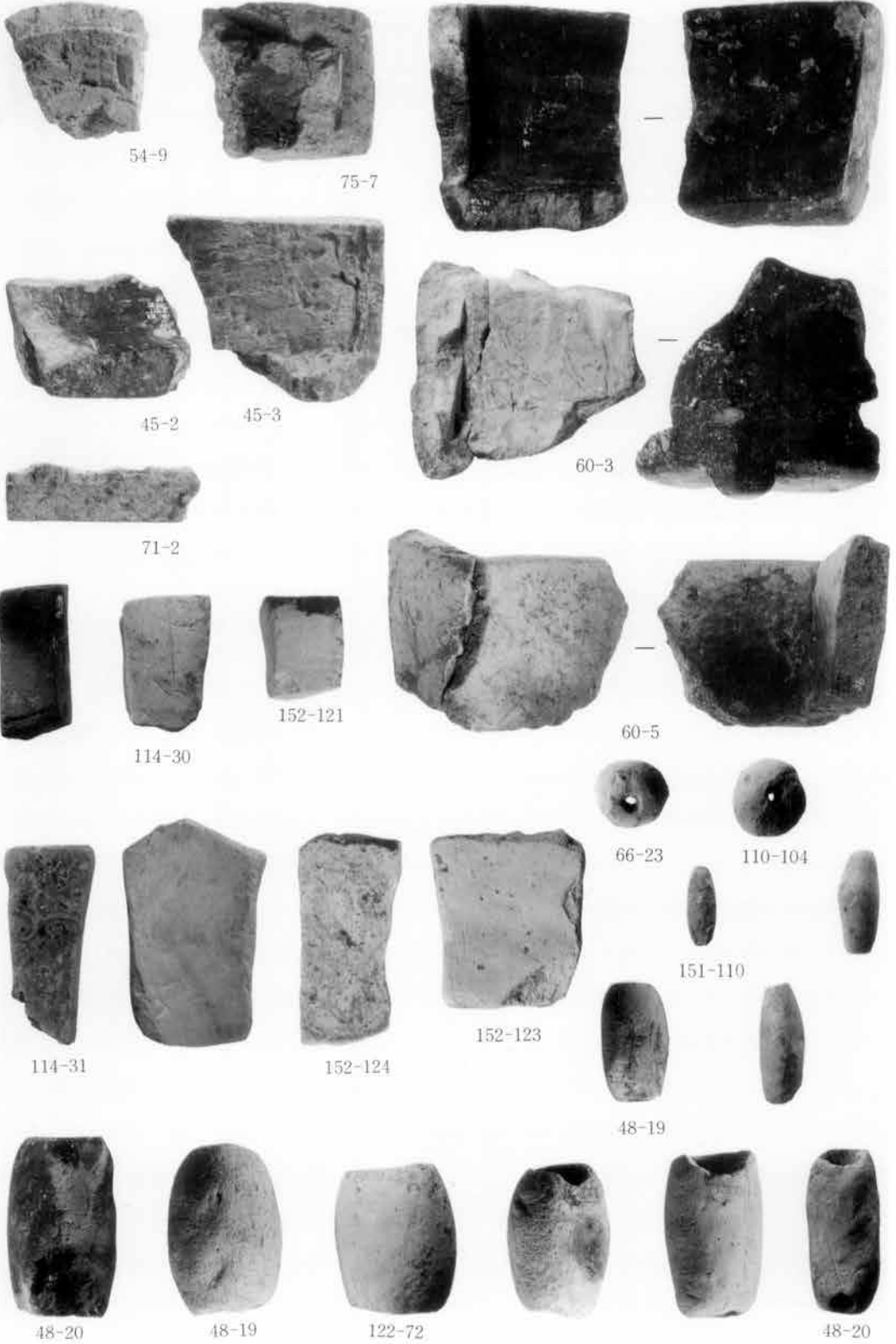


151-112



61-13

バンドコ・砥石・硯・羽口ほか



バンドコ・砥石・土錘





133-213



118-1



3次第4号井戸出土椀



2次第4号井戸出土匙



---

---

# 白江梯川遺跡 I

県営公害防除特別土地改良事業に係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

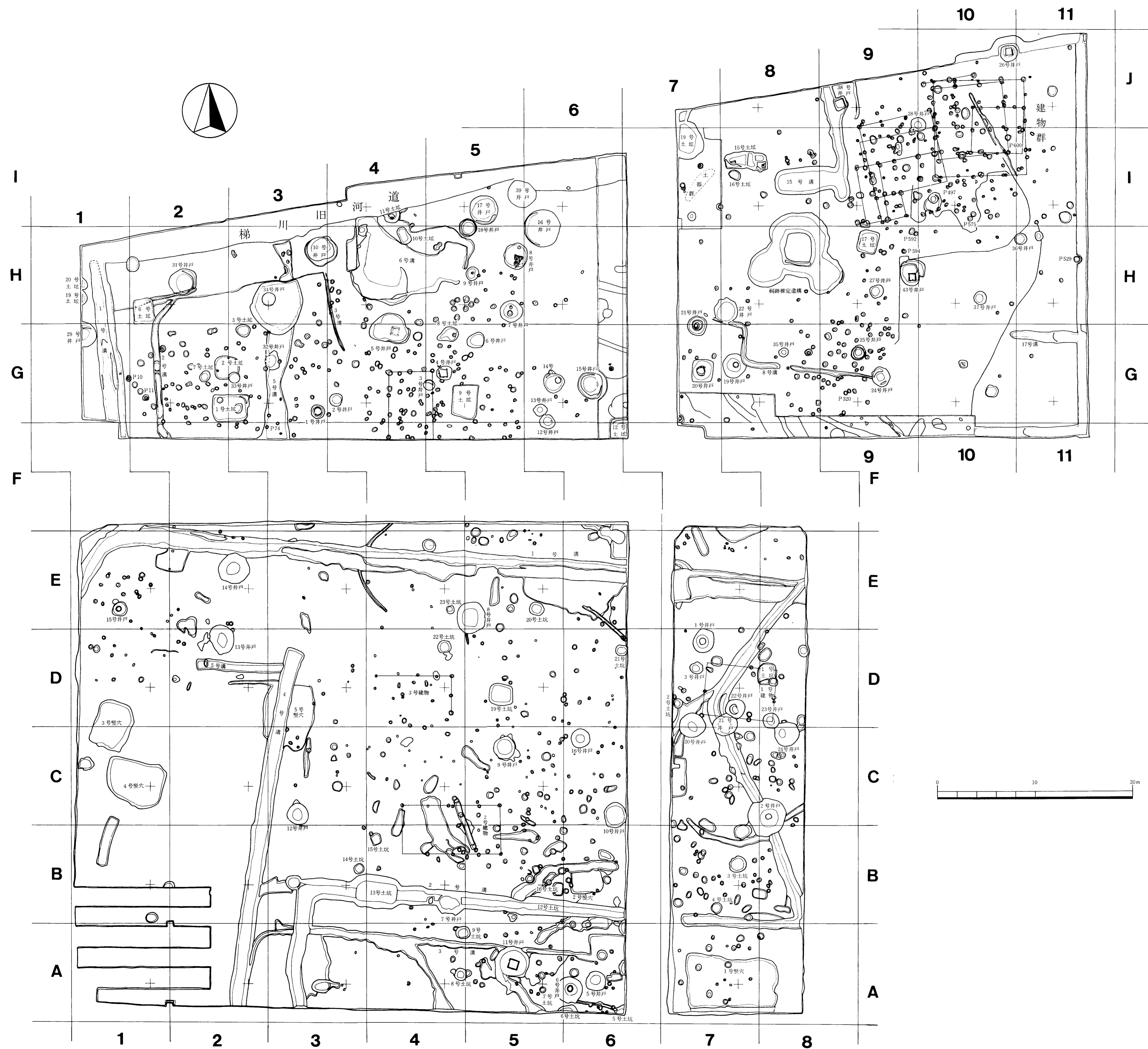
昭和63年3月31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉4丁目133番地  
電話 (0762) 43-7692番

印刷 ヨシダ印刷株式会社  
石川県金沢市御影町19-1

---

©石川県埋蔵文化財センター1988  
本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg



白江梯川遺跡第2・3次遺構配置図



